尾崎久彌著

江戸軟派雜考

東京　春陽堂刊

序

江戸軟派を一貫する特色は遊戯氣分であり、エロチシズムである。或は性的遊戯が其基調であるともいへる。隨つて世間的に見ると、其殆どすべてが不眞面目なものでもあり、浮ツ調子なものでもある。卑猥なものでもあり、淫靡なものでもある。然るにも拘らず、浮世繪の場合が其一例である如く、外國人に對してすら、今尙それが或不思議の魅力を持つのは何故であるか？

よもやそれは、それが持つ單なるエロチツクの興味ばかりではあるまい。

或は藝術としての何等かの優秀性を、特にそれが具へてゐる爲ではないか？

或は、わが又は世界の藝術史に、何等かの奇異な、ユーニークな新資料を、それが特に提供し得る爲ではないか？

或は、其背景となつた特殊の文化に、もしくは其裏面に潜む社會的乃至個人的心理に、強く現代人の心を牽く或不思議な特徵があるのではないか？

之に對する答辯は、前世紀に於いてすら、旣に幾らかは與へられた　例へば、其文藝史的並び

に風俗史的價値の如きは、かの化政度に於ける小說家らの隨筆的考證の發刊以來、殆ど一般に認められ、其蹤を追ふ者も次第に出た。最近となつては、專ら其基調の遊蕩味によつて浮世繪其他の特質を闡明しようとする鑑賞家すら出かけてゐる。或は、主として考證に力め、博覽旁捜してわが文化史や民衆史に新事實を寄與しようとしてゐる人々の如きも、多くは軟派物に手を伸ばしてゐる。それが江戶民俗を知るには最捷徑だからである。

けれども、今のところ、まだどれも〳〵中途半端である。其研究の方法が、まだとかく本當でないからである。かたはだからである。

といふのは彼等の或者は餘りに遊玩的であり、また或者は餘りに利用本位である。

餘りに遊玩的である。だから其著書は寧ろ自家用の備忘錄かとも思へる。其材料の選擇は氣まぐれであり、手當り次第であり、表現や排列は漫錄式であり、斷片的であり、不秩序であり非科學的である。要するに、博玩自適の餘伎たるに過ぎない。

或は專ら利用的である。だから餘りに博引旁證に忙しい。で、どうかすると、本末眞贋を甄別し、紕謬を是正し、遺脱を補塡する等の最も緊要な仕事にさへ、誤つて手間や暇を吝みかねない。まして其一々に就いて、其味を、其香を含味したり賞翫したりすることは、迚も此派の研究者には望みがたい。其收穫が、わるくすると、豐富な、尨大な併しながら蕪雜なマッスたるに止

まるのはそれが爲である。

遊玩本位の研究者は、譬へれば、花の色香にあこがれて、花から花へと翔びわたり舞ひまつはる蝶蛾である。享樂！　それが彼等の唯一の目的である。花心に湛へられてある甘露さながらの液をさへも彼等は必ずしも嘗めようとはせぬ。それを吸ひためてわが妻子らへ齎らさうなぞとは何の事思はない。唯其色をめで、香に戯れるのである。けれども其色香に對する愛着が深く且つ切實であるために、いつまでもいつまでもそこを去らず、低徊し、沈浸し、耽溺して、はては翅も鬚も角も脚も悉く花粉だらけになる。豫期しないでゐて、各種植物のために結實の媒助をなすに至る所以である。遊玩といふと、浮氣な道樂仕事とばかり思はれるが、其愛着が純で切實である場合には、斯うした利用も生れるのである。嘘から出た誠のたぐひである。

利用本位の研究者は、之を二種に分つことが出來る。其一種は蟻に似てをり、其二は蠶に似てゐる。蟻に似てゐるはうは、一に其資料の豐富であることを欲する。で、苟くも餌とするに足ると思ふ限りは、どんな物をでも引いて行く。そこに何の愛玩もなく、批判もない。だから其集め得たものは只の雜然たる團塊である。分類もなければ、系統もなく、勿論組織などのあらう筈はない。だが、かういふ收穫とても、若しも其適用者に目があり腕があれば、隨分いろい

ろな役に立つから、決して蔑ろには出來ない。
蠶に似た研究者には一定の目的があり、且つ或種の資料の外は決して捃摭しないといふ定見がある。それが一使命に徹底せんとする此派の特長であると共に、そこに局限があり窮屈さがある。蠶はおそろしく氣むづかしくて、同じく桑の葉ではあつても、病葉はくはず、腐葉はくはず、蟲ばんだのはくはず、形の氣に入らぬのはくはぬが、利用本位家にもそれに似た潔癖がある。蝶蛾のやうな道樂氣が無く、山繭の變通さへも利かないのが多い。それが疵といへば彼等の疵である。其代り、其一々の特殊の資料を念入りに含嚼し、念入りに消化し、三度もしくは四度の沈潜反覆を經て、頭から尻尾まで玲瓏透徹するに及んで、そこではじめて最後の組織に取りかゝる。其勤勉、其愼重、其忍耐は偉いものである。嚴格な史的考證の如きは、是非、此式でなくてはなるまい。

しかしながら純文藝の研究及び其研究に據る特殊考證の如きは、またおのづから別である。といふのは、文藝それ自體は、由來、利用のための物ではなく、主として玩賞のための物であるからである。随つて同氣相求むる詩人的同情と直覺とを以て之に臨むことをせぬ以上、譬へば、曾て醉つたことの無い者が酒中の眞趣を解し得ないと同様に、其本質の味解が覺束なく、考察といふも、批判といふも、恐らく正鵠には適中すまいと懸念されるからである。とりわけ、江戸

軟派に至つては、それが甚しい變體文藝であるだけに、其研究には此條件が一段止みがたいことゝなる。生野暮、生まじめでは迚も駄目、耽溺あたまでは尚駄目だ。それが軟派研究の扱ひにくい點である。其理想的なのは、純な、切實な玩賞によつて基礎づけられた冷靜な併し讀み物としての興味もある科學的批判なのだが、さういふ注文通りなのは、德川時代には勿論なく明治になつてからも殆ど無かつた。斷續的研究には間ま此誂へに適つたのも見えたが、纏まつた專門の著書としては絕無であつた。

尾崎久彌君の「江戸軟派雜考」は、此點より見て、近時の出版界に於ける異彩である。君の軟派物に於ける態度は、微妙にも、遊玩と利用とを兼ね得てゐる。君は蝶でなく、蛾でなく、蠶でない。譬ふべくば蜜蜂でもあらうか？　色香にあこがれて、花から花へと翔びわたり、附きまつはり、さうして其間に絕えず夥しい甘い液を吸ひ、貯へ保ち、最後にそれを料にしておのが獨自の蜜蠟を製る蜜蜂は、取りも直さず君の姿ではないか？　君の其主題に對する沈浸、含嚼、消化は殆ど耽溺的だといつてよい。しかも其觀察は、殊に其最後の態度は殆ど科學的といつてよい程に冷靜であり、批判的である。さうしてそこに分類もあり、系統もあり、若干の組織もある。君の手際は、夙に雜誌「江戸軟派研究」の上で知つてはゐたが、斯う一冊に取纏められて見ると、更に見優りのしたのを喜ぶ。

耽溺と冷觀！　どうして君は斯ういふ兼ねにくい態度を兼ね得たであらうか？
之に對して君は、其前著『西行上人歌集新釋』の序中に於て明白に答へて言ふ。

「私達には、長明のやうでもありたい。自分を高處に置き、『すべて世の營み愚か』と喝破してでも見たい。文覺のやうに、猛烈なる意志を以て、觸るる者凡てに此「我」を貫り附けもしたい。しかし時々は、すべてから自ら避け、河邊の葦が獨り物思ひ風に吹かるるが如くに、孤影蕭然、我なる姿に視つめ、どうしても分らなければ、仕方がないからめぐりのせめて花月に寄する情を以て此の哀愁を遣りたい。さうした西行のやうでもありたい。然し意よりも智よりも情に脆きは人の世の常だ。そこに西行色のものが多い所以である。この私にも、さうした色は昔からあつた。一蓋の笠、一條の杖、古來幾百年の人の血を啜つたやうに、またこの漂泊の思、纔かに離脫の懷は私を唆つた。さうした時、私は西行の歌に親しみ、彼れの行跡を追ひ、彼れのあはれをあはれんだ。

私は、一面、『西行もまだ見ぬ花のたまたかな』のやうに矜恃した、絢爛たる世界への憧憬、愛欲の海の澱までも嘗めたい欲望がある。心にはあらゆる癡夢を描き、また近世日本の生んだ好色的好尙の著るしい浮世繪、おもに美人畫や江戸軟派文學の涉獵及びその考査に沒頭しつつある現在がある」

是れある哉！　西行が、いや、其自省が、冷靜な自己批判が君のアンチドートであつたのだ。

江戸軟派文藝は、扱ひやうによつては、隨分危險な嗜好品である。勿論、爆裂藥でなく、鴆毒でもないが、阿片であり、アルコールである。よく其の毒を化して一種の良藥たらしめることは、常に靜に自他を批判し得る人のみの爲し得る所である。

大正十四年四月下浣

於熱海茅舍

逍遙

自敍

自分は、單なる學究徒でもなければ、又單なる好尙癖者でもない。一に漸く此に自分の題目を押しつめてきた、自己一身事に關する心的徑路の所以である。決して比較的此方面に未開の曠野多き故にといふ驕慢なる心に根ざしてはゐない。さうした心の移りとそれに伴ふ學究欲、發表欲も加はりて、本書は成されたのである。學究と好尙と駢立、混融しえたりと自ら褒してはゐない。等知坪内先生の本序文は自分にとつては過褒である。唯自分の考へてゐること、斯くあるべしを端的に自分に代つて剔抉して下さつたことは惟へる。知己の言だとは、しみ／＼思ひ難有くも思ふ。さうした方面に向ひ、從來此の二方面の一身の具現は、何人からもその完全を閲せられなかつた。しかる方面に、自分のより新たなる將來の大成を期しようと覺悟するばかりである。

本書は、自分が、大正十一年十月以降、單獨執筆經營し來つた月刊「江戸軟派研究」の創刊より昨年八月に至る分の月次發表の或る部分と、及び以前、又は同時に、「浮世繪」(雜誌)其他に稿し來つた中の或物と、これらを類によりて輯め、且つ之に出來うる限りの修正と補遺とを加へたもので

ある。毎月執筆の稿には未定稿が多かつた。顧みて之を思ふとき、本書の全内容は、自分としては――甚だしく面目を新たにし、完全に邇きものと成されてゐると思ふ。

自分は、まだ當初の所冀の萬一も果してゐない。自分の今後は、天壽は何歳を假せられてゐるかも知れないが、能力、事情の許す限り、習すでに性となつた此の「江戸軟派」を自ら深め高めて行きたいと思ふ。

一身の外身方なしとはいふものの、從來、自分に加へられた聲援、庇護の力は至る所にあつた。乃ち坪内先生はじめ諸方の鞭撻推奬に依つて、一にこれ丈の物が成されたのだと沁々難有くも思ふ。とりわけて、坪内先生は、自分が單獨月刊冊子を刊行する迄は、全く何ら交渉のあつた方ではなかつた。自分の創刊を注文して下さり、續いて以後毎月購讀していたゞく事となり、のみならず時々書信により、或は示教、是正を賜はり、時に激勵の意までいたゞく事となつた。先生とは鄕關を同じうするばかりか、予と、中學も名こそ變りをれ、同一校たる事は以前より熟知してゐた自分は、何人に認められる其事よりも、忝く嬉しき事極みなかつたのである。況して先生が八宗兼學、予の歩む江戸軟派に於ても唯一卓たる先覺、師表に於てをやである。

思はず私情を述べたが、先生が、長幼親疎を問はず、同好同學の徒に對し、遇せらるゝ事甚だ篤き、その斯くの如き生證據ある事を、已身を材にする忸怩さを自分は感じないでもないが、寧ろ

此の機會にそれこれを述べて、先生の學に眞摯なる高風を崇めたいと思ふ。恐らく天下同感の士多きことと思ふ。現に、自分の先に(大正十三年三月)手許より出した「あぶな繪畫集」に於ける先生嘗ての長序といひ、本書先生の序文といひ、凡て常套の序文形式を脱した、後進を示唆すること極めて篤きものであり、先生と實的の交渉淺き自分にとつては、先生の勞を煩はすこと斯くの如く極めて多いを見るにつけ、凡て望外の賚である。まこと、先生とは、唯昨年夏、先生上阪の途次、來駕を忝うした唯一回の面識である。他は凡て書信、自分よりは主に自分の月刊冊子に於ての交渉をありがたくしてゐるのみである。自分は嘗て早稲田學徒でもなければ、また從來先生門下に謁を執つたものでもなかつた。然るに、今に於て之と同等若しくは以上の知遇を得てゐるのは、一に先生の宏量と忝じく思ふ。まして本書「江戸軟派雜考」自らの生るゝも一に先生の御推挽によつたのである。尨大よく六百頁の本書、しかも發行所春陽堂氏は本書の爲に四校までとりくれ、半歲以上、その往復に忙殺し、されもした。(その實務に當られたのは、同堂內木呂子氏である、予はこの機會に於て同氏にも謝意を表したい。)挿繪の如きも自分の要求通りを納れて、よく本書本文の貧寒さを掩ひくれたのである。凡て先生推挽の恩惠に外ならぬと思ふ。

本書の内容そのものに就ては、自分は筆者としてこの現物を諸君の目に觸れしめてゐる以上、別にとりたてて謂ふべきはない謂へば必ず樂屋落である　唯これだけの事はいうておきたい。從來、江戸軟派は、素人、イキでもなければスヰでもない、所謂お國者の敢て爲しうる所に非ずと做されてゐた。その癖、彼らは恒に、皮相なる摸倣、滑稽なる摸索の中に、または彼らのみに解しえらるゝ末節の穿鑿考證裏に沒頭しつゝあつた。その江戸軟派を、素人の手に、無素地の手に、奪はんとした、卽ち大膽にして驕慢なる自分の非望も多少これに動いてはゐる。然しそれのみではない、音曲物と洒落本人情本とに藏書を多く遺した予の父祖の遺傳、恐らくは環境ともいふべき力に促された、自己性癖も大に與りて力あることを宣しておきたい。卽ち單なるお國者の反逆とのみこれを見る勿れである。今に於ては、「江戸軟派」は、自分の生活の殆ど全部であり、心の廻りの中核でもあるのである。

自分は、目下、月次の續刊「江戸軟派研究」に稿を續ぎつゝあるの傍、自分の手許より「江戸軟派叢書」なる不定時飜刻書（未刊行のまゝの淨瑠璃正本、小説、雜著の類）を刊行しつゝある。尙、他「江戸軟派文獻」の未定稿ををり／＼纒めつゝある。此の「文獻」に於ては、前篇を諸種の活字本内容索引と後篇を明治以後の此種研究の單行本及び雜誌に於ける諸研究の分類索引に爲さうと思

ふのである。分類は、小說、戲曲、浮世繪、風俗其他一般に亘つたものである。所冀多端此の上は唯年壽の永かれを天に希求するのみである。

坪內先生の御厚誼に對する深甚なる謝意、及び自分の抱懷の一端を述べて、以上本書の拙なき自叙とする。

大正十四年五月

久彌しるす

凡例

一、本書の命題は、自分の適宜下したもの、必ずしも考證のみとは限らず。唯、考證を専らにせるものよりも、寧ろ全斑に對する印象、感想を端的に披瀝したるもの、例へば「浮世繪の心理」、「エロチックスに滲む心持」「昨日の花は今日の夢」の如きものに、より多きの自分の熱が、筆者として烈しく湧いた事を述べておく。

一、本書の挿繪は多く本文と交渉を有つてゐる。二三の外は、盡く自家所藏の繪本板畫の類を以て間に合せた。除外の二三も、所藏の最も優秀なる複製品に據つたものである。

一、挿繪解説は、その要を認めず之を略いた。卽ちその説明、本文にその之を敷衍したものの多きに居り、且つ畫家の傳統の如きも、本文隨處にその之を見るからである。

一、索引は、自分自身の、從來の多くの單行に對する不滿を併せ酌んで、出來得る限り零細に亘つて、之を採錄した。唯善き本、深切なる本、便利なる本を作ることは、人の爲といはんがよりも、寧ろ自分の爲といふことを切に思つたからである。この點から、目次もうるさき程細かに附けた。

一、補遺も自分の現在としては、先づ完全と思はるゝ程度に、之を努めた。然れども、たゞさへ尨大となつた紙面の都合上、知りつゝ略いたものもある。但し主に枝葉の問題で、根幹の分子は、必ず之を附するの煩を執つた。略いたものには、「原始的な稚兒物」と交渉ある室町時代小說年表、若しくは、稚兒物書目の如きものである。

一、尚、本書各篇の、各事項並びに補遺に關して、誤謬又は脫漏發見の博雅は、何とぞ自分の手許へ示教を惠まれたい。一個をより完全にするがためには、その工作者自身の熱意努力もさること乍ら、此種文獻に關する學業は、一に自分の如き藏本見聞貧寒なるものゝ、一人の敢て爲し得る所ではない。主に江湖諸賢の是正に俟たねばならぬ。此點、一個眇たる自分の爲ではない、天下同好同學の士の欣びである。切に筆勞を吝まれざらん事を望む。

目次

本朝艷畫考

補　遺

〔目次畢〕

挿繪目次

〔挿繪目次畢〕

江戸軟派雜考

原始的な稚兒物

稚兒物(衆道物、陰間物)は、江戸時代前期(浮世草紙類)中期(洒落本)等に於て可なりの數量である。室町時代にも、既に其の幾分はあつた。蜀山人、一話一言の補遺の「男色の事を書きたる草紙」にも「幻夢物語、嵯峨物語、鳥部山物語、松帆草紙兼載、秋の夜長物語、岩つゝじ季吟、犬つれ〳〵慶長の末年の著作いぬたんかと見えたり右八部ともに家に藏め置けり。此外に宗祇若衆物語ありといふ、いまだ見ず」(新百家說林五、一話一言補遺卷一)とあるが、今、平出氏の「近古小說解題」に依つて、以上各作の年代を見ると、幻夢(げんむ)物語は、文明(室町期、後土御門)十八年以前の作だとし、嵯峨物語(室町中世)。鳥部山物語(同)松帆草紙(松帆浦物語。室町中世。)。秋の夜の長物語(室町初世か。)。岩つゝじ(近古小說解題に見當らず。)などゝある。然し此等は、「近古小說解題」にも其の梗概が載せられてゐる如く、相當にノベルの形式を具へてゐるものである。然らば室町期以前に稚兒物があつたか否かといふと、從來の文獻上では、殆ど無いといふに近いやうである。誰しもいふ通り此の稚兒道(男色)が太古から行はれたことは、事實らしいが、それが文學に現れたのは、餘程後らしい。萬葉や古今後拾遺等よりそれらを指摘したるもある。(「變態性慾」第一卷。僧侶の詠んだ男色の和歌)其他の古い所では、「古事談」の賴通が長季を寵し

た話。鎌倉時代となつては、沙石集（無住法師の著たるは有名、誰しも知るが、彼は、梶原景時の孫で、弘安二年より同六年に書き終るといふ。）に現れた「ある藏人の子の稚兒となつたのを叡山と三井寺とで爭奪した」といふ話なども、幾分の文獻にはならう。とにかく、室町期の、足利義政などの武將の斯道發展家の現れぬ以前は、室町初期までは、多くは、禁欲の罠を人知れず脫しようとした僧侶、少數は性的遊戲の一としての、異性に飽いた贅澤さの公卿貴族と、この二階級に止まつてゐたやうである。それが室町期に於て、武士が之に加はり更に江戸期に於て町人も之に加はつたといふべきであらう。とにかく衆道史を通じて二本の太い線は、より太き線は僧、その他の太き線は武士であらう。

却說、純稚兒物としては、（斷片的の記事の登載にあらずして、それ一個まとまりたる物として、）殆ど室町期以前には從來嘗て見ざるにも拘らず、こゝに紹介しようといふ一物がある。勿論今、私の提供する材料は、寫本ではあり、且つ轉寫又轉寫されたものであらうから、誤字脫字も少々あるにはあるが、とにかく原始的稚兒物として紹介するに足ると思はるゝ物である。外題は「稚兒乃草紙」、年代は「元亨元六十八書寫訖」と文後にある。六十八云々は、何の意味か。表題の稚兒乃草紙も怪しいものだが。勿論原本は、一切表題のないものかも知れぬ。元亨元年云々も、怪しめば怪しめられる。しかし、以下に紹介するやうな內容であれば、全く、稚兒に關した斷片的の說話集であつて、室町期物の如き一個纏まりたる物語形式を有しない點からいふと、恐ろしく原始的なものである。しかし、春本「逸著聞集」

(山岡明阿彌の作)の如く、江戸期に於て國學者が、遊戯的に成された僞書かも知れない。(逸著聞集にも、多くの男色に關する記事がある。)が、ともあれ、私は、「元亨元六十八書寫訖」にどうも多少の信が措けてならぬから、これらを疑問としながらも、敢て「原始的な稚兒物」として發表する次第である。

人あり、汝の江戸軟派と、これと如何の交渉ありやといふかも知れない。私は、此の内容を發表する丈でも既に、この寫本を有する私の責任であると思ふが、尙、私の所謂「江戸軟派」にも、野郎衆道物の多きは、我人知る通りであるが、然しそれらの近世同性文學の魁たり原始たるものは、此等「稚兒乃草紙」の類にある。即ち敢てその故を溫るの意に於て、これを本著に發表したいと念じたのである。つまり、私の、近世男色物(これはいづれ他の機會に纒めるつもり)の序として讀んで頂きたい、且つ彼此比較して貰ひたいといふのである。

さて、若しその「元亨元」を信用するとせば、これは又恐ろしく古いものである。即ち元亨元は、北條高時の執政時代、天皇は後醍醐。高時滅亡の十三年前である。資朝俊基などの陰謀且つ露見の四年前。僧師錬の元亨釋書の成る前年である。しかも、元亨元……寫訖とあるからは或はその原本は元亨元より更に古きものかも知れぬ。內容は、以下現るゝ如く、多少筐底書式の文字もあるが故に、或はその以前にこの原本があつて、內々轉寫されつゝあつたものか、或は、寫本の度に、新記事を書き加へたものかも知れぬ。さうして、その原本作者は勿論、轉寫連中も無論僧侶の斯道家連であらう。さ

て先づその全文を載せて見よう。

（掲載に就ては、原文のまゝにした。讀み易からしめるために、その右に、漢字、或は正しき假名遣を振つた。濁音は一切ないのを、誤讀でないと信ぜられる限り、濁音を附し、疑はしきは、その右に（?）を附して、想像しておいた。唯困つたことは、多少公刊上遠慮せねばならぬ辭句の、散在することである。これは、乍殘念一切伏字とした。しかし私のこの全文登載の目的は、全體の説話にある。從つて、全體としては、この多少の伏字も、左程煩はされてゐはすまいと思ふ。）

稚兒乃草紙

仁和寺の關白の程にや　世おぼえいみじく聞し給（ふ）貴僧おはしけり　御歳たけ（長）たるまゝに　三密の行法の薫修つもり（積）て　驗徳ならび（並）なくおはしけれどもなお（なほ）もこの事をすて給はざりけり　童おほく侍（る）中にことになつかしく御そひぶし（添臥）にまいる（参）は一人ぞありける　貴（き）も賤（しき）もさかり（盛）すぎたる御身になればはか〳〵しくこのわざもつき（?）地にしんとし（?）の風情にて　たゞ○○○○○○ばかりの箭いろにてぞ　井ゝ（(?)いゝカ）事はおもひ（思）よらずしてぞありける　此童ほい（本意）なきことにおもひければ　夜々したゝめて　まづ中太と云ふめのと子の男をよびて○○○○させて……（二字分闕字）せられつゝのちにはお（大）

ほきらかなる○○○○と云ふ物をもちて○○○て　丁子などをすり(摺)て○○○○○せけり　この男心
を入れてかく宮仕けれ(へ)ば○○○○てたへ(堪)がたきまゝに　○○○をぞ○○ける　火ををこしてあぶり
したゝめてぞまいりける　老の眠はもとよりはやくさむる(覺)事なれば　つれ/\(徒然)におはするまゝに
この童を○○○○○給ひけり　かやうにしたゝめおほせければ　すこしもとゞこほりなく　○○
けり　かやうに心に入てすら兒もありがたくこそ侍らめ

二　これにかぎる(限)べきことならばこそ　よふけ(夜更)なば御よるにならぬさきにまい(参)らん　すること(ずるにカ)
いま(今)はひる(晝カ)こそ思H(思ひ)あたらめ　心みじかき物かな
さててつき(手突きカ)○○○○　（こゝに、中太と稚兒の挿絵あり）

一(中太)　かやうに毎夜の奉公のしるしに　とき/\は心の○○○○○○○○○たまはばこそ　い
よ/\このみ(好)まいらせ候はむずれ　あまり(餘)に　思ひやりのおはしまし候はぬこそたのも(頼)しか
らず候へ　このたび(度)ばかりは心の○○○○○候はん

二　さらばいま(今)ちと○○く○○○○てさてあらん

二　あはれせむ(詮)なきことにて候ものかな　これならぬ奉公も候ものを　ゆゝしく○○の○○候てたへ(挑)がたく候まゝに○○○を夜ごとに○○候へば　○○の○○かよは(か弱)くなり候て　たもちたもちかうは　（こゝに、稚兒の○を火桶の火にてふきをれる中太の圖あり）

あら心なのふき(吹)やうや　みなひとのいかした(たカ)をやきたるぞや　あなあつ(熱)や

（前文缺カ）にくまれ候に　いま(今)はさゝへ(支)候はん　ゆゝしくかうはしく(香ばしく)おはしまし候ぞ　しう(主)ながらもさもむつかしき御○○かな　いみじき御思こそ候はざらめ　こと○○候はんまで　○○をお○○○候はゞや

はじめは　忍(ぶ)もぢずり忍(び)つゝいろ(色)にはいでじとしけれども　新かま(鹽釜カ)のさとの　あながち(強)に心の色ふか(深)くなりければ　忍(び)はつべき涙ならねば　袖のしがらみ(柵)かくとばかりはもゝ(のカ)してけり　此童あさましと思(ひ)ける　心にまかせぬ身にしあれば　ちから(力)なき事也おもひたえ給へと度々申けれども　いつとなく　いかゞはすべきなどうちくどき(口説)ければ　此事あらはれなば世にあるべきことにも侍らず　ことにかやうに心ざしの給へ(宣)ば　さのみはいかゞたがへ(違へ)たてまつる(奉)べき　夜深程(き)になりて　この御□(?)の草のなかに隱(れ)ておはせよと　たのめ(頼)てけり　なが(長)月のころ(頃)なりければ　すゝきかるかや(薄苅萱)などのな

かに　隠居（れ）たりけり　此童おとゝ（弟）の童にあひて　もしめし（召）あらばここにてよび（呼）給へ　はたらき（働）たま（給）はでおはせよと云（ひ）て　縁におとゝ（弟）の童をおきて　此僧の隠居（れ）たるすゝき（薄）のなか（中）にゆきて　ひたゝれ（直垂）着ながら　○を○○げて　○○○○るを　月のひかりに　これを見るに　いと心もこゝろなくて（らでカ）すゝき（薄）のなかより　○○○○○いだして　○○○みてけり　露ふかく（深）おける草むらなれば　○○わたりに○○のしづく（雫）うちそひて　ぬれわたりつゝ　いよ／＼もの○○○りければ草ごみ（込）にて　てのごひ（手拭）はして（カ）きはして各歸にけ（り）り　たがひに心ざしあさからざりければ　よなゝゝ（夜）ごとの事なれども　知人（る）もなし　か様（斯様）になさけ（情）ぶかき（深）ことは　すくな（少）くこそ　出家の後まで志あるとくゐ（たぐゐカ）にてあるよし　たしか（慥）にうけ（はり）給候ひし

一　としごろの思は　たゝ（？）のまくそ（よくぞカ　まことにカ）かなひ（叶）候（ひ）ぬれ　これも本尊の御たすけにや　いかにし候てか　これことにかやうにみつから（自らカ）申（す）とにて候べき　あらたへ（堪）がたところ（所柄）からにや

二　ひごろ（日頃）もみづから（自）申（す）べきおり（をり）／＼は　候ひしかど　人の御心もたのまれ（頼）ず候（ひ）しかば申さでこそ　すぎ（過）て候（ひ）しが　いま（今）はかく（隔）へだてなき事にて候へば　いそへのなみ（磯邊の波カ）の　おり（をり）よく候はんとき（時）は　さこそ身にしむあき（秋）の風のけしき（景色）はおり（折）しりがほ（知顔）にこそ

嵯峨の邊に時々かよひ給いみじき僧御けり　槐門の家をいでゝ　無爲の道に入　三史九經をすてゝ
天臺六十局を翫給ければ　煩惱卽菩提の觀門に　善惡不二の理をあらはし　生死卽涅槃の同體諸法皆空義をさとり給てければ　御心にまかせて　兒とをはしけり　常に御そば近くまいる童ありけり　御心ざしふかき事たぐひもまれなりけり　御房人に此道に心をいれたる僧ありけり　いかゞしてとおもふ心ふかくて　ことさら此兒にとりいりてありければ　童もさるにこそとおもひけれども
これもかみきびしきに　かくもれ聞へるは身にも安穩にありがたかりければ　只知らぬ様にて侍ける程に　この僧便宜ありけるに　心のいろをあらはして　としごろのことをかたるをうち聞より
この童ことはりと覺て　湯におりたりけるに　此僧をよびて　ともにあひけり　まづ〇〇を以て僧〇〇〇〇りて　やがて〇〇〇〇〇て　湯舟〇〇〇〇〇て　前ざま〇〇〇〇〇〇〇てけり
これのみにもあらず　それより　なつかしきものにおもひて　御前ちかく御とのゐをせさせて　我身房主御房とねながら〇許を〇〇〇して　まかせけり　かゝるためしもありたき事也

一　これはいかなる事ぞや　さらにうつゝともほえぬものかな　かゝるいみじきことは　いまだ身にとりては　おぼえ候はず　この日ごろの御心つよさこそいよ／＼うらめしく候へ　あはれ〇〇たくさんのことかな

二　まことにひごろ申かはされしことは　みのとがとこそおぼしめしよらぬことにて候しかば
申事も候はず　いまはわすれさせおはしまし候はざらん事こそうれしく候へ
ぐう／＼　（こゝに、主の御房の眠れる圖あり。）

二　たましゐもあるに　とりてこそ人のおそろしき事も候へ　かくて〇〇〇〇きながら／＼
しなばや法師らは

一　あまりにけしからず　ののしらせおはしまして　ひとおどろかさせまいらせさせ給いな
返しも物おそろしく候ぞ　ちかく〇〇〇〇へ　〇〇かん

法勝寺の邊に　貴人のいとをしくし給ひける童ありけり　武藝をこのみて　ひ（此處二字分闕字）はか
かひの邊尊勝寺はざまなどに　夜々たちて　惡情をこのむ童にてぞ侍ける　見めかたちこのもしら
かなりければ　見る儈は心をかよはしけり　その中に中間法師のなまとしおとなしきありけり　い
かゞすべきと年來わびけり　これを人しりなば　追出にあづからむこと　うたがひあるべからず

これをいろにいでずば　又この世にながらふべきにあらざりければ　くちよりほかへはいださねど
も　けいきばかりをしらせてけり　この童さしも心たて〳〵しけれども　此道をばすてざりけるや
らむ　年おとなしきものの　やせおとろへるをみて　むざんにもおぼしければ　ひまをはかりて
この法師をへやへよびて　足をあらはするやうにて　〇〇〇〇〇〇たりければ　この法師　見
るもあまりにあさましく　かなしくおぼして　ぬれたる手にて　〇〇〇〇たるに　すこしも我を
〇〇ともおぼさずげなれば　〇〇〇〇〇〇たりければ　さわるものもなく〇〇〇様にてこぶ
しの〇〇まで〇〇ぬ　おもひにたゝずやがて〇〇〇〇〇　この童心ざしふかきものをば　いか
にもすてざりけり　ほかのもの御房人などをなさけをかけゝれば　ありがたきためしにぞ申ける

一　あしをば　あらはせて　いづく〇〇〇〇〇　あらしれがまし　なにとすることぞ

二　としのよりて候あひだ　めがくらく候て　心のひくかたにてかゝけられ候ぞや　なにかは
くるしく候はむ　御あはれみ候へかし　ひごろの心のうちをしらせおはしまし候はぬやらん

二　とし月はもし御心もやすこしおぼしめしたるとこそ思ひまいらせて候へども　ゆく水の心

ちして候へば　おそれ〻〻かくまいりか〻りて候　これはいかなる事ぞやしに〇ぬ

一　まづあしをあらはせて　わほうしはなにとするぞ　ひごろ心ふかく思ひけるこそ　かへすがへすもいとをしけれ

北山なるところに　一念三千の觀に心をそめ　五想(?)外身の理とする僧おはしき　ことのならひなればこころざしあさからぬ童をぞもち給(ひ)たりける　心ばひなだらかにて　はかなきあそびたわぶれにいたるまでも　座をさまさず侍(り)ければ　御同宿などもうけおもひてぞありける　貴人の御愛童を人手をのくべきにもあらず　況(んや)御氣色あしき事にて　よにはしたなきこともありけるより　(二字不明)□□はかばかしくよそながらもたちよる御門弟もなし　としいまだわからかなりける僧　この童をおもひかけてけり　さるべきおり〳〵をもとめて　ほのめかさむと　心中には　あんじたりけれども　便宜もなかりければ　この童のすむ所のぬりごめのうちにつねはふしければ　僧さきにはい入てかく(り)れゐたりけるに、童なに心もなくいりけるに　あやしきさまなるひとの　けしきしければ　なげきわびたりけるに　やとおかしくおぼえて見ぬていにもてなして　ぬりごめのたれ布よりなら羅井いでゝ〻　おさなき冠者のあるとものがたりし　文などよみてそひぶして　〇〇〇〇〇つくに　はたら

かざりければ　やがて○○をひき○○て○○○つるに　なを（なほ）しもおどろき（驚）たる　きそく（氣色）もなし　もとよりの達者にてありければ　いとわづらひなく　○○○○○りにけり　この童なを（なほ）物がたり（語）をしてさりげなきてい（體）にぞもてなしける　ぬりごめ（塗籠）にきりいた（切板）をして常はかよはせけり

しばし御渡候へかし　けしから（怪）ずの御いそぎ（急）や

まことゝ

あやしきことゞもかな　ひとりを御とゞめあるとはねたや（妬）

心なし　いざやかへ（歸）らん

一　いま（今）は○○○○○○○

二　いやたゞ（唯）しばし（暫）かくてもてあそび（弄）て　のち（後）に○○かへ（返）して○○○かんに

この人々のみるらんわざ〳〵しさは

みるとてはいかゞすべき　○○○や　おそ〳〵

一　これほ(ど)○○○○物○○○○○○○らでは候べき　口のひまあらばこそ　くはしう(悉)は申候はめ

あらびんなや(便)　　　　　　（こゝに稚兒の圖あり。）

いかなる事候ぞ

一　あらうまや　ちと(些)にがく(苦)候

二　これもよく候へどもちと(些)しはゝ(鹽はゆくカ)ゆく候ぞや

一　うまれて(生)このかた　○○○たる事はいまだ候はず　よきくせ(癖)とおぼえ(覺)候　あはれ御□(一字闕)よさ

しかな

一　あらしら〳〵しや　さわがしや(騷)　いかなる(如何)御事候ぞ

元亨元六十八書寫訖

伏字甚だ多かつたことは誠に遺憾であるが、然し大體に於てその輪廓を察知せられたことと思ふ。私の命じて『原始的』といふ稱呼に殆ど近いものがありはしなからうか。殊に編中挿める二三の繪を見るに、こも頗る古雅なる筆致である。しかも文と同様、寫實的なる所も混へ居れば、以て後世の斯道小說類の魁たりと目すべきに足るものならんか。如何。（大正十二年、九月、十月）

『原始的な稚兒物』補遺

前稿、「原始的な稚兒物」の解題中に、新百家說林の蜀山人の說を引いて、男色物を列擧した中に、「岩つゝじ」の一篇をうつかりノベルのやうな形に說いておいた。其後、讀者たる某氏からも指摘されて氣がついたことであるが、成程、國書刊行會本の、蜀山人編の隨筆集「三十幅」の中に、その「岩つゝじ」の全篇が登載されてゐた。堅い物ばかりの隨筆集の「三十幅」も始めて間に合ふ光榮を得たものである。「三十幅」の第一に岩つゝじはあつた。三十幅の此の刊本を手にした時は、根が季吟の物ゆゑ、そのまゝ深く見もしなかつたのである。燈臺下暗しとはかゝる類であらう。「三十幅」第一の岩つゝじで見ると、丁度菊版二十頁ばかり

の量である。成程、ノベルではなく、勅撰集其他から、男色に關した短歌を集めたものである。上下の二卷に分れてゐて、別に補遺が付いてゐる。古今和歌集第十一戀一の「思ひ出るときはの山の岩つゝじいはねばこそあれ戀しきものを」の歌がはじめに載つてゐる。この歌から、岩つゝじの名が起つたのである。歌の作者は殆ど僧徒で、それ以外公卿ではホンの二三を數へるのみである。以て此の變態道がいかに僧徒に因習せられたかゞ分明であらう。選した歌集は、古今、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載、新古今、續詞花、拾玉集などで、歌集以外では、大和物語、松帆物語。補遺は、諸記、諸隨筆からの拔萃で寧ろ補遺の方に面白いものが多々ある。大内義隆記、源賢法眼集、井蛙眼目、眞光院紀行、宗祇筑紫紀行、坂士佛伊勢太神宮參詣記、著聞集、宗長日記、萬葉第四の家持の久須麻呂に贈つた歌などである。歌としては、大抵平凡な戀歌で、勿論小生の發表した「稚兒の草紙」のやうな實感の猛烈な、内容の豐醇なものは一つもない。僧徒の間に、此の變態道が盛行した、といふ例證にはなるが、それ以上心理の考察には無論駄目であるし、變態性慾文學の古典としては薄つぺらなものだ。今左に、その叙だけを秡載しておから。まだ此の叙の方が比較的面白いと思ふ。（大正十二年十一月記）

「岩つゝじ」の叙

「うましおとめをよろこぶは、女神男神の神代より、人の心のまさにしかるべきことはりなるを、うまし男をしも女ならでさるすける物おもひの花に醉るは、あやしくことなるに似たるわざながら、その妹脊の山は佛のいましめさせ給へる所なれば、さすがに岩木にしあらぬ心のやるかたにて、法の師のわけ入り初めし道なるを、つくばねの峰のしたに流れ落ちては、みなの川の淵となれることのごとく、末の世にはかへりて女男の情よりも猶そこひなきこととなりて、上達部らへ人などはさらにもいはず、たけきもののふ

の心をもなやまし、爪木をこる山賤も、なほ此の若木の陰に立ちよらずといふことなくぞなりにけり。しかれど是をやまとうたによみ出たることは、さまで多からず。まづ古今和歌集のなかには、高野大師の御弟子眞雅僧都のときはの山のひと歌あり。これやかの色好みの家の風をつたへ、花薄のほに顯れて、まめなる人にもかたり傳ふることと成けらし。其外にも代々の撰集にのせられし言の葉、拾遺集より新古今まではわづかにちりまじりにたれど、そののち十三代集の中には、つや〱見出るふしも侍らず、もしやありもや侍りけん、伊勢、源氏の物語、狭衣、枕草紙などにも、さま〲戀草の色をつくして書きつらねたれど猶この一くさはもらしたりき。かくまれなる物はわりなく見まほしき人の心のくせなればにや、ある人此のくさ〲のふる言の葉を見出てよとしゐてのぞまるゝに、こよひ延寶四とせ八月十六夜つれ〲とふりくらし、雨にむかひてむなしく月を戀るもあやなければ、ひとり燈をかゝげて、かつ古今集よりはじめ、敷島の道の草双紙、また歌ならぬ繪物がたりの中などにても、やさしく捨てがたきことあれば、見るにしたがひて書あつめつゝ、岩つゝじとなん名づくめり。近き世がたりにはいとけやけく目おどろかるゝこと多かれど、これにはのせず、此頃の事は人も耳なれて珍らかならず、かつは世にはゞかるべきこともおのづからある也ければなり。北村季吟書之」

『原始的な稚兒物』の正體

「原始的な稚兒物」の正體が確實に分つたから御報告をする。あの篇執筆當時も、何處かに原本がありさうには思つたが、果してゞあつた。それが話に聞いてゐた京都醍醐三寶院の男色繪卷だつた。眞先に疑問を云

ひ越されたのは、大阪市住の室賀萬之助氏であつた。

(前略)「原始的な稚兒物」は醍醐寺のものとは別ものに候か、勿論小生は醍醐寺のものも存じをらず候(十一月十一日)

右のやうな疑問であつた。第二回は、名古屋市立圖書館長の阪谷俊郎氏からであつた。

「貴誌第十二册御掲載の元亨元年寫本「稚兒の草紙」は既に御承知かと存じ候へども現に京都府醍醐三寶院藏の俗に「男色繪卷」と稱する繪卷物の詞書にして、原本にはもう一段有之候。該繪卷は傳鳥羽僧正筆(勿論信ずるに足らず)圖様は甚亂暴なるものに候へども時代は奥書と同時代らしく筆力雄勁頗る優れたるものにて、本市關戸家藏の「病の草子」同様珍重するに足るものに御座候。「稚兒の草紙」とは後世其卷物の題簽に書記せるものにて、或は原名の憚多き處より便宜上命名せるものかと存じ候。以上。(十一月二十一日)

此の手紙に接して、私は、もう一段有之候云々と指示されたその不足一段の謄寫を依頼に及んだ所、丁寧なる書狀を添へて不足分と稱する段の寫も頂いた。とそれはすでに小生が小誌の第十三册前半に繼續して掲載した物であつた。阪谷氏は、小誌の第十二册だけを御覽になつて、この不足云々の言葉が生れたのであつた。で、とにかく小生の發表の分であの詞書は完結してゐるのである。

阪谷氏は、繪卷原本を見られた事があると見えて、手紙に左の如くあつた。

「(前略)實は小生或る機會に彼の繪卷物を一見致し其後知人の筆記せる詞書を借用して謄寫致し置ける迄の事にて別に古き寫本等にては無之候(中略)其次の對話は第五段の文句とは關係なき數個の圖面に書入れ

たるものに有之候。以上。」(十二月二日)

越えて十二月七日、今度は、內田魯庵氏から左の書狀が來た。

「每號おもしろく拜見。(中略)なほ此稚兒物は醍醐の男色繪卷と同じではないのですか。アレにもタシカ元亨の奧書きがあつたやうに記憶しますが。(尤も此奧書きは後人の記入であらうといふ說もありますが。)(下略)十二月五日」

丁度其の頃であつた。ふと氣がついて、黑川眞賴氏編の「考古畫譜」を調べてみた。もつと早く、あの篇執筆當時に、見當を付けて調べたら、もつと早く分つてゐたに、此の時分になつて、念の爲、考古畫譜の中の男色繪卷を探した。其の下卷に容易に見つかつた。さうして最も簡明に、あの「稚兒の草紙」の正體が分つた。やはり男色繪卷だつた。丁度それへ魯庵氏の「あれにも元亨の奧書きがあつたやうに」云々が呼應した。考古畫譜の「男色繪卷」の全文は左の如しである。

「醍醐男色繪」一卷

橘窓自語云、鳥羽僧正戲畫、云々。或人の物語に、醍醐山某院に、男色の卷有りと云へり。實否をしらず。

貫雄曰、理性院にあり、未レ見ニ其物一或云三寶院にありと。

〔補〕四郎曰、鳥羽僧正の筆といへる、大に疑ふべし。奧書に、元亨元六十八書寫訖、とあればなり。又箱裏書に云、此卷久藏、在ニ本寺庫中一濕氣侵レ之故、原裝接ニ縫之一處斷裂、不レ便ニ展觀一、而中間已闕、今不レ知ニ其所在一、余爲命レ工理レ之、而不ニ敢有ヒ加焉、懼レ失ニ其眞一也、畫與ニ詞書一歷年已五百年所、今理レ之更可ニ百年一、明治二十有五年五月、永年居士、山田純識」

これで、あの「稚兒乃草紙」が、醍醐三寶院（考古畫譜では、理性院三寶院二說を載せてゐるが、阪谷氏の實見說に基き、三寶院とする）所在の傳鳥羽僧正筆の「男色繪卷」の詞書たることは疑ふべくもない。最初から考古畫譜を調べてかゝれば、難はなかつたのである。疎忽の罪を謝す。尙、元亨元六十八とは、元年六月十八日の意であること、村田鈴城氏御教示の通りである。――大正十三年二月――

「好色むらく坊」と作者桃隣

家藏の物に、此元祿板「むらく坊」がある。半紙判全十三丁。卷末に、元祿八年亥ノ正月吉日　長谷川町　近江屋九郎兵衞板とある。作者名は不明である。表紙は原本當時の物ではなからう。外題もない。墨で、春のひと夜　全と記し、右肩に、元祿むらく坊と手書されてある。然るに本文の各柱には下に丁附と共に上にむらく五と全十三丁に亘つて刷られてある。內容は、むらく坊といふ好色な青道心とその還俗譚である。從つて此の冊子、むらく坊といふ外題は恐らく外れぬ所であらう。春のひと夜　全といふのは、宛(あて)にならない。元所有者のいたづらに過ぎなからう。

先づ板元の近江屋九兵衞は、井上和雄氏編の「書賈集覽」を調べると、アの部に、

近江屋九兵衞　江戸長谷川町　元祿――享保　一に橫山町二丁目

好色むらく坊（元祿八）　好色俗紫（同十一）

とある。すれば近江屋九郎兵衞からは、此の好色むらく坊の他に、元祿十一年に好色俗紫等が出版されてゐる。營業期は、元祿から享保への約四十八年間（元祿元から享保二十まで）以內である。これ

で本屋の輪廓は大體分つたものの、まだ好色むらく坊の作者が不明である。

今、私の手許にあるむらく坊は、むらく五とある所から推すと、第五冊目に違ひない。むらく坊の坊主になる以前の艶話が、前四冊に費されてゐるらしい。此の手許にあるのが、最終の編であることは、版元と年月もあり、また、「めでたけれ」で文を終つてゐる所からいうてもそれに違ひない。作者は？果して五冊物か？と、今度は日本小說年表を繰つた。年表にはたうとう無かつた。念の爲と、柳亭種彦の好色本目錄を繰つた。これにはあつた。該目錄の最尾に、

好色優天狗　半紙形五冊

江戸作　長谷川町　近江屋九兵衞板

序に桃の林紫石、印に蝶广ろ。

柳亭も近年見たり、更に興なき書振りなり。

標題知らず　元祿八年印本

柱にむらくとあり。夢樂坊といふ者の事をつくる。

作者、板元、「やさ天狗」と同じ。面白からず。

これで見ると、種彦は、嘗て此むらくもやさ天狗も通讀したものらしい。一は興なき書振りと貶され、一は面白からずと露骨に出られてゐる。末期の大作者種彦の手にかゝつては、かういふ評を受け

桃林紫石の
同著

るのも尤もだ。その實私もこのむらく五を讀んで面白からずと思うた。しかし面白い面白くないは、時代を絶した正直な我々の作品に對する判定、好尚である。一步退いて江戸　說草創期に於ける江戸出版として此のむらくを考へてやるならば、幾分かそこに愛憐と鑑賞の懷が湧く。種彥の才筆もかうしたむらく坊作者如きの先輩の努力（或は半分以上醉興にしろ）あつて、始めて生れたのだ。――話が傍へ外れたが、別に浮世草子目錄（大久保葩雪）を見ると、年次不明の中に、好色優天狗、五、桃隣紫石とある。（隣は林の誤か）種彥の方は、序文の記者に止めてゐるのを、これには作者にしてゐる。無論或る場合、序文の署名は作者であるから、此の類推も間違ひではなからう。すれば、むらく坊の作者も桃林紫石である。冊數も優天狗と同じく全五冊であり、家藏のものは、その五冊目で無論あらう。

浮世草子目錄、好色本目錄、日本小說年表等に亘つて、此の桃林紫石の同著を探してみた。中、らしいものを發見した。卽、好色酒吞童子五（元祿十年序。桃林堂、印蝶麿。後に好色榮花女と改題すと）。好色艷虛無僧（桃の林、印蝶麿）。好色連理松（桃隣堂。小說年表に此本倂隣堂とあり。誤植か）（以上、好色本目錄）。好色大福帳五（桃のはやし。元祿十板。鳥居庄兵衞（淸信）畫。但し年表には、七冊唯樂軒と云。）（以上、浮世草紙目錄）好色一もとすゝき（小本五冊。桃の林。菱川師房畫）（艷色京紅に所載。）で、むらく坊、優天狗とも、先づ五六種は確かであらう。

家藏のむらく坊は、第一、草枕うつゝの小町。第二、妹背の千人限と二章に分れてゐる。此の體裁

むらく五の第一、第二の梗概

から推せば、一册に二章づゝ、全五册で十章の見出しがあらう。無論話は連絡して行く筈。家藏むらく坊五の第一、第二の梗概を左に略述してみよう。

夕ぐれの月にいざなわれて。宿を立出れば。いづくもおなじ秋はあれど。みやことて町はさびしからず。若しゆのすさむつゞみ。よめのうつきぬたも。森はやしをへだてゝかよふをとこそ。ひとしほきゝところあれと。わびものずきにゆきさきさだめず。あちらこちらと行まゝに市原野にいたりて。花すゝきの風にまねけば。さきのこるききやうのうなつくもおかし。むらく坊もしばし立やすらい。げにやむかし小のゝ小まち。……………（原文のまゝ）

「むらく坊」卷五の卷頭

これが第一丁目表の全文である。それからむらく坊は小町と業平との昔の情事を追想する。「かれこれふるごとを思ひ出すにも、なほあはれに袖をうるほし、傍なる草の上にしばし休らひ居けるに、風さわ〳〵として物凄く薄の亂れし中より齡三十斗りの女郎の、素顏に眉細く、梳き流したる黒髮のこぼれかゝりたるさま、いとけだかく」云々の姫が現はれる。これが實は、小町の幽靈で、故あつて羅切したむらくに情事を強ふる。丁度常盤津の「將門」のやうな振りがあつて、光圀ならぬむらく坊は、難なく征服せられる。

結句これが機緣となつて、むらく坊は再び人間普通の體になつた。

「……われも成佛の身となれり。御身此の後えにし深き女にあふて、再び富貴の身と成べし。いそぎ元俗したまへ。われ永き形見に小野と云名字を讓りまゐらせん。さるにても殘り多や。(中略)あかつき風そよ〳〵と、薄に蟲の聲のみ殘りて、夜はほの〳〵となりける。」

で第一は終つてゐる。

第二の妹背の千人限は、小野清五郎と還俗したむらく坊の、漁色の烈しいに始まる。神無月の初めより末の冬迄に九百九十九人。此内娘五百人。後家三百八十人。遊女三十人。尼二十人。男もちたる女七十九人。今一人となつた。「ある日、雪ふりていと寒く、町並の軒も白妙なるに八坂のほとりをさまよひ、かしこの茶屋にあしをとゞめ、休らひゐたる所に、年比二十あまりの女、背たかくしゝつき(略)が、緋無垢のうへに無紋の黑小袖、さらしの上羽織して(略)裾をからげ、びらうど緒の塗下駄に、紫竹の細杖をつきて、いやしからぬ下女三人つれて通りけるが」同じく此の茶屋に休らひ、やがて清五郎を下女して呼び入れる。色々あつて、

「わらはは、嵯峨のほとりのものにて候が、ちゝはゝ亡くなりて後、父の養ひ置きし文屋安之丞と云へるをつまとなし、半年に足らずして安之丞世をさり候より、獨りねに三とせを重ね心に叶ひたる夫あらば……」と、女、自ら素性を語る。

「むらく坊」巻五の第一挿繪

清五郎もまた宿生の緣があるのか、それに不思議なことは、相手が前の夜市原野で姊うた小町の顏にそつくりである。たうとう慇懃を通はすこととなる。

「内儀云ふよう、これよりすぐにわが宿へ御供申し、ことぶきまゐらせん。いかゞとのたまふに、清五郎ともかくもと、あるじの女に褒美をおくり、夫婦もろとも駕にのりつれ、さがの宿りへぞ歸りける。かくて富貴日々にさかえ、あまたの男女に敬はれて、よるひる分かぬ………千秋樂には………萬ざいらくには………相生の中こそめでたけれ。」

で完つてゐる。第一、第二、交會の描寫は宛然讀和(よみわ)である。しかし文が幾分古雅である

作者の身元

から江戸末期の物の如くではない。挿繪が三葉ある。市原野。茶屋の出逢ひ。嵯峨へ伴はれて行く所。すべて菱川風である。但し師宣では恐らくなからう。（師宣は元祿七年歿）その中、茶屋の繪が稍エロチックである。文體と描寫、凡て西鶴の浮世草紙本の比でなく、純好色本の部に入れて然るべきものである。江戸出版であるにも拘らず、全然京を材料にしたことも、記すべきことであらう。（作者、桃林紫石に就いては、一臆說がある。好色本目錄中、好色酒呑童子の註に「江戸の俳諧師にて、伊勢の產には非ずや」といふ種彥の言だ。確否は、何とも云へない。）　――大正十一年十月――

○「好色むらく坊」に就て

「好色むらく坊」考證に就て、大阪だるまや主人から左の來簡に接した。（大正一一、一一）

「貴說むらく坊の本外題は、「好色赤烏帽子」である。自著「籠底書解題」七の巻より抜記して机下に呈す。

好色赤烏帽子

好色赤烏帽子　五册　元祿八年

序文に桃の林とある。何人の戲なる哉。類本數著を見る。畫者は署名なきも鳥居淸信ならん。

江戸に夢藥坊といへる生殖器不備僧あり。色道修行を思ひ立、業平神へ立願す。三七日の滿願の夢枕に前世業因により、現世にて願意叶はず、神も其志を憐れみ、せめて諸人の情事を目睹し心を慰めよとて、隱れ簑同樣の隱仰自在の赤烏帽子を賜はり、江戸を出立して、東海道の宿々所々深窓に入り込み諸人の幾多の情事を見て京都に入る。（一より四迄梗概）

○

前稿の補遺と名づくべきものである。天下は廣い、からなると珍本も左程珍本らしくなくなる。最近自分はその首巻を見る機會を得たからである。此の首巻、小誌愛讀家の一藤倉浩吉氏(茨城縣下妻町)の好意に依る。氏の手紙――首巻を所藏される由の――に接したのは大分以前である。最近自分は急に此の補遺、並に自家寫本の要を思ひ立つて、貸覽を依賴に及んだ。さうして速かにその好意に與つたのである。に依つて一層この「好色むらく坊」の輪廓を明らかにし得たのである。此の欣びを我人共に頒ちたいと、急に此の執筆となつた次第である。

貸與に與かつた首巻も、自分所藏の第五と同じく、表紙外題は不明である。この首巻の分は、元表紙がついてはゐるが、それが表面が殆ど剝がれてしまつてゐて、唯綴目の所に、くすんだ靑の色を殘してゐるのみである。靑表紙との類推は付くが、外題等は不明である。初めに、序が(序と銘記はされてゐない)一丁ある。

呂望が。空鉤の點褁釣に。蘆魚をまふけ。屈原が。江潭に扠を携て。海鼠ねらふ賢意地。㑨上戸とやいわむ。唯堅く和なきは。石に似て。しかも鮓の壓石にも用かたし。丸く柔なるを。鷄卵の國風と濇。身は色上戸の辛口いふも。笑上戸のそしりをかへりみず。風の朝に紅葉をあつめ。霽の夕間鍋を焙て。楢柴の菴寥々と居たるに。一人の美僧來りて。十二の色を語る。是心の垢を洗たねと。兎毫に留內に。東雲風に頽墮。矮鷄の聲。茅檐の下に東天光
(本ノマヽ)

桃林堂 〔蝶麿〕

以上が一丁の表裏、全十三行全幅にある。(最後の蝶磨の印は、文字白ヌキ)次に、左の目錄が一丁表裏に亘つてある。

目錄

とあつて、第三丁目より第一 利生有原の天神、第二 わけあるらく隱居、第三 濡て氣味よき雨宿の三篇が收められてゐる。繪は各篇ヒラキ一丁づゝ、計三圖。なる程、師宣か鳥居淸信かといふ所である。が恐らく鳥居庄兵衛(淸信)であらう。(同じく桃の林の作たる大福帳「元祿十年板」が、鳥居庄兵衛畫たることは、浮世草紙目錄にも、夙に明記されてゐる。)さてこの目錄は、全五卷の目錄である。各卷にいかに之を分つたか。明瞭であるのは、首卷と第五卷(自分所藏)のみである。即ち一より三までは第一卷。第十一と第十二とは前稿既載の如く第五卷所收の項である。即ち第四より第十までの各篇が、第二、第三、第四の三卷に分けられてゐることになる。

以下、「むらく坊」首卷の本文である。

第一、利生有原天神

[迚も全篇紹介は、遺憾ながら好色本の性質上不可能である事を諒せられたい。西鶴本以上に猥雜なる描寫が一篇の山となり居るからである。]

はじめの全文を、或る程度まで引いてみる。

『およそ二はしらの御神、むまし／＼の□□の□□□したゞりて、山有里あり。男有女あればにや、いろのたね代々にひろごり、春のとてうの花の上にやりくりし、秋の鹿の、笛にきゝほれてまよふ。こゝにむさしのかたはら、あさぢが原のほとりに、いまだ三十にたらぬ捨人有。もとはあかしやの八

とて、美男のほまれひろく、いみじき十間口の家持ちて、おやぢのゆづりがね、三くら四くら、皆好色のそめ代にして、あまつさへ悪瘡をひきうけ、後悔なき床に療治をつくしけるが、終に□□□もとよりおちて、から〳〵いのち斗なからへけり。しかれどもかのひと本の作藏にわかれては、世のまじはりゑきなし、これを卽菩提と無理發起して、落髮の身と成、むらく坊と名つき、あさぢが原に庵を結び、明くれば敲き鉦にさんさ節をまじへて、その年も秋の初なりし折から、隅田川に行きちがふゆさん船、琴三味線の音冴えたる、月のよすがにも、いとゞ昔のみ思ひ出し、一つの宿願を起し、業平天神へ詣で、祈念して曰く、なむやこうしよくせいべう、そのかみ雲上にいませる御時は、愛著和光の御影をかゞやかし、宮女戀慕の病をすくい、今あらたに諸わけの道をてらし給ふ。われ拙なき病に□□□□を落され、好色の世を後むくといへども、なほ愛著の念しばしもやむことなし。ねがはくはかの□□□□を再び與へ給ひ、げんぞくなさしめ給へと祈念を凝らし、御堂のかたはらに、暫しまどろみていたるに、有がたや天神、衣冠たゞしき御裝ひにて、頭三ッある美女に打のり給ひて、むらく坊がそばにより給ひ、」』〔以上原文のまゝ。但し假名をり〳〵漢字にかへたり。〕

　これで、むらく坊の生ひ立ち。羅切の原因、發起の經歷が分らう。一念發起して、明石屋の八がむらく坊となつたものゝ、いまだ煩惱截ちきれず、再び凡體に還さしめ給へと、好色道の神業平天神に祈念するのである。「陽物を作藏と稱した古文獻の一でもある。尙外骨氏の日本擬人名辭書中には、作藏を天和よ

り明和までの淫書に此語を多く使用せりといへり。」でこの文のアト、何うしたかといふに、業平天神いはく「汝、好色の世をすてぬるといへども、ふたゝびさい合のたねを祈るこそ不愍なれ。われ神通の眦を以て三界を見るに、」事が大げさである。三界を見るにと來た。さうして、以下の敍述は稍顰蹙すべきものである。卽ち概略をいふと、今の世は、孩兒より大人にいたるまですべて好色に耽り、六味八味の地黃丸、牛蒡卵の德を味はへ、若者といへども持ち料を粗略にするものなし。よりてさるに仍りて、汝に與ふべき□□なしといふのである。（以下原文のまゝ）「しかれども汝が念ぐわんを無にせんことも心うし。こゝに、我が寶物のひとつ、すきびたいの赤烏帽子有り。これを汝に與ふる也。この烏帽子かぶりなば、汝が姿を見る者あるべからず。これより山城の國へ赴きなば、汝に緣ふかき女あるべし。此女に逢ふならば、念願成就すべし。されば此の烏帽子をかぶりて、心に任せ、ぬれの家に忍びて、智計を見物し娛しむべしと、御手づから法師が頭へ烏帽子をひきかぶせ給ふとおぼえて、むらく打驚きかしらをさくりて見れば、朱塗にしたる左折の烏帽子に紫の紐を付けて與へ給ふ。さては念願叶ひたるよと、ありがたく思ひ、御堂を禮拜して、後に負ひたる風呂敷包の內より、一つの袋とり出し、太夫薄雲が黑髮、格子小わたに貰ひたる伽羅の香箱、並びに局若松が誓紙三枚、百造の三よしがおくせし□さうし、散茶初瀨が縫ひたる服紗に包み神前に献げて、三度禮拜し、赤烏帽子を背負ひて、急ぎ庵にかへりて、それより都へとこゝろざし、旅の用意する程こそあれ、先づ三里の灸五ッ火半、ひと

「好色むらく坊」と作者光隣

つある飯釜に、つぶれたる小薬罐、口の欠けたる擂鉢、かれこれとりあつめて、終路銀となし、あけむつの鐘もろとも、あさぢの庵をぞ立出ける。」といふのである。これで第一は終つてゐる。

【この間。天神祠内に、業平に對面の圖を挿めり。築地のうしろの竹むらなど、極めて雅致に富む。】

第二、わけ有らく隱居

「さるほどに夢樂坊は、都へと足をつまだつるに、けふははや駿河の府中に着きける。日もくれかゝりければ、かしこに宿を借りて、休みいたりけるが、此家の裏に家居つき〴〵しく、白壁付きたる土藏あまた立てならべ、からうす踏む男の、今めかしく、與作ぶしうたふもいとをかしく塀の透よりさし覗けば、隱居とおぼしくて、表屋にひき放れて、家造り美をつくし、庭には秋の草花、さま〴〵咲きみだれ、人おともせずいと靜なるてい、心床しく、赤烏帽子を眉深にかぶりて、ひそかにしのび入てみれば、南表の欄干に、紅の蒲團うちしき、とし比廿四五なる女、絲の髮、中より切りたるを、しどけなく結びて、白小袖に淺黄の一重帶して、脇息に凭れゐたる、顏天人の此土へ店換へしたるやと、築山のかげより、目もはなさず守りゐたるに、内より十六七の若衆座頭、三味せんを手にさげ、かの女の御傍へさぐり寄、今迄女房しゆに唄を望まれ、表に居りましてといふ〳〵、三味せん調べけるをかの女、いや三味せんは、後にきかう（下略）」（以上原文）

「むらく坊」首巻第二の挿繪

〔恰かもこゝに、後家と座頭、庭より見るむらく。此の圖ヒラキを挿む。〕で、むらく、赤烏帽子の有難味を發揮することになる。（中略）むらく、「ぬき足して、もとの宿に歸り、夜明けて馬借りし男に、かの家を尋ねければ、それこそ福田屋といふ米屋。三人目の亭主も去年の春□□して世を去りぬ。後家の齢は二十五ひのへむまの年。世にまたとない色好み。もはや夫の望なく、弟の介八に家を譲り、その身は裏に隱居を構へ、金ずくめの男狂ひ、氣に入りたる手代どもは、□□□□□□□、其上に家を買うて貰ひ、思はぬもとでを儲くること、幾人といふ數を知らず。さるによつて男よく、□□□□□□なるものは、馬方米搗によらず、俄

「むらく」の第三

かに家やしきを求めて、新店を出す事、みな此後家のなさけなりと語りし。」(以上原文）といふのである。むらく好色透見の第一の收穫といふものである。

第三、濡て氣味能雨宿

「秋の日短かしといへども、昨日十二里けふ□(原本蟲)十里、休む內に、日が暮れば、野にねる迄と無理をさめに行けば、戻り馬有り。むらく坊、これこそあれと思ひ、なるみ(鳴海)まで其馬貸せといへば、馬子幾らでといふもをかしく、しか〴〵値段して、やがて鞍壺にのり直れば、馬方競ひ面して追ふ程に、つゐ(ひ)鳴海の宿に着き、とある家に宿借りけるに、十七八の娘、茶をもち來り、御僧さまはまだお若うて、お一人旅、おいとしやと何となく、したるきしかけ□(原本蟲)。むらく心にくゝ思ひ、様子を問へば、亭主は聊かの用有りて、昨日京へ立たれまして、わたくしと妹を留守に殘し、屋內からげて上下四人、別に御氣遣ひなことは御ざりませぬ。かつてへ御座りまして、お茶をまゐりませなど、しどけなき口上に、やがて勝手へ通りける。されば妹も姉に劣らぬ品もの、みる目もあやに、名を問へば、姉はおしも、妹はおゆきと云ふに、天から降つたかと、見たも理と云へば、おしもうち笑ひ、私は十九、妹は十七、いまだ殿とやらも持たいで居りますと、尋ねぬことまで物語して、ゐたる所に、「御亭主、內にか」と

入り來るを見れば、これも旅裝束、はなやか成る笠とりたるを見るに、色白く鼻筋通り、年比二十斗の男なり。おしも出迎ひ、「どなた樣か」といへば、「わたくしは勢州松坂の者にて、杉山三之丞と申ます」といへば、おしも打うなづき、「いかにも御噂は、かねておやぢも申されまして、とゝ樣お心易い段は存じて居ります。幸ひ旅の御僧にもお宿いたしました。これへお通り」といふや否や、お茶の洗足の□(原本蟲)ことすみ、すでに盃はじまり、おしも□□(原本蟲)「われ／＼は、亭主むすめ、おしも。妹はおゆきと申します。とゝ樣留守にて候へども、われ／＼御馳走いたしませう。ゆる／＼と御休みあれかし」と、しか／＼のとり合。こと終りてむらく坊、もろとも打まじり、さしつさゝれつする程こそあれ、夜も更け過る比なりければ、おしも云ふやう、御くたびれあらむに、もはや御休みと、上の間に床をとらせ、兩人を休ませ、はらからの娘は、奥の閨に入りける。その夜は、雨つよく降り、いとさびしく、かまふだい(？)の仁兵衞は、年の氣やら、寸白起り二疊敷の部屋にいびきまじりの高呻り、飯焚とも乳母ともたゞひとりのお福は、わかしざましの酒にゑひ□□(原本蟲)、寢言いふやら齒ぎしりするやら前後知らぬ夜半に成りて、雨は一しほ強く降りて、もの音も聞えぬ程也。むらく坊は、宵の酒まだ醒めやらで、ねいらでゐたりしが、おしもが三之丞との目喰わせ、下心にくらしく、狸ね入りして聞きゐたるに、案の如くおしもは手燭とぼし、」(中略)「(このところに、おしも手燭を持ちて來かゝる圖を挿む。)」以下おしも三之丞の出會ひ。なほ三之丞がお雪が閨にいたる事。さて、「しのゝめの空明けわたりければ

（中略）むらく坊（略）起き出で、旅の仕度して、二人の娘三之丞にも、しば〳〵暇乞ひて、宿を出で、都へと急ぐ心の内にも、跡にのこりし三之丞がしあはせ、思ひやるにも、さりとは〳〵。

初　巻　終」　　（以上、序文とも全丁數十八。）

以上で、第一、第二、第三は終りを告げてゐる。第二巻より第四巻にいたる闕如が怨みである。背て第五巻の解說當時にも述べた如く、西鶴などに比べては遙かに劣る此の筆路、且つ着想。但し江戸板好色本の一種として、而も江戸板としては最初期に屬するもの。當時江戸人は、西鶴物の江戸再板物（一代男の江戸板行は貞享四年九月）等と共に、此の創作等をも耽讀したらう。從つて此の幼稚さ、間ぬけさ加減、西鶴に比べて更なる露骨さ加減が（洗錬されざるをいふ）當時の江戸人の文學心の具現であらうと見らるゝ所に、甚だ興味があり、此の點から此の闕本ながらも「むらく坊」の首尾二巻は、とんだめつけ物であらうと、自分密かに思ふのである。

○

次に以前に、發見した（氣付いた）ことであるが、序でであるから、こゝに附記しておかう。此の「むらく坊」は、「浮世榮華一代男」（國書刊行會。「江戸時代文藝資料」第五に所收。）の摸倣ならずやとてつきり惟はるゝことである。榮華一代男は、西鶴の一代男（「天和二年大阪初版。貞享四年江戸飜刻。」）の景氣に煽られて生れた類作、貞享年間（日本小說年表は貞享四年とす。）初名、好色四季咄として出でた。

「浮世榮華一代男」と「むらく」

後、元祿六年に、浮世榮華一代男と改題した。（同十一年には　好色堀忍記、正德三年には、浮世花鳥風月と改めた。）一代男を摸倣し乍らも、隱れ笠の趣向から一機軸を出してゐる作である。〔但しこの隱れ笠、隱れ簑の趣向は、古くから日本化した傳說であつたことは、謂ふまでもない。保元物語、爲朝鬼ケ島のくだりにも見え、梅園日記には、經律異相に、百喩經卷上にもいへる事を逑べたり。但し隱形帽と此等にあるを、隱簑、隱笠にかへたり云々というてゐる。〕その隱れ笠とこの「むらく」の隱れ烏帽子と、彼此相似たり、且つ榮華一代男も業平の祠に詣づとある點、「むらく」を榮華一代男の摸倣かといふのである。卽ち、一は元祿六年の再板。この「むらく」は元祿八年正月板。卽ち先蹤を彼なりと斷ずるは、「むらく」作者たる桃林堂も言句あるまい。左に、榮華一代男の冐頭を摘載してみよう。〔榮華一代男は、花、鳥、風、月四卷あり、各卷四章あり、卽ち全四卷十六章である。隱笠は、花の卷一の一、花笠は忍びの種の中にある。〕

「（前略）淺草寺に參詣ける。（中略）此の木蔭に昔男業平の面影を祉にこめおかれ、是陰陽の神とて、宮（色？）を好める人は殊更に祈りける。彼男此やしろに百日の大願、我一度び心に任する宮（色）道の榮華を授け給はれ、誰をさして戀の相手はなし。唯天道次第と骨髓抛つて願ひかけしに、此神も祈りつめられ、難儀のあまりに、夜更物の淋しく、松の風靜かなる時いたりて、枕がみに立せ給ひ、あらたなる御告、夢事にも忘れざりき。汝が身に應ぜざる願ひ叶ひ難し。前生にして滿更の戀知らず、此道にもとづける程なければ、神のまゝにもならざり。然れども己れ深く歎くも痛まし。是を與へぬるぞと、金銀珠玉をちりばめし花笠をわたし給ひ、己れに具はらぬ榮花なれば、耳に聞き目に見るより樂しみなしと御神託、覺めて

常の曙とはなりぬ。肝に銘じてあり難く、此笠を被ば、忽ち外よりは見えぬ印あつて、是なん世の重寶と嬉しく、隱れ笠の忍之介と我と名を改め、けふよりは願ひのまゝと勇みて、諸國の戀づくしを見る事聞く事、其身にはつかざる事のよしなや。」

以下上方へ上り、色々見聞きする事あつて、伏見のある比丘尼と物語、「あるじの比丘尼は、けふよりは男にあはじと大誓文にて身固め給へば、忍之介は隱れ笠を踏み破り、塵も埃も心にかゝる事もなく、二たび東武に歸り、年をかさねて後、金龍山の土佛に成りけるとや。」で終を告げてゐる。〔此の榮華一代男の再版、元祿六年正月、江戸萬屋、外大阪、京三都合版である。〕唯「むらく」が、上方にのぼり、既揭第五卷の如く、妹背の千人斬ありて、芽出度し〱の夫婦に終るとは、格段の差である。然し發端、並に、戀の見聞など頗る彼を倣ひたりと云ふべきであらうと思ふ。

桃隣は芭蕉門下

○

最後に、作者桃林堂についてである。前稿に於ても既に謂へるが如く、桃林堂蝶麿、桃林堂、桃の林、桃隣堂、桃隣(林)紫石は凡て同一人であると信じられるが、然らば桃林堂卽ち桃隣なりとすると、兹に臆斷とは強ちいへない私の發見がある。卽ち芭蕉の弟子の一人に、桃隣なるものゝあることである。卽ち元祿七閏五月三日の序ある「炭俵」の中に、〔この年十二月十二日、翁五十一にて歿。〕元祿十一年五月吉日の奥書ある「續猿簑」の中に、此の桃隣の名と、及び其の作句を發見するのである。卽ち芭蕉の桃靑に因んで、與へられた弟子の名と惟はれ、且つ本記述にも載せたる「むらく坊」の序が、頗る俳文めいてゐるのも一證左であり、且つ好色本目錄中の種彥の「江戸の俳諧師にして伊勢の產に

あらずや」にも頗る相吻合するからである。桃隣（桃林堂）の好色本試作が、此の「むらく坊」の元祿八年板、「大福帳」の元祿十年板など、此の元祿期中に行はれてゐる、それに一方炭俵、續猿蓑もまた元祿七より同十一年である。この間頗る相連絡ありと見たい。即ち桃隣彼は、芭蕉の江府に於ける門人にして、（伊勢の産なりを信ずると、芭蕉の出府以前よりの弟子かも知れない。）俳諧の座にも連り、傍ら當時流行の好色本をまねて、五六の創作があつた。西鶴の俳諧師出身なるに、自己も負けじとの張合心地があつたか、又は自然の相似か、とにかく、江戸の好色本作家として相當に名を有したと見るべきだらう。以上、唯この桃隣身もとのヒントだけに、今は姑らく止めておく。序でに炭俵、續猿蓑中の桃隣の句を拾ひ書きしておかう。

鶯の聲に起きゆく雀かな○晝舟に乘るや伏見の桃の花○聞くまでは二階に寐たり郭公○五日迄水すみかぬるあやめかな○五月雨の色や淀川大和川○宮城野の萩や夏より秋の花○紺菊も色に呼出す九日かな○市中や木の葉も落すふし颪○木枯の根にすがりつく檜皮かな

〔次に桃隣、野坡、利牛の三人の俳諧あり。野坡など丶並び立つところ、桃隣もまた有數の士たりしならん。此俳諧略く。尙、最後に、杉風、芭蕉、利牛、野坡、曾良等十三人一座の俳諧あり。中に桃隣四句をものせり。此の俳諧略く。〕〔以上炭俵〕○白桃や雫も落す水の色○菊の氣味ふかき境や藪の中〔以上續猿蓑〕

唯、炭俵と續猿蓑とのみに散見して、猿蓑其他になきは如何。或は、翁晩年の弟子と見るべきか。

（大正十三年七月）

西鶴に據るおさんの正體

「五人女」に典據

おさんと茂右衛門の破倫は、西鶴と大近松とによつて描かれてゐる。（但し近松は、茂右衛門を茂兵衛とする。）一は「好色五人女」、一は「大經師昔暦」であるが、西鶴の五人女の方が事實に近いことは、從來諸家の定論である。三田村鳶魚氏は、嘗て「大經師昔暦」なる章の下に、此のおさんの正體を解剖せられた。（「芝居の裏表」所收）然し三田村氏のは、大分歌祭文の「大きやうしおさん」や主としては大近松の淨瑠璃が混入してゐるのか、おさんの正體に於て、まだ／＼明らかならぬ點が多い。殊に不自然な點が多い。卽ち私は、今全部を西鶴の「五人女」ばかりに典據を求めて、それ以外はほんの參考として、此の「おさん」の正體を詮索してみよう。さうして、無論心ある讀者ありて、私の本著別揭の「大近松の破倫物」中の大近松のおさんと對照せらるれば、妙であると思ふ。

先づ、分り易く、本夫、姦婦、姦夫三者の履歴を、表別けにしてみよう。

本夫

本夫。　大經師。

○姓名、並に住所。共に不明。（西鶴には是に關する記述見當らず。）

○大經師の性格。「衆道女道を晝夜の分ちもなく、さま／＼遊興つき」た男。然るに、後に、愛妻おさんに姦

通逃亡せられ、近江で死んだといふ噂を眞にうけて、「中にもいたづらかたぎの女を持ち合はす男の身にして、是程情なき物はなし。おさん事も死にければ是非もなしと、……憎しといふ心にも偕を招きて亡き跡を弔ひける。」案外物の分つた、諦らめのよい男。流石若い時からの道樂ご、譯知り物知りと褒めてやりたい男。

○大經師の年齡。おさんとは大分隔たりがあつたらう。卽ち「年久しくやもめ住み」したといふからである。

姦婦　おさん。

○生家。「すみ所は室町通り。」おさんをして娘時分、「仕出し衣裳の物好み、當世女の只中、ひろい京にも又あるべからず」といはれる程贅を盡させ得た身分。職業は不明なれど、茂右衛門などを使ひ居たる町家なるべし。

○おさんの容貌。「浮名の立ちつゞき都の情の山を動かし、祇園會の月鉾かつらの眉をあらそひ、姿は清水の初櫻、いまだ咲きかゝる風情、口びるの美はしきは高尾の木末色の盛り」云々の美少女。大經師がこれを見染めて、「今朝から見盡くせし美女ども、是に蹴落されて、其名床しく尋ねけるに、室町のさる息女今小町」といはれた程。だから不倫を爲した頃は、美婦に性の眼ざめの魂も入つて、一倍爛漫たる妖艶たる花の如きであつたらう。

○おさんの性格。「いたづらものとは後に思ひ合せ侍り」といつてゐるが、おさん大經師に嫁いで、(嫁いだのは、十三か四と見られた見染め間もなく無論その年と類推する。)三年越し、初めは娘々してゐたが、次第に町女房らしくなつた。唯、平凡忠實な女房となつてゐた。卽ち「明暮世を渡る女の業を大事に、手づ

からべんが系に氣をつくし、するずるの女に手紬を織らせて、わが男の見よげに始末を本とし、竈も大くべさせず、小遣帳を筆まめに改ため、町人の家に有りたきはかやうの女ぞかし」と作者から褒められてゐる程、節儉家で利口で、さうして亭主を（前の「わが男」とは、無論亭主の事。）可愛がつた重寶な女房。卽ち性格は、惡からう筈はない。

姦夫

姦夫。　手代茂右衛門。

○出生、不詳。たゞその身の叔母が、丹波の柏原にゐる。おさん實家の手代として「年をかされて召使」はれてゐた。大經師の東國旅立ちの爲、留守を差配する爲「聟のかたへ遣は」された。容貌は普通だつたらう。

○茂右衛門の性格。「此男の正直頭は人まかせ、額ちいさく袖口五寸に足らず。髪置して此方編笠をかぶらず。ましてや脇差を拵へず、唯十露盤を枕に夢にも銀まうけの詮索ばかり」の男。情事には、案外初心で臆病らしかつた。

以上、三者の輪廓は、大凡以て判然したであらう。

次は、不倫を爲した前後、それから刑死に至る迄の徑路である。

結婚以後

大經師、おさんの結婚。見染められて間もなくの擧式。おさんは時に芳紀十四歳。（西鶴の記述は、一たいに年齡の記述なし。唯見染の記事中に、おさんを十三か十四とある。老けてゐる方を取つて十四とした。）

結婚後三年の經過。「花の夕月の曙、此の男外を詠めもやらずして、夫婦のかたらひ深く三年が程」

「實競色乃美名家見」の内　歌麿筆

とある通り、大經師君、戀女房を得て、すつかり耽溺を止め、商賣大事と稼いだらしい。それが爲の東國旅立ちでもある。おさんも何くれ、家の事にも働き、又、亭主をまじめに愛してもゐたらしい。

大經師の東國出立。「京に名殘を惜めど、身過程悲しきはなし」とある故、女房に名殘はあり乍ら、商賣大切とも心得ゐたのである。その出立は、出立して間もなくの記事に、「折節秋も夜嵐いたく冬の事思ひやりて」云々と茂右衛門の灸療治にかけてゐるから、秋の初めか中頃と見るべきであらう。

この時、おさん十六歲。

大經師の下女りん。茂右衛門に戀慕するのは、丁度この「折節秋も」の頃。それから、翌年へつゞく。

不倫敢行以後

不倫敢行年月日。その翌年（結婚から四年目）の五月十四日の夜。（此の日時は原作に記入あり。）おさん十七歲。

大經師宅に於ける、以後の密通。第二節「してやられた云々」の終りに、「乘りかゝつたる馬はあれど君を思へば夜每にかよひ、人の咎めもかへりみず、外なる事にやつしける」云々とあるによつて、此の五月十四日から、翌年春、石山詣まで大經師宅に於て不義が續けられたと見てよからう。石山詣、それから僞入水、出奔と來たのは、その翌年春頃に、東國の本夫から間もなく歸宅との知らせがあつたのではなからうか。この類推を正しとすると、大經師の東國逗留は一昨年の秋から此の春

出奔後

へかけて約一年半以上。卽ちおさんは本夫と別れてから密通まで（一昨年の秋から去年の五月へ）約八九ケ月、空閨のせゐもあつたらう。否寧ろ、密通は、此のせゐが主であつたらう。第一回は、悪戯から起つた過失にして、その後の續行が、どうしても此の性の惱みと首肯させる。それに、その第一回の當夜も、西鶴の筆は、憚る所あつてか、夢裡のやうに書いてゐるが、その實、醒であつたらう。おさんも情を通はしたことは、茂右衛門が、立退いて「りんが女心はあるまじきと思ひしに、我さきにいかなる人か物せし事ぞと恐ろしく、重ねてはいかな」と思ひ止まる事にしたといふ呟きでも分る。すぐそのあとで「よもや此事人に知れざる事あらじ。此の上は身をすて命かぎりに名を立て、茂右衛門と死出の旅路の道づれとなほ止め難く心底申きかせければ」といふおさんによつて、愈々おさんの本能性が俄かに擡げたといふ事が分る。「名を立て」ようとは、一體どういふ名か。性欲の復活を得て、すつかり死に物狂ひになつてゐる。おさんの此の町女房から姦婦への早變りも、元來「性」を根本に置けば、容易に了解される。此の事おさん十七歳の五月から十八歳の春。此の約一年かゝつておさんは、せつせと「金子五百兩」の軍用金を拵へたのであらう。

石山詣と僞入水。「東山の櫻はすて物になして、行くも歸るも是や此の關越えて」とか、「花は命にたとへていつ散るべきも定め難し」とあれば、無論春。卽ちおさんの十八歳。結婚後から數へると五年目。

姦夫姦婦の交情。大經師宅に於ての繼續でも分るが、石山詣をすまして、「勢田より手繰り船を借りて、長橋の頼みをかけても、短かきは我々が樂しみと、浪は枕の床の山、現はるゝまでの亂髮」というてゐるのを見ても分る。從つて丹波越の有名なおさんの臺詞の如き當り前の事である。こゝを見ても西鶴といふ男の、道義を超越して、唯、赤裸々な男と女とを描破した作者だといふ事が斷言出來る。大近松と如何の相違であらう。

丹波越の苦しみ。おさんの有名な「命にかへての男ぢやもの」と叫ばしめた此の丹波路のおさん、「脈も沈みて今に極ま」つた苦しみは、僞入水の間もなく、同年晩春三月末のことか。おさん同じく、十八歳。それにしても、此のあたり、丹波越の二人の生き死にの艱苦は、名文である。しかも、何處までも生きようといふ二人の要求が熾烈に描き出されてゐる。おさんも二人で生きようと思へばこそ、「道なきかたの草分衣、」「生き乍ら死んだ分にも」なり、また柏原へ辿り着いて、すぐ逃げ出したその晩の喜劇や、後に切戸文珠の示現に答へるおさんの熱ある言葉もあるといふものだ。茂右衞門だつて、旣に滿更ではなかつたらう。

切戸文珠の示現。「末々は何にならうと構はつしやるな。こちや是が好にて身に替へての膓心。文珠樣は衆道ばかりの御合點。女道は曾て知しめさるまじ」とおさんが夢で啖呵を切つたのは、丹波路の皐月、四月頃のことであらう。おさん、十八歳。

切戸に潜伏以後

切戸附近の潜伏。これは、後に栗商人が、大經師へ來ての噂に「切戸邊にありけるよ」とあるから確實だ。この潜伏は、同年の同月、即ち前にすぐ引きつゞいての後であらう。

茂右衛門の京の事情探索。その年の秋、七月十七日の事か。本文に「十七夜代待の通りしに、十二灯を包みて、我が身の事末々知れぬやうにと祈りける」とある。七月とは類推である。因みに、十七夜代待とは何か。「代祭。(ふたみまさこ) 町々をすゝめて通る代まち (俚言集覽)」「物を與ふる人に代りて神佛を祭る一種の乞兒」(國語辭典)とあるが、十七夜が分らない。「守貞漫稿」上に、庚申の代待の記事がある。これに據ると、京は八坂詣りだが、丁度此の十七夜が、庚申前後に當つてゐたのか。ところが「其身の横しま、あたご様も何として」と續けた本文では、愛宕詣のやうでもある。とに角、前後の關係から、七月と類推した。(此のあたり、西鶴本文の、劇場で大經師を見つけて、蒼くなつて逃げた事や、我が身の事末々知れぬやうに祈つたとある所など、茂右衛門の小心で然しおさんに溺れていつた氣持がよく現れてゐる。然しこれは主題ではない。)

逮捕と處刑

發覺の端緒。(栗商人の噂)「菊の節句近づきて毎年丹波より」栗商人が來たとあるから、後の月間近の九月はじめ頃か。即ち私の類推に依ると、おさん達の切戸潜伏期間、四月より約六ケ月。

逮捕。九月はじめ。こゝは、三田村氏の引いた春雜生の「享保以前迄密夫御仕置之振合町代書留」の八月九日に始めて調べをうけたといふのと約一ケ月相違する。

處刑。その年の九月二十二日。逮捕から約二十日。西鶴の記文は、九月二十二日であるが、春羅生の記事に依ると、同二十三日とあつて一日の相違。時間は、西鶴に「曙の夢さら〳〵最後卑しからず世語りとはなりぬ」とある。おさんの年齢、時に十八歳。丁度此の類推は、「都の富士、廿にも足らずしてやがて消ゆべき雪ならば」と近江僞入水の前の記述にも當て箝るからである。然るに三田村氏は、大近松の方の十九歳説を採られてゐる。十八が十九でも一歳の違ひだ。これは構はぬ。（一説では、「貞享二年五月、獄舍の上、追放」だといふ。因みに西鶴の「五人女」は、その翌三年の板行。）

茂右衞門の刑死年齢。これは、私も大近松の中にもある二十五歳に賛成である。それは、彼が柏原の姨の家で、姨に、おさんを「これはわたくしの妹」と云ひ拵へた點から考へて、茂右衞門とおさんとの年齢の距離は、七八歳のものはあらうといふのである。即ち茂右衞門の姨（叔母）は、茂右衞門が辨への付いた七歳位の頃に別れたきりで、その以後逢はなかつた。從つて妹と胡麻化し得たと見ての話である。何となれば、姨はおさんを全く何者とも見知らなかつたからである。然るにおさんは十八歳であつた類推がある。よりて私も彼を二十五歳とした。

以上、私は、無論西鶴の記述に、大近松や歌祭文よりも比較的眞實が多くとり入れられてあらうといふ前提から、此のやうな長々しい解説を試みたのである。特に三田村氏説に感服しないことは、氏

が「十九になる少婦が三月の間に二度の新枕」(芝居の裏表二九頁)といはれたり、「從つて花嫁は三月經たぬに此始末、なんの事ぢやと云はねばなるまい」といふ論斷である。たとひ此等が大近松の淨瑠璃から根ざしてゐるにもせよ、私には荒唐無稽、あまりにおさんの肉的經過を無視した言葉であると、以前から不平であつたからである。即ち私自身比較的眞實味ありと思ふ「五人女」から論據して、竹篦返しを試みたのである。其他密會から刑死に至る年月も、三田村氏のと、此の小生のとは大に異ふ。

性の眼ざめ

私の論斷は、西鶴を幾分敷衍し、これを系統立てたに過ぎぬが、要は、十四で結婚した早熟した、利口な節儉な縹緻よしの町女房が、結婚後三年、十六歲時分には夙うにあつた性の眼ざめから、その了得。たうとう本夫の不在に堪へかねて、無意識の接觸慾から起つた惡戲が、とんだ事になりかゝり、(その瞬間は、私は、おさんは眼ざめてゐたと思うてゐる。眼ざめたが、性の誘惑にたうたう凡てを遺れたのだと思つてゐる。無論半ば以後は合意の事と思ふ。)それから毒喰はゞ皿までと、かれこれ一年の折々の逢曳。たうとう本夫の歸宅を聞いて逃げ出し、その年の秋處刑。即ち不義から約一年四ケ月を續行のまゝ生きてゐた。根本は、市井ざらにある性の悲劇。美婦だつたから問題に上つたのだと思うてゐる。

「五人女」三の梗概

以上で、私の記述は暫らく絕つが、最後に西鶴の五人女を悉しく知られぬ方々の爲に、「五人女」の中、巻三だけの梗概を左に示しておかう。

「大經師某は、おさんといふ美女を妻に迎へた。おさんはまだ若い娘であつたが、年の違つた夫によく仕へた。三年目の秋夫の大經師は所用あつて東に赴く。おさんの實家で長年召使つた實體の茂右衛門といふのに一切を托しておいた。して見れば茂右衛門は相當に才覺の切れた男らしい。その留守宅に事件が突發した。おさんの使つてゐる女中のおりんが臨時手傳ひに來てゐる茂右衛門に懸想して、おさんに文の代書を賴んだ。茂右衛門は初めはおりんを馬鹿にしてゐたが、おさん代筆の文言に絆されて、茂右衛門もその氣になつた。到頭或る夜を約するやうになつた。その晩が、五月十四日の晩。(大經師が旅立つてから、半年以上經過してゐた。)おさんは座興にとて、その晩おりんの身代りになつてその部屋に寢てゐた。茂右衛門が忍んで來たら、アッと驚かし、奉公人達も出會つて笑はうといふ計畫であつた。然しおさんは何時となく寢てしまつた。茂右衛門はその熟睡中に來た。奉公人達も待ち疲れて眠つて了つた。おさんは眼覺めて罪の遂行を知つた。それからまゝよと時々密會をつゞけた。翌年春、急に石山詣にかこつけて五百兩を挾箱に入れて、家を出た。花の散る頃琵琶湖で漁師に賴んで二人入水と見せかけ、その實丹波へ越えた。柏原で茂右衛門の姨を使つたが、姨の息子の岩飛是太郎と結婚せねばならぬ破目になり、その晩逃げ出した。さうして丹後の切戸邊に匿れてゐたが、毎年京に來る栗商人が、大經師の店先で、うかと「こゝのお主婦さんによう似た人が切戸邊にゐる」と口走つた許りに事露はれて捕はれ、その年の九月遂に粟田口刑場の露と消えた。」

――大正十二年三月――

大近松の破倫物

大近松の戯曲に現はれた破倫事件は三種ある。大經師昔暦（改め戀八卦柱暦）（寶永三年九月二十一日初日）と、堀川波の鼓（寶永四年二月十五日初日）と、槍の權三重帷子（享保二年八月二十二日初日）とである。各曲中の主要人物を擧げると、『昔暦』では、本夫京の大經師以春。姦婦おさん。姦夫手代の茂兵衞。『波の鼓』では、本夫因幡の家中小倉彥九郎。姦婦お種。姦夫京堀川鼓の師匠宮地源右衞門。『重帷子』では、本夫中國の藩淺香市之進。姦婦おさゐ。姦夫同家中笹野權三である。

『おさんは實家の窮乏を救ふ爲、茂兵衞の實體で親切なのを見込んで金策を賴み入れる。茂兵衞は一時逃れに以春の印を盜用する。以春に見付かり詮議の破目、茂兵衞に兼々心を寄せてゐた下女のお玉が我が身の事に云開く。その夜、おさんは舊の厚意を謝すべくお玉の閨に行き、以春が彼女を每夜挑むと聞き、お玉に代りて臥す。茂兵衞もお玉の舊の云開きを嬉しんで、情を交す心になり、同じくお玉の寢間へ來る。そこで二人の不覺が生れる。逃亡後、丹波で召捕られたが、黑谷の上人の手で助命となる。』（昔暦）

『源右衞門は、お種の養子文六の鼓の師匠。お種、夜に入つて酒肴を出し欵待する。お種は酒好み、

次第に座が體を紊して行つた。所へお種に横戀慕の磯邊床右衞門が挑みに來る。お種困り果てゝ歎き歸す。それを源右に口留めさせうと、誓(ちかひ)の盃のやり取りが嵩じて、つひ正體もない不義の途行。床右衞門に現場を見付けられ證據の袖を取られる。源右は京へ逃げる。京には妻子がゐた。お種はいつか身重になつた。四月目、本夫彦九郎歸國の日、罪發覺し、お種は自殺する。やがて彦九一族、京の堀川で源右を討つ。』（波の鼓）

『おさゐは悋氣深い性。姉娘お菊の婿にといふ口約束と取かへに、權三に茶道の奧義を或る夜許さうとする。端なく權三に他の婦（おさゐに戀慕の侍川端伴之丞の妹深雪）ありと知つて、權三の締めた帶を誰が縫うた、遣(や)つたと飛びかゝり、無理やり解いて庭に棄てる。代りにこれなと締めよと我身のを解く。權三もその悋氣に呆れて、要らぬと庭へ投棄てる。それを伴之丞が拾つて不義者と喚(わめ)く。二人の逃亡。伏見の渡場で市之進らに諸共討たれる。』（重帷子）

特筆すべきことは、彼女等の全部が事前の相思から來たものは一人もないことである。まだおさゐだけは「しんとろとろり」と權三に惘惚した事は一度や二度はあつたらう。お菊に對しても「其方(そなた)が嫌なら母が男に持つぞや」と戯談にも言うてゐる位。「我身が連添ふ心にて吟味に吟味」した婿だとも。數寄屋で悋氣を起した折にも、「不承乍ら此帶締めなされ。一念の蛇となつて腰に卷付き離れぬ。」などと喚(わめ)いてゐる。おさんは茂兵衞を唯實體な男よと幾分か好いてはゐたらしい。お種はてんで源右

に愛憎はなかつた。從つて三者の破倫は、意外な過失や偶然事に動機してゐる。

注意することは彼女等をして此の災厄に罹らしめる爲に大いなる力を爲した敵役が全部ある事である。おさんには平素から横戀慕の手代助右衛門があつた。彼が茂兵衛の印盜用を以春に告げた。お種には床右衛門がある。おさゐには伴之丞がある。近松は此等の惡を使用して、三女性に對する破倫詰責の聲を緩和しようとした。用意狡智なりと謂ふべしだ。三女性性格上の缺陷には、おさんは咎むべき事殆ど無い。おさゐは、稍平素の岡惚と悋氣深さとに於て彼女の罪がある。況して彼女は自己の悋氣深さを自ら認めてゐる。(權三に無理押しつけにした自分の娘菊のことをいふ時に、『妾に似たらば、定めて悋氣深からう』云々というてゐる。)然るにお種には貞淑を外した酒好みと不謹愼の言葉を弄した事とから、彼女自身より多くの罪がある。然し心付かれる事は、三女性凡てが、個々の性癖よりも、寧ろ孤棲の境遇のせゐのやうに、女人憫むべしと看過したいやうに描かれてゐる事である。(「昔暦」では、おさんは孤棲ではない。然し夫の以春は女中のお玉に夜這つてゐた。)お種斗りは偶然とも云切れない。自ら先んじて源右に挑んだだけ、彼女は自及する丈の責はある。不義者と決つた時に於て、まだ其實が無かつたのはおさゐ。有つたのは他の二女。(但し此の中、お種は承知してかゝり、おさんは過失。)

遂行後、三女性に何れ程の自責懺悔の念が起つたらうか。最も苦しんだのは、「波の鼓」のお種であ

一回の罪で懐胎

る。その夜もお種はふつと眼を覺し「我夫(つま)ならで一生に覺えぬ男の肌觸れて……………女の罪の第一にて未來は愚か此の世の耻」と嘆き、たつた一回の罪から懐胎し、四月目、知らせた妹へ「好みし酒も今思へば前世の業の毒の酒、無明の酒の醉さめて自害せんと思ひしが、夫の顏を今一度見たい〳〵と思ふより」生きてゐると嘆き、(偶々墮胎を試みたことが、後に下女の口から洩れた。)夫彦九郎歸國の日「是は我が身の言譯なり免して下され是御覽ぜ」と、胸押開けば、九寸五分膽先に切羽(せつぱ)まで刺貫してゐた。お種は死ぬ迄、夫に愛慕した。律義な侍の生活と、中年女の成熟した體。初めに彼女は、「隔年の江戶詰。お國にゐては每日のお城詰、月に十日の宿直番」たるを嘆き、鬱さを酒に遣つてゐると告白した。弟文六を養子にして子もない彼女、思へば可哀想、人間と道義との枷に縛られた犧牲だ。況して彼等夫妻は、「樣子ある夫婦」といふから、町人ならば人も羨む鴛鴦の仲の筈だ。

平凡な京女

「昔暦」のおさんは、元來平凡な京女。それ丈「互ひの心耻づかしく、顏打あげて顏と顏見合せ、顏をあからめては涙の外に詞なし。」町人の女房といふだけである。

偉大な娼婦

端倪すべからざるものは、おさゐである。彼女は善良なる母婦の半面を夙に有してゐた。と同時に、悋氣深さの人後に落ちざる點に於てまた偉大なる娼婦であつた。「涙も袖に落次第。ヱヽ思案する程嫉ましい。(略)我身が連添ふ心にて吟味に吟味、思ひ込うだ稀男なればこそ大事の娘に添はするもの、悋氣せずに置かうか。(略)えゝ恨めしい腹だゝや。(略)悋氣も因果か病か。…………我男を手放して

海山隔てゝ能う置くぞ。能々お主は怖いもの　皆心の氣隨から、姑が聟（權三をいふ）の悋氣とは惡名の種、さらりと思ひ忘れうと拂へども猶胸焦す」とある態は何うだ。よく云へば娘を思ふ熱情火の如し。惡くいへば、年少の美男に焦るゝ娼樓の婦だ。それも「我身が連れ添ふ心で」撰んだ權三故だ。凡ての禍因は此にある。興奮の塊、或は東の夫を慕ひ殿を怨み、轉じて直下の問題たる權三に及ぶ。彼女は、實家の母に對して孝行者。娘や忰に對しても「妾は娘もたんと持つ。嫁入の時の諸道具を一色も散さず、子供躾ける便に、小身の我が夫に餘り苦を」かけない利口者。その女が、墮落。然し巢林子の筆は、三破倫曲中、此のおさゐに作者の氣魄集るかと思ふ程、精到爛熟、おさゐの複雜なる面目躍如たるものがある。人間的といへば、おさゐこそ最も人間的、女性の執拗さと可憐さとを具現した唯一人であらう。

おさゐの、當夜、伴之丞に發見されてからの權三に對する口說、惡くいへば自家辯護が面白い。彼女は妙な言を吐いて、道心に安心を與へた。「生きても死んでも廢つた身、東に御座る市之進殿、女房を盜まれたと後指を指されては御奉公は愚か………………唯今二人が不義者に成極めて市之進殿に討たれて男の一分立てゝ」と頼むのだ。權三は「死後に名を雪げばいゝ。間男に成極まるは口惜しい」といふ。それを「跡に我々名を清めては市之進は女敵を討過り、二度の恥といふもの。不肖乍ら今此處で女房ぢや夫ぢやと言うて」くれといふ。頭の惡い時には分らぬやうな大分な理窟。それから到頭、本

おさゐは熔鑛爐

當に成極まつて了ふ。下之卷のはじめは、名文。極めて色つぽい。「淺香の水の濡れ初めに笹野の露と置き惑つ」たり、「十二違ひ（おさゐ三十七、權三二十五）の月更けて姉ともいはゞ岩枕、代す枕」があつたりする。いやはやだ。

おさゐは熔鑛爐のやうな女。馬觸るれば馬を愛し、人觸るれば人を愛すの概があつたといふべきか。

姦夫の性格其他に就き、餘談なほ一回。（大正十一年十月）

配在人物

大近松の三破綻曲を讀んでゐると、誰しも氣の付くことは、姦夫姦婦以外他の配在人物の關係が、三曲殆ど同一揆であることにであらう。試に表解を以て示したら、左の如くである。

（昔　暦）	（波の鼓）	（重帷子）
お玉――→茂兵衛		妹深雪――→權三
助右衛門――→おさん	床右衛門――→お種	伴之丞――→おさゐ
おさん←――→茂兵衛	お種――→源右衛門	おさゐ――→權三

昔暦と重帷子とは三系を爲してゐるが、特り波の鼓だけは二系である。之に若し本夫と姦婦との關係が加はれば、併せて四系若しくは三系である。世上普通の破綻は、姦婦姦夫と姦婦本夫との二系に過ぎぬ。一系若しくは二系を增してゐるだけ、戲曲であり又脚色の妙――寧ろ技巧茲に在りと謂ふべ

横戀慕の敵役

ぎか。之に依つて想ひ起されるのは、私の淺い智識では、かのシユニツツレルであつたと思ふ「リング」といふ短篇や、江戸末期讀和の一たる實名梅亭金鵞作の「春情花朧夜」などである。姦夫にまゐつてゐる女中（昔暦）や敵役の妹（重帷子）を使つたり、三戯曲全部姦婦に横戀慕の敵役を配し、細流朝する處此の大江といふ體で、姦婦姦夫の結合に終つてゐる。芝居といへば芝居だが、また人事の不可思議、宛轉なることを示して餘りある。しかも不倫の最大楔子、動機たるものは、夫々三敵役のお蔭たるに於てをや。人形なればいゝものの、生きた役者であつたらば、嫌な役廻りであらう。

三姦夫の器量

先づ、三姦婦の、容貌器量の美醜上下から、品騭を始めよう。

「昔暦」の中の茂兵衛は、さしたる印象も我等に殘らぬ。唯だ下女のお玉の「手代衆の内でも、茂兵衛どのの様な、かりそめに物言ひも、あいそらしうていつ腹立顏も見せず。ほんにあの様な男持つ女は果報」というたのを無條件に受入れても、のつぺりした京男の唯だ實體が取り得の——餘り意氣地もなささうな、手代の顏より映らぬ。その夜、玉とばかり思ひ込んで夜這ふにも、次の茶の間に玉が寢る。疊はいづく摺足の屛風にはたと行當つて、喫驚したる膝ぶるひ」より他の藝はない。極めて密男には不似合である。宜なり全篇殆ど彼の印象はない。

「波の鼓」の源右衛門もさしたる印象はない。彼は唯だ据膳の箸を撮んだばかりだ。何とかは男の耻と單に考へたに過ぎなかららう。破倫に、前後一回、當夜のみであつたらう。其後、お種の處へ寄り附

いたげに書かれて居らぬ）されぱその一回が懷胎したとも、況してその一回の取食から自分の首が落ちようとは、夢更考へてゐなかつたらう。他の二姦夫の獨身とは事異り、源右には女房があつた。分別者の頂上である筈である。それが此の有樣。以て當夜のお種が如何に酒のせゐとはいへ、艶姿、嬌態のある限りを盡したかが知れよう。分別者の年輩の彼が、殊に當夜破倫を即行するに於て、餘程の誘惑があつた筈だ。作者は、一も源右の心理に觸れて居らぬ。唯、据膳食つて、さあといふ女敵討のドタン場に逃げ廻る卑怯者とよりしか書いてない。

變態性慾の犧牲

重帷子と三本鑓

「槍權三」の權三は、おさゐの妖婦的半面、變態性慾の可憐な犧牲のやうに書かれてゐる。彼の容貌は絶倫である。その容貌が凡てに仇となり、彼の手練の槍術もむざ／＼伏見橋上の露と消える。容貌から器量から少壯武士の典型、それがおさゐの爲に蹂躪される。然し西澤一風の「亂脛三本鑓」には、全く此とは正反對。おさゐ結婚以前に、一度おさゐから持ちかけ、危ない首尾。おさゐ結婚後そのすました奧樣ぶりが癪に障り、今度は權三から挑む。遂ひこゝに破倫の構成と、極めて人間的に、凡庸情痴の展開として描かれてゐる。「三本鑓」は、享保二年作、大近松より以後ではあるが、恐らく此が事實に近からうと思ふ。（「三本鑓」より以前、大近松の戲曲より先に、「女敵高麗茶碗」、同時に「雲州松江鱸」が實錄物として出でゝゐる。高麗茶碗は、大近松の作と似、松江鱸は三本鑓と趣向相似てゐる。人は、年次の早きを以て、高麗茶碗を以て實說に近しとすれど、自分は却つてそれだけ事實を

想像若しくは曲庇はせずやと思ふ。即ちその複雑なる筋がである。然よりも、平凡なる一娼婦一姦夫として描ける松江鱸、及びこれを更に繼承して、傍ら高麗茶碗を參照せる三本鑓を以て、實錄味も多からうといふのである。さうとすれば、寧ろ權三の方が姦夫の性格者として最も遺憾ない。一風はおさゐを平凡化し、大近松は權三を平凡化して了つてゐる。

姦婦姦夫二組死んで、一組(昔暦)助かる。こゝにも大近松の技巧を視るべきであらう。

——大正十一年十一月——

以上では、まだ何だか喰足りないが、姑らく右の儘にしておく。唯、序でに、大近松の三破倫物の中、波の鼓と重帷子とに對照すべき、これと同一題材を取扱つた實錄物の性質を有する浮世草紙について、その外題だけを示しておかう、すでに諸書に説かれてゐることではあるが、比較の便を惟ひてゞある。

「波の鼓」と同題材の物

〔堀川波の鼓〕と同題材のもの。

1. 熊谷女編笠　五卷　寶永三年初秋末の五日　(作者)錦文流〔帝國文庫「珍本全集」上所收〕
2. 京縫鎖帷子　四卷　寶永三年仲秋板行　(作者)森本東烏〔徳川文藝類聚第一所收〕

「重帷子」と同題材の物

〔槍の權三重帷子〕と同題材のもの。

1. 女敵高麗茶碗　三卷　享保二年七月二十一日の序〔此の事件後僅か四日目也〕　(作者)不詳〔徳川文藝類聚第一所收〕

「重帷子」「三本鑓」兩者に對する錯誤

2. 雲州松江の鱸　三卷　不　詳　（作者）不　詳　〔同所收〕

3. 亂　脛　三　本　鑓　六卷（他二篇と合輯）　享保三年　（作者）西澤一風　〔近世文藝叢書第四所收〕

以上の中、特に言つておかねばならぬのは、近松が重帷子は、亂脛より藉りたといふ從來の說である。この說どういふことか未だに間々行はれてゐるが、（現に、高須芳次郎氏著の「日本近世文學十二講」の中にも、その二二五頁に、亂脛などが、近松の純化を經て「重帷子」となつたと書かれてゐる。）これは、「近松の研究」中の、（その十五頁）青々園曰くの

「……………「亂萩三本槍」最も古く、近松が材源は、大方是ならんと、或老人は曰へりき。同書は……………原本を見し事なし。」

とあるなどをその儘受け入れてゐるのではなからうか。成程、此の青々園氏曰くの、明治三十年前後は、この亂脛の所見もなかつたであらうが、今日では、前掲の如く複刻もされて、その享保三年板行であることは、周知の事であるのに、どうして未だにかゝる謬があるのか。卽ち亂脛こそ近松にヒントを得た（とは、自分は思はぬが）とか、又は刺戟されたとでも謂はゞ謂ひ得られるのである。卽ち近松の「重帷子」は、享保二年八月二十二日、亂脛は享保三年である。後の物を、前の物が純化した、或は材料にしたとは錯誤も甚しいのである。恐らく近松は、重帷子を、何物よりもヒントを得る

ことなく、巷談を直接材料にし、高麗茶碗の四日後なるに比べて、重帷子の一月餘後では其間多少出時の前後があるが、とにかく殆ど同時に生れ、巷談、偶々市井の一事實が、一は浮世草紙の高麗茶碗となり一は重帷子となつたのであることは、無論であらう。以上。

尙、自分の「大近松の破倫物」は、先人の感化、又は啓示なく、全く原文に親炙して、直接自分の産んだものである。然るに此の稿發表後、多年索めてゐた「近松の研究」（明治三十三年發行）を其後他から讓り受けて早速一讀すると、その一二八頁に、故抱月氏が自分の成したと殆ど同樣な、三破倫物について、本夫姦婦姦夫の關係を表示してゐられるあるのを見て驚いた。全く一より起つた二と三の暗合、類似である。尙、自分のもつと云ひたいと思ふことを、同書の諸處にすでに說かれてゐないでもない。とにかく自分は自分として、獨自のものであつたことを云ひ添へておく。

――大正十三年六月補――

半二の『心中紙屋治兵衛』

近松半二の「心中紙屋治兵衛」と大近松の「天網島」との比較、延いては却つて人に知られてゐない「心中紙屋治兵衛」の硬化した、詩から散文と變じた、半二の機本位の通俗寫實主義の本體を明らかにして見ようと思ふ。大近松を聖、出雲を亞聖とし、半二を大賢といふことは成程巧く云ひ叶へたものだ。竹本劇が未だに所謂新舊歌舞伎の大部分を占め、或はその追隨者の多くを有してゐることから思ふと、殊にその竹本劇の大成、その發達の素地を築いたのは、大近松ならず、出雲ならず、半二であることを思ふと、彼半二の大賢主義また偉なるかなと謂ひたい。門左も中々操を顧慮した、興味中心の爲に腐心する所が多かつた。然し私から謂はしめると彼は矢張叙情詩人であつた。叙事よりも叙情味に於て勝つてゐた。半二は、全くその反對、純然たる叙事本位、散文家であつた。大近松は悲戀詩を歌ひ、半二は面白い操芝居の作に唯專念した。出雲は丁度その中間の峠のやうなものであつた。

同じやうな題材でも「天の網島」と「心中紙屋治兵衛」とを比較すると、我等は、その懸隔の甚しいのに呆れる。勿論操人形の發達を影響に受けた點もあらうが、半二のは純然たる劇であり、門左のは未だ詩、情感本位である。今、私は「天の網島」と「心中紙屋治兵衛」とを比較し、その荒筋の相

違を述べ、内容用意の差を述べて、以て私の言を如何に此等が雄辯に語り居れるかを示さう。

「天の網島」の追隨、摸倣作は、半二作の前にもあり、後にもある。卽ち

天の網島(門左)享保五年十二月六日。竹本座 ○双扇長柄松(並木永助、豐竹上野)寶曆五年七月七日。豐竹座 ○中元噂掛鯛(三好松洛、竹本嘉藏)明和六年七月 阿彌陀池東芝居 ○心中紙屋治兵衛(近松半二、竹田文吉)安永七年四月廿一日 北新地芝居 ○天網島時雨炬燵(半二?)不詳

である。今日、一般に知られてゐるものは、刊本に於て天の網島と、劇並びに素語りに於て普及されてゐるものは、時雨炬燵である。「時雨炬燵」は、半二の作といはれてゐるが、此の「心中紙屋治兵衛」と別物である。恐らく半二が在世中にこの「紙屋治兵衛」を更に增補修正したか、或はその衣鉢を嗣いだ者たちの增補改題ではなからうか。(若し半二の作とすると、此の「紙屋」の安永七年以後天明三年迄、六年間の何れかに於ける作である。何となれば彼は、天明三、五十九歲で歿したから。)「炬燵」は我等五行本の紙治内に於て知る限りは、頗るこの紙屋治兵衛よりも更に劇化、不純化である。炬燵には、末段、太兵衛善六の拔刀、治兵衛之を殺傷の形式となるが、この「紙屋」には、危くそれを堪へてゐる。其他おさんの出家、舅五左衛門の苦衷など、末節に於て、その精神に於て、歌舞伎化と通俗映畫劇化位ゐの差はあらう　悉しくは時雨炬燵の丸本を手に入れた上で、此の論の補正をしようと思ふ。で、今は、唯、世上流布の「天の網島」と、比較的純正さに踏み止まれる「紙屋」との此の兩者の比較にの

「天の網島」上と「紙屋」茶屋

み終らうと思ふ。

先づ仕組の相違をいふと、

天の網島

上の巻（河内屋）
中の巻（紙治内）
下の巻（大和屋外）
附名殘の橋盡し

心中紙屋治兵衛

上の巻｛浮瀬の段／茶屋の段｝
下の巻｛長町の段／紙屋の段｝

の通りで、「天の網島」の骨子たる上と中とは、「紙屋」の上の下と下の下とに殆どその全鱗を受け入れてゐる。隨而「紙屋」の浮瀬の段と、長町の段とは、全くの新作である。全くの新作の此の二段は後廻しとして、共通の二段（上の巻と茶屋の段。中の巻と紙屋の段）に就て、大近松のを受入れながらも、「紙屋」が如何に詩より散文化に腐心（或は安易に）して成したかを説明してみよう。

先づ上の巻（天の網島）と茶屋（紙屋）との部分的の目星しい差（寧ろ半二の修正の跡）を檢索してみよう。大近松の上の巻の最初の童謠は、「紙屋」には一切省略されてある。直ちに「よねが情（なさけ）」を

持ち出してゐる。恐らく此の童謡は、半二在世當時には廢れきつたもので、その意味すら捕捉し得られなかつたのであらう。「よねが情」以下、大近松本に殆どそのまゝである。唯、大近松の「納屋は歌」とあるのを「時花歌」と變へてゐる。大近松本の「仲居のきよが是を見て」以下「女景清」云々迄は、「紙屋」一本は、すぐに「橋の名さへも梅さくら」へ飛んでゐる。此等も、半二の通俗本位を心掛けた結果の斧正と見られよう。「橋の名さへも」以下殆ど大近松そつくりだ。大近松の「行きちがふよね」が「往來ふ」に變つた位ゐ。但しその下のよねと小春の對話に於て、大近松本のよねの言葉「互ひに一座も打絶え」云々が半二本には無く、「氣色が惡いか」云々に直ちにかけてある。唯こゝらあたりの二者の對照で旣に肯づけることは、大近松本は、對話でも言葉尻が齒切れよくぽつりと切つてある。（例へば「やつれさんした」）然るに半二本は、甘く引張つてゐる。（例へば「やつれさんしたのふ」）其他は殆んど大近松本をそのまゝ踏襲してをり、大近松の「侍衆」が半二では「侍客」と明らかに指定してゐる位ゐである。大近松本の「なまいだ坊主が」云々の十數行は、例によりて半二本は之を省略してゐる。直ちに、小春をして河庄に逃げ込ましてゐる。此らも、半二の筋を運ぶに急、大近松のそれとは違つた、文辭の才を見せた低徊主義との差が見られる。したがつて、小春の「表に李韜天がゐるわいの」が半二本では「表へいやな毛蟲客が來るわいな」（双方共に太兵衛を斥してはゐるが）となつてゐる。李韜天より毛蟲客の方が一般には分りが早いに決つてゐる。こゝらも彼の大賢主義が現

はれてゐようと思ふ。大近松の「ぬつと入つたる三人づれ」が、「ぬつと入くる二人連」で、大近松

丸本「心中紙屋治兵衛」　一丁目表

本では太兵衛のみ名を有てるに、半二は、太兵衛と善六である（善六なる迂愚なる此の敵役、後の歌

舞伎に屢々現るる或る型、大近松には無し。）半二本の善六の例の悪ふざけの「結ぶの神の紙屑に貧乏紙屋の治兵衛」の云々のはやり唄は、大近松本には無論ない。唯この意味に近い言葉が、太兵衛の口から出てゐる。先づこゝまでの比較を以てしても、大近松は、太兵衛を普通の戀敵となせるに、半二は、太兵衛を、善六よりは稍ましな然し類型的な迂愚な、觀衆からは滑稽な敵役に終らしめてゐる。歌舞伎には、えてかゝるとんちきな敵役あつて、却つて觀衆の喝采を買ふのであるが、これもさうである。こゝらがその發生の根本ではなからうか。大近松本には無いが、半二本は、孫右衛門が現れ、治兵衛が縛られて後、太兵衛再び現れ、大近松本では、孫右衛門に唯追はれるのであるが、半二本では、この時僞名宛の二十兩の借用證文を出して、治兵衛をかたりと罵る段がある。さうして孫右衛門からその金を返濟させて歸る所がある。半二本ではまたこの二十兩が伏線となつて、次の下の卷紙治内に於て、治兵衛に僞金だと喚くのである。

さて、話が一寸混がらがつたが、かうなると我等は、案外流布されてゐない半二本の全梗概を述べる必要がある。によつて一層、二者の相違が闡かにせられよう。

「浮瀬」の梗概

第一段の「浮瀬」は揚屋であらう。最初善六と太兵衛との密談がある。善六は、治兵衛と從弟で、おさんに惚れて失戀した男、さうして太兵衛の取卷である。太兵衛もこれによると伊丹の紙商である。善六とは、治兵衛を憎む點に於て共鳴してゐる。太兵衛は小春へ、善六は、紙屋の財産とおさんへである。太兵衛は純色敵であるのに、善六は、

身代と色の二道である。けふは浮瀬で大坂紙屋仲間の寄合といふので、奥から同業岩木屋の手代新兵衛が現れる。これも太兵衛に追從をいふ。場變つて、小春出場の途中である。小春は治兵衛との仲を堰かれて、親方の嚴しい監視にあつてゐる。今宵は斷りきれぬ侍客の約束（これが孫右である）があるのを、晝だけといふので、ある僧客に名ざしでこの浮瀬へ呼ばれる。僧は、小春の駕籠を追はへて此の浮瀬へ來る。作者は、此の僧をして前代に稀れな極めて露骨な下がかつた事を謂はしめてゐる。僧は大和の門徒寺の住職。浮瀬へ來て、内に入る。そこへけふの參會に來た治兵衛と丁稚が現れる。丁稚を追つて小春と忍び逢ふ。（光景は、浮瀬の庭先であらう。明示してゐない。）小春と、人目を憚かつて、背〳〵になつて盡きぬ話に耽る。そこへ木の伊（河庄浮瀬以外の揚屋）の亭主が來て、治兵衛に揚代の貸二十兩を催促する。出來ねば、小春と切れるといふ一札を書けといふ。太兵衛の謀者であることを暗示する。とそこへ伊丹の九藏といふ見知越しの男も現れて、共に、治兵衛を虐める。治兵衛は困り切つてゐると、太兵衛が現れ、俺がその金貸さうといふ。治兵衛は太兵衛とは初對面ではあるが、相手の腹を見透して借りない。太兵衛の味方九藏は、代官所へ來いと小腕を引立る。そこへ最前の僧客現れて、「挨拶するは、事を鎭める出家の役」と、どゝ治兵衛はその出家から二十兩借りて木の伊に返す。太兵衛九藏退場。そこへ河庄から急きに來て、小春は木の伊の亭主、幇間の豐八などと歸る。あとで治兵衛は、名宛無しの借證文を出家に渡す。（出家が、名宛はいらぬと恩に被せて）場面展開。薄月夜、小松のかげで、先刻の坊主客、實は乞食坊主の傳海、衣裳を脫いで、太兵衛が注文の名宛なしの治兵衛が書いた二十兩の借證文を渡す。禮に十兩、「長半の堂塔建立」と傳海喜んで受ける。で浮瀬の段は終つてゐる。

茶屋（河庄）の段となると、大近松作のやうに、小春出場。善六太兵衛出場。こゝで善六太兵衛の

毒舌。孫右衛門に追はれ、あと孫右衛門と小春の例の對話。治兵衛出場、例によつて縛られる。太兵衛善六再び登場。前段の傳海から取つた名宛なしの證文に、太兵衛の名宛を書いて、治兵衛に二十兩返せと難題をいふ。それを孫右衛門に金を返され、唯一武器の證文は取られて二人佛頂面で退場。アト例の三人の場面、「天の網島」と酷似。但し小春の手からおさんの文の發見。その瞬間の孫、春、治の描寫が、「紙屋」は、見物にも解るやうにと心掛けたせゐか、作爲歴然たり、從つて稍長文句となつてゐる。治兵衛が氣が付かず、見物の氣の付く劇の心理、普通興味を半二は捉へたらしい。大近松作を如何に修補したか、その大賢化の現在證據を此の一節に據つて示しておかう。

天の網島

心得やしたと涙ながら、なげ出す守袋。孫右衛門押ひらき「ひい、ふう、三イよ。」十、二十九枚、かず揃ふ。外に一通女の文。「こりや何じや」と開く所を「あゝそりや見せられぬ大事の文」と取付を押のけ、行燈にて上書見れば「小春樣まゐる、紙屋内

心中紙屋治兵衛

「ハテ今に成つて何のうぢ〳〵。サア早う是か〳〵」と懷へ手を指込んで守り袋、引出す一通。「ハテ惜っもない此紙屑殘らずお返しなされ。」といひつゝ讀む文見て悔り。「小春樣參る紙屋内。」「あゝこれそりや見せられぬ大事の文」と取付くを取り、孫右衛門「スリヤこな樣此の狀の客へ義理立てゝ。」「コレ兄者人へ。何所の客から來た狀じや。ちよつと見せて。」「ハテ扨どこの客から狀が來ようと、思ひ切つた女郎の事、わがみの構ふ事はない」小春殿、最前は侍冥利。今は粉屋の孫右衛門。商ない冥利、女房子限つて咄しはせぬ。勤の中にも夫程迄と

長町の段

紙治內

さんより。」よみもはてずさあらぬ顏にて懷中し、「是小はる、最前は侍冥利、今は粉屋の孫右衞門。商ない冥利女房限つて此の文見せず。我一人披見して起請共に火に入る。誓文に違ひはない。」「ア、忝い、それで私が立ちます」と……。

イヤサ眞實のないは女郎の常。最前の水くさい詞は、斯うゝふ狀が來て有るから。是じや物道理じや〳〵。夫レに心中して死なうとはいかい阿呆では有るはい。思ひ廻せば廻す程、おかしいやら、不便なやら、餘りて淚がこぼれる」と笑ひに紛らす眞實は、口に云はれぬ心の禮。「孫右衞門樣。必ず其文外へ見せて下さりますな。」「起請共に火に入れる。コレ誓言に違ひはない。」「ア、忝い、それで私が立ちます」と……。

半二本の下の卷の前、長町の段は、小春母の內である。梗概は、小春の母は眼を潰してゐる。(小春の身賣もこの療治代からであつた。)煮賣屋の三八が來て、娘小春の境涯を羨んで歸つて行く。そこへ馬方が來て米を屆ける。母と妹のお市が歎いてゐると、治兵衞が來て、「わしの志だ」といひ、小春とは切れたが、母は私の親身の親ぢやというて、小春を除いた母やお市との今後の交涉を約束して歸る。アトで母の治兵衞への義理から來た小春變心の憤りがある。そこへ紀伊國屋を駈落した小春が來る。母は知らない。一場の悲劇。丁度そこへまた紀伊國屋が小春を追つて來る。小春裏口へ外す。母は正直、來ないといふので、紀伊國屋は、では太兵衞の知邊を探せと追うてゆく。アト母と妹の愁嘆。頗る「河原達引」の堀川を思はせる劇的場面である。

最後が、紙治內である。「天の網島」とは違ひ、治兵衞の眼覺める前に、既に孫右衞門が來てゐる。奥に、治兵衞

の起きるのを待つてゐる體。(「天の網島」は此の段の登場者は、おさん夫婦の他は孫右と伯母と、舅五左衞門のみである。) 治兵衞が起きると、そこへ、太兵衞が來る。さうして前場の孫右(侍客)から受取つた貳拾兩が僞金だと喚いて、摺換へた僞金を敲きつける。治兵衞は、「もと〳〵あの證文は、浮瀨の時坊さんから借りたその證文だ。」お前に借りた覺えはないといふ。そこへ門口へちよぼくれ坊主が來る。それを治兵衞は、「ヤア先だつての坊主客」とやつと發見する。坊主は一切構はず、「ちよんがれ節、新物の始り」と紙治を材料にした一くだりを演ずる。紙盡して、紙治を罵り得て妙である。(前の河庄で演ずる善六の唄は、善六の主觀を意味してゐるか、紙治夫婦の惡。これはまた太兵衞の主觀を現してゐるか、紙治の遊女買ひの窮迫の惡である。同一ではない。(このちよんがれの中に「盆も正月も小春がお〇〇に忍び紙」なる春的句がある。之を以てしても、此の「紙屋」の方が遙かに、大近松作よりも一層俗衆の喝采を得る點に於て大賢である。)そこで太兵衞の奸策を漸く治兵衞君看破した。傳海に、治兵衞が詰ると、傳海逆捩を食はし、「サア請日ぢや」乞食坊主に金借りたといふなら、サア返せと呶鳴る。太兵衞も益々附上がる。代官所へで一層脅迫する。治兵衞堪らず戸棚の脇差拔かんとする。奥から始めて孫右現れ、おさん共々治兵衞を或は宥め、或は叱り付ける。騷ぎの所へ、紀伊國屋の才兵衞が來て、太兵衞のゐるのを見つけて、太兵衞に小春を出せと掛合ふ。太兵衞喫驚。その譯は、小春の書置に、もと〳〵太兵衞殿と添ふ氣であつたが、太兵衞殿のつれなさ故欠落する。行先は、太兵衞殿の知邊とある。此通りの證據とその書置を見せる。形勢一轉。之を眞に受けた太兵衞の周章狼狽、悲歎、「小春やーい〳〵」と泣き出す。(こゝらは半二の小春は、中々策士である。最後まで太兵衞を飜弄してゐる。半二は、大近松よりも、腕があつて張があつて利口で、治兵衞にも太兵衞にも優越な女を描かうとしたのであらう。) 太兵衞は、自分の心當りはないといふ。しかし愚圖々々してゐると小春が死ぬ〳〵というて、傳海才兵衞

諸共駈け出ようとするのを、最前太兵の泣いてゐる時落した手紙を拾つた孫右が、(その手紙は、傳海から太兵衞へ送つた一件に就ての打合、並びに十兩の追借用を迫つた物)その手紙を讀み上げて、ド、太兵傳海の兩人を打据ゑる。傳海はすつかり白狀する。小春の僞書詐ですつかりいゝ氣になつた太兵は、傳海諸共「惚れられたが身の因果」と戀の勝利者めかして退場。才兵衞も退場。そのアトへ伯母が來り、伯母と孫右の眼の前で、治兵衞は起請を書く。

以下殆ど「天の網島」と經過は同樣、詞句も變りない。唯最後に半二作は、小春が來て、いざ心中ともろ共家を駈け出し、大長寺まで來ると、(此間、丸本にて僅かに三行)待て〳〵と孫右衞門走り付、「身すがら太兵衞惡者共、贋金の工みお上へ露顯し、五左衞門殿の疑ひもはれて矢張り智Ꮖ。小春の身の納まりも諸事我胸にあり」と目出度〳〵で終り、何の心中どころかといふ段取だ。

要するに、半二作は、極めて俗受本位。さうして前後照應、技巧的技巧が冗い程である。說明の冗さには閉口せざるを得ぬ。二十兩の僞名宛の證文。それに傳海坊主のやうな惡黨、すつかり歌舞伎流である。人物の多さも無論であり、局面が理窟を追うて展開することも然りである。善六のやうな性格、治兵衞とおさんと善六、治兵衞小春と太兵衞の關係も無理な跡著しい。(但し大近松に比較的作爲の跡著しからぬのは、實說をより多く取り入れて、さうして急場の作といふせゐもあらう。半二は、以後その摸倣作を二まで中間に置いての作であるから、斯うなるのも自然の勢かも知れぬ。)とに角無理ではあるが、然し面白いものと一體に心掛けた。これが後世の所謂歌舞伎の神髓であつた。その僞、

「長町」と「河原達引の堀川」

開祖は、蓋し彼半二ではなかつたらうか。（上の巻で、浮瀬と河庄と、共に、小春の相手が變裝の客であり、且つ坊主と侍であることも面白い。此の思ひ付は、半二ならで、文吉の思付かも知れなからうが。）

最後に謂ふことは、この「紙屋治兵衞」の一曲中で、何處までが半二の執筆であらうかといふことである。無論後半が山であり、從つて下の巻の長町と紙治が半二の執筆であらう。殊に語り手も、上の茶屋になつて、政太夫の名が大文字で現れ、長町は梶太夫、紙屋は、咲太夫と染太夫である。染太夫一座の事故、無論紙屋の段が此戲曲の全主腦であらう。然し長町の段も恐らく半二の作であらう。竹田文吉は、前二段、半二は後二段を執筆したであらう。さて此の「心中紙屋治兵衞」に於て「天の網島」から全く獨立した場面は、「浮瀨」と「長町」であるが、就中「長町」は、しんみりした好悲劇の場面である。後の「河原達引、堀川」（作者不詳。今昔操淨瑠璃外題年鑑には、天明三年豐竹八重太夫勤むとある。一般說は天明五年頃。）に影響を與へたかと思ふ場面である。卽ち治兵衞と傳兵衞。小春とおしゆん。小春の妹お市とお俊の兄貴の與次郎と、さも似たりである。唯だ違ふのは、おしゆんの母も傳兵衞も、おしゆんの心を知れるに、此の「紙屋」は、肝腎の治兵衞も小春の母も、小春の眞意をまだ知らずにゐる點である。然し悲劇は「堀川」よりも小春の母や小春に一層多からう。女だ思ひ切り乍ら、その母に俵を貢いでせめての面當といふ治兵衞にも戀に溺れた弱い人間の溜息がある。

長町の段の全文

文辭も、全四段中、一ばん落著きのある、淨瑠璃の正脈らしい悲曲である。他の歌舞伎や、惡くすると通俗映畫劇や二輪如の類とは違ふ。私は、この「長町の段」を半二の執筆と見て、その全鱗を左に示さうと思ふ。(校訂は、極めて難儀した。然しなるべく原文の儘を殘し、三四を漢字に換へ、且つ甚しい假名遣の誤はこれを正しておいた。)私は、此の場面こそ、小春の獨舞臺であつて、しかも母も治兵衞もお市も凡てが彼女の衷情を知らぬ所に、作者の巧みな技巧があらうと思ふ。これは、歌舞伎にするには餘りに淋しい場面である。從つて是れ、後年永く此の「紙屋」の中(うち)、河庄と、並に更增補の「時雨炬燵」の紙治內との二場だけが歌舞伎に殘り、長町は廢絕に歸した所以であらうが、こは歌舞伎の唯一手法たる所謂見物の知つてゐる事を舞臺は知らずに汗かくことの最も請目(うけめ)な好場面であり、殊に小春治兵衞の二人が相逢はぬ事は面白く、治兵衞の出方(でかた)彼の心持に今少しの修正を加へれば、紙治河庄よりも、今日に於ては寧ろ復活し得られるものと思ふ。

下の巻　長町の段

大阪長町家並は宿屋傘屋に煮賣店。中に貧しき老病の子に目は見えぬ母親に、孝行厚き小娘がかもじ簑(みの)すく賃仕事。我髪形は箕賣笠、着たい盛りを木綿物、貰うた儘の木櫛さへ遺女(さすが)の子なりけり。相借屋のぶらり三八差覗き「婆樣今戾りました。」「ヲヽけふは早うござんしたのふ。」「イヤもふ十夜で煮賣もとんと明きや

んせぬ。夜店出して喰逃に逢ふより、宵からぐつたり寢る積り。コレ〳〵お娘いつでも精が出ますの。」「サア見て下んせ。わしが目が見えぬので、しほらしい手仕事覺え、よう養うてくれますわいの。」「したが額立もよいのにそんな事さすは、惜い物じや。何と三味線仕込まんせぬかいの。」「いや〳〵小娘にそんな事教へると徒になつて惡い。」「ヘヱ堅い事云はんすわいの。それでもアノ姉貴は、山衆じやないかいの。」「サアあの小春はわしが目の煩ひをどうぞ直したいというて其價に孝行の勤。親の氣ではどうかからうかと案じの絶える間はない」と涙ぐめば「ハテ惡い合點じやわいの。結構なべゝを着て、身は樂で世界中の男に惚られ、此世からの極樂とは、あの事じや。おいらが一日新地中を鯡昆布卷と賣あるく一年の儲を時の間に遣はすやつも手柄者、又遣ふやつも手柄者。身上厚い紙屋の治兵衛、今は夫れで、漆漉、いから薄う成つたげな。ヤモどうしてもあの道じやわい。ア婆樣も若い時から三味線でも覺えて居やんすりやよいにの。」「何いはしやるやら。目は見えず、あたまに髮もない此ばゝが、そんな事覺えた迚何に成らう。」「ア、いやさうではないぞへ。當世はコレ足は歩艱で目のうとい坊主さへ北の芝居でさへ出語りして大入をさしましたわいの。婆樣も三味線でも引いてなら、神明の晩には大きな米に成るのになア。」「ヲ、マアいろ〳〵の事いはしやる。サ、ちやつといんで寐やしやんせ」と呵られて、こそ〳〵と惡口明いた路次口から已が住家へ走り入る。外は十夜の日暮前、辻からどやいで來る馬士。「多田屋の妙光樣はどこじやな」と、所問ふのも喧嘩聲。「ア、これかゝ樣〳〵。こはい馬奴が爰を尋ねて居るわいな。」「ハテ馬士に近付きはないが、妙光はこちじやが何の用じやの。」「ア、爰かい。天滿から米が來やんした。請取つて下んせ」と、馬からおろす柴田俵「ア、こんなこちの内へ米の來る覺えはない。そりや大方向ひ角の米屋で有るぞえ。」「ア、いや〳〵慥爰に違ひない」と。せ

り合ふ中にいきせきと、色の縁とて天滿から愛にも通ふ紙屋の治兵衛。ヲヽ太義じや有つた。お使ながら中戸の內へ入れてもらを。」「エヽコレ丹那。中戸が何所に有るぞいの。すりや又長町の妙光樣とは、どえらい隱居の下屋敷かと思うたら、こいつはもうきつい薄やくしじや。」「ハテ投惡口いふな。大事ハおれが一ツ家の內。ヤモ此間は閙しうて便りも致さぬ。が此俵は利口な直段で、けふ內へ取つた次手にお下而申します。コレ馬士駄賃の外にソレ一盃呑代。」「ヤ有り難いわい。ヤ又どうでも粹のみなかみやの丹那殿じや、」と馬も尾をふるたいこ口。ハイすい云うて追うて行く。」コレハ〳〵丹那樣。マア〳〵數ならぬ小春を不便がつて下さりますさへ有るに、其縁につれ此のはゝ迄樣々のお心づかひ、餘り〳〵て冥加なうござりますわいの。」「イヤ是はお袋、いかにも是迄折節の問音信は、小春が縁に連れての事。もう小春とは緣切りました。サ退きましたぞへ。」「エイそりやまあどうして〳〵」とあきれる顏色打守り「ヲヽこな樣は何にも知るまいの。二年以來身上を打込んで身を打つた此治兵衛、思へばいかい戯者じや。惚れて居る目からは、する程の事が俺へする心中に見え、少々のあいそ盡かしも張のある女郎ぢやと猶乘が來たが、今思へば張ではなうて羽蟻のわいた蟲付の柱。眞はとうからくさり切つて有るわい。長々つまゝれて、起請から狀文から役にも立たぬ事に高い紙を費した商賣の冥加に盡きたかと、今といふ今夢が覺めましたわいのお袋。互ひの起請取戾して仕まうたれば、埃程ももう念は殘らぬ。さう思うて下され」と、聞いて母親身をふるはし「エヽそんならアノお前樣をかはにして、外に男を拵へをつたか。ヲヽそりやもうお腹か立たいで何とせう〳〵。が其お憎しみの有るやつに緣を引いた私に又今日の此御深切は、こりや此婆に衛ながらして死ねとの事でござりますかいな〳〵。」「是は又わつけもない。コレこな樣の正直は見拔いて居る。あゝいふ不心底なやつ、親の事も構ひ

をるまいと、そこがいとしい。小春めが事は是限にしても一旦請出してこなさんを隱居させうといふた男の詞は、おりや違へぬ。改めて此治兵衞が眞實の母者人と思うて、猶こな樣を大事にするが結句アノ小春めへの頰當。ヤコレお市、わがみはおれが妹じやと思うてゐる。其かはり又姉めがらせた共、必ず物もいやんな。もうあいつを思ひ切つたら一家の機嫌もようならうし、是からおれもとんと商賣氣に成り、ほんにもつけの幸ひ。とは云ひながら色を退いたと思へばどうやら斯う何やら落した樣で。アヽいや〳〵是も愚痴〳〵。ドレ是から逝んで商賣精出しましよわい。お袋隨分達者で、お市氣を付きや。アヽコレもう〳〵日の不自由なに、そこに居さんせ。其内來ましよ」と、離のよい男の氣性、傾城の胸の起請は神ならで白地になして立歸る。お市もどうやら氣がかりに跡打ながめ「コレかゝ樣。丹那樣から下さつたアノ俵物、貰うてもだんないかいな。」「ヲヽあゝいふ男氣なお人。戻しても取りはさつしやるまい。というて娘の緣の切れたに米一粒でも何とそれが請られう。ほんに〳〵姉めがさういふ心になるとは、今の今迄思ひも寄らぬ。此後治兵衞樣に顏を合さう共思はねど、小春めを勘當するが天道樣への云譯。親でない子でない。コレお市、若し來た共門ばたへも寄しやんなや。ほんにマア時も時、有がたいお十夜にこんな事聞くもやつぱり罪の深いのか。アヽなんまみだ〳〵〳〵。」涙に痰をせき交ぜて苦しむ母の脊撫さすり、「コレイナア其樣に氣をもまずと、ちつと寐やしやんせ」と、指寄る枕も木地に艶のない子は眞實の孝行と、入相の鐘人顏も朧月かげ曇なき我身を我と我男の爲に男に疑はれ、死出の覺悟の藪入は親の內さへはいりかね、覗けば、內に妹が釣佛壇に御明しの灯かげちらつく表の人影。招くは誰と背戶口に透し見るより走り出「ヲヽ姉樣か。折角ようござんしたに、ひよんな事や」と云兼る。「ひよんな事とは氣づかひな、誰ぞ來て居るかや。」「イヽエ誰もないがな、かゝ樣は、

今すや〳〵と寢てじやわいな。」「ヲヽそんならちよつとお顔が見たい。」「イヤ待たしやんせ。めつたに逢れぬぞえ。いからお前の事を腹立てて。」「ムヽそりやマアどうして何として。」「サア其譯は、さつきに天滿の丹那様がござんしてナ。」「ヤヤあの治兵衞様が來てじや有つたか。」「アノ治兵衞様が。」「ハアそれなればかゝ様も機嫌の悪いが尤もじや。定めてわしが事を、人のやうにいうてじや有るまい。」「アイ逢うたとも物いふな、親子の縁切るというてじやわいな。」「ヤアそんならアノ治兵衞様斗りか親に迄あいそ盡されたか。エヽ〳〵これはな〳〵〳〵いふにも云はれぬ此様な情ない義理が有る物か」と軒に跪(つくば)ひ泣居しが「コレお市、姉は樣子が有つて欠落して來たわいの。是からどんな遠い所へ行かうも知れぬ。さういふ譯ならかゝ様も所詮逢うて下さんすまい。是はそつと斗りなれど、かゝ様の御明(みあか)しに上げてたも。物(もの)はいはずと餘所ながらお暇乞がして去(いに)たい。」と、いへば妹も猶うろ〳〵。「コレ姉様そりやお前心細い事いうて下さんす。かゝ様はよわし、わしやお前斗りを力にして居るわいな。ゆうべもゆうべとお前の死なしやんした夢を見て、悲しうてならなんだ。かゝ様の手前は、わしがよいやうにいふ程にな、コレどつこへも往つて下さんすな」と、抱付けば、抱しめて「ヲヽよういうてたもつたのう。其深切を聞くに付け、一人の母に孝行を盡す事さへならぬといふ淺ましい身の上を推量してたも妹」と、別れて居ても泣き寄りの眞身の兄弟有りながら、なぜ死神(しにがみ)の付きぬらん。表は十夜の人通り、小歌淨瑠璃はうら〴〵の格子店先ぐわつたひし、當り廻つてかしましき。母は目覺し起直り「お市〳〵どこへ往きやつた。」「アイ〳〵爰に」と入る跡から小春をそつと入口の戸を差足に母の額見るに先立つなつかし涙。それ共知らず「コレお市、今夜は若い衆がいろ〳〵の悪さする晩じや。めつたに外へ出やんなや。最前氣をもんだので癪が上つたか肩の痛さ。しんどかろけれど、まちつと撫(さす)つてたも。」「ア

イアイやつぱりさうして居さしやんせ」と、後へ廻り妹が親の介抱みやづかへならぬ小春がうらやましさ。「そこをぐつとおしてたも。隨分と強う〳〵」といへど小腕の非力にこたへかぬれど、姉の身で押すに押されぬ親の癪、そつとかはつて孝行を分けて貰ふも親子なる。「ヲヽようこたへます。大分力が強うなつた。此癪を發したは姉の小春め。儕が徒にばつかり凝つて親の事は何共思やしをるまい。」「イエ〳〵さうじやござんせぬ。お前の事を忘れさんせぬ其證據は、さつきに飛脚に言傳が有つてな、此金を御明に上げてくれとて持つて來たわいな。孝行な姉樣是見やしやんせ」と指出す包。「何じやアノ此金をおれにくれたか。エヽ穢らはしい。畜生めが手から一文半錢貰うては、治兵衞樣へどうも立たぬ。ソレ早う戻して仕まや〳〵」と投ほかる。小春は悲しさやる方なさ。姉の心を思ひやり、「かゝ樣餘りじや。褻にも晴にもたつた二人の兄弟、私を不便と思うてなら少々の事は堪忍して、」と縋りなげゝば、「サイノウ其わがみの三ぶ一、姉めに人らしい性根が有れば何思はうぞ。あれ程眞實な治兵衞樣、最前も惡びれぬ樣にいうてなれど內證の咄を聞けば、小春にかゝつておぬしの內も大分明いて、商賣も不手廻しになつたげな。お內儀樣や、一家衆にせがまれ、死なうと迄さつしやつたと、人の噂も嘘では有るまい。其段に成つて今更見放し、外の男持たうといふ、思へば〳〵憎いやつ。とは云ひながら小春めも、やつぱり町の娘で置いたらまんざらあゝも有るまい。勤さしたが母が誤り、親の事思ひ居らぬも無理ではない。不孝な子を持つといふも皆わしが身の因果じや」と、跡云ひさしてたぐり咳。又せきのぼせば、「コレ申し氣をしづめて」と淸水焼、一トロ呑ます左右よりおとゞひ取り付介抱に、「ヲヽもうよい〳〵。がコレお市、此の白湯は誰が汲んでくれたの。」「エイヲヽあのかゝ樣の何云しやんす。常住痰が發る故、土瓶は私が傍に置いてやつぱりわしが汲んだのじやわいな。」「さうで有つたか。おり

や又近所の衆でもござつたら、今のざんげ咄し聞かしやつたかと、はつと思うた。コリヤ姉は子じやないによつてな杖柱共思ふはそなたばつかり。可愛や〱まだ親の世話にならにやならぬ年ばいに苦勞する。エヽ此目が明かぬ事ならいつそ早う死たい。おれが生きてゐる中は姉めをよせぬは治兵衞樣へ立てる義理。死んだ跡では兄弟中よう、迚もの事なら逹者で長生してくれと、小春めにいうてたも。人の恨でひよつと又、惡い死でもしをろかと、おりや夫れが案じられる。」と、いふ聲咽にむせ返り、つまる所はかはいさの慈悲心肝にこたへても、死なねばならぬ云譯も跡で堪忍してたべと諸事を涙の暇乞。折から表へ北の新地紀伊國屋が聲高く、「妙光殿の內は爰じや、明けてもらを」と戶をたゝく。はつと驚き裏口へ拔ける小春の有りとも知らず。「ヲヽどなたじや、お市、戶を明きやいの。」「アイ〱。」明けた門からどや〱と、「イヤ紀伊國屋の才兵衞でごんす。」「ヲヽ是は〱ようマア十夜參り遊ばしたか。お市、お茶上げましやいの。」「イヤ茶よりもちやつと小春に逢ひたい。爰へ來て居ましよがの。」「エイ何とおつしやる。アノ小春がさんじましたか。イヤマアどこに居ます。」「アヽコレとぼけまい〱。小春は欠落をしたわいの。」「エヽイ。」「ゑゝじや有るまい。大事の代物。來てゐるなら隱さずと、渡して貰を」とかさかけても、しらぬが有りやう。「夫れはマアマア氣づかひな事じやが、こつちへは參りませぬ。此間から便りもなし、疑はしくば狹い內じや、御苦勞ながら一ぺんおさがし。」「ヲヽさういはいでも家搜しする」と男が挑燈先に立つ。「アヽコリヤもうよい〱埋んで有るとないとは大がい五音でも知る才兵衞。居もせぬ所尋ねて居るは隙費やし。コレお袋。今でも來たら知らさつしやれや。隱すとあれが命にかゝる。どうでも太兵衞が手筋の方搜すが近道。サア來い」と飛ぶが如くに行く跡にぎつくり當る親心。「憎いやつでも氣にかゝる。さつきの包は何所に」と搜し尋る上包み、とけば

ほどける佛の筐、朽ちぬ金に珠數一連。「ヤアそんならどうでも死覺悟か。尋ねに行かうも目かいは見えず。何所を證途に。コリヤ小春やい」小春〳〵の聲計り。爰にと云ひたい所をばこたゆる辛抱法善寺の十夜の鉦を別にて紛れ行くこそ、便なけれ。

以て一篇の好中幕ではなからうか。治兵衞の「物を落した」云々の愚痴も、切なる未練の聲として、近代人にも共鳴深く、小春の心内の葛藤も亦比較的自然に而も鋭利に描破されてはゐなからうか。若し諸君に、砂中一玉を得たるの感あらば、以て予が紹介の勞足れりである。

——大正十二年六月——

浮瀨について

浮瀨といふ酒樓

前稿「心中紙屋治兵衞」中の、浮瀨の段の浮瀨といへる料亭について、左を發見した。登載しておく。

「大阪に浮瀨といふ酒樓あり。こゝには白菊君不識などいふ大酒盃有て、よく飲むものは簿にとゞめ、亭主引出物して、これを賀すといふ。按ずるに浮は罰盃なり。今俗の酒をしひるといふにおなじ。瀨は助字也。晏氏春秋云々。（中略）彼酒樓は大酒盃を置きて酒をしひる故に、浮瀨と名づけたるなるべし。又江戸の酒客興に乘じて狐つりといふ戲をするに浮そ〳〵狐を浮そと囃す。この浮字も罰盃の義にて、狐に酒をしひんといふにおなじ云々。（馬琴著、烹雜之記前集卷下。〔「百家說林」續篇中卷所收。〕）

「浮瀨　此遊宴の樓は、新淸水の坂の下にありて、風流の席なり。遙に西南を見わたせば、海原往來ふ百船

の白帆、淡路島山に落かゝる三日の月、雪のけしきは言もさらなり、庭中には花紅葉の木々春秋の草々を植て、四時ともに眺めに飽ざる遊観の勝地なり。名にしおふ浮瀬幾瀬の貝觴をはじめ、種々の珍觴又七人猩々の大さかづき等を祕藏す。浪花に於て貨食家(りやうりや)の魁たるものなり。　きのふ笠けふ傘の雪見かな　柳亭」（曉晴翁「曉鐘成がこと」編輯、松川半山畫圖、安政二乙卯四月板の「浪華の賑ひ」貳編所載。）

尙、同書には、如上の文が上半にあつて、他は雪げしきの浮瀬の圖が描かれてある。町角にあたつて、二階建の家が幾棟もつゞき、手前の樓の二階には、人々の集りをれる圖。右手に塀越、雪を被ける大木など。背景も木立とうす墨。廣重の繪本江戸土産やうの畫致である。

「一ぱいで氣も浮む瀨の忘れ貝　「浮瀨」は大阪天王寺の西、新淸水の料理屋である。「忘れ貝」は、浮む瀨の什物で、鮑の貝殼の穴を塞ぎ、酒杯に作りてあるので、七合半の酒を盛るに足る大杯である。この句は、浮む瀨で七合半入の大杯一ぱいで氣が浮いたといふのである。」（大正三年刊、荒木魚泉著「狂句新釋」）

馬琴初琴の黄表紙

曲亭馬琴に、寛政三年の「盡用而二分狂言」を處女作に、以後數年黄表紙の作が彼の初期にあつたことは周知の事柄である。「近世物之本江戸作者部類」には、此間の消息を概括的に述べてゐる。「作者部類」は彼馬琴自身の自家擁護の匿名作（署名は、蟹行散人。序に天保五、春とあり。）でもあるのであるから、比較的之に眞を措くことが出來ようし、それに「列傳體小說史」はじめ、殆ど此の祖述に過ぎないと思はれるから。今左に、その中、赤本作者の部の要文を拔いてみよう。

曲亭馬琴（江戸作者部類）

曲亭馬琴

寛政二年、壬生狂言流行せしかば、用盡而二分狂言といふ二册物を摺りて、明春辛亥印行したり。（和泉屋市兵衞板、歌川豐國畫）此折は、名號大榮山人と署したり。深川八幡の社頭に僑居したれば也。この年（寛政三年）山東京傳、故あり(一)籠居二三月に及び、九月下旬に其の厄釋けたり。故に新作の臭草紙、明春正月の出版に一筆にて整ひがたしと云。是をもて馬琴代作して稍其數に充てたり。當年京傳が作四種の內、龍宮羶鉢の木（二册物蔦重板、重政畫。趣向は京傳

文は馬琴代作）實語教幼稚講釋、（三冊物同書。趣向かき入とも馬琴代作なれば、馬琴の名を著はさず、書賈へも秘しければ是を知るもの稀也。（當稿は京傳自ら書きたり）寛政四年壬子の春の新板、鼠婚禮塵劫記（三冊物、豐國畫芝泉市板）白花園子食氣話（三冊物大和田板）、荒山水天狗の鼻祖（三冊物右同）御茶漬十二因縁（三冊物、春英畫伊勢屋治助板）當年此四種より馬琴作と署したり。（記者云鼠婚禮塵劫記の序を京傳が書きて、曲亭某鄕に予が隱れ里に寓居し、ひとつ皿の油を嘗めて友とし善しといひしは、彼京傳が屛居の折、馬琴が止宿して久しく慰め、且つこの折は臭草紙の代作さへしたればなり）かくて寛政七乙卯年、正月の新板、蔦屋重三郎が誂へにより、京傳が善玉惡玉の第四編（三册もの）四遍摺心學草紙いたく行れしより其名を世に知られたり。されば拔萃のあたり作多かる中に滑稽物流行の頃の無筆節用似字盡などは、流行江戸のみならず、京浪花にても人の賞玩大かたならず、こゝをもてその翌年京師より新織の金襴純子に似字を織りたるを江戸へ出こしたり。（中略）されば寛政二年より今に至りて四十餘年、書賈の需已む時なく、その著編百部に及ぶと云。（溫知叢書本に據る）

（一）の註。京傳は、此の年、「仕懸文庫」、「錦の裏」「娼妓絹篩」以上三書洒落本の筆禍により、夏六月、手鎖五十日の刑を受けた。（板元の蔦重は身上半減の闕所となつた。）

增補青本年表にも、寛政三年の條下に始めて

廿日餘四十兩 盡用而二分狂言　二　大榮山人作　豐國畫
　馬琴初作にて當り物なり。

と見えてゐる。其他日本小説年表、列傳體小説史等殆ど之と同じい。乃ち此等に據りて、今左に二分狂言より以下馬琴作の黄表紙全部を舉げてみよう。以て案外、彼に此の種戯作中の戯作の多かつたことを舉證してみよう。

○馬琴作黄表紙年表

馬琴年齢	外題	册數	畫者	板行年代
二五	廿日餘四十兩盡用而二分狂言	二	豐國畫	寛政三年
二六	實語教幼稚講釋	三	政美畫	同　四年
	右　署名京傳			
同	花春虱道行	三(或は二)		寛政四年

京山の「蜘蛛の糸巻」に載りたる外題なり。曰く「花の春虱の道行全二册但一册五枚宛春朗畫にて蔦屋出版。馬琴自序に京傳門人とあり。此双紙大に行はれてより、年々作ありて高名になりぬ。」と見えたり。しかも其内容の如何なるものなるかは、甞て議題に上りたることなし。京山も此本類焼の時失せぬとある。蓋し傳本極めて稀ならん。

馬琴年齢	外題	册數	畫者	板行年代
二七	浦島太郎龍宮羶鉢木	三	重政畫	寛政五年
	右　京傳署名			
同	鼠子婚禮塵劫記	三	豐國畫	同
同	荒山水天狗鼻祖	三		同

二七　浮世街道御茶漬十二因縁　三　春英畫　寛政五年
同　自花園子食氣物語　三　　同
　右　序に京傳閲とあり。卷尾に京傳校とあり。
同　銘正夢楊柳一腰　三　政美畫　同
同　増補毬越登坂寶山道　三　同　畫　同
　右二本、馬琴序傀儡子作とあれど、馬琴の作
也。寶山道は、楊柳一腰の後篇にして、一名
を増補伊賀越物語と謂ふ。
二八　福壽海無量品玉　三　春朗畫　同　六年
二九　昔怪談諷教訓心學晦莊子　三　重政畫　同　七年
同　彙讀本草双紙在爾受身成金言　三　同　畫　同
　右青本年表のみに見えたり。此本「清談受有身
成金言」として文化二年再板せりと。小説年
表列傳體は、文化二年に新作の如く記載せり。
三〇　堪忍五兩金言語　三　同　畫　同　八年
同　報讐獺狂尾　三　同　畫　同

三〇　曲亭増補萬八傳　二　重政畫　寛政八年
同　四遍摺心學草紙　三　政美畫　同
同　小需雨見越松株　三　重政畫　同
同　墨田川柳禿筆　二　同　畫　同
　列傳體小説史に享和二年版とす。「青本年表」、
「小説年表」共に寛政八年とす。
三一　無筆節用似字盡　三　重政畫　同　九年
同　安倍清兵衞一代八卦　三　同　畫　同
同　押繪烏痴漢高名　二　同　畫　同
同　加古川本藏綱目　二　同　畫　同
同　楠正成軍慮智の輪　二　同　畫　同
同　大黒樒黄金杜礎　二　同　畫　同
同　龍ノ宮苦界玉手箱　三　同　畫　同
同　庭莊子珍物茶話　二　同　畫　同
同　北國巡禮唄方便　三　同　畫　同

三一　武者合天狗俳諧　二　重政畫　寛政九年

同　彥山權現誓助劍　五　同

但し此本、傀儡子の署名。

同　褰山狐修(シカ)怨(ヘシ)　二　同

右、傀儡子の署名として「作者部類」に載せたり。列傳體にも載せたり。「靑本」等に記載なし、何に由るか。

三二　大雜書拔萃緣組　三　重政畫　同　十年

同　御慰忠臣藏之攷　二　同畫　同

同　似字盡後編 鹿想案文當字揃　三　同畫　同

同　鼻下長生藥　三　同畫　同

同　時代世話足利染　三　同畫　同

同　足利染拾遺雛形　二　同畫　同

同　增補猿蟹合戰　二　同畫　同

右三本、傀儡子の署名。

三三　六代目市川三升追善 東華皐月落際 稗史　二　豐國畫　同十一年

同　風見草緣女節用　三　重政畫　寛政十一年

同　鯨魚尺品革羽織　三　同畫　同

同　彼岸櫻勝花談義　三　同畫　同

同　料理茶話卽席話　三　同

同　無茶畫押兵　三　同

同　世諺口紺屋雛形　三　子興畫　同

三四　胴人形肢體機關　三　重政畫　同十二年

同　譬諭義理與襌褌　三　同畫　同

同　人間萬事塞翁馬　三　同畫　同

同　錢鑒貨寫繪　三　同畫　同

右、列傳體には「錢鑑金貨字畫」とあり

同　備前擂盆一代記　三　同畫　同

列傳體は、摺鉢とあり。

同　視藥霞報條　三　同畫　同

右、天保八年再板、國芳畫。

同　花見話虱盛衰記　三　豐國畫　同

三五 買飴紙鳶野弄話 二 重政畫 享和元年

同 足手書草紙畫賦 三 同 畫 同

右、青本年表には、和樽作とあり。

同 敵討蚤取眼 三 同 畫 同

同 曲亭一風京傳張 三 同 畫 同

同 教訓跡之祭戯草 三 同 畫 同

同 浪速秤無女芬輪 二 子興畫 同

同 春之駒象棊行路 三 重政畫 同

同 父讐宇都宮物語 三 豐國畫 同

同 宇津宮五段淨瑠璃酒肆 四五の卷 二 同 畫 同

同 繪本報讐錄 三 同 畫 同

前二本傀儡子、此本玉亭子署名。

同 山東一風煙管箒(ヒナガタ) 三 同

列傳體に記載し疑はしけれど。

三六 養(カヒ)得筎名鳥圖會 三 重政畫 同 二年

三六 初老了簡年代記 三 子興畫 享和二年

同 衣食住三ケ國世帯太平記 三 豐國畫 同

同 筆耕作稿栽培種蒔三世相 三 重政畫 同

同 野夫鶯兒歌曲訛 三 子興畫 同

同 六冊懸(ガヽリ)德用草紙 三 重政畫 同

此本、賣切申候切落話三と五大力三畫訓譯三の二作を、一紙を上下二段に分ちて記述せるもの。故に六冊懸の名あり。

同 畫本歴世傑 五 春亭畫 同

馬琴序。青本年表は、馬琴の作とせり。姑らく之に據りて此に揭ぐ。小說年表に「此本後に、鎧草筆一本三册と改題す」と。

同 太平記忠臣講釋 三 豐國畫 同

同 同 後座之卷 三 同 畫 同

右二本、署名魁雷子。

三七 陰(カゲヒナタ)兼陽珍紋圖彙 三 豐廣畫 同 三年

同 花路の水浪花風爐 臍沸西遊記 三 秀麿畫 同

三七 信濃賓客浅草主人 俟待開帳噺 二 豐廣畫 享和三年
同 開帳地口提灯 三 重政畫 同
右、列傳體に脱せり。
三八 小夜中山宵啼碑 三 豐廣畫 文化元年
同 新研（シンパンカハリマシタ）十六武藏坊 三 重政畫 同
同 御伽怪談五人拍鄙言 三 同 畫 同
同 敵討二人長兵衞 三 同 畫 同
同 松株木三階奇談 三 同 畫 同
○此年敵討の作多く、新刻の三分の二は然りにして其餘僅に戯作ありといふ。京傳馬琴敵討作の最初なりといふ。
三九 妙黄奈粉毀道成寺 三 長喜畫 同 二年
青本には、妙黄奈粉毀道明寺とあり。
同 二代順禮再度仇討奉打（ウチタテマツル）札所誓 三 月麿畫 同
同 猫奴牝忠義合奏 三 豐國畫 同
四〇 敵討雑居寐物語 前後六 同 三年
四〇 武者修行木齋傳 前後六 豐廣畫 文化三年
列傳體は、文化二年とせり。此本、青本年表になし。
同 敵討鼎の壯夫 前三後二 重政畫 同
同 大師河原撫子話 六 同 畫 同
同 復讐阿姑射松 六 同
右魁雷子の署名。列傳體は、文化二年とせり。
此本、青本年表に記載なし。
四一 復仇岬之洞 六 春亭畫 同 四年
一名、賣茶郎談。
同 大老門化粧若水 袋入十丁 國貞畫 同
右、紅白粉店萬屋の春の景物也。
四二 敵討身代名號 六 北齋畫 同 五年
四三 匂至伽羅之柴舟 三 國貞畫 同 六年
右、上野山下萬丸油元結開店の景物也。
以上之内、合卷時代に移れる文化四年以後の分は、小說年表一本に據りて、今これを抜く。

――馬琴作、黄表紙年表。完――

以上約九十三種

私は、何の爲に、馬琴の黄表紙年表をうるさく拵へたのであらうか。はじめ、日本小説年表と、列傳體小説史と青本年表と三本を校合して馬琴の初期寛政期の黄表紙を調べて見てゐたのが、たうとうどうせ序でに、彼の全部の黄表紙年表を拵へてやれ、丁度嘗て黄表紙のみの彼の年表は何れにも無いからと、大分難澁し乍らも、右、やつと作りあげた。先づ大部分信用の出來るものと見てい〻と思ふ。さて馬琴の黄表紙の中、從來活字本として飜刻されたもの〻中、我々の眼に親しいのは左の數種である。

○盡用而二分狂言（寛政三年）　○堪忍五兩金言語（寛政八年）　○人間萬事塞翁馬（寛政十二年）

○敵討蚤取眼（享和元年）（以上、續帝國文庫「黄表紙百種」所收）　○花見話虱盛衰記（寛政十二年）

○世帶太平記（享和二年）（以上、續帝國文庫「萬物滑稽合戰記」所收）

○曲亭一風京傳張（享和元年）（有朋堂文庫「黄表紙十種」所收）

勿論、馬琴は讀本作家として名を成し、恐らく彼自身と雖も晩年には、此等の黄表紙の作しかもそれが九十種に餘ることをこそばゆく感じたに違ひない。晩年こそ、彼は、善玉惡玉の本家、勸善懲惡の

純道義作家ならず

元縮の如き觀あるが、しかし彼の少壯期の此色々の黄表紙は、しか程道學臭味のあるものではなかつた。但しこれは、彼の黄表紙の作全部を並べたてゝ、一々それを現物に據つて謂ふべきであるが、然し今の私の用意としては不可能なこと。但し、恐らく此の斷言は謬なきに近からうと思ふ。

最近、私が偶然購入し得た、それも敷島二個の代で購つた彼の初期の黄表紙が一部ある。馬琴の黄表紙を多く飜刻に於て見ざる私としては、極めて珍らしかつた。殊にそれが偶然、その當時評判の作であつたといふに於て、いやいや、それよりも彼の此の作など、全然さまでの道學臭なくして、當時の流俗黄表紙作家の亞流といふ譏はあるにしても、開けた、人間味のある（道學臭と反對の意味で）、遊戲氣分の多いものであるといふに於てである。馬琴を純道義作家とすることは、世間の多數の定評であるが、私は信じ得ない。事實、他の彼が卑賤に見做した中本作家に劣らざる挑發的の描寫を隨處に彼の作に於て發見する我々は、矢張り彼も一個の凡情的作家。比較的高げに、深げに、且つ敎化的に見えるのは、彼の糊塗且つ宣傳の巧かつたことと、彼の學問の効であり、その腹は矢張り人並の、當時の戲作者並びに浮世繪師に共通の、あぶないことを描いて、我も人もニタリ笑ふ、實行と藝術と一致の、好色主義が影を强めてゐたと思ふ。それが少壯期の黄表紙などには、後世の敎へん哉の態度がなく、寧ろ人と笑はんかなの氣分で、彼もふざけて、その代り後の讀本を書く時の苦蟲潰した顏（見掛けだほしではあつたが）とは反對に、眉を伸した、然し流石にデレ助ではなかつた、多少後年の先

「無筆節用似字盡」

生振りの卵があつたさうした顔を聯想させる、悠長な愛嬌の多いものである。寧ろ彼の純な處がより多くそこに現れてゐると思へる物である。藝術家でもない、また一世匡救の志士でも何でもない。その代り、「矢張りいゝねえ」と來さうな、若い血の勢よく廻つた、快活な彼を見られるやうな氣がする。年も三十一の盛りである。（然し「吾佛の記」の自筆には、此の時、既に、彼は遊蕩より脱したとあるが。即ち「二十五の時より志を改めて行狀を愼しみつ」とあるが。）然しそこに、まだホヤ〳〵の作家時代から、すでに馬琴門人と自分の名をえらい地位に出して傀儡子などといふ變名で發表する所から思ふと、相當に矜恃する所はあつたらしい。この矜恃が、晩年には一流の道學と結び付いて、あの讀本となり了したのではあるまいか。

案外、序言が長くなつた。それ程私の興味を感じたといふ、その敷島二個代の黃表紙とは何か。寛政九年板の「無筆節用似字盡（にたじつくし）」三である。彼一個の黃表紙年表からいふと、「二分狂言」以後、二十一種目、三十歳の時の作。黃表紙史の上では春町の「金々先生榮華夢」の安永四年から數へて、此の「似字盡」、二十三年目の作。黃表紙史としてはその頽廢期の作たることは謂ふ迄もない。黃表紙が敵討物に變化したのは文化である。（その以前にも敵討物がないでもない。現に此の寛政九年にも楚滿人の敵討姥捨山などの黃表紙があり、馬琴にも是より先享和元年に敵討蚤取眼のやうに、敵討に借りた物がある通り。しかし大勢を純敵討に化したのは、文化であらう。）然れば、寛政九から文化元までは僅かに七年あるのみである。寛政

九年當時の黄表紙作家は、京傳、楚滿人、慈悲成、樹下石上等の時代の作家と共に、新進作家たる三馬、一九、彼、が名を現してゐる。然るに三馬も一九も未だ彼程のものはなく、先輩の京傳、慈悲成の徒の作、また後代に謂ふべき程の話題を殘さなかつたのに、獨り彼の作のみが、卽ちこの「似字盡」が世評に上り、彼の豫期以上の效果を虛榮心の强い彼に與へえたのは、是れ文學者として彼は頗る幸運兒であつたと謂つてよからう。然し、彼としても、此の作には、相當の努力があつたことかも知れぬ。果して世評を贏ち得た。恐らく後の三馬作の「小野篁譃字盡」（享和三年）の類は、此の「似字盡」の影響の下に生れたものであらう。とに角、此の「似字盡」のふざけた趣向は、墮落した機智に沈湎享樂して、我人以て得意にした、當時の人心にいたく迎合したのであつたらう。然らば、「似字盡」はどんな内容の物か、以下その敍述に移る。

結繩で約をなす。大古の不自由。竹薄で紙に換る。三代の不物好。科斗萬葉のむかし〳〵。倉頡鳥迹を見て。遂に字を作り。空海涅槃偈を取て文をなせり。周興嗣が千字文、野相公の歌字盡、大篆小篆假名まじり。唐の日本を乘合す。二一新作早急の。一から二まで擯着は。勘定合て智惠たらぬ。眞行草紙の符牒附。ムヒッセツヨウと目ること書のごとし

寛政九年歲次丁巳春正月　　曲亭馬琴撰印

これだけが序で扉の文字。さて次のヒラキ二面は、右、參議小野篁の肖像。左、卷物形になつて、

「似字盡」の内容

その外題に無筆節用書法傳授之巻とあり、巻物の面には、江戸の無筆と京の無筆との、縺を少し包んで、ちつと來ぬか、梯子に杖一本畫いて、月末（つきづゑ）にのぼらうと判じさせた、無筆節用書法の功徳を述べてゐる。上は、ヒラキ二面共に、右より續けて篁卿の略歴を「堯惠抄にいはく」云々と、かゝる物にふさはしき輕口口調で述べ、終りに無筆節用似字の卿の發明にいひ及んで、似字の效用廣きを稱へてゐる。

次の二面からは、右の隅に一廓、似字をそれ〴〵現はし、殘りの一面半は、その似字に連絡した畫面と、人物の會話、上欄の地の文、凡て黄表紙の體裁を追うてゐる。然し普通の黄表紙が、一篇一貫したある說話をなせるに反し、これはその面の似字によつた、それ〴〵特殊の場面と叙述であつて、全篇一貫の說話でもなければ、即ち全然小說的形式を保つてゐないものである。寧ろ江戸末期によく見うける幼童向の文字學びの繪本の如き觀があるのである。

第一は、様とかしくと、文と候との似字で、字の左りぶちに「さまはさる、梅のつぼみはかしくなり。文はかんざし、そろ鳥のあし」とある。繪は、小姓吉三とお七。左りに吉三、坐つて梅の花を活け、右にお七、立つて文を手にしてゐる。お七の言葉に「八百や萬のかみかけてばんに青なといはしやんしてもおやのめにつくとうのいも中をわりなに」云々と、商賣物の青物づくし。吉三の方は「コレ〳〵そんな青ものづくしのぢぐちをいはずと何も小姓とおぼしめしかわいがつてやつてくださんせ」

とある。上は「十三のはつ午に戀といふ字の手習はすいたすゞりと思ひつゝ云々。世の人のこれを手ほんにつゝしみによし」と、手習づくしの地口である。道義の芽生えはあつたが、矢張り人並に戯れてゐる。

以下は、文を省いて、右角の文字と、その歌と、及び畫様とを説明してみよう。

第二、只、苗、月、申、田口。「只まないたなえは手おけに月ほうてう申がひしやく田口あんどう。」(右は、膳を持つた女、擂鉢にあたる男。左は鉢を拭く女房、俎に鯛を料れる亭主。)

第三、人町、囚、丁、叶。「人まちがたそやあんどうとらふ文丁はかなぼう叶てうちん。」(右は仲之町天水桶が見え、提灯を手に持つた金棒挽の男と新造。左は花魁と禿。その左に誰哉行燈。この畫面頗る重政(北尾)としては上乘。さて以上のこれだけにも既に肯づけたやうに、即ち畫面中大抵、人物の持物又は背景の何れかに、似字の材料の凡てが含まれてゐることである。それが大抵、自然に運ばれてゐる。以下同じ。)

第四、丁內、十、中、一。「てうないがすきに十のじつるのはし中はさいづちいちはかなてこ。」(この面、「似字盡」上中下の中、上の終り故、半面のみ。似字の左、すぐにそれ丈で纒つた繪。鶴嘴を手にすると、振上げて地を掘れるとの二人の男。)以上上の卷終り。

第五、長、品、田、日、目。「長はつる品は三ついし田はくつわ日はふたつ引めのじ三つ引。」(この圖、半面のみ。繪は、刺繍をしてゐる眼鏡の男と、その師匠らしい、向つてそれを見る煙管を啣へた男。)

第六、卞(へん)、山(やま)、口(くち)、山下(やました)。「へんはやり山はやつこのうしろむき口はもつそう山下たけみつ。」

此の二面は、別摺にした寫眞版の如くである。畫面は謂はなくとも知れよう。夜鷹の圖としてまた好個の一典型。文字は、特にその全文を左に掲げよう。以て寫眞版不明の個處を對照されたい。

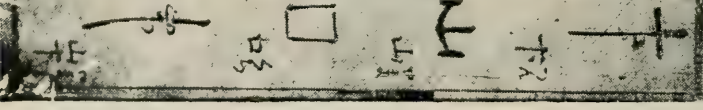
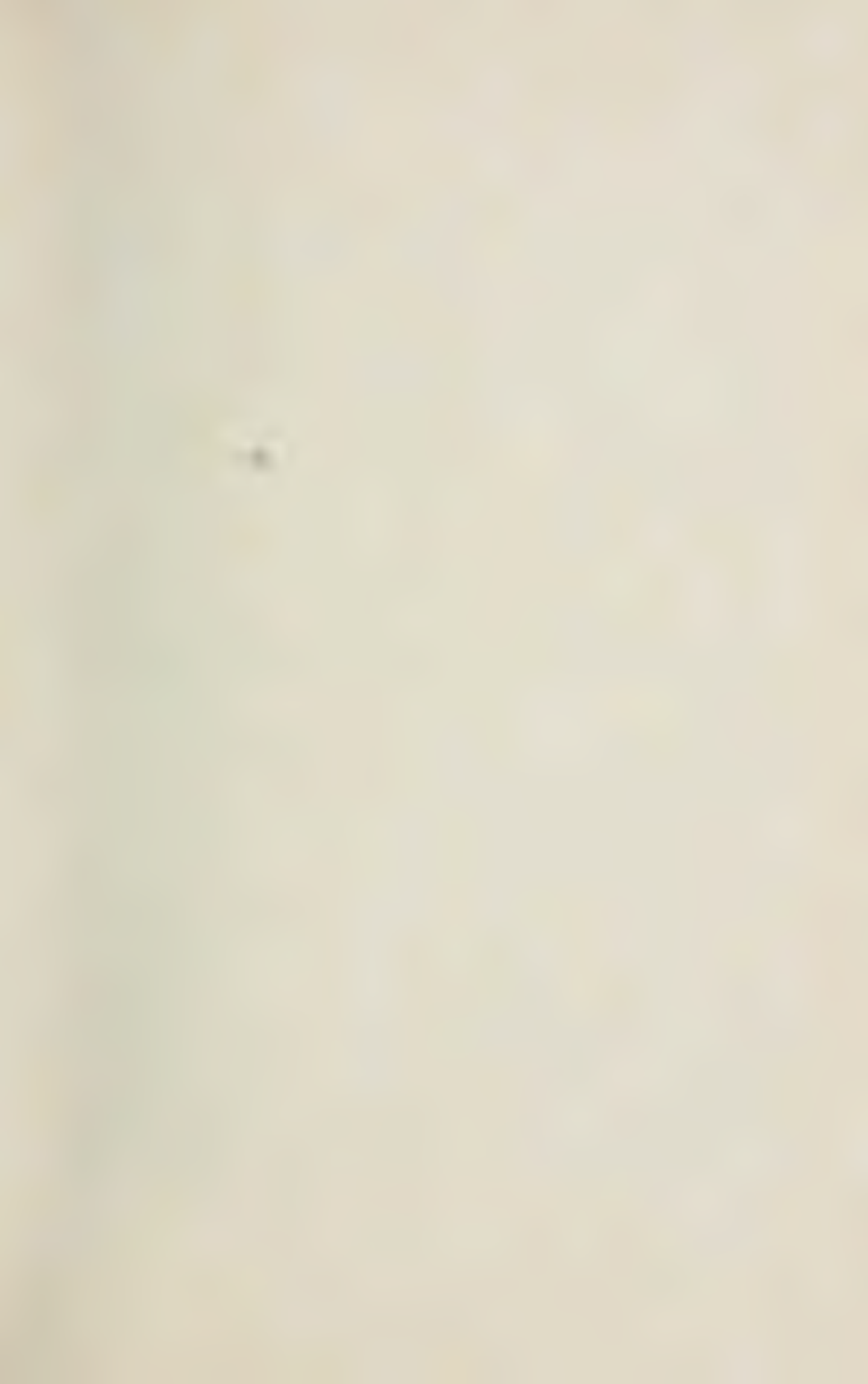
やつこさけをのめば心つよくなりてちからがつよくなる奴はよくつとめ心つよくなる奴はけんくはをする奴といふ文字に心をそへれば怒(いかる)とよみちからをそへれば努(つとめ)と又奴といふ字を二ツにわくれば女又とかく女ゆへにまたによこねのやまひありもじなぞといふものもあらそはれぬものなり

「コレ／＼御むかひにゆきをるがおそくなるはい

「コレサあそびねへ口あけだはな

「見事／＼ちやうちんのものをせうといふところだ

第七、石、邊(ほとり)、込(こむ)、双(ならぶ)。「いしの字がせんどうほとりほかけにこむはまんぢうならぶほばしら。」

（これも同じく私娼、舟饅頭の繪である。文にも「西施が媚あつてせいしが顔色なく陶朱が富貴なき閩越の潑娘(ひけもの)つねに江湖にさほさす舟まんぢうは……まみへよりはなはちりぬる御用心／＼」とあり。繪は、右、船頭と船の苫、左、船首に立つた饅頭の君。その上、飛べる河蟬の群。言葉にも「さなだの與市のあふぎのまとじやアねへがこんやも大かりまたでゐられるのだしみ／＼つらひのう」と來た。尙、似字の歌の「こむはまんぢう」は一寸解し難からうが、何でもない。込の入が、船の苫。辶は、舟のさきに立つたまんぢう君の形である。こゝに於て、奇智賞すべしか。序でながら、初代豐國の「繪本時世粧(いまやうすがた)」の坤の巻の最尾の繪に、丁

度この「似字盡」の舟饅頭と同一構圖の繪がある。但し此の「似字盡」の重政畫はお福の饅頭であるが、豐國の繪本は、恐らく同類のものであらうが、懸絶した美女となつてゐる。)

第八、合、寶、亭、此。「あふ番やたからといふ字はんしやうなり亭はひのみ此がひのばん。」

(繪は、二面にひらいた江府大通りの俯瞰圖。左、雲の中に、屋根越しに火の見。下は、人馬、車、侍の登城姿。)

第九、雨、久、圍、而。「雨なること久はいなむらかこいかごしかふしてこそくまでなりけり。」

(繪は、籠を背にした里の童の手を差出せる三人と、左、扇を何本も手にして子供らに差出せる山伏。當時安全祈禱の意で、かゝる山伏の流行せしなるべし。但し特に扇といへるは、この扇を各戸に與へ歩きしか。現に、文の終りにも、「神道者の災禍消除しゆげんじやの安全祈所、ぜんしうの立春大吉これらが文字のかゞしなり。こうもあらうか、辨けいがそこらあたかの門松に扇なけこむけさのとしたま」とある。言葉に、「アレまかしよがきた」、「まかしよ〳〵」「あにイヤ十六むさしぼうをしてあそばう。」「コウあふぎをとられてはいたしぼうべんけいだ」とある。「まかしよ」とは、かゝる山伏の名か。それとも山伏――武さし坊――十六むさし坊の地口から來た、負かしよ〳〵か。或は又、扇を蒔かしよ〳〵のまかしよか。それとも山伏をまかしよと特に謂うたか。未考。)

第十、へ、ム、ヨ、レ、丁。「へはまみへムの字ははなよヨの字耳レはつくりひげ丁ひたいなり。」

(此の絵半面。肌ぬぎの男の右腕にくりからの額を彫つてゐる彫師。)以上、中の卷終り。

第十一、壺、呂、皿、舍、回。「つぼはつぼ呂の字はかめにさらはさらやどるはちろりかへるひちりん。」（半面の繪。酒屋の店先。腰掛の二人客、酒屋の亭主。）

第十二、乙、年、云、廿日、志。「おとははりとしはつりさほいふはうきはつかおかもちこゝろさす笠。」（右、釣をせる太公望と左、周の文王。）

第十三、百、思、時、入、國。「百はりんおもふはもくぎよときはかね入はしゆもくにくにはじやうから。」（右、布縫へる嫁。左、佛壇に向ひ、撞木を鳴らしつゝある姑。）

第十四、門、東、廿、京。「門ひやうし木東といふ字かなあんどうはたちは木戸に京は高札。」（右、夜廻の爺と犬。垣根の前に高札。左、垣根内、緣側に娘と子供。と庭の一部。）

第十五、怒、南、雨、乃。「ぬはねづみみなみはかめにあめうさぎつえつきのゝじあしのないたか。」（風鳥と簑がめを見てゐる母、子供、往來のもの。）以上、下の卷終り。

以上の本文十五丁以て上中下完結である。此作が、人氣の高かつたことは、翌年、京の西陣の織屋が、此の「似字盡」中の似字を金襴純子の中に織出して諸國に賣出したといふにも分らう。（この事、本記述冒頭の「作者部類」の文中にも見えたり。）殊に青本年表にも已に記されてゐることであるが、本書は、天保十年、國芳畫を以てその再板を見てゐる。如何なれば、かほど世に迎合されたか、可笑しい程である。さて馬琴は、この作に當つたため、矢繼早に、翌年（寬政十年）後編「鹿想案文當字盡」を出版

した。馬琴の筆と稱する、京傳の生活、家庭性行等に比較的好材料多き、且つ寛政享和文化頃の文學史の好材證に富める「伊波傳毛乃記」の中にも、

是より（寛政三年）三四年、草冊子の趣多く教訓を旨とせしかば、世人は其意を得ずして、京傳は趣向の盡きたるにや、近口出る草冊子はをかしからずといひけり、依之馬琴が作やゝ行れたり。この比より萬寶、慈悲成等が作は、ます／＼行れず、一九、三馬の兩作者出でたれども、なほさせる評判なかりき。一九は寛政九年の冬より名を出し、三馬が作は又一兩年後れて出たり。云々。

とあるが、自分は、今此等の彼の自畫自贊を其儘受入れようとはしない。唯彼が壯くして既に大家の風格を衒ふに急がしく、また時好を捉ふるに巧、且つ彼は讀本作家たるに終始したるが如く見ゆるもその實半面に過ぎず、その讀本の中にも、精神的遊戯好色は隨處に見られ、且つその初期作には、斯くの如き低級なる作を以て、しかも時流に投じ、得意になつて後編を著し、又之を再版した。殊に再版をなしたるは、彼が鬱然たる讀本大家となり了した時である。（此の再板は前にも述べた天保十年。即ち彼の七十三歳、八犬傳大尾の二年前、卒前九年である。）即ち約言すると彼に一は、此の「似字盡」に餘程の自信があり、且つ得意さがあつた。恐らく初期の出世作として懷しみもあつた。一は、彼のやうな讀本作家の大家にも、この夜鷹や舟饅頭や靑物づくしのお七やを耻ぢぬ程の時好本位の彼があつた。唯是丈のことをこの「似字盡」から信じれば十分なのである。彼は聰明であつた。春水等の如く淫猥を露

骨に現さなかつた。從つて上司にもよく、しかも下民にもよくて、亭々たる道義の主張、流麗なる文調、該博を誇る引證の中にも、船蟲（八犬傳中の嬌婦）賣婬のあの醜怪なる描寫を平然とやり了せた大膽、道義の皮を被た肉慾描寫を完了し得たのである。此の「似字盡」は然程の彼のケレン澤山を云々すべきではないが、彼の後年抹殺に奔走した（初期の低級作、又は京傳門人の名ある板木を押收して歩いた。）自負倨傲、よくいへば自重の精神からもなほ抹殺しなかつた、否平然晩年再版を許した、爾く自信のあり、且つ彼自身讀本主義の彼として尙之に牴觸しないと思つた戲作であることに想到すると、私は此の現物を目にし、それに晩年のあの堂々たる、白面以て人を威嚇する讀本と、彼の鹿つめらしい顏との對照に、可笑しくなるのである。

とに角此の「似字盡」は、黃表紙が轉化して、敵討物にならんとした過渡期、黃表紙正脈の最後の流行作であつた。（黃表紙は敵討本位となり、やがて例へば種彥らの合卷となつた。）殊に讀本の大家、道義の主張を以て終始せる如く謂はれた剛直無比、硬派の如く見られる（然ることを欲した）彼の、比較的、吾人からいふ嫌味の脫けたうぶな人間的な彼の現れてゐるものとして、且つ黃表紙としては珍らしき（自分の淺識からはである）一貫した說話を成さざる異例として擧げたのである。（彼の遊戲的好色的の氣分本位からいふと、後の「敵討蚤取眼」などは、まだひどいものである。蚤にさゝれて、裸になる女房の話など。）以上本記文の長々しきあつた由來である。（大正十二年七月）

「まかしよ」について

前稿、「似字盡」第九の山伏のまかしよに就て、左の解說發見、轉載しておく。

一、童謠集一卷　行智四十三歲編とあるのみにて、其年代を記さゞれど、卷末に願人坊が袷を二十四五年前までは、天神樣くださいといふて追つかけあるきしなり。其後はまかしよ〳〵と云、今はまきやがれといふ云々とあり。而して「虛實馬鹿語」（明和八年江戶印本）市中勸進修行者の條に、大山不動明王芝愛宕並に元三兩大師と唱へもてゆく、跡追て附まとふ小童等、佛神耳にも入れず、父母の如く慕ひ奉ればこそ、天神樣ア下さいといふ云々。又寬政頃江戶の風俗を記せる「蘭の落葉」（寫本）に、童等の天神さま下さいとはやせしも一昔にて、いつしかまかしよと名をかへて、天狗の面をかぶり云々とあり。まかしよは江戶以外に絕えて無き由諸書に記したれば、云々。（近世文藝叢書、第十一俚謠の緖言。朝倉無聲氏）即ち、蒔かしよ。お吳れの意から來たのであつた。尙同氏の「此花」第九に「まかしよとわい〳〵天王」なる考證がある。「まかしよ」は橋本町に住んだ願人坊主の內職で、寶曆時代から流行り始めたものであつたが、寬政年間に、町民と事の行違から喧嘩した、それが累を他に及ぼして、市中の憎まれ者となり、終に廢絕した。後には、わい〳〵天王と同一物の如く見做され、兩者混同さるゝに至つたといふ。としても、この「似字盡」のは、山伏姿で、扇を蒔くのである。「頭を白布、腹に菰繩、たゞ一枚の白衣で鈴鐸を振つて、天神樣の方一二寸の繪を蒔く、每年冬十月から寒中に限つた」のとは、違ふがどうしたことだらうか。まかしよの變態といへば論はないが。

近世墮胎史雜考

近世墮胎史の資料は、確かな物としては案外其數に乏しかつた。勿論、倉卒の際の渉獵であるから、他に洩らした物が多いのかも知れない。廣文庫所收の諸雜書（該書「墮胎」の項）が比較的まだ力になつた。以下の自分の記述は廣文庫其他の揭載に、幾分系統をつけ理論を挿んだといふものに過ぎぬ。然し尙以て一般識者に、一讀を強いる點無きにしも非ずと、卽ち敢て物した。尙一言自分の「墮胎」には、廣狹の二義を持たしめてゐる。單に墮胎とのみ謂ふ時は、（此の命題の如く）眞の墮胎と嬰兒壓殺と卽ち此の兩樣を兼ねて曰ひ、他と並べ曰ふ時は、（嬰兒壓殺若しくは避姙などゝ共に）狹義の眞正の義と思うて貰ひたい。

動機上二つの區別

墮胎の動機上二つの區別あることは、無論古今異りのない話である。江戸時代にも無論さうであつた。二つの區別とは、卽ち育兒制限の意味からと、痴情の結果之を掩はんとしたとの二つである。育兒制限は今に始まつたことではない、夙うからあつた。然し此の江戸期に於ける育兒制限の意味は、爲政者が之を強制的に爲したのは殆どなく、卽ち大抵は生活に餘裕なき者が自ら之を爲すのであつた。さうして此の意味からの墮胎は、他に較べて生活程度の潤澤でなかつた細民階級に無論多かつたのであるが、然し江戸時代は殊に其の土地狀態の肥瘠、或は裕福か否か、物資の貧弱さと豐富さとの如何

に繫がつて、物資の生産の乏しい凶荒に屢〻惱まされたやうな邊土の民に、此の墮胎或は嬰兒壓殺が格別頻々と行はれたやうである。卽ち屢〻饑饉其他の天災に見舞はれた東北地方に此の風が盛んであつたらしい、是は公然の秘密であつたやうでもある。文化の宣布傳播の乏しかつたせゐから、道義心の缺如してゐた爲の理由も大にあらうが、然しそれよりも土地の凶荒、彼等の生活の逼迫が大なる原因であつたであらう。卽ち、邊陬の地方、格別東北地方に最も墮胎が多かつた。其の意味は、人口制限の意味から、親が各自にこれを行つたものである。

他の痴情の發覺隱蔽の意味からの墮胎は、無論邊陬の地にも行はれたであらうが、それよりも寧ろ風俗の一層頽廢した都會に、生活上の條件や物資は、割合に好都合であり。潤澤であつた都會に頻々と行はれたものと見て可からう。殊に京大阪及び江戸、所謂三ケの津には、之が多かつたであらうし其他相當に殷富を傳へた各城下には、此の痴情からの墮胎は無論多かつたに異ひない。その階級も庶民から、士流にまであつた事は無論で、殊に奧女中の類には當然の事であつたであらう。

奧女中と謂へば、格別大江戸大奧の女中共と、各俳優たちとに行はれた所謂不義、（江島事件などは不幸な犧牲者に過ぎない。他、殆ど此類の不義は、頻々たるものであつたらう。）それから來た此の墮胎行爲が、必ず頻行した筈である。其他町家の士女の間にも、此の犯罪が行はれた事は謂ふ迄もなく、花柳界にも無論行はれたであらう。花柳界の意味は、發覺を惧れるよりも、寧ろ自家の聲色の美の保存と人氣

の衰退を防止する意味であつたらうことは、古今同一であらう。

東北地方は、誠に悲慘であつた。雜書に現はれた墮胎（多くは嬰兒棄殺）は、殆ど東北地方に限られてゐる觀がある。饑饉が丁度東北地方と殆ど想を聯ねて考へらるゝ如くにである。先づ人口制限の意味のこの墮胎、若しくは嬰兒棄殺を敢行した東北の例を、諸書によつて述べて見よう。

「窓のすさび」（享保九年の自序あり）には、

「庄内（酒井氏領分）の民、東國の習にて、子生じて三四人にも及べばまびくとて殺し捨つる事を、老臣水野大膳光朝は深く憂へ、樣々思ひけれどもとかく改めざりければ、貧民の養ひ難きものを選び、その子五才になるまで扶持米を與ふる事になりて、此の風改まりぬとぞ。
戸田氏宇都宮に在りし時にも、此の政ありて革まりぬる由なり云々。」

先づ庄内と宇都宮の例である。さうして名君賢相の之が匡救策を講じた例でもある。

墮胎防止に努めた名君は、尙色々ある。本朝要樞（寫本四卷。年代作者共に不詳。）の第四卷には、

「日本東西の邊境に至りては、男女子多く生るれば、其の父母なる者、抱婆（とりあげばゞ）に命じて往々之を殺さしむ。云々。近頃、會津殿、私領の內にして、子を殺すことを深く禁ぜられたり、其後此事非ず。仁政と謂ふべし。」

此等は、前述の例も亦却つて墮胎と謂ふべきではなく、嬰兒の棄殺であらう。然し墮胎も之に伴なつて無論慣行されたであらう。但し會津中將は、（保科正之か）之を禁じたとだけであつて、如何なる對應策をとつたか、その仁政の所以が明らかではない。

甲子夜話（松浦靜山侯の編纂。靜山は天保十二年八十二歳にして歿したれば、其の以前の記聞に屬す。）にも、その第二卷に、

「奥州の民間は、子を産すれば卽ち殺して（久彌曰く、これも嬰兒棄殺の類なり。墮胎とは謂ふべからず）育つる事なし。これ取揚婆の産所に於てかく爲るとぞ。常州の俗に同じきか。然るを樂翁初め白川へ入部ありてより、殊に之を禁じ、國中に令を廻し、民間に姙身の婦あるときは、屆けさせ、醫者一人と産婆一人を遣はしあらため、臨産の時も亦遣して取揚げさせける。但しその手當として、一口に金壹圓二方宛を與へたりしとぞ。」とある。

近世畸人傳（伴蒿蹊著、五卷。寬政二年の序あり。）第二卷にも、

「關東の習ひ、貧民子あまたあるものは、後に産せる子を殺す。（久彌曰く、これまた間引く也。多くは第三兒より間引きたるものゝ如し。）是れを間曳と謂ひ習ひて、敢て慘むことを知らず。貧凍餓に及ばざるものすら倣ひて此の事を爲せり。官の教あれどもなほ然り。然るに陸奥白川の傍邑須賀川といへる所に、內藤平左衞門といへる豪農之を歎きて、年每に緣を求めて、間曳かんと思ふもの有りと聞けば、其の養ふ財を與へて救へり。もと米價賤しき所なれば、多分の費にはあらずと、自らはいへりとなん。云々。領主も賞し給ひ、苗字帶刀をも免され士に准へらるゝといふ。」

と。これは名君直接の行動ではなくして、傍邑の一慈善家の話である。

百姓懶惰、農に勵まずして、墮胎を流行らした話が、「草木六部耕種法」（佐藤信淵、天保三年の著。）

佐藤信淵の論

といふにある。其の第十一巻に、

「上總國は領主の在住することなき國なるを以て、上より農政を世話すること無きが故に、百姓は甚だ懶惰にして農を勵む者あること少し。是を以て膏腴の地を未だ開發せずして、荒野のみ多し。云々。故にかの國の百姓十万餘家ある中にて、婦女の自ら其の兒を墮胎して殺すこと、毎年三四万人づゝなり。云々。今の世に當りて、百姓の自ら己が子を殺す國は、啻に上總のみならんや。滔々として天下皆然り。」

毎年三四萬人づゝの墮胎とは、ちと話が大袈裟のやうなれど、或は此の驚くべき數が、事實であつたかも知れない。

其他、一般、凶荒飢饉等で、邊境の民が墮胎した事は、尚幾干の書に現れてゐる。今その要を摘むと、

「……富民の田畑を借りて耕作するを以て、公税の外に數多の增税を取り立てられ、豐年なりと雖も、衣食の足らざるに困しむ。凶年饑歳に於てをや。是故に父母ありと雖も孝養を爲すこと能はず。婦人姙娠することあるも、大抵毒藥を用ゐて此れを墮胎す。云々。所謂富豪兼併の禍に罹りて、其父母を飢寒せしめ其兒孫を毒殺して、遂に他邦に離散する者、幾万人と云ふ事を知るべからず。豈是農民のみならんや。山民鑛民百工漁夫に至るまで、花利の金に縛られて、富民の爲に生涯役使せらるゝもの極めて多し。」（佐藤信淵――垂統秘錄）

近世唯一の農政改革論者、經濟學者の上首であるだけ、（信淵は、嘉永三年正月江戸に沒す。壽八十

一）言ふ事が、現代の時弊にも亦適中してゐる。問題外ではあるが、古今同一轍の理を道破する哉と、讃歎せざるを得ぬ。同じく信淵の他の著述、「鎔造化育論」にも、

「後世に至るに及びて、諸公奢侈を好み、淫樂を縦にす。邦内空虚、百姓困窮し、十室の邑、年々子を墮胎陰殺する者、二三を下らず。或は一國七八萬に及ぶもの往々之有り。況んや四海の大、算ふるに勝ふべけんや。」（原漢文）

とある。七八萬といふ數は、果して誇張に過ぎなかつたのであらうか。

「何れの國も貧乏百姓のみ極めて多くして富饒なる村里あること鮮なし。百姓貧窮して食物衣類の給らざるが故に婦人胎むと雖も、其兒を養育すべき儲蓄なくして、往々密かに墮胎すること多し。」（草木六部耕種法、一）

「本朝にも間々多き事なり。或は卑賤の家は、貧苦によりて胎を墮し、或は東家の墻を越え、穴隙を鑽りて婬行を爲す者の類ひ、懷孕の事あれば、必ず墮胎の藥を用ゐて不仁不義を爲す。故に命を失なふに至るもの夥し。云々。況んや富貴の家、婬行を隱し、過を飾る類の者此の事を爲すあり。不仁不義戒しむるに言葉なき也。」（婦人壽草、四）（「婦人壽草は香月啓益の著。全六卷。寶永五年刊行なり。婦人產の心得書なり。」）

以上の如く、隨分悲慘な境遇に置かれた邊土の民は枚擧に遑なき程であつたらう。況して人倫の敎まだ普くなかつた邊土としては尤もである。さて「婦人壽草」の項の最後にも罵つてゐるが、窮乏の爲ではなく、痴情隱蔽の故からの墮胎も都鄙多かつたことは勿論である。田舍の例としては、「田家茶

「まびく」

話」といへるに、下女が主人の子を妊んでおろさうとした話が出てゐる。同書の三に、

「國々にては、孕める子を四五月におろすことあり。是れは國の風にて菜大根を捨つる様の心持にて、罪とも何とも思はざるなり。又都に遠き在々にて間引とて、安産したる子をすぐに殺すよし、皆罪は同じ事也。昔の事にてありしが、下女に手をかけ懐姙したる子をおろさんとて、主人の母御には四五日逗留にて參る由を申出でしを、下男其の事を知り、密かに母公に告げければ、それは速く追付きて呼返し來るべし。我が爲には孫なりとて、親里に安産させ育て、成長して後に養子に遣はしけるが、追々立身して一萬石にて國の家老となり、其の國を治めし事あり。かゝる者をいかでか水となし果てんや。」

といふ記事である。江戸の話が尙續いて語られてゐる。曰く、

「其の水子に性なきものと思ふは、大いなる了簡違ひなり。江戸にて或る婦孕みて、既におろさんと、おろし婆の方へ行きて賴みける。其の夜の夢に大きなる男來りて云ふやう。我れ折角腹に宿りしものを闇より闇になし給ふかと恨みしまゝ、母其の手を取りて引きければ、手拔くると見て覺めたり。其後おろしたるに、其の子の片手ぬけておりたるとぞ。」

これは、因果譚めくが、兎に角かゝる話も相應に信ぜられて、一面墮胎防止にもなつてゐたらう。

江戸の流行は此の婦位ゐの話ではなからう。序でに以上の文中、屢々諸書に現れてゐる「まびく」なる言葉である。これは書物によつて、墮胎と嬰兒棄殺と兩様の意味を含んでゐるやうである。本來は、無論嬰兒の棄殺、卽ち育兒制限の意であつたらうが、後には胎兒の殺害卽ち墮胎をも併せて意味した

墮胎幇助の營業

であらう事は、想像に難くない。「言海」などには、〔片田舍などの惡俗に、子多き時、親自ら生兒を殺す。〕（多子を疎らにする意。）とあつて、その語原は、同じく「間引」の解釋條下の、〔畑の蔬菜の芽出しなどを、間を置きて引拔きて疎らになす。〕より來たものであらう。從つて地方の言葉として傳播したものであらう。（元祿九年版、好色本「小柴垣」三の四節、「木曾山の化生」の中にも、「夫は山にわけ入、世を渡る業にいとまなく、その留守には…事しても、誰咎むる事もあらず。そのかたまり五人とも出來れば、世話のたねと、子をまびくといふはなしはこゝの事。」とあるのも、間引の一例である。戲作ではあるが、この一節は、「間びく」文獻史の一ともするに足りよう。木曾といふのも、作者多少據る所はあらう。）

次に墮胎には、婦自ら行ふのと、産婆其他によるものと、兩樣があるが、婦自ら行ふのは姑く措き、他の幇助者には、卽ち産婆等には、如何の狀態があつたらうか。驚くことは、都鄙共に殆ど營業狀態の彼等があつたことである。多くは産婆、或は物慣れたる老婦であつた。

墮胎幇助を營業にした者の例は、

「浪華にて今は、傘職なるが、其の家の母、子おろしを業とせしが、今は母死して其の業はせざりし也。或時、淨土宗の尊き僧來り給ひ、無緣の家にも御立寄を願ひて、請待したりしに、佛前にて回向し給ふと、衣の袖の裳を兩手にて拂ひ〳〵し給ひし故、其の後にて御弟子尋ね奉りしに、彼の家は、子おろしをしたる家なるべし。赤子來りて我に取り付く事夥しかりしかば、それを拂ひ去りたるなりと仰せられしとかや。」（田家茶屋、三）

とあるが如しである。此の話の傘職業の母の如きは、産婆であつて墮胎を間々行つたといふのではなく、眞の墮胎專門業者と謂ふのであつたらう。それだけ、此の母をして墮胎を營業化せしめ、死するまでその之を續けしめたるだけ、浪華の淫靡な風俗が之を需要したのかも知れない。恐らくさうであつたらう。

西鶴の「好色一代女」（貞享三年版）にも、墮胎の記事がある。これは、前述の「小柴垣」同樣、文學的作品の例ではあるが、寫實風な西鶴の作として、當時の事實（尠くとも墮胎の風習に就て）とは云へよう。即ち、その「卷之六、三の夜發の附聲」の中にある。

「ゆく年もはや六十五なるに、うち見には四十餘りと人のいふは、皮薄にして小作りなる女の徳なり。それも嬉しからず。一生の間さま〴〵のたはふれせしを、おもひ出して觀念の窓より覗けば、蓮の葉笠を着たるやうなる子供の面影、腰より下は血に染みて、九十五六程も立ならび、聲のあやぎれもなく、おはりよ〴〵と泣きぬ。是かや聞傳へし孕女(うぶめ)なるべしと氣を留めて見しうちに、むごいかゝさまと銘々に恨み申すにぞ、扨はむかし血荒(ちおろし)をせし親なし子かと悲し。無事に育て見ば、和田の一門より多くて、めでたかるべき物をと、過ぎし事どもなつかし。暫らくあつて、消えて跡はなかりき。……。」

子供が、「おはり〴〵よ」というたとある。これは、「お鍼(はり)よ〴〵」ではなからうか。子供らは最初先づ自分たちを墮した鍼醫を恨んでゐるのではなからうか。即ち當時、墮胎醫は、多く鍼術醫ではなかつたらうか。尙、九十五六程も並んだとは、どういふことか。全部自分の子供らしいが。すると十五

六から六十頃まで、四十五年に始終孕みづめであつたとした所が、五ケ月で一度墮し、少くとも一年に二度づゝ孕んでは墮したことになる。彼女の生産力の偉大さに呆れる。無論誇張ではあらうが。

尙同西鶴の「好色五人女」の二、樽屋おせんのはじめにも、夫婦池の小さんといつて、昔子(むかし)おろしを專業にした老婆が、ちよいと顏を出してゐる。尙、同西鶴の「好色二代男」には、「張紙萬葉書きにして、屋彌樣於路志藥(やゝさまおろしぐすり)あり」とした、京の墮胎藥賣店のあつたことを記してゐる。

閑話休題、とに角京阪地方にも、以前から、この非行が流行り、したがつて專業者を生んだものであらう。但し無論京阪のみには限らない、江都も然りである。「中條」(或は仲條)とは、當時の江戸に於て、墮胎醫轉じては墮胎その物の義にも一般使用されてゐた。「松屋筆記」卷百六に、「今の世中條流子おろしの術都下に遍滿せり。墮胎の藥技を施す事なり」とある此の中條である。(「松屋筆記」は有名な高田與淸〔弘化四年歿。壽六十五歲〕の雜考、卷百二十。)

稍問題外ではあるが、幾分記述の順序上、穩婆(とりあげ婆)と中條流產科醫と、其他江戸期產科醫の一班に觸れて見よう。

「穩婆。とりあげ婆なり。國史續世繼等古代の實錄にとり上げ婆の事なし。產に慣れたる常の老女、此の事をせしなるべし。今世のとりあげ婆と云ふものは、近世の事なり。是は老女など召使ふ事もなきもの、あたり隣りの產に慣れたる人を賴み、其の賴まれし人を巧者なりといひ觸れて、處々より賴みしが、後には家業のやうになりて、とりあげ婆といふもの出來しなるべし。」(安齋隨筆)

とあるが如くで、あつたらう。（安齋隨筆は、伊勢貞丈〔天明四年歿七十歳〕の雜考。二卷）

斯かる產婆が間々墮胎にも與かつたであらうと思ふ。無論此の產婆の中には中條の流れを汲んでゐた、半ば醫術を心得たものもあつたらう。

中條帶刀

中條とは、中條帶刀の流派に名づけたものである。

中條帶刀といふ豐太閤に仕へた男がその祖である。帶刀の事は、「婦人科中條流の祖なり。秀吉聚樂城に在る時、帶刀兵を用ふるの暇、醫術を好み、治療を善くす。婦人科最も奇なり。」（延壽和方彙函）といふに據れば、彼は武人であつて、醫を片手間に行つたものらしい。さうして恐らく秀頼をとりあげたものも彼であつたかも知れない。どうして彼の醫術が、後世に傳統を遺し、それが江戸に於て最も繁昌したのであらうか、それは分らない。無論京阪にもその流派が榮えたことではあらうが。

賀川玄悦

江戸期產科醫として中條に比肩して繁昌したのは所謂賀川派產科醫である。中條賀川二派を以て殆ど江戸期の產科醫を代表してゐたものである。賀川氏は、玄悦がその初代。彼は近江彥根の產、安永六年九月、七十八歳にして歿した。卽ち中條流は其の創始の年代に於て兄たり、此は弟たりである。玄悦の著述「產論」は、皆川淇園が之を潤色したといふ物であるが、當時產科醫家の唯一の權威であつたことは事實である。

然るに面白い事は、墮胎醫としては、賀川氏の流派は餘り名を殘してゐない。或は賀川流の墮胎醫

「末摘花」の句

もあるにはあつたらうけれど、中條流從來の墮胎が餘りに時人に知られてゐて、賀川流者の墮胎をも直ちに中條と呼びなしたのかも知れない。兎に角中條が墮胎醫若しくは墮胎の異名たるが如きは、江戸軟派に與かる者の誰しもの夙に知る所である。

中條が墮胎の本元であつたことは、安永五年中季秋の序ある末番の句集「末摘花」四編中の諸處に、その證據がある。全部で十四五句は、中條に關したものである。その中、比較的お座へ出せるものを謂ふならば、

仲條は後闇（うしろ）くも手闇をとり
仲條へ行くより外の事ぞなき
面白い跡仲條で待つてゐる

などであるが、此の「仲條」は、（但し中條帶刀の中條、末摘花には全部仲條とある。）產科醫といふよりも寧ろ墮胎醫たる事明らかである。さうして此の中條醫は一般に男か女か。これは主に女醫の業であつたやうである。卽ち昔の子おろし婆や取り上げ婆が、稍醫術的に進步したものであらう。需要者の心理からいうても、これは、女醫が當然だ。現に延寶八年の墮胎醫禁止の町觸れにも女醫とあるとのことである。（女醫者―仲條流―墮胎醫と、無論あつたのである。）

主人と下女との戀の跡仕末としては是にも例がある。卽ち、

仲條へ行くに褌下女ねだり

である。ねだるべくしてねだる下女と、女房の嫉妬、人の思はくを氣遣ひ乍ら粮くなつてゐる主人との照應を想ふべしである。

　さて中條は、普通の產婆とは違つて、自宅手術を主としたらしいことは、此等の句によつても知らるゝが、尙其家の表には、「月水早流し」或は「朔日丸」の看板を掲げて、公然墮胎藥を販賣してゐたとのことである。さてその中條宅は、設備も整つてゐ、無論秘密も保てたであらうと思ふ。奥女中や大家の後家などで、中條の奥の間は、さぞ群集したことであらう。

　中條が、墮胎その物の異名となつてゐる句も列擧し得られるけれど、割愛する。何の因果で中條帶刀は、自己の姓によつて千歳に醜(しう)を流すのであらうか。思へば可哀想である。

　次に、墮胎に關する宮憲の制裁である。江戸幕府の「法令としても一藩主の禁令としても明らかに墮胎を禁じたる文書を存す」（百科大辭典）と謂へれど、該法令、或は藩侯の禁令なるもの、諸書を如何に檢索するもその斷片だに得る所がなかつた　唯、町觸れのあつたといふ說話や、違犯者の話は間々あるが、但しその所刑も如何なる程度であつたかゞ分らない。「百姓袋」の五に、

　「山家の住民、子を繁く產する者、初め一二人育しぬれば、末は皆省くといひて、殺す事多し。殊に女子は大方殺す習(なら)はしの村里もありし。（中略）偶々今の世にも此の事有りて露顯しぬれば、父母共に罪罰に逢ふ事

二兒制

村名主の主唱

なり。……又、雙子を產める事あれば、父母大きに耻ぢ恐れて忽ちに踏み殺し、或は媼婆(とりあげばゞ)に賴みて絞殺せしむ。……。」

とあるが、さうかと思へば、四圍の形勢上、現はに或は暗に墮胎を奬勵するか、或はさうした勢にまで順致せられていつた地方、刑罰の寬大、寧ろ默認放過の地方もあつたらしい。その例は、

「伊賀の藩主藤堂氏(何代なりや不明)は、藩內食糧に乏しきため、墮胎を奬勵したといふことである。尙九州の飫肥藩の伊東家では、嬰兒壓殺が行はれ、二兒制であつた。三人目の子供は「まびく」と云つて殺した。此の風、安井息軒の生れる前年(寬政十年)まで續いた。」云々。(「性」五ノ五、平井明夫氏說)

伊賀は、之に據ると藩主公然の奬勵である。伊東藩は藩からの命令か或は土地の風習かは不明であるが、とに角公然行はれたものと見られる。卽ちこゝで面白い斷定は、東北の墮胎は凶荒饑饉頻發の爲已むを得ずの事であり、然るに、四壁山なる例へば伊賀の如き、或は僻遠の地九州日向の如き、是は理論的食糧制限の義として墮胎を行つてゐたらしいといふ事である。さうして、東北附近の話題逸話の遺聞が比較的多きに、中國西國地方が比較的尠きは、藩自らこれを風習或は一種の民治策として咎めなかつたのに據るのではなからうか。

さて、次の例は、自治體自身の慣例(その主唱者は村名主)であつた例である。

「舊幕時代に墮胎或は初生兒を殺害する風が盛んであつたことは世人も知る通りであるが、此の弊風は常陸、下總に於て最甚だしかつた。此の事は、「天明集成糸綸錄」にも、特記せられてあるが、下總の如きは、大概

旗下の士の支配下に在つて、苛斂誅求相踵げるがため、人民困窮の極に達し、不得已（やむをえず）各地名主（なぬし）に於て各戸財産の程度により産兒養育の數に等差を設けたのである。此の等差は、特等無制限。一等四名、二等三名、三等二名といふのであつて、これ以上を養育するのは過分として排斥せられ、種々の社會的制裁を受けた。」

（大正十一年度、國家醫學界雜誌）

避妊の智識

匡救手段

當今流行の産兒制限とさも似たりで此はまた思ひ切つて强制的である。苛斂に苦しんだ邊陬としては自然の勢かも知れない。但し此話は、墮胎や嬰兒殺害の例とも限らず、避妊勵行のやうにも取れるけれど、當時の男女は況して田野の民は、多く避妊の何たるかを知らなかつたらしい。（但し避妊の少智識は少數者間にあつた筈である。例へば、當時の艶畫本艶本等に、避妊の方法を敎へてゐる。無論痴情の結果で、産兒制限の意味ではない。）偶々知つてゐても、彼等の眞劒な强盛なる性慾は、都人の避妊を事實行ふべからざる程度であつた。まして藥品又は機械的の避妊智識は、都鄙の論なく一般になかつた筈だ。從つて此等の話は無論避妊强請ではなくして、墮胎奬勵、嬰兒殺害强請である。さて肝腎の幕府其他としては其間如何なる匡救手段を取つたらうか。卽ち、「雙兒三兒を生みたる者に乳母の料を給し、明治に至るも猶數年、此の支給を續けた」とある。（日本社會事彙）然しその文獻は確としてゐない。

彼等墮胎の方法は如何であつたらう。無論、一、藥物嚥下。二、（機械的手術自己又は他がする）。

三、自己振盪。の如きであらう。悉しくはいはぬ。

洒落本より

以上脱稿の後、更に見當つた材料の一二を追加しておかう。

中條流云々といふのが、洒落本に見當つた。それは、一向不通替善運(甘露庵山跡蜂滿作。天明八年の版本。)の中に、

三かつ「此のぢうのものをおめへ見たか、　とは牛七と色事ゆへはらみしが、跡月より月やくをみねばきにかゝり、牛七が所へふみにてしらせてやりしなり。牛「ム、。　おれもあれがきにかゝつたから、其のくすりをもつてきた。と何かかみに包んだくすりをそつとたもとへ入れしは、てつきり仲條流なるべし。云々。

とある。但し此の、中條流とあるのは、果して中條が調合した藥であらうか。或は、既に中條流は單に墮胎の意となり、したがつてこは墮胎藥の隱語にすぎないのではなからうか。

「波の鼓」のお種

大近松の「堀川波の鼓」にも、お種が子おろし藥を貰つて飲む件がある。それは、いかなる動機からであつたか。作者は不倫遂行後のお種の心理に餘り觸れず、唯最後の本夫彦九郎歸國の日に、下女が主人の彦九郎から問ひ詰められて、

「御勿體なや。私は何にも存じません。此間お種様、人にかくして子墮藥を買うてくれとおしやりました。一貼を七分宛、三貼を二匁一分で買つてまゐつたばかり、……」

と。この女中の言葉で、はじめて知つたお種の姙娠、並びに墮(おろ)さうとまでした彼女の心的徑路が、幾分肯づけるのみである。お種の此の墮胎行爲は、果して慚愧から來たのか、或は單なる陰蔽から來たのか、それははつきり說明が出來ぬ。それにまた、その藥が果して利いたのか利かぬのか、それも分らぬ。

が、こゝに、墮胎藥の存在と、並にその賣價とある事は、我等の見つけ物だ。但しこれは、「波の鼓」當時の寶永頃の相場ではあらうが。さてその後賣價は不明なれど、こゝに又一つ、墮胎の藥名、並びに賣店の所在まで明らかにした記錄がある。それは、記錄といへないかも知れないが、寬政年間の破戒僧の記錄、誰も知る延命院實記（近世實錄全書第二卷所收。）の中に、破戒僧の日當にゆかりをつけた局条村(くわむら)（一說には桃村）の下女のおころが、姙娠したのを、日當の軍師柳全のすゝめで、墮胎せしめる件がある。

日當「其方よき樣に賴む」とて金子一分渡し、……。柳全は……、それより直ちに神田橋町へ行き、月水早流しといふ藥を求めぬ。是れ墮胎藥なり。……。(此藥を用ふるに法あり。但し粉藥にて、少し黑みあり。初めは鹽湯にて朝夕三度用ゐ、而して七日の內に其効しなき時は、此の藥の包紙を持參して、其譯を申さば、また外に藥を與ふると云ふ。)……。

おころは大に悅び、法書の如く四度迄藥を呑みけれども、一向其効し有らざる故、……柳全聞いて「されば、藥屋にて請合候へども、粉藥の儀に付、十人に一人は効能なき事ある由。然る時は、當人を召連れ來る

べし。差藥を致し候はんとの事なり。是は十人に一人も其利目あらざるといふ事なき由に候」と申すに（中略）………其夜直樣橋町へ連れ行き、差藥を致させ、……三日目に安々と流產なして、血心もなく肥立けるにより……（下略）

卽ち値は一分で粉藥、中條流の看板にもあつた月水早流し。それが利かなければ手重なれども差藥の方法もあつた。此の差藥でおころは三日目に流產したのである。日當も、この差藥には案じたといふから餘程危ない藥なんであらう。大近松の女中の言より、此の柳全の方が餘程墮胎藥の輪廓を傳へてゐる。實錄物故、どうせ當にはならないといふ人もあらうが、事件の經過に作爲は多少あらう、然し此等の世相の一斑は、殆ど眞相を傳へてゐると見做してよからう。現に、日當に對する上司の宣告文にも「……殊にころ懷姙の由承り、墮胎藥差遣し候……」とあるから、（寶曆現來集卷之二十。）この墮胎已遂事件だけは事實であらう。したがつて、此實錄の記事も、このあたり丈は、その儘信用されよう。（尙、日本社會事彙に、「京橋具足町に墮胎藥を賣る家あり。胎兒五ケ月以上なれば、證人ある場合に之を賣る」ともある。）

最近、左の記事が見當つた。

「水戸の藩醫穗積甫庵が撰める救民妙藥集（本誌本年新年號。）に墮胎の法を載せたるを、京醫芳村恂益が譏りしに、望月三英は、其隨筆に、墮胎は、唐にて白牡丹と云ふもの、專ら此の義を家業に致したるよし、此の廣き世界にかやうの儀もなくては、民用不叶儀有之也、聞のがし見のがしの事。恂益がせましく思ひたる

水藩の產兒制限

は、未熟の所ある故なりといへり。」(「日本及日本人」大正十二年二月十一日號)

この望月の墮胎默認論は、已むを得ざる產兒制限論である。ところが肝腎の救民妙藥集(「日本及日本人」大正十二年新年號所載)を調べて見ると、中々自分達の好奇心を滿足させてくれない。其の一二九に墮胎の事(はらみたるをおとす事)といふのはあるが、多分これ丈は、原文の全部ではなからう。不仁云々の文字ばかりでやむを得ざるその秘法は掲載されてゐない。これは無論編輯者の手心から來たのであらう。望月三英の記事では、墮胎の法をこれに載すとしてゐる。それが一寸(ちよつと)も法らしいものはない。無論原文には、已むを得ざるその秘法が附記されてあつたらう。若し原文に之有つたとすると、これ水戶侯(光圀)の產兒制限默認(或は奬勵)の事實となる。何となれば、此の「救民妙藥集」は、元祿癸酉歲(元祿六年)常陽水戶府醫士、穗積氏甫庵宗與撰で、おまけに、序の一節に、

「予謹んで命を承け、其處に求め易き藥方三百九十七方編集して、……濟民の一助ならん歟。」

とあるに由つても、これが肯づかれよう。

尙、大奧で行はれた老中などの執政者が强制的に行はしめた墮胎。例へば、貴顯から入府のあつた御臺所などに、姙娠の事あれば、その出生兒が將軍に他日なつては、外戚の威を振はれても幕府の經略上困るといつた計策から、典醫に命じて調藥を强いたとか、或は、絕えず服藥せしめてゐたとかいふ話は、無論多少その事實を見た事であらう。他の大藩小藩にも、政治的結婚の結果、或は妻妾の權

力爭ひなどから起る此の悲慘事は、尠くなかつたであらう。（大正十二年四月）

五月目に一人

前稿、「近世墮胎史雜考」の中、西鶴一代女の「五ケ月で一度墮し、少くとも一年に二度づゝ孕んでは墮した」ことについて、左の葉書に接した。柳樽よりの傍證である。

「五ケ月に一度墮したことになるのを呆れてゐられますが、柳樽に丁度いゝ例がありました。

仲條へ五月(いつつき)おいて同じ顏　（貳　編）

でこんなのが澤山ゐたやうです。

仲條へ又來やしたは洒落たもの　（參　編）

などは、もうおなじみになつてゐる奴でせう。おかげで仲條も、シコタマためて、

仲條はむごつたらしい藏をたて　（貳　編）

たりしました。云々（大正十三年一月、能勢久一郎氏より）

「仲條」はナカデウか

「墮胎史雜考」中の墮胎醫「仲條(ナカデウ)」は、チウデウに非ずと存候が如何。ナカとしたる或る例證有之候。（大正十二年四月十五日、井上和雄氏より）

墮胎の藥名

「月水早流し」の他に、「月水留丸」、「朔日丸」、「月浚へ」其他いろ〱稱したといふ。白水(英泉)の艶本『痴情夢魂佳話』卷の中にも、或る圖に此の月水早ながしの商標がある。その商標は、上に花菱の紋あり、兩わき「本家云々」とあり、下に、眞中に大きく、「月水早ながし」とあり、その右に、「朔日丸　百五文□□□□くすり」左に、「萬人に一人も相違無之候□□□□」その下に仲條と見えてゐる。天保中期(十三年禁令以前)のものと見て可からう。

藥と醫の禁止

「町々の内、月水早流と申す看板を掛候もの有之、如何敷候間、名主共心得を以右體の看板取入候様に被仰付度候間達し置候と天保十三年壬寅五月、被仰出候、云々。」(老婆心話二)

「市中女醫者と唱候者、血道の療治正敷致候は不苦候處、其中には姙娠之者を賴に應じ預り置、墮胎致させ候類も有之哉に相聞不屆之至に候、向後右様之儀於相聞は、賴人迄も逐一遂穿鑿急度可申付候間、此旨兼而可存候」(天保十三年十一月朔日の達。)凡て水野越前が大英斷に由るのである。「續德川實紀」天保十三年十一月の項にも、「市中に女醫と呼ぶものあり。令せらるゝむねあり」とある。奢侈禁止、女髪結、岡場所、繪双紙、役者等、すべてに嚴令頻出した中に、此の女醫の禁令も、その生ることと寧ろ當然である。因みに、水野は、天保五年三月、本丸老中に補、同九年閏四月の質素儉約令は、その所謂天保改革の魁、同十二年の女髪

結渡世厳禁、同十三年の諸令發布、同十四年の閏九月第一同の差控までその手を緩うしなかつたのである。

山本北山の教訓繪本「むかしありしこと」につき

三田村鳶魚氏の「お大名の話」中の、サンガー婆子の家苞にといふ章にも、ちよつと出てゐる物であるが、山本北山（山本喜六信有）作の教訓繪本「むかしありしこと」の中に、嬰兒殺（まびき）を戒めた繪がある。「むかしありしこと」は、中本、表紙共紙、表紙と序三丁、本文十丁のもの、表紙には、中央にむかしありしこと、右に山本喜六信有作、左に東都、下に谷古堂とよめる印がある。表紙裏に、心を洗ひ居る圖ありて、上に「教歌　さんかくといびつのこゝろ角にして其のち丸くなほせ人々」の歌がある。次に序一丁。本文、十丁表裏一圖づゝ計二十圖の繪と教訓説明がある。今左に、序の一丁分を載せておく。

此書冊子は、或北國邊鄙の士民。人氣あしくして。子をまびくといふことの。頻りに流行けるを。その國の領主深く歎かせ給ひ。嚴くこれを禁ずといへども止ざる故或儒に命じてこれを敎化せしむれども。聊用ふるものなし。侯頻に是を患給ひて。北山山本先生に。これを謀られしかば。先生その理解の愚夫愚婦に通ぜざる故なることを悟り。此書を著し梓に彫て。弘くその領分の民に布施せしかば。半年ばかりにして。自然と人氣も穩になり。子をまびくことも止たりしと聞けり。是に依て此書を弘く世に布施して。愚民小童の目に觸れしめば。佛家の極樂地獄の體相を畫きしを見るよりも。近く人をして道の一端をも悟らしむる一助ともならんかと。石井福田の兩子相謀りて畫家隣春子に乞ふて圖せしめ。板に彫ることにはな

りぬ。是子思子の所謂人を以て人を治むるの道にも庶幾らんかと。茲にその由を擧て序となす

安政五年臘月　　　　樫園主人識

因みに、山本北山は、「名信字天禧稱喜六、幕府の士。井上金峩門人。又號孝經樓主人。下谷金杉に住す。文化九申年五月十八日歿す。歳六十八。白山本念寺に葬る。」（名人忌辰錄下）よりて、此の「むかしありしこと」の刊行は、北山歿後たること、安政五の序によりて知らる。（以上三項。大正十三年六月補）

間びくの特例

嬰兒棄殺又は墮胎の意味で、「間びく」なる語を生んでゐることは、前稿「近世墮胎史雜考」に悉しく述べたが、最近、これと一縷の交渉はあるが、とにかく異例の用語法を發見した。それは、元祿七板行の好色落語本「正直咄大鑑黑之卷」（近世文藝叢書第六所收）の第二、番太郎が出來口の條下に、女房の詞に、

「さりとてはこなたのやうな〇〇はあるまい、とき〴〵は**まびかしやれ**、命がつゞきませぬといふ。助兵衞されどもかんにんなりがたしというて……」

とある。これで見ると、荒婬の亭主に對して、房事制限の意に使用してゐることである。若し多產能率の女房なれば、制限されたら、自然產兒制限にもなるから、墮胎の意の間曳くと一味通ずるやうにもならう。（さて此の咄は、亭主の名が助兵衞ゆゑ、**助平**（荒婬者）の起原の一として、嘗て「日本及日本人」誌上に、南方氏が紹介されたこともある。）（大正十二年、七月）

「婚姻男子訓」から

家藏に、「婚姻男子訓」といふのがある。硬いやうな、軟かいやうな本である。上下二冊の大本で、一冊序共約四十枚づゝの量。著者は、尾張津田義宗撰（本文の冒頭には、尾張六合亭祇宗集説とある。祇宗とも書したものであらう。」とある。上卷表紙裏の扉にも、

此書は、古今先達の確言を集めて、繋緣の至要を記し、世間の人情に通じて、男子の妻を娶るに賴りある事をおしへ、末に至りてはむことなりて身を治め天然の壽を保つ肝要をしるす。

とある通り、男子本位に書かれてある。上梓は上卷凡例の末に、文化二年乙丑立春とある。なほ凡例の中に、「愚今年三十。故に三十歳迄のことは身に徹して發明すれば、愚言を附く。三十以上の事は推量りのみにして、未だ其場に至らざれば不知」とある。即ち、津田氏三十歳の時の編纂であるにしては相當に纒まつた著書である。尚凡例の最末に、「此書高位高官の人の爲にも著はさず、牛馬を追ひ車をひく者の爲にも著はさず。唯農商中品の息男の用心に記すのみ云々」とある。極めて普通人的な立場からといふのである。上下二卷の目錄をいふと、

上下二卷の目錄

上之卷（緣談大意。年月之事。夫婦齡違之法則。男女相性之辨並ニ丙午庚申之事。血脈の辨。息男愼むべき

條々。雜記。）

下之卷（女子見立る傳。婚姻之略傳。婚心得べき事。夫婦情之事、夫婦交媾愼むべき事。）以上十二篇である。

下卷は、稍憚るべきこともあるから、今は上卷のみに就て、姑らく言はう。編纂であるから、篇中諸處に、故老の言や、他國人の言や、或は內外の典籍の中から、それに該當した言葉を拾ひ出し、またそれに就て編者の意見も添へてゐる。支那の物から引いてゐるのでは、周禮や小學が多い。其他、老醫曰とか、學醫曰とかいふのが多い。（老醫や學醫やは、編者の接見した人々であらう。）以下古典の拔截を除いて、此等の當時現存の人々の言や、愚言曰くの編者自身の言の中、面白く又價値ある物を成るべく、拾つてみよう。一に、當時、江戶末期文化初年に於ける庶民の婚姻方法、男性本位の女性觀家庭觀等が見えて、誠に面白い所のものである。

一、緣談大意

先づ一、「緣談大意」の面白い記事を拾はう。

○古老曰。唐土にては、同姓を娶るは、族を亂ると云ひて禁ずれども、我朝にては、親しきを重ぬるといひて、同姓相娶るなり。されば從弟より以下は、此を合せて妻夫とすといへり。

是れ近親結婚の肯定である。

○愚言。世俗の詞に、緣は定り事といふ人あれど、實は、定りたる物にあらず。定りてありとて、打捨てお

く時は、三年待ち五年延べると雖も、緣來ることなし。此故に、最初より堪忍を旨として取結ぶ時は、因となり、緣となること速やかなり。

「最初より堪忍を旨として取結ぶ時は、因となり緣となること速かなり」とは、普通婚姻上の大部分の眞理（それは現代にも眞理である）を道破してゐる。かうした緣は、昔も今も何千人何萬人。うか〳〵してゐるうち子が出來て、愈々緣らしいものが固まり、事後から事前へ、そこに或る契緣があつたと考へ出して來るのも、締めるには都合のよい、合點の早い人情の常である。昔乍らの仲人が、今日の婚姻にも流行するのは、矢張り此の眞理があるからだ。

○宿老曰。相傳へていふ。往古は農商おしなべて夫々に附金せし由也。當世は、無瑕の子にはならして、不足ある子にのみ附くことになれば、丈夫の意氣ある者、愧づべき事也。併しわが家庭不如意にして他人に損失をかける位ゐの仕義なのは、附金ある嫁を迎ふるも可なりとなり。

附金のある嫁を貰ふなといひ乍ら、最後で一寸餘裕を存してゐる。矢張り附金の嫁が流行つたのであらう。百兩の附金が無くなつた時分、嫁の鼻の低さが氣になり出したことは、川柳子の穿ちのみではなかつたらう。

二、婚姻する年月の事

第二は、「婚姻する年月の事」である。

○愚言。凡て城下津泊、驛宿此外繁華の地は、嫁娶の道早く、村里山家は晩し。

どういふ加減で、村里山家は晩かつたのか。古今正反對。此頃では却つて都會の方が晩婚のやうである。昔は、今の都會の如く、田舍の方が生活難を訴へたせゐではなからうか。

○近江國人曰。江州は、木本小谷の邊は、女の歳二十二三より三十迄に嫁入すと。

○藍屋曰。阿波國は城下といへども多くは十九二十に至りて、嫁づく。十四十五にして、緣に付くはひたすら稀なりといへり。

近江は極めて晩婚であるが、是れは近江國人が世間傳稱の如く、理財の念強く、働けるだけ女子をして家に居らしめたせゐではなからうか。阿波の十九二十は、南國のせゐもあつたらうが、今から思へば普通の年齢である。然し編者の耳には、普通よりも早しと聞かれたのではなからうか。

○老翁曰、凡吉事を表するには、春夏に執行ふべし。百事育てめぐむの意あり。秋冬にはなすべからず。百事廢して末を遂げぬ意なり。又日を定むるにも上、十五日の間を吉とすといへり。

○恩田仲任（本卷の序文執筆者）曰、和漢とも納采には朝を用ひ、入輿には夕を用ゆ。婚は昏時行ふよりの名にして、陽去陰來の義を表するのみと見えたりとぞ。

○山家人曰。我里の邊は、嫁入はみな白晝なりといへり。

以上は、婚姻の月次、時間の解説である。

第三、夫婦齢違の法則では、

○愚言曰、二三違ひは、嫁の姿年老に見えて釣合よろしからず。十四五違は、婿の姿年老に見えて、是亦よ

ろしからず。七ツ八ツ違ひ可なり。子ありて後恰好の至極なるは、十年違ひなり、云々。

第四の男女相性云々は、餘りに時代錯誤が甚しいから、一般には興味がなからうと、一切省くことにした。

五、血脈の事

第五は、血脈の事である。癩病の話であるが、當時の癩病觀としても面白い、殊に玄醫曰くの如きは、當今の學說の如く、癩病は遺傳ならずして黴菌の傳染作用であることを既に道破してゐる。卽ち、

○老醫曰、按に癩は、正しく外因ならず。血分の淸濁によれり。(中略)此故に癩を病む人の子なりといへども、常に胎生卵生の物を不食。外邪侵淫の調護を失せざれば、則ち免るゝことを得て、そのうへ三世を經るうちには、自然と傳染の根を絕するの理あり。

○玄醫曰。癩は血筋淸き家の人々といへども、新たに發ることあり。云々。

○一書曰。此病よく傍人に注ぎ染む。故に人と床を同じうすべからずと云々。

○學醫曰。右の如初めはみな外邪に侵され氣血凝滯して惡疾を起す也。然れどもそれよりは、血脈相承してもやむ也。……いかなる貴人といへども卒然として、感ずる事あり。云々。

最後の學醫曰では、傳染と遺傳と、兩つ乍ら之を認めてゐるやうである。

六、息子愼むべき條々

第六の息子愼むべき條々の中では、却々現代の青少年にも與へていゝやうなものもあるかと思へば、稍滑稽なものや、餘りに道學者めいたものもある。それ〴〵に引いてみよう。

○緣を需めんと思ふ三年も前よりは別して女色を愼むべし。尤も寡妾(かこひもの)すべからず、良緣を破

するの理あり。

○嫁にする氣もなき娘に文などおくりて瑕つくべからず。

○他の愛妾に手さすべからず。但買鹿戀は女の方より賴よらば、手さしても苦しからず。（親のもとにおきて、一ケ月に金一分もやるを買鹿戀といふ。）

○三味線、小唄、舞など上手なる子。又宮薗豐後節など語る娘を嘗て娶るべからず。

〔餘分な事だが、これは、此時分名古屋あたりに豐後節の流れ宮薗節が流行つてゐたことの文獻である。殊に三味線、小唄、舞など上手なる女一切ならずとならば、名古屋は由來遊藝の地、上下流を通じて娘に三味線、小唄などを習はしめた。何處に習はざる、娶るによきものがあつたらうか。但し「上手」と特に斷つてはゐるが、この所は、稍當時の風俗に憤慨した道學家の口吻である。〕

○遊女を請出して妻にすること、いはずとも惡しき也。

○小借家住ひの娘の艶姿に愛でゝ取り上ぐべからず。大家を修むること成りがたきもの也。

○我が身はたとひ二度目なりとも、嫁は素婦がよし。新手の嫁は使ひよきもの也。

最後の言葉は、男性本位として、稍得手勝手な話である。然し男性からは、どち道斯うなくてはならぬのだらう。

○すべて人は身を蕩せば、放蕩に染み、身を愼めば、篤實に染まる物也。されば、宮薗長唄を好けば、心淫亂に流れ、敵討をよめば、魂性惡くなり、奇談を好めば怪事に近づき、洒落本を好けば、懐輕くなる。老莊列准南子の類を信ずれば、五常の正しきを輕んじで、放埒に流るゝも、皆我氣の倚せ所によるが故也。然れ

ば書を讀むにも取捨あり。

○男子たる者、餘の事は稽古せずとも、孝經、論語、曲禮を學びて尊き教を味はひ、晝夜身をはなすべからず。

最後の語は、無論編者一流の道學的口吻であるが、それだけ當時の商家の青少年が、滔々として遊藝に走つてゐたのであらう。前掲の「宮薗（豐後節の一派薗八節の派流、春太夫節とも云ひ、男女痴情を哀切に唄つたもの。丁度新内と同樣よく似たもの。）長唄を好けば云々」や「洒落本を好けば云々」やは、寧ろ當時の市井の青年に、宮薗を唸つたり、長唄の女師匠へ日參したり、洒落本を讀んで大通を氣取つてゐた者たちの多かつたことを傍證する所のものだ。殊に「洒落本を好けば懷中が輕くなるとは、時弊を云ひ得て寸鐵妙々。以て洒落本などの軟文學や、宮薗長唄などの俗曲の、當時尾州の城下にも歡迎されてゐたことがわかる。況して本元の江戸は、如何の狀であつたらう。本著の編者津田氏の言のないのが遺憾である。

最後に第七、雜記の中から、一二を拔かう。

○或人曰。妾腹の子は必ず美麗なり。愛妾には美女を用ゆるが故也。

○烏屋が曰く。然れども烏類は、多く雄鳥に似る物なりといへり。

○老醫曰。女の年十四にして胎をなす者あり。而も其小兒必らず夭す。

○愚言。予が知る方にも娘の齡十二にして經水くだり、十三にして懷孕し出産ありて、其小兒程なく死たり。

○愚言。同年ぐらゐの女を嫁に入れるときは、後必ずお袋のやうになる也。心得べし。
○慈母曰。十四五歲の娘は、善朴にして、親達まかせになるもの也。十七八の娘ははやかれこれいふものなり。

此の慈母曰くは、昔でもかれこれといふ娘に手古擦つた母親の述懐である。今は一層の事であらう。
○花街女見曰。禿のとき、剛氣なる子がよき遊女になる也。又してもほへる奴は善すぎて結句あかぬもの也。女房とは左右反也。といへり。〔おほちやくは、名古屋地方の方言。剛情と亂暴と狡猾と放縱と色々に使ひ分けねばならぬ。結句あかぬのあかぬは、駄目の意也。〕
○愚言。此故に唯氣配のやさしき娘を見立て求むべし。さり乍ら他に育ちたる娘の氣質までは知れぬものなれば、其子の友だち或は縫物に行く家などにて聞合すべし。

以上で上卷は終つてゐる。略、その輪廓を紹介しえたと思うてゐる。通讀されて、諸君は案外、人情古今同一揆な事に、今更乍ら感じられたであらう。我等もその感なき能はぬのである。

(大正十二年三月)

前稿、婚姻男子訓の記者津田氏の傳不詳なのが殘念である。序文筆者の恩田仲任は、傳明瞭である。せめてこれなりと敘して、本文記者不明の遺憾を補はう。恩田氏は、尾藩の大儒且つ詩家であつて、號を蕙樓といふ。人名辭書には左の如くある。

恩田蕙樓　儒者なり。名は宣充、字は仲任、字を以て行はる。通稱は新治、岡田新川の弟なり。恩田宗致

に養はる。君山に學びて詩を能くす。才學伯氏に讓らず。時の人之を尾府の連璧と稱す。文化癸酉（十年）八月歿す。年七十一。著す所蒙求續貂、世說音釋重修韻略、賞奇隨筆、丁當餘音、巵園誌、巵園文章、蕙樓全集等あり。（續諸家人物誌）

即ち、津田氏、無論此の恩田氏に師事したものではあらうが、何分不明である。恐らく年壯なる一學徒、詩學を恩田氏から受けたものであらう。

津田氏の傳、判明

津田義宗の傳が判明した。「尾張地名考」の著者の同姓正生と同人であつた。正生、一に義宗と云うたのだ。今、刊本「尾張地名考」に據ると、正生は、安永五年四月、尾張海部郡佐織村大字根高に生れ、嘉永五年十月二十一日七十七歲で歿した。恩田仲任及び藩儒の鈴木朗に學んだ。一種の鄉土史研究家で多年日本全土を跋涉し、五十八歲には、信州鎗ケ岳の絕頂も極めた。著書、尾張地名考。鎗ケ岳日記。莨煙心得草。眼前教近道。古典地名辯。尾張方言考。尾張本國帳集說。古學百人一首等の數種があつた。庵を六合庵というた云々。（大正十三年十二月補）

賣比丘尼考

比丘尼の各名稱と意義

歌比丘尼、熊野比丘尼、勸進比丘尼、繪解比丘尼、賣比丘尼、或は丸太などと稱した江戸時代私娼の一種、比丘尼の考證である。

熊野比丘尼とは、次揭以下の如く、熊野に因緣を多く持つた故の稱呼であり、其他は、歌を唄ひ、勸進を爲し、地獄極樂の繪解を爲したからそれぞ〳〵個々に仇名としたのである。賣比丘尼は、謂はずと知れた賣色比丘尼の義。丸太は、圓頂、太は賣女の女。好色訓蒙圖彙」の「比丘尼、丸太」と傍訓せるも爾なりといふ。（其他、尼出――尼の振りにて出づる賣女。竹釘――圓頂にして髮なきを象りて謂へるなりといふ。凡て賣淫比丘尼の異名。外骨氏著「笑ふ女」に據る。）

「東海道名所記」の沼津泊り

歌比丘尼の現れたる文獻中、最も古きは、淺井了意（寶永六年九月二十七日歿。年七十歲）の著といはるる「東海道名所記」（萬治年間、或は元年刊行といふ）であらう。曰く、その沼津泊りの記事の內に、

「いつのころか、比丘尼の伊勢熊野にまうでゝ行をつとめしに、その弟子みな伊勢熊野にまゐる。この故に熊野比丘尼と名づく。其の中に聲よく歌をうたひける尼のありて、うたうて勸進しけり。その弟子また歌をうたひけり。又熊野の繪と名づけて、地ごく極樂すべて六道のあり

樣を繪にかきて、繪ときをいたし、奥深くおはします女房達は、寺まうで談義なんどもきく事なければ、後世を知らぬ人のために、比丘尼はゆるされて、佛法をすゝめたりける也。いつの間にかとなへうしなうて、熊野伊勢にまゐれども行をもせず戒をやぶり、繪ときをもしらず、歌を肝要とす。綠の眉細く、薄化粧、齒は雪よりも白く、手あしに臙脂をさし、紋をこそつけねど、たんがら染、せんざい茶、黃がら茶、うこん染、くろちや染に白裏ふかせ、黑き帶にこしをかけ裾けたれて長く、黑き帽子にてかしらを味に包みたれば、その行狀はお山風になり、ひたすら傾城白拍子になりたり。持戒の比丘ををかすものは、その科五逆罪の內なりと經には說かれたるに、比丘尼の方より、つきつけの切賣をいたし侍ることのかなしさよ。（中略）と樂阿彌すゝりあげて泣きければ、氣のちがひけるとて、男も亭主も興をさます。びくにどもは肝をつぶして、逃げて去けり。」（温知叢書本に據る）〔樂阿彌すゝり泣き、比丘尼二人、逃げゆく圖を載す。比丘尼いかにも黑帽子にして、手に筥を持ち、その筥には、牛王を入れ居るものゝ如し。久彌。〕

右に、「いつの頃か」とあれば、此の「東海道名所記」の萬治年間より、更に古に溯つて、此の起源は存するであらう。（骨董集には、寛永の頃との比丘尼の圖を載せてゐる。次揭。）右にもある如く、當初は、此の比丘尼、歌とお談義と、自行化他でひたすら固めたものが、後には、歌ととんでもない化他（賣

色）とに轉化したものであらう。（「寛文の頃、びんざゝらを持たせ、歌をうたはせしより風俗大に下る。尤も唱歌もやひなり。此時より賣女のきざしを現せり。」と「我衣」にも見ゆ。）さうして初めは、熊野に必ず行しに行つたものが、後には、彼等の己が勝手、さま〴〵な巣窟が、始終の熊野となつたものであらう。

「倭訓栞」等の異說

此間、此の熊野に行つた云々に就ては、異說がある。この「東海道名所記」よりは後世の筆者ゆゑ、何ともいへないが、即ち谷川士清の「倭訓栞」には、「熊野に住んだ」とある。曰く、

「びくに。熊野比丘尼といふは、紀州那智に住みて、山伏を夫とし、諸國を修行せしが、いつしか歌曲を業とし拍板をならしてうたふ。之を歌比丘尼といひ、遊女と伍をなすの徒多く出來れるをすべて、其の歳供をうけて一山富めり。此の淫を賣るの比丘尼は一種にして、縣御子とひとしきもをかし。」（倭訓栞中編）

「其の歳供をうけて一山富めり」とある。これが果して事實であつたとすると、熊野のお山は賣比丘尼の元締、僧形私娼の大本山のやうに取れる。（落語家ならば、だから賣女をおやま――お山といひますと落をとるところだが）。この倭訓栞と殆ど同說のものには、

「紀州那智の比丘尼は、皆山伏を夫とし、諸州歌曲を以て勸進をする比丘尼を總べて其の歳供を受く。殊に東都色を賣る比丘尼數千人ありて多く供料を贈る故、一山富みて豐なる一在家なり。」（「廣文庫所收」青栗園隨筆、六）といふがある。

こゝに「東都色」を賣る云々とあるから、卽ち倭訓栞說と東海道名所記說とは折衷して考へられる。卽ち、當時、比丘尼には種々の系統ありて、熊野在住のものと、また熊野を道場とした他國のものと、後には更に何ら熊野に上つた經驗なき、他の土地在住のものとの各種に別れたものであらう。さうして然しそれらの凡てが熊野を以てとにかく己がじゝのお山としたことは同一であらう。(「倭訓栞」の「紀州那智に住みて」とあるは、行をしに在山しての意にも通ふのかも知れない。)ともあれ後には、何でもない者までもが、熊野を眞似たり歌を眞似たりしたことは無論で、此等も、はた正眞の勸進お談義專門の淸淨比丘尼も、ひとしなみに熊野比丘尼、又は繪解比丘尼、又は歌比丘尼などと汎稱されたものであらう。

萬治以前の比丘尼

尙、萬治以前の比丘尼形態を窺ふに足る多少の材料がある。曰く「近世奇跡考」所引の殘口の記。曰く、骨董集。卽ち、近世奇跡考(京傳。文化元年の序あり。)卷二の中に、

「殘口の記に、歌比丘尼、むかしは脇挾し文匣に卷物入れて、地獄の繪說し、血の池のけがれをいませ、不産女の哀を泣する業をし、(此邊、「艷道通鑑」にも同文あり。久彌。)年籠の戾りに、烏牛王配りて、熊野權現の事觸めきたりしが、いつの程よりか、かくし白粉つけて、付鬢帽子(此の付鬢帽子、不詳。或はしころ付頭巾の如きをいふか。卽ち東海道名所記の圖にも、しころの如きもの垂れをれり。卽ち、こゝの「黑帽子」と同一の物なるべきか。久彌。)に帶は

ゞ廣く成し云云（下略）東海道名所記（萬治中板本）云、比丘尼ども一二いで來て歌をうたふ。頌歌は聞きもわけられず、丹前とかやいふふしなりとて、たゞあゝ〳〵と長たらしく引きずりたるばかり也。次に柴垣（明暦中はやり小歌）とやらん、もとは山の手の奴どもの踊歌なるを、比丘尼簓（さゝら）にのせてうたふ。みどりの眉ほそく、薄化粧し、歯は雪よりも白く、黒き帽子にて頭をあぢに包む。云々。（下略）かゝれば熊野比丘尼の風萬治の頃はや變りたり。〔この變りたりとは、萬治以前は、繪解比丘尼。以後は、歌比丘尼――賣色の變化を斥せるならんか。久彌。〕紫の一本に云々。〔次掲「嬉遊笑覧」所引のもの悉しければ、こゝに略く。久彌。〕此の歌比丘尼といふもの、今はたえて名のみ殘れり。」〔此の「近世奇跡考」所引の東海道名所記の項は、本考冒頭東海道名所記の文の前半である。久彌。〕

然るに、「今はたえて名のみ殘れり」とある。その今は、京傳が近世奇跡考編纂了の時は、文化元年なれば、即ちその以前に此者亡びたりと見ることが出來よう。然るに、同京傳著骨董集の中にも、挿圖ありて、（同上編下之卷後。）

「下にいだせる古畫、その風體をもて時代を考ふるに、寛永の比かけるものにて、勸進比丘尼の繪解する體にぞあるべき」

とありて、その挿圖は、「〇古畫勸進比丘尼繪解圖、按ずるに今よりおよそ百八十年ばかり前、寛永

中に於ける繪なるべし。頭を白き布にてまきたるは、ふかきふり也。七十一番職人盡の繪を合せ見るべし」とあつて、その左に、武士體の若衆二人、その前に、頭に白き布を巻きたる比丘尼二人差向ひにて、〔卽ち寛永頃は白き布を頭にまき、未だ付鬢帽子黑帽子ならざりし也。〕手に細長きものを持つてゐる。その傍書に「手に持てるはぢごくの繪卷なるべし」とある。又、庭の緣先に腰かけたる丸頭の小比丘尼あり、腰に枘杓を挿し、手に物を持てる圖がある。その傍書に「此小びくに、手にもてるはびんざさらなり」とある。緣の上に、蓋なき筥やうのものあり、その上に編笠載りをり、〔編笠は、今一蓋、小比丘尼の足ちかくにも、緣に立てかけあり。〕それに、「牛王箱なるべし」とある。〔この筥と、東海道名所記の挿繪中の筥と頗る相似たり。頭は、黑帽子と此の白布を卷くと異れ、筥は同じであつたのだ。〕

これに、寛永頃と判斷せるを見れば、卽ち歌比丘尼は、東海道名所記の萬治よりも更に古く、寛永〔元年は、西紀一六二四年、同二十年は同一六四三年。共に家光治世。〕若しくはそれ以前にその濫觴を認めなければならぬ。唯さへ、尼と將軍家光とは聯想され易いのに、〔三代家光が、伊勢宇治、正慶院の院主茱尼を過分に引接したとは、野史に夙に傳へられてゐる處。茱尼は懷姙したとの噂も立つたと。〕この歌比丘尼までもが、その治世下の寛永に端を發してゐるとすると、上の好む所下之を好むの理に依りて、これが發生を招致し、後來の純私娼風を生むに至つたのではなからうか。卽ち將軍家光、歌比丘尼を産むといふは酷評であらうか。少くとも、將軍家光、歌比丘尼顧客の皮切りとはいへるであらう。

萬治以後江戸の比丘尼

坂田の比丘尼

〔骨董集の記者「京傳」は、本賣比丘尼考冒頭に自分が引いた東海道名所記の文を更に掲げ、「かゝれば、昔の勸進比丘尼は、地獄極樂の繪卷をひらき、人にさしをしへ繪解して、佛法をすゝめたりき。下の古畫――骨董集所揭のもの――の體を見るに、寛永の頃に至りては、それを略し、かの繪卷は手に持てる斗りにて、比丘尼むかひ居て、繪解の言に節をつけて、拍子とりてうたひしにやとおぼゆ」と考證してゐる。誠にさもあるべし。〕

尙、萬治以後の比丘尼風俗については、「嬉遊笑覽」に『紫の一本』と共に『一代男』を引いて、略々其の輪廓を説明してゐる。卽ち同九に、左の記事がある。

「比丘尼は、同書（紫の一本）赤阪の條、「うら傳馬町へ出たるに、下町めつた町から來る比丘尼風流に出でたちて云云。やうすを聞けばめつた町よりあまた來る比丘尼の中でも、永玄おひめおまつ長傳と申候が、爰もとの名とりにて候。あげや〔あげやの發生に注意すべし。是れ、「我衣」の中宿といふに同じからん。久彌。〕は仁兵衛、安兵衛と申候が、きれいにて候。今の小袖かたびらは宿へつき候とぬぎすてゝ、あかしちゞみ絹ちゞみ白さらし鬱金染に、紅絹の袖口うら襟かけ、黑じゆす茶じゆす幅廣帶、黑羽二重の投頭巾又は帽子で包むもあり。小比丘尼供につれ、是れに酌とらせ、市川流の夜もすがら藻鹽草の大事のふし云々。」一代男、越後坂田の條、〔一代男卷三、「木綿布子もかりの世」の中に出づ。久彌。〕『勸進比丘尼聲を揃へて唄ひ來れり。是はと立ちよればかちん染の布子に黑繻子の二つ割り前結びにして、あたまはいづくにても同

じ風俗なり。元これはかやうの事をする身にあらねど、いつ頃よりをりやうみだりになして、遊女同前に相手をさだめず、百に二人と云ふこそをかしけれ。〔勸進比丘尼の繪、何れを見るも、此の如く凡て二人づれなり。是れ都鄙の如何を問はず常にかく定まりゐしもののやう也。いかなる所以ぞ。後掲「續飛鳥川」にも歴然二人とあり。古今二人は不文の規約なりしか。而して二人を一人がいかにしたりしか、をかし。尚、揚代も百と、此の一代男を始め、以下掲ぐる諸書にも散見するが如く、並の場合は、殆ど一定しをりしものの如し。久彌。〕あれは正しく江戸めつた町にて忍び契りをこめし清林がつれし米かみ、其の時は菅笠がありくやうに見えしが、はやくも其の身にはなりぬ云々。」按ふに〔嬉遊笑覧の著者、喜多村信節〕めつた町は、寛永江戸圖に神田鍋町新石町の南の方に二丁あり。是れ今の多町なり。今の名は略名と聞えたり。今小柳町邊に比丘尼横町の名あり。其の邊昔よりこれ有りし處なり。」

「紫の一本」は、元祿期の歌學者戸田茂睡の著、（茂睡は、寶永三年四月十四日、七十八歳にて歿。）その奥書に、天和三年癸亥遺佚道人とありて、「此の紫の一本は、櫻田に住し光融入道所勞の頃、慰みに書集め、予に清書せよと贈りて」云々とあるに據れば、天和三年若しくはそれ以前の茂睡執筆たること明かである。卽ち此の「嬉遊笑覽」所引の比丘尼の記事は、天和年間の風俗と見て可であらう。卽ち「東海道名所記」の萬治前後についでの、好記錄であらう。一代男は、西鶴、天和二年版、これ亦當時の

天和より元祿寶永に至る比丘尼

比丘尼風俗を知る一遺材とすべきであらう。

恰もよし、此等の傍證となすべきものが尚、一個ある。卽ち武江年表天和年間記事の條に、「この頃はやりし唄比丘尼の內、神田めつた町より出づる永玄、お姬、おまつ、長傳といふが名とりにてありしとぞ。繻子か羽二重の投頭巾をかぶるによつて、これを繻子鬢と名づけたり」とある。神田めつた(滅多)町は格別上玉が巢を食つてゐたのであらう。

天和についで貞享、元祿、寶永、此の頃の比丘尼には、尚一個好個の資料がある。「我衣」(江戸曳尾庵南竹著、卷尾に文政八年とあり。)である。曰く、

「(前略)天和の頃より世上遊女發行するにより、かやうの族も賣女となりたり。然れども元來僧形なれば、衣服は木綿を着したり。天和貞享の頃は、淺黃木綿、白き淺黃もあり。素足、わら草履、菅笠手覆、かけひしやく腰にさし、文庫を持たせたり。元祿頃より黑桟留頭巾を着す。これより他の色の布子を着す、されども無地也。すげ笠手覆文庫を持つ。

寶永より小比丘尼に柄杓をさゝせ、文庫を持たせたり。(小比丘尼、柄杓をさせることは、骨董集の寛永頃の圖と同じ也。然れば、此間――寛永より寶永――此の事なかりしや否や。久彌)

元祿より中宿ありて是へ行く。朝五ッ過或は四ツを限りに出で、夕七ッ限りに宿へ歸る。晝の間彼の中宿にありて他へ修行に出る事なし。和泉町北側裏ごとにあり、新道へ拔けて大方中宿

なり。玄冶法師とて公儀御醫者の屋敷也。是を玄冶店といふ。又八官町御堀通り町屋に中宿有り。後京橋疊町に有り。（下略）」

如上、天和より元祿寶永に亘る頃の比丘尼風俗の一斑仄見えたるは多とすべきであらう。殊に中宿の發生を元祿なりと明かにせるは、比丘尼賣淫史上貴重なる記錄である。以後の中宿の分布も前掲「一代男」のめつた町と共に、また記憶すべき好資料であらう。貞享時代の比丘尼については、なほ「好色一代女」卷三（貞享三年板。西鶴。）の「調謔歌船」の中に左の如くある。勿論大阪の所謂船比丘尼に局限されたものではあるが。

「そも〳〵川口に西國舟の碇下して、我が故郷の嬶々思ひ遣りて淋しき浪の枕を見かけて、其人に濡袖の歌比丘尼とて、此津に入り亂れての姿舟、艫に年かまへなる親仁居ながら楫とりて、比丘尼は、おほかた淺黄の木綿布子に、龍門の中幅帶前結びにして、黑羽二重の頭隱、深江のお七指の加賀笠、〔此邊、江戸と大差なき風俗なり。久彌。〕うね足袋穿かぬといふ事なし、絹の二布の裾短かく、とりなり同一に拵へ、文臺に入れしは、熊野の牛王酢貝耳姦しき四つ竹、小比丘尼に定りての一升干杓、〔こもまた骨董集の寛永と稱すると同一風俗なり。久彌。〕勸進といふ聲も引切らず、流行節を謠ひ、それに氣を取り、外より見るもかまはず、元船に乗り移り分け立ちて後、百繫ぎの錢を袂へ〔こゝも賣代百也。前掲、「一代男」參照。久彌。〕投げ入

れけるも可笑(をかし)。あるはまた割木を其値に取り、叉はさし鯖にも代へ、「とんだ物々交換なり。久彌。」同じ流とはいひ乍ら、これを想へば、すぐれてさもしき業なれども、昔日(そのかみ)より此處に目馴れて可笑しからず。云々」

京洛の比丘尼

以上は、大阪船比丘尼の記事として、後掲「筆拍子」と前後相照應して、好個の輪廓一斑であらう。

尙、貞享頃の京洛の比丘尼の狀がある。「近世風俗志」（守貞漫稿）所引の「好物訓蒙圖彙」（「時や貞享三年彌生中の五日。洛下の野人作者無色軒三白居士」）の中に、その散見がある。守貞曰く、「予が藏するところの貞享三年の印本好物訓蒙圖彙壹卷常時の名妓及び其ころ名ある比丘尼夜發に至るまで其の事跡を委しく載せたり。原本の十が三を抄出して左に載す」云々とありて、その中、比丘尼に關しては、（圖あり、略す。黑頭巾に鉢卷をなしをり。手に筥を持つ。二人描かれて、一人に、「とりへのよし」とあり。「鳥邊山の芳、」當時此のよし比丘尼中の流行妓なりし也。久彌。」

「（訓蒙圖彙）いつのころよりか齒は水晶をあざむき、眉ほそく墨を引き、黑い帽子もおもはくらしく被きて加賀笠にばらをの雪駄、小歌をよすがにしてくはん〳〵といふしほの目もとにわけをほのめかせ、下略」

即ち、未だ歌比丘尼の形態を有したる賣比丘尼であつたのである。（守貞附記に曰く、「齒を磨き眉を描き黑頭巾かゞ笠ばらを雪踏等、惣て江戸比丘尼の扮と相似たり。唯京坂にまるたと異名す。江戸にも謂レ之歟否を知

らず」といふてゐるが、江戸も稱したのである。「風流志道軒傳」に、「踏返したる丸太の名物」とある。「好色徒然草」にも此由出づ。後揭。」

尙、當時の京の比丘尼については、略是と同說ながら、尙一書がある。卽ち「人倫訓蒙圖彙」七册（元祿三年板、源三郞畫。）の中に、

「歌比丘尼は、もとは淸淨の立派にて、熊野を信じて諸方に勸進しけるが、いつしか衣を略して齒をみがき頭をしさいに包みて、小歌を便に色を賣るなり。巧齡歴たるを御寮と號し、夫に山伏を持ち、女童の弟子あまたとりしたてつるなり。都鄙に有り。都は建仁寺町藥師の圖子に侍る。皆是末世の誤也。」

といふが、卽ちそれである。卽ち都（京洛）にも、貞享元祿の頃、比丘尼の持て囃された例證である。（尙、京洛の賣色比丘尼は、一名仕懸比丘尼ともいうた。貞享四年の京板「好色貝合」（好色訓蒙圖彙後編、二册）の中に、此名出でたりといふ。色仕懸の義なりと。外骨氏「笑ふ女」に據る。卽ち、貞享、元祿、京に於てまた比丘尼の跋扈した好記錄である。）

京大阪、江戸と限らず、殷賑な驛路にもその出沒を見たことは、「東海道名所記」の沼津に限らなかつた。前揭「一代男」の坂田もその例であるが、現に、同じく西鶴の「織留」（元祿七年刊）の巻四、「諸國の人を見しるは伊勢」の中にも、

明野原の比丘尼

「又明野原が（宮川の西岸、山田と一橋を隔つる小俣にありと、現陸軍飛行場也。久彌。）（中略）此の廣野錢掛松の邊りに三十四五年以來道者に取り付きて世を渡りたる歌比丘尼二人ありける。所の人異名を付けて取付虫の壽林、古狸の淸春といひて、通し馬の馬士駕籠迄も見知らぬはなし。歌も唄はず、立ち寄りて是れ伊豫の松山の衆樣、是れ播磨の書寫の御出家さま、これ備前岡山の女中さまと、人を見立てゝ國所の違ふこと千度に一度なり。云々」

と。元祿七年の刊本であるから、その當時と見ても、その「三十四五年前」は、寛文元年頃にあたる。卽ち「東海道名所記」の萬治と殆ど同時代である。但し、此の比丘尼、「備前岡山の女中樣」などと云つた所より推せば、此の比丘尼二人は純然たる賣色の徒でもなかつたらう。歌比丘尼の本來に近い者であつたらう。現に、「織留」此の章の終りに、「勸進一文にて換へて行きける」とあるに據つてもそれが窺れるのである。

お客の種別

偖、當時、これを買つたお客の種別については、如何であらう。江戸に關した記事ではあるが、

「昔は小者奴などの遊び者なりしが、今やうは人によりて若きさぶらひもすると語れり。いづみ町、八官町などに宿あり。日毎に行くなり。わけて桶町、疊町へ行くを上品とす。「此の町名、「我衣」とよく吻合せり。久彌。」頭巾に針させるは、針卷に留めけるなりとぞ。（源太郎と云ふ比丘尼、米屋のむす子と情死したる事など見えたり）是を異名にまるたと云ふ。」（好色徒

然草。)(「嬉遊笑覽」所引の文に據る。)とある。

附記。此の源太郎比丘尼と米屋の息子との情死一件は、正德の頃であらう。「我衣」に、「正德年中中村源太郎と云ふ女形の役者あり。これに面よく似たる比丘尼あり。源太郎比丘尼といふ、名高き比丘尼也」とある、これではなからうか。

卽ち前には町家の子弟(その中より心中者も生じた。前揭の如し。)後には武士までも、殊に。後揭「江戶眞砂六十帖」所載の如く、武士と比丘尼との心中まで生じた位ゐであるから、卽ち此の賣比丘尼の顧客は、四階級の凡てを通じてあつたと斷じて可からう。勿論これは、江戶を標準にしたのであるが、他都市も然りであらう。

靑栗園隨筆にも、「東都色を賣る比丘尼數千人」とあつた。卽ち此の比丘尼、當初は街道筋、津々浦々、到る處殷賑なる土地にその勸進の姿を見せたりしが、元祿の峠を經て、政令の他に漸く文化の中樞たる實際的地步を占め、人馬亦絡繹、更に漸く圓熟し來れる士民の變態性欲性は、玆に野郎、遊女の他に比丘尼の面白きを發見し、(强ち三代家光將軍のイカモノ食ひに倣つたといふのではあるまいが。)隨つて此の比丘尼は、一層の流行を此の東都に極めたといふべきであらう。卽ち當初の勸進、繪解、歌、漸く廢れ、天和貞享の頃よりは唯賣淫の比丘尼のみ榮え、終に普通の娼婦もこれに加入し、續々比丘尼出の變形賣女と、以て交々賣比丘尼の名を擅にしたのであらう。

猛烈なる發展

然るに「骨董集」の前掲の段のツヾキに、『日次記事』なるものを所引して曰へるがある。曰く、

「日次記事（延寶貞享の間に作れりといふ）二月の條に、「倭俗彼岸中。專作二佛事一。民間請二熊野比丘尼一、使レ說二極樂地獄圖一。是謂レ掲(トク)レ畫云々。」とあれば、延寶貞享の比迄も其名殘はありけんかし。」

とある。卽ち延寶貞享の比迄も其名殘はとある、其の名殘とは何の名殘であらうか。恐らく繪解比丘尼の名殘との意であらうが、これに似た賣比丘尼は、なか〳〵、延寶貞享どころか、元祿享保愈々後世永くこれが在り、その跋扈を見たことは、（元祿寶永までの記錄は、既に載せたり。）殊に東都に於てその猛烈さがあつたことは、左の諸記錄がある。

「熊野比丘尼勤に出づる事如何の謂れや。勸進して牛王を賣りしよし、何れとなく賣女となる。先づ神田（これめつた町か。久彌。）より出づるを上として、わせ（早稻）田下谷竹町本所あたご（愛宕）下として、宿は新和泉町上とし、八官町を中とし、其の外淺草門跡前京橋太田屋敷同心町所々へ出でぬ。（以上、「我衣」と又よく照應せり。久彌。）下も船へ出る。（是れ舟饅頭と均しく、一名舟びくに。丸太船ともいふ。久彌。）元頭巾は黑ちりめん加賀笠なり。（是れ東海道名所記所載と符を合す。久彌。）正德二年、俄に頭巾淺黃木綿に成る。當座殊の外見苦しく、後は上比丘尼は子比丘尼二人連れる。但し吉原の太夫のまねにして衣類を著飾る。大鶴小鶴などとてはやり、

〔「我衣」には、鶴、小鶴として、當時神田にゐたりし名妓ならぬ名比丘尼の事を記せり。後、鶴は、啣へ煙管より出火、火罪に問はれたりと同書に見ゆ。久彌。〕歴々の遊びにして、全盛目を驚かしける。元文六年〔元文六年は、二月二十七日改元、寛保元年なり。こは、元文と明記しあれば、その一月二月頃のことか。武江年表には、寛保元年の頃とあり。久彌。〕八官町にて櫻田邊の武士と心中して、其の跡より〔寛保三年に觸出づ。久彌。〕一切比丘尼町屋〔中宿の意ならん。久彌。〕へ出間敷旨御停止なり。此の頃比丘尼の商ひ夥し。衣類頭巾の仕立各別違ひ、著たる姿よきやうにして遣しける。さるによつて姿よろしき也。」（江戸眞砂六十帖）〔江戸眞砂六十帖。序に「私に曰元祿二己巳年出生して六十餘年の星霜を考へ見るに世々珍事多し云々」とあれば、寶曆頃の著ならんか。久彌。〕

とあるにもよりて知れよう。

恰も此の記事に相應して、「我衣」にも左の記事がある。

「正德頃は、（比丘尼の中宿）茅場町組屋敷に出す。享保九年小濱民部屋敷脇へ引く。（比丘尼の）往來は木綿服なれども、中宿にては紗綾縮緬島八丈の紅裏模樣を著す。夏冬黑ちりめんの投頭巾を著す、尤も長し。櫛笄さゝぬ遊女にひとしく、けしからぬ有樣也。其頃淺草門跡の脇法恩寺前にも中宿有り、是は劣れり。宿は神田多町より出る。又深川新大橋向より出る、安宅

丸の跡の町家なり。是をあたけ比丘尼と云ふ、下品なり。四ッ谷の早稲田と云ふ在よりも出る、下々なり、小身屋敷の門番或は寄合辻番を頼み宿とす。享保十年茅場町組屋敷白コシ長屋より八丁堀松平越中守殿屋敷北の方鳥居丹波守殿上り屋敷の跡へ引越す。寛保二年（此の年次違へり。元年ならん。久彌。）八官町に心中出來る。公邊になり、つひに賣女に落ちて（中宿解散せられて、營業禁止。よりて去つて公娼となりたりといふの意か。久彌）それより中宿堅く御停止にてやみたり。延享二年まで神田の宿にて客を留ると云ふ。（これ中宿以前の自家營業に還りしものか。久彌。）此ごろ（不詳。曳尾庵折々の隨筆なれば、卷尾の文化八年と見るを得ず。久彌。）は又何々方へ行くやらん、往來するなり。

○延享の頃より、御停止を破り元の如くに成したり。（こは後掲寛保三年の觸書を破り、延享の頃、更に賣比丘尼復興せりとの意ならんか。久彌。）（「燕石十種第一」本に據る。）

彼此、江戸眞砂と我衣と對照せば、正德、享保後の賣比丘尼の形態分布歴然たるものあらう。さ

さて右にもある如く、當時、比丘尼は、町住居の巣窟と、枕席出仕の中宿と二個に往來してゐた。町にも中宿にも上中下の品等があつたこと、右等に依つて知るべしである。

卽ち、歌比丘尼は、寛永以前、寛永、正保、慶安、承應、明暦を經て、賣淫の風漸く盛んに、萬治（東海道名所記印行の年）寛文、延寶、天和、貞享を經て、殆ど賣淫專門となり、元祿、寶永、正德、享

保、元文、(以上、寛永以前より約百二十餘年。)を經て、益々その横行を見るに至つたのである。內、元文六年(寛保元年)の心中事情の如きは、賣比丘尼史上、特筆すべき一事件であらう。幕府はこれに懲りたのか、此の心中後間もなく、卽ち寛保三年亥閏四月二十八日といふに、(增訂武江年表にも此の記載あり。)

「勸進比丘尼、花麗なる衣類着賣女體紛敷不屆に候。右中宿等致候者有之候はゞ、早々可訴出」旨の觸を出したといふ。(尙、已に寛永三亥年にも、此の種の御觸一度び出できといふ。)然しこの御觸も一向效果なく、延享二年の頃より再び此種賣女を見たことは、「我衣」上揭の如くである。

而して、その終期については、

「古老云、寛延、寶暦の初ころ迄も、勸進比丘尼も(勸進の風、未だ一部を存したりし也。但し之とても陰に賣色の徒たりしことは疑なし。久彌。)賣比丘尼もあり。芝八官町、神田横大工町にあり。是につゞきて下直なるは、淺草田原町、同三島門前、新大橋川端杯に、家每に二三人づゝ出て居りたりとぞ。表に長き葭簀を立てたり。簑絨輪、「帶しなほして化し風俗、夕比丘尼淺黃に戾る日和虹。」「賣られぬ先に遊女しならふ、紙はつた柄杓で小倉うちつけて。」六玉川、「比丘尼の化粧よしずから見る。」」(嬉遊笑覧卷九上、娼妓。)

とあるを信ぜば、寶暦(その元年は、西紀一七五一年。)の初めを最後とすべきやうである。然るに、燕

石雜志（文化七年の序あり。馬琴の撰。）には、その卷三に、

「ゆたけき御代の長久は隨に、物として今大江戸に具足せざるはなし。しかれども昔ありて今なきものは云々。このうちすた〱坊主、おはらひをさめ、唄比丘尼と扇賣りは二三十年以前ありけり。十歳前後の小比丘尼ども黑き頭巾を被り裾を高く引あげ、腰に柄杓を挿したるが、三四人を一隊とし老尼に宰領せられて人の門に立ち、いと訛たる聲してうたを唄ふに、物をとらせざればおやんなというて催促せり。昔は簓をすりて唄ひしかば、今に比尼簓の名は遺れりとぞ。地獄變相の圖を說き示して、愚婦を泣かせし熊野比丘尼の流なるべし。云々。」（守貞漫稿所引の「睡餘小錄」の文、また殆ど之と同文なり。但しこれには、天明の比まではとあり。久彌。）

但しこれには、十歳前後の小比丘尼と宰領の老尼とあるのみで、別に賣色の十八九は書かれてない。隨つて賣色比丘尼の終期は、或は、事實、賣色歌比丘尼は、寶曆の終りに絕え、正系の勸進風だけが、小比丘尼どもによりて、この文化より二三十年前までありしものか。卽ち燕石雜志の文化七年より二三十年前といへば、天明元年頃か若しくは寬政三年頃で、嬉遊笑覽故老の言の寬延寶曆の初めといへると、餘りに懸隔が甚しい。（文化七年より三十年前は、天明元年、寶曆元年以後三十一年。文化七年より二十年前は寬政三年、寶曆元年後四十一年。）

〔守貞漫稿にも、「睡餘小錄」の文を引いて、「天明以前には賣色の風も廢して門戸に立ちて米

天明年間未だ盛ん也

錢を乞ふを專らとせし也。又京阪にも當時は彼比丘尼廢絕せし也。此比丘尼其始を知らず寛文より風衰へて歌を唄ひ、天和より賣色し、元祿より中宿あり。寶永正德、享保元文、寛保の間盛んに行はれ、寛保一たび中宿を禁ずれども亦其禁弛み、再び行はれしが、又漸くに衰へて安永天明比に全く三都に廢絕せし也。」と斷じてゐる。但し、「京阪にも當時は廢絕」といへるが、然らず、多少形態こそ異りたらんが、近く、文化頃までありしことは、――而も賣色の徒也――後掲の「筆拍子」の文を以て推すべしである。〕

然るに、蜘蛛の糸卷（山東京山著、弘化三年の序）の「かくし賣女」の中に、「天明中盛んなりしは云々。深川大橋びくに切二百。下は百。泊り二朱云々」とあるを見れば、天明期なほ賣色比丘尼が殘壘を據守してゐたことは明かである。〔又、此に珍とするは、當時の比丘尼揚代の明細なる表示あることである。〕

天明年間盛んなりしには、尙一典據がある。曰く、增訂武江年表の天明年間の中に、

「勸進比丘尼、芝八官町、神田横大工町より出る。是に續いて淺草田原町、同三島門前、新大橋海岸等なり」

とある。場所まで明細に指定してある以上、これが本當であらう。〔予は、此の「勸進比丘尼」を、禁令の爲已むを得ず勸進の古態に戻り、而かも密賣淫を纔行せし、即ち以前の賣比丘尼に異らざる者と見る也。〕即ち天明頃まで賣色比丘尼未だ盛んなりといふを正しとすべきか。乃ち「嬉遊笑覽」故老曰くを斥けねばなら

ぬことになる。如何。

然るに、こゝにより多く年次を延長した尚ほ異說がある。曰く、明和誌（鼠璞十種第二所收）に、

「一、享和の頃より往々處々さかり場に、小比丘尼合力を乞あるく。毎朝とし頃十八九二十位の比丘尼、十四五人づゝつれ立、所々もらひあるく。大塚邊にかしらありて、年ごとに越後加賀の國へ女の子を買出し行、比丘尼とするといふ。」

とある。此の比丘尼どもは何であらうかである。享和は、その元年は、馬琴「燕石雜志」の文化七年の以前十年である。但し此の明和誌所掲の享和頃の小比丘尼といふは、歌比丘尼賣比丘尼とも明記してないから何ともいへず、或は、他音通の勸進比丘尼の一時的流行であらうか。（當時、比丘尼に各種あり。伊勢比丘尼なども相當に流行したことは各書にある。其他、各地に比丘尼があつたことは、無論である。）然しこの「十八九二十」といへるが、何ともいへず臭いのである。

尚、「只今お笑草」（二代瀨川如皐の著。自序にみづのへさる〔壬申。即ち文化九年〕とあり。續燕石十種第二所收）の中にも、黑帽子を冠れる年增尼と同じく子供尼との繪ありて、上に、「浪花にびやんせうとよび、江都に丸太ぶねといふ」（守貞漫稿には、京阪のみの稱呼の如くこの丸太を云へること、前にいへり。之に據れば、東西共通の異名ならん。久彌。）其譯は知らず。花淸しいわしや是も芥子畑」とあり。次に「歌比丘尼（朱書、）今は絕てなし」の題下に、左の記事が見えてゐる。重複の嫌あれど、是も載せておかう。

曰く。

「往古紫の一本などにも見えし、いづみ町八官町びくになぞの餘流にて、天明〔これ卽、また嬉遊笑覽故老の言と、燕石雜志の二三十年前との中間說にして、若し燕石雜志の二三十年前を、三十年前にとれば、卽ち天明元年にして、期せずして、只今お笑草と、燕石雜志と、及び守貞漫稿所引の「睡餘小錄」と、及び武江年表天明年間記事と、四者歌比丘尼の廢滅期の一致である。天明說が、多少確實さを加へたりといふべきか。久彌〕の比まで新大橋の東詰、淺草、みしま門前など〔武江年表記事と殆ど同一箇所なり。久彌。〕に葭簀立よせし花賣、江口の宿にてありしが、勸進にていづるは春のころ、飛鳥山日ぐらしの邊目黑の不動雜司ケ谷なんど、人群集の所へ、十六七廿許の比丘尼、薄化粧して無紋に淺黃ねづみ、紬やうの小袖うち著て、幅ひろき帶前にむすび、つむりは納豆ゑぼしとかいへるものの如く、黑木綿にて折たる帽子をかむり、牛王箱にやあらん、たい箱とはいへる黑塗の文庫樣のもの小わきにかいこみ、小唄うたうてもの乞ふ事にありける。これにも小比丘尼二人り三人りつれたり。また小比丘尼は粗末なる木めん布子にて脚袢はき、手おひかけて、うしろへ垂れのある常の角頭巾黑もめんにて作りたるをかむり、五合程も入るべき柄杓の柄のみじかきを持ちたるが年のころ六ツばかりなるより、十一二比迄の小比丘尼三人り四人りうちつれ、これには御寮比丘尼とて四十有餘にていと憎さげなるが、同じ出たちにて牛王箱かゝへてつき添

一　比丘尼の唄

二　比丘尼の唄

ひ、町々門々へ來てうたひける。唱歌よくも覺えねど、

　鳥羽のみなとに船がつく。今朝のおゐて（追風）にたがら（寶カ）の舟が、大こくとおゑびすとにつこりと、チトくわんおやんなんとて、愛々數こわねにて物こひける。」

歌まであるはとんだめつけ物である。

尙、「續飛鳥川」（八十九翁、文化七年以後の著。）の中にも、比丘尼の歌を載せてゐる。曰く、

「歌比丘尼、うりびくに。歌びくには、雜司ヶ谷の會式に茶屋々々を廻る。唄に、「めぐりあはせのうつり香も、むすびとめたよ糸ざくら、おやりなんし、「神のおまへに松うへて、花も咲しよ小金ばな。」賣びくには、二人づゝ屋敷を廻る遊女也。」〔これに據れば、當時、復古の歌比丘尼と、全娼の賣びくにと二樣ありたるが如し。「守貞漫稿」中の睡餘小錄を引ける論斷中〔前揭〕にも照應して、此の事確實なりといふを得べし。久弼。〕

同じく、「續飛鳥川」の別項に、

「比丘尼、寬政以前大橋にばかり有り、隱賣女なり。」

とあり。こも、天明を終期とせるに、多少の裏書せるものと謂ふべきである。尙「親子草」にも「比丘尼といふもの、今は一向見當らず候」とある。「親子草」は寬政九年版、卽ち矢張り前說と相呼應して、天明を以て賣比丘尼の廢絕期としてゐるらしい。すれば、明和誌の「享和の頃より」が益々怪し

阪地は文化猶在り

い。若し有りたりとせば、復古の勸進一方であつたことが確實である。或は延享の誤りではなからうか。

尙、すでに貞享頃、又はそれ以前より阪地にも是あつたことは、「好色一代女」の記述を初めとし、「大阪にはびやんせう」とこれを謂ふと「只今お笑草」の冐頭にもあれば、爾來引續きこれが榮えてゐたことは、明かであるが、尙、「筆拍子」(文化頃板行)の「伽遣ふ船」の條にも、

「中古は熊野の牛王を賣りて、さも殊勝なりしも、いつの程にか色を商ふ者に成りしが、それさへ今(文化頃)は姿かはりて舟比丘尼と云うて、小舟に打乘り、大船毎に漕寄すれば、いつとても炭薪の類を與へる習とは成りぬ。これなん比丘尼に布施物を遣はせし餘風なるべし。」(外骨氏著、「笑ふ女」に據る。)

とある。宛然「一代女」の記述と同一であり、船比丘尼泯びなかつたことはこれで分つたが、さてこゝに疑問を措くのは、江戸は、前にも云うた通り、遲くとも天明頃に泯んだと見ねばならぬ純賣色比丘尼が、「一代女」當時そのまゝの船比丘尼として、大阪の此の「筆拍子」の「今」にあつた、文化に存してゐたことは聞き物である。江都は嚴令の爲已むを得ず廢滅したが、阪地は割合に緩かであつた爲、水上に猶出沒してゐたと見ねばならぬのであらうか。如何。疑はしいけれど、とにかく此に擧

「膝栗毛」二川さきの比丘尼と唄の三

げておく。

尙、田舍まはりの比丘尼については、古く「一代男」の坂田と好個の對照を爲すものに、文化期の「東海道中膝栗毛四編上」〔喜三二の序、文化乙丑春(二年)とあり〕の二川さき〔坊主持の項〕がある。卽ち文化頃、原始的な比丘尼風俗が猶ほ街道筋に出沒してゐた證左であらう。〔以て、下揭、本居宣長の「賤者考」と對照すれば一層妙であらう。〕曰く、

「(前略) 此内あとより、びくにが三人つれにてゆびにつけし管をならしてうたひくる うた「身をやつす賤がおもひを夢ほどさまにしらせたや。ゐいそりや。ゆめほどさまにしらせたや。サアサさんからへ〳〵 北八「あざやかな聲がする トふりかへり、ヒヤア比丘尼だ〳〵。サア彌次さんわたしやす 彌次「エ、いめへましい 北八「人に荷をもたせるは中〳〵いゝものだ。是でお供を連た心もちだ。ヤア〳〵こいつらアまんざらでもねへ。彌次さん見ねへ。こちらの比丘尼がおれを見て。アレいつそにこ〳〵と愛敬がこぼれるよふだ、畜類め 彌次「あいきやうのいゝのじやアねへ。アリヤ顏にしまりのねへのだは 北八「わるくいふぜト此内あとになりさきになり行、びくにはまだとしも二十二三、今ひとりはとしま、十一二の小びくにともに三人つれ、中にもわかいびくにがきた八のそばへよりて「モシあなた火はおざりませぬか 北八「アイ〳〵(中略) 北八「今夜一所に泊りてへの。なんと赤坂を行なせへ。一所にしやせう (中略) びくに「ナニわたしらが。たとへ髮が有つ

宣長の賤者考より

たとて誰も構人(かまひて)はおざりませぬ 北八「あるだんか。わつちらア一ばんにかまう氣だ。なんとかまはしてくんなさらんか びくに「ヲホヽヽヽ(中略)野みちをさつ〳〵と 行過る、北八あきれて見おくる云々(下略)

以て、當時の、比較的色氣乏しき比丘尼〔それだけ本來の廻行比丘尼〕の一端を知るに足りよう。(尙、此項、「膝栗毛輪講」駿遠の巻に、此の折の比丘尼の唄其他について考證見ゆ。就て看るべし。)〔比丘尼の唄、こゝに又一例を見たるを奇とすべし。〕

最後に、本居宣長の賤者考より、「勸進比丘尼」の項を抜かん。

「勸進比丘尼は、歌比丘尼とも熊野

「東海道中膝栗毛」四編上の挿絵

比丘尼ともいふ。地獄の繪卷物を昔は持ちありきて、繪解して婦女輩を勸進したりが、繪卷物はすたれて、一種の歌をうたひ、柄杓を持ちありくことなり。もと熊野に來りてかの繪卷物をうけ、諸國をありきける由なるが、今は本國には總べて此の者なし。江戸名古屋たどにはありて、歌をうたひて、お勸進とて米錢を乞ふ。京大阪にもかゝることありやよくも聞きしらず。(大阪にありしこと、「一代女」「只今お笑草」及び「筆拍子」等に見ゆ。前參照。久彌。)京あたりに此の種はあれども、賣婦同樣にうち〳〵色を賣る者なり。大阪もしかるにやあらむ。その他の國々にもあるべし。伊勢の小俣比丘尼といふあり。是れはビンザヽラといふ物を手にかけ鳴らして錢を乞ふ。此の者たま〳〵熊野に來る事ありときけり。昔の餘波なるべし。(小俣比丘尼は、前揭「織留」中の比丘尼と同じ也。卽ち織留の元祿前後より、宣長の近世まで、彼の二女の傳統を嗣ぐ者、小俣にありし也。かゝる類他の地にも多かりしなるべし。久彌。)

名古屋あたりの歌比丘尼も、もとは此のビンザヽラを持ち鳴らして來りしが、後はふところにいれて軒每には鳴らさず、別に長きつゞきたるかぞへ歌などありて、好む時はこれを用ふと。おのがわかき比聞きしるのみにて、ふつに見たる事なし。何ごともかはりゆく世なれば、今はいかならん。それもうち〳〵には色を賣るなどもきけり」(宣長は、享和元年九月二十九日、年七十二歿。故に、若き頃とは、いつ頃なりしか。恰もよし、寶曆元年は、彼の二十二歲である。

すれば、嬉遊笑覧故老説と相似たりといふことになる。久彌。）

とにかく「鮭、鰹、大名やしき、生いわし、比丘尼、紫、ねぶか、大根」（三都名物の狂歌の中、江戸。蜀山人、「一話一言」所載。）とも云囃された歌比丘尼は、寛永以前すでにその風都鄙に行はれ、専ら熊野仕込の繪解をなして米錢を乞ひあるきしが、寛永頃に、繪解よりも、さゝらに合せて歌を歌ふこと主となり、その頃すでに往々にして賣色の風あらはれ、萬治頃は、宿場女郎と同じく、街道筋に出沒、以て「東海道名所記」の作者に拾はれ、この頃寛永頃の白き布を巻ける頭は、黒き帽子樣と代りゐた。さうして無論京大阪にも流行してゐた。（大阪は、屋形町に彼等の巣窟があつたといふ。近世世相史に據る。）顧客は、小者奴より後は武士までも之に加はり、江戸は、益々賣淫の風盛んに、延寶、天和、貞享、元祿の間愈々流行を極め、その巣窟並びにあげや現れ、中には舟稼ぎともなり、正徳二年以後は、その風俗も多少變りて、頭巾は淺黄木綿となり、又吉原の太夫のまねして、以前の木綿にひきかへて綾羅を纏ふことゝなり、全盛人の目をそびやかし、遂には元文六年一武士と心中するとまで情海の花形となつた。此頃江都以外は漸く廢れて、殆ど江戸の名物の如くなり、隨つて上司の取締漸く嚴しく、しかも需要猶旺んに天明の頃（或は寶曆頃）までその流行を續け、終にその跡を滅するに至つた。勿論その間、非賣色の比丘尼連の戸毎の勸進もあつたであらうが、比丘尼歡迎の主體はこの賣色者流に

あつたことは否めぬ。而してその賣色の徒も、盛行につれて、純比丘尼出もあれば、はた純私娼の變形、急拵への丸坊主もあつたことは無論であらう。後は、賣比丘尼たらんが爲め、その扮を裝つた者多きにゐたことも事實であらう。これが大略、以上の歸納である。

なほ、當時比丘尼の惣頭は何處であつたか。初めは、熊野のやう記せるもあるが、（前掲、「倭訓栞」等）更に一說、

「今の比丘尼の惣頭といふは、本江州水口甲賀郡大峰の大先達飯導寺 御朱印二百石 の寺にて、天台宗梅元岩本院なり。故に文臺といへるものに元は牛王をいれたりといふ。此事人の知れる事まれなり。」（増訂一話一言卷四十八）

とあり。然しこれは所謂歌比丘尼に關係なき一般普通の比丘尼の惣頭であつたのかも知れぬ。然し牛王といふ點、多少の疑ひがある。或は、是れ歌比丘尼輩のまた惣頭でもなかつたのであらうか。如何。

附記　尙、賣比丘尼の帽子、衣裳、履物、笠等の變遷については、「我衣」（燕石十種第一所收）に圖解をもて約說しあり。就て見るべし。守貞漫稿（近世風俗志）にも、そのまゝこれを轉載せり。これらにも及ばんかとせしが、予の此の考、賣比丘尼の變遷分布を主にせる記述なれば、殘り惜しけれど凡て省きつ。恕せられたし。尙、以上の記述の他、餘日、再び他書涉獵を重ね、增補修正することあるべし。

――大正十三年四月――

二項

「麓の色」

賣比丘尼考補遺

その後、「賣比丘尼考」の補遺として、偶然左の三項を發見した。尙、此類多からう。既載所引のものと重複のものもあれど、面白き珍資料もあれば特に、登載しておく。所據の本凡て別に珍しくもなけれど、一括通覽の便を計らひての事である。（尙、比丘尼の細腰については、鳶魚氏舊「新小說」所載「細腰の研究」なる一文にくはしい。）

○色比丘尼　比丘尼は女僧なり。異名を髮長といふは、齋宮の忌詞に僧を髮長と稱し、尼を女髮長と稱すとあるに本づきたるべし。尤三衣を着て佛道を修行すべき身の、いかなれば邪行の戒を破て、婬を賣ることを活業とするや。渠も淸女がいひけん木のはしの類なれば、丸太と呼るゝも宜なり。されば都といへど、比丘尼のさまは法氣づきて可怜からず、伊勢の明野原朝熊の比丘尼も、職人盡の繪を見る心地して愛なし。況んや遠州繩手の比丘尼は、さながら花子に等し。今は昔になりぬ、神田安宅よりねり出る折腰步の風流なる、楚王に見せなば六宮細腰なしと歎息したまふべし。思出や八宮町の枕に落る三緣山の七に、鐘のなからん里もがなとかこち、和泉町のきぬ〴〵さそふ歸大工の聲に、鳥はものかはとわびけんも夢なりや。昔見し其面影も渚に遊ぶ蜑の子ならで艤の窓より顏さし出し、小歌うたふもはしたな

「かくれざと」

く、船辨慶の名にしおふ顏の色も、雪のふる日はいとゞ愛なし。柿本太夫が、夕越ゆけばと佗けん、川風寒く千鳥鳴なる橋の袂に、軒を比し暖簾の内より、ゆきゝの人を喚子鳥、おぼつかなくも立よる荒魂が、短き邯鄲の夢に五十の鵝目を算しあへず縮ひきちぎつてやるも、流石に物の哀もこれよりぞしると、俊成卿の言の葉もおもひ出られて可笑し。〔麓の色巻五近世文藝叢書第十風俗所收〕

○大橋　新大橋西廣場なりとぞ〔紫鹿子〕類抜新大橋袂チヨンノマコロリ此淨土の風俗、頭に黑き頭巾を戴き、衣裳は常の如く、其形佛體なり。マウシ〳〵と呼ぶ事頻なり。〔遊里花〕上大橋端詰、濡事を見て心わるい海士。〔蜘の糸卷〕大橋比丘尼泊二朱、切二百、下百。〔好色訓蒙圖彙〕豐芥子曰、予が所藏にて闕本年號なし。貞享元祿の頃にやに載る圖比丘尼丸太比丘尼〻〻〻いざ事問ん、齒は白うして頭の黑きはこれなん丸太船、寄べ定めず色をうり歩行く。昔を聞けば妙法も手まだうし、阿爺もたず魚くはず、寺參りに疎き家美(かみ)さま、談義も說法も耳にとまらぬ女童に、地獄極樂の畫をかけて繪解して聞かせ、老の坂登れば下る常ならぬ世の無常を示して、心なきにも泪をこぼさせ、いとも殊勝に有けらし。いつの頃よりか齒は水晶を欺き、眉細く墨を引き、黑い帽子もおもはくらしくかつぎて、加賀笠にばら緒の雪駄、小唄をよすがにして、勸進と云ふしほの目もとにわけをほのめかせ、六尺中間が思ひ種となる。帽子とり

て枕したる頭つきは、西瓜のほけたるにいきうつしなれど、なづむ上からは吉野の春、高尾の秋と月もあやなり。夜の逢瀬は仲間の堅い法度にて、おてきとなれば我方へつぼ入りさする、酒のませ茶飲する事茶屋に替る事なし。勤に事かゝさぬ比丘尼は、紙も相應につかひ、脚布も色白なり。衆生に縁薄き御方は、揚錢も定まらず、はりもいきぢも沙汰なし。安い物は錢失ひ、いやな虫を置土産にしつ、跡にては何ぞが見えぬと云はぬ事なし。〔びく人せりふ〕時にこつちの宗體は、つむりの頭巾は富士の八葉を表し、かんざし月の光をかす、帶は虛空の一圓窓、下駄は九品の蓮華を蹈み、文臺は世の布施物を保ち、流れ盡きせぬ和泉町は、昔のえにし千束の文を、白壁町と客が無理云ふは、せまいと口舌に安宅の中直り、云ひ拔け間に合ひ鰻茶屋、男を神田の多町と伏せうと、涅槃の床は是こそ彌陀の八官町、世間をとんと丸太船。〔華里通娼考〕比丘尼國 丸太國とも云 人物毛なし、天竺の風俗に近し。佛法を信じて勸進を專にする。但し此國晝ありて夜なし。大熱國にて笠を放さず。按に此國の人往々小船に掉さして、深川の大船の間に遊て、船中の旅客をたぶらかし、巾着の底をはたかしむ。或は鄱陽駿臺の諸邦に漂流して赤坂奴のへそくり錢を奪ふ。土産、頭巾 天笠遺風 文臺 臺にあらず箱なり、米と錢とを入れて上下の口を養ふ足駄たゞし黑塗多しびんざさら、黑米飯 細腰を好む故に飯の食へざるやうにす、楚王細腰を好むの餘風右國の產物なり。〔かくれざと下卷

「聞上手」

「本朝醉菩提」より

比丘尼唄の四

風俗所收」

○びくに　神田へんにて比丘尼が二三人行逢ひて、つれ立はなして行くを聞くに、「けふはつちやの、通り町で、ゑゝ女を見やした。ソレハ〳〵とんだきりようでの、島ちりの小袖に紫うらを付けての、帶は黑繻子の幅廣を路考にむすんでの、そして髪はといふて手をあげ、「わが身でなし深川ほんださ。〔聞上手小咄十種所收〕　——大正十三年六月補——

賣比丘尼續補遺

○「本朝醉菩提」（京傳作）を讀んで居りました處、歌比丘尼の唄を見出しましたから、御通知。（本朝醉菩提の、姉妹本事品第五）

「その跡へは五ツか六ツの傷々しき小比丘尼が黑木綿の頭巾を被り柄杓を腰にさして出れば、老女云、そちは今少し生立て伊勢か熊野へやらねばならぬ。比丘尼といふ者は、牛王賣とて文匣を脇挾み、熊野の地獄の繪說して、血の池の穢をいませ、不產女の哀を泣すが活業ぢや。いで比丘尼歌うたへといへば、アイと答へて小さき指に、比丘尼簓を打鳴し、

『梅はにほひよ、櫻は色よ人は美目より唯心。お勸進、おやんな』

と舌も廻らず唄ひければ、わけて哀に見えにけり。云々。」（大正十三年六月二十日、逸名氏より）

○新しい活版本ですが、「新版端唄」に、

磯邊比丘尼

伊勢に宇治橋、內宮外宮、八十末社の宮續き、あひの山ではお杉お玉が、しまさんこんさんなかのりさん、岩戶山には道つゞき、二見ヶ浦には淺間山、あらむせき磯邊びくにに代々神樂、これ申し泊らんせ。

とあります。磯邊比丘尼と思ひます。この唄集は大正八年の發行ですが、この唄がいつごろから唄はれたものか不明ですが、こんなに唄はれてゐたのですから、かなり澤山ゐたもののやうに思はれます。今ある土產物の賣店が昔もあんなにあつたとすれば、あの賣女たちの中にも、こんなのがゐたのではないでせうか。或は、蠑螺賣ではないかとも思つたりしてゐます。云々。(大正十三年六月二十六日、能勢久一郎氏より)

比丘尼唄の五

○『よさ様の、寢姿窓から、見れば、花ならば初櫻、月ならば十三夜、盛まだしき、閨の內さては、野に咲く百合の、花しよがゑ。ちとくわん〱』とぞ謠ひける。ヤイ〱喧しい丸太女等、暮に及んで何事ぢや番所が眼に見えぬか。云々。ア丶、堅い侍ぢや。是より嚴しい番所波に搖らるゝかかり舟の中迄も、小唄は附けたり假寢の伽に呼ばんす。寢しめての寢心は髮のあるより無い方が、びら〱せいでよいげな云々。」(大近松院本、「吉野都女楠」第四」こゝにも比丘尼唄がある。尙、比丘尼は、好色一代男卷三、戀の捨銀の中にも『橋本に泊れば、大和の猿引云々。かやうの類の宿とて、同じ穴の狐川、身は樣々に化るぞかし。此所も賣子、浮世比丘尼の集り」と現はれ、大近松の「五十年忌歌念佛」の下、「お夏笠物狂ひ」の中にも、「三界をたゞ家として、袖笠雨の宿りにも心とゞめぬ假枕、流れにあらぬ川竹の、笹の小笹のびんざさら云々」と、淸十郞に由緣ある二人の唄比丘尼を描出してゐる。同近松の「夕霧阿波鳴渡」の中卷にも『よい年して長屋へ比丘尼引入れ』とある。尙、此の類多からう。

――大正十三年十二月　久彌補――

浮世繪情調

蠱惑的な媚態

鳥追から女太夫へ

「鳥追から女太夫へ」、鳥追の沿革である。沿革といふても、軟かな話である。鳥追變替の詮索をして、かねては彼女「鳥追」の三日月形の編笠と紅の笠緒との風姿――大江戸の春が産んだ浮世繪情調に浸りたいとの享樂的な念願に過ぎぬ。

元三の江戸を賑したものは、諸大名の外觀だけは嚴めしい、內實は「封建」の烙印みじめな猿芝居的な登城姿ではなかつた。

年に一度開放せられた、第四階級としてあらゆる試練に堪へたる彼等町人士女の歡び、享樂の的は、げにや幕府が非人の名を冠せてゐた者ども、萬歲、鳥追、春駒、大神樂、大黑舞の類であつた。とり分けて、「……大々神樂門禮者、梅が笠木も三圍の土手に囀づる鳥追は三筋霞の連彈や」（淸元、梅の春）と唄にも唄はれた鳥追の優しい蠱惑的な媚態は、江戸ならでは見る能はぬ艶麗な背景の基調であつた。

さうした鳥追は、一たい江戸期或は其以前の何時頃から發生したものであるか。最初から女太夫のみであつたらうか。またその女太夫も非人の類とは誰しも知つてゐるであらうが、どうして非人の專業となつたか。また鳥追の語原は如何。その考證を多少こゝに費やさうと思ふ。

三次の變替

「鳥追船」

三荘太夫

三河の發生

鳥追には、三次の變替があつた。第一次の鳥追は、たゞ田家の鳥を追ふ番人である。卽ち田園の一賤夫の業であつた。謡の「鳥追船」(一名鳥追)は、丁度この意味のものであつた。「鳥追船」は、九州薩摩の日暮殿、訴訟用にて滯京十年餘。その留守に家來の左近尉といふもの、その家を横領して、主家の妻子をして鳥追船に乘りて水田の鳥を追はしめた　日暮殿の歸國によりて罪發覺するといつたものである。「三荘太夫五人孃」(竹田出雲作の淨瑠璃、「三荘太夫」物の一。但し此の作以前にも三荘太夫の傳説は隨分淨瑠璃に唄はれてゐる)の中にも、對王丸安壽姫の母の御臺が、人買の手から佐渡で鳥追の苦役に服したことが哀絶を極めて描かれてある。但しこの時の御臺は、傳説では粟圃の鳥を鳴子を鳴らして追つた。さうして此の事件は、村上天皇の天暦年間(西紀九四七——九五六)卽ち平安朝前期末の事であるといふ。若し此の説に現れた御臺の鳥追が眞であるなれば、田圃鳥追の賤役は、旣に古く此の時代から存在してゐた事になる。然るに「近代世事談」には、「鳥追は長者の田園の鳥を追ふばかりの勤めにて妻子を養ふ」とあつて、その者ども、歳首に、この長者(三河の某所)の宅に來り簓を摺りて、長者の富を讃めたる唄を唄ふとある。その文中、延文の頃とあれば、延文は北朝後光嚴院の年號、尊氏義詮の時代(西紀一三五六——一三六〇)である。鳥追第一期が室町草創期若しくは、遙かに三荘太夫傳説の村上天皇期にあることとは、これ等に依つて略判斷がつくであらう。同書に曰ふ踏歌の遺風なりと稱するのが果して是ならば、この鳥追の風は無論延文以前に發生してゐたのである。世事談の三河長者

敲き與次郎

女太夫の發現

の話眞ならば、歳首の鳥追、また萬歳と同じく三河が發生地である。

第二期の鳥追は、所謂「雍州府志」にもある敲き與次郎一名鳥追の鳥追である。これは、第一期の風が更に發達して、一種の營業化したものである。「雍州府志」悲田院の條に、「元旦より十五日に至るまで、笠を着、白布を以て面を覆ひ、手を敲きて祝語を唱ふ。門戸に倚りて米錢を請ふ。是れ敲き與次郎と號す。又鳥追と稱す。」（原漢文）とある、是である。守貞漫稿には、これが「安永天明（十代家治時代、西紀一七七二――一七八八）の頃迄來りしが、後之を廢す。」とあるから、恐らく室町期から江戸中期まで、京阪地方に於て行はれたものであらうと思ふ。而して敲き與次郎の與次郎とは、京の悲田院の頭であつたのが、その配下の者までもこの頭の名を通稱したのであらうといふ事である。

江戸では、これが女太夫となつた。これが第三期の鳥追である。（或は京阪に敲の存在中、既に江戸に女太夫の鳥追が生れてゐたかも知れない。）京阪の敲きは、手を拍つたり、又は掌を扇に敲いたり、又はさゝら（割竹の類）や或は笹竹や木片を擦り鳴らしたりした。これは草創期、田野の鳥追が矢張りさゝらを使用した。夫から出てゐるらしい。「増補松の落葉」にもその意味の歌がある。（同書卷第四。古來中興踊歌百番の內、第百「ささら踊」）が變りも變つたり、即ち三味の三下りとなつた。さうして京阪の醜い襤褸を纏うたいかにも乞食の徒たる男性姿が、極端に柳腰皓歯の美女と變じた。

江戸の女太夫は、無論松右衞門や車善七（當時江戸の非人頭）の配下であつた。然し平常は彼女等は所

謂女太夫として一種の賤業の徒であつた。守貞漫稿非人の部に「右小屋の妻娘は、女太夫と號け、菅笠を被り、綿服綿帶なれども、新しきを着し、襟袖口に縮緬等を用ゐ、紅粉を粧ひ、日和下駄を穿き、いと艶めきたる風姿にて、一人或は二三人連れて、三絃を彈き、市店門戸に據りて錢を乞ふを業とす。往々此の女太夫に美人あり。市店には一文を與ふるのみ。他國より勤番の下士等は、邸窓の下に呼び、二三十錢を與へ、一曲を語らせ、或は花見遊山の所、多く女太夫の徘徊する時、彼の士酒興に乘じ杯を與へ煙管を共に喫ふ等、言語に絶せり」と憤慨されたものである。これが「元日より十五日まで、衣服は平日と雖も、新綿服を着し、三絃の唱歌を異にす。」(同書)とある。それが元日は「編笠を被り、……中旬以後は、菅笠に換ふる也。編笠の時を鳥追といふ。」(同書)とある。

して見れば、江戸の鳥追も、女太夫が鳥追といふ名の下に來た期間は、京阪の敲與次郎と同じく元日より十五日の半月であつたと見える。さうしてこの新綿服には、彼女等、階級制度の喧しい折柄、分けて賤民に屬する彼女等としては、涙の出るやうな苦心があつた。

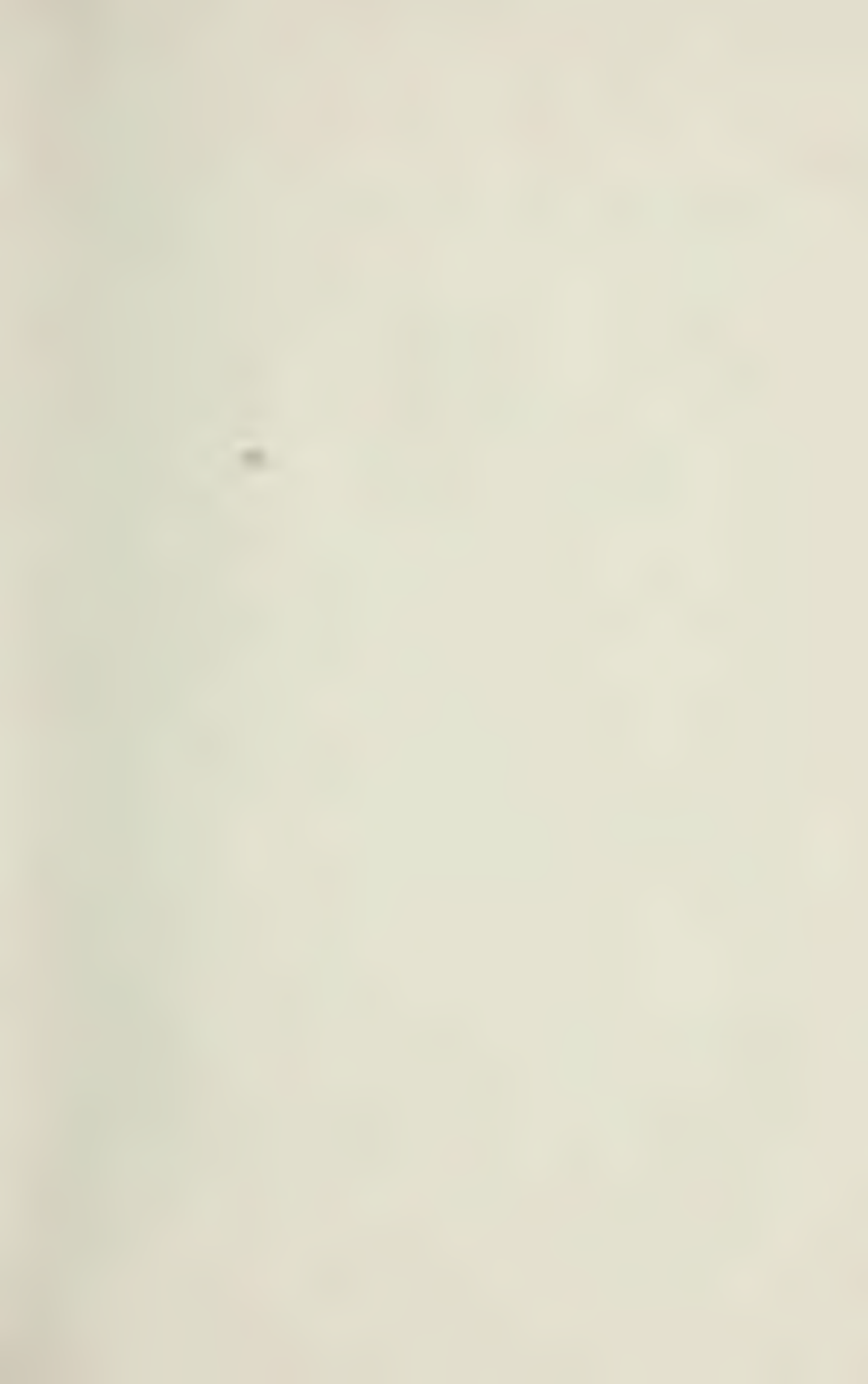
「鳥追の姿は清新で艶麗であつた、冠つた笠の紐が紅鹿子の紋、白い〳〵顋に結んで、瀟洒な木綿中形の着附、帶も木綿だが、凝つた中形を擇んだ。それを引掛けに結ぶ。水色の脚絆、白足袋に日和下駄、化粧を淡白にしてゐた。概して木綿であるが、袖口に半襟だけは縮緬を附ける。それが妙に引立つ。大抵老若二人宛組んで行く。後から米袋位な麻の袋を擔いで、親や本夫がお供してゐる。その收入

は、よい時には松の内に二兩二分位の貰ひはあつたといふ。」（三田村鳶魚氏、「江戸の珍物」より）收入に關しては「當町（江戸をいふ）の非人小屋より來る者一人に十二錢紙包を與へ、他は一錢を與ふ。」（守貞漫稿上）ともある。

さうして彼女等の晴着の反物は、普通木綿の反物に比して三四倍の高値であつたといふ。賤民のこととて、幕府は絹布を着用させなかつた。乃で女性の弱點（賤民と雖も矢張り可憐な女性ども）を巧に利して、彼女等の欲求を滿足せしめる一種の呉服屋が出來た。彼等は年中非人の女性に向くやうに木綿中形の凝つた染を工夫して、就中女太夫の初春、鳥追姿には、法令を潛つた澁い派出好みを凝らしたといふ。從つて此等を需要したものは、同じ非人でも金廻りのよい仲間であつた。（今日でも飴賣などの女藝人が、木綿物で存外粹ななりをして來るのは、此の遺風でもあらう。）

默阿彌の脚本

鳥追に關して、これを材料としたものに河竹默阿彌作「夢結蝶鳥追」（おこよ源三郎）の安政三年作がある。講談種にもなつてゐる。このおこよ源三郎の事實は、鳥追ではなくて、座光寺藤三郎なる信濃衆千百石の旗本と瞽女お八重との事であるといふが、私はこの實說よりも美化せられ戲曲化せられた、おこよ源三郎を取る。そのおこよも矢張り婀娜な鳥追姿が凡ての悲劇の基であつた。（鳥追に關した芝居では、三世河竹新七（默阿彌門人）作に明治十一年の鳥追お松がある。外題「二十四時改正新話。」新平民と改稱せられる明治初年を背景にしたもの。仕組は、賤民毒婦の美人局。）

一勇斎
國芳画

鳥追の唄

江戸は元祿頃

女太夫の鳥追の唄つた歌は如何なるものであるか。これにも前後の變遷があつた。その初めは、丁度「世事談」の延文年間三河に行はれたものと大同小異の内容。長者を讃めてその田地の廣いことを稱へ、色々その長者の邸の初春の光景を叙し、併せて今年の害鳥驅除、豐年の稔あることを祈つたやうな、可なり長いものである。（全曲、「春陽唱話」に出づ。「江戸の珍物」及び「百科大辭典」に亦載す。）それが後には、鳥追の文句を竄入した普通の小唄となつた。「お長者のお庭に音のするのは誰々。お大盡〳〵。簪やらうか、鳥追に。買つてやらうか鳥追。東の方には淺黃帷、黑羽織、髮は本田か鳥追。」（文政の「新鳥追」の一節。）の如きとなつた。又「常の歌、及び淨瑠璃と異る一節を唄ひ、三味線を繁絃して來る。」（守貞漫稿上）ともある。此の繁絃が、昔のさゝらの波殘といふべきであらう。

江戸でこの女太夫の鳥追が何時頃から行はれたか。「近世世相史」には、元祿期の年中行事に既にこれを載せてゐる。然なれば、京阪の簓(さゝら)敲きの鳥追と既に同時に存在してゐたのである。京阪に簓敲き滅ぶるも、（京阪には女太夫は生れなかつた）猶この江戸の鳥追は滅びなかつた。然るに明治を堺としてその面影もたうとう滅びてしまつた。今や猥雜な三河萬歳、獨り餘喘を保つのみとなつたのである。「美しきもの、凡て滅ぶ」とでも、嗟嘆したくなるのは、無理か。

【追補】――三莊太夫物の古淨瑠璃、並に小說類の書目を補つておく。

○說教與七郎の正本「さんせう太夫。」之に次ぎて淨瑠璃山本角太夫の正本「都志王丸」岡本

文彌及其門人の語物なる「三椒太夫。」紀海音に「山椒太夫戀慕湊。」（寶永五年豐竹座）。「山椒太夫葭原雀」（享保五年豐竹座登場）。竹田出雲に「三庄太夫五人孃」（享保十二年、竹本座）。寶曆十一年に竹田小出雲に「由良湊千軒長者」（實は半二、三好松洛等合作）あり。○小說には、其磧の「咲分五人媳」（享保二十年刊行）。降りて不乾齋雨聲に「三庄太夫由良湊長者入船」（文化九年刊）。東西庵南北に「由良湊入船日記」（文政五年）等がある。○歌舞伎には、寶曆四年八月市村座、「由良千軒蜃鬼湊」。天保八年七月市村座、「三莊太夫銑鷄歲」。嘉永五年四月、河原崎座、「昔談柄三桝太夫」。明治、「增補三莊太夫」等がある。

——大正十二年一月——

「鳥追」の參考書

○尙、鳥追の研究については、京附近の鳥追は、江馬氏の「日本歲事史京都之部」に悉しく、その變遷は、朝倉氏「此花」（第十六）にも嘗てものせられた。尙、原始的、寧ろ本義的な田圃の鳥追については、嘗て風俗畫報（六三と一〇六）にも出てゐたが、爐邊叢書の川口氏著「續飛驒の鳥」にも諸書を引いて悉しく出てゐる。鳥追の歌（女太夫のではない）も多く載つてゐる。其他鳥追の歌は、「俚謠集」（文部省文藝委員會編纂）にも載つてゐる。

藝者の起源

藝者の起源に就て多少心付いた事どもを書き記さうと思ふ。それには「江戸花街沿革誌」（關根氏）が最も要を得てゐる。今その記事に藉りて記すことにする。

遊女の兼帶

遊女は、正德享保の頃までは、後世の藝者を兼帶してゐた。遊女の他に、茶屋の主婦、或はその娘などが、三絃を彈いたり唄を奏したり踊を爲したりした。此等の輩を取持と呼んだ。享保以後は漸く、遊女の色藝を兼ねることが止んだが、しかし猶新造の中で遊藝に通じたものは、客の前で絃歌を事とした。寶曆の末に全く廢れ、遊女は、賣色の專門となり、爰に始めて女藝者なる一階級を生じた。

踊子を生ず

是より先き廓外では、既に踊子（一に躍子）なる者を生じてゐた。初めは遊藝を以て士民に侍つてゐたが、後には、私娼同樣となつた。此類が、後世に至つて町藝者なる名に變じた。その當時（寶曆のはじめ）新吉原へもこの踊子が輸入された。小樓で踊子の名義を以て公然色を賣らしめたものが、寶曆四年には二十餘人の多きに及んだ。然るに同八年には踊子を抱へた妓樓は僅かに四戸、妓は五人に過ぎなかつた。同十一年には踊子を抱へた樓數は三戸、妓は三人に減じた。此等の少數の踊子は、皆他の遊女と同じく部屋を持ち、店頭に列坐したが、風俗は異樣であつて、後帶に結んだ。明和五年

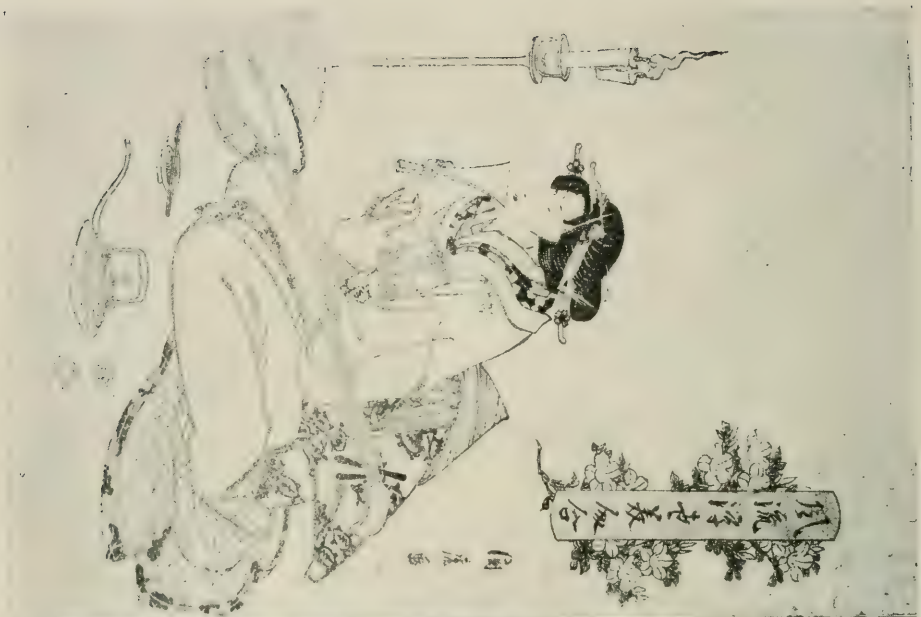
藝子現る

女藝者

には、この踊子なるものは全く絶えた。卽ち新たに興つた藝者の勢に蹴落されたのである。

寶暦四年、始めて踊子の他に藝子一人があつた。同十一年には、始めて藝子と共に藝者の名を見るに至つた。卽ち藝子には、大黑屋（小樓）に豐竹八十吉がある。藝者には、扇屋（大樓）に歌扇があり、玉屋（大樓）にらん、ときの二人があつた。伊勢屋（小樓）に主水があつた。是より先、寬保の頃の細見記に豐竹兼太夫、同妻太夫などの藝人のあつたことから推すと、藝子とは此等の藝人に與へた換名であらう。藝者とは單に三絃を以て、當時流行の小唄などを歌つた者の類であらう。明和五年には、藝子の數二十餘人であつて、安永七年は、藝子十六人、藝者五十餘人の多きに至つた、されば、藝子の起りは、寬保の昔であつて、女藝者を生じたのは、寶暦十年頃の事であらう。云々。

なほ、同書には、文化年間から、慶應へかけて、廓內女藝者男藝者の員數を示してゐる。

	女藝者	男藝者	合計
文化年間	一六三人	四〇人	二〇三人
文政年間	一七二人	二五人	一九七人
天保年間	一〇六人	二八人	一三四人
安政年間	二四五人	二五人	二七〇人
慶應年間	三四一人	三八人	三七九人

（天保年度の減少は、關根氏は明示しないが、例の水野越前守の風俗肅淸の影響に因るのであらうか。）

辰巳藝者

以上は、主に吉原に就て云つたのであるが、深川はどうであつたらう、所謂辰巳藝者はどうであつたらう。守貞漫稿第二十編娼家下から、左の數說を拔く。

「江戸官許非官許の遊里どもに藝者の賣色すること無之。唯だ深川仲町と大新地の藝者は賣色する也。故に仲町に遊ぶ者は、藝者を犯すを功とす。蓋し初參等の客には容易に賣色せず。夫も人品と時宜と金とに應じて、初會にも之を賣る。馴染客にも賣色せず。江戸深川仲町等の藝者を侵すには、口止め金と稱して、客より金三兩を青樓に出し、青樓より藝者に與ふ。京阪の枕金と同意也。仲町は、藝者色とて前にも云ひし如く、色客を數輩持ち、女郎に似たり。或は客の妾に均しき者を預け置きて遊びに行くもあり。此所の藝者は尊大にして、女郎却つて謙退す。云々。」

町藝者

吉原辰巳以外の町藝者は、どうであつたらうか。

「江戸藝者とも云ふは、吉原及び深川より市中を指して云ふ言なり。兩國柳橋邊、葭町甚左衛門町邊、堀江町邊、京橋邊等に多し。天保以前は、堺町葺屋町にも有之。今は猿若町に之有りて芝居茶屋に出る也。天保後にも、堺町邊に再出せしが、當時名主熊井氏嚴刻にてその支配中には甚だ稀なり。是は、天保の府命に（天保九年十二月二十八の嚴命。當時水野忠邦既に老中たり。久彌。）町藝者も三絃等伎藝を以て座興を催すのみにて色を賣らず、親兄等を奉養の爲にする者は、之を許す。賣色をなす者は、之を

咎む、之を罪す。又實女養女にも非ず、奉公人に抱へ、藝者に出すことを禁ず。云々。京阪には、町藝者は之無し。江戸の町藝者は、專ら貨食店に之を迎ふる也。又た舟行等にも之に供する也。兩國以下前に云へる外に、下谷池の端、仲町邊、芝神明其他山の手にもこれ有り。是等は場所により一席に二朱也。(普通は一席一分、長坐には、之を一倍又は二倍すと云) 陽に、藝者と稱するは私稱にして、酌人と云ふを名目とす。」

以上で大凡そ盡きてゐるが、なほ序でに京阪地方の藝子の記事を、同じく「守貞漫稿」から抜いて江戸と對照しよう。

『藝子、彈妓也。乃ち江戸に云ふ藝者なり。昔は藝子之無し。遊女三絃をひく。其後未熟の遊女は彈くことを得ざる者あり。或は尊大を究めて自ら之を彈かず。「一目千軒」に曰く、太夫天神自ら三絃を彈かざる故に、幇間女郎を呼ぶなり。又藝子と云ふ者外にあり。昔はなかりしに、寶暦元年に始まる云々。「澪標」(大阪新町細見之圖)〔近世文藝叢書第十風俗所收〕に曰く、幇間女郎と云へる者は、揚茶屋へよばれ、座敷の興を催すための者なり。琴三絃胡弓は云ふも更なり、昔は女舞も勤めし者なり。享保年中より藝子と云ふ者出で來り云々。』 然らば、大阪は、享保、京は寶暦に始まるか。

「京阪、島原新町、其他祇園島之内以下諸所の藝子皆色を賣る也。江戸吉原藝者は更に色を賣らず。他所俗に云ふ岡場所の藝者も其所の風により或は之を賣り、或は色を賣らず。京阪藝子色をも賣ると

雖も、亦女郎の如く假初には雙枕せず。其主人たる置屋に茶屋を以て之を談じて金を與へて後にするを本とす。其の與ふる所の金を枕金と云ふ。其多きは十兩、或は二三十兩少きは二兩なるべし。云々。」

藝者の起源は、大要右の如くで、以て京阪東都の狀況を知り得たであらうと思ふ。古今その揆を一にすといふ言葉もあるが、この藝者の起源をよく／＼尋ねて見たら、矢張現下の彼等賣色狀態の詮索と大した區別は無いやうである。京阪にも無い特色であつたといふ吉原藝者の藝一本で通つたといふ事も、隨分怪しいものだが、（最初は兎も角その末は）兎に角その風が傳はつてゐるのか否らぬのか、多く何處の都會でも（大阪は、私の聞知る所では公然祕密の准公娼であるが）遊廓內の藝者が、他の町藝者に比較して、藝一本で立つてゆくやうな傾向のある事は、まだ嬉しい事に思はれる。

諸雜書「藝者」の記事

追記――其後、藝者の起源に就き、見當つた他の記事を諸雜書から拔萃しておく。

○昔は當地に承り及ばぬ舞子遊女などの類も出來候て、都て是等の事長じ候ては世の財用を費し風俗を破り云々。（正德三年の事也）（白石物價議）○我等など若年の比までの儀は、躍子など申者は、たとへいかほどの高給を以、召抱申度と有レ之候へども、御當地の町中には一人も無之、三味線と申すものは、盲女の女より外には引申さゞる事のやうに有之云々。當時の儀は、件のごぜなど申す者の儀は沙汰にも承らず、野にも山にもをどり子三味線ばかりの如く罷成候は、元祿年中以來の儀にても可有之哉云々。（落穗集）○元文の頃は、江戶中をどり子といふ女

有て、立花町難波町村松町を第一として、處々にあり。素人の娘に三味線淨瑠璃を教へ込む。歴々の慰みとして處々にあり。留守居寄合の茶屋などへ遣はし、藝者のやうにして、母附添ひ、出入しけり。云々。(武野俗談)〇(原本洞房語園)(享保五年)近年町々に踊子といふものお國歌舞妓が類云々。御停止にて其後又流行れり。〇踊子御停止(寛保元年)舞子三絃等にて所々に雇はるゝ内に、遊女ていに類するもの多し。依つて其の類停止。(ころび藝者の鼻祖なり)(我衣)〇女げいしやの事、歌舞はもとより遊女の所業なるを、後には其道心得ぬもの多くなりしより、おのづからせぬ事となれり。云々。又藝子と云ふ者外にあり、昔はなかりしに寶暦元未年に始まるといへり。(嬉遊笑覧九)〇今、藝者と云ふ女は、昔舞子の名殘なり。又はおり藝者とは、深川のげいしやより云ふ。明和七年の冊子、辰巳園、藝者を喚ばむと云ふ處、はおりにしましやうかといへり。もと女共、羽織を著たる故なり。豐後節はやりて此風起れり。(同九)〇豐後語りのことをいふ處、あまつさへ女が、あられもない羽織をきて、脇差まで差した奴も折ふし見ゆるぞかし。昔は堀の舟宿の女房ばかりぞ羽おりを着ける。云々。昔女郎にも男に作りたるあり。其餘風なり。(下手談義)〇天明の頃は、世の中賑はしく、武家にても少し酒盛めく折は、町藝者とて酌取女を招くは、何れの家にもある事なり。されど此の酌取女も、質素の風ありて、髷結に紅絹の切をよしの紙に包みて用ふる事流行り、地女等も是を學べり。今は田

舍娘も、髷結に縮緬を用ふるなり。天明年間、町方の女ども、櫛卷といふ髪はやり、髪を束ねて櫛につらぬき、根元を文通の反古にて卷きし物なり。今は見る事なし。(蜘蛛の糸卷、追加)〇歌舞妓河原者の曲藝を以て、事業とし糊口する者を、男女ともに藝者と通稱す。江戸中に二萬人の餘これ有よし。女を羽折といふ、親兄弟をやしなふも多し。二萬人餘の中、上手高名なるものは、一ケ年に束修貳百兩程づゝも取るよしなり。されど倉廩を持ちしものは一人もなし。(塵塚談)〇女藝者流行りて江戸端々遊所は申すに不及、並の所にても藝者の二人三人なき町はなし。餘り募りて吉原品川の賣女の妨げになるにより、賣女屋より訴へて、高繩邊の女藝者十二三人被召捕たる事ありけり。(久彌曰く、一書に天保十年八月)皆藝者に極りて遊所に行く者なかりしなり。寛政の御改正より羽織も藝者も三味線も皆止めて、正風體になりたり。(賤のをだ卷)〇寶暦の頃、扇屋の歌扇といふ者に始まれり。其初は、歌扇ひとりなりしが、後(久彌曰く、寶暦十二年の頃よりと云)追々に外の娼家にも茶家にも出で來て、細見のやりての前の所に「藝者誰、外へも出し申候。」これより遙か後に、大黒屋秀民といふものけんばん(久彌曰く、見板。或は檢番。劵番と書す。)を立てたり。藝者を踊子と肩書して、店へも遊女と同じく並びゐて客をとりたる娼家もありき。其前は、藝者といふものは更になく、遊女の中にて三線(さみせん)を彈き、唄も歌ひしことにて、多くは新造なり。三線の出來る新造を揚げよなどいひて呼びて彈

かせたることなり。店に並みゐる時も、皆唄を歌ひ三線を彈きたるなり。是れ昔よりの樣にて、中頃より此の習はしいつとなく止みたり。今も店を張る時に、すがきを彈くは、三線番とて新造の役なりといへり。(これと殆ど同じ文。手柄岡持の後は昔物語及び守貞漫稿下にも出づ。久彌。)(中略)さて女藝者は、古の白拍子の名殘などの如く思ふ人もあれど、さに非ず。もと遊女より出でゝ踊子の一變せしもの也。云々。(三養雜記二)〇女藝者の事を昔は踊子といふ。明和安永の頃より藝者と呼び、者などゝしやれたり。云々。(文化八年。三馬の「浮世床」初の上にも、「者の事だわナア」と、者といへること見ゆ。久彌。)天明の頃まで、橋町藥研堀の藝者、座敷に出るに、振袖着て來り、留袖に着かへ、又歸る時は必ず振袖を着しが、今振袖を着るものなし。夫より柳橋同朋町、本町日本橋とうつりて、眉を落し、齒を染めたる藝者多くなりぬ。云々。むかしの藝者は娘ゆゑ、まはし方にお袋の付き來る事多し。今は眉なく齒を染めたる藝者多くなりし故、お袋の來るを見ず、お袋の役を兼帶するなるべし。云々。(奴凧)〇今の藝者に、ころばぬはなく老若の別なく金次第となりし故、力の及ぶ限り女子を十人も二十人も抱へて藝者に出す、其趣遊女に變ることなし。(文政雜記)〇天保の改革には、市中の酌取女を禁ぜられたれば、藝妓は半元服となり、丸髷に結ひ絲切り齒より前の齒のみを染め三絃は繼竿なるものを工夫して密かに往來したり。昔は大なる三絃箱を携へたれば、到底箱屋の男手を

借らざれば、運搬し得ざりしを、此より後女子をして風呂敷に包みて運搬せしむるの便法となりしなるべし。（日本社會事彙）〇維新前の藝者の風は、必ず帶を長く垂し、長き笄を挿し、伊達の素足と稱して夏冬共足袋を穿かざりしこと娼妓に同じ。而して客の前に出づる時は勿論、平常にも羽織を衣ることとあらず。只深川の妓のみ之を着たり。維新後帶を垂らすこと廢りたるが、明治二十四五年頃より再び流行し、笄は今も儀式の日のみ挿せり。昔は必ず最初には紋付を着して出で、後に縞の衣服に着かへしが、この事一時廢り、今復再興したりと雖も、最初の衣裳も着替も同じ様なるが多し。茶花圍碁、笛胡弓琴等の餘藝までも心得、自から俗謠など作りて歌ひたるもの也。（同）〇藝妓の名も其初は娼妓と同じ事なりしなるべし。藝妓の色を賣らぬ頃になりて、遊廓の藝妓は通常人と同じ名を付けたるべきが、町藝者が侠を以て名を賣るの點よりして奴などの名起り、之に次で男らしき名を付くるに至りしなるべし。（同）（久彌曰く、社會事彙所說の如く、初め娼妓と同じ事なりしは、歌扇など其通りなれど、後、町藝者が男名若しくは何奴といふに至りしは、當時男童盛んにして彼等往々女裝せしより、それに對抗するため男に近き活潑とお侠、脇差を帶し羽織を着したるも豐後節太夫の云々もあらんが、是に最原因を置かずや。名の男名となりしは、無論男童の摸倣といひて可也。）〇踊子は京は寛文、江戸は天和、貞享の頃傳來し。（久彌曰く。是れ町方の踊子也。但し外骨氏編「賣春婦異名集」には、

寛永頃より江戸に在りしといふ。けだし外骨氏は女歌舞伎に之を結び付けしならん。私娼擬ひの踊子はその以後を正しとすべきか。)元祿二年五月二十一日には、已に踊子の屋敷方への出入を禁じたり。然るに寛保延享（八代吉宗）の頃は、江戸中到る處に踊子の二三人なき町はあらざりきと云。吉原にては女藝者を略して藝者といひ、之に對して幇間を男藝者といへり。市中にても明和安永の頃より踊子を藝者といひ、廓内の藝者に對し之を町藝者と謂へり。(百科大辭典)〇寶曆の末、藝者踊子と肩書して傾城同樣店頭に列せしめ客を取らしめたる娼家云々。其等も風俗は傾城の仕掛前帶の姿と別を立て後帶に裝はしめしとぞ。(近世世相史)〇江戸の踊子は、元祿以前天和年間に生じ、古くは舞子とも云々。元祿となり立花町、難波町、村松町を本場として無曲以外盛んに醜業をも云々。〇明和年間、即ち吉原に歌扇が出てから少し後に、芳町に菊彌といふあり。是が踊子の全盛を誘ひ、彼等の跋扈を見るに至りしかば、吉原品川の遊女屋は、上に訴へ此の菊彌を土地より追拂へり。次で有名なりしは深川仲町の本屋お六云々。〇踊子を藝者と云ふやうになりしは天明の末年より。〇天明享和時代には年の長けた女多かりし。〇踊子の送迎は初め其母親なりしも文化年間止み、間もなく箱丁現はる。〇扮裝は振袖で來て留袖に替へ、歸りは又振袖で、此風後に廢れ、冬は專ら銘仙縞の小袖、夏は絣の帷子。年中素足の吾妻下駄。深川のみ羽織を着たり。深川は舟宿の女將を眞似たる也。(以上日本花柳史)

（深川、後は（天保に旣に然り）羽織も着ねば男裝もせず、淺脂薄粉、水も滴る島田髷に仕掛といふ無反り一文字の櫛を戴き、無地小紋裾模樣などの紋付瀟洒たる衣裳に下げ帶といふ淸姸の風貌は、やがて世に辰巳の俠骨と云々。（近世世相史）○江戸の踊子又は町藝者は、私娼類似となつたので、天和三年、享保中、寬政中、天保十年八月とに吉原からの申立で、橘町、高輪等の藝者を召捕つた。文化十年には奢侈を禁じて美裝の者は夫々押込を命じた。○幕末期、吉原藝者は、町藝者をして一切廓へ三味線持つては入らしめなかつた。深川は文化文政に榮え、柳橋は安政より榮えた。（以上日本花柳史）○藝者に關する法令。踊子時代は元祿、寬保、延享等。藝者時代は天明七。文政七　天保四。天保九。同十三。弘化五。嘉永元等の諸法令町觸等苛嚴を極めき。法令等の一斑は、百科大辭典並に日本社會事彙、或は國史叢書本「浮世の有樣」等に散在せり。（久彌補）。

——大正十年六月——

吉原の三景容

京阪の俄

俄、並に吉原俄考

夜櫻、燈籠、俄と吉原の三景容の一であつた吉原俄について、その起源、沿革などを査ねてみようといふのである。

先づ、吉原俄に言及する以前、その先蹤と思はるゝ京阪の「俄」の起源、形態に、一走り目を曝してみよう。無論知らるゝ如く、後世の所謂る單なる「俄」は、阪地仕込のものである。但しこれに類似したものは、古くより京洛にもあつたやうである。その京阪の概觀である。〔吉原俄は京阪俄とは別物だとの議論も起るであらうが、自分は、その系統、京阪に在りと見るのである。くはしくは後說。〕

○京阪の俄

俄に類似した滑稽の所作、踊が、我が國古來より各地に、祭禮、祝典を機として行はれたことは、察するに難くない。唯、原始的な單純なものが、巧緻を混へた複雜な物になるだけの差である。嬉遊笑覽にも引いてゐる「一代男―島原遊興の件に現れる滑稽所作は、これを俄と未だ名づけなかつたにしても、次第に原始的な滑稽さが、見た上のみの形態の滑稽さが、思案を混へての滑稽に移り來たつ

た頃の、技巧化した頃の濫觴であることは否めない。試みに、「二代男」の原文に就て見ると、「好色一代男」巻之七の中の、「末社楽あそび」の條に現れてゐるものである。曰く、

「……彌七、棕櫚箒に四手切つて、むしこより兀と出せば、丸屋の三階より大黒恵比須を差出す。之を見て柏屋の二階より、懸小鯛見せければ、庄右衛門は砲烙に釣髭を作り出せば、隣より三社の託宣を拜ます。又、向ひより金槌を出す、其時あふむは懸燈蓋に火を點じて見せる。丸屋から佛に頭巾着せて出せば、柏屋より釣瓶取を出す。八文字屋より俎板見すれば、丸屋より牛蒡一把見せかける。猫に大小差させて出せば、干鮭に楊枝銜へさせて見する。炭消に注連縄張りて出せば、竹の先に醤油の通帳を附けて出す。彌七烏帽子着て頭差出せば、向ひより十二文の包錢を投げる。北から擂粉木に綿帽子巻いて出せば、南から障子に上々吉墮胎薬あり、同じく日雇の取揚婆もありと書いて見する。中の二階よりは、旗、天蓋、葬禮の道具を出せば、泣くやら、大笑やら、揚屋町に其の日出かけたる女郎も男も、殘らず表に出て、心は空になりて三所の二階を眺め暮して、古今稀なる慰是なるべしと、輿に乗じて、まだ所望々々といふ程に、後は大道に出て文作、何れか腰をよらざるはなし。(云々)」〔久彌曰く、好色二代男巻二の「髪は島田の車僧」の中にも、之に似た一口噺の實演の如きものあり。尚他にも多かるべし。〕

かうした、滑稽な、當意卽妙、後世の「いふが如し」の問答體のものは、一代男〔天和二年板〕の當

稱呼は大阪が元

時、（或は尙古く）、恐らく現實されてゐたものであらう。無論作者の空想ではあるまい。さうしてこれが、所謂る複雜化時代の俄の最初のものであらう。（原始的、單純な俄の最初は、無論安永四年六月大阪上梓の「古今俄選」にもいへる如く、神代天の岩戸の鈿女命の舞の如きであらう。）

　これに類似したものが、大阪にもこの當時行はれてゐたことは無論であらう。唯「俄」と名づくる稱呼を生んだのは、これより後、享保の頃、しかも大阪が元だといふについては、

　一、享保の頃ほひ、住吉祭の參詣群をなせる中、其の歸さ、飮みあかしたる酒樽を竹馬の先にくゝり付け、提灯の如くし、めい／＼持ち添へて高く差上げ（云々）翌年は、はや鬼お福の面などを袂にして行きて、歸るさを樂しみ／＼たるが、いつとなく趣向をなすやうになりて、今の姿になりし。（中略）

其の頃より程もあらせず、たゞたとへなどを專らとして、或ひは形も作らず、やはり住吉參りの歸るさの姿にて、「俄じや思ひ出した」とて通るを、所望なりとて袖に縋れば、「扨去年も、此の歸るさは、別してもない事ながら、思ひ付てお目にかけましたが、當年はとんと智慧が出ませぬゆゑ、無念ながらも捕へられた所で、一度／＼斯樣にお斷を申上げます。其代りにはよく／＼顏をお見知りおかれ下さりませい。來年はきつと思ひ付て笑はせますぞ」などゝいひて過ぐると、其のあとより鬼の面をきて大手をひろげて、ハ、、、ハ、、、と大笑して行きしてい、

これらを餘程の奇妙なる趣向なりとてどよみたる事也。（古今俄選巻一）〔雜藝叢書第二所收〕〔久彌曰く、大阪俄の臺本集として又豐富なものには、風流俄天狗（十册、初編五册、天保三年板本）がある。當時の流行俄狂言の十數種を極めて精細に紹介してゐる。即ち當時の實演上重要な教科であつたらう。〕

恐らくこれが、「俄」なる名稱の元であらうといふ。さて、「俄」なる語義は如何であらう。無論、當意卽妙の義であらう。「思ひ出した」とあるによつても知れる。頓才、さそくの滑稽所作である。については、

「俄といふ言葉は、物に當て思案工夫もなく、思ひもよらざるに、卒忽とつか〱ひよこ〱いひ出し仕る事を俄とはいふなんめり。是れ天下の通稱也。此を以てこれを思へば、漢土の滑稽、日本の俳諧、皆是れ俄也。（下略）」（古今俄選巻一、漢土俄濫觴の中）

「或人の云、古人註してにはかは速戲なり。諺に云、俄は我も人も趣向を爭ひ競ふの字義なり。字彙に曰（略）。されば、當意卽妙の風流、間に髮も入れざるにや。其の趣向あるを以て本意とすと云々。さあれど、年々さまざまの事ぐさ、善盡し美盡し、潤色いやましにして、人の耳目を喜ばしむる事等閑ならず、故に祭の花なるに准じ、踊の曲あるによれり。（以下略）」（吉原雜話）〔燕石十種第三所收〕

とある「卒忽といひ出し仕る事」、又は「速戲」、恐らく此等の解に盡きてゐよう。

各種を產み出した

二輪加役者

俄狂言の始まり

而して此の「俄」が、京阪に於て、次第に發達し、各種を產み出した。卽ち、一、俄（くはしくは俄狂言）京阪にて夏月諸神祭の夜、之を爲して興ず。二、座敷俄　劇場用のかづら衣服を用ふ、しかも紅粉は用ひず、素顏也。或は芝居狂言を學び、共に滑稽を專としたり。三、流し　種々の扮を揆し或は平服にぼてかづらを着し、一言の滑稽或は諧謔をなして行き過ぎるを云。など（以上、守貞漫稿雜劇下に據る。）と生じたるは、必然であり、且つ、第一の俄が簡單なる民衆的野外劇、第二の座敷の俄は、後世の所謂大阪二◯加芝居、第三は賤民の徒の遊藝と、かく別れ、尙ほ後世の專業的二◯加役者は、第二の物より恐らくは發達したものであらう。〔近來（天保十二年前後）…老練の翟新作の俄をなせしより、連を結び、俄師と呼びしより素人俄黑人俄と二流に分ち、今や…なんど、殆ど歌舞伎役者の心となり、給金いか程と定め、芝居の小屋にて道具鳴物を入れ、場棧敷にて見する事となりぬ。」（皐都午睡初編上、俄茶番）〕無論初めは、廓内の幇間、或は一般市井間の通人若しくは、茶目中年どもの戲に發したものではあらうが。（又、時には、第一の俄狂言の中にも、第二の座敷俄の素質――より複雜なる――卽ち役者の臺、其他芝居物眞似等より來たものも混和してゐたであらう。）

「難波の夜宮は俄の始まり」（古今俄選の序）とあるのは、恐らく第一の俄狂言の始まりの謂であらう。〔さうして或はこれが後說の、島原住吉祭の俄に傳染したものかも知れない。〕此類が、江戸の茶番と似かよひ、蜀山人をして、似て非なるもの也と力(りき)ましたものであらう。（俗耳鼓吹）とにかく、「俄」は、夏祭の景

物たる滑稽所作、又は臨時の座興として、野外に、又は戸内に、又は路上に隨時京阪を主に發達し來り、その風流れて都鄙に傳播し來つたものであらう。而して、この名は大阪に享保頃より生れたこと前にも述べたが、京は、一代男等によりて知らるゝ如く、その風古くより間々行はれ、阪地の發達と同時に、この風(阪地の複雜なる各樣式)また京にも流染し至つてゐたものであらう。

年號の明記はないが、元文のはじめ、大阪式俄京に流行るといつた傍證的記事、即ち左の如きものがある。

「俄といふものあり。云々。始りて三十年ばかりになるべし。近年はます〳〵熾に行はる。云々。多くは裸身又は肌を脫ぎ、顏面手足或は全身に丹墨藍粉などをわざと拙く塗り隈取り(云々)(久彌曰く、これ「古今俄選」の中にいへる、俄の一種「出たらめ」であらう。)今宮祇園御靈の祭などには彼の輩幾群ともなく、しかも大方その近邊の者にてぞ有りける。聲をかけて所望といへば立ち止り、或は無根の戲語をいふ。或は得もいはれぬ身の働きをなしてゆく、冷眼にてこれを見れば、そのまゝなる乞食といふべし。」(孔雀樓筆記)(嬉遊笑覽に據る)

嬉遊笑覽には、著者喜多川氏曰く、「孔雀樓は清田君錦(久彌曰く、越後の學徒なりと。「海錄」には播磨清絢選とある。)が號なり。此の筆記明和戊子冬と記せり。それより三十年前は元文四年なり」と考證してゐる。(但し、原文は、三十年ばかりとある。即ち元文四年とも限るまいが、とにかくその頃――即ち享保後間

もなく、大阪式猥雜なる俄が京に流行つてゐたといふ自分の說の裏書ではなからうか。それとも偶然、同時の發生と之を見ねばならぬだらうか。）

その頃の京俄に就ては、尙一個、同じく嬉遊笑覽之を引いてゐるが、出典は「一目千軒」の記事である。今原文〔近世文藝叢書、第十風俗所收〕についてみると、

天和年間、中堂寺村に住吉屋太兵衛といふ泉州堺の出生の女郎屋があつた。家の裏に住吉大明神を勸請してゐたが、今の島原に移轉した後、右の鎭守を殘しておいた。そのあとにて庶民、その明神に願かけするに凡て協うた。今は眞言地になり、光明院といふ。社僧あり、中堂寺村の住吉といへる本社これである。其後、太兵衛庭に、住吉の祠を移し、中堂寺村住吉の御旅所となした。御旅所參詣夥しきにより、享保年中、今の山に移し替へた。毎年五月十九日より、此の祭禮の練物が出る。二十一日より二十九日まで暮方より君連中ねり物、二十八日には練物廓を出て中堂寺村本社へ參つて西口より歸る。「夜に入りて他所より廓へ、紙細工、燈籠、作り物、俄などあまた持來り、夜明るまで京町中の老若男女貴賤男女群集おびたゞし」〔住吉神社の事並に祭の事〕（以上、原文の要略）

とある。此の住吉御旅所祭禮の俄は、たしかに、「一代男」當時より更に進歩した卽ち阪地式のものであつたらう。それが獨自のものであるか、大阪難波の夜宮そのまゝであるか、不明ではあるが。但

大阪俄の参考書

吉原俄の起原——二説あり

し、これを引いてゐる嬉遊笑覧の著者は、以て「かかれば一目千軒にいふ所、卽ち俄と名づけて一種の戯事となれるが始と見えたり。江戸の吉原町のにはかも同じ頃にや云々」とあるが、卽ち此の島原の「俄」を、俄の起原のやう見てゐるが、これはやはり大阪を最初とすべきであらう。何となれば「一目千軒」の原文に據ると、享保年中、今の山にこの御旅所を移したので、祭の發展は、それ以後である。すれば、大阪の享保の頃に生れた「俄」の名實の出現に屹度遲れてゐるに違ひない。〔卽ち、此の住吉祭の俄も、「孔雀樓筆記」所載の物と同樣、元文初めの物であらうと思ふ。〕

以上で、一先づ、「俄」の語義、起原、京阪の發生を打切とする。阪地俄の複雜化、營業化は、「古今俄選」にくはしい。「風流俄天狗」も尙ほ缺くべからざる資料である。又、俄流行に對する大阪町奉行の諸禁令は、大阪市史二、四に數條を收めてゐる。これらに就いて看るを可とする。〔尙、大阪の俄と江戸の茶番、茶番の起原等もあるが、此等は他の機會に讓らう。茶番と俄の別は、その概念は、俗耳鼓吹、皇都午睡初編上の卷、守貞漫稿雜劇下にも現れてゐる。〕〔大阪俄については、尙、笑ふ門（大阪俄の變遷）と題して、風俗圖說一ノ三に久保田米齋氏の略述がある。參考とならう。〕

○吉原俄の起原、沿革

吉原俄〔此の俄の字、吉原は、仁和賀と書くが常なれど、今は便宜上、俄の共通字を以てす。字體の上よりも、江

享保十九年說

戸獨自のものと思はしめんとせしそのかみの誰かの巧智なるべし。」の起原には、二說ある。一、享保十九年八月說。二、明和四年說である。一の享保十九年說は、動機を、廓內九郎助稻荷に正一位の宣下のあつた祝であるとし、二の明和四年說は、眞崎稻荷社內天神への奉納に關してとしてゐる。先づ一を擧げると、山崎美成の「新吉原略說」（文政八年晩夏十三日の序。燕石十種第二所收）に曰く、

「同年（八月）廓中ねりものを出し仲の町をねり行く。これを今俄といふ。其の始は、享保十九年甲寅のとし九郎助稻荷正一位大明神と官階ありし時の八月祭禮の願にてこの事起れり。（近頃までも俄の中に大門口に葉附の竹二本左右に立てしめ、繩引きはへてありし。これ祭禮の意なるをもてなり。然るに今さる事もなしといへり。）さて今の有樣の一斑を窺ふべきものは、喜多川歌麿がゑがける年中行事（久彌曰く、これ初代十返舍十九編、歌麿畫の靑樓年中行事上下、享和四年板。）に、六樹園が吉原十二時（久彌曰く、例の北溪畫。此の中に假裝人物の行く俄の繪あり。）など併せても思ひやるべし。」

とある、これが基本であらう。現に「嬉遊笑覽」にも、一目千軒の文を引きて、

「江戸の吉原町のにはかも同じ頃（久彌曰く、一目千軒にいへる島原の住吉祭の俄）にや、享保十九年八月、九郎助稻荷の祭禮に起れりといふ。」

と、乃ち新吉原略說の說の受賣りかと思はるる程である。（笑覽は文政十三年の序あり。）この「新吉原

略說」「嬉遊笑覧」說の享保十九年をその儘承認して反復してゐるものは、「日本花柳史」、「近世世相史」などである。大槻如電氏も、聞く所に因ればと斷つてはあるが、その「北州考」の中に、「元來九郎助稻荷の祭禮にして、享保十九年正一位の官階ありし時に廓內盛んなる祭典を行ひ、其時種々の工夫を凝らし、俄かに狂言などせしに起り、俄の名稱もかゝる急作よりの名なり。今日行ふにも獅子を眞先に立てるは、其の祭禮たるの證なり。」と此の享保十九年說を承認してゐられる。

二の明和四年說は、一に金曾木(かなそぎ)が基本のやうである。金曾木（文化六年五月より文化七年八月までの蜀山人の手記。〔新百家說林卷三所收〕）の中に、

「一、庚午（文化七年）三月十五日、淺草黑船町の邊の本屋にて、安永六年吉原俄の繪本の古きを見たり。朋誠識と云へる序あり。喜三二の事なりと思ひて買はんとせしに、主人見えずして果さず。同十八日淺草簑市の日、隅田川の花見んと淺草を過ぎし故、此書を買ひたり。序に、烏の鳴くあづまの花街に連戯(速カ)を翫ぶ事は難し。明和のはじめ祇園囃、雀躍など其萠ありしに因りて、同四のとし亥の秋にして初めて起れり。厥(その)後中絕えたるを去々年不圖再興ありて、猶去年に繼ぎ其賑ひ年を追うて盛んに趣向倍興有（らん）か、これ此鄉の榮をますみの鏡なれば、各其の藝を移して燈籠の花の薰を通さず、明月の餘情を儲けて紅葉の先駈せんと、或風流の客人の仰を秋の花にして、藝者と素人とを論ぜず、禿と娘とを厭はず、我と人との譲

りなく、人と吾との隔てぬをもて俄の文字調ひ侍り、豈又宜ならずや。

安永六年仲秋　　朋誠識

ことし文化七年まで三十四年なり。〔按此序明和四年丁亥俄起り、安永四年乙未に再興になり〕かゝる本にても、俄の起りし年號を考ふるに足れり。又跋に「郭中にわかものあり、頭は茶番の如く、尾は祭禮、足は踊の如くにて、囃聲芝居に似たるものは何や〱、是卽ち俄てふ物にして日々夜々趣向をなし枯らす、きのふの興は飛鳥川かわりやすきを花にして、餘さず殘さず圖畫せしめ、明月餘情と題し、初編より二編三編に及び、追々數編を繼て遊客の電覽に備ふといふ、大門口つたや十三郎板。」此の跋にて此の本の名明月餘情といふ事を知れり。三月廿二日　狂風中

といふのである。〔久彌曰く、序でに。此の「明月餘情」の朋誠のいへる、我と人との讓りなく云々によつて俄といへるなりとは、「吉原雜話」其他にも散見してゐた。牽强附會甚しい語義考として一切取らなかつたが、基は、この喜三二の戲文が僞を爲してはゐなからうか。尙此の喜三二の跋は、吉原俄の實體を巧みに約說してゐる。卽ち茶番、獅子、踊の謂である。くはしくは後說を參照。尙、此の「明月餘情」には、稀書複製會第二期中の飜刻がある。〕

然し明和四年は是で確かとしても、その動機が分らない。玆に明和四年說には反逆してゐるが、その發生の動機に就て明らかなるものがある。一說として引かう。前にも語義の上で一寸引いた「吉原雜話」である。〔吉原雜話、年代作者不詳。然し記事に據れば、前揭喜三二の明月餘情と同時代、若しくは以後で

あらう。」

「一、にわかは、寶曆の頃、もちろん其前より三月花見の頃などは藝者牽頭持折にふれ客人の慰みに、取りあへず仲の町にて色々の思付をなせしが、（久彌曰く、これ吉原俄が、秋のみならず春にもありし異說なり。又、藝者牽頭持の色々の思付、これにその先蹤を京阪に在りと自分が惟ふのである。）京都にての夜宮（久彌曰く、これ島原の住吉祭の類か。）などの折のやうに（久彌曰く、やうにとあれど、京を眞似ての意とも取れるが如何。）其の一興となしける。然るに寶曆の頃（久彌曰く、頃とあり。これ寶曆明和の頃にして、卽ち明和四年ならざるか。）橋場眞先（眞崎）神明の社地に高辻家よりして、天滿宮を勸請ありし時、仲町に梅松の作り花を飾り、梅鉢の提灯を飾りて、其時いと花やかなる俄を始めし事より貴賤群集せり。是れ全く祭のやうにて、しかも其の時直に思ひ付きてなす事故、俄といふ名あり。（久彌曰く、これ尤もらしき詮索なれど、既に京阪に一般名詞として「俄」が生れてゐる以上、可笑しき話である。或は强ひて江戶獨特のものとなさんための附會ならざるか。やはり、名稱に於ては、京阪を輸入せりと見るを可とせん。但し形態が如何程まで京阪を眞似たりや、又は暗合なりや、又は特殊のものなりやは不明也。卽ち、或る點まで、獨創、暗合、摸倣交々ありしならん。後にも謂ふが如く、踊の類は獨創に近く、幇間の戲技の如きは、京阪の摸倣といふべきが如し。唯名目の

みは、當時祭の餘興などの義にて「俄」が普通名詞となれる、その語をそのまゝ借りしならん乎。)云々。

其後暫く中絶せしが、安永五年にや菊月の頃、五町より家々の子供をゑらみ、樣々の趣向ありしより、年々春は花秋は燈籠、つゞいて俄の遊びある事となりぬ。云々。)

朋誠の記には、安永四年と蜀山人も類推してゐる如くであるが、これは安永五年、但しにやとあるから、これは同一と見て可からう。唯寶暦の頃と明和四年の相違のみである。これも自分の前の說の如く、この「吉原雜話」の筆者が唯記憶に任せての稱呼で、實は明和四年であつたらう。然し眞崎云々は異說である。九郎助に全然關係がない。然しこれも或は最初の一回だけこれ眞崎を機會として、所謂る吉原俄の華美なる新形式が生れ、以後は、九郎助の祭禮に伴つて此の新形式を續いで行つたと見るべきだらうか。但し吉原雜話は、菊月とある。一月相違する。乃ちこの吉原雜話の記載を素直に受けると、吉原俄が九郎助の祭と結び付き、さうしてそれが八月一杯となつたのは、餘程後のことかも知れないと惟へて來る。

この眞崎稻荷社内の天神祭と、かの明和四年とを一しよにしたものが、關根氏の「江戸花街沿革誌」の記事である。曰く、

「(前略)俄踊の起りは、明和四年眞崎天神へ奉納のため、年若き遊女を出せしを始とす。」

といふのである。

なほ、享保說、明和說の中間說ともいふべきものに、北里見聞錄卷四の「中秋俄の事」がある。此の記事、當時の吉原俄の原始的形態を描きて、精しきものがあるから、その全文を左に揭げよう。

中秋俄の事

其起りさだかならず、北女閭起原にも、當世廓にて春秋など俄と稱し、踊やうのことをするも、何となく昔しのばしくこそ云々。是を見れば、明和の頃まで、春も俄といふ事有しにや、こは近年の事なれば猶可ㇾ尋。予按ずるに諸國に盆踊といふ事あり、此里の俄踊も其餘風にや。〔久彌曰く、此等は吉原俄の原始を踊とし、且つ各地盆踊の類と做す說、自分の京阪俄傳播說とは反對である。自分は吉原俄の爾く名づけざる最初の物が、踊一體のものであつてもよい。それは、自分のいふ京阪の俄東流說以前のもので、これ以後假裝、滑稽所作など入り來り、踊一體でなくなつた。現に「吉原雜話」にもあるが如く、幇間藝者の類が戯事を爲した。これ「一代男」の記事にも均しく、卽ちこれらに純京阪の餘風を認めたい。さうして後世江戸人の手に江戸化した吉原俄の實體が生れた。つまり、全然種を京阪に借りず、京阪は滑稽なる言語、問答、所作、江戸は踊で二種別途であるにしても、その單調なる踊が、複雜なる吉原俄となつた、その助産婦は、慥かに京阪俄が勤めてゐる、豈名稱の同一位ゐからの話ではないといふのである。尙後を見られたい。〕 明和の頃の俄の繪圖を見るに、其の內に大津繪所作事囃子方、大でき〱と有りて、引ずり屋臺揚障子に藤花を下げ、內に囃子の體、其前にて女藝者囃し方、おいし、おく

め、おゆき、おなみと行りて、何れも振袖を着し頬被りをなして、立ちながら三味線をひく。又其前にて新かなや内たけの、大ゑびや内すまの、同ふり袖にて塗笠藤の花を持ち所作事の體也。次に京町一丁目まんど持かぶろ十人餘と有り。其次に官女揃と有りて、鶴や内かしく、岡本屋内みよ、額俵屋内紅葉、丸海老屋内ゆかり、若松屋内若鶴と云、何れも五つ衣に緋の袴、纓絡を戴き檜扇を持ち、うしろより爪折りの傘をさし掛けたる圖也。古風なり。又其頃の細見を見るに、初角町大津繪所作事たけのといへるは、新かなや幸抱江口が禿也。すまのといふは、大海老屋和右衛門抱染山が禿也。京町の官女みよといふは、引込禿にや、今に於て此の岡本やにては禿のおの字名あまた有り。紅葉は、額俵屋忠右衛門抱山岡が禿なり。ゆかりは丸海老や甚兵衛抱風折が禿也　然れ共鶴や内かしく、若まつや内若鶴は、ともに全盛にて、〽座敷持の印をすゑたり。然れば其頃は、全盛の傾城も、俄のねり物にも出でたりと見えたり。是等も又白拍子の遺風といふべし。戸張仙里曰、例年俄に獅子の練物を出す事は、安永の頃藝者におゐちといへる者、天然の妙聲にて、きやり音頭に妙を得て、大當せしかば、是よりいつも獅子を出すこととはなりけるよし。」〔文化十四年撰、寛閑樓佳孝編〕〔近世文藝叢書、第十風俗所收〕

〔註。引込禿とは禿を十四五より引込み（禿の役を止めさせ）、やがて振新として客に接せしむるものだといふ。久彌。〕

以上である。中、踊は元よりあれば別問題、他の二者の中、獅子の起原は右で分つたが、幇間どもの俄――後に化して茶番の起りが不明、恐らく「吉原雜話」に謂ふが如く、寶曆以前からあり、これらが京阪をまね、而してこれを俄と京阪その儘呼んだため、後の吉原俄の名の起りとなつたのだらう。偖、此の北里見聞錄の記事を其儘踏襲せしものに、「江戸花街沿革誌」、「江戸より東京へ３」などがある。

「江戸花街沿革誌」には、此の明和以前に、廓內に春秋二期俄ありしことを「舊記に見えたれど疑ふべし」としてゐるが、古く春にもあつたことは、「吉原雜話」（前揭を見よ）の中にも見えてゐる。卽ち、或は、春秋二期、古くはあつたのかも知れない。然し此等は、未だ吉原俄ならざる無名のもので、卽ち、それが京阪の廓內遊びを眞似た、或はそれと偶然同じい單なる假裝、ねり物、又は滑稽なる所作の類に止まり、吉原俄の如き美麗絢爛なる踊――獅子――茶番の三者完成したものでは無論なかつた。

（今自分は、京阪のを眞似た、又は偶然同じいというたが、眞似た方に主をおく。故は、江戸抱の京生れ女郎又は來府の京阪通人どもの敎示によつたらうといふ意見もある。殊に、享保といへど、まだ遊藝の大般は京阪に胎を借りてゐるものが多いからである。享保十九年といへば豐後掾が東上してゐて、豐後節が歡迎されてゐる頃だ。その頃、同じ京阪系統のこの俄遊び（無

論これは前段にもいへる如く、踊一體いふのではない。幇間らの戲事を斥す。」が乙なりとして、吉原通士に歡迎されたかも知れない。それが吉原俄の形態になつたのは、江戶人の趣向によつて洗練されたせゐであらう。純江戶の茶番が、安永年間に發生したといふのもこの自說の裏書になる。卽ち、蜀山人には怒られるかも知れぬが、茶番も、その初め、型は、此の吉原にも流行つた京阪流の俄狂言を取つたか、或は茶番起原にもある通り、樂屋の茶の番をした役者の下廻り連が、それらが京阪から東下りの連中で、大阪でも見樣見まねの座敷俄をして見せ、それが江戶人の洗練を經て、今日の如く異種のものとなり來つたのかも知れない。茶番は措いて、とに角、自分には、吉原內の幇間どものにはか、後の吉原俄の三要素の一たる滑稽演技、吉原俄の名稱の元たるもの、元を查ねたら、京阪俄であらうと考へるのである。無論人間共通の滑稽動作は、京阪も江戶も區別はないが、その遊藝らしきものに於てゞある。)

さうしてそれが古く享保十九年頃より行はれ、(大阪で俄の名を生んだと同時頃)同時に、踊ねり物も行はれ、それらがやがて、秋一回となり、所謂、吉原仁和賀となり恒例事となつたのは、眞崎天神奉納にもせよ、九郎助の爲にせよ、とにかく明和四年頃であつたのかも知れない。卽ち自分は、享保十九年說と明和四年說とに、積極的に妥協、中庸を取らうといふのである。北里見聞錄の曖昧なる態度を打開してである。さうして尙、吉原仁和賀の、盛大なる廓內俄——三景容の一が生れたその誘因

には、自分は、京島原の「一目千軒」にもいへる、住吉社御旅所の奉納などの摸倣から來てはゐないかといふ臆斷を掲げたい。卽ち島原がやつてゐるなら此方もといふのではないだらうか。卽ち、島原は、元文寛保の間、（享保とは見ずに）その漸次の發達と共に、遂に摸倣又は對抗の意味で、明和四年（其間約二十幾年）新吉原にもこれに劣らぬ美々たる景容を生んだのではなからうか。

吉原俄の明和年間說には、尙、一記事がある。

「吉原俄の始めは、明和年中予二十三歲の時なり、最初は、張拔の大天窓など冠りて、さまぐの異形にして、男藝者踊り歩きたるもの今ある茶番狂言の如し。（久彌曰く、これ確實に、京阪俄の直輸入たる憑據也。故は、茶番の起りは、これより尙遲し。）見物の笑ひを歡びたるものなるが、近比色々樣々工夫をなし、祭禮同樣しなして、古への俄の趣意は失ひける。」（寶曆現來集卷之二）（近世風俗見聞集第三所收）〔久彌曰く、古への俄の趣意は失つたといふのは、自分からいふと、京阪の摸倣を脫した、祭禮同樣とは、江戶生粹といふ意にとれるのである。卽ち自分の京阪俄を吉原俄の先達とする一典據とも思へる。〕

こゝに、尙一つ、吉原俄の起原を、享保にもあらず、明和にも非ず、尙以後の安永天明におくものあり、但し「の頃にや」とあれば、明和四の誤聞であるかも知れない。卽ち、

「吉原每秋八月に俄狂言の事、茶屋桐屋伊兵衛といふ者あり、今現在せり。此者歌舞伎役者の

眞似をこのめり。安永天明の頃にや、角町遊女屋中卍字屋といふ同氣相求むの者と二三人寄合ひけるが、或時ふと思ひ付きて、俄狂言をこしらへ、中の町を往返しけるに、遊客ども見物して、これは風流なり面白しと評判しけるにより、彼等も乘が來て、それより引續きて二三日も狂言の趣向を取替引替して、中の町を往返し樂みけり。これ俄狂言の始にして、段々と增長し、毎秋の定例に成りしなり。〔小川顯道著、「塵塚談」〕〔温知叢書第九編所收〕

といふのである。

以上で、吉原俄の起原を終る。次に、若干、その後の繼續、隆盛に及ばう。

「吉原にて俄といへる戲れ、大いに流行す。仲の町に埓をゆひたり。」（半日閑話巻十三）

安永五年の項である。

起原は、眞崎天神への奉納であつたかは知らぬ、以後は、九郎助の祭禮と伴つたことは、諸書が一致してゐる。「吉原大全」にも左の如くある。

「（前略）………新吉原へ引きうつし、すぐに正一位九郎助大明神とあがめける。今よし原にて緣結びの神として立願す。毎年八月朔日より祭禮ありて、ねり物等を出し、夜は所の人々にわかなど思ひ付きて、見物の群集山をなす。………」

〔異考――「吉原大全」は、誤謬多しとの說もあるが、明和五年の印本、澤田東江の著。すれば、この吉原俄

の明和四年説の直ちに一年後である。然るに、右の文を見ると、どうやら、九郎助稲荷の祭が以前からあつて、無論これは、享保十九年の正一位以後毎年あるにはあつたらうが、その祭の景物として、夙に俄があり、明和四年の眞崎奉納に始まつたものでないやうに解釋される。如何だらう。明和五年印本であるから、この項には誤りはなからうと思ふのである。然し、何處までも明和四年の眞崎奉納説を固守するとならば、吉原俄の美々しさだけは、明和四年、然しその俄の形態は、すでに一部の滑稽所作として、九郎助の祭禮、享保十九年以後、無論あつたと、矢張り此の妥協が生れる。」

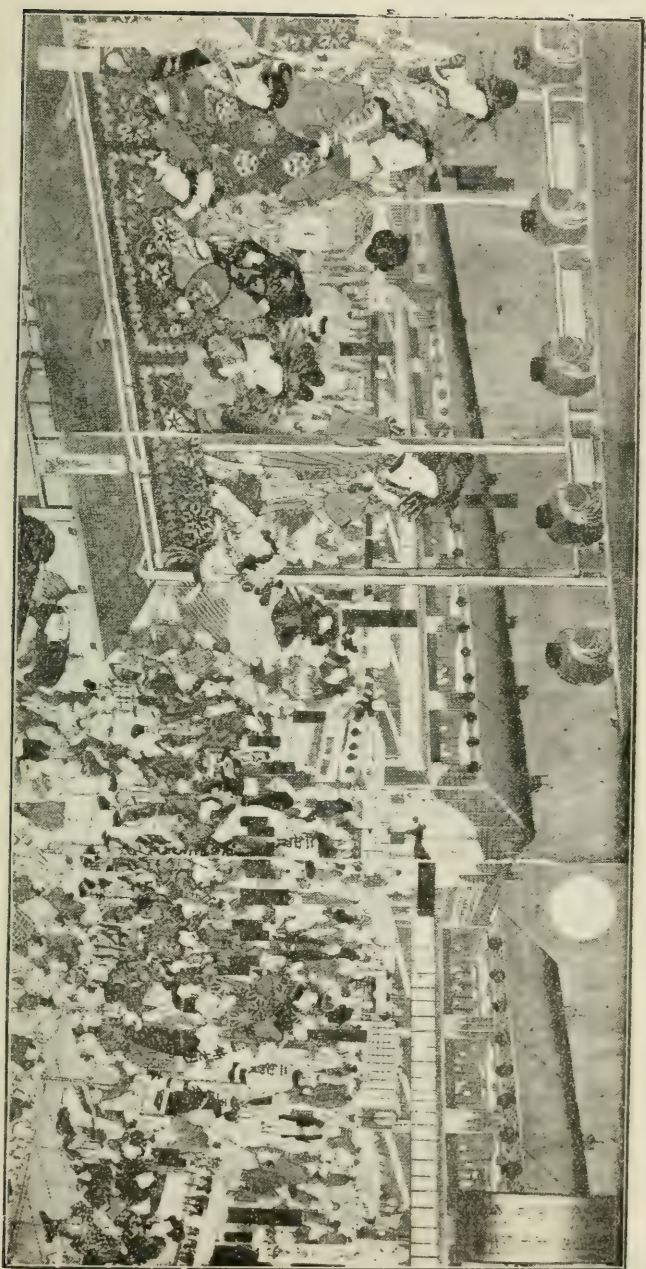
九郎助の祭禮と同時に行はれた尙ほ他の記事には、

「八月朔日より黑助稲荷の祭式行はれて、晴天三十日の間俄を出す。此日文抱のものに祝儀を出して、遊女仲の町へ出るに、俄中の人拂をさする。十五日目に至りては其狂言を改め、此里の見物湧出するが如し。但し此の里に限りて、今日より娼妓おしなべて座敷着に袷を着る事を例とせり。此日仲の町へ出る遊女は、みな白無垢を着せり。（久彌曰く、是れ八朔也。但し問題外なればこれには言及せぬ。）〔柳花通志〕（天保十五年、秀山人撰、近世文藝叢書第十所收）

卽ち、單調を破るため、上半月、下半月と二度に分けて、上下と呼んだ、さうして狂言も變へたのである。（趣向も、安永の「明月餘情」には、二三日で變へたやうに書いてゐるが、こゝへ來ると、稍窮して上下二回に限つたもののやうだ。）

「當月中（八月）新吉原俄ねり物出る、風流のおどりあり。」（增補江戸年中行事。享和年間刊。）〔民間

中之街吉原仁和賀之圖

落合芳幾畫

風俗年中行事所收」

「此月（八月）朔日より九郞助いなり祭禮にて、ねり物を出す。」（北里年中行事。安永二年著、花樂散人）（同）

とゝある。

卽ち何處までも、京阪と同じく神事祭禮と緣を有してゐたのである。全くの遊戲と化し終つてからも、猶、大門口に竹を建て注連を張つたといふ〔前揭。新吉原略說。〕のが可愛らしい。さうして吉原俄そのものの內容は、獅子舞と、藝者が三番、男藝者（幇間）が三番の踊り茶番があつた。卽ち、踊、茶番、獅子舞の三體一致である。〔丁度、方今各地の祭禮にもこの三者が殆ど踏襲されてゐるやうに。〕さうして明治の末は、九月中旬から晴天十五日間行はれた。

○

所々、臆斷を混へ〳〵來たから、自分の意が分らなかつたであらう。最後に自分の思ひ付いた「吉原俄の起原、沿革」を、一纏めにして見る。

一、初期。單なる廓內春秋、花時又は秋の九郞助祭日其他をり〳〵の、大盡其他の客に見すべき爲の、遊女牽頭持どもの遊び。要素は、牽頭持の戲事（滑稽仕科）及び間々、遊女の踊の二點。（此頃未だ踊子、又は藝子現れず。）これ純然たる京阪俄輸入又は摸倣時代。享保十九年前後。

二、中期。京の島原住吉祭等の俄、或は浪花夏祭の例に倣ひ、九郎助稲荷の祭禮に多く之を行ふ。但し未だ年中行事とならず、華美ならず。要素は從來よりの、幇間どもの戯技、（これ狭義の俄也）新たに廓内に發生したる踊子、又は藝子、又は女藝者（後に一括して藝者。この項には、本著一七七頁——一八七頁の「藝者の起源」參照の事。）の踊との二點。

「俄」の稱呼は、初期以後すでに之を稱してゐた。初めは、男藝者どもの戯れ、滑稽の技のみに、京阪その儘「俄」の名を借りて用ひた。この語次第に口馴れ、轉じて、後には廓内の一般遊戯、祭禮時の餘興類一般をも稱するに至つた。卽ち無論踊も俄と稱するに至つた。卽ち恰も此頃は、すべて廓内をり〳〵の戯技並に踊を一括して「俄」と稱するに至つた。是れ卽、廣義の「俄」の發生である。但し、その語が元來京阪仕込なのに漸く氣がさし、さりとて今更口馴れた親しみ深き「にはか」の他に適當な概括的稱呼なく、不得已「仁和賀」の字を宛て、中に通人どもは、人と我とが云々とか、或は何の祭に俄に思ひついたから俄と稱したとか、京阪と別物のやう、出自を異にせるやう惟はれたき爲め、附會說樣々出づるに及んだ。卽ち此の頃は、江戸化せんとした る時代。明和四年前後。

三、後期。確實に、每年八月一ぱい、九郎助稲荷の祭禮に伴ふ祝事として行ふことに決定。（眞崎說は採らず）。その要素は、從來の幇間共の茶番（但し此の物、前期の狭義俄より轉化。府内今期の

茶番の發生發達に伴ひ、京阪風より純江戸風のもの、卽ち狹義俄より茶番と脫す。）と、藝者（今期以後、廓内藝者益々多し）の踊と、新たに藝者の獅子舞との三點。ここに於て、純江戸化し盡せる時代。卽ち吉原三大景容の一として、府内外の耳目を奪ひたる時代。（爾後、昂然吉原仁和賀と之を呼ぶ。）是れ安永以後幕末まで。

以上で、自分の叙述は、一先づ擱筆する。自分は大の野暮天、大正年次に亘つて、吉原に此の景容が行はれてゐたか否かを知らぬ。又、今次、此の震災後に、此の行事を復興するの餘裕ありや否やも知らぬ。唯、時、新舊の差こそあれ、八朔に面して、この吉原俄（繪に知る）を思ひ出して、この叙述に及んだのである。最後に、別に挿圖とした、明治二年八月板芳幾ゑがくの「仲之街仁和賀一覽之圖」三枚續を今一度見返し、この往時の景容を偲ばうと思ふ。

挿圖としては、歌麿の青樓年中行事の類の繪もあるが、これは複製數本があつて、知る人も多からうと、幸ひ本文の叙述、比較的江戸末期のそれに少かつたから、その補足にもと、この芳幾畫を以てした。芳幾畫尙他に一圖を藏してゐるが、所揭の物の方が賑かでもあり、それに予が本文の圖說としても十分と惟うたからである。他の一圖とは獅子舞三枚續である。（本著、「藝者の起源」中に、別摺として挿入した二圖の中、歌麿畫くの藝者は、是れ恰もまた當時の「仁和賀」の扮裝として、また見るに足るものである。併せ覽られたい。）尙、自分の想像する吉原仁和賀の屋臺の踊に均しいものは——芳幾の圖の如き

――、無言で人形好みではあるが、伊勢古市に毎年八月十五日行ふ。現に自分が大正十一年夏實見してゐることを告げておく。卽ち是等は、吉原仁和賀と同じ趣向、同じく廓內の一行事として見るを得よう。

（余白に、一九撰歌曆畫の青樓〔一に吉原〕年中行事上之巻の、吉原俄の項の本文を引いておかう。

「又こゝに九郞助といへるは、往昔千葉九郞介なるものゝ勸請せしによりて其稱を蒙らしむ。此柳巷にては赤縄の神と崇め、每年八月朔日より祭式おこなはれて、練物にわか等を出す事連綿と怠慢なし。此節燈籠客仁和賀客と號して、恒に倡門に履を納れざるものも倶に倡行せられて、來往の錯亂、貴賤混じ、夜每に湧出するがごとし。」）

――大正十三年八月――

一九の「三都の口眞似」

面白いものがあるから、此の機會に披露しておかう。數ケ月前、私が購入した浮世繪類の內に、偶然發見したものである。それは、國丸の畫、三河屋文兵衞板行の「三都の口眞似」と題した一枚繪、竪繪大錦判。一枚を六個に仕切り、上は、右が繪、大阪の達衆とした半身、左りは文。中は、右が文、左が京の粋がりとした半身。下は、右が繪で、江都の勇、左は文である。繪は、大阪の達衆は、顏をしかめた大顏、顋を青く隈どつてゐる。間拔け面が稍皮肉に出てゐる。京の粋がりは、月代の痕に左手をあて、右手で朱の杯を受けながら、心持ち眉の下がつた黑紋付、黑襟赤の襦袢を着た男。粋がりらしい體だ。江都の勇は、鉢卷をした例の勇君、あらい辨慶縞を着用。しかし今私が問題にしようといふのは、繪ではない。繪は、國丸(初代豐國の門人)の繪で、とり立てゝ別に巧でもなければ、どうといふのでもない。唯、その中の文についてだ。三都で計三個の文がある。それが、その繪と呼應し乍らも、亦獨立して、當時の三都の男の中の男の氣風、長短所を極めて皮肉に剔抉自由にしてゐる所が面白いのだ。よく人は、當時の三都の氣風を云爲したり、江戸つ兒と上方贅六とを比較したりするが、百の比較、千の傍證よりも、この三個の文、それ〴〵に配られた三個の文の方がより多く三都

の彼等矜恃たりし男性のアラをさらけ出してゐると思ふ。それが例の地方色打出に於ては、懸換への

ない老大家、十返舎一九の執筆に成つたものであるから、一層に嬉しい。一九は、例の膝栗毛に於て巧みに地方色を浮き立たしてゐることは、今更謂ふも野暮だが、この錦繪の三個の文などは、好個に

地方色捕捉の小品

地方色捕捉の小品、それが繪の解說とよりも獨立して慥かに生命あるものだと思ふ。國丸の畫ゆゑこの錦繪も或は、坊間偶々之を見るありとするも、閑却され易いものかも知れない。が、かゝる片鱗、なほ且つ一九の精到なる此の表現、迫眞の皮肉さを以て生命があり、價値ありと思ふ。强ち我徒の零碎なるものに强ひて價値を措かんとする反凡衆的の痛快さのみではなく、此類の如き、當時の三都比較の好小品、好資料としても、或は尙ほ一九の手輕い、しかも彼の特色たる地方色の表出に於て離れ技を有した彼の本質を窺知するに足る、また一資料として、紹介の價値はあらうと思ふ。

偖、此の小品は、彼一九の何時頃の執筆か、東海道中膝栗毛板行の前か後か、或は晩年であらうか。多少此等年代に就て考慮し、最後にその全文をその儘登載（例により讀み易からしめんが爲、右傍に漢字を折々振つておく。）しておかうと思ふ。

作畫の年代

此の繪には、檢印として極印一個がある。先づ是からいふと、（以下繁雜を厭ひ、要旨だけにする。）錦繪の極印單行時代は、1、寛政より文化元年までと、2、文化十三年より天保十三年までの前後二期である。しかし畫家國丸の年代としては、無論後期である。卽ち檢印に據つて文化十三年以後天保

十三年の間に、この錦繪が現れ、卽ち國丸と一九との合作があつたものとしなければならぬ。爲念、國丸一九の年代に言及しよう。國丸は文政十三年末（卽ち天保元年のこと。同十二月に天保と改元）に、三十七で死んだ豐國門下の秀才。さうして彼の畫筆の處女作は文化六年頃であらうといふ。（坪内氏「芝居繪と豐國及其門下」の國丸の項參照。）ところが、一九はどうだらう。一九は、天保二年八月歿、壽六十八歳の老大家である。さて此の錦繪は、然れば文化十三年以後國丸歿年の文政十三年に亘る何時頃の作であらうか。それには、一九と國丸との交渉に一應及ばねばならぬ。國丸は文化六年を初筆として以後數十種（今一々數へてゐる暇がないが、百には及ぶまいと思うてゐる。）小說挿繪の中、（錦繪類の板行は、全然不明の數で、到底その數を擧げられ得ないから、之を略く。但し錦繪も、彼のは、當時國貞、國安、國直等と共に、相當な數に板行されたらしい。）初筆の第二年目文化七年に、すでに「駿州清水觀音利劍勳功」三の一九作に挿繪を畫いてゐる　增補青本年表に據つて、爾後（文化七年以後）の一九作國丸畫の稗史の數を、一走り數へると、文化八年に一種、同九年に一種。同十一年に四種。同十二年に三種。同十三年に一種。同十四年に二種。文政元年に一種。同三年に一種。以上で、文化七年以後計十五種である。單にこれのみで類推は危險であるが、一は、一九と國丸の提携に於て、一は、錦繪の極印單行が文化十三年以後だといふ此の標準に於て、兩者から、此の三都の口眞似の年代を考査すると、文化の極末十四年頃か或は文政初め、遲くも文政三年頃であらうと思はれるのである。その證據として尙云ふと、國丸は

文政元年以後歿年の同十三年迄に、元年(四)同二年(五)同三年(三)四年(四)五年(六)六年(一)七年(六)八年以後十年まで(無し)。十一年(二)十二年(二)十三年天保元年(一)死後の天保二年(一)と以上の小說挿繪の總數を擧げてゐる。(増補青本年表に據る。)この國丸の畫筆生命の迹を見ると、文政五年の六、同七年の六の多作は論外として槪して、元年二年頃に、その堅實なる平衡した數量を有してゐるやうである。それに、一九との提携の最後が文政三年(青本に現れたものとしては)であるとすると、恐らく此の錦繪は、文政元、二、三の頃の作であらうと思へてならぬ。(國丸の挿繪が、文政八年以後激減したのは、或は、坪内氏說の如く、師豐國の代作に耽つたせゐかも知れぬ。)

以上の架說、誠に我人、迂路に踏み入つたかの觀がある。ともあれ、以下、一九執筆の「三都の口眞似」を發表するに就て、背景としてその年代を幾分確かめ、一層これを讀む上に氣乘させようとした婆心に外ならぬ。併せてこれを機會に、一九と國丸との提携如何を單に青本挿繪の上のみで先づ檢索して見たのである。とにかく、國丸は、一九に可なり引立てられたものであらう。(尙これについては、「浮世繪」第六號の齋藤氏「歌川國丸」の文の中にも、種彥作、國貞畫の「三津瀨川上品仕立」二册によつて、一九、國丸の生前の提携が窺はるべき好資料が擧げられてゐる。但、この資料の要旨は、坪内氏の「芝居繪と豐國及其門下」の國丸論中にも引かれてゐる。)

次に、一九自身に就て、尙數行をいふと、一九の製作に於て、此の「三都の口眞似」と交渉を有す

る地方色打出の作物所謂膝栗毛の年代をいふと、〇東海道中膝栗毛（初編、享和二年。八編、文化六年。發端十一年）〇續膝栗毛初（金毘羅）（文化七）〇同二（宮島）（文化八）。〇同三（木曾）（文化九）。〇同四（木曾）（文化十）。〇同五（同）（文化十一）。〇同六（同）（文化十二）。〇同七（同）（文化十三）〇同八（同）（文化十三）。〇同九（善光寺）（文政二）。〇同十（草津）（文政三）。〇同十一（同）（文政四）。〇同十二（同）（文政五）である。（其他に、「奥羽一覽道中膝栗毛」の自初編至五編あれど、こは二代一九の作。）乃ち本問題の「三都の口眞似」と交渉の年代は、善光寺、草津のあたりである。卽ち彼としては東海道及び宮島、木曾で十分地方色作家として名を賣りつくした揚句である。卽ちこの點、この錦繪板元の機智が閃いて、當時挿繪畫家として賣出しの國丸の畫に、地方色打出の老大家たる一九の文を添へ、尙、追々賣出したものと見てよからう。（現に此の錦繪に、追々續きを賣出すと廣告されてあるが、私は、この一枚より持たぬ。續繪があるかないか。豫告だけか、不明である。續繪として、同じ三都でも、今度は女性を材料にしたものであれば、文、畫共に一層面白からう。）卽ち二者の利用である。而して老大家たる一九にありては、此の小品の執筆など、お茶のこさい〱たるものであつたらう。

さて愈々、この一九執筆「三都の口眞似」の本體を示さう。さうしてその如何にうまいものなるかを示さう。やゝ京阪につらく、江戸に寛なる憾はあるが、とにかく、彼の銳利なる皮肉、諷刺が、いかに萬遍なく行き渡りをれるかを玩味されよと。以上。

三都の口眞似

國丸 畫
十返舎一九 著

大阪の達衆

コレなにぬかしくさるやら　けたいなやつらじや　あんまりそないにやまひづかしくさるなわしをたれじやとおもふてじや　北ばまぢうで　人にしられたはなたれのごん七といふて　しんまいのいりがらほどばりつくおとこじや　りよぐはいながら　せんごくふねを　あぢかはのせんすいへうかべて　あはぢしまのつき山　すみよしのたかとうろうは　うへごみのあかりとり　ねながら見て　いけだいたみのきもろはくのみつゞけのおとこじやわいの　コレわるうほたへさらすと　どたまのかけなと　ひらはせてこますがどうじやい　ナントつよいじやないかい　みそいふじやないが　ひさしくぜつしよくでゐるびやうにんか　こしのぬけたぢさまなら　いくたりきてもあいてにするのじや　サアはしづめまで出てもらをかい　こちや日あたりのよいとこ見たてゝけんくはするのじや　わしとりがいのすしじやないが　あたまうおしのきくおとこじやもの　そんのいかぬけんくはならなんぼなとするのじや　あぐちもきれぬぶんざいで　ちよこざいなことといはずとあしもとの

あかるいうちとつとゝいなんせ
わしもいんで　ちやづけ　くをわいの

京の粋がり

なるほど　京女郎といふて　おなごは京のこつちやわいな　アレ〳〵見さんせ　うらやのかゝやまゝたきのこめろどもまで　しゆみでなふて　だいいちはいろがしらうて　ふうぞくがやさしうて　ナントきよといもんじやないかいな　そのうちゑらいは　ひがしのげいこやましうは　おそらくにんげんかいの　ものとはおもはれぬ　天人のやうでもつたいないとおもふほどのこつちやわいな　これをおもへば　たこくのおとこどもが京へきて　京のおなごを見て　いきてもどるはふしぎじやないかいな　おなごばかりじやない　男もそれにつれて　かも川の水にみがきあげるもんじやさかい　しぜんとうつくしうて水ぎはがたつわいな　そじやさかいわしもおもふことには　とつといなかの大じんのごけかなんぞで　とつとぶすいなおなごの　しかもふきりやうでそのくせおとこずきなやつにかゝつて　おもふさまさきをよろこばしてやつたら　それこそマアどないにうれしがりおろかとおもふさかい　わしやそないなおなごにごしやうしてやりたいわいな　ハ、、、コレ〳〵おもてへせうべんかいがきたじやないか　こちのせうべんは水まぜんさか

い
ね(値)をよふか(よう買)へといふたがよい　コレ／＼な(菜)とかへ(換)ことならそのき(氣)で
かへ(換)い　もしも(若しも)こへ(肥)くま(汲)すなら　たれ(誰)ぞついてゐて　み(實)ばかり
すくふ(掬)ていな(去)すな　せうべん(小便)とも(共)にすくふ(掬)ていな(去)せ
みなちや(茶)がゆ(粥)ばら(腹)で　水たくさん(澤山)にはこまりはてるはい(困り果てるわい)

江戸(えど)の勇(いさみ)

コウ手めへたち(手前達)やア　人を見そく(損)なつたか　むぎはらざいく(麥藁細工)のとうじんぶへ(唐人笛)を見るやうに　おつにひねくつたことをいふな　コレヱゑどつこ(江都つ子)のしやうねだま(性根玉)ア　こんにやくだま(蒟蒻玉)たアちが(違)つてぶる／＼するのじやアねへぞ　ほん(眞)のこつ(事)たが　やらう(野郎)はけいせう(輕小)でも　ちりめん(縮緬)のふんどし(褌)としつけ(仕付)を(緒)のねへ(無)きもの(着物)はき(著)たことのねへ(無)男だ　かさいぢう(葛西中)にりびやう(痢病)かはやり(が流行)やアしめへし　く(糞)そがあきれるもすさまじい(凄)　おいら(俺)アゑど(江都)のまんなか(眞中)にそだ(育)つて　けつ(尻)のあな(穴)のひろ(廣)いおかげ(蔭)にやアひとりまへ(一人前)のせつちん(雪隠)へ大びらにたれ(垂)たおとこ(男)　そのうへ(其の上)たなちんいちもん(店賃一文)かり(借)はなし(無)　よ(夜)るよなか(夜中)なんどき(何時)に　かへ(歸)つても　ろじ(露地)の戸をおほや(大屋)にあけ(開け)させながら　いぬ(犬)のくそ(糞)のこごと(小言)をいつてあやま(謝)らせる男だから　いだてん(韋駄天)のまもり(守)をかけてゐるひきやく(飛脚)じやねへが　あと(後)へとては　いつすん(一寸)もひ(退)かねへのだ　そんないやみからみ(嫌味辛味)をいふと　このさゞゐから(螺蠑殻)が

あたま(頭)のどてんじやう(ど天井)へお見まひ(舞)申すが　ぐつとでも
いつ(言)て見ろ　あさひな(朝比奈)のもんやぶり(門破)しやア(じやア)あるめへし
とんだおし(抑)のつよ(強)いやつら(奴等)だはへ(だわえ)

追々此つゞき
差出申し候。
地本問屋
大でんま二丁目横町
三河屋文兵衛版

——大正十二年九月——

舊東京の壞滅

方外道人著の『江戸名物詩』

此（大正十二年）の九月一日、並に二日の兩日に亘つた未曾有の震災のため、舊東京は殆ど壞滅した。無論舊東京に纔かにして殘りつゝあつた舊江戸の面影は、此際相伴うてその輪廓を消すに至つたのである。江戸趣味と人々がいふ。無論此の爾く呼ばれた江戸趣味は、我等の「江戸」なる、いにしへの見ぬ世の幻想に浸らんとする時々に限つて與へられた一種の感興であり、興奮であり、好尙であつた。然しまだ最近までは、その好尙、思慕の機緣として、如實に近い一面として、我等の想像の翼の支障の主要部分として、舊東京があつた。舊東京は、此の意味に於て、我等の江戸趣味の一面の好資料であつた。然るに我等の「江戸」は、此の曉、斷然と該時代の稗史繪畫に據らずんば全くその好尙の如實さは不可能となり了つたのである。そもこの震災によつて、我等の感ずる先づ一の衝擊である。從來と雖も、その我等の江戸思慕の感じはその豐かなるは、潤へるは、舊稗史舊繪畫にありて、舊東京の餘影にはなかつた。然しかくとは知り乍ら、なきを強ひて索めんとする舊東京に對する、我等の凡情的なはかなき襟望があつた。それが此際、すつぱりと破壞されてしまつたのである。卽ち、「東京」によつて江戸を感じ知らんとし、その如實さの神髓の消却に嘆く、しかる幻滅の悲哀が、今後「東京」によりて繰り返す頃は全然除却されたのである。卽ち我等は、典籍の上に、稗史の上に、繪畫の上に、專ら知らんと欲するもののみ知らば可なりの簡捷さに愈々斷定せられたのである。こゝに震災そのものゝ我等に先づ與へた反動的敎唆があると思ふ。

「江戸名物詩」

さうした感想に追はれて、最初私の取り出したものは、方外道人といへる男の著した「江戸名物詩」である。天保頃に都下に喧傳せられた名物の各肆に對する狂詩の創作、とその編である。名物詩の各肆は、殆ど今次の震災區域にあつた。舊東京の一部に卽ちまだその殘骸を保つてゐた筈である此等も、すつかり根絶やしに遭つた譯である。私は、此の「江戸名物詩」を手にして、憮然とした。これまで左程氣にもとめなかつたその内容の一つ〳〵の狂詩が、あらためて、生きた思慕の燃料となつて、私の心にいやといふ程の熱を、感激を、刺戟を與へた。私は自個一人にそれが濟まされなくなつた。同好、同癖の士にもこれが頒ちたくなつた。是れ、こゝにその「江戸名物詩」の解題と、並びにその全内容の紹介とに及んだ所以である。

寔に「江戸名物詩」は、さらでも天保當時の江戸四民の好尚、生活振の一端を知る好資料、しかも一は、此際震災によりて愈々滅亡に歸した舊江戸の各店舖、飲食調度其他の滅びたる波殘を偲ぶよすがには、恰適な具たり得るのである、さて一たい、この「江戸名物詩」の著者方外道人とはいかなる人物であつたか。「江戸名物詩」の此の署名を見るにいたつた以前は、嘗て私の知る所なかつた男である。人名辭書を檢索すると、一は、此の名物詩の序を基として、一は別に木下梅庵として、二個異人物たるかの如く、錄されてゐる。

方外道人

方外道人　狂詩家なり本姓は福井氏通稱を健藏と曰ひ梅庵と號す天保中の人家世々醫を業とす江戸に住す道人出でゝ木下氏を嗣ぐ其の人となりや風流洒落狂詩を好み茶菓詩、江戸名物詩等を著

方外道人圖

「江戸名物詩」より

す一時人口に膾炙する所なり。（文莊漫錄。江戸名物詩序。）

木下梅庵　江戸の詩人にして名は健、字は成美通稱健藏方外道人と號す天保中の人なり。（廣益諸家人名錄）

前の「方外道人」の項は、後にも示す如く、名物詩の序をそのまゝといひたい。唯、「江戸に住す」並に「一時人口に膾炙する所なり」の二項を缺くのみである。後の廣益諸家人名錄に據つた「木下梅庵」の項は、前者と別人の如く取扱はれ居るが、その中、前者に缺くる所は、名は健、字は成美、の二項である。即ち寧ろ本業詩人にして、醫は、父祖の衣鉢を纔かに嗣いだに過ぎないのであらう。詩を本業としたことは、人名辭書登載の前後二項の合致する所でもあり、且つ以下に示す「名物詩」冒頭の、迂庵主人の序「余暇尙從事刀圭」、とあるを見ても知らるるのである。

方外道人（木下梅庵）の略傳そのものは、以上で盡きるとして、尙、以上に洩れたることは、その交友關係、並びに狂詩人としての當時の位置等である。交友關係には、名物詩の卷頭に、當時の儒宗たる東條琴臺（寛政七年芝宇多川町に生る。先哲叢談續篇等雜著頗る多し。維新前後、越後高田榊原氏に聘せらる。明治十一年歿。八十四歲）が叙してゐる所を見れば、（琴臺、此の序の時、四十二歲）殊に「彼之明暢者、森巖

諸先生品名物之圖　其一

「江戸名物詩」初版本より

者、清艶者、無不盡在」と推奨してゐる所を見れば、當時既に狂詩家として單に無名の徒でなかつたことが知れよう。其他、阿部櫟齋（本草家。明治三年歿、六十六。「江戸名物詩」に跋す。）中西研齋（江戸の書家。通稱原吾。名は惟寅、字は子恭、小溪堂と號す。生歿年不詳。）廣澤文齋（江戸の儒者。）松本董齋（草書を能くせる書家、法眼に叙す。明治三年歿。）花笠文京（戯作者の一。東條氏。琴臺の弟。萬延元〔或は安政元〕歿、七十六。）二世立川焉馬（戯作者。）畑銀鶏（金鶏の子。醫家にして、狂歌狂文をよくす。天保頃。）菊地五山（高松侯の儒官。市川寛齋の門下。詩を以て鳴る。安政年間歿。年八十四。）宮澤雲山（詩人。市川寛齋門下。嘉永五年歿。七十五。）秦星塢（書家。星池の男。）等の醫家、儒者、戯作者、詩人等を

交友としたことは、此等の諸家の肖像を、「江戸名物詩」冒頭の「諸先生品諸名物之圖」(溪齋畫) 此圖、序の第六丁ウラより第七丁全部、三面。但し再版本になし。今、別の一本初版本によりて補ふ。) としたに據つても知れよう。而して此等の肖像の中には、吾人の寡聞なる、なほ他に數個の名家を逸してゐるかも知れない。參考の爲、「品諸名物之圖」に現れたその人名の全部を擧げておかう。伊三。惟草。文齋。董齋。桃林。接天。妓竹(妓の竹なる意。こは無論酒間斡旋の一人物。諸先生の中には入らず。) 櫟齋。錦河。文京。文雄。通澄。南枝。(以上、右の一面。) 凉々。梅月(女)。焉馬。研齋。靜一。五山。眞的。星塢。鐵鷄。文囿(女)。柳涯。銀鷄。琴臺。(以上、左の一面。) 抱儀。六山。松守。雲山。東溟。春亭。竹雪(女)。文鶯(女)。雪下。春久。武雄。竹魯。村彥。(以上、そのウラ一面。)人物總數、妓竹共三十九名。內梅月、文囿、竹雪、文鶯の四女姓あり。文囿、文鶯は、文齋の門下か。竹雪は、竹魯の門下か。以上の諸人物、溪齋畫(英泉)であつて顏も皆相當に描き分けられてをり、頭髮(剃髮のもの多し。) 着衣(溪齋の上下。其他種々なる、階級を現すべく扮裝を異にせり。) 大刀の有無などの書別けによつて、相當に個人の寫生に據つたであらうと思ふ。圖は、六七人づゝ一團となりて、或は酒食(この酒食も名物でありその品評であらう。) 或は茶菓(同上。) 或は他の名物を中央にしての品評の圖である。飲食の品評に與つたものたちは就中、有德の罫に中つたと喜んでゐるのであらう。

次に、方外道人につき、遺憾なことは、彼の生歿年月日不明なることであるが、こは、差當りその

典據は一もない。唯類推を借りれば、名物詩のはじめに、「方外道人名物詩推敲之圖」とある圖の中に、方外の肖像（袴、差添。着坐して、座邊に菓子函やうの名物數個を置く。）として、まだ若き感じの顔を描けることである。二十五六の表貌なることである。然れば無論明治初期まで或は生存してゐたのかも知れない。琴臺すら當時四十二歳であつた。しかも彼自ら琴臺老人と署した早老流行の當時故、案外方外自身も、年齒としては若かつたのかも知れない。次に彼の師系は全く不明である。唯銅脈（畠中氏。京師の人。狂詩に巧。名は正盈、觀齋と號す。字はねむる。綽名を銅脈といふ。通稱は頼母。蜀山人同時の人。享和元年歿。）に私淑する所あつたのみであらうと思はれる。何となれば、「名物詩」のはじめに、「銅脈先生肖像」として、銅脈の肖像を一面入れ居れるが故にである。（別に、次の面に、純澤散人題の、銅脈に關する右の贊あり。）以上、覺束なき詮索のまゝを記しておく。

さて、「江戸名物詩」そのものゝ解決にうつる。「名物詩」は、予の藏本、初版再版の二本とも、凡て初編一冊である。二編ありしや否やは全く不明である。本の體裁は半紙四つ折大、見返しに、梅庵道人著、江戸名物詩、樂木書屋藏と三行にある。（此の板元に就て、予の疑問を其儘に擧げておから。即ち此の樂木書屋とは、此の著の跋文筆者たる阿部櫟齋の號から來てはゐないか。櫟は樂木である。而してこは一部此流好事家の道樂出版ではなからうか。或は、各舗から出版費を夫々分擔させてゐるのかも知れぬが。）全丁數は、序七、扉一、本文十七（內、第二丁は二と又の二と重出せり。）跋一、計二十六である。內、序中に「銅脈先

生肖像」（半丁）「方外道人名物詩推敲之圖」（同）「諸先生品諸名物之圖（一丁半，ヒラキ二面とその裏一面。）と三圖を挿み、本文には、「越後屋」（三越）（此圖、半丁、全一面。以下特に註せざるものは、凡て此半丁、全一面也。）「日本橋通一丁目の豪華」、「山本屋」、「古梅園」、「大丸」、「二州橋」（兩國）、「日野屋」、「長井兵助」（此の圖、ヒラキ二面。）「淺草遠景」（同）「吉原」（同）「かよひ鮓」（吉原仲之町。）「柳菴書の、通ひ鮓の詩」、（詩は、無論方外の作。唯別格として特に、左一面を費せしものか。）「森山蒲燒」（水道橋附近。）、「同森山蒲燒の賛」（こも方外の作。櫻所道人書とあつて、全一面。）「越川屋、並に住吉屋」（ツヾキ、ヒラキ二面。）「網中の鯉」（濱田屋に關せるものか。）「向島附近」、「墨水の花」、「長命寺前の櫻餅」、の以上數圖を挿入してゐる。（但し、此等は、獨立したものではなく、本文と表、又は裏をなしてゐる。）挿繪畫家としては、予の知れる限りは、卷頭の「品諸名物之圖」の溪齋（英泉）と、「越川屋、住吉屋」（同溪齋）、「仲之町かよひずし」の國直（初代豐國門人。人情本に多く挿繪あり。）の二浮世繪師と並に雪堤（長谷川氏。江戸名所圖會の畫者同雪旦の子。名は宗一。明治十五年歿。壽六十四。）の三者あるのみである。然し他と雖も相當な他派の畫家であらうが、今檢索の煩を略く。唯、左に、その畫者の名のみを擧げておかう。所山。瓢々山人。雪堤。源森?。雲峨。立兆。國直。南涯。遠齋。湶山。溪齋。秋峨女史。章。浩雪。他署名なきもの四。

さていよ〱本文の全部紹介にうつらう。（本文は、一面を罫九行。一名物に題とも三行。即ち前後の二面

を除き、他は、一面に三名物の割也。）

梅庵道人著

江戸名物詩

樂木書屋藏　［樂木］

（以上、表紙裏見返し）

江戸名物詩序

周詩楚騷。其言既舊。緬思時變?不能無樂府歌行。繼焉則偶儷之明暢。律絕之森嚴。詞曲之淸艷。愈出愈新。各有所長。要亦永聲之一端耳矣。我土所謂。狂詩者。遇物抒情。能寫性靈。與風人旨。無以異焉。世之學者。以其辭易解。概以爲鄙俚淺俗可謂誤矣。方外道人有見於此。狂詩惟贶。其人既狂。頃著斯編以狂其不狂者。彼之明暢者。森嚴者。淸艷者。無不盡在。是亦言志之一端耳矣。余欲詳序其意。事長楮短。不獲覼縷。聊題言引首丙申秋

琴臺老人雨窓對客書　董齋閑人書　［盛義］［中岳］

（以上、序の第一丁）

江戸名物詩序

方外道人遊二無何有ノ郷一夢ニ爲二胡蝶一栩々然シテ入二常春國裏ニ一飛下翔紫霧紅塵ノ間ニ上齅二天香ヲ一逐二衆芳ヲ一隨二時世之樣ニ一取二當今ノ之意一俄然而覺ムニ將レ記二其所一レ得者然恬憺虛無自厭二其煩一乃撰二短詩一以テ記二物之名一レ干レ世者一名曰二名物詩一非三敢テ爲二定名以傳一二之于不朽一唯欲託二有名之物一以テ記二無名之詩一耳ノミ道人此ノ稟夢ナルヤ矣

虚ルヤ矣無レ爲ニ矣寓言ニ矣讀者莫下以ニ飲食之徒ノ而議中道人上可也ナリ

天保丙申春三月學半道人識

江山閑人書□□

（以上、序の第二丁）

江戸名物詩序

方外道人。本姓福井氏。通稱健藏。號梅庵。家世爲醫。道人出。嗣干木下氏。其爲人也。風流洒落。好所謂狂詩者。賦之自娯。蓋抱有爲之材焉。遁乎無用者也。予聞之友人享父焉。既而。得讀其所著茶菓詩。今復有此集。名物之情可謂詳而盡矣。與彼區々干禮法而。不解時宜者。論不同日也。聞道人改業。餘暇尙從事刀圭。起死同生。亦或有焉。此集之出又安知不換世間俗骨之神丹耶。

丙申春日迂庵主人題

煙霞釣叟書

（以上、序の第三丁）

常惱平仄成齒礙不叶自由自在言可憐石痳消渴輩孰似我太平樂顔

代方外人　苦吟上人

鐵鷄習書

（以上、序の第四丁表）

（此處、序の第四丁裏、「銅脈先生肖像」、鐵鷄習寫なるあり。全一面。）

於ケルレ文ニ於ケルレ詩ニ如クレ繋カラレ錢ヲ不レ切レ不レ離レ似タリレ通ズニレ索ヲ金歟カ銀歟カ

踶トシ離レ分リ誰カ疑ン銅脈トルト不ニ銅脈ナラ一

純澤散人題

呂栗庵書

(以上、序の第五丁表)

(此處、序の第五丁裏。方外道人名物詩推敲之圖、
春峰圖なるあり。全一面。)

我是放蕩無頼生只於二惡態一飽紅情先師跡斷因二家
督一乍レ憚没レ流噴二太平一

代方外道人接天堂主題

六山閑人書

(以上序の第六丁表)

(此處、序の第六丁裏より第七丁裏表の三面に亘り、
溪齋畫の諸先生品諸名物之圖あり。但し、予の一本
之を略く。事情ありて、再版時削りたるものか。)

(此處、無丁。扉の表。江戸名物詩の五字のみ。)

四里四方江戸中家々名物家々風穿鑿縦横濃二吟味一
坐見天下泰平功

題名物詩卷首 凡智子

曲轅散人書 [印]

(以上、扉のウラ)

(以下、本文第一丁始まる。)

(尚、本文は、凡て句點を略けるも、今讀み易から
しむるため之を附し置きたり。返點、送假名は一切
原文のまゝとせり。)

江戸名物詩初編

江戸 方外道人 著

不拘順序

越後屋呉服 駿河町角

兩側一町三井店。小僧判取帳場遅。半時商内何千
貫。知是繁昌江戸花。

下村山城油 本兩替町

三都無レ類山城製。貴賤珍重六十州。貯得道中經二

幾日。不融不替一番油。

鈴木越後羊羹　本町一丁目

江戸誰知越後名。本町入口土藏宏。當時處處多新製。依舊羊羹天下鳴。

三馬江戸水　同二丁目

近年三馬大流行。德利往來店不遑。賣出繁昌江戸水。粧成八百八町娘。

玉屋紅　同所

朱旗搖影本町風。認得暖簾玉屋中。世上人々貴寒製。買來猪口幾杯紅。（以上、第一丁）

（此處、第二丁表。全面、三越の圖）

丸角屋仕立　本町二丁目

紙入服紗巾着類。年々織出新工夫。近年胴亂多鞠形。古渡印甸縞廣東。

鳥飼和泉饅頭　本町三丁目

鳥飼和泉無鳥飼。饅頭日々注文多。唯歡皮薄餡尤好。荷出蒸籠日幾荷。

酢屋三臟圓　本町四丁目

箱入人參三臟圓。本家酢屋本町邊。世間勞症虚分者。一劑嘗來性命全。（以上、第二丁）

近江屋太牢饌　室町一丁目

銅網招牌近半店。反本巴艾太牢饌。黄牛肉製宜進酒。又是味噌與甘泉。

近江屋感應丸　同所

正野法橋玄三製。驅役萬病都回春。一粒百疋滅法價。乍去卽效實如神。

十時庵金砂挺　伊勢町裏川岸

仙方補藥金砂挺。呑來卽坐五體寧。新製天行避邪法。梅香一炷十時馨。

美濃屋消毒散　南槇町川岸

南槇町邊金瓢簞。梅花萬能諸瘡安。就レ中賣弘消毒散。日呑二一匙一不レ侵レ寒。

住伊呉服　日本橋中通

京都織物新帶地。判取帳場小僧忙。誂物手附三日限。金泥染類決不レ商。

瓢簞茶漬　同　浮世小路

俳偕之開小集筵。浮世茶漬忙二出前一。坐間並掛多少句。客人笑指是翁連。　（以上又ノ第二丁）

百川樓參會　日本橋浮世小路

諸家振舞名弘宴。貸切更無二一日休一。浮世小路浮世客。百千來會百川樓。

唐林小倉野　日本橋西河岸

甘味十分小倉野。喰來一碗薄茶淸。卷皮養性遠山餅、盡是唐林新製名。

紀伊國屋喜世留　四日市

喜世留多四日市。紀伊國屋大繁昌。赤銅眞鍮流行形。毛彫金銀盡地張。　（以上、第三丁表）

（此處、第三丁裏全面、所山畫の通一丁目（?）豪華の圖）

須原屋武鑑　通一丁目

藏板尤多須原屋。袖珍武鑑一家榮。年中役替仕官改。日日刊成海內行。

白木屋諸式　同　上

諸式注文望次第。貯收品物不レ可レ量。唯非二呉服絲而已一。萬事人間無盡藏。

山本屋山本山　同　二丁目

買者立并客如レ市。番頭手代少無レ間。一時賣出三千斤。多是自園山本山。

古梅園古墨　通二丁目

南都仕入松井店。日本橋南翰墨場。紫玉書奴摺來處。筆端乍爲二古梅香一。

本惣茶道具　新右衛門町角

青磁染付高麗物。備前瀬戸古唐津。所持道具多名器。鑑定當今第一人。

金花堂雁皮紙　通四丁目

半切文筒短冊鮮。暑中團扇幾多錢。金花堂上金花發。染出雁皮五色箋。（以上、第四丁）

（此處、第五丁の表、日本橋附近の圖。瓢々山人畫。蛇山題。商家に㊄の印あるは、山本屋か。）

（此處、第五丁の裏。蒼窓翁題の古梅園の圖。）

文魁堂筆硯　通四丁目

水筆羊毫小文筆。端溪和硯製尤新。誂來日日書生客。半是米庵門下人。

味噌屋元結　南傳馬町一丁目 西側新道

元結賣初味噌屋。數年不絶店繁昌。金柑尤細奴尤太。都爲人間頭上霜。

紀伊國屋於滿鮓　上槇町新道

何歳初開鮓屋店。連綿數代市中鳴。海苔玉子鹽梅妙。知是女房於滿情。

明月堂蕎麥

明月堂中新蕎麥。蒔畫重箱注文忙。盛來白髮三千丈。挽拔無交似個長。

環菊煎茶　中橋廣小路

湯湧釜鳴廿菊家。掃除店淨牀几斜。休來南北東西客。煎出山吹喜撰茶。

木谷實母散

江戸中橋實母散。和方神妙卽效奇。產前產後皆通用。最好婦人血道時。（以上、第六丁）

鹽瀨饅頭　南傳馬町四丁目

傳馬町頭鹽瀨店。饅頭元祖製尤新。毎朝蒸立皮如解。爭買世間下戸人。

坂本氏仙女香　同三丁目

新板讀來草紙傍。此家口上兩三章。京橋之北春風夕。町內吹薰仙女香。

玉木屋煮豆　芝口一丁目

玉木煮來坐禪豆。干瓢銀杏小梅新。主人賣初知何歳。定是九年面壁春。

大好庵金化粧　芝神明門前

名久神明門外店。沈香白檀伽羅芳。古來別有兒女愛。大好庵中金化粧。

兼康祐元歯磨　柴井町

看板假名文字白。兼康數代歯磨香。口中諸病多奇藥。盡是祐元家秘方。

堺屋反魂丹　芝田町四丁目

田町元祖反魂丹。一粒呑來諸病安。霍亂食傷又腹痛。懐中貯得萬人歡。（以上、第七丁）

（此處、第八丁表。大丸の圖）

（此處、第八丁裏。雪堤圖、林齋題の二州橋の景）

大丸屋新形　通旅籠町

流行新形流行縞。仕込澤山滿土藏。忽去忽來四方客。町人武士半分娘。

越後屋播磨菓子　石町

新製流行播磨掾。詰來菓子艶於花。人人携至知何處。定是權門取次家。

釜屋艾　小網町

往來看板一町高。知是伊吹釜屋艾。土用寒前注文多。子供中小大人大。

翁屋翁煎餅　照降町角

砂糖上品味尤輕。進物年中客自榮。縱有結構干菓子。如此煎餅少江城。

萬久煮染　芳町

蒲鉾長芋燒豆腐。干瓢椎茸露白含。一重見舞幕之

內。味得直知萬久甘。

松本蘭奢水　住吉町

賣出一方蘭奢水。鬢付鉛粉製尤芳。家名松本紋銀杏。看板彫成岩戸香。

（以上、第九丁）

四方赤味噌　新和泉町

劍菱瀧水土藏充。上戸往來嘗舌通。出店分家行處在。味噌赤似四方紅。

鶴屋錦繪　通油町

役者似顏國貞筆。狂言寫出響三都。近來別有流行畫。田舍源氏數編圖。

玉屋花火　兩國吉川町

流星虎尾入雲鳴。十二挑灯照水明。兩國年々大花火。滿城喚囃玉屋聲。

松本屋稀薟丸　兩國廣小路

稀薟松本家傳方。看板高懸兩國濱。平生服用身無病。買來近在近鄉人。

扇面亭書畫扇　兩國横山町肴店

文晁武清米庵筆。五山詩佛綠陰詩。年年仕込新書畫。扇面賣初發會時。

若松屋幾代餅　同吉川町

兩國一番若松屋。雜煮汁粉客來頻。世間名物多零落。幾代獨歷幾代春。

（以上、第十丁）

和泉屋唐本　兩國横山丁三丁目

玉巖堂上多唐本。經史文集土藏餘。誰道主人尤好事。百千書名腹中儲。

日野屋小間物　同三丁目

主人閑月曉連祖。諸色道具店頭堆。近來新製一奇品。貴賤爭買脊令臺。

與兵衛鮓　向兩國元丁

流行鮓屋町々在。此頃新開兩國東。路次奥名與兵

衞。客來爭坐間中。　（以上、第十一丁の表）

（此處、第十一丁の裏。源森（?）筆の日野屋の圖、暖簾にせきれいだいと見ゆ。成程、店頭に武士あり、町人あり。）

大能志彈初　兩國同朋町新地　柳橋南角

今日彈初何檢校。勾當四度互爭吟。三絃胡弓河東節。一曲人歡豐一琴。

萬八書畫會　淺草平右衞門町　柳橋北角

萬八樓上書畫會。不拘晴雨御來臨。先生席上皆揮毫。帳面頻付收納金。

日高屋繪馬　淺草御門外

江戶一軒繪馬初。家藏眞筆梶原書。日高淺草御門外。六百年來此住居。　（以上、第十二丁の表）

（此處、第十二丁の裏と第十三丁の表とヒラキ二面、雲峨畫、長井居合拔の圖）

丸屋大團子　御藏前瓦町

土間店廣御藏前。丸屋盤中團子圓。評判從來大安賣。一盆喰盡腹便便。

長井兵助齒磨　御藏前

看板太刀正面飾。兵助居合上三方。人人待得今將拔。齒入齒磨口上長。

山口屋仕立　淺草並木町

鞠形利休煙草入。流行金物製尤濃。通人相見若相問。並木町頭山兵縫。　（以上、第十三丁裏）

（次に、第十四丁全ナシ。所藏本二種とも第十四丁を缺く。是れ、第二丁の重出によりて、この一丁を略けるものか。）

村田喜世留　淺草御藏前

店白繁昌品白鮮。風流仕込在村田。近來新製文人張。吸出詩歌幾首烟。

永樂屋干海苔　淺草雷神門前

帖帖乾來積如紙。年年賣出早春風。白魚吸物豆

薪屋蕎麥　吾妻橋川端
薪屋無薪又無炭坐鋪二階大川濵唯今
淺草為名物歳歳年年蕎麥新
八百善仕出　新鳥越
八百善名響海東年中仕出太平風此家
欲識塩梅妙請見數編料理通
田川屋料理　金杉大恩寺前
風爐場淨在于庭醉後浴来酒乍醒會席
薄茶料理好駐春亭是駐人亭

腐汁。纔有一枚味不同。

金龍山餅　淺草寺境内

金龍山畔金龍餅。餅白餡甘黄粉新。日日觀音參詣客。掛腰頻食幾多人。　（以上、第十五丁表）

（此處、第十五丁裏より第十六丁表へ、ヒラキ金龍山の遠景。立兆寫）

（此處、第十六丁裏より第十七丁表へ、ヒラキ吉原大門の景。立兆寫）

薪屋蕎麥　吾妻橋川端

薪屋無薪又無炭。坐鋪二階大川濱。唯今淺草爲名物。歳歳年々蕎麥新。

八百善仕出　新鳥越

八百善名響海東。年中仕出太平風。此家欲識鹽梅妙。請見數編料理通。

田川屋料理　金杉大恩寺前

風爐場淨在于庭。醉後浴來酒乍醒。會席薄茶料

理好。駐春亭是駐人亭。（以上、第十七丁裏）

（此處、第十八丁表。仲の町かよひずしの圖。國直寫）

吉原通鮓

吉原名物兩三種。通鮓此頃製尤奇。遊客通來多喰盡。樓中首尾十分宜。

（此一詩にて、第十八丁裏全部。此の詩、柳庵の書。下に南涯の筆と、遠齋の白魚とあり。）

竹村最中月　吉原中ノ町

色白最中一片月。卷來煎餅品尤嘉。暑寒年玉又時候。茶屋携行得意家。

橘屋助惣燒　麴町三丁目大横丁

助惣燒始助惣燒。極上鹽梅聞四方。先祖由來住居久。家名自與麴町長。

鈴木兵庫菊一煎餅　同所大通

兵庫麴町三丁目。誂來煎餅客紛紛。古今唯製朝顏形。燒做風流菊一紋。

於鐵牡丹餅　同北横丁馬場角

馬場之角一軒家。於鐵數年此地誇。盛出盆中胡麻餡。人間賞爲牡丹花。

瓢簞屋蕎麥　四丁目

饂飩蕎麥瓢簞屋。名字十三町內聞。代代諸家多出入。注文日日客成群。

笹屋粟燒　市谷左內坂

左內坂傍暖簾古。粟燒賣出幾年榮。誰言山手無名物。笹屋一軒市谷鳴。（以上、第十九丁）

（此處、第二十丁表。水道橋森山蒲燒の景、緱山筆。）

森山蒲燒

水道橋外住水灣。蒲燒評判久世間。此家風景自然好。窗外有森又有山。

（此詩にて、第二十丁裏全部。櫻所道人の書なり。）

萬文加増餅　　赤坂御門外

賣初一種加増餅。新製品多客自喧。赤坂町町幾千戸。流行唯是萬文家。

豐島屋白酒　　神田鎌倉河岸

白酒高名豐島屋。氣强色薄一家風。人人欲買多難買。賣始賣終半日中。

内田屋酒店　　外神田昌平橋外

昌平橋外内田前。德利如山酒爲泉。孔子門人多上戸。瓢箪携至是顔淵。

深川屋蒲焼　　外神田仲町加賀原前

蒲焼名物深川屋。魚切年中休日長。壹歩鰻鱺纔一皿。喰來風味異尋常。

龜屋柏葉餅　　外神田旅籠町御成道

寶生門外暖簾龜。萬歳千秋柏葉粢。形小色白何足賞。喰來第一味嗜宜。

翁屋煮染　　上野廣小路

暖簾高掛翁之面。幾箇盤臺煮染温。上野花開三月始。辨當重詰注文喧。

（以上、第二十一丁）

數學屋錦袋圓　　池ノ端片町

格子數間錦袋圓。小僧取次靜如禪。請看一貼百文包。現出觀音是結緣。

日野屋小間物　　同仲町

仲町第一日野屋。品物並來望不窮。六十餘州諸名産。此家貯在土藏中。

酒袋香煎　　同所

祇園不及香煎味。下谷仲町酒袋方。買得家家皆便利。客來先出一杯湯。　（以上、第二十二丁表）

（此處、第二十二丁裏より第二十三丁表へ、溪齋畫のヒラキ、右越川屋、左住吉の店頭雜沓の景）

越川屋袋物　　同所仲町

閑靜縫細製尤工。仕立從來世上通。胴亂腰帶懷中物。人人自識越川風。

住吉屋喜世留　同　所

住吉屋名響二他疆一。人人持得壽更長。買來日日注文品。半是櫻張出世張。

七澤屋手遊　池ノ端

長持簞笥臺子類。一寸屛風一尺樓。看來兒女皆歡目。恰似二小人島裡遊一。（以上、第二十三丁裏）

（此處、第二十四丁表。秋峨女史に成る老爺、鯉のかゝれる手綱を肩にせる圖あり。別に桂陰の「試喫江南鯉魚尾候家无此一杯羹」の題あり。）

無極菴蕎麥　池ノ端廣小路

池砌樓高無極菴。近來出店在二千南一。太平一碗新蕎麥。開レ蓋自然香氣含。

濱田屋奈良茶　山下佛店

茶碗大平鯉濃漿。煮附吸物鯛潮烹。坐舖客夥濱田屋。混雜唯聞打レ手聲。

安宅松鮓　御船藏前

本所一番安宅鮓。高名當時莫レ可レ並。權家進物三重折。玉子如レ金魚水晶。（以上、第二十四丁裏）

（此處、第二十五丁表。章畫の向島附近の景。滿路春風踏日斜柳蔭竹外水之涯なる白襟閑八の書あり）

（此處、第二十五丁裏。浩雪畫の櫻花二朶。松嵐の題を附す。）

船橋屋煉羊羹　深川佐賀町

本家久住深川岸。菓子羊羹天下橫。縱有二同名同店在一。船橋文字自然明。

平清會席　深川

會席風流辰巳誇。坐舖近對水之涯。尾花梅本山本客。馴染連來此地奢。

大七洗鯉

客込奥庭中二階。溫泉石滑暖如レ蒸。酒肴色色滄

來處。洗出鯉魚數片冰。（以上、第二十六丁表）

（此處、第二十六丁裏。長命寺附近の景。一任人呼成惡客必敲長命寺前家の柳涯の題あり。）

武藏屋濃漿　同

向島高名武藏屋。春花秋月客來頻。葛西太郎今何在。一碗濃漿風味新。

長命寺櫻餅　同

轍高長命寺邊家。下戸爭買三月頃。此節業平吾妻遊。不吟都鳥吟櫻餅。

海老屋料理　王子

欄干四面水潺湲。王子一番普請殷。初午稻荷權現祭。晩來賣切客空還。（以上、第二十七丁表）

釜屋餞別　品川

遠國奉行發品河。此家見送客如蛾。町人出入同席使。用役頻驚目錄多。

江戸名物詩初編終

（以上、第二十七丁裏）

和嶠於馬王濟於錢皆癖也耳杜預於傳自知其癖而不能止者也吾友方外道人襟度洒落好所謂狂詩滑稽諸謔常以爲戲亦癖也耳先刻茶菓詩今復嗣刻此集盖亦自知其癖而不能止者歟余把讀之能記江湖瑣件名物諷誦之間眞教人鬼目鴻耳也思夫自非今之清世安能得以此爲癖以此爲戲售此做名物罵之以做生計乎要亦清世之餘澤也予與方外同淸世間民而同癖之交久矣刻成之日喜書之云丙申桐月櫟齋主人識于雜花繞屋蒹葭四來堂　三峰樵者書（以上、第二十八丁。完）

右の江戸名物詩校訂の傍ら、心づきたる各名物の中三四につき、略註を試みよう。

〇三馬江戸水（第二丁の裏）作者部類、三馬の項に、「三馬は板木師菊池茂兵衛の子也。名は太助、總角の時より茅場町たる地本問屋西宮新六に仕へて後に手代になりぬ。年季滿て後去て山下御門外なる書林萬屋太次右衞門が婿養子になりしに、妻早世したれば、遂に離縁して石町なる裏屋に借宅す。其後大阪の町人某が、江戸掛店の中絶したるを再興すとて、これを三馬に委ねしかば、遂に本町二丁目に開店しける。しかるに舊來の藥は多く賣れず、三馬が新製の江戸の水と云ふ賣藥、世の婦女子に愛せられて、漸々多く賣れしかば、なほ種々の藥を鬻ぎて其身の株にしたり。戲作は寬政八九年の頃より名を著して云々」とある是なり。これによく似たことは、京傳（京屋傳藏）の煙管煙艸入、鼻紙袋、楊枝入等の本業である。京傳の此の商賣も、隨處その戲作に自己吹聽せられ、また當時通人間にいたく流行し贋造品まで生ずるにいたつたが、京傳の死後、弟京山跡を嗣ぐに及び、此の本業を廢したといふ。然るに三馬は其の子に至りてなほ父の此の本業を改めず、富裕な生計を得たといふ。然しこは、三馬の子が商賣人肌であつたといふよりも、寧ろ京傳の煙草入煙管の類よりも、三馬の賣藥の方がより多くその生命の長かつたことを證してゐるのではなからうか。さて然らば、その江戸水とは、無論化粧水、水白粉の類ならんが、如何なる製法なりしかは、不明であるを遺憾とする。近世世相史の中にも、

文魁堂筆硯

仙女香

「化粧水は江戸の水、髪付は常盤香、紅は玉屋と至り、詮索は江戸の習ひとやいはまし」と出でゝゐる。〇文魁堂筆硯（第六丁表）その第四句に、「半是米庵門下人」とある、この米庵である。米庵は人も知る市河米庵、（寛齋の子。安永八年亥月亥日に生る。因りて名は三亥亦通稱に用ふ。字は孔陽、小左衛門と稱す。書家として一世に鳴る。就中、楷隷に巧みなり。嘗て金澤藩に客事す。安政四年七月十八日江戸に歿。年八十。）その書名一世に藉甚したことは、此の狂詩を以て亦證左と做すに足りよう。〇仙女香（第七丁表）坂本氏仙女香の名は、江戸期繪本稗史類を繙く者の恐らく此の名に觸れざること無き程、紙上廣告の盛んなるものである。草紙類はおろか、錦繪の類にも、美人畫ありて化粧をなすあれば、そこに必ず仙女香の袋を見た。廣重畫くの東都名所の中、隅田川八景（佐野喜板）の「眞崎の夜雨」には、その石燈籠にまでこれが刻されてゐる。以て實地廣告紙上廣告併せ得て、當時としては廣告道の要領をよく曉得してゐたものであらう。英泉、國貞等時代の錦繪草紙にその甚しきを見る。以てその當時最も流行したものであらう。酷だしきはわ印にまでその廣告の手は侵入してゐる。今左に、紙上廣告の一例として、「和合人」中卷尾に所載の物を載せておかう。曰く、

『おかほの妙薬 美 艶 仙 女 香　一包四十八個

此御くすりは享保十一年二十一番の船の主伊孚九といへる清朝人長崎偶居の時丸山中の近

鶴屋錦繪

扇面亭書畫扇

江屋の遊女菊野に授たる顔の藥の奇方なり。傳ていふ清朝（今のから）にて宮中の婦人常に此の藥を用て粧をかざるとぞ。右の傳方故あつて予が家に傳へたるを（略）

功　能（略）

口上　右の御くすり十包以上御もとめに候はゞ當時三芝居立者立役女形正めい自筆の御扇子けいぶつとして差上候間十包御もとめ被遊候節は御このみの役者名前御しるし御こし候はゞ其品差上申候』

この「口上」が面白いではないか。人氣役者を利用した所なんぞ、今どき眞似が難からう。

○鶴屋錦繪（第十丁表）小林氏、仙鶴堂ともいひ、元祿の頃からの出版業者、後には特に錦繪類の板元として有名であることは、誰しも知る所。鶴喜とも稱した。唯謂ふべきことは、此の狂詩に現れた、「役者似顔國貞筆」「近來別有流行畫田舍源氏數編圖」なる二項である。此の「名物詩」の挿繪には浮世繪師としては、國貞と同格の英泉（實質は國貞以上であらうと、予は思ふが）國直の二人があるにも拘らず、作者方外は、彼等に言及する所なく、國貞にこれを限つた。殊に「響三都」とは褒辭頗る盡してゐる。以てしても國貞の當時の如何に羽振よく、師、並に同輩を淩駕してゐたかが知れよう。その證左として特に。○扇面亭書畫扇。（第十丁のウラ）その詩の中の。文晁、武清、米庵、五山、詩佛、綠陰の、筆並びに詩の作者についてゞある。

日野屋小間物

脊令臺

文晁は誰しも知る畫者。武淸は喜多氏、字は子愼、可庵と號した、五淸堂、鶴翁の別號があつた。江戸の畫家、文晁の門下。壯年にして一派を成す。安政三年十二月歿、年八十一と。米庵は、市河（川）米庵、解題中に既に述べたれば略す。五山も同樣。詩佛は、大窪詩佛。名は行、字は天民、通稱は柳太郎、痩梅、又た詩聖堂と號した。常陸の人、移つて江戸にゐた。草書をよくし、詩また海內に鳴つた。時に市河寬齋、柏木如亭、菊地五山と江戸の四詩家と稱したと。當時賴山陽、文晁とも交友があつたと。綠陰は、儒者。山本氏、名は信謹字は公行一に茶佛老人と號したと。（日野屋小間物。（第十一丁の表）その狂詩中の「貴賤爭買脊令臺」の句である。脊令臺は、鶺鴒臺であつて、鶺鴒は、諸冊二神云々の俗傳から來てゐようとは誰しもの考へ及ぶ所であるが、さてその臺とは何であらうか。無論一種の四ツ式目屋道具であらうには違ひないが。幸ひ、此の「名物詩」の此の第十一丁の裏は、日野屋の圖である。その圖の中に、梅花堂なる男の題がある。曰く「記取遊仙窟、一趣脊令臺」とある。すれば、無論淫具たるは明らかであらう。卽ち此の意は、遊仙窟にもこれに類した物がある、それを記取せよ、であらう。今遊仙窟中の、此の種の臺の記載を探してゐる暇がないが、一趣とは、同種の意であらう。さて此の脊令臺は、いかなる形のものか。或人が、幸はひ「或るワ印でも讀んだことがある。枕のやうな小形なもので、バネ仕掛になつて、女性が□に敷いたものらしい」との事。臺といふ

「江戸名物鹿子」より

と大きなものゝやうにとれるが、矢張り形は小さなものであるらしい。現に、此の日野屋の圖の中にも、小僧が捧げ出してゐる物が、小枕位ゐの大きさに見える。これは無論脊令臺の積りであらう。脊令臺と命名したのは、日本では、鳥の鶺鴒は、諾冊二神の性的傳說に容易に聯想されて、淫具たることが言外に明らかであるが故にである。（遊仙窟中の同趣の物が何と謂ふかは知らない。）とにかく此れが流行もし、且つ大びらに賣られたものらしい。その證據には、圖の中、暖簾に公々然せきれいだいと白ぬきにされてゐるからである。成程、詩の通り士も町人も店頭にゐる。〔其他、各名物については、尙「紫草」（商標集、集古會舊刊）に、その中の若干、考證出でたり。よりて、こゝに略す。〕

參考

右の「江戸名物詩」の他に、享保時、都下の名物及流行事物に關する「江戸名物鹿子」なる草紙あるあり。左に「增補武江年表」中の該記事を藉りて、彼此對照の興を喚ばう。

「增補武江年表」卷六。天明年間中に「天明時代のはやり物を集て、江戸名物鹿子と題せる草紙あり。云々。（無聲云。江戸名物鹿子は、享保十八年の刊行にして云々）其の目錄一二を記す。△鹽瀨饅頭△本町色紙豆腐△味噌屋元結△本郷麴室△歌比丘尼びんざゝら△油町紅繪△白木呉服△本町益田目藥五靈香△破笠塗物△淸水夏大根種△勸化僧△赤坂左たばこ△淺草茶筌△

芝三官飴△横山町花座織△彌左衞門町薄雪せんべい△淺草簑市△こん／＼坊△吉原朝日のみだ△散茶女郎△目黒飴△駒込富士團扇△麹町助惣燒△てうし蝶△髭重兵衛が飴△赤坂鍔△長坂元結△松井源左衞門居合△佃島藤△吉原太神樂△麹町獣△湯島唐人の祭のねり物△淺草柳屋挽五倍子△兩國の幾世餠云々。○料理茶屋行れしは、葛西太郎牛御前の門前、平岩の所也 大黒屋孫四郎 同所秋葉社手前也 武藏屋權三郎 同所麥斗庵といふ 甲子屋眞崎 四季庵 中洲新地 二軒茶屋 永代寺山内 百川 いせ町裏川岸 竹屋宗助 深川洲崎 云々。」（「江戸名物鹿子」は、珍書保存會發行の謄寫複製本あり、三册。天明時の風俗市井の好參考である。併せ看られむことを望む。）――大正十二年十一、十二月。

江戸名物詩管見

飯島花月

貴誌第十四册に「江戸名物詩」を詳細に解題考證し且その全部を揭出せられたるは吾等同好者の大に感謝する所である。（中略）同書は隨分廣く世に行はれたから今に多く存在し敢て珍書といふ程でも無いが、唯その完本の少いのを遺憾とする。友人花岡百樹氏所藏本は貴下が底本とせられた二本と同一らしい。然るに「江戸名物詩初編」として出版されて二編以下が出來なかつたので、零本視される嫌ひが有つたとでも謂ふのか、家藏の複刻本は版木に入木して、卷尾の「江戸名物詩初編終」とあるを「江戸名物狂詩選」と改め、表紙の題簽及見返しも同様の

「狂詩選」と改題

第十四丁の存在

書名に改刻されて居るが、本文第一丁の書名は原刻の儘で馬脚を露はして居る。扨これはホンの臆測だが此の複刻は銀鶏の所爲では有るまいかと思ふ。此男は賣名家で能くこんなことをしたらしい。風來山人の「長枕褥合戰」を小本に複刻して且私に其中の文章を改竄したのは全く此の銀鶏のいたづらで有る。素より親には似ず學問も無かつたと見えて、俗悪極劣な詩文などを駢べて衒耀する癖が有つたらしい。或は江戸名物詩は複刻のみならず原本の出版も此男の仕事かも知れぬ。其故は多くの狂詩中に類例を見ぬ程正しい漢文の序跋や挿繪を加へ、且それが殆んど嘉永安政頃の聞えた名家の筆蹟や名前を列擧してあつて、銀鶏鉄鶏錢鶏など一族の名前を多く加へたのからして敢て臆斷を試みるのである。所で疑問とするのは、貴下の二本（花岡氏のも）第十四丁が落丁であるとの事だが、家藏の複刻本には、十四丁が存在して、其表には左の三首が載つて居る。

釜　六　釜　　小木名川

主人清湖綾垣連。從來好事風流禪。鑄得八百八町釜。日々賣出幾萬千。

翁　蕎　麥　　深川熊井町

白髮素線其號翁。下戸上戸得意同。從教世間蕎麥衆。一椀喰得急爲通。

金　麸　羅　仕　出　　同　櫓下

金麩羅名響海邊。會席料理品最鮮。揚出或互藻屑卷。初知意氣在深川。

十四丁の裏は、深川の大川端と見えて帆檣林立の間から富士を遠望する圖で畫者は水亭として信の字の印が有る。題詞は外の畫面と異りて銀鷄の狂歌「みあがりをして呼ぶ客はたをやめの心のうちも深川の里」の一首を萬葉假名で恰も漢詩かと思はせる體に書いてある。これも銀鷄がこけおどしの慣用手段である。尙臆測に過ぎぬが此の十四丁の版木が全部紛失したか又は裏半面の繪の部分だけが火災其他の事由で損傷して間に合せにこんな繪と題歌で埋めたのでは有るまいか。兎に角異樣に感じたから聊か言ひ試みて大方の敎を請ふ事とする。

（久彌曰く。飯島氏の此の書信中には、氏の藏本が、此の十四丁有ることは述べられたが、予及び花岡氏本の如く、第二丁がやはり重出しての上の事であるか否か分らない。兎に角花月氏のを複刻本とすると、この第十四丁は原本には全然無いもので、後に彫られたものとより考へられぬ。從而氏の「此の十四丁の板木が全部紛失したか又は云々」の言は、いかゞかと惟へる。）

附言。貴誌に、第八丁裏の兩國橋の畫の題詩を林齋としてゐられたが、これは鼎齋で卽ち生方鼎齋、名は寬字は猛齋と云つた人で有らう。陰文の印面を「寬印」と判讀して斯く思ふのである。

鶺鴒臺がこと

（久彌曰く、これは御說の通り、林は全然鼎の誤讀であつた。）又五丁表の插繪（二）は山本山の商標かとの御說明であるが、吾等は其位置から考へて（一）カギヤマイチ即ち白木屋の誤りだらうと解してゐた。

序でに知りたいのは同書十一丁の表日野屋小間物の詩中に在る脊令臺の事である。同丁の裏に日野屋店頭の圖が有つて扇の地紙形をした箱樣の物を賣つて居る體だ。これが所謂鶺鴒臺で吾等の臆測を以てすれば彈力仕掛の腰枕樣の物では有るまいか。其房具たることは金精を表するに丸に金字の暖簾印、せきれいの稱、之に題せる「記取遊仙窟一趣（？）云々」の語などから推測し得られるが未だ其製を詳にせぬのを遺憾とする。天保頃出版の「花紋天浮橋」に「鶺鴒臺は閑月庵山曉が戯れに工夫を以て製する所なり」と出て居るは無論この日野屋主人を謂うたもので有らう。凡そ房具の大仕掛なるは隋煬帝迷樓記に載する所に上越したものは有るまい。素より小說稗官の言では有るが淫蕩生活の煬帝の宮廷には事實あんな事が行はれたかも知れぬ。この鶺鴒臺も或は迷樓記の轉關車などから思ひ付いた工夫では有るまいか。敢て斯の道の通人達に高教を仰ぐのである。

（久彌曰く。花月氏の書簡は、前稿の校了後に着いた。せきれい臺の事であるが、花月氏と似たり寄つたりの臆測を小生も前稿に試みておいた。然るに越えて數日今度は偶然家藏の末期の

せきれい臺の圖

笑府に出づ

赤艶本　實娛敎繪抄　全」の終、能之道具圖式の中に、せきれい臺の圖が歴然あるのを發見した。底の平たい枕式で、女のしりの下へ入るまくら也と註がある。例の數多道具の中に入れてある所から推すと、道具の中の極め付の物であることが知れる。燈臺下暗しとは斯んな事だ。尙同時に、支那の「笑府」にも、和名せきれい臺と同一趣向の話がありと、他より指摘を受けた。成程ある。卽ち、笑府下の閨風の一節に、『有下嫁二女于他郷一者上。歸寧。母問二郷土相同否一。答曰。只有二用レ枕不一レ同。吾郷用在二頭邊一彼處用在二腰裡一。』とある、これだ、これだ。名づくる所はないが、かゝる風習のあつたことは、是に依つて知れる。卽ちせきれい臺と相均しきものである。面白いではないか。」――大正十二年、十二月。

『大地震末代噺種』

此頃手に入れたものゝ中に、端本ではあるが、「大地震大津波珍説見聞錄」といふものがある。〔家藏には、此の本一と二と二冊ある。但し問題にするのは、その一である。故に姑く二については省く。〕表紙外題には爾く命名されてゐるが、見返しには、藍摺で帆檣の模様があり、上に前代未聞大地震津濤乃奇談とあり、本文のはじめには、大地震大巨濤珍説見聞錄序とありてその序文があり、その次の丁には、大地震末代噺種とあつて、ツヾキ二面で避難の繪あり、上に説明が加へられてゐる。本文第一丁の初めには、大地震津波乃奇談とあり、以下本文十九丁、最後に、大地震津波農奇談巻之一終とある。到る處表題が異つてゐるから、何ともいへないが、とにかく、内容は、嘉永七甲寅年十一月四日五日（嘉永七年十一月二十七日改元、安政元年。普通に安政元年十一月四日五日といふ。卽ち江戸の安政二年十月二日の地震以前約一ヶ年。）に亘る近畿地方の震災津浪の被害の中、大阪を主にして書かれたものである。

從來、安政の地震といへば江戸のみ傳へられ、比較的此の前年の近畿地方の震災が等閑に附せられてゐる。實は自分も此の書を手にして始めての注意である。此の本の「大地震末代噺種」の文字を見て、江戸の安政地震と早合點した程であつたから。恰もよし、最近發行された「史的研究天災と對策」（本庄榮治郎氏著。大阪毎日新聞社發行）の中にも、第三章第三節近世近畿地方の大震なる條下、第三に安政元年十一月の震災として、

數頁を費されてゐる。同書には、主に大阪市史の記録により、且つ現木津川大正橋東詰の震災記念碑なるものゝ全文を紹介して、その輪廓を幾分示しては居らるゝが、當時の市内及び附近の人心恟々被害の實情に於ては、掻痒の感が甚しい。丁度此の缺陷を償うて餘りあるは、偶然自分の發見した此の「大地震大津浪珍説見聞録」である。敢て珍書といふ程でもないが、零砕なる小册子であるだけ、從來問題にされたものではなからうし、それだけ却つて好事家研究家には、案外の献物をなすやも不知と、玆に、その大たいを原文のまゝ紹介することにした。

行文、時として人心教戒の筆に走り、道學と警世の口吻あるは、著者不明なれど、當時市井の無名識者の筆になつたものであらう。〔因みに此「珍説見聞録」は、中本。板元出版年月並に著者凡て不明。挿圖巻一は巻頭色摺避難の圖の他に、高坊主の圖と、八助避難の圖と計三面あり。巻二は、「水難の相云々」の挿圖一面あり。〕（以下原文紹介）

大地震大巨濤 珍説見聞録序

此册子は、近き地震巨濤の天災に依て、日比善事乃徳行に依て危難を免がれ、亦は積悪不善によりて災を蒙り、或は身を亡し家跡を斷ち、不義にして朽（汚）名を世に流せしを始め、地妖に恐怖顚倒の餘り衆人を驚（?）戰し奇談滑稽珍説等、諸國損所乃地名員數もらさす、擧類人々後世に殘し、子孫乃爲に勸善懲悪の一助ともなり、次て天變の節に臨みて狼狽ざる心得の様種々を記す。是前事を忘ずして、後吏乃師となすの謂也。書乃大體を演て換端書。

大地震末代噺種

一嘉永七甲寅年十一月四日朝五ツ時過より大地震、それより晝夜少々づゝゆり、五日晝七ツ過又〳〵大ゆり、夜五ツ半時頃大ゆり、夫より格別の大震は無之候へども、大底人家崩れ破損圖のごとく、且大道へたゝみを敷あるひは小屋を掛け、夜を明しける事、前代未聞の事ども也。(コレダケニテ表裏の一丁。下半は、各〻二面ツヅキ、避難の圖。代赭と藍の二彩を混ず。軒先に、障子の屋根、莚の戸などの小屋がけありて中に人々坐せる圖。)

大地震 津波乃奇談

古語に曰く、治世に亂を忘れざれとは、強に武夫をのみ誡しめの格言にあらず。億兆の萬民皆此語に據ずんばあるべからず。既に當嘉永七甲寅年十一月四日朝五つ半時頃、東の方より大地震起り、市中の騷動大方ならず。老を助け子を抱へて、大道に出、あるひは廣野に迯惑ふ。大震半時ばかりにして、神社佛閣門塀人家倒れ、或は破損し、死人怪我人等も少〳〵ありて、漸く治り、其後は小ゆるぎと成ければ、人々安心しけれども猶大震のあらん事を恐れ、俄に家に突張をかひ、大道空地に小屋をしつ

らひ杯して、四日の夜は是に、不た明し、翌る五日の朝に至れども、大震なければ少し安堵をなし、人々打集ひ、誰彼は昨日は顔色土のごとく成たり、誰々は落著がほをなして狼狽ぬるなどゝ言て打どよめきける。此話はさし置つ。又々昨日の如き事もあらんと地震を避るの設けさま〴〵なる中に、是をさくるは舟にしかじとて、川舟を借て、大震あらば是に取乘らば上より落懸るものなければ心安しとて、船を用意する人多くありて、其うろたへ甚し。斯る處に五日晝五ツ半時頃、又未申の方より大地震起しかば、取物も取敢ず、用意の川舟に取乘、內川に繫ぎならべ、ふたゝび震ん事を恐れ、船中にて食事等の支度杯してしばらく時を移すに、夕方より沖の方雷のごとく鳴出しけれども、時ならぬ雷鳴ならんと何の心付たる事もなく、只地しんをのみ恐れゐたりしに、夜五ツ半時頃に至り、大津波起り、安治川口木津川口にかゝり居る大船小船、纜切れて高浪に押れ、右兩川口より彌が上に內川に込入事、矢よりも早く勢ひ烈しければ、是が爲に海船も川舟もこと〴〵く打くだけ、川端の人家土藏掛並べし橋等は、船のみよしの爲に破却し、死人怪我人數知らず。是治世に亂を忘るゝこと勿れといふ誡めを忘却して、無事の時に變事を覺悟せざるより斯る事とはなりぬ。むかし寶永四年十月四日の大地震にも、川舟に取乘り內川に並繫ぎしには、津波來りて舟をくだき、溺死する者數を知らず。又は廣野明地に出て難をのがれし等の記錄ありて、後のいましめとせしも、無事の時は此記錄を眺めもやらで、常の覺悟なきが故也。又常に心掛ある人々は、左迄うろたへる事なく、廣野に疊を出して敷かされ、其上に

崩し、あるひは家の内に在乍も、家碎けて上より落かゝる物の防ぎに心をくばり、無事にのがれし人も多くあり。是治世に亂を忘れず、變の時に至りて動ぜざるは、常の覺悟能と謂つべし。因に云、家の内にありて地震の防ぎをなすは、重戸棚箪笥等すべて手丈夫なる物を並べ、上に疊あるひは蒲團などを敷、その下に居るべし。是弱よく强を凌ぐの理なり。

○高坊主の話

大阪海邊へ、十一月五日大つなみの前に、たけ二丈餘の海坊主出て海より陸のかたに向ひ、水を搔遣るやうにして姿見へずなりぬ。人々奇異のおもひをなし居る内に、海底雷のごとく鳴出し、程なく大津波來たり。これは此變を告んが爲に出たるならんと、もつぱらいひふらせども全く左にあらず。地震に就て海底裂け、泥水を吹上たる也。其高さ二三丈にして形ち高坊主のごとく見へしが、諸人昨日よりのぢしんにて心落つかぬ折からなれば、海怪の樣に見なし、一人が高坊主といひ出しぬるより、市中一統のうはさと成たり。其證とするは、高坊主の出たりといふあたりは、是迄船の通路に櫂にてこぎ行きしが、つなみの後は櫂立ず。船人等不審りて長き竿又は繩に石などを付て下し見るに、その深さ底を知らず。是に依て泥みづを吸上し事の實なるを知るべし。

○破船並に死人の話

大津波に付、安治川口大船百七十四艘、破船に成。十一日迄に川中より上る死骸三十人。木津川には

大船五百九十艘茶船六十九艘上荷五百六十六艘破船に相成。十一日迄に川中より上る死骸三百四十三人。此外死骸の上らざる分數知らず。人別大不足の由にて、凡死人六千餘人有之由。

大阪大地震ニ而混亂の話

〇大阪大地震ニ而混亂の話

天滿天神井戸屋かた崩れ、夫より東寺町寺院門塀崩れ、此近邊いたみ家住居ならざる所多し。西寺町金毘羅の繪馬堂大崩れ、不動寺本堂菱形に大損じ、堀川戎境内破損多し。堂島北の新地曾根崎少々づゝ損じ家多くあれども、大損じなし。下原邊大損じ、人家多く倒れる。福島上の天神大損じ、鳥居倒る。同中の天神拜殿崩る。同下の天神繪馬堂崩る。此近所人家四五軒崩る。五百羅漢堂大崩れ、羅漢像堂外へ出たるもあり。またその儘なるもあり。同光智院玄關倒れ、本堂大損じ、汐津橋北詰東へ入人家四五軒大崩れ、同南詰大土藏壁落る。常安橋南詰西角の人家往來へ倒れかゝる。ざこば兩國ばし籠屋町南西角十二三軒大崩れ、紀伊國橋南詰西へ入表家少々崩れ、裏長家二三軒大崩れ。京町堀羽子板橋角人家大崩、手過ちあれども早速火鎭る。それより半丁斗り西角五軒大損じ。阿波座奈良屋橋筋おくび町角人家倒れ掛り、住居ならず。同小間物店西南角右同斷。戸屋町すじはぶの横町六七軒大崩。戸屋町すじ阿波橋西へ入南がは裏八軒大崩。この近邊損じ家多し。願敎寺對面所崩る、境內損じ數多あり。帶屋町北がは裏大土藏大崩れ。北ほり江六丁目人家四五軒大崩れ、此邊損じ多し。阿彌陀池本堂少々損じ。鹽町さのや橋高塀西へ倒れ、卽死二人あり。長堀さのや橋東へ入裏長屋八九軒大崩。順

慶町井池二三軒大ゆがみ。久太郎町井池北へ入二軒大崩れ。南御堂少々そんじ南の門大ゆがみ。本町狐小路半丁斗大崩。座摩鳥居繪馬堂倒れ、末社の破損多し。北御堂井戸屋形大崩れ。清水舞臺西へこけ大破損となり、そのまゝ留り有之。天王寺太鼓堂大崩れ、同龜井の水屋かた倒れる。其餘境内所々損じ多し。五重の塔少しゆがむ。のばく?蠟や納屋十三間斗崩れ、蠟も土も一所に成。玉造觀音寺本堂大崩れ。高津新地高津ばし南へ入納屋十軒ばかり大くづれ。玉造二軒茶屋壹丁東大崩。此邊崩れたる所數知らず。道とんぼり芝居小家少々損じ。生玉鳥居倒れる、神主屋敷の近邊損じ家多し。寺町寺々本堂ゆがみ、或は門塀等、大小損じあまたあれども悉く記さず。難波鐵元寺釣鐘落る。天下茶屋塀迫り崩る。梅田邊多く人家いたみ、大仁寺百姓家三軒大崩れ、寺の庫裏倒る。浦江村安樂寺本堂大くづれ、百姓家二けん崩る、損じ家數知らず。南安治川どぐろ邊、大損じあまた有之。九條村前だれ島富島戎島、この邊大くづれ、損じ家多し。龜橋にて土藏一ケ所川中へ崩れ込み、いたはしき次第也。右之外市中大損じ家等、あまたあまたあれども、悉く、記しがたければ略す。

〔最後に、〇八助の話、といふのがある。これは、一寸した地震の滑稽を加味したエピソードである。これに費してゐる丁數約九丁。餘りに冗々しければ、その梗概のみを記さう。〕

「大阪西邊の新田にて家內男女六七人暮す百姓」があつたが、當嘉永七甲寅の年十一月四日の

地震に人々大に恐れ、それを凌ぐ用意さま〴〵であつたが、その日は大震もなく、翌五日朝になつて小ゆり度々であるから、廣場に小家を作らんと「丸太を地に打立て木竹の類をくゝり付て屋根となし」敷物を敷かんとするに「新田邊百姓にて秋の取入も仕廻し時節なれば」莚はみな二階にあつた。主人下男八助を呼んでそれを下し來れと云付け、八助心得て取りに上る頃、(此頃はや七ツ半頃)また震り出し、八助周章てゝ二階を轉び落ちてそのまゝ氣絶した。人々驚いて介抱したが蘇らない。然るに地震は追々に烈しく家も震り倒される程であつたから、八助が事も打忘れて人々は避難した。「此時海中吻々と鳴り出すと等しく大津波の音百雷のごとく」海邊から逆浪立ち、小家も危なくなつたから、人々は逃げ出した。間もなく、此の家も水入り床の上二尺餘りにも及んだが、八助は最前氣絶した儘であつたが、此時水忽ち口に入り、息を吹きかへした。その頃は夜の五ツ半頃であつたが、火の光りは少しもなく、身は水漬りになつてゐた。八助は合點ゆかず「我先程地震の時に二階より落ちて死したる筈也。今斯くの如く眞闇の所へ來り寒氣の堪へがたきは、先日も法談にて聞きつる地ごくならん」と恐る〳〵思案してゐると、益々波の音吻々と、人の泣き叫ぶこゑ耳を貫く。八助は愈々地獄ならんと思ひ、寒さは寒し疑ひもなく八寒地獄なりと「常には念佛の一聲も申さぬ若者なれども」此寒さと恐ろしさとの苦しみに堪へかねて、大きな聲して念佛を申しつゝふるへてゐた。人の泣き叫ぶ聲

を聞けば、あれは叫喚地獄よ、鬼共に追ひ廻され責苦をうけて泣叫ぶと思つた。つなみの波の音、船の碎ける音がすると、これは修羅道ならんと思つた。八助恐ろしさに這ひ廻り乍ら、「蒲團の積んで有りし所へさぐり當りければ、何かは知らず此中へ隱れて苦患を助からん」とふとんの水に浸りて重く冷たい中に押割つて這込んだが、寒さ恐ろしさに氣も絶えんばかりであつた。漸く津波も治り水も退いたから、先に逃げたる人も追々寄り集り家にも立ち歸り來た。夜の八ツ時とも覺しかつた。火を燈して家の內を見ると、床の上二尺餘りも水浸になつた様子で、竈の中座敷の內は目も當てられぬ荒れかたである。人々は八助を案じ出し、家內を探し廻つたが知れない。あのまゝ津波にさらはれたのか、不便な事をした。「夜明けば行衞を尋ねん」と、人々、竈の下を焚付け茶を沸し、飯を焚き兎角し始めた。その人聲を蒲團の中から八助聞いて、ソリヤ鬼共が我を責めんとて來た、と誠に恐ろしく思ひ乍ら、覗き見ると、「一ッの鬼は火を焚きながら鐵棒を持つてゐる。是はかまどの前に火吹竹を持つてゐる也。一ッの鬼は罪人を石臼に入れて鐵棒にて搗碎きゐる。是は擂鉢にて味噌を擂る也。」八助一層恐れて精一ぱいの聲を出して、南無阿彌陀佛をふるひ〳〵唱へ出したから、人々は大に驚いて、「火吹竹を持ち、すり子木を持たる二人は其儘蒲團の積み上げたる傍へ走り行くにぞ」、八助はスワヤと蒲團の中に隱れこみ、なほも念佛を唱へてゐた。彼の二人の者は、てつきり海の妖怪がつなみにつれて陸に來

たのだ、よしその本性を見屆けやらんと蒲團を取り除けにかかる。八助は、「此一枚を取られなば忽ち鬼に責めらるべし」と力の限りふとんを持つて放さぬ。二人の者は、双方よりやつと聲をかけて引捲くつた。八助力及ばずハア、といふ聲と共にふとんを取り放した。八助も今は堪らず仁王立に立つたから、八助なりとは心付かず、一途に海妖なりと心得て二人の者は却つて氣絶した。とかくするうち、「夜も明け渡りてよく見れば、蒲團の中より出たるは八助にて、二ツの鬼と見えたるは同じ家に召使はるゝ傍輩なりき」といふのである。

○

「珍說見聞錄」第二

序でに、同「大地震大津浪珍說見聞錄」二の記事を拾つてみよう。此方は、概して平凡である。大分勸善懲惡の傾向が、一よりも激しいといふのが眼につく位ゐである。卷頭に、「大地震津波の奇談卷之二」とあつて、以下、「變を遁れし善人の話」、「變にあひし惡人の話」、「水難の相免がれざる話」、「新居驛の話」の四篇を收めてゐる。

變を遁れし善人の話

「變を遁れし善人の話」といふのは、斯うである。(全文にも及ぶまいから梗概だけにする。)

「大阪西邊に或人がゐた。十一月四日のことである。例の地震に、「舟に乘るにしかじ」と隣の人が勸めたから、自分も舟を借りて川端に繫ぎおき、「四日の夜も小震度々なれば、」震る度每に舟に至り、震りやめば又家に歸り、神棚に燈明を捧げ佛前に額き信心不亂でゐた。「五日の

晝七時半頃、前日よりも猶烈しく震ひ出しければ、」主人女房息子幼き娘、下女と都合五人舟に至つたが、暫くにして漸く震も穩になつた。がふと、「佛壇の本尊先祖よりの位牌は持來れども肝心の伊勢大神宮を始めとし神棚に納めし所の御祓を失せり。勿體なし」と主人船より立ち上る。息子これを見て、親父一人にては覺束なし。我も共々にといへば、女房は小用に娘も小用に、行き度よしいへば、下女一人舟に殘さんも心元なし」とて惣々打連れ一度に船より上り、我家へ歸り、主人は手水をつかひ、身を清め、神棚の御祓をおろし、女房娘は厠に小用などして、暫く時を移すうちに、怪しからぬ人の泣聲、鳴聲など聞えければ、何事やらんと門に出て川端近くに至り見れば、大津波の來襲で、大船小船悉く碎け、船にゐる人々殘りなく溺れ泣き叫んでゐる。云々。」

その末尾に、少々此の教訓を云はんが爲、强いての假作であると、我等をして此の物語を思はしめる程の、曰く「此人平常に奢りを愼しみしに、急難の場に望みても神明を疎かにせず、大神宮の御祓を取忘れしとて家に歸るといふは、全く神明此人を加護ありて免れしめ給ふなるべし。實に我神國に生れては、斯ありたきもの也。」と娓々述べてゐる。

○變にあひし惡人の話

前とすつかり反對で、「常に金銀を貸て不當の利を貪り慈悲善根をなさず、神佛をも尊信する事なく、悋嗇にして壹錢をも費さゞりければ」といふ男が、舟に避難してゐたばかりに溺れ、その家の下婢は、主人の無理な命を畏んで、家に殘りて火の番をしてゐたばかりに助かつたといふ因果譚。

次に荒唐無稽な話ではあるが、丁度今度（大正十二年九月の關東震火災）の流言蜚語の頻々たるあつたと同じやうに、當時の蜚語の一として見れば無邪氣であり、且つ教訓味もある。但しこれとても著者の作爲かも知れぬと疑つてみるが、滿更、さうらしくもない物がある。これは全文を揭げよう。

○水難の相免がれざる話

爰に志州鳥羽御城下の片邊りに、某の院といへる眞言宗の寺あり。下男每朝墓原の掃除をなすに、或苔むしたる五輪の石碑の邊りに、長き髮の毛地中より生出るを切取事時々也。いつとても不思議の事とのみおもひながら、別に人にも咄さざりしに去る十一月三日、例のごとく墓原の掃除をなすに、彼五輪の本に、いつよりも餘斗に髮の毛生出ありしかば、餘り奇異におもひ、此よしを申により、住僧を始め沙彌等もともに五輪の傍にいたり見れば、下男の申すにたがはず、いかにも不審なれば、五りんを取除け掘反し見るに、石櫃あり。其石櫃の蓋の隙間より、髮の毛見へければ、ふたを除けて見るに、中に髮髭長くのび、顏は土色にて、骨と皮とのみの人、目を見開き邊りを見廻すゆへ、住僧は恐

れ怖きながら、其人に向ひ、「見受くる處、袈裟ころもを着し居給ふは、御僧と思ひ侍る。何の頃に土中に葬むり、又何人なるや」と尋ねけるに、其人答へて、「我は此寺の住持也。水難の相あるにより、難を避け、且は祖師大師の跡を追ひ、文祿二年に定に入たる者也」（文祿二年は今を去る事三百六十二年）と答へける。人々是を聞て、誠に世移り、代換り年久しければ口碑にだも傳へねば、我等迚も知らねども、今に存命なし給ふは實に末代の不思議也。「先々方丈へ御越あるべし」と寄かゝり助け出し、方丈にともなひ、邊り近所同宗の寺院は勿論丹那の人々にも使を馳て知らせけるにぞ、皆々此所にあつまり、敬ひ尊み、幾久しく御教化に預りたしと申ければ、彼の人、「イヤ〱我等は水難の相ありて定に入、年を經たる事なれば、矢張元の土中へ埋め給へ」と辭しければ、人々も其意に應ずべけれども、平に一兩日は此所に止り給へと勸めける故、止事を得ず、其儘にてありしに、翌日大津波の爲に其邊のこらず、押流しける。其人も共に死したらんと、其寺近邊の者一人不思議に命を助かり、難波のしるべの方へ逃來りて物語りし也。

因に云。此僧水難の相あれば、是を避んが爲に年久しく土中にありしが、天變の時に至つて掘出され死したる也。是前世の因縁遁れがたき理り也。されば此度溺死の人々も、皆前世の約束とおもひ給ふべし。〔掘り返されたる前住持と尻餅つける住持と小僧の圖ヒラキ、此卷此の一圖のみ。久彌。〕

最後に「新居驛の話」といふ昔話がある。元祿年中の話。少し今度〔嘉永七〕の地震話に盡きて、その附

錄たるの觀がある。梗概だけにする。元祿年中、「當驛に築紫潟の大諸侯」が、「關東下向の節お泊りに」なつたが、侍醫何某も御供に侍つてゐた。それが旅宿に着いて平日嗜の通り自脈を取りしに、死脈であつた。他の從者を召して、一人〳〵診察するに、これも「死脈あらざるものなし。」驚いて殿の本陣に走り、殿の御脈をうかゞひしにこれも死脈。只事にあらずと、右の趣を申上、「是は當所に變あるべし。」と急ぎ跡の驛白須賀まで來て、御脈を見ると、こゝもだめ。たうとう二川まで來ると、すべてが平脈になつた。と、その時「遙かに海山震動の音聞えければ」さてこそ二川白須賀一帶大津浪の來襲をうけたことが明らかになつた。といふのである。

――大正十三年四月――

浮世繪師の心理

（春信・歌麿などに對する考察）

「斯くあるべし」の體現

嚴肅な藝術論ではないが、「斯くあるべし」を體現したのが、我々の尠くとも考へてゐる、名づけてゐる藝術その物であるやうな氣がする。評者は、理想主義の糟粕を嘗めた語であると謂ふかも知れない。ともれ我々は、「斯くあるべし」を如實に提示して呉れる所に、すべて藝術の有難さ、存在の價値があると思ふ。

繪畫、特に私の愛好二なき浮世繪は、格別この「斯くあるべし」の體現であると思ふ。といふた丈では判然分らないであらう。私の浮世繪とは、こゝでは美人繪の謂で、殊に春信・歌麿などの創作を目して稱したのである。

春信の描いた美女には、春信の希求がある。歌麿の描いた美女には、歌麿の希求がある。希求即ち「斯くあるべし」である。「斯くあるべし」は、一種の偶像であらう。卽ち彼等熱烈なる美女愛好者は、各自の偶像を自己の創作を以てリアライズした。

現在の觸目を否定して、至高至妙をほのかなるかの土に求むる、さうした彼岸の心持、それは、少數の人の心に、時として閃く影である。それは、樣々な形を取つて現れる。或は、單純な意味の厭離穢土的の心も湧かうし、はたと無窮の大悲に觸れておびえた最上者に取り縋らむとの心もあらうし、一所不住そこはかとなく迷ひ出でゝ、せめて憧々たる心の飢ゑ、周圍の淪寂を忘れようとする空しい努力も湧かう。

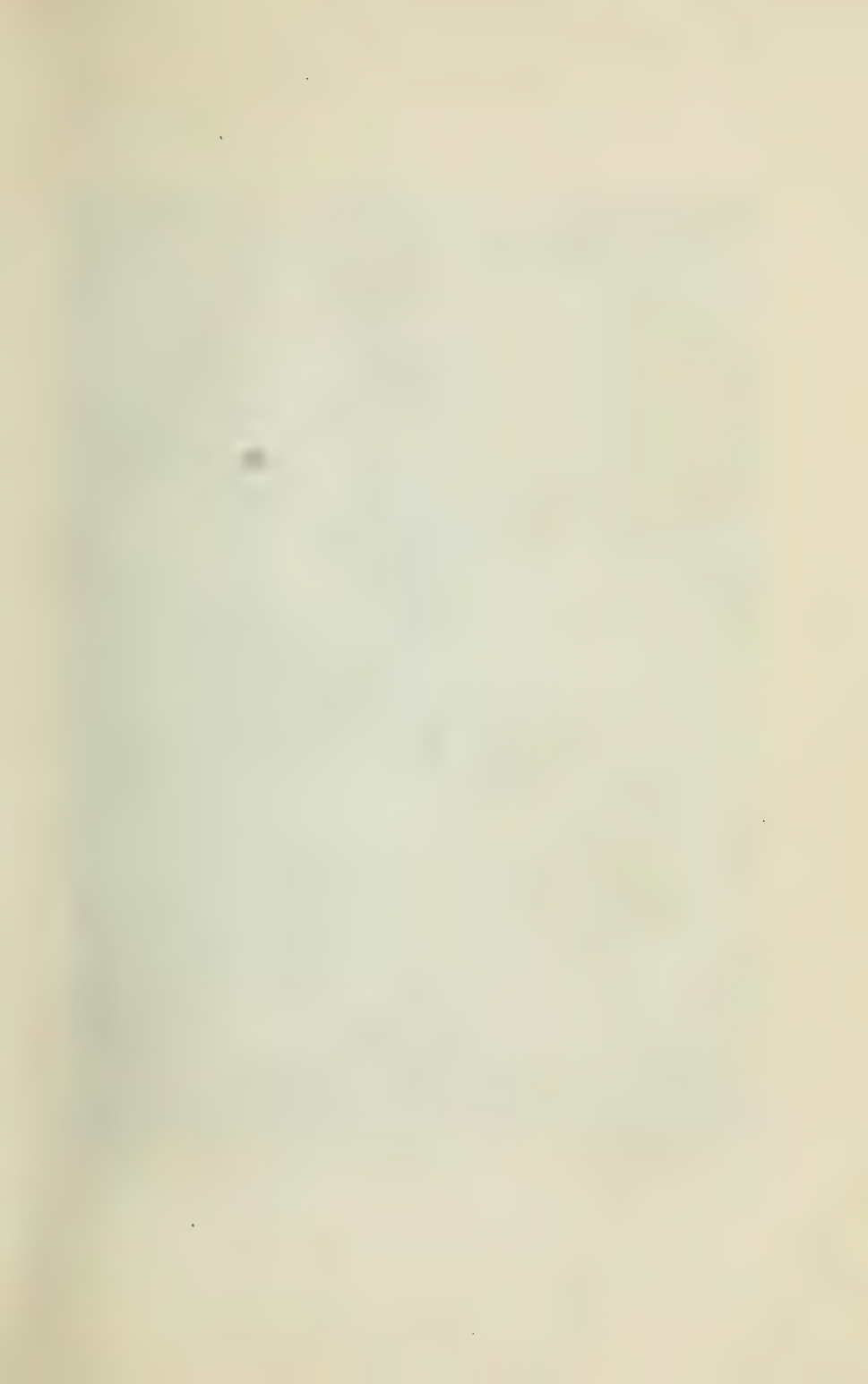
自らが描く夢

私は、春信・歌麿などの彼等が、厭離穢土的な左程突き詰めた離れた心を、外圍にその時世粧に抱いて居たかどうかは知らぬ。然し彼等の作畫の心域が最上者の創造であることは勿論であるとすると、そこに一箇の否定から生れた肯定の惱み、丁度聖者が、自己の最高な欲求を、後光神々しい神佛の姿を以て自ら滿足したやうに、自らが描く夢――偶像ともいはう――で、今ある空しさ醜さを忘れようとした悲しい心が、彼等繪師の中にありはしなかつたかと思ふ。

さうした我々の今考へるやうな心は、自ら意識してゐなかつたにもせよ、尠くとも彼等が純然たるモデル作家でなかつた限り、彼等の美人は、彼等の手に成された美人で、當時の現實界にも恐らく覩られなかつたものであらう。然すると一種の偶像の把持者、自己創作の夢に陶醉した一種のドリーマーではなかつたらうか。

然し何といふ寂しい心であらう。私は、自分のことのやうに、彼等の寂しさが胸を打つ。夢を描い

春信画

觀相歌麿画

てそれの創造的な喜びに滿ちてゐる時はまだいゝ。然しそれも僅かな時である。私たちであつても然うである。自己作成の偶像に醉つてゐる間はいゝ。それが如實に見えつゝあるから。然しそれが愈々自己のみが描いた影であると分り、外圍に然あるもの一個もなしと分つたその時、どんな寂しさが、私を襲ふだらう。見果てぬ夢の寂しさである。夢を見て暮し通したら、よかつた。然しいつか人は、外圍の眞實に眼覺めてはたと驚く。

春信も歌麿も、その一生を通じて、實際に彼等の體が觸れた愛人も多かつたらう。歌麿は格別少壯時から遊蕩を仕盡くしたらしい。さうした遊蕩のもとに、或は妻女といふ名目のもとに、彼が相知つた女性を、彼はいかなる心持を以て受け入れたらうか。恐らく、彼等の夢とはちがつた「現實」の彼女であつて、彼等の最上美を創造する、彼等の心奥に潜んだ美の偶像に燃燒した心は、兩眼を瞑ぢて、見るを潔しとしなかつたであらう。

それ程の深い省察もなく、春信や歌麿は、唯だ美女を形而上に表現して、自分の「拵へ」の腕の冴えを自慢したり、俗衆の好色的な心に媚びたのみであらうか。歌麿の美人はまだ餘程現實味があるものゝ、春信こそは全く夢である。非現實の第一である。春信は然程に所謂通俗繪師の心にあつたらうか。私が考へる程の、夢の創造、自分の偶像の表現に對する悲しみや喜びやが、あつたのではなかつたらうか。

彼等の版畫技巧

偶像に依らなければならない心。せめて自ら描いた偶像に、斯くあるべしとの期待に自ら浸つて、やつと現實の裏切られた思を忘れようとする。さうした寂しい心域は、私らもつねぐ味はふことではある。然し私らは、畫家ではなかつた。求むる美女の姿も、自ら描くことは、たゞ心の姿として幻のやうに浮べることは出來るもの丶、一層それを實有らしく表象的に、例へば繪畫に現はすことは出來ない。人は、形なき幻だけでは、自分の心に蟠まる影であるとはいへ、それをせめて紙と筆とを借りた繪畫にでも表現しなければ、滿たされぬものだ。

春信・歌麿は、此點に於て幸福であつた。彼等は、自分の幻を自由に形に表現しうるだけの天禀を抱いてゐた。私らは、かうした天禀がないだけ、美女のわが幻を彼等の先人の筆の迹に慰めて歩いた。然し從來の我が日本畫に、美女の群を偶像的の信念からではあるが、比較的寫實風にとり扱ひ、さうして殆ど美人の描寫を以て一貫したのは、浮世繪であつて、就中春信と歌麿とである。私は、乃ち彼等に慰められるより外に仕方がなかつた。

殊に彼等の版畫技巧は、純東洋畫の、落筆簡素な空間の一部に全體を暗示しようとする畫風とは異り、西洋畫式の背景も濃やかに、着彩描線も非現實を現實的に浮き立たせる體の線と色の融和が巧みに、第二の立體、實在變じて實有らしく、時に淩線的といふ程に、直ちに感覺的に全體の風姿が、私

の實感味を喚る。純日本畫式は、如何に巧妙な美人なりとはいへ、そが餘りに觀念的で、唯空間にとり殘された偶人の如き感あるに過ぎない。素絢（應擧門下）の美人など、この例にふさはしいものであらう。殊に日本畫式の胡粉を塗りあげる手細工は、美人の顏をして却つて非現實にする。浮世繪の地紙を應用した白の無彩とは比ぶべくもない。浮世繪は、殊にその美人は、畢竟非實有の上に築かれた實有、多様な殊に間色應用の色彩と沒線的描法との融和の下に生れた光りある姿である。

愛欲の思は不思議なものである。私は年長けるにつれて、女性をもの新しく見、考へるやうになつた。昔のやうな女性に稍崇高さあくがれを感じたのは、可笑しい程今とは相遠ざかつて、今は、たゞ私の滿たされぬほのかな愛欲の探求の爲に女性を考へるやうになつた。それが、中年期の男性として當然でありとも考へ、また一般の男性の習であらうにしても、それでは餘りに自己を傷つける、焦躁から焦躁、こんなに焦躁を續けてゐてどうするのかと悲しまれて、せめて自分の愛欲本位の女性を忘れようとする。然し間なく私の頭は愛欲の爲の女性になつてしまふ。愛欲が乾いたら、この人の世はどんなに寂しからう。然しこの愛欲あるが爲に、わが身は萎え、わが心は疲る。聖者は、愛欲を袪ること「夏日の蓮の根の如くせよ」というたが、語は眞理であらうが、下品の自分には、中々實行されさうもない。

愛欲のみに相手を見るのは、自分を傷つけると同時に、相手の信を裏切る。愛は心が基である。などゝ、然程今更野暮なことは考へないが、然しその道程のあの煩しさ、道程を果しえてからのあの哀愁、期待を裏切るあの枯淡、これが堪らない。即いて離れ、離れて即くと「殘雪」及び「新しい芽」の作者は教へてゐるが、彼も未だその眞に徹してはゐない。その彼ほどに愛欲の圏内に滲透してゐない私にとつては、まだこの愛欲を離れて見ることは、迚も出來さうもない。愛欲本位の夢からまたその夢、さうして又かとばかり、同じ哀愁、枯淡に心が苦つく。でなければ、相手の思はぬ裏切りかである。さうして又、愛欲本位とはいふものゝ、その實、近代に生を享けたゞけ、冷たい理智が時々眼を覺して、昔の純遊蕩兒の如く、愛欲に身を溺らし生を委ねることが出來ない。醉つてゐる瞬間も、全的にでなく、自分や自分の仕事を氣にかける。相手もさうである。女性は本來いふと愛欲本位であらねばならぬのだが、今の女性は假令賣春の徒、比較的愛欲の氣分に浸り理解のそれに多い者と雖も、たとひ藻屑の中から被きあげた純な戀心が偶々ありとはいへ、多くは生活を背景に持つてゐる。

私は再び「斯くあるべし」を如實に眺めて行くより他はない。「斯くあるべし」の繪畫は、永久の我婦である。永久に自分を裏切りはしない。不純な愛欲本位であつても別に小言はいはない。道程の後

のあの幻滅もない。自分の視る時々、異つた心と眼を以て迎へてくれる。私は比較的自分の期待に近い我婦の幻を探して歩いた、はてに見付けたのが浮世繪であつた。春信、歌麿などの天才に依つた彼等が創造した（でなくば偶像といはう）風姿に縋るより仕方がなかつた。安價な享樂と人は嗤ふかも知れない。然し周圍に見出すことが出來ず、而して偶々それに近きものありと雖もそれに親しむことを許されぬ、でなくとも酔ふべく沒頭すべく爾く素質づけられなかつた我々にとつては、これにわが愛欲の思を晴らすより外はない。

「斯くあるべし」を提示して、自分に愛欲のシンボルたらしめてくれる春信よ、歌麿よ。私は終生、君達に感謝の詞を惜まないであらう。

――大正十二年二月――

浮世繪の肉體美

一

浮世繪から見た婦人肉體美の印象、及びその變遷を辿つてみよう。大抵年代順によつて話を進めることにする。

浮世繪初期で、先づ肉體美と謂うていゝものは、懐月堂一派の、あの大きな一人立の美人である。元祿七年に歿した菱川師宣と前後して、懐月堂と名づくる一派の畫家が、長身豐頰の美人を描いた。その祖安度の年代は不明であるが、或は師宣以前であり、さうして師宣に感化を與へたものかも知れない。この末葉の中で、度繁などは名手である。その畫風は暫らくの間時代を劃つてゐるといつていゝ。京都の西川祐信。大阪から江府に來た清元の悴の鳥居清信或は後の奥村政信あたりも、此の懐月堂一派に負ふ所があつた。鳥居清信のその挿繪本の挿繪は、元祿はじめは、頗る菱川師宣に似てゐた。清信の弟子であるとの一説もある政信は、懐月堂と師宣と、更に清信の畫と及び京の祐信と此等に併せて更に彼一流の優婉な氣分を出したものがその畫であるといつていゝ。政信に至る迄の婦人畫の中、肉體美といふ中に入れて差支ないのは、先づ懐月堂度繁などの大美人と、西川祐信の上方式美人、丸

月岡雪鼎

石川豐信

鳥居清滿

ぼちやの顏、肥腰との持主なる女性の描寫である。政信はそれに嫌味を省いて、江戸の土の匂を浸み込ませたものと謂うてよからう。然し嫌味が無くなつただけ、それ丈肉體美では稍劣れる觀がないでもない。祐信やその上の懷月堂あたりとは異つて、幾分痩せたものとなつてゐる。それ丈あぶな繪式のものを描いても、挑發感が乏しい。顏はまだ祐信風であるが、足は餘程細くなつてゐる。洗錬せられたといへば、さうである。

懷月堂と西川祐信は、共に豐頬であるが、懷月堂の方が、線が強いせゐもあるが、全體が緊張してゐる。祐信は、ふわりと出來てゐる。殊に懷月堂は、均齊のとれた長身である。然るに祐信は、ぼちやりとした肥腰で、寧ろ肉體美を謂ふと此方にある。祐信の後に大阪に現れた月岡雪鼎は、一層これを強めて稍下品となり、美人を描いても下女のやうな感じがする。肉筆は、然し然程でもない。

江戸を中心にした畫家は、流石にだらけてはゐない。政信はデリケートさに於て、凡ての先輩に勝つてゐよう。それが更に優しくしほらしくなつたものが、石川豐信である。石川豐信の美人は、その三枚の「風」の繪など、風に吹がるゝ三美人を描いてゐるが、餘程感覺美を超越した、營養不良式美人となつてゐる。繪の中の美の幻像に餘程食ひ込んでゐる。この畫風を承けて、湯上りの半裸體美人――政・豐に、更に優婉と艶冶な感じを高調した――、それに多くの秀作を殘したものに、鳥居二代の清滿がある。更に此等の纖細美を大成したものが、鈴木春信である。

春信とその追隨者

春信の美人肉體美は、全く變態性的肉體美である。折れさうな指や手足、抱いたら露となつて消えさうな。柳腰といふが、柳腰過ぎる。均齊は極めてとれてゐる、然し餘りにささやかである。現實を飛び放れてゐる、夢の國である、童女的の肉體美である。迚も健康體の男性の欲求にそぐはないものばかりの遊女や娘や女房である。私が變態性的肉體美と謂うたのもこゝである。此の春信の風が暫らくは續く。丁度昔の懷月堂が或時期を劃したやうに、此の春信がまた時期を劃する。礒田湖龍齋でも、歌川豐春あたりでも、大抵は此の春信式である。春信門下の春重（司馬江漢）や駒井美信、田中益信あたりは無論のことだ。

二

重政と春章

それを稍また昔のやうな豐頰肥腰に返したのが、北尾重政や勝川春章の連中だ。然し昔のやうな上方系の豐頰ではない。無論緊きしまつて來てゐる。春章よりも重政の方が一層肥えてゐる。それを更に姿本位に、更に實感味を盛つたのが、鳥居四代の清長の美人畫である。

清長の感化

清長はまた或時期を劃してゐる。歌麿でも一時は此の清長風であつたし、春章の弟子の春潮でも、また重政の弟子政演（山東京傳のこと）でも、或は細田榮之でも初代歌川豐國でも、窪田俊滿の類でも、何處かに此の清長式を加味したり、或は酷似した作品まで殘してゐる。清長の顏は緊きしまつた豐艶、殊に驚くのは、その長身であることで、殊に肌を表はした線のみづ／＼しい表現に巧みなことである。湯上り美人を描い

ても、あくどい刺戟ではないが、彼女が完全な肉體美の所有者であることを思はせる。但し線の勁健なせゐか、稍まだ堅い感じがないでもない。挑發感、スウヰートの點に於てなほ數歩といつたものである。が、然し彼は大きな浮世繪の峠である。これを更に優婉にしかも豐滿な肉體美に描いたものが、歌麿である。

喜多川歌麿

喜多川歌麿は、丁度昔政信が祐信から、春信が政・豐、清滿から承けたやうに、彼は清長の作風を襲つてゐる。均齊は、既に清長にあつた。それを承けて、歌麿は、更に妖艶味を加へた。清長に較べて稍だらけてはゐるが、媚態は一層歴然たるものがある。此點歌麿を古今獨歩の美人畫家と稱する點かも知れない。歌麿の感化は、後代永く續いた。榮之の弟子の榮水や榮昌でも、又は初代豐國でも歌川豐廣でも、春潮でも、北齋でも、榮之でも何處かに彼の感化を認めない譯にはいかない。浮世繪中で、一ばんこの肉體美の標題に恐らく萬人が萬人指目するものは、此の歌麿であらう。(然し此の歌麿の美人さへ、その顏の面長を以て直ちに肺病質である、肉體美ではないと謂ふ人がある。我々は衞生美人のみが肉體美の所持者であるとは考へてゐない。歌麿のものが若し非衞生であり病的であるといふならば、春信あたりを此の人々は何と謂ふであらうか。)

北齋

此の間に肉體美といふに當嵌らないかも知れないが、特種の個人的興味を描いた美人がある。それは、葛飾北齋描くの美人である。北齋のは際立つて神經質である。ヒステリカルである。豐國の美人

變態的肉體美

池田英泉と其の感化

も、歌麿や清長を眞似てしかも肉に乏しく、此のヒステリカルな傾向はないでもないが、北齋に格別著しい。而も北齋と雖もその初めは、概して斯うではない。その勝川春朗、更に後の菱川宗理と署名した時代は、普通の、線の勁い傾きはあるが、さ程故意(わざ)とらしくない美人を描いてゐる。それがあの晩年になると激しくなる。顏が別に神經質ではない。而もあのいやに神經を尖らせるやうな着物の裙の細(こま)かい慄へが、全體に神經質の感じを與へる。隨分山出し女中を描いた寫生的のものの中には、今日の衛生美人式のものがないでもないが、あの着物の線に切角の感じも消え失せて了ふ。堅硬精緻苟くもせぬ彼の態度は立派であるが、甘い幻像を呼び起したい美人畫にも、これが踏襲されては閉口しない譯にいかぬ。顏の感じは全體に決してヒステリカルではない。矢張り豐頰の中である。

三

これ迄の叙述の中、春信を私は變態性的肉體美というたが、然し顏は左程矮小でもない。瘠せた方ではない。政信や豐信あたりの顏を繼いでゐる。祐信程の豐頰と殊には謂へないが瘠せてもゐない。普通の頰であり顏である。全體に浮世繪で所謂肉體美を謂ふならば、腰の肥瘠を問題にせねばならぬ。腰と來ると、豐信や春信や湖龍齋あたりは、變態的肉體美である。一人も子を産めさうにもない。然るに、そのかみの祐信になると、それこそ跨いでも産みさうな腰をしてゐる。

却説、歌麿の次ぎに、エポック、メーキングな畫家は、池田英泉であらう。英泉は、歌麿を脊を短

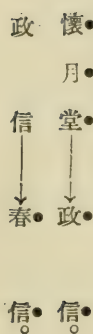
かくし、それに尻を大きくしたやうな美人である。姿が惡い代りに肥えてゐる。此の傾向のひどくなつたのが、國貞あたりの美人畫だ。初代廣重の美人畫は、やゝ脊があり、姿がよい代りに、頬が淋しい。衞生的ではない。英泉の美人は、立たすれば、見ともないが、坐らしたならば、價千兩の眼をする。媚態盛んなりである。國芳（國貞と同樣、初代豐國の門人）も、稍ゝこの英泉流の美人である。唯それより傳法肌な所が加味されてゐる。姿は割合に均齊がとれてゐる。此の末期の間では、國芳は、昔の清長と謂ふべき所であらう。英泉は無論歌麿と謂ふ所だ。英泉にそつくりな美人は國貞に時としてある。姿は異ふが、廣重にその扮態の似かよつたのがある。英泉は殆ど美人畫家（風景畫も若干あり）で終始しただけ、その作畫も多く、從つて同時代の諸君に尠からぬ感化と刺戟とを與へたのであらう。

四

以上說く所を、要約すると、所謂肉體美に於て最も勝るものは、懷月堂——祐信——政信の第一期と、清長の第二期と、歌麿の第三期と、英泉の第四期である。肉體美を問題にせず、單に美人を問題にすると、浮世繪では、

懷•月•堂•——→政•信。

政　信——→春•信。

清長は第一人者

春　信——→清●長。
清　長——→歌●麿。
歌　麿——→英●泉。

である。斯うして概觀して來ると、懷月堂から春信へは、祐信や政信や豐信や清滿やの畫家があつて、春信の道を拓いてゐる。後代の清長から歌麿へも、歌麿から英泉へも、傳統若しくは古人の糟粕に自己の創出を多或は少に加味したに過ぎない。歌麿の偉大さも、清長がなければ生れなかつたかも知れぬ。斯う考へて來ると、鳥居清長は傑い。彼の美人畫は、殆ど彼のみの獨創に近いからである。彼は鳥居三代清滿の門人であつたが、清滿の纖細一方では無論ない。初期の作に春章や湖龍齋あたりに類似がないでもない。顏は春章に、姿は湖龍齋あたりに。然しそれは餘りに小さな事柄である。過半は彼の大きな獨創的技倆である、此に於て、浮世繪美人肉體美の中、所謂衞生美人に墮ちない程度に於ての美人を描いた點からも、また彼の美人の表貌姿態が先人に見る能はざる特殊の點からも、彼を、私は、此の短かい說話の中の第一人者に、推奬しないわけにはいかないのである。

　浮世繪の肉體美を論じたらば、餘技と見せかけてその實彼等の眞劍な仕事であつた(と私は信ずる)春畫にも無論言及せねばならぬが、今はその自由を有しない。唯、此の種の作畫でも、清長、歌麿、英泉、國芳あたりは、群を拔いてゐることだけを傳へたい。本當は肉體美といふべきは、全羅を撒し

國芳の均齊美

た彼等美人にあるのである。

春信は、肉感朧ろな童女。然るに技巧の巧みさも加はつて、末期に至る程、この技巧は冴え、感覺も鋭敏になつてゐる。此點になると國芳を最も大きな作家に奬めたい。前期の淸長や春潮も、これには劣る。挑發的では歌麿と英泉であらう。國芳は、殊に西洋畫を加味した（彼は居常に、外國の銅版の切り拔きを何百枚も用意して、人體描寫の參考にした。）潑剌たる最も均齊のとれた肉體美を描いてゐる。殊に彼の無數なる此等ヱロチツタスの中、大本若しくは畫帖仕立物の白團々に於て、最も然りである。乃ち、浮世繪の肉體美を眞に見むとならば、實は、唯一こゝに憑據を置かねばならぬことを附足しておく。

（大正十一年十一月二十二日稿）

浮世繪の賣春讃美

命題は、「浮世繪の賣春讃美」である。然し誤解なきやうに願ひたい。私が賣春を讃美するのではない。賣春を讃美したものは、浮世繪である。畢竟浮世繪に現れた彼等畫家が讃美した賣春階級の印象である。所謂花柳美人の印象である。

世界に誇る板畫藝術

一體、浮世繪とは、世上周知の如く、世界に誇るに足る、江戸の文化が生んだ板畫藝術である。一名錦繪ともいふが、然しこの錦繪は、浮世繪の或時期、板畫が次第に發達して多色摺となり、絢爛の美、京の錦にもをさ〳〵劣らぬ物となつてから、江戸人が特に名づけたものである。卽ち浮世繪の中期以後の製作に對してのみ本來は冠すべき名稱である。從つて今、私は全部を一樣に浮世繪として論議を進めてゆく。

浮世繪の名義

浮世繪といふ名義は、浮世は當世、現代といふやうな意味で、當時の風俗畫、時世畫といつた意味が、浮世繪である。誰が附けたかは分らないが、當時江戸の初めに、浮世といふ名を冠した色々なものが流行した。浮世巾着、浮世袋、浮世人形、浮世團子。それが次第に士民の日常生活に切實な交渉を持つやうになつて、卽ち浮世床、浮世風呂の類を生んだ。文學作品上では寫實主義に根柢を置いた

當時の作物を浮世草紙、又は浮世本ともいふ。甚しいのは、當時遊女買を、浮世狂ひといふた。骨董集にも「遊女に戯るゝを浮世狂といひしなり」とある。浮世草紙は、淺井了意の浮世物語（延寶年間作。延寶元年は、西紀一六七三年）から出でゝ、一般天和貞享から、寶暦明和、安永にかけて此種小說の稱となつた。」浮世人形、浮世團子は、元祿頃に流行した。」浮世床、浮世風呂は、現に式亭三馬の著作まである。さうして肝腎の浮世繪はいつから、この稱呼が始まつたか。それは不明であるが、貞享四年版（西紀一六八七年）の「江戶鹿子」に「浮世繪師、菱川吉兵衞」といふ指摘がある。これが浮世繪師なる言葉の文献に現れた最初であるといふが、事實は浮世繪なる市井の稱呼は、貞享四年よりもなほ以前の事であらう。先づ延寶、天和、貞享の間というてもよからう。

最初の浮世繪師

さて一口に浮世繪というても、其の種類は色々ある。大別すると三種になる。芝居繪と美人繪と風景畫とである。今日歐米に喧傳せられてゐる此等の代表作家を擧げると、芝居繪（役者繪を含む）は、春章、寫樂、初代豐國。美人繪は以下の縷述に讓り、風景畫は、有名な北齋と初代廣重の如きである。然し畫家其物からいふと、役者繪の畫家であつて美人畫の製作もあり、又風景畫家にも美人畫があり、一概に斯うとは謂へないが、今日評價の上から右のやうに謂つてもよからうと思ふ。

浮世繪の三大別

愈々本題と交渉を持つた美人畫の話である。浮世繪に美人と謂うても、實は色々ある。悉しくいふと、無論各種の階級や職業が含まれてゐる。即ち花柳美人それも遊君と藝者、茶屋女房、娘、或は夜鷹

美人畫の取材

遊君と藝者

殆ど百八
以上のヨ家

（私娼の一也）。素人階級には、町娘、町女房、或は武家の女性、或は水茶屋の女（つまり看板娘である。之も私娼の一種であつた）。このやうに各種に亘つてゐる。然し其の中、最も多いのは謂ふ迄もない花柳美人、殊に遊君（江戸では主に花魁といふが。――この稱呼初めは吉原に限られたりと）の美人畫である。藝者は「洞房語園」に據ると、踊子の名に於て既に享保年間吉宗將軍の頃現れた。今から約二百年以前の事である。然し藝者として花柳界の一半階級として發達し出したのは、文化文政以後の事である。從つて化政期の畫家でない限りは、藝者を餘り多く描いてゐない。それ以前は大抵遊君である。而もその遊女繪の畫樣が、三味を彈いたり琴を彈じたりしてゐる。所謂賣色と賣藝と、遊君と藝者との合一體の時代であつた證據である。

　浮世繪の先驅者は、岩佐又兵衛である。これには異論も色々あるが、先驅者といふ意味ならば差支ないであらう。それからその眞の意味の創造者、第一歩を確實に踏みしめた畫家は、菱川師宣である。師宣以來幾多の畫家（殆ど三百人以上、肉筆畫家を混へたら、八百には上らう。）が浮世繪に現れた。天和、貞享、元祿の菱川から、明治の芳年へかけて約二百年間、その描く所は、大抵は風俗畫而も美人畫がその大半を占めてゐる。この浮世繪師であつて美人を描かなかつたのは、恐らく寫樂位ゐといつていゝだらう。他は兎に角その量の多少はあれ、美人を描かないものはなかつた。然程に美人畫は浮世繪製作の過半を占めてゐる。其の殆ど無數の美人の中で、量の一番多いのは、無論花柳美人であ

又兵衛

師宣の遊女

西川祐信

奥村政信

石川豐信

る。當時江戸士民行樂の中心は、劇場か然らずんば遊廓であつた。從つて當初から風俗畫即ち寫實主義を標榜してかゝつた浮世繪の美人畫に花柳美人の多いのは、無理もない事である。さうして此の花柳美人の中、大半は花魁で、藝者がその餘りを占めてゐる。さて以下少しく、又兵衛、師宣の草創期から、月岡芳年に至る二百年以上の各時代に亘つて、各畫家の描いた花柳美人、主に遊君に就て、其の印象を略かた述べてみよう。

又兵衛に就ては、色々異說がある。然し今日其の眞筆と謂はれてゐるものを「國華」などの類で見ても、唯溫雅な上品な氣分である。描く美人は無論當時の遊女であつて、慶長元和頃の遊女の一瞥に足りるのみの事である。然し時世粧を主に描いた、先驅とは慥かに謂へよう。

師宣には、繪本が多くある。到る處に此の遊女が描かれてゐる。然し未だ遊女本位のものではなく、一般に遊廓內の描寫、太夫の道中姿であるとか、格子先の氣色であるとか、座敷で客と遊宴の狀であるとか、まだ何處のなにがしといふ太夫夫々の特徵もなければ、其の遊女の顏にも一々の個性が現はれてゐない。次には京都の畫家である西川祐信が出でた。祐信は他の美人も描いてゐるが、花柳美人も可なりある。例の豐頰、惡くいへば丸ぽちやの顏である。師宣に比べると餘程寫實的で、全體に色氣が現れてきた。その感化が多少江戸に及んだらしい。奧村政信の美人は、稍之に似て居る。大阪の月岡雪鼎も、稍硬くはあるが、祐信風の遊女を盛んに描いてゐる。政信の次に西村重長の門人石川豐

鳥居清滿
懐月堂一派

鈴木春信

類型的な顏
磯田湖龍齋
春章と重政

信が現はれた。政信も豊信も、丁度師宣と祐信とが産んだ子や孫のやうに、寫實的であり乍ら、まだ何處かに上品な、甘くない所がある。まだ祐信や雪鼎の方が、上方式といふのか、餘程甘いといつていゝ。鳥居清滿も、此の頃纖美な美人を盛んに描いた。師宣以後に、或は之と前後して懐月堂一派の畫家がある。度繁など、その名手で、線の强い割合に、軟かな感じのものである。祐信に感化が及んだらしいもので、美人は、天平式の豊頬、大抵一人立の大きな美人が多い。

次に鈴木春信が出でた。春信は、例の極めて涼しい眼の、誇張的と思はれるやうな細い手と足との所有者たる美人を多く描いてゐる。花柳美人も多い。それに此の畫家は、餘程戀愛の場面に巧みな技倆を持つてゐて、遊女の夫々の扮態。立つたり坐つたり、歩いたり、それに四季の風物が背景となつて、餘程風情が加はつてゐる。その美人の代表作は、繪本「青樓美人合」五冊である。（明和七年版）但し之には背景がない。然し春信の美人殊に明和頃の花柳美人を見る好模型である。總てが處女性を失はない遊女の如くに描かれてゐる。初々しい、けだかい、泥中の蓮といふが、性來が蓮であつて、また永久に蓮であるやうな、少しも頽廢的な處や、遊蕩氣分などがない。顏は餘程類型的であつて、個々の描分がしてない。之が缺點といへば缺點であらう。次に磯田湖龍齋がある。（豊信、春信同樣、西村重長の門人）此の人の花柳美人は、春信と大同小異である。幾分實感味が多いかといふ迄の事である。丁度之と前後して、勝川春章と北尾重政との合作「青樓美人合姿鏡」の繪本三冊がある。（安永五年

版。春信の「青樓美人合」との距離は七年ある。）是は、春信の「美人合」とは、大體に於て異つた物である。春信のは、遊女の肖像集であるが、春章・重政のは遊女を中心に、背景の密なるものがある。殊に春夏秋冬の風物の推移を添へて情趣に豐かなるものがある。卽ちこれは美人本位といふよりも、遊廓氣分本位といふべき物である。春章などの顏も案外いゝことを肯づかせる物である。春章は、役者繪畫家として響いてゐるが、そのヱロチツクスなどには、隨分美女の艷態、弟子の春潮にも後代の歌麿にもをさ／＼劣らぬものがある。

遊廓氣分本位

次に鳥居家四代の鳥居清長がある。この人は、頗る背の高い美人を描いてゐる。線は頗る勁い。さうしてその勁い線が案外、柔かな感じを生んでゐる。清長には漸く藝者の繪も現れてゐるが、矢張り花魁の繪が多い。然し大抵は、花魁に何物かを添へ、客とか、朋輩女郎とか、場所も室內室外色々ある。半裸體のやうな作もないではない。清長は、春信を一層現實化して、次の歌麿に及ぶ中間、春信が父、清長はその子、歌麿は其の孫のやうな關係になつてゐる。清長の美人は、現實的ではあるものの、まだ頽廢的な所が餘程少い、瀟洒な氣分といつていゝ。清長以前の歌川豐春には美人はあるが、大抵田中益信（春信門人）あたりの畫樣にちかい。

鳥居清長

春信の現實化

歌川豐春

次が、愈々喜多川歌麿である。歌麿は、實際美人の天才と呼ばれ、汎く歐米にも喧傳せられてゐる畫家である。彼は隨分遊蕩家であつたといふ話もある。そのせゐか、描く所は花柳美人が多い。殊に

喜多川歌麿

美と淫蕩と神聖と

青樓、或は遊君と名を冠されたものが多い。例へば青樓美人名花合、青樓十二時、遊君を冠らしたものは、遊君六家選、遊君七小町といふ類である。その顔の類型であることは爭はれぬ事實である。然し其の歌麿式とも謂ふべき妖艶な、打上つたやうな、戀の諸分を知り盡してゐるやうな、併し何處かに冷たさのあるやうな顔。美と淫蕩と神聖と、それに江戸女の聰明、利口な所がよく現れたあの顔には、誰でも動かされないものはないであらう。敲いたら案外冷たい、情のうすいものであるかも知れないが、見た眼は非常に挑發的である。色氣が多い。さうした顔が、彼の繪を繰る何處にも（遊女以外の物にも）轉がつてゐる。誠に彼は、生れ乍らの青樓畫家、遊君畫家であつたのである。彼の晩年の作に、「青樓年中行事」二册の繪本がある。これは、當時の花柳史の好材料である。然し美人の特徴は之には缺けてゐる。（享和四年版）

勝川春潮

勝川春潮（春章門人）の美人は、八分清長、二分歌麿といふべきで、稍々豐頰、惡うはない。

細田榮之

次に、細田榮之がある。榮之は生れが、浮世繪師中稀な高い家柄であるせゐか、（彼は、御勘定奉行細田丹後守三世の孫。彼自身も九代家治の御小納戸役であつたといふ）其の畫も描かれた花柳美人も中々氣品の高いものである。遊君も御殿の奥方かと思はれるやうに描いてある。

高雅な趣味

恐らく彼は、モデルを見る事なく、唯自己の高雅な趣味から描いた美人に、遊君を冠らしたに過ぎなからう。

窪俊滿

窪俊滿（一說、重政門人。窪田氏。）には、光と陰を描分けた遊里描寫、清長風美人がある。

北尾政演　葛飾北齋　歌川豐國　歌川國貞　國芳　意氣と張　歌川豐廣　安藤廣重　英泉は天下一品

北尾政演（山東京傳と同人）は重政の弟子で、初期に錦繪も描いた。その「吉原傾城美人合自筆鏡」（天明四年）は傑作である。葛飾北齋は、初め春章に師事したが、此頃から獨自の、あの不羈奔放な、堅硬な精緻な、一物も苟くせざる風俗畫風景畫を描き始めた。彼はその製作往く處として可ならざるなき概があつたが、美人畫も初期のものは、まだ艷冶な態があつて惡うはない。菱川宗理時代に私の好きなのがある。美人畫の製作は、寛政享和の頃に多い。

次に初代歌川豐國があり、またその弟子の國貞の類がある。花柳の美人も隨分盛んに描いてゐる。豐國の遊女は、顏は歌麿風、姿は清長風色々あるが、凡て肉に乏しい。迚も歌麿や清長の魅力はない。國貞（後の三世豐國）は、藝者に於て巧みである。遊女は、格別遊女らしい特徴はない。唯英泉流に描いたものに、娼婦らしい匂がする。豐國の弟子に、今一人國芳がある。この男の美人は、また頗る特色がある。傳法肌な所がある。すつと胸の溜飲まで下るやうな。然し遊君の繪は、餘り傳法肌でもない。藝者の描寫、或は玄人上りの町女房と思はれるやうなものに、堪らない好いものがある。江戸ツ子の意氣と張りとを象徴したやうな美人を多く描いてゐる。豐國と同時代に歌川豐廣がある。その美人は豐國より品がある。その弟子に初代安藤廣重（歌川廣重とも稱した）がある。池田英泉に似た美人で稍淋しい。（豐國、豐廣は、共に豐春の門人である。）

同時期に英泉がある。これは天下一品の美人畫家である。挑發的な蠱惑的な眼や、素振を持つた美

花街の實寫

人畫家として、私の好みからは、歌麿の上にありといつてもいゝ所のものである。英泉は、英山（菊川氏）の弟子と普通謂ふが、これは餘り當にならない。彼は、藝者にもいゝのがあるが、女郎の繪が隨分ある。さうして其の特色は、女郎の繪に一層多いのである。文をよむ遊女の立姿、煙管で頬杖をついた思案投首の坐像、その背景には、實寫と思はれるやうな花街の氣分が、滲み出るやうに描かれてゐる。總てが挑發的である。慥かに歌麿に比して、下品である。然し挑發感、實感味は、彼より數等の上である。繪の女の話であるが、自分には、歌麿の美人よりも慥かに曖昧に富み、愛して呉れるやうに思はれる。さうして存外彼女は、客に分け隔てがない。所謂ふらぬ女のやうに思へてならぬ。

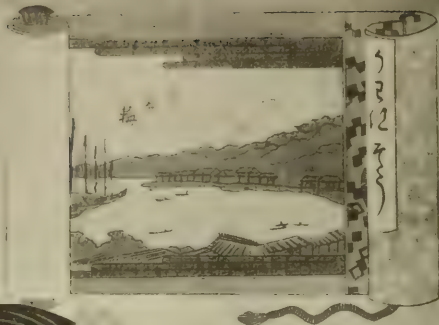
細かい睫毛

殊にそのじろつと横目を使つた長い睫毛の色目、斜視のやうなその眼が、天下一品だと思ふのである。げに睫毛の細かき描き方は英泉の特色であつた。並びに直ちに閨事を聯想させる、あの鬢のほつれの描き方も。

以下の畫家は、略する事にする。

三畫家の比較

以上述べたやうに、約二百餘年間に現れた美人畫家、其の花柳美人の中で、自分の最も印象の深いのは、三人ある。春信と歌麿と、英泉と三人である。今茲に三人の大體の特色を、今一言謂うておかう。春信は其の美人、多く室內の坐像、形もささやかに、全體の感じは、靈的である。所謂靈と肉との問題で、靈の國に棲んでゐる遊女の如しである。之が、處女性を永久に失はぬ遊女のやうだと謂つ

今様美人拾二景
渓斎英泉画

た譯である。

歌麿のものは、大抵半身像である。其傑作は、所謂大首に多い。之は、前にも述べたやうに靈と肉とを巧みに調和した、春信の靈に新しく肉を發見した靈肉合致の世界のやうである。而も全體の感じが、遊女を女神のやうに取扱つたもののやうに思はれる。英泉は、半身の大首は尠なく、大抵立像、坐像である。室內室外色々ある。凡て色氣の描寫が非常に多い。遊女を最も遊女らしく人間的に描いた、靈と肉と謂ふが、最も肉本位のものである事を思はせる。

賣春婦と河原乞食

浮世繪の世界は、畢竟一半を賣春婦の描寫に、一半を役者即ち芝居の描寫に、(極僅かを風景畫に)斯くして其の畫技を傾倒してゐる。要するに江戸の最も民衆的藝術、世界稀有な人工でなし遂げた版畫藝術の主要部分は、此の賣春婦、然らずんば所謂河原乞食であつたのだ。自分は之がいゝとも惡いとも今は暫らく論議を避けるが、唯如何に浮世繪が、否江戸太平二百餘年の士農工商の凡ての階級が、此の賣春婦に憧憬と讃美とを吝まなかつたか、それが諸君に多少とも御理解願へたらば、滿足である。

(大正十年四月二十六日、大阪中島公會堂にて講演)

死繪の名義

死繪の一般形式

死繪考

上

浮世繪の芝居繪の中に死繪なるもの丶存在することは、多く人の知る所であらう。死繪とは即ち、死んだ役者の似顔繪の謂ひであつて、當時市井に盛名を賣つてゐた某俳優の物故後間もなく、その肖像畫を特殊各樣の意匠によつて、これを描き、其の畫の中に右俳優の戒名、歿年號月日、或は墓所所在の寺院名等を記入したものである。さうして時として右の記載の他に、この俳優を記念するための追善の文といふべきものが、當時の相當の地位を得てゐた作者の手によつて綴られてゐる。但しかうした事ぐらゐは、芝居繪を涉獵するもの丶誰しも容易に知る所であるが、然ればこの死繪は、一たい何時の頃から、しかも誰俳優の死から創始せられたか。而してこの畫家は無論浮世繪師中役　繪芝居繪に筆を染めてゐた者には違ひないが、その誰派の如何なる畫家から如何なる形式に於て創始せられたか　この問題は、從來の劇道又は浮世繪の諸書のうちに餘り多く見ぬ處で、未だ判然した所は何人からも確められてゐない。唯嘗て宮武氏經營の大阪版の「此花」にこの死繪の考證の出でたことがあ

る。今私はこの考證を參考に、自分の所藏材料と他に散見した所とを綜合して、若干これの起原沿革に就て述べて見ようと思ふ。

創始期

死繪は、その創始期は、寛政初年であらうといふことである。一たい役者繪（主に似顏繪）を役者繪らしく描き始めたのは、即ち役者繪の眞の意味の誕生は、勝川春章の繪本舞臺扇（文調と合作）である。この舞臺扇は明和七年版（西一七七〇）である。然りとすると寛政初期と明和七年とは距離に於て約二十年である。即ちこの二十年間に、役者似顏繪は、春章・文調等の大家の努力によりて、繪その物の進歩と共に、又市民の好劇趣味並に似顏繪翫賞の風を亦た盛んならしめたであらう。即ち當然寛政初期あたりにはこの一個俳優の死を記念する死繪の發生があらねばならなかつたのである。殊に

名優の死

折よく寛政初期には名優の二三が相續いて物故した。即ち初代中村仲藏（秀鶴）や、二代目市川門之助である。仲藏は、寛政二年（西一七九〇）四月、門之助は寛政六年十月に物故した。即ち死繪は、この秀鶴や門之助等に關するものが最初であつて、當初は唯其の似顏繪に法名を摺り込んだのみのものであつたらしいとのことである。然しまだその頃は、「死繪」なる名稱は起らなかつたらしい。

死繪なるこの名稱が、文獻に現はれた最初は、私の見た限りでは、守貞漫稿（近世風俗志）三十一、雜劇上の末尾、安政元年の八代目團十郎の死繪に關する記事中に、「古來役者の死繪は二三種に限れり」といふ文字がある。この死繪が唯一の典據である。然しこの記事の安政元年以前に於て夙にこの

名稱は普通士女の間に行はれてゐたであらう。尠くとも文化文政期に於て既に行はれてゐたであらう。

初期の畫家

次に死繪創造期の寛政初期に於ける畫家は誰であつたか。今遽に斷言は出來ぬものゝ、寛政二年に於ける役者繪の畫家は、春英（春章の門人）の二十三歲、初代豐國の二十二歲等がある。而して春章は晚年であつて、しかもその歿前二年（寛政四年六十七歲死）である。即ち春章・春英あたりの創造ではなからうかと思ふ。文化文政に入つて當時役者繪の大家は無論初代豐國である。（春英は、文政二年歿。但し豐國の盛名には及ばなかつた。）即ち死繪の繼承は、その流行は、豐國に於て偉大なるものであつたであらう。而して當時の作者の筆に成つた追善の文を上欄に掲ぐることは、恐らくは此の初代豐國あたりから創始せられたであらう。（後段、豐國畫四世路考死繪の說明參照）

死繪の色彩

藍摺の風

死繪の色彩が所謂死繪特色の薄藍摺のものとなつたのは、初代豐國全盛期の文化文政を經て、天保弘化となつた、その弘化の頃であらう。何となれば、幕府が版畫の華美を禁壓した天保十三年の法令當時、窮餘の一策として英泉等に於て作畫せられた藍摺（藍一色又は藍を主色に一二の單彩あるもの）の風を眞似て、（但し此の藍摺、天保十三年以前に、中本草双紙等に於て、すでにこれが發生、若しくは類似を見たことは、事實である。）以後繪にも之を用うるに至つた。然るに普通の錦繪が法令の弛むに隨ひ、再び華美なものとなつた嘉永以後と雖も、死繪のみは偶然得たこの藍摺の風をその畫彩に棄てなかつたのであらう。即ち弘化以後に於ては、この藍を基調としたものが頗る多いのである。但し

此以後に於ても、多色摺のものがないでもない。現に後段說明するが如く、嘉永期に於て四世歌右衛門の死繪は、藍摺ならざるものがある。而して弘化以前藍摺以前の色彩に就て云はば、此等死繪は一般に單彩であつて、藍や濃淡の黃、茶などの二三色摺である。

判の大きさ

次にその判の大きさである。死繪は一たい、普通は初期後期共に一枚繪（普通の錦繪大）であつたらしい。但し例外として二枚續三枚續などもあつた。（八世團十郎の時には、現にこれがあつた。）次に畫の構圖は如何であつたらう。

構圖

大抵は平凡なその役者の肖像畫であつて、時として、その役者生存中の人氣を得てゐた役柄に扮裝した姿を描いて、それに死の意味を着けたり、又は單に死の意味から、水色の裃を着けたり、珠數を手にしたりさせてゐる。八世團十郎は例の悲慘な末期を遂げたので格別意匠を凝らしたのか、現にその死繪に、「暫」の風を脫いだまゝの、例の鬘を背後に、硯の墨摺り流し紙を展べて筆を手にする。その上欄には、「暫」のつらねに擬した「しばらく手向のつらね」なる追悼文まで載せた賑やかなものもある。同じくこの八世團十郎の死繪であるが、これに限り彼の繼母を憎む揚句、諷刺繪風のもの、例へば七世團十郎が盲目になり、別に猿（八世の異母弟猿藏の意味）を使ふ猿廻し風のお爲（八世の繼母）を描いたものもある。これなどは純死繪の附錄と見てよからう。
（八代目の自盡は、安政元年八月である。）

主材人物

云ひ忘れたが、死繪の主材人物は、役者とも限らぬ。狂言作者、戲作者など、又は浮世繪師（初代

廣重の死繪を三代豐國が描いてゐる。然しこれは死繪とは云へない程の多色摺である。廣重剃髮して珠數を手にす。上欄にその略傳及び辭世の歌を掲ぐ。なほ三代豐國の死繪を門人の國周などが描いてゐる。）といつたものもある。

製作種數

次に死繪の、例へば或る役者に關しての製作種類の數は幾何であつたらうか。盛名ある役者の死を弔ふべく、何種の死繪を以てしたか、その數である。それは、前掲守貞漫稿の引證にもあるが如く、大抵一個の役者の死によつて、二三種であつた。但し例外もあつた。其の最も甚しいのは、例の八世團十郎で、彼のみは、その死繪の數、殆ど百二三十種（戯場年表は、一枚繪草紙三百餘通とある。伊原靑々園氏の「市川團十郎」には、無慮六百餘種とある。守貞漫稿は三四十品とある。）であつた。また死繪の風を大仕掛にした即ち彼等の死を材とした草双紙の出版もあつた。（四世歌右衞門の死にも此の種の物があり。八世團十郎にも追善三升孝子〔霍壽作〕等がある。）

畫家の落款

畫家の落款はどうであつたらうか。即ち有無區々である。初代豐國の頃まではこれがあつたらしい。それが弘化の藍摺風となると、多く無落款である。嘉永年間も無落款である。安政元年の八世團十郎の「暫」に擬した物も無落款である。但し安政五年の廣重死繪の如きは、麗々しく豐國（三代）の署名がある。

檢印

檢印（錦繪檢閲の際、行事が捺した印）は、どうであつたらう。初代豐國時代は、例の極めの印がはつきりとある。弘化以後嘉永時のものには、無落款と共に、檢印も何ら無い。死繪ばかりは普通の錦繪及び小說繪本類の如き嚴肅なる檢閲下にあらなかつたのかも知れぬ。

最後に今、私の所藏になる主なる死繪によつて、これを例示して見よう。

下

例の一

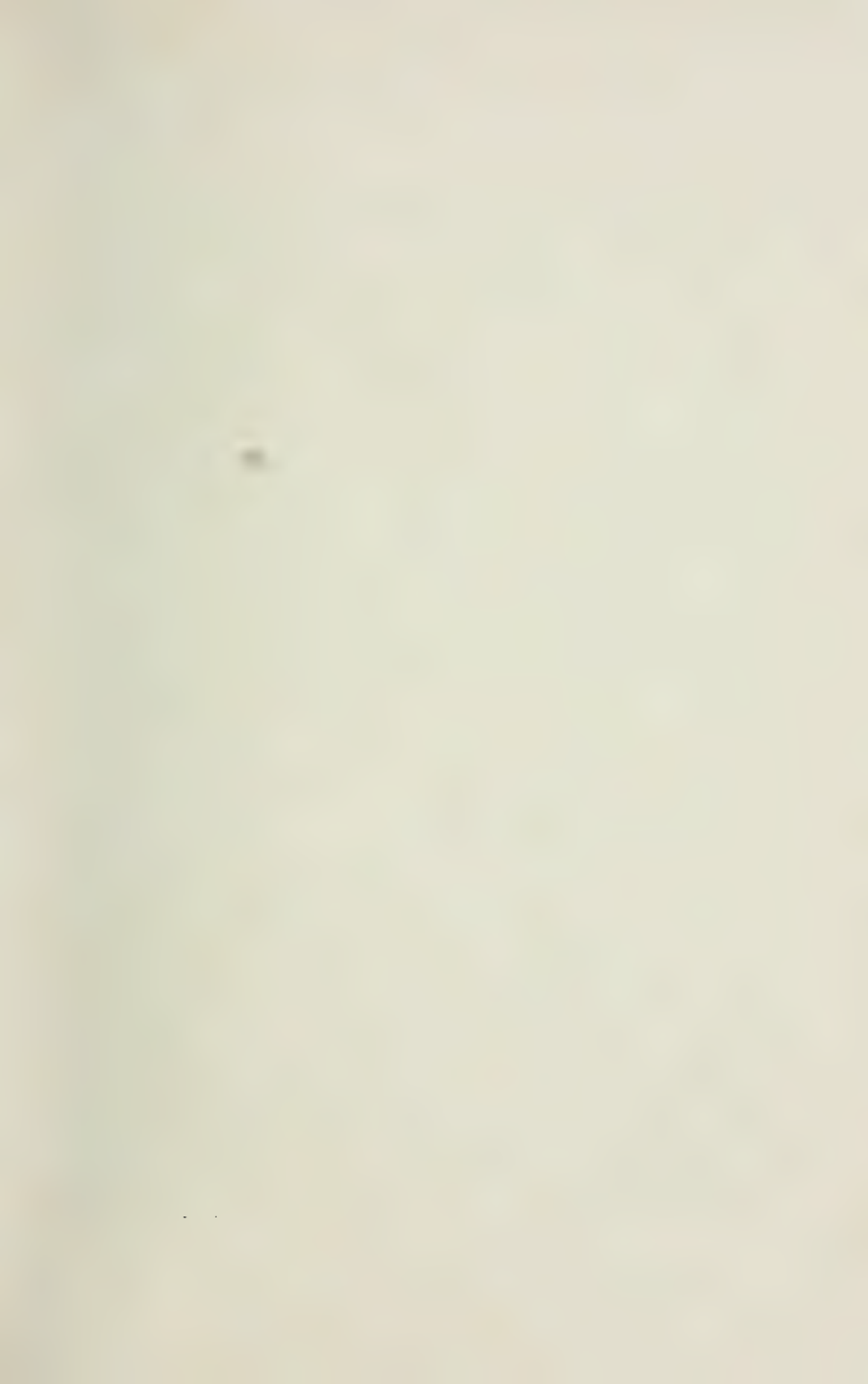
（其一）。四代目瀬川路考死繪。（豐國畫。有落款。極め印あり。）女姿となりて、黑き袈裟を纏ひ、坐して尺八を膝に突いてゐる。右手の傍に編笠、脊に樒の枝が見えてゐる。着てゐる衣裳、袖口と裾とに、路考の紋、模樣の如く數多おかれ、頸に珠數をかけてゐる。路考の紋の一部分、袖口と裾と薄き茶。紋と樒と笠と黃。上欄に十數行に亘り、殆ど幅一面に山東京山が弔文を掲げてゐる。山東京山述とあるその下の角形の印と顏の唇の色と、うすき朱の色。山久の出版元の符號まである。御好みに付豐國畫の下には、例の年玉印が薄赤くある。卽ち彼の四十四歲爛熟期の作であり、自稱ではないが逸品の一と思ふ。全體が、茶と黃との二色に依つて、死繪の死繪らしき、路考に相應しき女性的と死繪の寂しさ陰（くら）さとよく交響してゐる。（京山の弔文の左隅に、路考の法名と歿年月日と俗名とが、三行になつてある。）

例の二

（其二）。四世中村歌右衞門。これはまた極めて無趣向なものゝ標本。左に框（わく）あり、その中に水色の衣（い）を着た男性、珠數を頸から襟へ垂らし、その框から手だけを出してゐる。その前面には同じく他の一個の男性があつて、畫の中央に一杯になり、立ちて藍色の衣（い）を着、水色の袴を穿きつゝある。さうし

例の三

てこれは、兩手をあらはさずして、卽ち後の帶へそれを當て、前なる紐を結んでゐる。框中の人物はまたその手を垂れて、立てる人物の袴の後半分を支へ、その二筋の紐を引いてゐる。相手の人物の袴を穿くのを助けてゐる風。框中の方が顏は稍さびしくある。これは何か。四世歌右衛門に就て調べれば何か意味が分ると思ふが。大方四世の先代であるか、或は框中の珠數を頸にせる者こそ肝腎の四世であつて、その前面に立てるは、彼の養子翫雀でもあらうか。立てる人物の地に布く袴の裾の上に、同じく珠數が置かれてある。框中の人物の周圍、框は自然に蓮の花と葉とで飾られてゐる。色彩は、水色、蓮の花の黄、葉の綠、二人の人物の襦袢の襟などの紅、然し水色が主になつてゐる。上に翫雀と白ヌキの雲形があり。右に、俗名法名、大阪中之芝居に而二月十七日、浪花中寺町淨國寺と之丈の文字がある。畫風は全體に、拙劣。大阪出來であらうか。若し江戶とするならば、二代國貞（三代豐國門人）の筆ぐらゐであらうか。（歌右衛門の死は、嘉永五年。三代豐國の全盛時代である。卽ち當時の役者繪の畫家は、殆ど三代豐國の一派に屬する。）（この繪は、落款、出版元、檢印、共に無し）

（其三）。同じく四世歌右衛門の死繪。これは、だんまり風の繪で、山賊めいた衣を着た百日鬘の、左手に如意を持つて、後から綠體の鬼が黑の金棒振り上げて迫るのを支へ、右手は、膝もとに仆れて出刄を振上げてゐる婆（奪衣婆の意であらう）の右の腕をとり拉いで、右足をその婆の右から左の肩へ懸けてゐる。全體の色彩は、彼の衣の茶褐の色と、鬼の體の濃い綠と、婆の衣の黄の草の模樣と、

全面に亘る背の黒とである。左に中央、位牌形の中に、法名、歿年月日、行年、俗名、俳名の甑雀、家號の成駒屋などの文字が竪に大小數行ある。而して背の空間に點々と蓮の葉を降らしてゐる。この蓮の葉と位牌がなければ、一つ家の婆の芝居繪かとも見られる程の、死繪としては、最も破格なるものである。彼の一代の好評を博した諸役の中の稲葉幸藏あたりの扮裝でもあらうか。さうしてこの畫は同じく無落款ではあるが、出來榮えから三代豐國であらうと思ふ。

前上、數言を費して、多少乍ら死繪の考證に盡す所あつた。念の爲、私のこれ迄縷說したことを要約して置かう。若し謬あらば是正して頂きたい。

死繪は、寛政初期から明治に至る間の芝居似顏繪の一種。畫の取材は、俳優、又は浮世繪師、又は劇作家又は戯作者等、軟派に於て市井に名を賣つた人々。大きさは大抵大錦普通の判で、中には二枚續三枚續もあつた。一個の人物の死に關する種類は、大凡そ二三種、多きは、八世團十郎の例であるが、然しこれらは稀である事。色彩は、初期中期は淡彩、弘化頃藍摺となり、嘉永頃から時として多色摺（前掲四世歌右衛門の後者の例の如き）のものもあつた。その畫家は、春章・春英等から初代豐國等の歌川派に多きこと。繪の形式は、平凡な肖像、意味の特殊なものゝある肖像、その俳優の或事件（生時か死の前後）を主材にしたもの等もある事。落款は、初代豐國までは有り、藍摺の前後（天保弘化嘉永安政頃）は、之無きが多き事。檢印は、一貫して厲行せられざりし事。以上等である。

（大正九、九、二二稿）

追補。　右の「死繪考」脱稿の後、永井荷風氏の「大窪多與里」に、死繪の記述あるを發見した。卽ち左の如きものである。

『先頃より役者の死繪と申すもの集め居候。死繪の起源は矢張役者似顔繪の鼻祖と訛傳せらるる勝川春章あたりかと存候。春章、春英、初代豐國あたりの死繪は其數あまり多くは無之様に御座候。二代目豐國以後國貞國芳あたりの作甚だ多きを見れば、死繪の流行盛となりしは、專ら天保以後の事なるべきか。坂東三津五郎、五代目路考、しうかなぞ多く、其の中にても八代目團十郎の死繪は夥しきものにて小生の見たるものにても七八十種は有之べく候。死繪も一般の浮世繪と同じく天保以後に及びて甚しく俗となりしは致方なき次第に御座候。春章より豐國まではさして死繪らしく描かず、唯白無垢を着て悄然と立ちすくみたる姿なぞ、却て哀愁の氣味深く有之候へども、近世に至りては凡て露骨に三途川の榜示杭を出し、空より蓮華の花を降らし、或は雲のかなたに極樂座の芝居小屋を見するなど、大抵きまつた趣向のみとなり、明治に入りて澤村小傳次また團菊左に及び、この平民美術も千秋樂となり申候。

三月十四日』

尙、私は、本年四月初旬、大阪三越で開かれた同地同好者主催の劇に關する展覽會を見たが、

死繪は、餘り陳列されてゐなかつた。唯眼に留つたのは、八代目の死繪の二三枚であつた。尙々、山村・町田兩氏の「芝居錦繪集成」にも死繪は冷遇されてゐる。唯一枚、寛政十一年、勝川春英畫（落款あり）の中村傳九郎の死繪があるばかりである。脇差を佩んだ上下の立姿。上に「舞鶴も今はめいどの夜の鶴、名のみ此世にのこるおもかげ」の歌と、中村傳九郎追善の七文字がある。（大正十、八、二七補）

以上をものして今日で、すでに三年ほど、生憎自分の藏畫は、死繪に於て少しもその量を增してゐない。此の自分の「死繪考」、自分の舊來の僅かな原品によりての考證、それに先人の說以外に新しきを何ら加へざれど、しかし嘗て「此花」の死繪考、及び永井氏の「たより」以外、未だ死繪について、聞くこと無きやうなれば、蛇足とは知りつゝ、舊稿のまゝ發表することにした。機（死繪の蒐集せらるゝ）を見て大に更にとは思ふものの、唯さへ出ものの乏しい今日、それは何時の事やら分らぬ。（大正十三年六月）

藍摺のはじめ

錦繪の藍一色の摺は、天保十三年の水越の嚴令に出らず、それ以前にもすでにあつたことは、

既に曰はれてゐるが、稍性質の差はあらうが、小說の口繪に此の藍摺が既にあり、それが年月が確かであるため、從つて此の藍摺の工夫は、錦繪は斷言出來ないが、小說口繪類には天保以前すでに行はれてゐることが明確である。それは、文政七年申の春日の序ある南仙笑楚滿人(二代目也、即ち初代春水)の「軒並娘八丈」(初期の人情本)や文政九丙戌正月發兌の序ある鼻山人の「花街壽々女」(同、花街鑑の續篇)やの序及び口繪が藍摺であることである。(外骨氏「此花」第十三枝には、天保五年の國貞畫「其裏梅眞砂白浪」の草双紙を例として擧げてある。)序、ヒラキ二面の口繪及び目錄などが全部藍摺である。畫者は、共に英泉の艷筆である。

東風吹江戸繪榮

繪本「東わらは」

太平逸樂の夢

「云はずとしれた事なれども一年中をもふそうなら一夜あくれば若水屠蘇酒、商人は扇賣、道中双六、寶船、烏帽子着た大神樂、初もの詣では其年の明へ當りし神への惠方參り、初寅の日は芝金杉、牛込の毘沙門天、卯の日は龜井戸妙儀山、三日上野の兩大師、谷中大黑寺の餅の湯。門萬歲に鳥おひそのあとの福大黑、春駒に鶴龜踊、禮者のちどり足は目まで赤く、年季者の棧とめは片袖光る」とは、歌川豐廣畫、初代南仙笑楚滿人戲言の繪本『東わらは』(上下二卷、文化元年板)の中の言葉である。

江戸も漸く押詰つて、文化文政の頃ともなれば、禁裏と公方との疏隔は、次第に其の端を啓き、國防の患も漸くその煩はしさを加へる頃となつたが、江戸の士女に、然したゞもう太平逸樂の夢に耽つてゐた。上に、豪奢前代無比、放蕩古今に絕した大御所(家齊)を控へた彼等、滔々として所謂「袋から出るも芽出たし弓はじめ」の芽出度さに忘我の體であつた武士の階級から、いかのぼりの絲ひく町人の丁稚を連れた我儘な小悴から、絹物を禁ぜられて纔かに派手な木綿物の縫合せに女らしい滿足を得た、聲も陽氣な眉も淸しい女太夫の鳥追に至るまで、凡てが東風吹く初春の樂しさ賑かさに、我を忘れてゐたのであつた。やがて起る大きな「一國」の惱み、續いて起る反封建の思想にも、些の豫感も

なかつたやうな、さうした無自覺の心、陶醉の夢の一瞬を永遠にまで引伸したやうな、彼等の凡てがそこにあつた。彼等が如何に國の新しい惱み、再生の前の蠢めきを知らなかつたかは、文化文政の頃から愈々益々その技巧を冴え、益々人間の手業(てわざ)としては恐らく古今未曾有の驚異とまで進めた浮世繪板畫――數多くの當代以後の浮世繪師の筆管から成つた、板下(はんした)と彫と摺と益々三拍子揃ひ出した、それが所謂る津々浦々に迄、榮えた事を想像すれば足りる。

民衆藝術第一の烽火

江戸繪は、民衆藝術の第一の烽火(のろし)であつたことは謂ふ迄もない。その題材の花柳と演劇であつたことも。然し其他に隨分江戸民衆の生活と直接交渉してゐる事も否めない。況して一年行樂の最初、愉悅の先驅たる正月、初春の行樂行事は、勿論その題材から見逃さなかつた。數の繪本に、數の一枚繪(或は二枚續に、三枚續に、或はそれ以上に)に掬(く)まれて描かれた事は謂ふ迄もない。

正月の繪

苦蟲を噛潰して、始終いら／＼してゐたやうな顏の北齋にも、正月の繪は隨分ある。同じやうに初春壽(ことぶき)の酒に陶然としたであらう。同じやうに女太夫の艶冶な姿に、人非人の境涯を惜しんだであらう。況して江戸市民行樂の氣分を飲込むに敏感であつた初代豐國や、より多く敏感で且技巧に演練し來つた彼の門下國貞(後の三代豐國)や國芳、及び其の末流に、華やかな正月を背景とした、數々の江戸繪のあることは、無理ならぬことである。

浮世繪は、師宣頃から板畫主に一枚繪に榮えてきたが、春信や春章、清長や歌麿、榮之と諸大家を

數へてきても、その特色は、主に青樓美人か然らずんば俳優芝居の繪であつた。四季時をりの風物を背景とするにしても、或は間々それを主材としたにしても、多くは春は花咲く春と限られて、東風吹く初春の描寫は少かつた。春信の繪本「青樓美人合」の春の卷にも、羽子板を弄んだり、鞠突く正月らしい遊女はゐても、それがすつかり正月といふ人間一年の最も樂しい生活味と切迫してゐなかつた。歌麿の美人も大抵は美人の顏や姿態本位で、殊に正月といふ生活味の表現は殆どなかつた。其他役者繪の大家春章の輩に至つては尙更である。然るに初代豐國、豐廣や北齋あたりから、この正月氣分を主題にまたとり入れるやうになつたのである。（即ち豐廣豐國兩畫十二候の三枚續十二組の中の、正月、豐國畫の如きがある。）それも一つは、浮世繪が益々生活味の表現を帶びて來たのと、一つは、豐國北齋たちの末期の諸大家が、先輩の粉本、典型の踏襲から新境地を開かうとした努力の賜であるとも謂へよう。

益々生活味の表現

幾箇かの私の藏品の繪を全部疊に引繰り返してみた。中からいろいろ初春氣分の繪を拾ひ出した。懷かしい江戸末期の頽廢、然し酣醉の夢の著しい物だけを左に列べてみよう。

國貞の「春のあした雪の乘合」

先づ初代國貞、その香蝶樓國貞時代の三枚續『春のあした雪の乘合』がある。極印であるから、その天保四年以後同十五年に亘る間の作であらう。右一枚は、獅子舞（福助）と角兵衛（歌右衛門）、町藝者二人（紫若と菊次郎）。中一枚は町人（海老藏）と浪人（九藏）。左一枚は、山伏（猪三郎）傀儡師（多

同「初卯の日詣」

繭玉

見藏）船頭（吉三郎）である。人物もそれぞれ括弧の如く實在の當時人氣俳優の似顏を集め、背景は雪の隅田川である。右手に金龍山の塔が見えてゐる。藝者の傘に、山伏の笠に、雪は白く堆かい。町人の乘つた駕籠（駕籠舁は船中に見えない）の後に、枝もたわゝた繭玉がびらり下つてゐる。人物のそれ〴〵配合、風情、それに人氣俳優の似顏。嘸かし當時の士女の血を湧かしたことであらう。

今一圖。同じく香蝶樓署名の三枚續「四季の內初卯の日詣」がある。右の一圖は、手拭を襟にした、若い娘の繭玉を肩にせる繪。その腰付のしなら〴〵と、晩年の彼の繪の鈍重な腰付の美人には似合はぬすつきりとした風情。中一枚は苞に入つた蜆と盥を後ろに、帶際の懷紙に白い手を置いて、靜かに褄をとつた藝者。左一枚は盥に鯉の生氣も甚だしく、そつと口元を抑へた同じく藝者が前に立てる繪。その脊あたりに「妙義大權現、東宰府天滿宮」と二つ大きな提灯を垂れてゐる。三枚に亙つて空は一連の繭玉の飾り。問はずと知れた龜井戶天神社頭の景であらう。「近世風俗志」の初卯日の項に、「江戶にては妙義詣とて、龜戶天神の社頭、法性坊の祠に群參する也。此の法性坊は、叡山の阿闍梨にて、卽ち菅神の師なるを以て、爰に祝ひ祭れる者也。妙義權現とは別神なるべき歟。龜戶の祠には、法性坊、華表には御嶽山の懸額あり。」とある、此れに相違ない。

餘分な話であるが、此の繭玉こそは、私は舊い江戶の緣起物の殘れる中の唯一の懷しき物として好く。柳の枝にたわゝに枝垂れたあの玉よ、さうして紙作り、土作りの色々よ。「春」その物を象徵する

四季の内初卯の日詣

初代國貞畫

國芳の「春の賑ひ」

にふさはしい靑柳の小枝と、人の欲望を最も端的に表現した種々の小寶。私は「春」の匂ひを齎す唯一として之が好ましい。繭玉は昔、緣起物として町人、殊に花柳美人に尊ばれた。私が大正に生れて之を好ましい遊戲物視するよりももつと眞劍な願ひが祈りが、彼女らにあつた。近世風俗志を繰つた序(ついで)である。試みに繭玉の說明を省記してみよう。

「繭玉は土丸を用ゐ、其他は厚く重ね張りたる紙製にて、胡粉、丹綠靑、其外とも彩を加ふ。圖の外にも、的に箭の中したる形あり。元日には淺草寺を始め、其他參詣人多き神社等、頭上に之を賣る。初卯、龜井戸亦專ら之を賣る。當月中諸神社緣日亦之を賣る。買人は、霜月酉市の熊手と同じく、又共に天井裏に之を釣る。」とある。

さうして其圖とは、千兩箱や、お龜の面や、蕪(かぶら)靑の形や、打出(うちで)の槌や、入船帳(いりふねちやう)や、其他寶珠の類を釣り下げてゐる。緣起物の一、京阪には無之と記してある。當名古屋あたりも、此の繭玉は流行されてゐる。すると之ばかりは江戸の風を倣ひ傳へたのであらう。（但し繭玉、凡てマヒダマと訓じてある。）

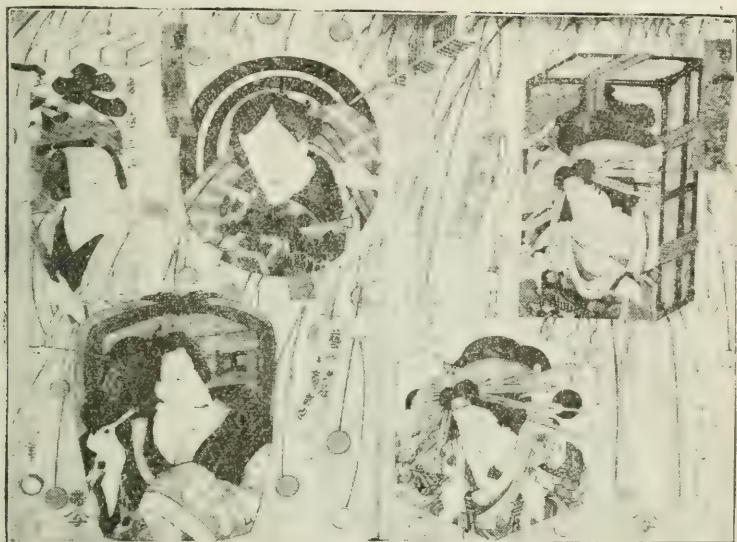
嘉永の頃の作に、一勇齋國芳畫の「春の賑ひ」三枚續きがある。右は廻禮の町人と鳶の者らしいその供。中は、獅子の大きな面を据ゑ、お祓(はらひ)を持つた大神樂のいなせな一人の男。左は鳥追の紅緒(あかを)の姿である。（本著「鳥追から女太夫へ」の挿繪は、卽ち是である。）降つて安政期に入ると、正月の趣向も愈々奇拔

三代豐國の「梅暦見立八勝人」

國周畫作

なものになつた。百花爛漫一時に咲くとは此の謂であらう。中、最も巫山戯た但し當時の江戸の士女の行樂氣分の象徴とも謂ふべき三代豐國の「梅暦見立八勝人」（安政七年初春賣出）の圖を解說してみよう。

梅暦とはあつても、人情本のそれとは關係なく、八勝人とはあつても滑稽本の八笑人に關係はない。八枚揃ひ、大首で皆それ〴〵人名は正月氣分に伴つた假作の名にしてある。假へば男達、春駒の與四郎。男達、凧巾の幡藏。男達、千鳥懸の毬之助。男達、飾海老の門松の類であつて、繪の上に、稽古本風に文句を陳ねた（所謂彼等男達、ツラネの文句を記した。）物を揭げ、下に一々その大首があり、衣裳は夫々に因んだお正月の飾り物を圖案にしてゐる。恐ろしく洒落氣の多いものである。脊なは、雲母さへ摺り込んでゐる。例へば毬の助のツラネは、「江戸紫の突羽根に殿さまかみさま三ケの莊、曾我に由緒の千鳥掛、歩みの板や羽子板の角たつ達衆の其中で、心も丸い毬の助が、色には引を虎御前………」の如きである。芝居趣味に耽溺した江戸人に巧に迎合した其の趣向、殊にそのツラネが曾我と云々してゐるのは、初春興行は曾我と昔から決つてゐたからであらう。其他源氏繪或は風俗繪の類で、三代豐國及びその門下の「十二月の內睦月」の如き畫題は數ふるに遑ない程である。私はそれ等を一々見越して、倖江戸末期役者繪の大家、或は近き未來に於て春章、寫樂、初代豐國と比肩する地位にならないとも限らない國周の作畫の內、二三圖を列擧してみよう。

國周畫作、慶應三年卯年正月板行の二枚續、役者似顏繪である。二枚に亘つて、全面を繭玉の趣向、

春芝居　　豊原國周畫

それに吊られた金箱、的矢、大福帳の類、それに一々男女に扮した役者の似顔がある。役名は、その右傍の短冊に記されてある。右の一圖は、「三浦屋抱、岩藤」、「傾城尾の上」。左は、「船頭丹治實は大蛇丸」、「藝や女房實は女兒雷也」と「奥州屋禮三郎」の三人物。賑やかな思ひ切つて正月らしい物である。謂ふ迄もなく之は默阿彌の芝居である。默阿彌當時五十二歳、正月市村座の興行である。お靜禮三の書卸された時で、此の似顔繪は、おしづ禮三を綯まぜにした傾城草履打の主役のそれである。分つてゐる役者はお靜、岩藤は田之助。（丁度彼が脱疽を病む前年である。）禮三郎は家橘（翌年五代目菊五郎と改む）等であつた。其他龜藏、三十郎、新車、左團次等

「當世立衆見立五節句」

の大一座であつた。因みに此時の藝題は例の如く曾我に因んで、「契情曾我廓亀鑑」で、その中草履打の部は、鏡山の尾上・岩藤を世話に最も砕いた物である。今では之が傾城草履打と、お静禮三との二つに分離されてゐる。今一枚、國周に面白い趣向の物がある。それは翌慶應四（明治元）年正月板、鳥羽伏見の戰が行はれてゐる矢先、江戸はまだ此んな悠暢な板畫が生れてゐた。それは、圖に三味線の胴を大きく垂れて、その胴に、三番叟の顔と鶴の模様が大きく見え、上は、稽古本の體で右に再春菘種蒔、中村芝翫とあり、本文には「その昔秀鶴の名にし負ふ都鳥の折を得て」云々とある。當時守田座に再勤（？）した芝翫に因んだ物であらう。

豐國を仕舞ひかけると、三代豐國の「八勝人」と同じ時の、矢張り安政七年正月賣出しの「當世立衆見立五節句」の五枚揃ひが眼に入つた。その内の若駒の春五郎は正月節句の擬人である。助六風の立姿。摺も色も極めて上物。衣裳には、海老、梅、七五三飾り、羽根等。それに春に因んだ「初日影さすが睨みし眼のたつた若ぎの友の勇む駒下駄。花の屋」の狂歌を添へてゐる。これも、初春氣分の一であらう。

其他繪本類を渉獵したら、幾らも此の初春氣分があらう。風景畫には手を著けなかつたが、廣重の東都名所などに、隨分此の初春氣分はある。（例へば、その霞が關など）然し凡てを省く事にした。

初春の屠蘇機嫌、みなみに來れ此の江戸繪の春をと嬉しがつておく。（大正十一年一月）

田之助の脱疽發病年につき

「東風吹江戸繪榮」の中、國周畫作の中、「……岩藤は田之助。（丁度彼が脱疽を病む前年である。」と云ふ事が載つて居ますが、さうすると、慶應三年が前年であれば明治元年（九月改元）に彼が脱疽になつたと云ふ事になりますが、私の覺えてゐる處によると（たしかな材料は燒いて手元にありませぬが）それと少し違ふ樣です。何卒お調べを願ひます。私は、たしか田之助は、慶應三年に病氣になつてゐた事と思ひます。慶應三年の五月に市村座で、「善惡兩面兒手柏」（妲妃のお百）の狂言でお百を田之助が演る筈の處、足痛で休み、家橘が變つた事がありますが、それが彼の病氣の現はれた第一であつたと思ひます。其後その年には出勤なく、慶應四年二月守田座で、「娘形澤村田之助病氣全快仕候間初日より罷出相勤申候」と看板を出して、乙女重の井狂言「染分千鳥江戸褄」上るり「田字梅後着重縫」清元連中を演じてゐます。而して翌年の明治二年二月守田座の「廓文庫舗島物語」で、又病氣が再發して休演し、同五月（「河竹默阿彌」には、七月とあり。久彌。）には病氣全快と看板を出して、「笠屋三勝 茜屋半七 星今宵逢夜睦言」清元連中の所作に出てゐます。それで、その年はもう出なかつたでせう。而して愈々脱疽として片足を切斷したのは、明治三年だと思ひます。

それ故、慶應三年の翌年は彼の病氣について私は一寸覺えてゐないのですが、明治元年に、病氣が明瞭になつたと云ふ樣な事實が御座いませうか。勿論、慶應三年に舞臺を休む程な病氣であり、明治二年に又それを繰返してゐるのですから、その間の明治元年に何ともなかつたと云ふ事は考へられませぬが。右御尋ねします。（東京、吉田暎二）

右の質問によつて、私は何によつて慶應三年を田之助が脫疽を病む前年としたかと、記憶を調べると、關根只誠翁著「演劇叢話」の中の芝居年浪草に據つたらしい。同書、明治元戊辰年の條に「正月守田座へ中村福助、中村のしほ下る。澤村田之助脫疽を患ひ、名醫ヘボンの療治を受け、義足をなし五月より三座へ出勤」とあるこれに據つたものらしい。成程御說の通り前年より既に彼は脫疽を病んでゐた。（此事、「河竹默阿彌」にも出づ。）全く小生の早斷で、實は、「脫疽發病前四ケ月」とすべきであつた。御好意を謝す。切斷も、關根氏說の明治元年は、誤。明治三年二月が正しいのであつた。（久彌）（大正十三年二月）

浮世繪風景畫雜談

浮世繪風景
畫の傳統
司馬江漢

浮世繪の風景畫は、その發源はと來ると、中々問題が大きい。一個眇たる浮世繪史の一部であるけれ共、大は泰西文化の初潮の詮索に始まり、中々これだけでも繁雜な然し有意味な研究題目である。今、これを私の持合せの智識に任せて概說してみる。

浮世繪の風景畫（風俗畫の背景たる風景をいはず、純風景畫をいふ。）は、その傳統の祖は、司馬江漢（一七三七—一八一八）である。江漢以前にも、蘭法畫を承けたものがないでもない。例へば天草一揆の叛徒の中にあつた山田右衞門作の如きも然りである。彼の直譯的な風景畫や人物畫が、今日でも稀には傳存してゐる。彼は、其後特に赦されて江戸にゐたといふ。さうした山田一流の西洋畫繼承者が他に幾人もあつたことであらう。江漢は彼等の中の鬱然たる大家であつた。江漢は長崎にあつて蘭畫並に銅版術を蘭人から承けた。彼の異國趣味は益々增大せられて行つた。遠近法を稍正確にこなし得るやうになつた。樹木の陰影、燈火の隱見、明滅、凡て西洋畫の風格を追うて如實となつた。然し此に注目することは、彼の風景畫は、大半肉筆である。泥繪具を以て塗られた肉筆畫である。（少數に銅版畫の試作あり。）而して江漢は、また浮世繪正統の大家、美人畫古今の名手鈴木春信の門下でもあつた。

春重

浮世繪の創造

師宣以後の畫家

政信の浮繪根元

鈴木春信

彼の自記による懺悔文（「後悔記」）によれば、最初彼は、春信門下となつて春重と號し、春信式の美人畫板畫の製作に從つたのみでなく、時として師春信の贋作を行つたとの事である。

當時、浮世繪正統の畫家は、風景にどうした眼を持つてゐたであらう。浮世繪の創造は普通岩佐勝以（一五七八—一六五〇）といふけれど、此は嚴密に謂へば誤りである。眞の意味の創造者は、無論菱川師宣（元祿七年歿、七十餘歲）である。其後大家には、肉筆の宮川長春（一六七九—一七四九）同春水、板畫の鳥居淸信（一六六四—一七二九）、懷月堂度繁等の懷月堂一派、奧村政信（一六八六—一七六四）、西村重長（寶曆六年歿、六十餘歲）、石川豐信（一七一一—一七八五）等の面々が輩出した。然しその多くは風俗畫家であつて、風景畫と目すべきものは未だ成されなかつた。たゞ師宣に濫觴を開いた芝居畫、劇場の描出に、稍風景畫らしい手法を行ふものがあつた。劇場內部の描寫に於て卽ち土間と舞臺、棧敷等の關係に於て、稍後世の遠近法らしい手法が自然にあつた。（此頃既に此の手法を浮繪(うき)といふた。政信の橫繪に往々此の命題——浮繪根元——の物を見受ける。浮繪は、然し後代の豐春の大成に負ふ所多きは、謂ふ迄もない。）其後稍風景畫らしいもの丶一部の現出は、鈴木春信（一七二五—一七七〇）である。春信の畫は、無論美人が中心である。風景は副へ物に過ぎない。然しその中に自然と現はれた風景畫の手法は、彼の卓絕した手裡から案出せられてゐた。家屋の背後たる庭園、花木、屋外人物の小川、小山、丘陵、月雪の光り、雲のたゝずまひ、總てが彼一流の圖案的であるといふ譏りはあるにしても、既に

風景畫の先驅となすに足りるものがあつた。

江漢は、この師の春信の風を承けた、加ふるに直接蘭人から垂示せられた純紅毛畫の手法を以て、肉筆の風景畫、板畫の美人畫を製作した。

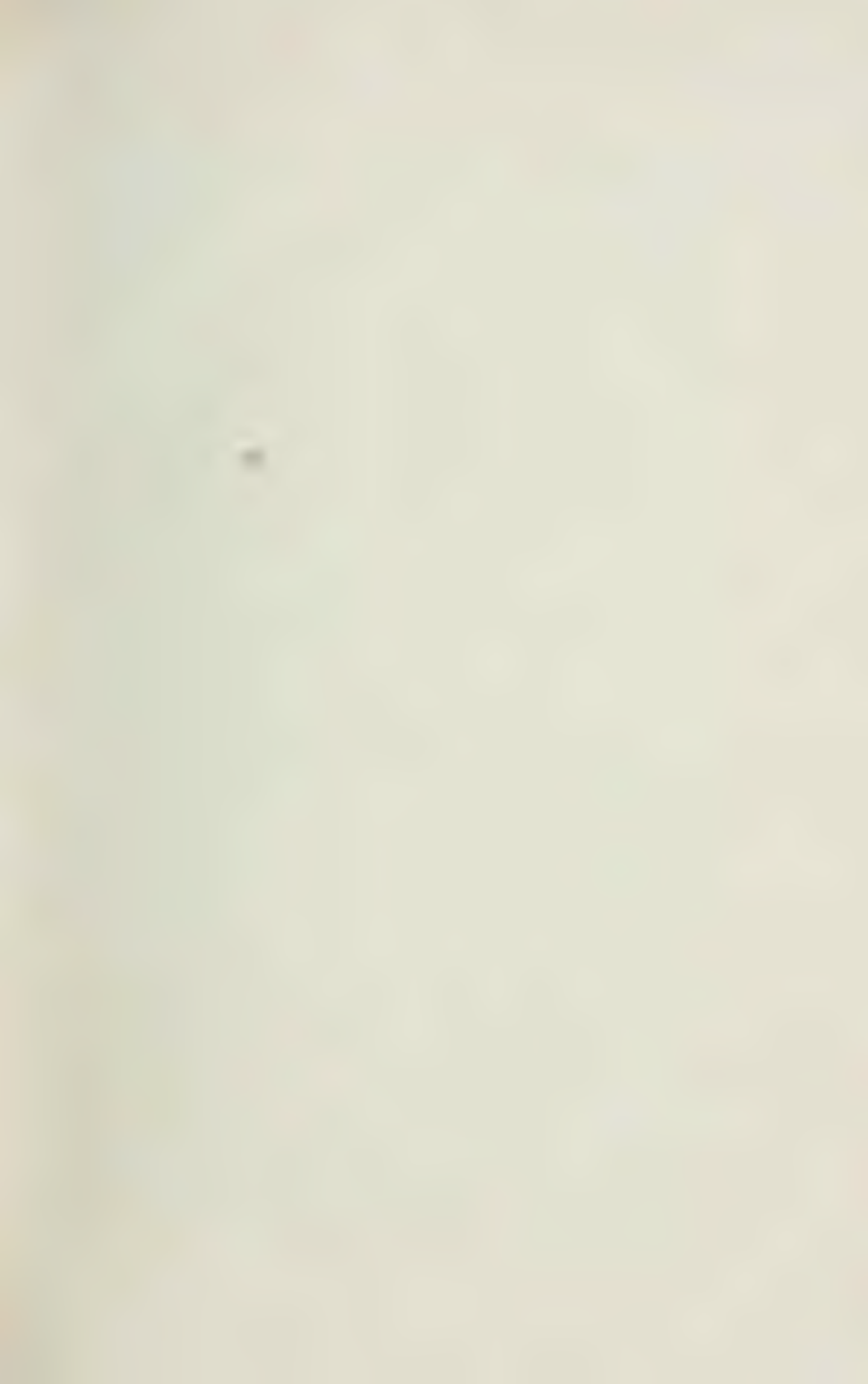
春信以後

江漢の如き純風景畫の試みは、然しその後暫く現れなかつた。以後の浮世繪は如何なる傾向であつたらう。矢張り風俗畫（主に美人畫）がその主位を占め、芝居畫が其二にゐた。磯田湖龍齋は春信を殆ど繼承した。勝川春章（一七二六―一七九二）は、役者畫と美人畫に終始した。東洲齋寫樂は、春章の役者似顏繪を更に寫實的に凡眼からは誇張と思はれる程の細微な表情に迄力を注ぎ、以てグロテスクな世界を創造した。

鳥居清長

鳥居清長（一七五二―一八一五）は、芝居の看板畫から轉じて、美人畫に偉作を多く殘した。然し清長に特に謂ふべきことは、春信、春重（江漢の前名）、湖龍齋の作に既に現はれた人物の背景たる自然の描寫、即ち斷片的な自然の一隅の描寫に於て益々正確に近づき、益々精緻なものがあつた。かの「江の島詣三枚續」の如きは、この意味から最も日本風景畫史上に記憶すべき作である。

歌麿

この風を承けて愈々大成に近からしめ加ふるにその本領たる美人の描寫に於て、古往今來獨歩の境地を拓いた、卽ち遊婦をして女神の境にまで脫胎せしめたと謂はれてゐる喜多川歌麿（一七五四―一八〇六）、次いで現はれた。歌麿は美人畫の美人の表現に於ては、モデル三分、觀念七分とも謂ふべき非寫實風な、美女の非現實な羅列ではあつたものゝ、花鳥樹木魚貝の類は、當時の作家としては稀に見る

寫實的な花鳥魚貝

細田榮之

重政と京傳

寫實的な畫家、自然を正しく明らかに見ようとした畫家であつた。この寫實的な花鳥魚貝の描寫は、後期の北齋、廣重等其他の群(むれ)に、或は刺戟を、或は感化を、或は粉本たらしめたことは疑ふまでもない。歌麿の次に、細田榮之（文政十二年歿、六十餘歳）がある。彼は浮世繪師中唯一の貴族出身（御勘定奉行細田丹後守三世の孫）であるから、從て其の美人畫にも高雅な匂が多かつた。然し庭園山水を背景としたものには、その自然の斷片は、歌麿の風を承けて、自然に忠實ならむとした傾がないでもなかつた。

尙、云ひ忘れたが、春章と同時に、北尾重政（一七四〇—一八二〇）があつた。彼は浮世繪史稀に見る師系不明の男である。その作畫は一枚畫の板畫尠く、繪本が多かつた。主題は、武者、美人、往く處として可ならざるはなかつた。風景らしきものもあつて、現に浮繪と命題した、政信風のものもある。かの有名な春章との合作である「青樓美人合姿鏡」の極彩色三冊の如きも、花卉翎毛の描寫は日本畫在來の傳格と多少異る閃があつた。山東京傳はその門下であり、畫名を北尾政演といふ。彼は多く戲作に於て名を成した。然し彼の自畫作に成る黄表紙挿繪類には、背景の自然が、遠近の均齊に於て、已に巧みなものがないでもない。

次いで現はれたのは、浮世繪後期の二大家とも謂ふべき歌川豐國と葛飾北齋である。

筆の進むに任せて書いて來たから、こゝでまた一寸後へ戻らねばならぬ。それは豐國の師たる豐春の

歌川豐春

浮繪

問題である。**歌川豐春**（一七三五—一八一四）の作品の一瞥である。豐國の師豐春は浮世繪の權威者としては、第二流以下である。然れどもその門下に、豐國其他の秀才を多く産んだことゝ、一は浮繪（うきゑ）なる別個の畫風とに於て、彼はまた史上有數な記錄を持つてゐる。豐春は決して浮繪の創始者ではない。然し世上然く目されてゐるだけ、それだけ彼に浮繪の創作が多かつたであらうことは、否む譯にいかない。浮繪とは何であらうか。浮繪は遠近法を最も幼稚に應用した透視畫風のものである。覗（のぞき）機關（からくり）に使用し始めてから、その需用が起つたのだといふ。而してその浮繪は豐春以前にもあり、しかもその命題が**奥村政信**の横繪に之を見ること已に述べた。然れば、寧ろ此の政信をこそ浮繪の創始者であるといふべきである。兎に角從來の人物畫世相畫の背景であつた自然の斷片が、こゝに多少纏まつた形を取つたものと思へばいゝ。その主題は、神社佛閣の雜踏、或は三十三間堂の的矢の類の如き比較的空間の廣い人事、その全幅の動作を取扱つたものである。一種の鳥瞰圖であつて、丁度今日にもある神社佛閣の諸緣起類の圖繪と類似してゐる。豐春は此の浮繪を多く描いた。浮繪とは空間にその景物が浮出する如く見たより名づけたものらしい。然しこの草創期の浮繪が江漢等の蘭風畫の手法と相俟つて後世簇出した浮世繪の風景畫家を啓發したことの多いことは言を俟たぬ。但し浮繪なる此の名稱は、豐春以後豐國及其門下の作に折々見受けられ、天保期、廣重の飛躍以來は餘り用ゐられなかつたやうである。偖、愈々豐國と北齋及び其の門下の話に移る。

国丸画
十返舎一九著

豐國及び其の門下

豐國(一七五五—一八二一)は、豐廣と同じく豐春の門人である。而も歌川派の巨頭として、秀才を輩出し、今日猶その傳統を殘してゐる點から見て、彼豐國は、獨り浮世繪史の樞要な地位を占めるのみならず、日本美術史上のまた特殊な抹殺し能はぬ頁を把持してゐる。然し豐國夫自身には、前期の春信、清長、歌麿等の如き世界的と許すに足る所の藝術上秀拔な特徴は、不幸彼には無かつた。彼は多才多能であつた。美人畫、役者繪、小說挿繪、繪本類、此等一枚繪繪本の種目は枚擧に遑ない程の多作を遺してゐるにも拘らず、彼の藝術の全力は一個に集中されなかつた。唯役者繪の風格に於て、春章寫樂の風を亟いで稍一層寫實的ならしめたといふ點に於て、彼の藝術的收果を目するに足るのみである。唯彼には門下に秀才を夥しく生んだ。前期の春章、歌麿等にありても門下に秀才はあつた。(例へば、春章門下の春英、春好、春潮等の如きまた錚々たる大家である。)然し豐國程の永い傳統を支ふるに足るだけの、門下無數を生まなかつた。豐國門下の尤物を列擧すると、一に國貞(これ後の三代豐國、今日現存せる殆ど多くの豐國畫は、この三代の作である。)國芳、國政等其一方に覇を唱へたものは尠くない。二代豐國(豐重と同人。豐國の養子、後素亭と號す)の如きも晩年振はなかつたものゝその遺作は、また佳作尠くはない。國虎、國安、國直等また彼の(初代豐國の)門下として他派の名

國貞國芳の門下

家に拮抗するに足る力作を殘してゐる。降つて國貞改メ三代豐國(一七八三—一八六四)の門下には、また初代にも勝る程の包容の大を示した。明治前半期に亙る國周(主に役者繪)の如きは、彼三代の門下

豐國一派の藝術

としては、最も傑出した大家である、其他中家小家の輩無數である。國芳（一七九六—一八六一）また門下の養成に力めた。卽ち芳虎、芳幾、芳年等があつて、芳年は水野年方を生み、年方は、現代の淸方（鏑木）故輝方（池田）等の新浮世繪を生んでゐる。（美人插繪畫家として現代畫家中、私の最も好愛する鰭崎英朋は、芳年門下右田年英の門人である。）

彼等の藝術を綜括すると、一に美人畫、二に芝居繪、三に風景畫、四に武者繪（戰爭歷史畫）である。國政は役者繪に於て、春章寫樂と雁行するに足る大作を殘してゐるし、二代豐國の如きも、美人畫と役者繪と少數の風景畫とに力作を殘してゐる。國直國安の美人畫及び人情本の挿繪、亦彼等一流のデカダン味が著しく、江戸末期の頽廢文華を漏すに適つてゐた。國貞は、田舍源氏の挿繪を出世作に、風俗畫、役者繪、武者繪、風景畫等多數の作を板畫及び繪本に殘してゐる。就中、彼の風俗畫及び三代豐國以後の夥多の役者繪、及び未曾有の板畫技巧を費した、五十以上の板木を使用した一枚繪の源氏繪の如きは、質の問題はさておき量に於て彼の名を銘記するに足りる。國虎は、北齋一派に似せて、特殊な紅毛風の風景畫を描いてゐる。國芳は役者繪に於ては失敗したが、武者繪美人畫に於て、彼一流の江戸前の匂高き豁達任狹の氣を見せて、男女の骨法、亦彼獨特の正確な寫實から來て、甲冑を帶せる者も、美衣を纏へる歌妓も均しく彼の油斷のならぬ西洋畫風の手法智識を傾注した。風景畫に於て、亦傑作多く、明暗遠近の工夫、北齋•英泉•廣重輩に對抗して、優に一地步を占めてゐる。その門

北齋と其の藝術

北溪、北壽、辰齋

下の芳年は、北齋の癖を併せ得て、愈々着實正確なる人體の描寫、風景の羅致に努めた。

次に葛飾派に一瞥を與へる。その祖北齋（一七六〇—一八四九）は人も知る有數の大家。歐米にありては、探幽應擧の名は知らなくとも、一個北齋（及び歌麿、及び廣重の名と共に）の名を知らざるはない程の世界的畫家である。彼は夥しい板畫、及び繪本（主に畫譜の名を以てした）、挿繪本を遺してゐるから、彼の藝術生活の檢討は、容易な業ではない。九十に垂んとして、猶未だ自己の手法に滿足しなかつた彼は、終生神人共に駭く程の全的努力を以て畫事に從つた。美人畫の上にも彼は、特殊な畫格を出してゐるし、また魚貝草木類の描寫に於ても一歩益々自然の堂奥に侵入してゐる。然し彼の名を成した者は、後世の吾人が以て彼の藝術上の最首位におくは、彼の風景畫である。彼の風景畫は、始めて風景畫らしい風景畫であつた。江漢に師事したとも謂はれてゐる彼は、蘭畫其他百般の在來の風景畫を參着し、換骨して自家の手法の開創に盡した。彼は初め春章の門人ではあつたが、後、自ら破門を求めて獨立の反旗を飜した。初期は、先輩を繼承した美人畫に筆を揮ひ、世評身世思ふ儘にならず、唐芥子賣や砂文字書きまでなして生活の波に弄ばれた。然し彼の不屈な魂は遂に彼一流の手法を生んだ。稍、苦澁、堅硬とも非難すべきではあるが、彼の人物風景は、傳統の總てを破却した、彼の眞骨頭を現すに足るものがあつた。彼の門下は亦た名人輩出した。北溪、北壽、辰齋は其の雄なるものであつて、而も彼等は、師北齋の如く獨創力に於て極めて富んでゐた。北溪は美人畫の製作もあるには

あつたが、根本は風景畫であつた。北壽は北溪に勝る風景畫の名手で、しかも北齋をも凌駕するに足る別個の純風景畫の收穫を殘してゐる。

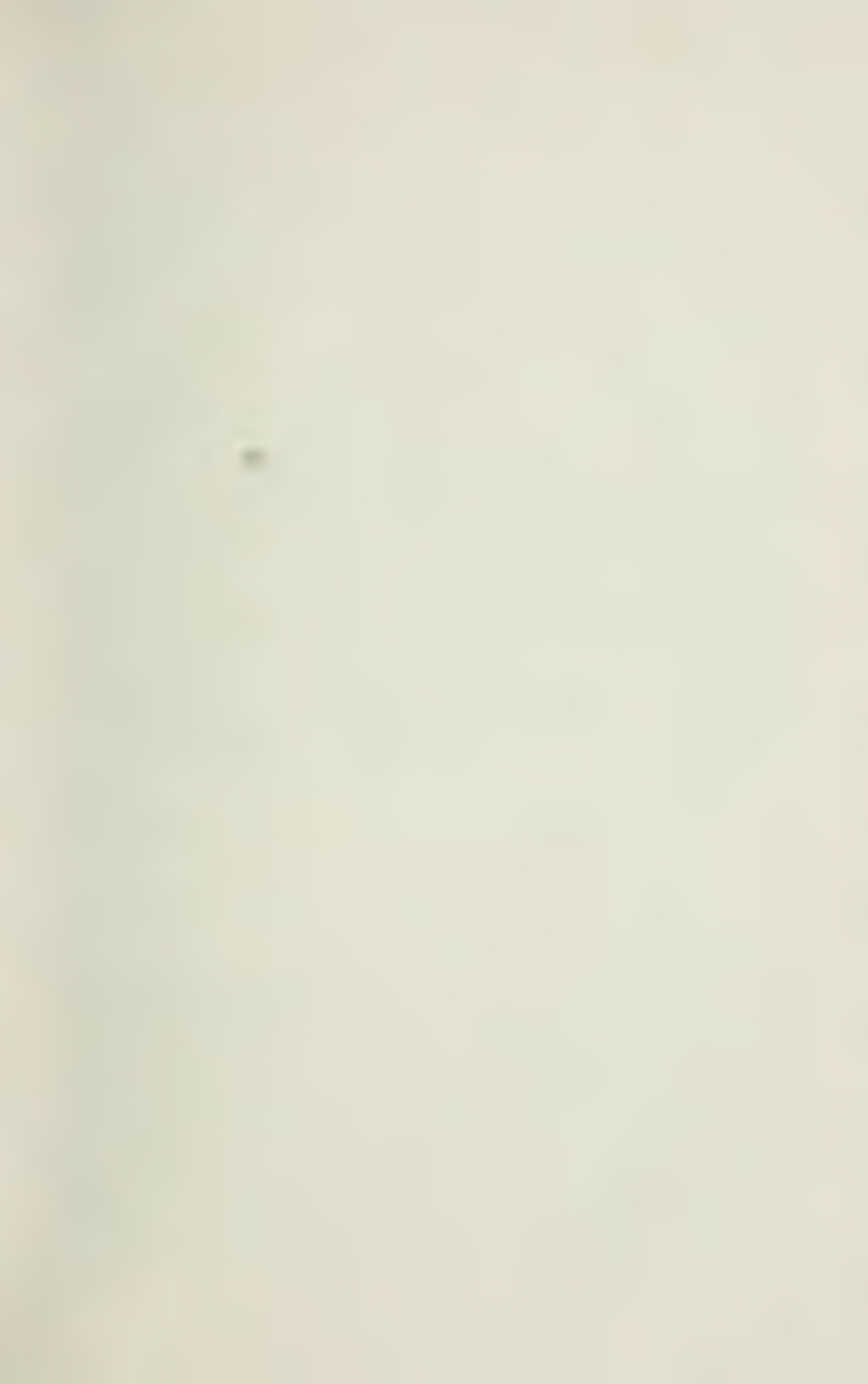
北壽の風景畫

北壽は、頗る偉才の畫家であつた。北齋の風景畫が未だ漢畫の手法を何處かに漂はしてゐるにひき換へて、彼は純たる歐風畫を開創した。光線のとり入れ、山の褶、雲のたゝずまひ、凡て歐風畫から招致して、而も獨特な日本板畫の妙味を失はなかつた。彼の雲は眞に空前の描寫であつた。むら〳〵と湧ける海濱、または丘上の白雲、その幾團々は、地紙の白を應用して如實に明るく描寫せられた。

空前の「雲」の描寫

カラ摺（無色の版木を用ゐて、物の模樣を地紙にきめ込むこと）を以てした雲の群は、彼に始めて見られた。後世の廣重、英泉等の風景畫家も試みなかつた雲の變化、幾種の描き分けは彼に始めて成された。師の北齋に於て、その發生は多少あるものゝ、彼の如く明るき雲、光る雲、幾樣雜多の雲を表せる板畫技巧を盡して描いたものはなかつた。廣重の雲は橫に穩やかに曳いた一刷毛二刷毛である。英泉、或は國芳等の雲も、同じく霞と見紛ふ雲の形である。而して北壽に特筆すべきことは、彼は晝間の描寫が最も多いことである。白日下の雲の壯大な峰の簇出！　それは彼の板畫にのみ獨り見られるのである。

却說、版畫の風景畫に於て、西洋畫の如く、額緣の如き感じを與へる紙幅の周圍に輪廓をとることは、北齋並に其門下の版畫にその多きを見、時として其の輪廓に、特殊の、唐草其他の圖案的趣向を

東都
御茶之水風景
昇亭北寿画

北齋及其の門下の異國趣味

凝らしたものをまで見受ける。北齋も頗る異國趣味の畫家であつたが、(例へば彼の風景畫に、畫題及落款を假名の横がきにして、恰も歐風文字の如くしたものもある。)彼北壽等は一層歐風趣味に感染してゐた。卽ち辰齋畫の「七里ケ濱」の風景畫は、周圍の輪廓は、黑地に白く、一種變體な羅馬字の繫ぎを以て飾られてゐる。却說、此の北齋、北壽、辰齋の歐風趣味、風景畫の新聲は、同期後期の新人に幾多の追隨者を將來した。

其の追隨者

歌川豐國派の國虎、國貞、國芳、二代豐國等皆風景畫を殘してゐるが、國虎の如きは最も北齋一派の感化著るしく、國貞は寧ろ廣重の感化、二代豐國はまた北齋と英泉とに何處やら相融通する風格を殘してゐる。然し國芳一個は夙に此等から脫胎して、北齋、北壽或は廣重等の純風景畫家に比肩するに足りる獨自風景畫の手法を殘してゐる。次は廣重の問題である。

廣重

安藤廣重(一七九七―一八五八)は豐廣(一七七三―一八二八)(豐春の門人であつて、美人繪張交繪小說挿繪等に相應な手[illegible]を持つてゐた。然し同門の豐國の盛名には及ばない。彼の誇りは、唯だ廣重の師たりと云ふに於て最大である。この門下であつて、彼こそ北齋と比肩する世界的風景畫家である。彼と雖も、その一生の作品繪本類、小說挿繪、狂歌本又は美人畫、武者繪、歷史繪の若干はあるものゝ、

廣重の藝術

彼が名を成し彼を代表するは、保永堂版等の「東海道五十三次」の風景續畫、及び無數の江戶名所、其他諸國の風景畫である。廣重の風景畫は人も知る所のものである。彼はその初期にありては、豐春式の浮繪を描いたり、英山英泉流の美人を描いたりしてゐたが、爾後十數年、果然保永堂版東海道五

十三次（天保五年、三十九歳の作）を振り出しに、彼は風景畫家として前代無比の盛名を已に時人から博するに至つた。然し嚴密に謂へば、この東海道に至る迄に、既に、彼には、幾多の東都名所江戸名所の類がある。若書きを尙ぶ骨董癖からでなく、彼の初期の江戸名所東都名所には、佳作少くない。殊に彼が一幽齋と落款せる東都名所十枚は、初期の傑作であらう。かの英國風景畫家ホイッスラーに感化を與へたりと謂はるゝ「兩國の宵月」の繪はこの一幽齋東都名所中の一枚である。其他佐野喜（出版元の名）板行の「東都名所」には、中期以後の作に比して寧ろ佳作に乏しくない。然し保永堂版の五十三次は、彼の盛名を一般に博した最初であつて、爾後、之に類似の東海道數種の製作、次いでは英泉との合作になる「岐蘇街道六十九次」の如き、彼は、順風に帆を孕ました大舶の概があつた。爾後最晩年の「名所江戸百景」に至る無數の風景畫は、彼が獨占場であつた。廣重の風景畫は、此の如く、彼の生時にありて既に時人の喝采を博したのである。丁度美人畫の歌麿が生時既に世人の渴仰を得てゐたが如く。

廣重の風景畫、その風致を一言以て謂へば、無韻の音樂である。色彩を以て成された最微妙なる詩である。音樂と詩！　彼の風景畫は、この言葉を以てその內容を表現することが出來るであらう。音樂とはその畫面にあらはれた、色彩描線の交々（こもごも）から來るスヰーム なる交響をいふのである。詩とは、その裡に無言の然し人の魂を把握する力强さを以て歌はれた畫家と自然と心胸相投影した刹那に生じた

北齋と廣重

讃歎の調べ、大自然が含んだ無邊涯の愛の心、無始無終の永遠性の偉大な壯美な悲哀に觸れた人の心の慄へ、戰きをいふのである。廣重は自然の前にひれ伏した。自然を征服しようとは思はなかつた。涙垂れつゝその無邊の慈悲、慈悲の極の盡涯なき哀愁に觸れて、うな垂れてゐる。北齋の風景畫はこれと正反對である。北齋は自然を征服しようとした。丁度近代科學の手によつて自然の雷鳴、雲雨を凡て人爲の下に奴隷たらしめようとした如く、彼は非凡な精力の溢れた氣魄を以て、自然を一喝して自家の脚下に慴伏せしめようとした。語を換ふれば北齋は自力門、廣重は他力門である。無論他力門徒の縋る阿彌陀の姿は、廣重が視たる取扱つた自然である。

米國の廣重熱は、甚大なるもの、眞に我國人の想像以上であるといふ。しかも彼愛好の主張者は彼土の婦人界が主であるといふ。歐米にありては女流が男性よりも藝術愛好の熱が高い。此類ではあらうけれど、廣重のその風景畫の全幅を流れつゝある優しみ、愛のかゞやきは、又以て彼土の女流と相感應し共鳴する度の深いからでもあらう。

池田英泉

廣重の他に廣重に些少の感化を與へ、別個風景畫の地位を保つ者に、池田英泉（一七九〇―一八四八）がある。英泉は、菊川英山（一七八七―一八六七）の一派、夙に美人畫家としては古への淸長歌麿に比肩するに足る技倆を有してゐた。彼の美人畫は、遊冶淫靡の極端なる描寫を以て、古往今來第一人者である。無數の靑樓美人は、彼を以て始めて人間らしい命を吹込まれてゐる。この美人畫の特徴の他に

彼は、風景畫に於ても秀抜な手腕を示してゐた。廣重との合作「岐蘇街道」の幾圖はそれである。その風景畫は廣重ほどの溫雅さはない。然し北齋の堅硬を稍軟化して、その摸倣の迹はあり乍らも、別個の風格を打出してゐる。丁度英泉は、北齋から廣重に及ぶ中間者であつて、廣重に對して間接的の感化多く、恰も助產婦の如き位置にある。

小林清親
井上安治

其他風景畫には、國芳の東都名所(初期)。二代豐國及び國貞、國虎。明治初期の小林清親、井上安治、月岡芳年(國芳の門人)の努力等あるけれども、頗雜に流れる嫌あれば茲に省く。唯國芳及びその傳統に、風景畫の佳作偶々多く、また明治の廣重ともいふべき小林清親にも問題にすることの多いことや、井上安治(清親の門人。安二と落款し、探景とも落款した。)には、好個の新東京畫ありて、浮世繪風景畫掉尾の收穫を齎してゐることとやを附記しておく。廣重は二代三代と明治に及んでゐるが、二代に稍佳作あり、其他は廣重の名を汚すものである。

五雲亭貞秀

最後に、國貞(三代豐國)門下にあつて、特殊な風景畫家が一人ある。それは、貞秀である。彼は、埋れた天才とも名づくべきで、(山崎直方氏などは熱心な彼崇拜者である。然し一般的には、今日聲價を有してゐない。)國貞門下としては、眞に異才である。彼は風景畫に於て廣重とはまた打つて變つた技倆風格を有してゐた。彼の號を五雲亭或は玉蘭齋といふ。然し彼の作は美人繪武者繪等なきにしも非れど、三枚續の純風景畫が彼の得意の壇場であつた。武者繪等の背景にも、彼獨特の大きな空間の

自然の描寫が見られる。國芳の武者繪にも見られぬでもないが、貞秀のはより多く自然の幅員が偉大である。卽ち貞秀は、武者の亂鬪は從、その月夜雨雪等の自然の描寫が主であるやうに見られる。「赤穗義士討入」の三枚續の如きはこれであつて、たゞ一個尨大なる雪の月夜を主題として、館の屋根を傳ひ行く義士の群は、微細に而かも如實な點景人物である。晩年の「相州大山參詣の圖」三枚續の如きは此風の大成であつて、彼の作畫は一般にいふと豐春以來の鳥瞰圖式の浮繪と廣重の風景畫と二者合して割つたやうなものである。極めて別格な風景畫の製作者として注目町るに足りる。

鳩溪、田善、雷州

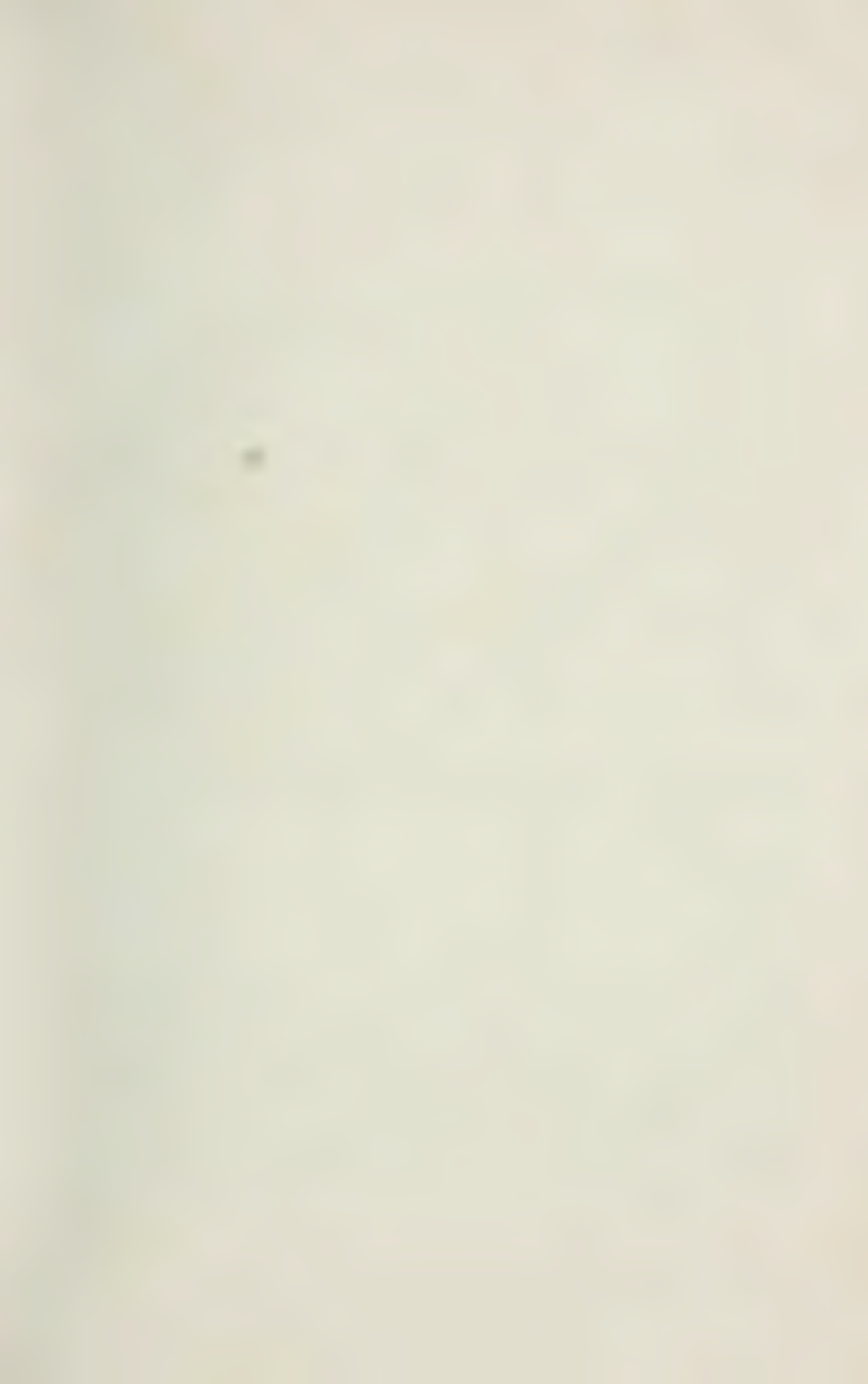
最後に。浮世繪風景畫については、如上の他、平賀鳩溪、江漢門下の亞歐堂田善、北齋の門人であつたといふ安田雷州等の銅版畫、並に長崎畫家の一派に對する考察も無論必要であるが、今は、暫く純浮世繪の傳統のみに止めておく。尙、廣重に就ては、本著別掲の、「廣重畫最初の東都名所」を參照せられたい。(大正九年九月)

房種の風景畫

房種の風景畫

房種の面白い風景畫を此頃手に入れた。房種とは、畫家の傳統からいふと、恐ろしく下級である。知る人がないかも知れぬ。初代國貞の門人に貞房があり、その貞房の門人に房種があるのである。房種は明治にも生きてゐて、予等の從來知る房種は、赤々した明治の風俗畫美人畫

を描いたもののみに所見が劃られてゐたが、これが今度一大驚異（房種としてはである）にぶつかつた。その明治以前、好個の風景畫を爲したものあるに於てである。それが予の最近蒐集の一。圖は、比良暮雪の一枚。近江八景の八枚物であるか否かを自分は知らない。年月も房種としては案外舊い。檢印は、改印と寅九の二個印である。即ち安政元年の九月である。まだ初代廣重も國芳も房種の祖父師匠なる國貞も三代豐國として盛んに榮えてゐた頃である。そんな頃に此の一個年少、眇たる彼が、廣重國芳らとは別個な好風景畫を爲してゐたことに驚かれる。圖は大錦横繪、比良の雪を被いだ峯が遠景にあり、前は漫々たる湖水、その間に五六の帆船が浮ぶ。それだけでは何の變てつもないが、特徴且つ此の畫を好印象派的に新味多からしめてゐるのは、湖水の水の部分に、斜に山もとから手前へ、二本著く太く引いた藍の線である。これが潮流の意味を表したのでもあらうが、とにかくこれが故意（わざ）とらしくもなく見え、その大膽さがまた婉曲に收まり、新鮮味を多量に持たしめてゐる。山と上緣との間の墨のボカシもよく利いてゐる。一刷毛二刷毛の雲も歸雁も、相應した器用さである。板元は森治である。房種であるだけ、我らの敬意と愛著とを一層增さしめた。彼の師の貞房は國貞門下では有數の好手である。これに培はれたせゐもあらうけれど。（大正十三年、五月補）

良
暮雪

安治について

最近、中央公論（大正十三年五月）に載つた小林哥津女史（清親の遺子）の「清親の追憶」は、面白き讀物であつた。明治初期の風景畫の輪廓も見えて、有益な資料でもある。內、井上安治に關する記事を要約すると、

「安治は、淸親を慕つて、往來した人。准門人であらう。安治、淺草並木町の細い露路に住んでゐた。若くして肺をやみ、ごく短命で死んだ。天才肌の男であつた。探景（安治）の畫は、細心で、淸親とはちがつた詩趣をもつた人。」云々。

尙、安治は、俗稱安次郎或は安二郎。畫名は安二とも落款したが、他に安はる畫といふのもある。從つて安治の讀みは、安はるが正しからう。明治二十二年九月十四日、二十餘歳にして歿した。云々（浮世繪の研究第十二、井上和雄氏の文に據る。）ともある。

——大正十三年十二月補——

廣重畫最初の『東都名所』

一幽齋がき

初代廣重の東都名所物の最初としては、普通に川口板の、例の「兩國の宵月」のある「東都名所」十枚、所謂一幽齋がきを以て汎く世間に傳へられてゐる。なる程、人の云ふが如く、この「東都名所」十枚には、却つて後期の江戸名所類の諸作を凌駕する程の色々な意味からの佳作に富んでゐる。草創期に屬する彼自身の東都名所物としては、實に不思議な程である。若描きを無暗に愛玩する一派の好尙癖とは内容を異にした、眞に佳作の集まりとして珍重に値せぬでもない。然しこれが果して彼の眞の第一聲であらうか。「東都名所」の眞の最初の產聲であらうか。彼はこれに至るまでに、習作の刻苦を積んでは來なかつたらうか。恐らく一旦にして此等の佳作が產れはしなかつたであらう。一幽齋がきのこれは、文政十二年頃の作である。その文政末に及ぶ以前、彼は、「東都名所」に嘗て筆を染めたことがなかつたらうか。私は、時々この疑問を抱いてゐた。

疑問

それが、最近解けた。矢張り川口板の前提、最初の習作があつたのである。廣重の藝術そのものとしては、勿論習作期の作品であるから、價値はないのであるが、翻つて彼廣重の永い藝術史、あの偉大な風景畫家（東都名所のみの問題でなく）の藝術的生活の永い過程の第一步としては、特に記述を

類はすだけのものがあると信ずる。人も知る、彼の東都名所類は、彼の風景畫作品史の第一頁、しかも私が以上謂はんとするは、則ちその東都名所の眞に最初、卽ちこは、彼の全風景畫の先驅、眞に偉大な風景畫家の呱々の聲、生れむとする惱みであつたのである。

「東都名所拾景」

それは、永壽堂板の「東都名所十景」である。二ツ切中判竪繪のものである。嘗て廣重年忌展覧會目錄第十九に、此中一枚の記入があつた。東都名所十景として、深川新地、執行氏の所藏に屬するものであつた。私は、該目錄の作成者が、これを一幽齋がきの次に揭げた所より推して一幽齋がき卽ち川口板の以後の作と見倣してゐた。恐らく大多數の人は、この第十九の名所十景に何等の注目がなかつたであらう それに目錄中寫眞版登載にもこれは抹殺されてゐる。で私も、最近實物を一見するに至るまでは、この僅かな一枚の記入に、大した注意を喚ばなかつた。然るに何故この名所十景が、從來抹殺されてゐたか、如何なれば嘗て何人からもこの十景に關する問題を敎へられなかつたのか。それが不思議と思はれる程、私はこの十景を見るに及んで、色々な興味を惹かされた。

習作時代の唯一

殊にそれが久しく疑問にしてゐた川口板の東都名所に至る準備、習作時代の唯一遺品であると感じたからである。

東都名所十景は、私の見た範圍は、五枚である。眞乳山、袖ケ浦、兩國、道灌山、深川新地(これのみ、年忌目錄に記入だけあることは、前にも云うた。)の五枚である。十景とあるからは、多分十枚完備で、

なほ他の未知の五圖がある筈である。五枚の智識から云々するのは、幾分烏滸がましさを感じないでもないが、從來嘗て說かれなかつたこと、依而敢て以下の解說に及ばう。

落款

落款は、彼の最初期の美人畫の少數に見受けると殆ど同じ硬い楷書に近い書體である。拙著の「增補浮世繪の印象」中の寫眞版「美人赴莚圖」(大錦竪)の落款と殆ど同じく、また有名な初期の美人畫「外と內姿八景」の落款にも幾分似てゐる。文政年間の作たるは勿論であるが、「外と內姿八景」がフェノロサ氏說の文政三年作(橋口氏は文政五年頃といふ)とすると、これもその前後の作ではなからうか。殊に「外と內姿八景」と相同じく永壽堂の板行である。川口板の東都名所が文政十二年(或は文政十一年頃か)とすれば、この永壽堂の東都名所十景との年代の距離、これを文政三年頃とすると、約十歲の年月である。橋口氏說に從つて、「外と內」を文政五年とし、川口板東都名所を文政十二年頃としても約七八歲の距離がある。とに角川口板を生むに、最少程度七八年の習作期があつたことは、この十景と川口板と對照すれば、肯かれる事實であらう。

浮繪風

東都名所十景は、私の實見の五枚では、極めて拙劣である。恐らくこれを見た何人も、彼廣重の名を恥づかしめるものと謂ふであらう。否恐らく廣重畫の落款ありと氣づかず、浮繪の豐春あたりの摸倣の拙な、無名作家の眇たる作品といふかも知れない。見た感じから云へば、寧ろ「外と內」よりも舊きかと思はれる程である。「外と內」には、既に、彼の美人畫として、風景畫とはまた異つた彼獨特

な幽婉な情趣を滿たしてゐる。駈け出しの作家とは思へない。廣重に寧ろ美人畫家としても立派な素質や技倆のあつたことを證據立てゝゐる。それに引替へ、この東都十景の拙なさは、落款の書體の標證なくんば、「外と內」とは數十歩離れた幼穉な、寧ろそれより以前の作品と見做して了ふかも知れない。況してこれが如何に贔屓目に見ても、浮繪の傳統をその儘受け入れたといふより外に特色がないに於てをやである。

十景の中上揭五枚の印象は、單に浮繪式といふより外にない。代赭と綠とが基調になつて、遠近の關係、水平線と手前の岸の人家、立木、總て草創期の風景畫たるを裏切らぬものである。堅繪、右上隅に、丸形の圍みがあつて、それに東都名所拾景、兩國、或は道灌山と、命題が入つてゐる。上部に狂歌風のものが、いかにも碎けた書體で、躍つたやうな形で、稍畫面の大きさに相應して大き過ぎる程の文字で、一首宛が書かれてある。

（兩　國）　兩國のはしは龜より鱣より風に扇をはなしさうなり

（袖ケ浦）　さほひめの花の便りか御殿山、さくらもてゆく袖ケ浦風

（道灌山）　道灌の城跡たえていまはたゞ鳥のみふせぐ畑の繩ばり

（眞乳山）　をさな子も遊びあきてや待乳山、また姥が池尋ねてぞ見ん

（深川新地）　深川やこゝも新地をつき出しの海手にめだつ茶やの見通し

「東都名所拾景」の内深川新地　　廣重畫

「新選武者揃」の一部　　廣重畫

以上の狂歌が掲げられて、餘りこれらの狂歌の提示する意味と直接交渉の乏しいやうな、平凡な、單に浮繪風の風景が描出されてある。線も浮繪風に、直線的で、人物もたゞ形ばかりの細かく、兩國なども、兩國の橋はあるが、名所案内體になり終つてゐる。全體は頗る豐春の浮繪式であるが、樹木の描法、殊に枝葉は、甚だ北壽の手法に似てゐる。或は北壽に學んだとは、ここらあたりから、斷言が出來はしまひか。

廣重の有名なる風景畫には、大抵その作品の準備としての習作があつた。保永堂板、東海道の先驅としては、山清板東海道（大錦竪二ッ切、横の細繪。「錦繪」十號の石井氏の說に據る。）があつた。近江八景にも泉市板近江八景（四ッ切横繪。）があつた。果然、東都名所にも、從來先驅と傳へられた川口板よりも、より以前に眞の先驅として此の永壽

一立齋に轉じた年月

堂の「東都名所拾景」があつたのである。（廣重の、一幽齋から一立齋に轉じた月日が明確でない。唯師の豐廣歿後〔豐廣は文政十一年五月、五十六歳歿說を取る〕師號の一柳齋を直接嗣がず一立齋と改めたといふ從來の說に從つて、若し歿後直ちに改めたとすれば、川口板は一幽齋がきであるから、尠くとも文政十一年五月以前の作である。然すると、東都名所拾景との年代距離が愈々近くなる。即ち此から彼への飛躍が益々滑稽になる。東都名所拾景、或は「外と內姿八景」よりも以前の作ではなからうか。）

久彌曰く。予の「廣重畫最初の東都名所」は暫らく以上を以て打切とする。讀者に實證を示す爲「東都名所拾景」の中の深川新地の一圖を掲載しておいた。その如何に浮繪の摸倣であるかを見られたい。色彩は、草と代赭である。彼晩年の得意の藍の色は、まだ發明されてゐなかつた。

「新選武者揃」

別に掲載した「新選武者揃」の內は、落款から推せば、丁度此の「名所拾景」前後の作である。家藏に二枚ある。內の一枚その一部を載せておく。（大錦、横繪三段。十數の武者を描く）此の武者繪と、あの風景畫。まだしも彼は美人畫家として、「外と內姿八景」の逸品を有した。若し彼に藝術の敵として英泉、國貞輩の美人畫家なかりせば、彼は此の「外と內」の傾向を大成して行つたかも知れぬ。武者繪にも、國芳の大家があつた。從つて彼は「外と內」の秀作も顧みなかつた、況して「新選武者揃」の如きは。到頭比較的不得手な東都名所拾景類の完成、一筋の道を自分で發かうと苦んだのである。藝術產みの機緣、げに不思議ではないか。

——大正十二年五月——

廣重の立齋に就て

「魚づくし」の前期物

廣重の立齋と稱した時期に就て、私は、『倭文庫』外題袋の落款によつて、嘉永三年か、でなくば弘化五年から嘉永三年の間、この二年ばかりの間であらうと嘗て云つた。（後掲、「浮世繪漫錄」の四參照）しかし此頃、それを更に否定すべく、或る有力な發見を得た。これは大方の諸君の中には、夙にお氣づきの方もあらうかも知れぬ。が誌上には、未だ一度も現れぬやうであるから、こゝに若干の餘白を借りて、淺見を述べて見ようと思ふ。

初代廣重に、魚盡しのあることは誰れも知つてゐよう。而してこれが大判橫繪、二種あることも周知の事實であらう。卽ち一種は、永壽堂の板にて、天保四五年の作。（『廣重年忌目錄』による）他の一種は山庄板にて、天保十年頃である。（同上）この二種の中、前期の天保四五年板と稱する魚づくし十枚の中、二枚まで明かに立齋の肩書のある署名が見らるゝことである。その二枚は「黑鯛と小鯛」の一枚「笠子と鷄魚」の一枚である。一枚ぎりであれば、或は、彫師が、一の字を脫落したとも思はれようが、二枚まで存在することは、その頃既に彼が立齋を自稱した證據である。これに據つて、私の弘化の末から嘉永三年頃といふ立齋說は、更に遡つて、この天保四五年に變更されねばならぬ。

一立齋を併用す

『草筆畫譜』

しかし、この頃は、一立齋をも併用してゐたことを認めねばならぬ。現にこの魚づくし（天保四五年板）にも、他の八枚は一立齋とある。時に一立齋と稱し、また時に立齋と簡稱したものであらう。さうしてこの天保四五年の魚づくし二枚に亞いで、再び立齋と現れたのは、天保五年から數へて十四年目の『繪本草筆畫譜』である。これは外題にも、ありく\と『立齋草筆畫譜』とある。この『草筆畫譜』は、初編は嘉永元年、二編は同三年、三編は同五年の刊行である。さうして、初編は、種員が序を書いてゐるが、その序文中、（本の一枚目の裏一行目）に、立先生とある。また卷尾には、立齋の判が判然捺されてある。二編は、三馬が序を書いてゐるが、その序の中（二枚目の表に）に、立齋一家の畫則云々といふ文字がある。して見ると、魚づくしの天保四五年が若し板行年代が誤りで、それより後期のものといふことになつて、立齋の天保四五年說が破れるにしても、この『草筆畫譜』からいつて、立齋（たとひ他に一立齋を併用はしても）と稱した最初は、嘉永元年たることは、もう動かすことの出來ぬ確定事實であらうと思ふ。さうして、嘉永元年後、自らも立齋と稱し、他も立齋と認めるやうになつても、まだ賣りひろめた一立齋の名が多少殘つてゐて、自分も時にはこの舊の一立齋を落款にも詞にも使用したことであらうし、また他も時には昔ながらの一立齋を以て彼を呼んだものがあつたであらうと思ふ。それは、『草筆畫譜』三編の序を南仙笑楚滿人が書いてゐるが、其文中に、偶々「一立齋云々」とあるによつても想像される。

魚づくしの後期（天保十年頃の板）のには、立齋とも一立齋とも肩になく、唯だ廣重の名のみで、判（はん）は一立齋と讀める。さて、一體いかなる仔細で彼が、この天保四五年あたりから、或は一立齋、或は立齋と稱し、嘉永年間からは立齋とのみ稱するやうになつたかといふに、惟ふに、聲名の愈々高まるにつけ、一立齋では多少昔ながらの少家時代の臭みがある。寧ろ立齋のどこともなく落ちついて大家ぶつた名の方が、その頃の彼の多少矜持を感じつゝあつた心持にぴつたり適つたからであらう。或は、立齋の方が、一立齋といふより語呂（ごろ）もよく、從つて呼びいゝといふ點にあつたかも知れぬ。

（大正七年十一月稿）

一、極め印の使用期に就て

極め印使用期の新説

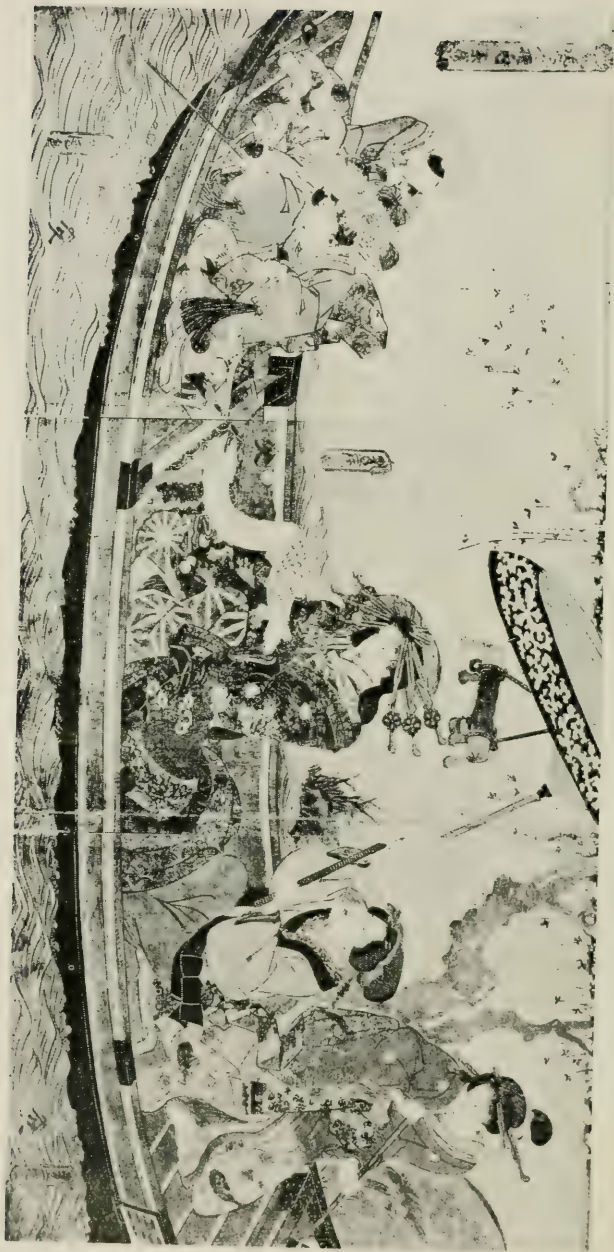
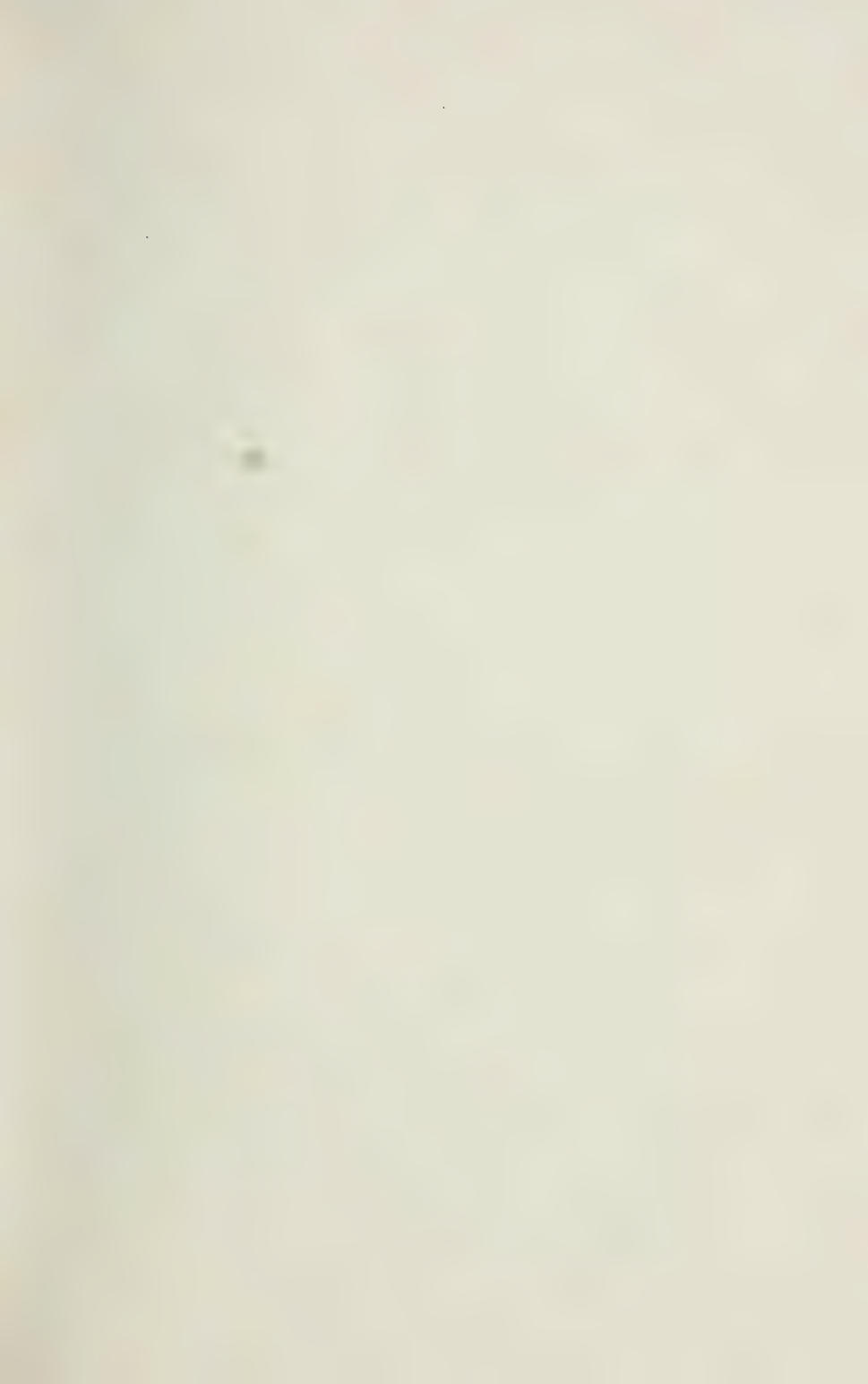
三代豐國の

浮世繪漫録

一、極め印の使用期に就て

極印の使用期は、從來諸家の研究に依つて、大凡そ天保十三年半までと漠然と定められてゐた。而も之が殆ど確定した事實の如く稱へられてゐた。それが最近に至り。卽ち本誌（「浮世繪」）第三十五號、井上和雄氏の「檢印考」（中）及び同第三十六號、石井研堂氏の「檢印考」（中）の疑問、などの諸研究に依つて、天保十三年半以前の舊說が破られ、玆に天保十五年初期までの新說が成立たうとしてゐる。浮世繪の鑑賞上、その第一の要義たるべきこの種檢印考が、如斯く諸氏の新研究により、着々その眞相を闡かにするに至るのは、浮世繪蒐集者に對し誠に第一の福音であると謂はねばならぬ。就ては、私の如きは、迚も如上の諸氏に伍して、考證を銜ふべき勇氣もない程のものであるが、唯、前上二氏の說、就中この極め印使用期に就て、なほ之を裏書すべき――するに足りようと思ふことを、この頃家藏の中から發見したから、聊かそれに就て言辭を費したいと思ふ。

それは、家藏の「風流六花選ノ內、絲櫻」（三代豐國）なる三枚續である。不幸、六花選の內、この

「風流六花選の内」

絲櫻のみで、他の五圖にも、これと同じ檢印があるかどうかは斷定出來ないが、この絲櫻は、紛れもなく極め印である。圖の大體をいふと、船中太夫遊覽の圖ともいふべきもの。三枚の全部に亘り、船が細長く描かれ、中央の一枚は、太夫がをり、牡丹、菖蒲などの花の意匠を組んだ裲襠（うちかけ）を着て、形（かた）の如き櫛笄の重げな頭を稍俯（うつ）むけて、兩手に文を持ち、視線は、その文字を辿つてゐる。左の膝を立て、その衣は麻の葉繋ぎの赤い大きな模樣。帶が前にだらりと垂れ、珠を抓んだ龍の爪が蟠つてゐる。右の一枚は、鴇母（やりて）とも思はるゝ年增女が、傘を太夫にさしかけてゐ、その右果てには、新造が一人、棹をあやつつてゐる。その新造の力を柔らかく入れた腰あたりが、しとやかに屈まり、後の同じ三代豐國や他の彼の末派などの手法とは全く違つた、それよりは上品な、穩やかな褄のひらき。左の一枚は羽子板や鞠や凧や突羽根などの混りあつた模樣を着た一對の禿がゐる。一人は、水の中へ落した盃、――赤の大きい――を竹の先で搔き寄せようとしてゐる。三枚に亘つて、船の下は、穩やかな大きな波の線、その色は濃い藍である。上には、一面に外題の絲櫻が垂れ、その細かな花びらは、うすい水色の背景から白く拔かれてゐる。中央、太夫の頭上の大傘には、細長い男枕やうのもの、鈴をつけたのが、吊下げられてゐる。ある江戸通の人に聞けば、この枕やうのものは、實は一種の禁厭（まじなひ）の具で、男の性器を象（かたど）つたもの、嫖客萬來の意味であるさうな。それは但し問題以外。この大凡その說明でも略々類ひ知れたであらうと思ふが、この圖は、後の豐國に見る如きけばけばしいあくどい色彩や、亂

弘化二三年頃か

雜な背景や、無理な人物の配合などがしてない。背景の一面ベタ摺のうすい水色も、おつとりした氣分を與へるのに、非常に有效に働いてゐる。絲櫻の枝垂れた枝の筆使ひも、若々しい力あるものである。三代豐國としては、先づ上乘のものと思はるる。その板元は山久、さうして、落款の工合をいふと、襲名當時のものとは思はれぬやうなものである。それは、後に殆ど慣用した年の字の圍みの長方形、その中に豐國畫の署名がある。一陽齋とも香蝶樓とも何ともない。そして、その落款の部分だけ別の色が使つてある。家藏の中で、このやうな圍みの落款の現れて來るのは、この三枚續の外には役人名検印二個時代（嘉永年間）のものに、てりふり町ゑびすや板の狐忠信の似顏繪がある。その以前の役人名一個時代（弘化年間）のものは、大抵、簡素な、地の色の上に署名したものか、又は、署名の畫の字の下に、年の玉印を捺したもののみである。然し他に、この弘化年間に、既に、この圍みの落款が現れてゐるのがあるかも知れない。從つてこれは、何とも斷言は出來ないが、落款の字體、格好からいふと、嘉永年間のものと同一である。

隨分冗々と述べて來たが、要するに、私は、この三枚續は彼の襲名當時（天保十五年正月）のものと見るよりは、それ以後暫らく經つてからの作のやうな氣がする。然し繪にあらはれた筆力さては配色の工合は、嘉永以後のものよりは、餘程若々しく而もすつきりとしてゐる。で私の臆斷からいふと、弘化二三年あたりのものではなからうか。若しさうとすると、極め印の使用期が、更に延長されて來

る。而してこゝに、山久（この繪の板元）側から調べて見ると、『書賈集覧』（井上和雄氏編）では、山久事、山本平吉（榮久堂）は、文政——天保をその營業期に見られてゐる。然し山久には嘉永年間の板畫（後出「白ヌキの改印に就て」參照）もあるから、此の井上氏の天保は寧ろ嘉永とすべきである。板元の問題はさて措いて、單に强いてこの豐國畫を天保に局限するとして、であつてもなほ、天保の最後は、同十五年十二月（十二月十三日に弘化と改元）であるから、此極め印付の豐國畫を同十五年の末に山久で出板されたものとしても敢て不思議ではなからう。しかしこれ等は、餘りに、漠然たる事實を根柢にした推定であるから、確たることではなからうが。兎に角國貞改め二代豐國（石井研堂氏の說參照）とも別に斷つてはないから、それにこの年の字の細長の圍みの落款體が、既に天保十五年正月の師匠名襲名當時及び間もなくの彼の板畫に之有ることが證明されない限り、この堂々たる一家氣どりの落款から考へて、もう餘程世間から豐國の襲名を認められてからのものであらうと思ふ。して見ると、この極め印は、天保十五年以後、尙兩三年が間まで、役人名一個の檢印と共に併用されてゐはしなかつたか。何だか餘り臆說めいてはゐるが、暫らく記して、江湖の高見を待つ。

或は、何かの出板元の都合上、以前に檢閲を經てあつたものが、この時になつて漸く出板された。從つて檢印は極め印のまゝであるとの說が出ぬとも限らぬ。然し從來の天保十三年半までの極印使用の說より推すと、假令この三枚續が襲名當時の出板としても、その間約二ケ年の日月がある。これ

は、出板の停滯としては餘りに長すぎる。從つて、この弘化二三年頃までの議論は、或は反證あつて破らるゝにしても、少くとも襲名當時、卽ち天保十五年正月前後までは、この極め印が用ひられて居たことは、斷定してもよからうと思ふ。卽ち尙且つ、井上氏石井氏諸先輩の極め印使用期を天保十五年初期に劃されたのに對して、この私の議論が、多少の裏書を爲してゐようと思ふ。

二、白ヌキの改め印に就て

二、白ヌキの改め印に就て

『浮世繪』第三十七號、井上和雄氏の檢印考下の文中に、白ヌキの改め印發見に就て說かれてゐる。此頃私も、ふとこの白ヌキ改印（十五頁上の改印**1**）ある者を家藏に發見した。それは井上氏實見のものと同じ濱及び馬込の役人印があり、その下に、この改印が押捺してある。繪は、同じく三代豐國のもので、阿古屋琴責の三枚續である。

「阿古屋の琴責」

右に岩永、太刀を持つて極めて誇張的な赫ら顏で力味返り、（その太刀の長さは頗る岩永の性格を躍動せしめてゐる。）中央の一枚には、重忠が立つて、扇子で岩永を支へ、左一枚には阿古屋が、嬌笑を帶び、岩永のたけり工合からは寧ろ傲慢とも見らるゝ顏で、左膝を立て、制裁と仲裁の二者を仰ぎ見てゐる。（此の繪の右一枚の岩永、大正十一年三月の雜誌「國粹」の口繪に出づ。白ヌキの改印もあり。）板元は、山久。さうしてこの變體の改印は、三枚全部に押されてある。

果して嘉永二年か

これが果して嘉永二年（井上氏はこの印をこの年に推定して居られる。）の似顏繪であるかどうかは分らないが、落款の

香蝶樓とあり、玉印のある工合から見ると、その當時のものらしく思はれる。この似顔繪が何年何月と分れば、井上氏の推定に、多少の蛇足を添へうることにならうと思ふ、

三、二代國政に就ての疑問

二代國貞說

三、二代國政に就ての疑問

二代國政のことなど、彼等末輩を云々するのは、この『浮世繪』の貴重な紙面を冒瀆するやうなことかも知れないが、一は私の深い疑問でもあり、また彼にしたとしても、江戸文華の大局の上から見ると、多少の寄與は盡して居ようと思ふから、此に暫らくこれに就いて述べさして頂きたい。

二代國政といふのは、一體誰れをいふのか。これに伴つて起る疑問は、二代國貞（梅蝶樓國政の改名。三代豐國の長女の婿。）のことをいふのか。それとも他に二代國政なるものがあつたのかといふ疑問である。黑田源次氏は、二世國政を二代國貞の前名と認めて、即ち二代國政は、二代國貞と同一人物と見られてゐるらしい。それは、本誌前々號の歌川國政に就て（上）の文中、左の數行。

二代國政は、此圖の成つた文政六年に始めて生れ、豐國先生瘞筆碑の建立せられた文政十一年にも僅かに六歳であつて、國貞社中にも共名を列することの出來ない程の後進であるからである。

（三頁上より下）

に依つて見ると、二代國政は、國貞門人、さうして文政六年に生れ云々から、二代國貞と同人物の

意味であらうと想像される。何となれば、三世豐國の墓碑によつて、二代國貞（四世豐國）が明治十三年死亡のことを知り、（『浮世繪』第十三號三十四頁參照。）また彼の享年が五十八歳であるとするならば、〔『浮世繪の諸派』（原榮氏著）などにより。〕明治十年から遡つて算へると、丁度文政六年は、この二代國貞の出生の年に該當する。從つて黑田氏は、二世國政は、二代國貞なりと認めて居らるゝ側の人である。

別人說の一

然るに、二代國貞は、三代國政なりとするの說がある。それは、先づ第一、直接二代國貞の門人であり、三代國貞を名乘つた梅堂豐齋翁によつて、師の二代國貞を三世國政云々と明言されてゐる事實である。（本誌〔浮世繪〕第一號、二十七頁、「役者繪の順序」なる文の冒頭。）而して現に豐齋翁は、四世國政から三世香蝶樓國貞になりましたと云はれてゐる。卽ち翁は、師を三代國政と認め、二代とは稱してゐない。直接その門人たる翁のことであるから、師の三世國政云々も、餘程確かな根據あることであらう。

別人說の二

他に二代國貞を三代國政と稱してゐるのは、『浮世繪師便覽』（故飯島虛心氏）である。その國貞の項で見ると、明かに三代國政を二代國貞としてゐる。關根氏の『浮世畫人傳』下の初代國貞の系圖では、二世國貞の門下に三世と肩に署して國政とある。さうして、その國政なる文字の直下に、梅堂俗稱竹內榮久とある。但し、この梅堂云々は豐齋翁のことを指すのではなく、榮久は、宗久の誤りで、『便覽』のいふが如く二世國貞そのものであらうと思ふ。而してこの『畫人傳』に三世とあるのは、これは、國貞（初代）より數へて、直系の三代の意味であらう。さうしてその是に國政とあるのは、梅

堂國政、卽ち豐齋翁のことであらうと思ふ。卽ち『畫人傳』は、二代國貞も豐齋翁も梅堂であるから、この二者を混同したものであらうと思ふ。

二代國貞説の二

然るに、なほ茲に一つ黒田氏と同じく二世國貞を二世國政といふのがある。それは、本誌〔浮世繪〕十三號の、荘逸樓氏である。卽ち氏の該號三世豐國なる文中、門人二世一壽齋國政後國貞を襲ひ、四世豐國となる。竹內氏也（同三十四頁の下）とあるのを見ると、二世國政は二世國貞である。然るに、井上和雄氏は、此等と反對に、便覽などの如く、二代國貞を三世國政と見られてゐるらしい。それは、本誌〔浮世繪〕第二十八號の三代豐國の肖像なる文中、國政（三代）、竹內、名は宗久、云々とあるのでも分る。（同誌二十七頁の下）此等を互ひに檢索して來ると、二世國貞は、二世國政なりや、或は三世國政なりや。二世國政なるものは誰かといふ疑問が起らずにはゐられぬ。（彼等の如き末輩に、斯うした疑問で苦しむのは、誠につまらないことではあらうが。）

「便覽」の二世國政

然るに、茲に唯一つ、二世國政を慥かに二世國貞とは別人として取扱ひ、而も二世國政に就て稍委しい説明をしたものがある。それは前にも引いた『便覽』である。卽ち其第二の國政の見出しの下に、

國政　歌川、〇一世豐國門人、二世國政、長文齋と號す。山下氏、俗稱勇藏。錦畫、〇天保

とある。この書き方は、餘程確實な形であるから、この二世國政なるものを、輕々に沒視することは出來まいと思ふ。然し不思議なことは、私の寡聞かは知らぬが、長文齋とか、山下氏とか凡て此等

のことは、殆ど他書、或は從來の他の諸家の說かぬ點である。が『便覽』の飯島氏は、この『便覽』なども、實地、錦畫そのものを材料にして編纂されたといふから、一反證とするに足りるとは思ふ。若しこの『便覽』所載の二世國政なるものが眞なりとすると、本誌前々號の黑田源次氏の初代國政の研究にも、多少の疑問が生じて來る。卽ち氏の團十郎の暫（しばらく）の圖に就て、その國政を初代とし、文政六年とせられ、文政の末頃まで彼の存在を認めてゐらるるやうであるが、若し然りとすると、この『便覽』の二世國政の天保とあるのに牴觸して來る。卽ち文政六年から天保までは、僅か六七年のことである。この間に、國政と署名した多少有力な畫家が、いかに初代豐國の門下が多士濟々であつたとはいへ、二名まで輩出しようとは、多少如何はしい。それに、初代豐國の死は文政八年であるから、この二世國政（便覽の）は、それ以前に入門の筈。さうすると、殆ど一二年の間に、同名異人の國政が二名あつたことになる。然し他から考へると、この二代國政なるものは、豐國在世中は他の名でゐて、その死後擅（ほしいまゝ）に兄弟子の國政の名を襲いだとも見られる。然しこれも疑問である。而してまた後の二代國貞卽ち國貞門下の國政が、國政と稱したのは、遲くとも弘化三年頃（草雙紙倭文庫第四編の上——弘化三年春版——に、表紙の裏繪を、國政が畫き、國政畫と落款が見えてゐるから。）であるから、（時に、國貞門下のこの國政二十四歲）『便覽』の二世國政が、謂ふが如く天保年間とするならば、天保後僅か二三年のこの弘化三年に、既に國貞門下にこの國政があつて、その名を稱してゐるのも、稍可笑しい。すると二世

國政なるもの、(『便覧』のものがあつたとして)は、一世豐國にも就き、三代豐國にも就き、その名をまた年少の梅蝶樓(二代國貞)に讓つたのではなからうか。然し此等の議論は、臆測を重ねたもの、皆私としては疑問である。卽ち『便覧』の二世國政説は、黑田氏の初代國政の文政説を稍打消す氣味がある。かと思ふと、梅蝶樓國政が弘化三年頃(無論、それよりは以前、卽ち師の國貞當時に入門し、此の名を名乘つたと見るべきである。)に已に存在してゐたことから推すと、便覧の二世國政も曖昧になつて來る。
兎に角、この國政なる名跡は、餘程世間から、また畫師からも、價値高く見られてゐたに違ひない。さて如上の私の二世國政に對する疑問、誠に下らぬ詮索ではあらうが、若しこの『便覧』の二世國政を打消す議論が何方かにあつたならば、二世國政の正體が知れてゐるならば、敎へて頂きたいと思ふ。

四、雜、三項

色々なくだらぬ詮索で、貴重な頁を大分費してしまつた。然し今少し、本稿執筆に際し構へた腹案が殘つてゐるから、以下それを箇條書にして、諸家の批正を乞はうと思ふ。
(1)廣重の立齋と稱せしは、小島烏水氏などは、嘉永安政の年間といはれたが、前號拙稿(雜誌「浮世繪」第三十九號「草双紙の外題袋」について。)にもある通り、應賀作草双紙『倭文庫』十四編の外題袋に

二代國貞の襲名

一陽齋雛獅

は既に立齋の落款がある。而してそれは、嘉永三年春である。然るに、それ以前のものでは、十三編（無落款）十二編（外題袋遺失）十一編（無落款、但し廣重風）十編（重の落款と一立齋の印あり）である。單に此等から推すと、十編は弘化五年孟陬（正月のこと）版であるから、立齋と稱したのは、遲くとも嘉永三年、でなくば、弘化五年（三月十五日に嘉永と改元）から嘉永三年の間、この二年ばかりの間であらうと思ふ。

(2)二代國貞の國政より國貞への襲名は、一般には安政二年の豐國長女との緣組の年と稱せられてゐるが、家藏の『八犬傳犬の草紙の內』なる一枚繪（家藏のもの五枚あり。山蔦板）は、凡て國貞畫とありて、檢印によると、役人名二個と、子九とあるから、嘉永五年九月の版である。然しこれは或は再版であつて、初め國政とあつたのを國貞と改訂したのだとしても、尙、三代豐國の『江戶紫五十四帖』（嘉永五年。森治板）の內、その四十一、まぼろしなる見立繪の背景を、この國貞が描いたと見え、右上の外題の下に小さく一壽齋國貞畫とある。（この繪は、同年十二月板）この『五十四帖』は凡て國盛や國幸など三代豐國の門人が、背景を描いた師との合作物である。故に、これから云つても、二代國貞の襲名は、安政二年以前、遲くも嘉永五年頃であらうと思ふ。

(3)一陽齋雛獅豐國畫は、果して初代か。『浮世繪』第十五號の三十四頁の問答欄に、この落款があつて、その答にこれを初代とし文政六七年頃と認めてゐられるらしいが、これは寧ろ三代豐國ではな

追記一

追記二

からうか。何となれば、家藏の「踊形容江戸繪榮」なる暫の芝居繪三枚續（『日本風俗史』にこの畫の縮圖あり。これも初代としたらしく、文政時代の芝居としてある。）がある。これにこの通りの書體の落款があるが、よく見ると、繪の上部、圍みの線外に、午七の檢印がある。この檢印からいふと、安政五年七月の板行である。（安政五年は、日附印のみ。改印なし。）また板元の濃州屋安兵衛の濃安から考へても、三代らしく思はれる。（濃安は、晩年の廣重や二代廣重の板畫若干を出してゐる。）この圖様は、勿論初代のにもあるが、それには雛獅とはなかつた。『風俗史』所載の物は、全く家藏の一陽齋雛獅と同一である。雛獅といふ意味からも、どうも三代らしい。果して初代であらうか。（大正七年八月十五日稿）

追記

（一）(1)の極め印考に就きの文中、榮久堂の營業期を嘉永に延長したが、今ふと『うす紫宇治暦』（初め種員、後仙果作、初め三代豐國、後二代國貞畫）の八編を見ると、板元は榮久堂で、安政辰春（三年）の出版である。卷尾の廣告を見ても、三代豐國などの錦繪出版を多少繼續してゐたらしい。すると、嘉永はなほ安政に延長せねばならぬ。

（二）(2)の白ヌキ改印の文中。阿古屋に就き、今『歌舞伎年代記續編』によつて、嘉永元、二、三の三年に亘つて調べてみると、嘉永三年九月河原崎座に、追善兜軍記として、重忠（九藏）、岩永（海老藏）、阿古屋（猿藏）といふのがある。多分これであらう。否、違ひあるまい。する

と、井上氏の白ヌキ印嘉永二年説は、當然嘉永三年に延長されよう。

二代國政の新説

新刊の「浮世繪」(藤懸靜也氏著。大正十三年五月初版)を見ると、二代國政として、左の一節がある。(同書第三五六頁)

二代國政　國政の死後に至つて、二代目を稱し、一壽齋と號して、牛込左内坂の邊に住んでゐたが、技倆は初代に比べて著しく劣つてゐた。

とばかりあつて、師系、歿年共に漠としてゐる。唯注意すべきは、藤懸氏は、同時に初代國政に就ても、「文化七年十一月晦日、享年三十八で歿した。」(同書、同頁)としてゐられることである。若し、果して文化七年に初代國政が死に、爾後(文化、文政、天保)二代國政の此の劣手が存在し、以て天保末弘化の三代國政(二代國貞)に至つたといふならば、自分の疑問は釋然たりである。然し、此の二代國政の新説、「便覧」説の二代國政と些も共通點がないのは、藤懸氏は、何に據られたことであらうか。(大正十三年十二月補)

本朝艶畫考

はしがき

性的歴史と版畫史

發生の考査と上司の取締

はしがき

「本朝艶畫考」、頗る微妙な問題である。私は、この微妙な問題を、決して遊戯的な立場から考究しようといふのではない。汎くは、我が國民族の性的歴史、狹くは、我が繪畫史殊に版畫史と密接な交渉を有つてゐるからである。私は、本朝艶畫その物に對し、例へばその畫風又は畫樣の説明をするといふのではない。艶畫そのものの具體的な説明には觸るゝことなく、唯だこの艶畫なるものの一派の畫が、我朝の何時代から發生したか。その發生の淵源は如何。我が國獨創のものであらうか。又は支那あたりの傳來に、その俑を成してゐるか。それ等の考査と、及び江戸期頻繁たるこの派の畫版行に關する上司の取締は如何であつたらうか。さうした問題を、民族歴史の一端、或る半面の説明、その材料として提示しようといふのである。從つて讀者に依つては、私の案外枯淡な、非享樂的な筆致に失望せられる方があるかも知れない。然し私としては、

眞面目な學究的

當分この種の問題に對しては、この眞面目な學究的な態度を改める譯にはいかない。殊に斯る眞面目な記述に於ても、尠からず自身の筆に戒飭を加へなければならない。然程に今私達は、或る拘束を自分達の筆の上に感じない譯にはいかないのである。私は、自分の筆に對して非常な嚴肅さを抱いて、今この稿の筆を進めるものであることを、最初に宣明しておく。記述の順序として、まづ艷畫の名義考から始める。

第一、名 義 考

第一、名義考

一般の稱呼

艷畫の本朝に於ける名義の數は、尠くとも五六種はある。普通は、之を一般に春畫というてゐる。が然し元來この春畫なる稱呼は、無論支那に生れたものである。元來「春」は、支那に於て男女の情の意に舊くから用ゐられてゐる。詩經にも、「有レ女懷レ春」とある。この「春」とは無論戀愛の義である。其他支那にありては、この春畫の他に、或は春宵秘戲圖といひ、或は、秘畫といひ、或は秘戲畫ともいふ。(支那に於ける秘畫の發生は、前漢時代なりといひ、或はそれ以前なりとの反對說もある。

支那の發生

但し支那に於ける發生、及び其の沿革は、他日の機會に讓る。)

我朝の名義

我朝に於ては、如何なる名義をこれに生んだか。先づ年代順によつて列擧してみよう。

一、おそくづの繪。(或はおそぐつの繪なりといふ)**二**、枕繪。**三**、枕草紙。**四**、笑繪。**五**、わ印。

其他に、支那稱呼の秘戲圖、又は祕畫。祕戲畫、又は春畫。或は艷畫、閨房畫、閨畫、さては淫畫等、

交々その階級の差によつて呼ばれたものである。以下簡單な解釋を之に下して見よう。

おそくづの繪

一、おそくづの繪。（或はおそぐつの繪）

「おそくづの繪」とは、如何なる意味であるか。嬉遊笑覽は、之に解說を與へて曰く、「おそはたはれたる事。くづは屑なるべし。陽物をいふに似たり」と。卽ち戲畫の謂である。〔然るに、「變態知識」第十二（大正十三年十二月）に飯島花月氏が頗るの新說、而も明快なる解を是に下してゐられる。曰く、偃息圖、若くは偃側圖の異音であるといひ、例として、大寶令の醫疾令及義解を引いてゐられる。悉しくは就て看るべし。〕

おそぐつの繪

「おそぐつの繪」とは如何。「國語辭典」（上田、松井）には、左の如く、之を述べてゐる。

おそぐつのゑ〔枕繪、春畫〕（玉勝間）〔一說戲畫なりと〕（嬉遊笑覽）。類聚名目抄曰、「俊頼口傳抄に、人の妻にみそか事すれば、ぬぐ沓重なるといへば、襲沓の意か。夫木抄三十二に、「ぬぐ沓のかさなる上にかさなれば、いもりのしるしかひはあらじな。」

之に據れば、「おそぐつ」とは、襲沓の意であり、卽ち姦淫不倫を意味するといふからには、この「おそぐつの繪」は、姦淫の畫といふ意味になる。この解釋と、前上の「おそくづ」に對する解釋と、何方が正しいであらうか。元來、この「おそぐつ」と「おそくづ」と兩樣の名稱を生んだのも奇である。一たい何方が本來の稱であらうか。それが極れば、その意義も極る筈である、然るに、この「おそくづ」なる名義は、古今著聞集に眞先に現れてゐる。卽ち同十一、鳥羽僧正及び繪かく侍法師の二者の對話中にである。（この出典、第二「發生の根本」中に擧ぐ。參照）これには、「おそくづ」とある。

或は傳寫の誤かも知れないが、兎に角その證とするに足りよう。嬉遊笑覧は、これに據つて解說を下してゐる。「おそぐつ」とあるは、「燕居雜話」四（百家說林續篇所載）に、「春畫は、和名おそぐつの繪といひて、俗にいふ笑繪のことなり。」とあるのが、その一例である。國語辭典所載の說もその一例である。今遽かにその先後を斷ずることは出來ないが、思ふに、初め「おそくづ」であり、時にそれが訛つて「おそぐつ」となつたのではなからうかと思ふ。襲沓(おそくつ)は、それに與へられたる後日の附會であらうと思ふ。兎に角おそくづの繪（或はおそぐつの繪）は、本朝最古の名稱である。

二、枕繪。三、枕ざうし。

これは、同時に發生したものか。或は枕ざうしが、その先であつて、枕ざうしの繪なる意味で、枕繪なる稱呼が生じたものかも知れない。或は共に、枕べ又は枕の抽斗におく意より、之を基點として、同時に一は枕繪となり、一は枕ざうしとなつたものかも知れない。但し「枕の繪」といふものは、この枕繪と異るものである。武雜記に曰く、

「御枕の繪の事禁中にもお用ゐ候事なり。かた〳〵は獏。かた〳〵は菊、又は鶴などの類をかき申候。公方樣にも同前」

とある。これは、無論「寶船」と同じ性質のものであつたらうと思ふ。

枕ざうしは、古くから淸少納言の隨筆「枕ノ草子」と混同されてゐる。一たい枕ざうしはこの淸少

納言の隨筆

枕ざうしの義

納言の隨筆なる同名に何らかの因由を有してゐるであらうか。現に「松屋筆記」一にも、「春畫は、俗に枕草子といへり。そは淸少納言犬枕(いぬまくら)といへるものによりて呼びけるにや。」（久彌曰く「犬枕」は元祿十五年刊三册。一種の好色本）とある。これで見ると、「淸少納言犬枕」から來た名稱寧ろ異名のやうであるが、さうとも謂へまい。恐らくこの名稱發生の當初には、御本尊納言の隨筆枕草子が何等の緣由をなしたに相違なからう。恐らく「枕」、こゝに因を發し、以て閨房をヒントするに足ると考へ、尙、納言の隨筆もあれば聞えよしとして用ゐるやうになつたのであらう。さうしてその間一種の滑稽味もありて、益々爾く傳唱されたものであらう。而して初めは、貴紳の間にこの名稱生れ、後代に及んで自から下層にのみ汎く用ゐらるゝものとなつたものであらうと思ふ。「枕繪」は「枕の繪」などから思ひ着いたことか、或は、この枕草子から來たものかも知れない。然しこれに就て、嬉遊笑覽に左の如く言うてゐる。

『枕ざうしとは、榮花物語に、「きぬの褄重なりて、うち出したるは、色々の錦を枕草紙に作りて、うち置きたらんやうなり。」又、新六帖に、「とぢおける枕ざうしの上にこそ、昔がたりの夢は見えけれ。」春曙抄に、枕さうしの名の由(よし)說けるは非なるべし。朝夕身に添へたる册子といふ義にて、枕は、枕べなり。源氏桐壺、「この頃あけ暮(くれ)御覽ずる長恨歌の御繪云々。やまとの言の葉をも唐土(もろこし)の歌をも、たゞその筋をぞ、枕ごと（解に曰く、寢話といふが如しと。）にせさせ給ふ。」とあるに同じ。さる

を枕繪に、枕草紙の名を呼ぶは、枕畫といゝを隱したるなり。」（鈴木弘泰氏の訂正增補枕草子春曙抄上發端二ノウラ弘恭氏の頭註に「枕は夜のものにて、人の見ぬ所に用ゐるがゆゑに、人にかくすべきことを當時の俗言に枕言といひし也」とある。枕言は、或は此の誰、枕草紙も從つてこの意に均しく、人にかくすべき草紙の意かも知れない。）

枕草紙と枕繪

然しこの說は兎も角として、枕草紙と枕繪との區別を、强いて付けるならば、枕草紙といへば、冊子の類。文章又は解說の義を主に含め、枕繪といへば、單に畫圖本位のものであらう。他の稱呼に於ても、笑繪と笑本と兩樣あるが如し、である。然し强ちに斯うとも亦た斷定は出來ないらしい。さうして此の稱「枕繪」「枕ざうし」は、何時代から起つたか。不明ではあるが、寬永二十年（西紀一六四三年）以前であることは明らかである。即ち油糟（松永貞德が、山崎宗鑑の犬筑波集の前句を借りて、それに附句を試みたるもの。寬永二十年出版）に、尊くもあり尊くもなしの句に「枕繪を羅漢の與に書き添へて」とある。貞享三年版「好色一代女」の（國主の艶妾）なる條下にも、

油糟と一代女

「されども武士は、掟正しく、奥なる女中は、男見るさへ稀なれば、まして褌襠の匂も知らず。菱川が書きし小氣味よき姿枕を見ては、………………」

色里三所世帯

とある。その「姿枕」こそこの繪の謂である。亞で元祿元年版「色里三所世帶」中卷、大坂の卷の二「戀に座敷あり女髮切り」の中に曰く、

賢女心化粧
氣吹颫

笑繪

わじるし

「眞綿を入れし錦緣の疊、寢間に名女揃の枕繪、さながら思を裸になし（中略）、此外斯樣に思ひもよらぬ取合せ可笑しき中にも、氣を移し、堪忍のならぬ樣に拵へたる座敷なり」云々。

右に、きつぱり枕繪とある。恐らく此種の詮索に據らずとも、この名は、餘程古くから、或は室町期あたりからかとも思ふ。さうしてこの稱呼は、江戸期全般に、一般的に行はれてゐたものであらうと思ふ。現に延享二年の「賢女心化粧」にも、この稱呼が表れてゐる。嬉遊笑覽の著者曰く、「其積が賢女心化粧（に）、淸少納言も、次第に不如意にて、袋入の枕草紙をして、內證のたすけとしたまへ共云々（とあり）。戯文ながら、其の頃之を枕草紙と云ひしを知る」と。平田篤胤の、「氣吹颫」上にも、「寶曆安永あたりの春畫帖に云々」とある。以て推して知るべし。

四、笑繪。五、わじるし。

笑繪は、笑ふべき繪、可笑しき繪の義であらう。單に滑稽畫なる意に用ゐらるゝ事もある。その艷畫の一名として行はれたるは、江戸期に多いやうである。枕繪が京坂にその端を開いたのに反し、これは江戸に生れたものであらう。わじるしとは、丁度狂者をきじるしといふが如く、所謂江戸人の暗喩を好む性癖から出でたものである。卽ち笑繪の意味である。笑繪は一般に用ゐられた。或は御殿女中などから、この稱呼の俑を爲してゐるかも知れない。わじるしは、多く通人又は繪草紙賣買の者流に稱へられたらしいのである。然し私は、嘗て、爲永派の艷本に於て、作者自らその篇中の人物に此

のわじるしの名を用ゐしめてゐるのを見たことがある。（梅亭金鵞の匿名作であつたかと思ふ。）當今でも、或る玄人側商人側に、この稱呼が用ゐられてゐる。甚しきは、指にて輪を描いて符徴となすものもある。〔尙、玄人側では、落丁（一般に通用せざる物の義。）又は、をめ（男女の意）ともいうてゐる。〕

讀和

餘分のことであるが、讀和（よみわ）といふのを說明しておかう。讀和は、玄人間の通稱であるが、文章本位の艶本である。讀むわじるしの謂である。大抵繪は普通公刊の人情本風の物であつて、しかも文に特色を發揮する。が中には、文と繪と兩樣ひどくて、しかも文本位のものもある。これも讀和の類である。

名義考が案外長びいた。先づこれ位ゐに止めて、次は、**第二**、發生の根本に移る。

第二、發生の根本

第二、發生の根本

發生の根本は、何時代であつたらうかといふ問題である。最初の討究は、本朝のみにこれを他外邦のそれと同じく偶然に發生したものか。又は支那、或は印度あたりの傳來かといふことである。

古代の醸生

これは、無論、原始民族に共通な、我が國古代からこれと似たもの、同じ性質の繪畫は、その醸生は必ずあつたであらうと思ふ。藝術の起源は、原始民族が、性慾の發現から來てゐるといふ。卽ち、彼等男が、相手の女の來るのを待つ間、武器の柄などに、女の顏や性器の形を刻んだりして、退屈と

吉備眞備

歸化民と外來僧

熱情とを慰した。それが凡て藝術の根元であり、表現の最初であるといふ。無論、日本民族の我々祖先、先住民族も移住民族も同じやうな表現の徑路を取つたであらう。從つて、男女の性器の繪、表徵、或は交歡の圖など、既に彼等の拙なき手に、或は壁畫として或は器物の裝飾として、或は立體藝術として現れてゐたであらう。嚴肅にいへば、我々の本朝艶畫は、此に起源を求めねばならぬ。（原始民族の生殖器崇拜も此に多少加味して考へてもいゝと思ふ。）とに角、艶畫の幼稚なるものは、我國にも獨自に發生したと見ていゝ。而して後代に及んで、漢土と交通が開かるゝに及び、一歩進みたる形似畫。寫生的のそれが、文化の先進國たる彼土より將來され、即ちそれが本朝彼畫の發達の俑を爲したものであらうと思ふ。即ち推古朝に端を開いた遣隋使、後代の遣唐使、彼我使節の相往來を見るに至つた飛鳥(あすか)朝、奈良朝、平安初期に亘つて、この間必ず歸朝者の筐底、彼土のそれが齎されたものであらうと思ふ。殊に怪しいのは、元正天皇の時と、孝謙天皇の時と、二回唐土に渡つた吉備眞備である。彼が渡來した唐は玄宗皇帝の極盛期である。頽唐靡爛の極たりし大唐の世相間、殊に年少早熟なりし彼（彼の第一回渡來はその二十四歳）は、また一個秀抜な享樂兒、遊蕩兒であつたに違ひない。享樂淫蕩の權化ともいふべき大唐の玄宗と、歸朝後、當時東宮たりし後の孝謙帝の侍講となり、恩寵を得たといふ眞備と、その間を結び付けて、疑問を打ちたくなるのである。

　或は、それ以前、彼土の歸化民又は僧徒の渡來と同時に、こも亦た傳來したものではなからうか。

眞備より後の桓武期の最澄、空海の渡唐の頃では恐らくなからう。無論平安朝以前に、既に宮廷貴紳の間にこの秘畫が弄ばれたものであらうと思ふ。

傍證として、本朝繪畫の發達を調ぶるも一策である。雄略天皇の七年（西、四六三年）畫師因斯羅我を百濟より招いた事や、崇峻天皇の時、畫家白加の來朝した事や、其後、推古朝曇徴の高麗より來るなど、以上の三韓を經て大陸繪畫の傳統傳來の事實や、聖德太子の寺院繪師に對する保護奬勵（各畫師を定め、課戶を免じ世業たらしむ　などによつて、佛畫は頓に發達した。然し之に伴つて幼稚なる古來純粹の表象技巧が發達したことは否まれぬ。降つて文武天皇（西、六九七――七〇七）の時の、畫工司の設置など、或は次いで天平時代の佛教の興隆と唐文化の摸倣と國運の進暢と、三拍子揃つて呈した藝術の爛然たる時代は、無論此の幼稚なるヱロチツクスにも進步を與へたであらう。平安期、前代の畫工司を改めて繪所（平城天皇大同三年）とした頃には、河成（百濟）、金岡（巨勢）などの純粹畫家も現れ、土佐（倭畫の本流）、その副流として春日の類を生み、覺猷（後を看よ）などの別派の大家また現るゝに至つた。丁度、此の間に於て、我がおそぐつの繪は、最も發達し來つたであらうと思ふ。次揭の如く、覺猷とその弟子と、之に關した問答のあるのを見ても肯づける。

卽ち、凡て本邦繪畫の發達と共に、影を小さくし乍ら、このヱロチツク描畫は發達したであらう。遡として起源を尋ぬるに由もないが、以上の覺猷に及ぶ本朝繪畫の略沿革を以て、略々此物の發達も

暗示し得たであらう。或は、艶畫そのものを支那よりの傳來と見るよりも、畫技の傳來白發と共に、別途に、此のおそくづは、本朝のみとして發達し來つたものかも知れぬ。眞備に疑をかけたり、渡來僧、又は歸化民の將來と見るは、僻目であるかも知れない。何れとも據るべき文獻はない。唯、遺憾乍ら以上二樣の暗測を提示しておか[illegible]。

却說、この「おそくづ」なる名稱の文獻に現れた最初は、古今著聞集（著聞集は、序に建長六とある。卽ち西、一二五四年）である。卽ち前述べた覺猷（鳥羽僧正）の逸話である。

「同僧正の許に、繪かく侍法師ありけり。あまりに好く習ひければ後ざまには、僧正の筆をも耻ぢざりけり。此の事を僧正ねたましくや思はれけん、いかにもして失を見出ださんと思ひ給ふ所に、或時件の僧、人のいさかひして腰刀にて突き合ひたるを書きて、自愛してゐたりけるを、僧正見給ふに、其突きたる刀、背中へ拳乍ら出たりけり。よき失と思ひての給ひけるは、「わ僧が繪（を）書く、永く禁むべし。いかなる物か、人を突くに拳ながら背へ出る事あるべき。柄口迄突きたるなどをこそ、嚴めしき事にはいふを、これはあるべきもなき事なり。かく程の心ばせにては、繪書くべからず」といはれければ、此の僧かい畏まりて、「其の事に候。これは繪の故實に候ふなり」といふを、僧正いはせも果てず、「わ法師が繪の故實、かたはら痛し」といはれけるを、少しも事ともせず、「さも候はず。舊き上手共の書きて候ふおそくづの繪などを

御覽も候へ。その物の寸法は、分に過ぎて大に書きて候ふ事、いかでか實には、然候ふべき。ありの儘の寸法にて書きて候はゞ、見所なきものに候。故に繪空事とは申すことにて候。君の遊ばされて候物の中にも、斯る事はおほくこそ候らめ」と、へりをおかず言ひければ、僧正理に折れて、言ふ事なかりけり。」(古今著聞集、畫圖第十六)

とある。右のおそくづの繪である。鳥羽僧正は、源隆國の子、覺圓僧正の弟子。名は覺猷。遂に天台の座主法務及び三井寺の長吏大僧正となる。曾て鳥羽に居る。專ら倭畫をよくし、一家をなす。(扶桑畫人傳)所謂鳥羽繪の創始者である。この僧正また所謂「おそくづの繪」の創作があつたであらうと

倭畫畫派

思ふ。この僧正傳にも記載せる如く、當時、既に倭畫が生れてゐた。倭畫は前にも言うたが、その先驅に百濟河成(文德帝仁壽三年歿)があつたが、淸和朝の金岡の巨勢氏また之を襲ぎ、堀川朝の藤原基光(土佐の始祖)、近衞朝の藤原隆能(春日を稱す)に至つてその爛熟を將に見むとした。この間に鳥羽僧正また出でた。(僧正は、崇德帝保延六年歿)僧正及び他の此等倭畫々派に、この「おそくづの繪」の創作があつたことは疑もないことである。當時、既に彼等の先輩に、此の種の作畫のあつた證據は、覺猷の弟子が、古き繪師共の云々と言へるによつても分る。古き繪師とは、河成か、金岡か、基光か、隆能か、誰々だらう。殊に、藤原氏時代に孕み產れた倭畫が、彼等の享樂廢頹趣味に媚びる點からいうて

勝畫

も、この創作は夥しく有つたに違ひない。鳥羽僧正遺筆の中勝畫(この名は龜山院の皇后、繪合の時、勝

ちたる繪に名付けられしなりと。龜山院は元寇で有名である。）二卷といふのがある。一卷は放屁の卷。一卷は陽物くらべの卷なりといふ。私は嘗て、この陽物くらべかと思ふものの摸寫を見たことがある。露骨なる戲畫である。但し春的要素は、比較的に乏しい。戲れたる意味の物で、艶畫ではない。然し非公開の性質たること、無論である。（一說に、この勝繪二卷、東寺に傳はり、後、白粉屋又兵衞藏之といふ。）その實、是以上非公開の、眞の筐底秘畫が彼にも必ずあつたらうと思ふ。〔最近尾州家藏といへる傳鳥羽僧正の或る繪卷物、男女合戰とも名づくべき物の摸本を見た。こは、全然艶畫であつた。（大正十三年五月）〕然しそれが爲には、今材證のないのを遺憾とする。

松屋筆記一に據れば、古今著聞集には、なほ「師の房の後家の事を春畫に書きし事」ありといふ。今、先賢の指摘によつて、古今著聞集を檢索して見た。鳥羽僧正逸話と同じく、同第十六にあつた。左の如きものである。これこそ眞の閨房秘畫である。文に據ると、この僧は、著聞集の作者生存當時現在してゐたやうである。すれば、著聞集序に建長六年とあるから、この話は、後深草朝、執權北條時頼の時代と類推することが出來る。

「繪師大輔法眼賢慶が弟子に、何某とかやいふ法師ありけり。賢慶逝去の後、後家と不快になりて、相論の事ありけり。六波羅に訴へけれども、事ゆかで程經けれぱ、この法師繪もさかしく書きけるものにて、件の後家が有樣振舞を初めより書き現はしてけり。間男して會合したる

所など、さまぐ\に書きて、えもいはず彩どりて、詞つけて六波羅へ持て行きて、奉行の者どもに見せければ、訴訟を殊に執し申さんの心はなかりけれども、繪その興あるによりても、とかく持てさまよふ程に、兩國司までも見て、訴訟の旨悉しく心得解きにけり。遂に勝ちにけり。件の法師、攝津國宇出の庄にいまだあり。」（古今著聞集。繪圖第十六）

古きおそくづの繪

弟子と後家と何うして不快になつたか、不明である。探ればこの弟子も暗い事がありはせぬか。それは兎に角として、繪にして六波羅に持參したとは、頗る珍話。この坊主、中々の洒落者である。またそれを見せつけられた奉行はじめ「繪、その興あるによりても、兎角持てさまよ」つた揚句、兩國司までも見たといふ、この兩國司の面が可笑しい。さうして此の繪によつて始めて訴訟の旨を悉しく解いたといふのも、人間放れのした話である。

袋法師畫卷と小柴垣

兎に角如上の鳥羽僧正の記事をのみ以てしても、當時、この「おそくづ」が貴紳に盛行してゐたであらうと思はれる。然うしてこの「おそくづの繪」の古きものとしては、嬉遊笑覽におそくづの繪として、「古き繪の傳はれるは、小柴垣。ふくろ法師などの外には、未だ見及ばず」とある。松屋筆記に、「にはくなぶり。袋法師畫卷など、また古し」とある。（此の中、にはくなぶりは諸書に見當らず。袋法師畫卷は、袋草子とも云、詞不詳、畫は飛彈守惟久だと云ふ。元本、柳營に於て燒失、別に住吉具慶 摸本があると。）小柴垣は、灌頂卷の名で有名。詳本略本がある。補遺參照。）さうして此の類のものの中、「十二枚あるもの往

忙しい禁厭

々あるは、鎧櫃に收めたるものといへり。又衣櫃に納むる事もあり。」（同嬉遊笑覧）とあるが、尚他に、書櫃に納めた例もある。これらは、凡て禁厭に忙しい支那の風習を承け傳へたものらしい。火災を防ぐ、典籍の蟲食はぬ、衣類自然に殖ゑるなど、莫迦々々しい禁厭から來てゐる。

第三、江戸期の盛行及禁令

第三、江戸期の盛行及び禁令

版畫の發達

江戸期には、これが最も頻々流行した。これは、版畫の創見、（日本版畫の創作は、四天王寺の扇面古寫經の畫。藤原末期だといふ。）此期に於ける眼まぐるしいその發達に伴つての事實である。我等浮世繪の其他一般版畫沿革史に携はる者には、自然とその消息が諒解される。殊に元來がこの艶畫は、往古「おそくづ」の時代（此時代は殆ど肉筆畫）にありても、一個の寫實風の畫風ともいふを得よう。乃ち江戸期の當初、寫實に根柢を置き、時世粧の描寫に第一途を發見した岩佐又兵衛、轉じてその大成者菱川にありては、無論この風の好色畫の執筆があつたことは否む譯にいかない。殊に菱川（師宣）は、浮世繪の眞の意義に於ける創造者である。從つてまた江戸期艶畫のまた創造者でもあつたのである。その

初期の寛大

當時幕府は、未だ此の種の版行物に對して頗る寛大であつた。恰も庄司甚内に遊廓公許を與へたるが如く、敢て奨勵とは行かざるも、殺伐なる士風を太平謳歌の遊冶ならしめんとして、見て見ぬ振して

公然と署名す

ゐたのかも知れない。從つて、その當初には、公然と畫者並に書肆板元の名を署したるもの、數多現

師宣の作畫

以後の作畫家

「好色むらく坊」

れた。

師宣の筆畫として、艶色軌範、花の盃、さゝげ繪枕、色雙子、戀のうわもり等が現れた。其他、延寶、天和、貞享、元祿の間には盛んに版行された。（その板行の最初は、承應明曆の頃であらうといふ。）「當時の春本には、麗々しく菱川師宣畫とか、古山師重畫とか、繪師石川流宣などゝ署名し、尙出版書肆も亦た松會開版とか、鱗形屋板行と明記してある。これより後、鳥居淸信、奧村政信、等も多く描いたが、其の署名のものは少ない。京都では吉田半兵衛、西川祐信署名のもの多く出版された。降つて寶曆明和安永、天明頃には、月岡雪鼎、鈴木春信、磯田湖龍齋、勝川春章、細田榮之等署名のもの多く出版された。」（外骨氏、「此花」第十三枝）

軟派通の外骨氏の言であるから、一々證左を攫んでの斷言であらうと思ふ。私は、祐信・政信署名のものより未だ見たことがない。湖龍齋あたりのものは、署名でなくして、篇中の或部分に、衝立の繪などに湖龍と落款あるものを見た。春信の如きも、序文には、慥かに春信の畫であることを意味したものを見た。歌麿・榮之の類は、篇中の男女の會話の中に、或は歌さん、或は榮之云々と曰はしめ、該畫者たる事を暗示したものあるを、見た。讀物本位の好色本の類に至つては、作者名は逸したれ、版元、出版年月を明記したもの、（作者なきも序文には大抵署名があり、以てその全篇の作者たる事を首肯せしめるのが多い。）例へば、「好色むらく坊」の如きがある。（本著、前揭、「好色むらく坊と作者桃隣」解題

参照）其他、此類は殆ど無數であつた。一度び「好色本目錄」の類を繙かば容易に知れることであらう。西鶴作、稱西鶴作、（「色里三所世帶」の如き）、其磧自笑作の類は云はずもがなである。

春信以後の發達と需要

兎に角、所謂「おそくづの繪」は、浮世繪の盛行、板畫の向上と共に、頻出した。師宣から始まつて、（師宣は元祿七年七十餘歳にて歿。）爾來約二百年間、明治初年に至る迄、數度禁令出でながらも、その板行の盛出を見た。初めは、單なる墨繪、墨摺本であつたが、錦繪技巧の發明以後（春信以後）、その着彩、彫摺、精密と絢爛とを極め、普通の板畫に比して數倍の高値を以て販賣された。その需要先は、主に御殿女中。或は、士族にありても、その士女の婚禮にはこれを用具として供へた。町人間の享樂心に之が投合して、その歡迎されたことは、謂ふ迄もないことである。畫師は、師宣以來、明治初期の歌川末派に至るまで、その數蓋し夥しきものであらう。而もその畫風も、師宣あたりの原始的（浮世繪として）素朴なるに反し、時代と作畫技巧との進むにつれて、時代の加層的な頽廢と淫靡に傾合するため、その描寫も唾棄すべき嫌惡すべきものとなりつゝあつた。しかも、江戸末期多數の畫家の如きは、古人先輩、此種おそくづを以て、人體描寫の粉本とした。明治に至るも、風俗畫家、美人畫家は、多くこれに依つて人體の素描に習熟したものであるといふ。中期末期の諸艷畫家の中、

英泉と國芳

春信・歌麿・榮之共々にその板畫に現るゝ如き特徴があつた。池田英泉は、就中此の方面に辣腕を有し、しかも彼は蘭風の解剖的智識、所謂性學なるものゝ一端を知つてゐるらしかつた。歌川國芳は、

殊に、居常西洋の木版畫の斷片を貯へて、粉本としたと謂はれてゐるが、その爲でもあらうか、彼が畫いた此種のものに於ける這個の描寫は、その均齊を最も得てゐる。

さて次に禁令の問題に及ばう。

江戸幕府の禁令は、四五度出た。今見當つただけの年次を記してみる。その最初は、享保七寅年十一月（吉宗時代、西紀一七二二）である。

新板書物之儀ニ付町觸

（前　略）

一唯今迄有來候板行物の內好色本之類は風俗之爲にも不宜儀に候間段々相改絕版可申候事

（中　略）

一何書物によらず此後新板之物作者並板元實名奥書爲致可申事

（後　略）

これが爲、西鶴物の好色本其他の春本類は、大恐慌を來し、比較的温和なものは、好色の名を削り改題するか、或はその程度以下のものは、絕版の已むなきに至つた。從つて無論これ以後公刊の艶畫本類は跡を絕つた譯である。然しそれも名儀の上だけで、秘密出版は相變らず頻繁であつた。需要は益々盛んであつたのである。天明頃には、再びその法令も弛み、繪畫及び猥褻具は公然店頭に並べら

れたらしい。何となれば、天明七年（家齊、第一年。西紀一七八七年）植崎九八郎なるもの、時弊十數條を指摘して、松平定信に建言したことがある。その上書（日本經濟叢書前輯に收む。）中にも、

「近來、惣たい風俗惡しく相成り、戲繪を店先へ開き、商ひ、或は張籠陽物を並べ賣り候ふ家相見え候。是等の類嚴しく御停止被遊度奉存候」

とある。氣の毒にも、彼はこの上書のため、卑怯なる當局の忌諱に觸れて、幽屛の罰を受けた。（植崎九八郎は、小普請組永井監物の支配にして、高四十俵二人扶持を受け居りしが、此建言のため罪を得て、片桐侯の邸に幽せられ、文化四年丁卯和州小泉に死せり。「國書解題」。）

これに鑑みたかどうか、次で寛政二年（同家齊。西紀一七九〇年）に、幕府は再び嚴令を出した。繪本繪雙紙取締令である。無論春本類にも嚴しく取締を命じた。即ち左の如きものである。

『地本問屋行事共へ申渡

書物の儀、毎々より嚴敷申渡候處、いつとなく猥に相成候。何によらず行事改め候て、繪本繪草紙類迄も風俗の爲に相成らざる猥がましき事勿論無用に候。一枚繪類は繪のみに候はゞ、大概は苦しからず。尤も言葉書等有之候はゞ、よく／＼是を改め、如何なる品は板行致させ申す間敷候。右に付行事改めを用ゐざる者も候はゞ、訴へ出でらるべく候。又改め方行屆かず、或者改めに洩れ候儀候はゞ、行事共越度たるべく候。右之通相心得申すべく候。尤も享保年中申

渡候趣も猶又書付にて相渡すべく候間、此度申渡候儀等相含み改め申すべく候。

寛政二戌年十月二十七日』

青本年表寛政二年の條に曰く、「十一月、草双紙等に、時勢の雜説等著述せし物賣買停止並びに版改めの件に就き、取締の法令を發布せらる。」

「神道柱立」にも曰く、「寛政初めの年、江府は、店に春畫を賣る事を禁じ、又男女混雜の入湯を制し給ふ云々。」と。

百龜と歌麿

寛政二年は、歌麿の全盛期である。當時百龜なる艶畫の老大家もあつた。蜀山人の「奴凧」には「元飯田町中坂に住める藥店、剃髪して百龜といふ。」とある。（浮世繪師便覽には、「百龜は、小松屋といふ。藥種屋なり。俗稱三右衞門。略暦摺物多し。天明頃」とある。一書に寛政四年八十餘歳で歿したと云ふ。）其他の畫家には、此の寛政二年當時に於て、豊國（歌川氏）は漸く物にならうとし、北尾政演（京傳）は、その全盛期であつた。畫家としてなほ、清長（鳥居氏）もゐた。重政（政演の師、北尾氏の祖）もゐた、政美（北尾氏、重政門下）もあつた。これ等も多少とも打撃を受けたに違ひない。

天保十三年の嚴令

次で現れたのは、有名な天保十三年（西、一八四二年）の水野越前守の嚴令である。所謂天保改革、水越の改革である。彼は、繁縟な風俗矯正令の他に、書物繪草紙等に就て、六月三日

一、自今新板書物の儀、儒書佛書神書醫書歌書都て書物類其筋一通の事は格別、異教妄説を取交

（作り出し、時の風俗、人の批判等を認候類、好色畫本等堅く可爲無用事（中略）

一、何書物によらず、新板のもの、作者並板元の實名奥書に爲致可申事

の禁令を發した。彼は尚ほ、俳優、妓女等の一枚摺、錦繪の刊行並びに賣買を禁止した。且つ合卷繪双紙の繪組に俳優の似顏、狂言の趣向を用ゐたり、或は表紙上包に彩色を施すことを一切嚴禁した。此月、種彥の田舍源氏に絶版を命じ、爲永春水を手鎖の刑に處した。七月、更に令を發して、人情本の賣買貸借を禁止し、且つその板木を沒收した。十一月晦日には、更に令して、合卷繪双紙の類都べて草稿中に、掛りの名主、その月番の認め印を受け、出版の際これを査定するやうに嚴命した。（水越は此の外なほ數條、當時の出版矯正令を發布してゐる。初版「日本社會事彙」下卷一七七頁に詳しく出づ。）

この水越の改革は、彼等出版業者には、青天の霹靂であつた。況して公然とはいかなかつた彼等秘密本類出版業者には、畫家も無論大恐慌であつた。然し恐慌も一時であつた。日ならずして普通版畫も絢爛贅澤なものとなり、從つて秘密本類も國貞・國芳等、其他歌川派の匿名作、頻出するに至つた。「所謂ゑさがしの類に男女の○○を描きしものは、公然店先に陳列せられた。それが明治の三四年頃までであつた」といふ。否これに限らず、國貞（歌川）作の艶本「生寫相生源氏」は、松平春嶽公（福井藩主）の御手摺本、道理で金銀螺鈿を鏤めたといふに至つてをやである。

浮世繪師の他にも、應擧、素絢、文晁の輩、殊に崋山の如きにも此の種の作があるといふことであ

る。（但し此輩、浮世繪師と異り、無論肉筆である。）近世では、靄崖（高久）、容齋（菊池）、小蘋（野口）等の作を自分は見た。

意外に叙述が長くなつてしまつた。誠に諸君にお氣の毒であつた。案外面白くなかつたかも知れない。それは偏へに筆者の罪である。乍然何故私が斯る羊頭狗肉の篇をものしたかと云へば、我が日本民族の生活史の一面として之を提示したかつたが爲である。殊に此の種の方面が一般の識者に閑却されてゐるからである。一言以て辯じて置く。（大正十一年十一月――大正十二年三月）

補遺

「本朝艶畫考補遺」

艶畫の起源について、左の記事を載せておく。（前掲の記述と重複の點もあるが、今その要文の全部を擧げておく。）

春畫のはじまり（輪翁畫譚）

春畫のはじまり

男女交合の圖をつくりしことは、いつの世よりやはじまりけん。さだかに記したるものもあらざるにや。西土にては、漢人の春畫傳はれるよし、青藤山人の路史に見え、皇朝にては能宣

集に春畫の贊見えたり。能宣朝臣は圓融院花山院の御宇の人なり。されどこれをはじめとは云ひがたし。それよりこのかたは灌頂卷、古今著聞集の繪師賢慶が弟子の、師の後家が密夫會合の繪など見えたり。此のことをこなたの詞には、おそくつといへり。（著聞集）おそくつとはおそひくつといふ詞の中略にやと、類聚名物考にはいへれど、いかゞあらん。もし燭餘をほそくつなどいひしこともありけんには、陰莖の首を燭餘にたとへていひもしけんとおもはるれど、それも證據なければ、いひがたきにや。（おそくつ。鳥羽僧正の許に畫かく侍ひ法師ありけり。）（中略）

能宣集。但馬守ためちか、屛風にさまざまの畫かゝせて侍るに、男女けしからぬことどもかゝれたるところに、

うしろめた下のこころはしらずして
身をうちとけてまかせたるかな

灌頂卷は齋宮濟子女王（三品兵部卿章明親王女）の瀧口武者平致光といふものと密通ありしことを敷演してゑがけるものなり。木下侯に古本あり。書畫の樣鎌倉時代のものとおぼし。もしこれより先き原本ありしものにや。（中略）

著聞集男女會合圖、古今著聞集卷十一（畫圖部）に云、繪師大輔法眼賢慶が弟子に、なにがし

とかやいふ法師ありけり。

文化十年十月十六日　　弘　賢。（輪翁畫譚）

○

灌頂卷は、一名小柴垣草紙である。さてこの野宮の話は、古來有名で、十訓抄卷三にも

「寛和（花山）齋宮、野宮におはしけるに公役瀧口平致光（平五大夫致賴五男）とかやいひけるものに、名立たまひて、群行もなくてすたれたまひける。夫より野の宮の公役はとまりにけり。」（考古畫譜上に據る。但し此の十訓抄卷三なるもの、流布本に見當らず。如何にか。）

とあるといふ。序でながら、筆畫家をいふと、諸說區々である。灌頂卷。繪、住吉法眼慶恩、詞、後白河法皇宸翰（本朝畫圖品目。古畫目錄。古畫類聚目錄。倭錦。）小柴垣。繪、信實。詞、爲家（畫圖品目。畫圖品類。）繪詞、爲家一筆（柳庵雜筆）繪信實、詞慈鎭（黑川眞賴本）など區々である。灌頂卷と小柴垣と同一であるとはいひながら、畫圖品目の如き、一は灌頂を住吉法眼、一は小柴を信實とせる如き、をかしいやうであるが、物は元來一つで、詳本を灌頂卷、略本を小柴垣といふ由である。

とにかく畫者も誰であつたか、詞者も誰であつたか、恐らく逸名の氏がその本源であり、それがもとゝなつて、或は慶恩も描いたらうし、信實も描いたらうし、灌頂ともなり、小柴垣と

和印といつた一例

勝川春章の匿名

もなつたのであらう。從つて異本摸本によつて畫詞共に種々の名がある譯だ。中には、本當に後白河院の宸翰があつたのかも知れない。と見るのが今日からは妥當であらう。

和印といつた一例

有名なかはらけ小傳の情夫の數々を、芝居顏見世の入代り番附に似せた、「傚顏見世番附小傳」の中に、和印作者、猿猴坊月成、といふのがある。猿猴坊月成の艶本は、よく見る所。その月成が小傳の款待を果して受けたかは確定しないが、とに角、和印とあるこれだ。この番附は文政十年の板行であるから既に此頃和印といふ隱語のあつた證據だ。汎く人の知つた隱語であつたらう。〔因みに、猿猴坊月成とは、初代烏亭焉馬の匿名である。〕

勝川春章の匿名

艶本の話に今一つ。艶本艶畫類の上で、國貞の不器用又平や國芳の程よしや、英泉の白水などは誰も知つてゐるが、春章の如きは、知らぬ人が多からう。春章の匿名は、初川珍重といつた。それは、家藏の逸題會本の上の叅尾、「本畫開得成三略の卷」といふ說話中にある。作者の悴と御守殿の嫁とが、情事不通で困つてゐる件があつて、

艶畫本の板元並に年月明示について

「爰かして尋ねるところに、市谷の八幡の境内にて、さがしあたりし畫本は、今世に秀づる畫工の名人に初川珍重といふ人此道をよくあきらめ圖して初心の手本とする。本屋が敎にしたがひ、早速此の三卷をもとめて立歸り……。」

とあるとほりだ。初め、羽川珍重のことかと思うたが、文中の此の三卷とは、家藏の現に此の會本三冊を指すことと明らかであり、しかも繪を見れば、珍重か春章かは、一と目で分る。したがつて丁度春章が珍重をもぢつてその實自己の匿名にした事は明らかである。本は、墨摺の大本。冒頭に、野郎帽子と御殿との接嘴の繪がある。

艶畫本の板元並に板行年月の明示に就て

本稿前文に、江戸初期だけに艶畫本の畫者板元並に板行年月の明示したものがあつたやうに自分もいひ、外骨氏の「此花」所説まで之が爲引いてゐたが、此頃、それを裏切るものを發見した。それは「極樂遊」といふ艶畫本、三冊物である。これは有名な土器小傳を材料にしたもので、小傳（此本ではお大）が、坂東三津五郎（此本では大和屋の勝見）や清元延壽齋（此本は千代本淫壽）や瀨川菊之亟（此本は多門）や鶴屋南北（鶴屋閑木）などに冥途で邂逅ふ物語だが、その見返しに、麗々しく

和印問屋

天保二の明記

わじるしは常識語

天保壬辰春正月

三津世川　極樂遊

和印問屋　　金荃堂發兌印

とあつて、發兌の下に、耕錦堂と讀める印がある。耕錦堂は錦耕堂(山口屋)のことであらうし、天保壬辰はその三年。殊に和印問屋が面白いではないか。著者こそ女好庵主人であり、畫者は署名なけれ、(國貞の畫であることは一目瞭然)和印問屋と稱したり、又板元を明示したりした反證の一だ。

尚一つ、「春色六玉川」上中下、江戸嬌訓亭(春水)作、一妙□程よし(國芳)畫の序に、「(前略)爰に青久齋水成ぬしが。玉々著したる。六ツの玉川といふ文を。閲するに。其文章玉をつらねたるが如くなれば。恐らく□畫帖の。親玉ともいふべければ云々。

干時天保二玉兎の卯月

玉庄にそゝのかされて

玉楼が白玉が座舗に居續けの日

牡□丹登　紫亭戲述」

とある、同じく天保二の明記があり、且つわじるしとある。卽ち、和印とは、文政天保をか

けて、一般常識語となつてゐたであらう。（尙、右の玉庄とは、板元のやうに思はれる。）

初期の奥書ある物の例

初期の物に、奥書あつたことは、本稿に書かれてゐるが、この實例を二三擧げておく。

『戀の樂』――此枕繪草紙は菱河氏大和一流之繪師にして、筆曲をつくされたり。是を見るに、むかしの人に逢ふて語るにひとし。よつて令板行者也。京寺町四條下る菊屋長兵衛板。

『戀の花むらさき』――右此枕草紙一帖は、倭國繪師菱川畫所、求之若輩之賞翫にならんとて板行者也。正月吉日。日本畫師菱河師宣筆。武藏書林松會板行。

『五れいかう』――右五れいかうの枕草紙は、菱川氏吉兵衛と云し畫工、筆曲をつくし、あやまる所もなく書れしを一帖にして令板行者也。元祿八つのとし、いの正月。まつゑ板行。

『情のうわもり』――此枕繪草紙、上中下の替りたる品々に首書を加へ令板行者也。日本菱河吉兵衛師宣。大傳馬町三丁目鱗形屋開板。

尙、年月其他を記入せるもの數多の例を擧げよう。（大正十年刊。「艷色京紅」に據る。）

樂事秘傳抄　横本一册、「明暦元年七月下旬開板」〇繪本雜書枕　延寶六年、大本合一册、「延寶つちのとむまのとし春たつ日□□　繪師菱河氏師宣　小傳馬三丁目柏や仁左衛門開之」〇枕

師宣の「床の置物」

大全　天和二年、大本下の巻「天和貳歳戌彌生上旬　大和畫師菱河氏師宣　通油町本問屋　山形屋版」○落語春雨草子　元祿年間大本一册「大和繪師古山太郎兵衛圖　松屋伊兵衛板行」○好色一もとすゝき　元祿中本五册桃の林作「大和繪師　菱川師房」○好色花ずまふ　中本五册「元祿十六年癸未正月吉日　繪師奥村源八　江戸日本橋南一丁目梅村八兵衛板」○かつら艸　寶永八年大判一卷「寶永八のとし　花洛大和畫師　文華堂西川祐信圖　京寺町佛光寺下ル町　谷村清兵衛板。」

以上の中では、閨畫本位のものの他に、好色本位のものも混りをるなるべし。今姑らく未考のまゝ附記しつ。

――以上、大正十三年六月補――

師宣の大本艶畫

故平出鏗次郎氏藏本の「床の置物」一册を、最近覩る事が出來た。表紙は鱗形屋本と同様、龍の丸の模樣がある。畫致は例の古雅。奥附に、「右の床の置物枕繪者蜂蜈のさしあひもいとはす書顯して板行者也。繪師菱河吉兵衛、堺町　柏屋與市開板」とあつた。(大正十三年八月)

艶本に於ける春信の推奨

この頃、或る一冊の艶本を見た。それは紛れもなく春信の畫であるが、然し惜しいことには、表紙の外題がちぎれて、書名がわからない。乃で本の綴ぢ目を調べて見たら、「ヒメ上」とあつたから、會本姫小松といふやうな外題で、（序にも此の文字がある。後掲参照。）大抵、上中下の三冊物であらうといふことがわかつた。墨摺で、繪は八圖あつて、八枚。巻尾には、「立聞の耳違」とあつて、八葉から成る短篇が附してある。その繪は、普通の春信の墨摺繪本にあるやうに、例へば、「正風體とあつて、上部に、「移しうゑてしゐゆふ宿の姫小松、いく千世ふべき梢なるらむ」とやうに、優しい字で、古歌が一首づゝ記され、繪は、ひらきで二枚に亘つてゐる。

その序は巻頭の一枚半に亘つて、代赭色の罫のなかに、青い色で摺られて居る。今私の特に言はうするのは、この序文についてである。乃で先づその全文を左に掲げて見よう。

「鳳暦開泰、案上に覧る嘉例の新圖。いつにすぐれてめあたらしきは、畫工の趣向珍重々々。あづまに名高きひし川の流れも洛のにし川に一變し、近世政豊の二信も、かの流を汲て世に鳴れりとす。今此ぬしも艶畫に名を得て、當世の情をうごかし、ひくひとあまたなる子日の遊び

春信に至る畫風の變遷

異色ある豐信評　政・豊と春信

農、幾代經ぬらん姫小松と云爾。」

さうしてその終りに、「奇山氏」と「不知足山人」と讀める二個の印章が、重ねて捺してある。さて、この序文で面白いと思はれる點は、色々あるが、最初に目につくのは、春信に至る浮世繪の畫風變遷といつたやうなことが、よく簡明に云ひ盡されてゐる事である。即ち「あづまに名高きひし川の」で、師宣又は師宣一派の畫風が當初、江戸の民俗趣味を風靡してゐたことを物語り、「洛のにし川に」で、京の西川祐信及び其の一派の影響著しく、世を舉げて豐潤な祐信式美人畫に、耽溺してゐたことも知れよう。さうして特に面白いのは、「近世政豐の二信もかの流を汲て世に鳴れりとす」の文字である。政豐二信とは、無論、奥村政信と石川豐信との謂である。政信が、西川の影響を受けたことは、『浮世繪派畫集』の解說にも述べてある通り、誰しもさうらしく思ふが、西村重長から出た豐信を、西川の流を汲む云々といふのは、蓋し初耳なことであらう。豐信は、私だけの淺い智識から推すと、寧ろ鳥居風から出て、その描線を、獨特の優婉なものにしたと言ひたい所であるが、それを西川の流れを受けたと斷言したのは、慥かに異色ある評であらうと思ふ。更に氣のつくことは「近世政豐の二信も云々」、「世に鳴れりとす。今此ぬしも云々」といふ語調である。これに據ると、春信は、政豐二信からいふと、まだ新進作家で、丁度市村座の若手連と、幸四郎、歌右衞門等との懸隔と、同じやうな氣がする。豐信は、春信よりも十三歲の年長ではあるが、春信と同じく、重長の門人である。それが、こゝ

當世の情を動かす

には政信と伍して、既に老大家の如くに崇められてゐる。之を以て見るも、豐信と春信との二人の當時の地位が知れようと思ふ。さうして、政信・豐信の二人、殊に豐信は、春信に多くの感化を與へ、丁度、春信時代を作る先驅者のやうであつたといふことが言外に肯かれると思ふ。

次に言ふべきことは、この鳳曆の文字である。これは無論、寶曆の意味を通はしてゐるにしても、何年のことか。開泰は鳳曆を受けて、唯、新年といふだけの意味であらう。序文の劈頭に、なほ一個、縱長の印がある。それには、何々の未とある。未は寶曆年間では、元年か十三年（春信此の時三十九歲、翌年が明和元年である。）よりしかない。春信の普通の繪本中、墨摺物で、年代の判つてゐるものの最初は、寶曆十二年の『古今欄』三冊と、同十三年の『諸藝錦』三冊とである。即ちこれらと同年代の、この艶本は、寶曆十三年の版であらうと思ふ。して見ると、彼の歿前八年の作である。（『畫人傳』に明和七年四十六歲歿とある說に據る）。恰かも彼の藝術がクライマックスに達しようとしてゐた頃である。さてこの序文の中に、「當世の情を動かし、引く人あまたなる云々」とあるのは、假令、聲名は、先輩の政・豐二信に比して一歩を遜つたにしても、當時の民俗心理に深い蠱惑の矢を投げたことは、彼等よりも一段の上にあつたことを證明して居り、また「當世の情を動かす」とは、春信の美人を評し得て、最も剴切な言であると思ふ。

然し、こゝに、稍怪訝を感ずる一の發見がある。それはある一圖の襖に畫いてある、梅と竹との繪

の落款に、「歸山筆」とある事である。歸山は、巻頭の序にある印の、「奇山氏」の奇山と音相通ずるではないか。然し、春信を、奇山又は歸山と呼んだことも聞かないし、また、奇山を一字に合せて、例へば山崎と稱したといふことも聞かない。さればこゝに歸山とあるのは、別人であらうか。然れども、艶本の畫家が、圖中の何れかでその名を仄めかしてゐる大概の例を思ふと、これが春信のことであるらしく思はれる。若し此の歸山が、序にある奇山氏であり、それが春信であるとすると、また頗る面白い。卽ち哥麿(うたまろ)の「歌さんは憎いね」よりも、より以上の自家廣告となるからである。

（大正七年十二月十二日稿）

不知足山人の判明

不知足山人の正體が分つた。小松百龜（本著三七二頁にも出づ）の事であつた。百龜は、「聞上手」「同二編」「鹿の子餅」等の笑話本も作した、笑話及び艶畫の大家である。畫は、祐信に私淑したといふが、春信とも交渉があつたらしく思へる。その「聞上手」二篇（安永二年三月）の序の落款に、寄山、不知足と讀める。署名は不知是。卽ち不知足、不知是、寄（奇）山と色々に稱したのである。其後自分は、不知足散人の名ある「艶道俗說辯」（まじめな物）や同「魂膽遊婢窟」五册（よみ和）を見た。家藏の聞上手二篇と全く同一書體である。卽ち前稿の逸題の艶本は、春信畫に、序と附錄の文とを百龜（不知足山人）が作した、卽ち序の春信推奬は、百龜が爲した物と類推されたのである。尙、此等に就ては、他日詳細に發表する機があらう。（大正十三年十二月補）

エロチックスに滲む心持

嘗て私がものし、本著にもその一部を發表する所あつた「浮世繪師の心理」とはまたすつかり異つた、艶畫（エロチツクス）を描いた浮世繪畫家の「何が故に描きしや」、又、「いかなる心持に於て」てふ彼等自らの心理と、それを需要し切望した民衆の「何が故にこを得むと欲したか」、又「如何なる心持を以てこを披いたか」の心理と、その二つに觸れて見たいと思ふのが、本論の主要眼である。

時代民心との接觸

凡て藝術は、いかな個人的の色彩の強い、作家の個性味の著しい作と雖も、その內部には、該時代の民心と（或は時代を超絶した永遠の人間性ともいふべきものと）那邊に於てか接觸しつつある。比較的この個性味が勝つてゐるか、或は此の民心の要求に對する適從味が多いかの差である。艶畫及びその作家たる浮世繪師の、外部の描かれた形の上にも內部の秘められた畫家の心の上にも、無論此の二つが何れかが強いか弱いかの差であるだけで、歸する所は、いかな個性本位と覺ゆる作家及び其作品からでも、民心への適從味は爭はれぬもの、容易に指點し得るものであらうと思ふ。

需要心理

したがつて、私は、艶畫に滲む心持を說くに方つても、一は、必ず民衆の心理——需要心理を先づ忽緒に附することは出來ないと思ふ。究竟すれば、物は、需要あるが故に生れるのではなからうか。

供給あるが故に需要が生るゝのではなくしてである。此の萬有一揆の理法は、無論この艶畫の發生、及び既に現れ、既に發達し來つた江戸時代無數の、全浮世繪發達期を通じて誰でもの作家がものせるこの畫風の批判にも、加へらるべきものと思ふ。故に、私は、本記述を、需要側と供給側とより見、先づ需要側の心理から觸れて行きたいと思ふ。

人々は、何が故に、艶畫なる一種の非公開畫を要求し、その發達を翹望し、且つその盛行を見るに至つて、歡喜措く能はなかつたか。（以下、人々・民衆なる語は、無論江戸期の人々、民衆に限られてゐることを、含んで頂かねばならぬ。）いかなる心持からこれを見むと欲したであらうか。これを需めこれを披かんと欲したか。第一に是である。こは、士君子たりとも容易に首肯し能ふ事であらう。我等の喋々を俟たざること、事自明の理であらう。宇宙儼存の意識、文化の創造、その發達、凡て「我」あるが故にである。千萬年の昔よりこの「我」があり、この「我」が無數に擴大して行つたからに外ならぬ。而してこの「我」は何處より生れしや。神秘なる手の至妙なる運動斡旋は姑く不問とし、一にその素材として陰陽男女の二性ありしが爲ではなかつたか。男女相存在して、始めて「我」生れ、始めてこの「我」が「我」を生むべく、生れながらの生存欲と中期に於て自覺せる生殖欲これに熾烈な勢を以て加はりたると、以てその一生を自己の「我」と「第二の我」との爲めに、及びその「我」を存在せしむる環境の爲に、自然的の奉仕、協同を爲し、以て此の一時期の「我」を終るのではなか

本然的なる「我」

必然的の現象
性的生活の表現、美化

らうか。卽ち凡てが、異性の相牽引より生れたのである。人類の文化、生活の進み來りたる現代にありては、性欲の他に、雜多なる環境及其の事件に對する卽ち我等の人文促進の爲に、「我」の發展欲を發現するありと雖も、その半面には、必ずこの「我」の原始的なる、本然的なる、「我」一個の天然の營み、卽ち性の營みを爲しつゝあるではないか。恐らく此の生殖欲こそは、或は他の尙一個の原始的欲望たる生存欲よりも更に强きものあらう。卽ち生殖を完全に理想的に果さんとして、生存欲を否定するもの頻々たるあるの現象は、今日でも然りではないか。卽ち生存欲も此の生殖欲の完全なる實行ありての隨伴たるが故にである。

却說、この生殖欲が最大最强の人間性、人間欲求である限り、我等の艶畫、或は艶畫要求の潛在意識と相均しき相近き軟派軟文學追隨の心（文化も廣汎的な藝術も、その人間に最も欲ばるゝは、凡て此の軟のみであり、卽ち軟のみが文學であり藝術であると、斷言してもよいかも知れぬ。然し、今假に特に軟の形容詞を附けておく。）も亦必然的の現象であらう。卽ち此等は、最も端的なる自他共通の性的生活の表現、進んではその美化である。理想化である。自己の行爲を何らかの形を以て表現し、又はそれを跡づけんとするは、卽ち「我」の「我」を印せんとするは、誰しも人間の欲望。故に艶畫の如きも其の創始時期にありては、單なる自己の性的生活の表現、印痕、かうした心理によつて生れたのであらう。無論當時は、彼等個々が、爲す人卽ち描く人であつたのであらう。然るに時は移つた、年は世紀を追うた。人

智は取捨選擇、美醜の判別力を有する所謂優秀なるの域に達した。彼等は、より完全なる、より美なるものを凡てに欲した。自己之を作り得ずんば、他代つて我に與へんことを希ふに至つた。乃ち、今我等が問題とせる人類性的シーンの表現——艶畫の上にも、優秀なる美化されたるもの、進歩したるもの、より複雜なるもの、より變化あるもの、更に平凡より異常へ、より異常なるものへ、恰も個々の性欲自身も單純より複雜、更には變態異常にと進みゆくが如く、然る自然の要求がそこに生れたらうことは、必然であり、然る事實ありきと斷言すとも必ずしも妄ならじと信ずる。卽ち玆に、艶畫の發生、該畫家の發生、若しくは畫家の執筆動機の根本原因ありと思ふ。(分業組織に進み來つたことも、この機運を促進せしめた一因ではあらう。)

より完全、より美なるものを欲す

平凡より異常へ

畫家執筆の根本原因

以上は、餘りに迂遠なる然し凡庸なる詮索なりと嗤笑を買つたかも知れぬ。然しこれが、根本であり、凡てはこれより發するものと信ずるが故に架說したのである。以上は勿論艶畫を含んだ廣汎なる性的藝術、文學の上にも謂ひうることである。さて今度は、時代のすべてを通じ、すべての民庶が、特に艶畫の形式に、かの物に、何が故に爾く要求の熾んなるありや。より微妙なるこの詮索に移らう。卽ち一に彼等が、端的に自己の性的生活の一縮圖として此等を見むと欲する點に於て、艶畫を選擇し、又要求してゐるのだと思ふ。軟文學軟藝術あらゆるものよりも、その骨子を端的に具現するは、此の艶畫唯一あるのみである。卽ち彼等は、端的に自己の眞をそこに再現、或は直視せんとして、艶畫を

自己の眞を

再現、或は直視

自己性的生活の複雜化

描き、後には特業的なる一畫家の手より産み出だされたる此等の艶畫に、その欲望を充足せしめた。而して更に人々の感情が複雜になりゆきつゝあつた世紀後に於ては、更に此の我の再現直視以上、我をして蠱惑せしめ挑發せしむるものとして、彼等を選んだであらうと思ふ。より多くの性的生活の沈淪、その複雜化變化、それが爲には、自己の發見と共に、他の無數の發見の例を見倣はんとした、そこに艶畫より受くる蠱惑の、自己性的生活との交渉が釀さるゝのであつた。卽ち人々は、原始的なる本能から、人間的の知識の複雜に趁りつつあつたのである。自己の經驗に、他の經驗を吸集せんとしたのである。卽ち彼等は、自己の性的生活を深め複雜化せんがために、他の經驗を知らんと、それに倣はんとしたのである。その結果はより複雜、終には誇張變態をすら知らず識らず求むるに至つた。卽ち原始の眞純が發達の墮落に導かれ來つたのである。（この徑路は、艶畫そのものの變化、內容の發達上にも謂ひ得られる。然しこは、後段の供給心理〔畫家心理〕に於て、悉しくいはう。）

經驗補充、刺戟劑

無經驗者に對する性的教科書であつたといふよりも、有經驗者に對するより多くの經驗補充の器、更に鈍りたる感覺、或は生來鈍感なる彼等或は單調平凡化せんとするに對する刺戟劑であつたといふのである。而して江戸時代の民心は、いかなる時代もこの艶畫需要が民衆の內部にあつた。御殿女中、或は未經驗者の經驗有事の際（結婚）に於ける、或は幻想的自己滿足、或は性的教科書（母のをしへの代用たる）といふよりも、寧ろ成人者の間に、有婦者有夫者の間に歡迎されたこと頗る多し、十中

の八九は然りであつたらうと思ふ。そは、浮世繪の凡ては、その眞面目側に屬する公判の美人畫風俗畫と雖も凡てその多くは、特殊なる畫（艷畫）に於けると共通の、有經驗者が他の變化ある、相違せる經驗を得て喜び、以て自家藥籠中の物となし了せんとする體の民衆心理が働き具現されてゐた。凡てに所謂あぶなき風姿、匂を漂はせるを目にして、自己のエロチックなる感じを深めんとした。しかもその氣分の理解、陶醉者輩が（卽ち錦繪の鑑賞者が）成人者流に寧ろ多かつたことよりして、卽ち些少の經驗ある者、偉大なる經驗にぶつかりて、いよ〳〵喜ぶ體の心理の發現に外ならなかつたに顧みての、予の斷言である。蒟蒻本、濡れ場多き芝居、（或は俗曲）を歡迎し、勿論理解したのも皆、成人者にその過半を占めてゐた。卽ち些少の經驗なくんば、何んぞより複雜なる經驗の理解、それに對する歡迎、興味湧かざらんやは明白なる理ではないか。

　彼等は、卽ち如斯く性の蠱惑を端的に得んが爲に、その描かれたる說かれたる內容を以て自己の生活の素材たらしめ、經驗の補充たらしめんが爲に、平凡化を防ぐ唯一の刺戟たらしめんが爲めに、艷畫に對した、之を要求した。是れ最大動機である。然りと雖も尙他にかゝる事もいひ得よう。卽ちこは、當時代の民族心理の考察上からではあるが。卽ち、痛ましき憐れなる封建時代の、人間の本能たる自己發展欲を阻害して措かぬ所の、人々の個性の自由、表現の爲には最不幸時代、暗黑時代ともいふべき時代に於ては、此等の上に、自己を韜晦し、寧ろ此等の上に豪奢たらんとし、若しくは、その

幻象に浸らんとするの他はなかつた。一將軍のみに比較的自由が殘されてあつた。量の相違こそあれ、上は大名より下は町人に至るまで、凡て自己の自由、發現をあらゆる方面に杜絶されてあつた。遺されてあつたのは、唯一、性的生活の上のみであつた。大名の折花攀柳、町人の二十四文狂ひも凡て此の欲望――個性の自由欲、表現欲の轉換に外ならぬ。將軍と雖も、時代・制度の些少の奴隷たらざるは得なかつた。卽ち彼等將軍に漁色放蕩者流の頻出したるも、一に此に、時代・制度の束縛に對する憤懣を遣れんとする自慰の心にあらうと思ふ。況してそれ以下のものに於てをや。卽ち彼等は、性の國に於て、纔かに、自己の飛翔を求めた。自由、征服、瑰奇の快感、充足感を求めた。その傾向に隨伴し、大部分これの氣分を煽り、或は訓へ、これを導いたものは、多くの軟派文學藝術、就中端的には浮世繪、就中々、此の艷畫の類であらうと思ふ。自由、征服は、軈て常態より變態にまで趁らしめた。

彼等の或者は艷畫に現るゝ獸□に、同性相姦に、變態欲に喝采した。龍陽の不神聖は、士人より町人にまで流行しつつあつた。家庭の婦よりも性の蠱惑味多き娼婦に隨喜した。こも一に、彼等のより惡しき進化の跡である。艷畫家は、彼等（民衆）の欲求に副ふべく凡てを描いた。殊に民衆の征服欲、性の國の王君たらんことを欲する民衆の心理に伴ふべく、多くその主人公を、彼等の大多數が羨望しつつあつた貴族階級、殊に最高階級の將軍、若しくは諸侯の祕事にその取材を藉りた。江戸末期無數の源氏繪、其流の艷畫（種彦作の草双紙たる田舍源氏の主人公足利光氏、其の實十一代將軍家齊をモデルとせり

てふ源氏に關する繪を源氏繪といふ。）の類は、その露骨なるものであつた。卽ち彼等は、此等の艶畫によりて、色界の自由者、最大權力者、暴力者、征服者、士人たらんとし大名たらんとし、果は將軍たらんとしたのである。卽ち亦彼等の心理可憐ならずやといひたい。

供給者の心理

需要者（民衆）の心理は、此に姑らく息め、以下筆を改めて、今度は畫家、艶畫の供給者の心理に考察を移さねばならぬ。

供給側――浮世繪師の方からいへば、やはり本然の要求に驅られて物するのと、卽ち本然の立場と、一は、之を他の何物かに利用せんとの、卽ち功利的の立場との二あることは、無論である。然し、畫家――供給者。民衆――需要者たりと爾く截然たる區別の附き來つた後世にありては、如上の中寧ろ本然性の立場は菲く、功利的の發途がその主を占めてゐるといつてよからう。而してその功利的な、自己の何物かにこを利用せんとしたことに於いても、我等はその動機の上に雜多な區別を認めるが、今先づその二大特長ともいふべきを列擧し解說し、以て彼等――畫家の艶畫に對する主要なる態度――功利的の二大方面を先づ闡かにしよう。

純なる動機

功利的な彼等の立場に、純と不純との正に相反した動機から起る二種の著しきがある。純なるは、則ち自己の畫技の熟達研鑽上の好機、材料としてこの艶畫の描線に習熟せんことを努めたのである。

従つて素描のもの、或は密畫的のもの、種々にその傾向を追うて、肉體の衣を被らせたる、或は被らせざる男女の描線の習熟に努めた。而してこれが習熟の根本には、無論粉本として自國同派の諸先輩の板畫肉筆、更に明・清の畫圖に據つたのであるが、往々には、モデルを有して、これを實寫したと思はるゝのも尠くはない。甚しきは顏面の微細なる表情にまで實寫的にである。姿態は甚しく不自然且つ變態を極むるも、その柔しかも靱なる肉體の描線には、寫實をはなれたる寫實、姿態の變態不自然の如きも、彼等の入神の技によりて、常態、眞をはなれたる第二の眞となつてゐるものも少くはない。とにかく根本は、寫實、又は眞實に近邇せることに重きをおき、それより出でゝ多少、個性・趣味の相違、或は畫家自身の性的興奮の强さ弱さの相違から、畫樣にも單なる寫實、或はうそから出たまことゝなり了せざる僞、或は虎を描いて猫に類するものや、或は天衣無縫、寫實と理想とが相融化し、心飛び魂消ゆる恍惚境を非寫實的に描き出してゐるものも間々ある。がその根柢は、矢張り一個の實である。それを楔子として、騰れるか、又は降れるかの相違である。

　とにかく此等の種別があるにもせよ、彼等の殆どが、此の艶畫の描畫に親しむことを以て、彼等の畫技、主に人物畫の習練の具とした。この一事は、古來誰しもの熟知せる所、敢て再び細說するの要はなからう。次に不純なる動機からの功利的な立場とは何であらうか。謂ふ迄もなく、賣らむかな、の卑しき心の發はれである。俗衆――否殆どの民心に媚びんとする、而して自己の畫技を誇らんとす

大いに至純なるもの

る、甚しきは、に由つて自己の名聲を高めんとする、卽ち自己の畫家としての發展欲のまた一機會にこれを使用したかの觀あることである。好色多淫なる當時の人心に只管媚びんとして、能事終れりとなすものも少くはなかつた。卽ち娼婦が嫖客にあらゆる姿態と、あらゆる言辭を弄して、自己の情そこに伴はざる誘惑教唆を試むるが如く、單に阿堵物の爲、比較的進みたるものなほ自己の秀拔なる技巧に對するその效果の醜然擧れるを見て自ら喜ぶてふ卑しき胸臆より出でたる、一は打算、一は自負に對する自らの滿足愉悅、かゝるものに過ぎなかつた。然りと雖も偶々には眞に戀愛國の幻想に自ら醉ひ、或はその一部を自己若しくは自己に邇きにモデルを藉りて、これを表現し、自己一身の好色心滿足の意味に於ける落筆も少くはない。寧ろ、これ等は、前者所說の如き他を度內に措けるよりは、大いに至純なるものと謂ふべきにはあらざる乎。春信より歌麿にいたる間の作家の多くは、此の比較的純なる立場にあつた。卽ち自ら作る甘き戀愛のシーンに陶醉、その描畫も、自ら微笑む體の自己の趣味を以て貫けるものを見るのである。然れども、その歌麿等にありても「歌さんは憎いね」の類を、畫中の人物をして曰はしむるを見ば、そこに、不純なる動機、自己の畫技の效果を、自ら進んで廣告せんとしたる、卑しき心持の仄めくを肯定せざるを得ぬ。

事、微妙なる該畫家の胸裡の臆測に關し、素りに斷言し能はぬものであるが、中には、自己の性感の魯鈍、或は先天的の能力薄弱を、寧ろ自己の畫技の上に、その正反の異常なる好色、猛烈なる漁色

自慣の情を行る

の場面を交々展開描畫し來つて、以て自體の缺陷又は境遇によりて畫面の如き放埒豪奢なる實行を杜ぢられたる自慣の情を自ら滿たさんとしたのもなかつたであらうか。(恰も西の國の小說家ゾラが、自己の性的不能を、例の姦淫小說の連作を以て滿足したりとの一說の如く。)浮世繪畫家は、當時の戲作者と同じく大凡そ花柳の豪者(えらもの)(實際上の)ではあつた。しかし年齡に反比例せる性的能力の頹廢にはいかに剛情なる、聰明なる彼等も如何ともする能はなかつたであらう。かの歌麿の如きも殆ど遊君畫家、青樓畫家たるを冠せらるゝ程、遊君・青樓を以て自己の畫材とした。成程彼が荒蕩であつたとの傳說も無きにあらざれど、そは壯時と限られてゐる。晩年なほ毅强なる性的能力ありしや否や。寧ろ表現者製作者自身は、却つて幻想の中にそのモデルを藉り、或は寧ろ想像誇大が多く、若しくは他にモデルを藉りたる多きにはあらなかつたらうか。溪齋英泉も、その繪本類は多少の材料の複雜を見るも、その板畫の全部は、女性、殊に娼婦——歌麿の遊君に比して、こは娼婦といふ下卑たる名詞が最も適好である程、それ程、彼は、卑しきしかも人間本然の、全裸體的の、性欲そのものといひたき婦女を描いた。恰も明治文學の紅葉氏の脂粉をかさね、綾羅をまとひ、彼の性格とは寧ろ反對ともいふべき暑苦しき、戀愛國の女王の如く描破されたる女性を以て歌麿描くの美なりとせば、「女子は生殖器を中心として成されたるもの」と喝破せる綠雨氏の女性は、英泉にあらずして何ぞ。大名に張りを通した太夫の存在は、すでに歌麿當時には眇影だに殘してゐなかつたが、然し彼の作畫には時として如斯き女性崇拜のもの

畫、印銘の差

陶醉感

皮肉感

挑發感

あるを見る。然るに、英泉に至りては、唯に男子の玩弄、よくいへばとて男子にあらゆる嬌笑、媚態を投げかくる女性として描かれたるもののみ。英泉の畫には必ずそこに性欲伴ひ、歌麿の畫には必ずそこに戀愛伴なふ。

事、英泉と歌麿二輩の比較論ではなかつた。筆端、思はずも平生の予の抱懷に觸れたるを許せ。（なほ此の英泉歌麿の比較は、予が舊著「浮世繪の印象」〔大正八年天祐社刊〕にも、「神性と獸性」と題して觸れておいた。本著にも既に「浮世繪の肉體美」、「浮世繪の賣春讃美」等に於て、その一端を披瀝しておいた。）

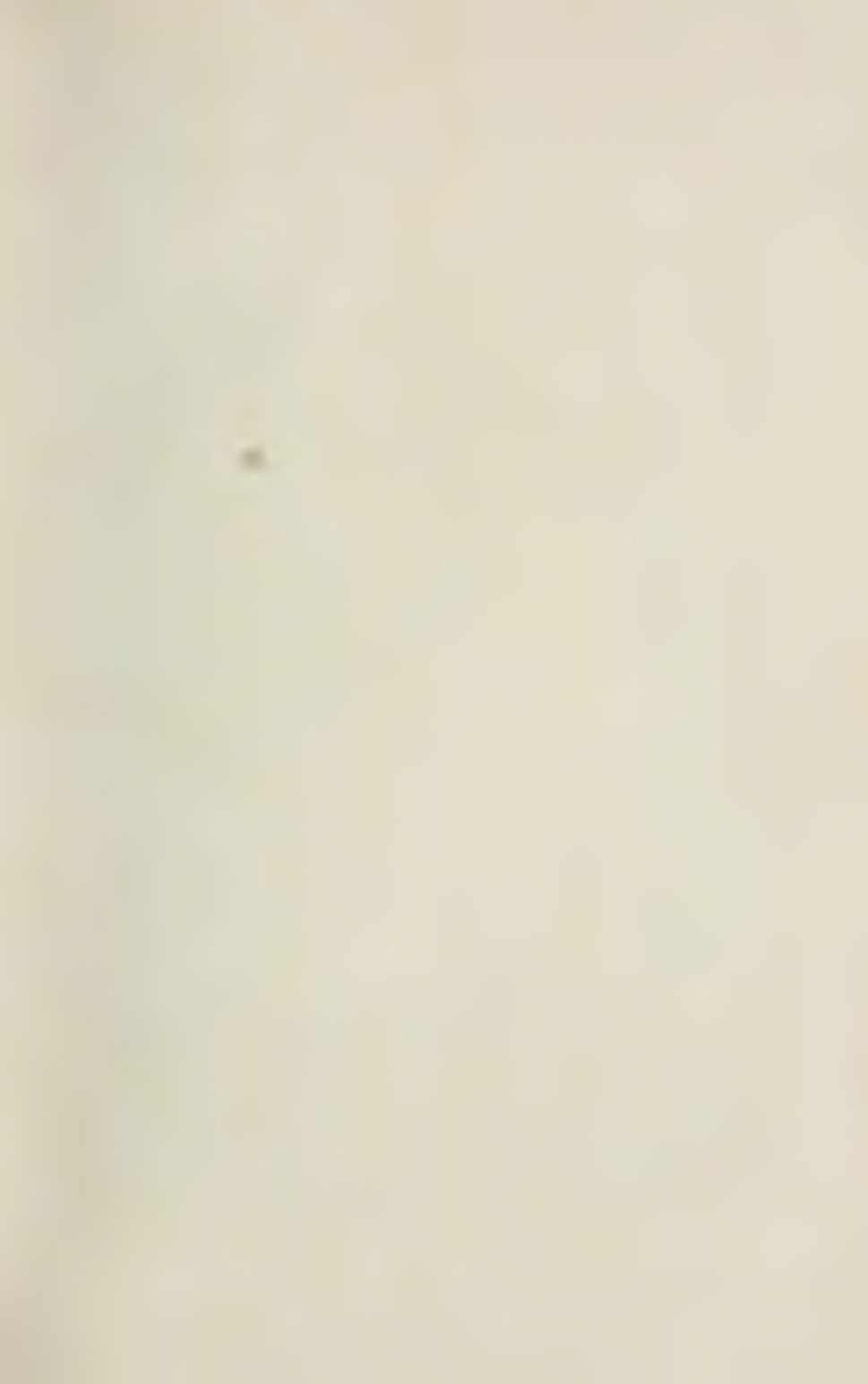
以上を以て、一は需要者――民衆から、二は供給者――畫家からの艶畫(エロチックス)の上に浸(ひた)された心持を遍く說き終つた。さらば、我等は、終りに臨んで、一應、德川泰平二百餘年間に現はれた我等の目睹せる範圍に於ける艶畫の、直接、畫そのものの上に滲(にじ)む畫家自身の心持、隨つて印銘の差を前文と重複せざる程度に於て列擧し、大たいに評隲してみよう。表を以て示せば、

（陶醉感）　師宣――祐信――政信――春信――湖龍齋――春章――清長――春潮――榮之――歌麿

（皮肉感）　歌麿――初代豐國――北齋――英泉――國貞――國芳

（挑發感）　英泉――國貞――國芳――歌川及菊川末派

右の表示に據るが如く、歌麿の如きは、陶醉感にも足を踏み入れ、また皮肉感にも踏み入れてゐる。即ち此の如きは、二者併有と見るべきが故である。（皮肉感と挑發感とに於ける、英泉、國貞、國芳の三者の

如きも、兩者併有と見るべきである。）尚、此の以外には、廣重をいふべきであるが、此は年代の順を以て曰はゞ、無論皮肉感の末であらうが、彼の艶畫の氣分は、寧ろ陶醉感である。卽ち如斯き例外無きにしもあらざるも大半は、右の表示が妥當、若しくは眞實味が多からうと思ふ。勿論此の三大別は卽ち陶醉（悉しくは自己陶醉。）より皮肉（くはしくは對他皮肉。）へ、更に挑發（くはしくは對他挑發。）への推移は、各畫家の一々に據らずとも、艶畫發達の上の當然の歸結、過程であるかも知れない。自己陶醉は、醇である。對他は內に於て不醇を加へ、挑發に至りては不醇の不醇、墮落である。然しこは、艶畫といふよりも寧ろ一般美人畫の變遷の大潮流、滔々たる不可抗の推移にして、如何ともすべからざるものかも知れない。試みに公刊の一枚繪、春信の淨潔なる戀愛美人畫と末期芳幾あたりの美人畫のしだらなき新東京娼婦とを比較せよ、何人もそこに陶醉のうらゝかなる峠より蠢々たる挑發の谷底に陷り來つたことは、否めぬ目睹事であらう。況して艶畫に於て此の傾向著しきものがある。しかし陶醉も極まれば、稍そこに目覺めたる自己意識を喚び起し、他に對する皮肉を產まざるを得ない。歌麿の如きも、甘きシーン（描畫の上の）に自ら浸(ひた)ると見せかけて、その實そにより多く陶醉せしめらるゝ自己以外（觀客）の未經驗、若しくは幼稚なる、僅かにして魅了され易き、我等の眼と心とを嗤笑してゐるのかも知れぬ。「歌さんは憎いね」の類は、この皮肉萬幅たりである。國貞、國芳わけて英泉の如き、皮肉萬幅、殊に彼等が念入りに描ける何でもなき彼等の艶畫本の扉繪（最初第一枚目表面の繪）の如

きは、（この類の扉繪は、既に春章、春潮、歌麿輩にも可なり念入りなるものありといへども、それらは單なる風姿さらでもなき表情の女、若しくは男の顔、半身のみ。）何たる皮肉横溢ぞ。挑發といはゞ、彼等の他の該流義の畫、若しくは彼等の末輩たる挑發期の挑發畫樣よりも更に、以上なる挑發感を與へ、しかもその實何でもなく、こをして挑發的なりといふは、見るものの卑しさに由ると云ひたげの其の描線、顏貌、風姿、皮肉の極と謂はば極、挑發の極といはゞこれ程の挑發はあるまい。我等の偏狹なる好惡の情よりせば、我等の艶畫に期待するは、寧ろ此の第一の繪、何でもなき、その實大に何でもある繪也。しかも陶醉に厭き、挑發に反感を抱いたる果、この皮肉さを見れば、三斗の溜飲忽焉として下るの感あり。英泉の如きは、まじめなる公刊なる、大錦判の錦繪にも、その大首繪、或は一人坐、一人立の繪には、間々その然るに近きものを見受くれども、然れども大錦の此等にありては、寧ろしかるが當然にして、何となれば、枕、衾、行燈、懷を覗ける彼女の頤の如きによりて、然るを既に何處までも念押しをれば也。卽ち却つて、我等に艶畫の、淫猥本位なるにしかも、冒頭に掲げられたる、オヤ何でもない本だよといひたさうな扉繪の、その實他の全卷の艶畫に勝ること數等なるものある此等に、駭心驚目、我等は、魅了の甚しきものなくんばあらずといひたい。普通艶畫樣の露骨さ、その實如何に異態新工夫を凝すも結果は、同じ效果に終るべきよりも、寧ろ或る皮膜をそれに被らせ、その實相は、人々の想像の自由なる翼の飛翔に委したらん方、より效果ありげに思はるゝは非か、予のみの懷にや。

機微を穿ちそを具體化す

最大傑作

この機微を穿ち、そを具體化し、併せてその巧妙なる畫技の皮肉感を盛れるもの、彼等〇印（わじるし）の屏繪ならずとせんや。

却說、艶畫の挑發本位の物の如きは、予は唯、赤し、毒々し、醜亦醜といはんのみ。他に何等曰ふことなし。さてこゝに諸賢に艶畫中、皮肉ぶりの極點、予の目して最大傑作と稱するもの一枚を掲げん。こは、不器用又平（初代國貞）畫、女好庵主人、天保壬辰春正月 三津世川 極樂遊（土器お傳に關する和印本の一種、金壺堂（耕綿堂）板行）の口繪全一葉也。諸賢、その眼、その表情の以て純艶畫以上なり、予の言の妄ならざるを知り給へと云爾。（英泉作艶本の口繪にも割愛すべからざるものあれど、惜い哉、彼の畫は殆ど男女一對なり。したがつて稍皮肉さが露骨なり。故に此に略く。）

――大正十二年十一月――

藤十郎擬間男の件

元祿濡れ場の本尊坂田藤十郎を題材にした「藤十郎の戀」が嘗て大毎の紙上に創作として發表せられた時、私は何の氣なしに讀んでゐた。面白いとは思つた。然し自分の藝術表現の爲に、一人妻の感情を弄ぶといふその筋が、餘り近代染みてゐて、藤十郎その人としては受けとられぬやうに思つた。原作者菊池寛氏の特殊な創作興味とだけ考へた。ところが當時間もなく調べ物の序に演劇に關した古隨筆を檢索してゐたら、偶然この「藤十郎の戀」の出處か、又は菊池氏がこれからヒントを得たのではなからうかと思ふ記事を、私は發見した。稍時候後れの話ではあるが、まだ誰の口からも聞かぬらしいから、左に披露しておかう。

それは賢外集（藤十郎と同期時代の立役、染川十郎兵衛なるもの、聞き覺えの事どもを、東三八（狂言作者）が傳へて書置けるもの。賢外は十郎兵衛の法名なりと）といふにある。「賢外集」は、大半は坂田が逸事逸話を傳へたものであるが、就中、左の一項がある。〔因みに、賢外集は、故佐々氏編「歌舞伎叢書」、又は國書刊行會刊「新群書類從」演劇第三に所收。〕

『坂田藤十郎、祇園町、ある料理茶やのくわしやに戀を仕掛け、やがて首尾せんと思ふに、件の妻

手厳しい皮肉

女、奥の小座敷へ伴ひ入口の灯をふき消したり。時に藤十郎、すぐさま逃げ歸りけり。其翌朝、右の茶やへ行き、妻に打向ひ、御かげにて替り狂言の稽古をしたり。此度の狂言は、密夫の仕内なり。つひに左樣の不義を致したる事なければ、甚だ此の仕内に困り、此間太夫元より、早く初日を出し申度と再三せがまれ、日夜此事にあぐみ、密夫の稽古を男に出會ひもらひては其情うつらねば、ひとつも稽古にならず。我願ひ成就致し、稽古仕たり。今朝太夫元へ、初日明後日御出しと申遣はしたりと、一禮申されし。一座の人々、扨々名人と呼ばるる人の心がけは、凡慮の外なる事と手を打ちぬ。』

これである。菊池氏のと徑路は同一であるが、然し菊池氏は、芝居の爲の機と知つて、妻女をして自殺せしめてゐる。これは、私も、この妻女を殺した方が作としては高調を來して面白いと思ふ。賢外集の通りでは餘りに呆氣ない。入口の灯をまで吹き消した女が、その翌朝、計事であつたと第三者扱ひにしてゐる藤十郎の顏を、平氣で見て居られるといふのも不思議だ。

藤十郎は藤十郎で、平氣で舞臺い話のやうに事の仔細を述べてゐる。而も「……と一禮申されし」は、女にとつては隨分手厳しい皮肉ではないか。どんな顏をしてこの女はこれを聞いてゐたのか。前夜、灯を吹消したのも、ちよいと役者を買つて見よう。それに當時濡事の名人、下地は好なり御意はよしの上方女式の浮氣から來たのか。灯を吹き消したのに、嚴肅な心持がない以上は、翌朝のこの種

一座の人々の感心

明(あか)しにあつても、却つて岡惚れ役者の材料になつただけでも嬉しいと、反對に祝儀でも包む氣になりはしなかつたか。「一座の人々」がさても／＼と感心したのも馬鹿げてゐる。然し役者、芝居が生活の要素であつた京阪の當時の男女としては、尤もかも知れない。今でも大分この類はあるらしいが。でこれを菊池氏があゝいふ結末を見せたのは、菊池氏の世界であり、本當の京阪の色を出してゐないといふ評を生んでもいゝと思ふ。

くわしやの說明

却說、前述の「賢外集」の中にある、くわしやといふのを餘計の事乍ら說明しておかう。これは、當時の浮世草紙にはざらに出てゐる言葉。字を宛てたら花車。大槻氏の解によると、「花車の音にて、妓(はな)をまはす意とも、纒頭(はな)にて廻る意ともいふ。遊女屋にゐて、諸事のとりもちをする婆なり。」とある。卽ち遣手の類をいふらしいが、然し、これは主に江戸方面の稱呼であらう。京阪地方のくわしやは、別者である。卽ち守貞漫稿第二十、娼家の鑓手の條下に、「京阪には揚や茶屋の妻を花車と云ふこと、今も然り」とある。卽ち此の藤十郎の場合のくわしやは、無論貨食店(おちやや)のお女將(かみ)である。

藤十郎の輪廓

尙々藤十郎を悉しく御存知ない方に、ほんの輪廓をだけ書いておかう。藤十郎は、濡れ事、殊に傾城買に扮して古今の名人、寶永六年十一月一日歿した、六十五歲。（一說六十三歲）。夕霧の伊左衛門は、格別盛名を博して、一生の中この役を十八回、而も事每に人氣を博したといふ。近松の淀鯉出世(よどのこひしゆつせ)瀧德(たきのぼり)のうちにも「坂田藤十郎が夕霧をま一度見たいと思ふたが」とある。

歌舞伎役者の心得

藤十郎の慷慨

賢外集は、この藤十郎の逸話、中には、藤十郎が人に教へた歌舞伎役者の心得やうのものもある。藤十郎は今で謂ふ寫實主義の男であつたと見え、次ぎのやうな詞がある。

『歌舞伎役者は、何役を勤め候ふとも、正眞をうつす心がけより外事なし。』

と。然し性格は、濡事師に似合はぬ案外謹直であつたらしい。それは、

『舞臺にて、傾城買の狂言を勤むるさへさしあひなり。然れどもわれは（役者なれば）是非に及ばずと申されし。』とあつて、筆者は、藤十郎の慷慨したやうに、近き比益々濡事の極端な表現「二人寝る狂言など組」むやうになつたその當時の作者、役者の廢頽を一樣に嘆いて「親子兄弟一所に見物なり難し。扨々苦々しき事なり。」といつてゐる。

藤十郎のことは、其他諸書に散在して居る。「新選古今役者大全」には藤十郎を堅固と評してゐる。逸話の多いものでは、賢外集の他に、「耳塵集」（上下）などもある。

——大正九年五月——

『踊形容』に就て

特殊語

これは、從來の文獻に嘗て現れなかつたことである。「踊形容」とは、決して單に踊の意ではない。寧ろ芝居の謂である。以前から錦繪――芝居繪の家藏のものに、此の特殊語を私は發見してゐた。爾來數年、明治以後の諸先輩の著述、あらゆる舞踊の記述にも演劇史の著述記文にも、此の語は現れなかつた。現れないばかりか或は抹殺されてゐるのかも知れない體のものである。坪內逍遙博士の著述記文にも、まだ私の知る範圍では現れないやうである。然し博士は無論家藏のものと同樣の錦繪を恐らく觀られた筈であるし、またより多くの「踊形容」の文字ある芝居繪を見られてゐるかも知れない。然し、まだ同博士は勿論、靑々園氏あたりからも聞かぬ事であるから、私は遲まき乍ら、此に披露することにした。

所作事の類か

芝居の總稱

「踊形容」とは何か、先づ此の問に答へねばならぬ。「踊形容」とは、芝居、演劇といふに同じである。知友の一二は、「踊形容といふのは、まだ知らぬ言葉であるが、若しあるなれば、所作事の類ではなからうか」というた。以下に實證を擧げるから、分ることであるが、斯くの如き解釋は、唯、文字の表面上の解釋に過ぎない。實は、所作事のみならず芝居の總稱として用ゐられたやうである。といふて

も讀者には、茫漠として便りない感がしないでもなからう。私は、以下家藏の錦繪によつて、これを證據立てよう。

家藏の芝居錦繪の中に、踊形容といふ文字のあるのが、一枚二枚、否全部で四種、計十一枚ある(內三枚續三種)列擧すると、一、「踊形容江戸繪榮」(初代豐國筆?安政五年版)三枚續。二、「踊形容新開入之圖」(三代豐國畫。安政三年版)三枚續。三、「踊形容樂屋之圖」(同。同)同。四、「踊形容外題盡」の內、イ、踊形容外題盡兒雷也豪傑譚話(三代豐國畫。嘉永五年版)一枚繪。ロ、踊形容外題盡鼠小僧東君新形(三代豐國畫。安政四年版)一枚繪。以上の四種十一枚である。內、嘗て寫眞版として他書に掲載されたものは、「市川家歌舞伎展覽會圖錄」に、踊形容江戸繪榮が載つてゐる。大正九年一月の演藝畫報(合同七ノ一)には、その一三九頁に、「樂屋の役者(安政時代)右手は座頭の部屋で、突當りが鬘師の部屋です。」として踊形容樂屋之圖の內右二枚。その一四〇頁には、「樂屋の役者。二階口の所です。」として、踊形容新開入之圖の內右二枚が掲げられてゐる。其他は何れにもまだ登載されてゐない。右の圖錄や演藝畫報所有の方には、重複の恐れはあるが、此等畫面の大體を左に記してみよう。

「踊形容江戸繪榮」

「踊形容江戸繪榮」は、三枚續。平土間の半ばから、兩側に棧敷二階、正面に舞臺、天井、左に花道。凡て劇場內部の構造である。劇は、暫である。花道に例の暫が三桝の紋も大きく、兩袖を張つて蹲つてゐる。時期は、夏であらう。土間の職人風の見物は、所々裸體、若しくは半裸體である。さて此の

繪に就て、私の疑問がある。これは初代豐國か三代豐國かといふことである。歌舞伎圖錄には、何代ともしてない。唯、豐國筆錦繪とあるのみであるが、今、眼の當り此の原畫に向ふと、すつかり初代の畫樣である。三代では到底あり得ない。三代が初代風に描いたにしても餘りに初代樣である。唯初代といふに疑問が置かれるのは、(午七)の檢印のあることとである。此の檢印は無論午七、改印を伴はなかつた安政五年であることは、誰も知つてゐよう。然るにその當時は、既に三代豐國の時代である。(初代は、文政八年歿。)幽靈が描いたのでもまさかなからう。然し、畫樣は無論初代である。これに就て、私が昔、迂潤な錯誤(今では錯誤と思ふ)をした事がある。それは、雜誌「浮世繪」に嘗て「一陽齋雛獅豐國畫」とあるのを、初代なりとあつた。(同第十五號)それをまた私が三代だと反駁したことである。(同、第四十號。及、本著既揭『浮世繪漫錄』四參照)その時は、檢印のみに重きを置いて斯く斷定したのである。それは、この踊形容江戶榮が同じ一陽齋雛獅豐國筆の落款であるからであつた。然し今では全く之を撤回して、無論初代の畫稿である。初代の畫稿を三代當時に出版し、三代が色を入れたのではなからうか。故に安政五の檢印があると、斯く思ふやうになつた。然し、「踊形容江戶繪榮」といふ標題はどうか。若し三代の出版當時に、此の題を新たに附けたなれば、異存はないが、初代の畫稿に已に此の題が附けられてあつたとすると、私の本記述に大なる交涉を有つこととなる。卽ち初代の文政年間に既に「踊形容」なる語を生んだ證據であるからである。畫が初代としても此の畫題は

「踊形容新開入ヶ圖」
「踊形容樂屋之圖」
「踊形容外題盡」

何うだらう、倘若干の疑問なき能はぬ。言ひ忘れたが、此の三枚續は、平出・藤岡氏の「日本風俗史」に摸寫されてゐる。それには此の外題なく、落款もなく、「歌舞伎芝居」(文政時代)と明記されてゐる。平出・藤岡氏の原圖は果して此の外題を有しなかつたか。或は複畫家の拵へではなかつたか。「日本風俗史」は寫眞版ではないから、此の疑もある。とに角、此の繪は初代か三代か。初代とすると、此の外題は、三代の加筆か否か。それが決れば、「踊形容」とは、文政年間に已に使用せられた語であるか否かゞ分る。(「踊形容江戸繪榮」は、また暫の芝居繪であるから、暫の役者年代の詮索からも斷定されよう。迂路であるから、暫く避けるが、此の俳優も七代團十郎のやうである。すると、無論初代豐國の文政六七年であらう。)

とに角少くとも嘉永安政へかけては、無論云つたに違ひない。卽ち以下の諸圖皆然りであるから。「新開入之圖」は、演藝畫報所載の他に今一枚左がある。それには、樂屋の一部が見えてゐる。「樂屋之圖」も左一枚、十郎と見える札の下に、恐らく闘三であらう、髮を髮結に結つて貰つてゐる。右手の板戸の上に、定として、一踊興行中他行不致事、一正六ッ時より出勤可致候事、右之通相守可申候以上月日と貼られてある。此の芝居興行中とあるべきを踊とあるのも注目に値する。「踊形容外題盡」は家藏の他に尙數枚ある筈である。(他で見た事もある。)兒雷也は四立目藤橋の場。高砂、兒雷也の出會、橋下に蟇の吐いた兒雷也の廓通ひの姿。さうしたものである。鼠小僧の方は、梯子の上に足をかけた鼠小僧と捕手。大詰樋の口の場である。(此圖、默阿彌全集第貳卷に飜刻されてもゐる。)

嘉永五年から安政五年まで

繪の解説が目的ではないから、これ位ゐの事にする。とに角少くとも嘉永五年（外題畫の兒雷也。）（AD. 1852）から安政五年（AD. 1858）の間は、「踊形容」と芝居を稱した筈である。所作事のみの謂でないことは新開入之圖や楽屋之圖でも證據立てられる。特に踊興行中は云々の貼札も有力な證據である。だんまりや立廻りの類かとも思へるが、

踊形容樂屋之圖

三枚續の内中

水野越前守の風俗肅清

語義

補遺

踊形容について（坪内逍遙）

（鼠小僧の立廻りや藤橋から）然し暫の繪にもある。殊に劇場全圖に、「踊形容江戸繪榮」とあるではないか。矢張り芝居の替名に違ひない。どうして、芝居を踊形容と、斯かる替名を用ゐたか。これには、嘉永安政期に專ら稱したとして、（初代三代疑問の「江戸繪榮」は別問題として）丁度天保以後に當るから、それに水野越前守の風俗肅清を結び付けたい。水野越前守の天保十二年十二月の三座引拂替地やら、十三年九月の役者取締方申渡、弘化四年四月同申渡やら、色々の役者風儀の肅清が、轉じて從來の此の芝居といふ名義までも憚るやうになり、踊形容なる新造語を用ゐたのではなからうか。

とに角以上を以て「踊形容」解説の一端とする。餘は識者によりて補足せられたい。尙ほ「踊形容」それ自身の語義の詮索としては、踊と形容とは切離すべきものでなく、踊卽ち形容の意を重用して語呂をよくし、一に從來の單なる踊と區別したものであらうと思ふ。

——大正十二年一月——

補遺

踊形容に就て

御著、踊形容についてのお説、面白く候。屢々目に觸れたる字面ながら別に調べもいたさず今日まで打過ぎ候ひしが、成程法令との關係に原因したることに候ふべし。尙東京へ歸り候て、

草双紙體の發見

「踊形容花競」の十册

取調べて見ることにいたすべく候。

御說の如く早くも天保以後の造語と存じ候。草册子の外題にもあり、今手元には何も參考書なき故、明かには申しかね候へど、あの三字を「ダテスガタ」と訓ませたる例もあつたやうに記憶いたし候が、或は思ひたがへかも知れず候。〔下略〕（大正十三年一月十日熱海にて、坪内逍遙）

前掲、坪内博士の書簡にも言及されてゐるが、自分も踊形容と命題した草双紙體のものを其後發見した。然しこれも矢張り「をどりけいよう」と訓ませてあつて、坪内博士の曰はるゝ「ダテスガタ」ではない。先日坪内博士にお逢ひした時、この「ダテスガタ」と訓んだ草双紙に就て御尋ねした所、記憶定かならず且つ震災後それ等は凡て早大圖書館に寄附して、今整理中ゆゑ、何處に紛れ込んでゐるか、果してまたダテスガタと訓ませてあつたか、それも曖昧とのお話。で自分だけの其後見付けた草双紙體のものに就て曰はう。

それは、「踊形容花競（をどりけいようはなくらべ）」の十册である。（十册といふのは、初編卷尾の豫告に由つてである。然し内五册迄は確實に出た筈だ。現に昨年秋の大阪鹿田書店の目錄に此の本初編より五編迄卽ち五册の賣物が載つてゐた。）内、自家所藏は、その初編と參編との貳册である。

中本、一陽齋豐國（無論三代目）畫　柳水亭種淸（種彥門人）編、甘泉堂梓。年月は、初編甲寅

「踊形容花競」初編の表紙　三代豐國畫

（安政元年）閏七月發兌、三編甲寅（同年）仲秋の發兌。當時芝居の評判記やうのものである。初編は「都鳥美男通評判」と割書の見出しがある。（この芝居、默阿彌の作、安政元年、河原崎座、小團次〔惣太〕しうか〔花子實は松若丸〕の適り役で有名であることは謂はずもがなである。「都鳥汀松若」なる種清綴、國貞（二代）畫くの草双紙まで出來てゐる芝居である。）初めに、墨の濃淡な、手摺の迹上乘といふべき挿繪數葉、ところ〲文詞を挿んでゐる。終に、都鳥美名通評判として、七八丁の評判記を添へてゐる。第三編は、忠臣藏評判である。內、足利直義が松之助であるともじつた文句で推定が出來るから、即ち續歌舞伎年代記により、五月五日よりの中村座の假名手本だと分

續歌舞伎年代記の記事

る。五月十五日より市村座にも忠臣藏があるが、然し役者の關係上、これではない。さて、この「踊形容花競」の評判記出版は、頗る當時評判だつたと見えて、續歌舞伎年代記（新群書類從、演劇の第四、安政元年三月の條）にも、左の如 、ある。

都鳥羊男通評判「踊形容花競」近年役者評判記京大阪のみにて江戸名目ばかり更に蓺評なし故に斯題して評判記を出す

とあつて、次に、「花競」中の一節を轉載してゐる。

一般に流用

とにかく、これに由つても、踊形容なる通語の芝居の意として一般に流用せられてゐたことが諒解されよう。その期間の尠くとも安政元年前後の確實であることも。さてその意義であるが、これには、前稿起筆當時から自分は的確なる解明に困つてゐたことであるが、茲に偶然それに稍恰適した（と思はるゝ）自然の解說を發見した。（勿論、本の外題を其儘にこじつけたと見られぬでもないが。）それは初編三編同一の卷尾の出版豫告ともいふべき、左の一文の中にである。

乍憚口上

乍憚口上

〔前略〕此さうしは合卷にしき繪見る儘に動き出せるさまをなせど、譽る君あり誹る貴官あり。宛活ける人物が踊りつ舞ひつするが如くその形容の色香を競ぶる高評を搔きあつめ、錦袖ふるその場の交代毎出板なせば幾久しく賣出を續いてお求め被下〔下略〕

板元　甘泉堂敬白

「踊りすがた」から

芝居擁護者の側から

即ち、「踊りすがた」、轉じて「踊」、轉じて劇(しばゐ)の意となつたのではなからうか。水越の直接影響といふよりも、寧ろ「しばゐ」が漸く通用語となり、內容が水越の壓迫などを受けて野卑を表現するやうになり、よりて芝居讃美の意から、芝居擁護者の側から、此の語が生れ、以て新しい感じに上下を緩和しようとしたのであらうかも知れぬ。如何。丁度、今の藝人が藝術家となり、或はしばゐを劇と稱するやうな、他物、高尙視した、しようとした原由から生れた新造語、芝居者・又は保護者の通人側から生んだものと見るのは、曲であらうか。

(以上、大正十三年六月、補)

新内の話

新内は、江戸淨瑠璃の一種である。念を押しておくが、淨瑠璃は義太夫のみの名稱ではない。さうして義太夫節前後、江戸に發生し又は爛熟したそれらは、均しく江戸淨瑠璃といふべきもので、義太夫節の中の江戸畠のものもあるが、それは、同じく義太夫の名に一括して、私の江戸淨瑠璃とは、義太夫以外の古くは金平節、語齋節、肥前節、土佐節、永閑節などの類から、大薩摩小薩摩以後の江戸に發生し又は繁殖したすべての、主に唄本位の唄淨瑠璃を廣く謂ふのである。草創期から大薩摩小薩摩、外記節、半太夫節、河東節、一中節、これらを前期として、享保の豐後節を中期とし、寶暦明和安永以後を後期若しくは末期として、江戸に榮えた常盤津節、富本節、清元節、新內節、薗八節等、爛然たる花を咲かせた。以上三期を以て江戸淨瑠璃を大別することにする。草創期は、勿論文献に據りてその所在と內容を窺ふより外はない。前期中期また殆ど然りである。但し中期の豐後節の最も正統の流は、寧ろ、新內節にある。

一中節から出た（一中節の祖、都太夫一中は江戸にも下つたらしいが、元來は京在住。因りて眞の江戸淨瑠璃といへば、大薩摩や河東節位ゐである。他は凡ての時期を通じて、その胎は、凡て京又は大阪である。然し江戸長心

國太夫半中

に最も多く歡迎せられ、産地の京大阪を凌駕する位である故、私は凡て江戸淨瑠璃と命名した。義太夫のみは大阪にのみ榮え、江戸には大阪を凌駕する程のものはなかつたから、私はこれを矢張り上方淨るりとしておく。）國太夫半中なる男が、この江戸中期末期を飾る唄淨瑠璃の祖である。卽ち彼は初代一中の門人であつて、初めは、都國太夫半中と號し、後に宮古路國太夫と改め、自立した。享保三年戊十一月、大阪竹本座に於て初めて芝居を勤めた。（語物は博多小女郞浪枕）以來國太夫節として諸國に聞ゆるに至つた。

宮古路豐後掾

豐後節

これが享保十五年（或は十八年頃）、海道筋を經て江戸へ來た。其頃已に宮古路豐後掾と名乘つてゐた。これ、所謂豐後節である。この節が次第に江戸に榮え、四五年にして在來の諸流を壓倒する勢となつた。この節は、今傳はつてゐないが、新内の元であるだけ、より多く凄婉、悲壯なものであつたらう。より多く露骨なものであつたらう。種は京の一中ではあり、仕込は難波のものなれど、その喝采の相手は江戸人である。漸く將門政治弛廢して、人皆淫靡廢頽に赴きつゝあつた。然し江戸文學史の上では最も尊い爛熟期の曙であるから、矢張り江戸の當時の時代と民心、さうした雰圍氣が、この豐後節を創つたといつていゝであらう。

「獨語」曰く

題材は「悲しき聲に淺ましく賤しきこと」と獨語（太宰春臺の著。「百家說林」所收）に憤慨されてゐることを以て推すべしである。傳存してゐる彼及門下の正本集「宮古路月下の梅」、「同窓の梅」等の歌詞によりて見るも、之が察しられる。卽ち殆どが心中道行である。

豐後節の禁遏

遂に豐後節の爲には記念すべき年が來た。卽ち豐後節の禁遏である。幕令による禁止である。卽ち、元文四年（酉

紀一七三九年）九月二十一日、幕府は特に令を發布して、それを差止めた。卽ち知るべし、享保十五年の豐後掾東下よりこの年に至る約十年である。十年間に、彼の創始した豐後節は、然程の勢力となつたのである。以て彼の兎に角、偉大な悲曲天才家であつたことが知れる。

情死の傳說

私は、豐後掾の一生に就て非常に興味を持つ。況して彼も亦その後間もなく自己が曲譜の如く、情死したといふ傳說あるに於てをやである。彼は恐らく生れ乍ら悲曲創造の一生を運命づけられ、彼の一生も亦たその藝術を實行と不離な性格に生きたものであつたらうと思ふ。でなくばどうして斯る空前の幕府の禁令を煩はす迄、市民士女の心を誘發することが出來よう。民俗惡化の上よりせば大なる蠹毒ではあるが、また人間の本然よりいへば、所謂神と惡魔と共に存するもの人なりの前提よりいへば、彼は所謂人情界の偉大なる藝術家、恐らく日本音曲史の上では、惑星ながらも、光芒陸離たる位地を占むべきものであらう。

丸裸

その當時の江戸淨るりの各派の內容を穿つた、その頃市井に流行した下の如き俗謠がある。「河東上下、外記袴、半太夫羽織に義太股引、豐後可哀や丸裸」と。豐後節は、股引よりも品の下つた丸裸であつたのである。然れどもこの俗謠が暗示せる如く、人の本然は丸裸であるかも知れなからう。

新内の各流派

新内は、その子女である。新内には各流派がある。卽ち富士松節、鶴賀節、蘭園節、吾妻路節、花園節等、皆これ、廣義の新内である。（其他、岡本節、源氏節も亦此の一派である。岡本は、富士松五代の門下より出で、源氏は更にその岡本より生れた。）

富士松

鶴賀節

富士松は、宮古路豐後掾の門人宮古路加賀太夫（後、寶曆初年富士松薩摩掾と改む。）から生れた。却說、當時相弟子の文字太夫は常盤津を起し、この文字太夫の門人富本豐前掾は富本節を起した。初代富本の門人に齋宮太夫といふのがあり、その門人に岡本安五郎（後の初代清元延壽齋）なるものがあつて清元を創始した。卽ち常盤津、富本、清元の三者はこれ皆豐後節から出てゐる。これを世に豐後三流といふ。他に繁太夫節、薗八節も（此の薗八より更に宮薗節を生む。）豐後から生れてゐる。然るに豐後の直系は別にある。上掲の三流輩は、所謂幕府の干渉を避けて餘程皮肉になり婉曲になり、殆んど豐後直傳の丸裸は面影を殘してゐない。然るにその丸裸の系統を嗣ぐものに、所謂富士松があつたのである。その富士松は更に鶴賀節を生んだ。然るにこの鶴賀節も師の富士松節も、更に新內節となつた。卽ちこれが例の問題になる鶴賀新內なる男の宣傳である。

鶴賀新內

鶴賀新內（正德四―安永三。享年六十一。）は、諸書に一致しない。嬉遊笑覽には、本姓敦賀を鶴賀と改め云々とあるけれど、こは同門の若狹掾と混同してゐる錯誤歷然たりであるから、餘りあてにならない。また新內のいかにして藝道に入つたかには、色んな傳說もあるが、定說らしいものをいふと、本姓を岡田五郎次郎（一書に五郞次）といひ、もと湯方御家人であつた。それが志を立てゝ藝人となり、當時流行しつゝあつた富士松薩摩の門人となり、加賀八太夫と稱したのである。然るに兄弟子に富士松敦賀、後に（寶曆八年）一派を立てゝ鶴賀若狹掾と名のつたこの男に乞はれて、鶴賀の姓を名のり以後鶴賀新

藤園節

吾妻路節

花園節

各派の歌詞及び作者

内と稱した。よりてこの新内なる名の男の技倆が卓絶してゐたことが分る。即ち當時既に師匠の富士松節や兄弟子の鶴賀節と拮抗して勢力を張り、兄弟子中の一派を立てた若狹掾の鶴賀節は微々として振はなかつたのであらう。よりて若狹掾の乞によりてその姓を名のつた。即ち若狹掾の鶴賀節は此の名人を得て、漸く富士松其他豐後三流と拮抗する名聲を得たのである。然るにそれが鶴賀節とも若狹節ともならず、世間から新内節（後に富士松節も一括して）と稱せらるゝに至つたのは、新内の德とはいへ、若狹掾としては、思はく違ひであつたかも知れない。（この間、異説は、新内を若狹掾の門人なりとするものがある。又嬉遊笑覽は、新内即ち若狹掾と同一人なりと見てゐる。）新内一派の藤園節は富士松より起り、（但し後に中絕）新内の一派吾妻路節、（安政文久頃の名人吾妻路富士太夫に創まる。）また中絕してゐたが、鶴賀派より入つてその後を嗣ぎ、また鶴賀派より花園節を生んでゐる。然るに現存の富士松、鶴賀、吾妻路、花園の各派皆一樣に新内淨瑠璃と稱してゐる。即ち富士松初代の門人鶴賀新内の名をとつたものである。豐後掾の孫弟子たる新内によつて、彼の名によつて、豐後直系のこれらの派が一括し總稱せられてゐる。（その稱呼の最初は不明なれど、恐らく新内歿の安政三年前後には、既に此の名が喧傳されてゐたらう。）亦以て彼れ鶴賀新内が如何に所謂新内節の妙手であつたかゞ分らう。即ち私の日本俗曲史上、特筆したいのは、祖の豐後掾と、この新内との二者である。

次に新内各派の歌詞及びその作者はどうであらう。有名な明烏や、蘭蝶や、夫等は誰人によつて創作

せられたか。而して富士松、鶴賀以下新内の各流派、各々その歌詞を別にしてゐるか、但しは同一であるか。この問題である。今日一般に傳唱せられ、また節は忘られたるもなほ歌詞を存するものは、蘭蝶(若木仇名草)、明烏(明烏夢泡雪)、同後眞夢、尾上伊太八(歸咲名殘命毛)、三勝半七(千日寺名殘鐘)等がある。其他國書刊行會本の新内正本集には、二十種を舉げてゐる。(新刊の「新内全集」は、百餘種を舉げてゐる。其前編既刊。)なほ今日傳播しつゝあるものに、なほ膝栗毛の類もあるが、これは新内本流の情死材料ではないから此等は一切省いた。(尚此等に就ては、後日執筆の「新内正本に就て」に於て悉しく謂ふべし。)

この數種を代表として、その歌詞の作者の誰であつたかを檢索して見よう。正本の署名者は、蘭蝶は、鶴賀若狹掾。明烏、同じく若狹掾。後眞夢は富士松魯中。尾上伊太八、若狹掾。三勝、若狹掾。其他心中物は殆ど若狹掾直傳となり、鶴賀新内直傳とあるものは、少數である。(「藤葛戀の柵」、「桂川戀散柳」、「二世玉襷」、等の數種。)よりて考ふるに、今日新内の精髓たる心中物は殆ど、大半は若狹掾の手に成つたものである。而してその歌詞は、實際の執筆は誰人の手になつたか。恐らくこれも署名者の若狹掾であらうと思ふ。若狹掾は大木戸黑牛と稱し、薙髪して鶴翁といひ、狂歌を能くした。從つて相當の文筆家であつたらう。それに嬉遊笑覽にも「かたる所の淨るり皆自作なり」とあるのを信じて、彼の創作と稱しても大過なからう。即ち新内は、この若狹掾程の文辭の才はなかつた。その代りに彼

は餘りある聲調の天稟を有した。即ち新内の盛行は、若狹掾の文才と新内の聲樂との力である。然らば若狹掾以前の富士松初代は、何を語つたか。今日の富士松は、鶴賀と同じく若狹掾直傳の明烏や蘭蝶をやつてゐるが、その昔若狹掾及び新内の二者の師であつた初代富士松は何の歌詞を歌つたか。是れ今日では不明の事であるが、恐らく豐後節の正本類を借りて用ゐたものであらう。それが、その次代、次々代に至つて新内節（鶴賀一派の）盛行につれ、同じく彼等の正本を借り、それに富士松一派の聲調を與へたであらうと思ふ。

　現存してゐる新内の中、富士松節と鶴賀節とを比較するに、餘程隔りがある。富士松は所謂澁く、鶴賀は花やかである。同じ明烏でも、富士松の名とりと鶴賀の名とりとは餘程ちがふ。また旋律（音樂のメローディアスな點）の上からいうても、富士松は聲を殺してゐるにも拘はらず、鶴賀は、餘程聲を放埓に使ひ、且つ單調で、唯その奔放を以て勝れりとしてゐる。所謂富士松は、同じ唄ひ物乍ら、劇的表現に力あるやうに聞かれ、鶴賀は、唯我々の感情の焔に訴へる體の悲調一點張である

　新内そのものの歌詞の内容と形式はどうであらう。明烏や蘭蝶を聞いた人は誰しも思ふであらう。文字の上に於ては、上方に生れた義太夫淨瑠璃と殆ど大差のないことである。但し相違の點は、その段切の短かく、數枚の正本で盡きてゐることである。唯義太夫の歌詞に比べると、所謂義太夫のさわりといふが如き部分の比較的多くして、會話の數少いことである。偶々會話のあることがあつても、

最も叙情詩

矢張り節付のことが多い。義太夫は叙事詩であり、新内は殊に叙情詩である。常盤津や富本清元は、どちらかといへば叙事の部分多きにも拘らず、現存の江戸浄瑠璃の中獨りこの新内だけは最も叙情詩、場面の如實の表現といふよりも先に、直ちにその哀絶な聲調と、悲絶な歌詞とを以て人の肺腑を衝かずんば歇まぬもの丶あることである。これが新内歌詞の特徴といつてい丶であらう。次に我々の最も氣のつくことは、新内語りには最も表情の少いことである。その代り聲には、悲絶の旋律のあり丈を盡す。眞に絶叫といふべきものである。明烏や蘭蝶、あの浦里や此糸の嘆きを聽いたものは、誰しもその浦里や此糸の顏なり心持なりを想像する以前に、直ちに我をして時次郎たらしめ、蘭蝶たらしめずにはおかぬ然程の一大哀調に先づ感打たれるであらう。光景の再現よりも、その情緒の訴へ、情怨綿々として盡くるなく、紊れて絲の如き、我らの胸に持てあぐむであらう。さうした效果を心がけるのが新内である。宜なり、この新内が往時、その常得意たる廓中に於てその流しを禁ぜられてゐたこと。卽ち文化初年（元年であるか二三年であるか不明。若し文化元年とすると西紀一八〇四年。而して元文四年の豊後節禁止より六十六年を經過してゐる。卽ち豊後節は、その精神に於て元文四年の停止以來約七十年にして新内に復活したのである。或は曰ふ、此の禁止、文政年間なりと。）

吉原出入の厳禁

新内語りの吉原出入を厳禁し、唯一年の中七月十三日の一日のみは盆の供養と稱して特に許すこととし、明治初年までこの禁を解かなかつたといふ。卽ち約七十年間（明治元年まで文化元年より六十五年）は廓内に於て禁ぜられてゐたのである。爾程に

往時は、この一個の新内が彼等遊君嫖客を騒がしたのである。即ちこの新内語りの結果、合意無理の情死沙汰が頻々と起り、吉原はその始末に寧日なかつたといふからである。それもその筈である。新内の全部、その心中物は、所謂士君子の顰蹙する男女痴情に關するものは、殆ど遊君と嫖客との心中沙汰卽ち心中讃美の歌であるからである。加ふるに例の哀絶悲絶の歌調である。誰か實感を以て聞かぬものがあらう。これに實感なきものは、遊里耽溺の些の經驗なきまたは同情なき全然士君子か、又は所謂亡八たる彼等樓主の無情漢のみであらう。公然提唱した遊君讃美、靑樓詩、心中讃美の叙情詩でこれがあつたのである。

――大正十二年二月――

新内材料の艶本

此頃、某處で、新内に材料を採つた讀和本を見た。中本、表紙一切の感じ人情本の通りで、外題は、「滿倉表紙、」天地人の三冊「一名しん內四季の戀」と傍外題があつた。編者は開亭好人編次とあるが、恐らく初代春水であらう。畵家は一と目で分る溪齋英泉。畵は、天の册に、口繪として極彩色のヒラキ二枚の圖が春夏秋冬計四圖ある。お定りの繪で、その左り上に圍みをとつて、春は、「浮名初紋日」の正本仕立の表紙と中の文句。夏は、「藤枝戀の柵」の同上。秋は「二重衣戀占」の同上。冬は「明烏夢泡雪」の同上である。春は、初紋日の主人公の菊の

井と小七が、御殿の女中と若小姓の様子。夏と秋だけは、ほんの景氣づけで、筋書に關係はない。夏は、菊の井が、ある老商の妾となつてゐて、折から酒屋の小僧が晝寢の夢を驚かしに來てゐる處。秋は、貸本屋となつて昔の小七が菊の井の妾宅へ來てゐる處。冬は始めて「明烏」の世界を本當に借用して、菊の井が浦里となつて廓に棲み、小七が時次郎と改名してゐて、畫面はみどり諸共松が枝をの處。小說の筋も、菊の井小七がめぐりめぐつて浦里時次郎となるので、さうして心中未遂、時次郎が歸參が叶ふに終つてゐる。序に亥のはつ春とあるから、文政十年の板行だ。それは英泉を若書だと見ての推定だ。丁度、その頃は、公刊の人情本界でも、新内材料のものが、頻出した。文政四年（明烏後正夢初編三卷、鯉丈作）同六年（尾上伊太八貞操全傳契情意味張月前後編六卷、鼻山人作）〇同七年（明烏後正夢自二編至五編十二卷、春水、鯉丈合作。同發端三卷、春水作。蘭蝶記前後編六卷、鼻山人作。菊廼井草紙初編三卷、春水作。藤枝戀情の柵全三編九卷、春水・駒人合作。仇比戀浮橋三卷、鼻山人作）といつた調子で、畫者は明烏初編が國直の外は、殆ど英泉だ。それはいゝが、丁度此の拙著にも評釋物として關係のある藤蔓が、この人情本外題でも藤枝であり、またこの讀和でも同じく藤枝であることである。なぜこれ丈藤蔓と原名のまゝでなかつたのか。（無論枝は、かづらと訓ましてはゐるが。）――とにかく新内に題材を藉り、その上、春水英泉と二大家の好手を得ての物ゆゑ、小生も若干の興味を感じた。依つてこゝに紹介しておく。（大正十二年七月）

新内の「明烏」

清元の「明烏花濡衣」

『昨日の花は今日の夢』

昨日の花は今日の夢、とは、我らの愛誦措くあたはぬ名文句である。我らは、この句を思ひ浮べると共に、「いまは我身につまされて云々」と後をつゞけ、而して、「エヽ此の苦しみに引きかへて、あの二階の三味線は……」とつゞけるのが常だ。しかほどこれは、新内の「明烏」に採り用ひられて、誰知らぬ者もない、唄の一ふしである。我らは此の「昨日の花は今日の夢、いまは我身につまされて云々」の唄が、本據をいづこに有せるやを知らない。恐らく明和安永年間、或はそれ以前にすでに存在したものであらう。〔明烏の新内は、此の心中明和六年の事實なれば、それ以後、若狭掾の歿年天明六年までの作たるは無論なるが、恐らく、明和末、安永初の作と見做すべきか。〕新内の「明烏」を殆ど其儘受け入れて、唯短かくこれを摘んだのみで、詞句も殆どその儘なる清元の「明烏花濡衣」〔嘉永四年〕にも、この唄と、同じく浦里のクドキとは展開されてゐる。「昨日の花は今日の夢」、本當にさうだ。此の句の現はす幻滅、失望、落膽の情が、古來幾多の痴男痴婦を泣かしたことであらう。夢と知りせば覺めざらましをといつたところで追つつかない。花は、昨日、これは儼たる事實だ。今日に至りて花を描くは、恰も痴人夢を說き、空（くう）に苦しむと同樣だ。その悲歎、やがて此の夢を彼土に實化せんとする。昨日の花

を今日の花たらしめんとする、永劫の花咲く里を求めんとする。それが得られず、さらば此世に潔くけりをつけて、いざさらばあの世に。かうなるのは、戀愛至上主義者、はかない耽醉者惑溺者の當然の過程であらう。

近似したもの

さて「昨日の花は、今日の夢」、此の思想は古くからあつた。今これに最も近似したものは見出せないが、花の存在を瞬時に見たものは、けだし和漢の詩歌に頗る多からう。容易に唇に上るは、「世の中は三日見ぬ間の」であるが、なほ、「明日ありと思ふ心の仇櫻」の歌もある。「花發風雨多、人生足別離」の詩もある。有名な春眠不覺曉の詩にも、「夜來風雨聲、花落知多少」とある。而してこの「昨日

謠の葵の上

の花は今日の夢」とまざ〳〵現れ出たのは、謠の葵の上「人間の不定、芭蕉泡沫の世の習ひ、昨日の花は今日の夢」とあるのが最初であらう。「葵の上」は、今春氏信（禪竹）の作曲、彼は應永八年（明應又は大永の誤かといふ。）歿八十六といふ。とにかく室町期、佛教文學的詞句の好典型であらう。即ち、その花に託して、諸行無常、有爲轉變の思想を孕めることは、謂ふまでもなからう。此の單なる無常觀に根ざした「昨日の花は今日の夢」が、

昨日の花は今日の夢、今は我身につまされて、義理といふ字は是非もなや。勤する身の儘ならず、分れとなれば今更にいなせともない放れぎは

と。即ち戀の陶醉去つて、現實の苦澁にハタと當面した、然る心境の好譬喩に巧みに採り用ひられ

當時の流行唄

「明烏夢泡雪」

てゐる。昨日の花を今日の夢たらしむるは風と雨。昨日の美酒を今日の苦汁たらしむるは義理と生活苦。人事にも自然にも永劫の歡びはない。そこに自棄の心、自ら存在を味氣なく思ふ、はかなむ心が潜む。古來心中文學に於ける心中當事者の描寫、千態萬様なれど、けだし此の「昨日の花は今日の夢」と知つたその刹那の悲哀、自棄感、強きものはこれに反逆せんとし確實なる彼岸の信念より、弱き者もはた朧ろげたる未來欣求の凡情より來た、彼此然りといふべきであらう。

さて此の「明烏」に引かれたる「昨日の花は今日の夢、今は我が身につまされて、」の唄は、何に本據を有してゐるであらうか。「明烏」の本文中に、ウタとあり、且つ「ヱ、此のくるしみに引きかへて、あの二かいの三味せんは」とあるに由つて、此の唄、當時の流行唄であつたらうと思はれる。或はやはり「めりやす」などの勃興と殆ど時期を同じうした、恐らく此の明和前後の詞曲であらうか。「後世に生れた「いなせ」の通語が、安政頃廓内を流し歩いたある新内語りの「いなせともなきその心から歸らしやんせと惚れた情」の都々一を唄うて、それから生れたと謂ふ。その都々一も、この唄あたりから脫胎したのではあるまいか。とみからみ考へて來ると面白い。」

とにかく、新内「明烏夢泡雪」の

「一しよに死にたい時次郎さん、殺して下んせ死たいわいのふ。ウタ昨日の花は今日の夢、今は我身につまされて、合義理といふ字は是非もなや、ウレヒ勤する身の儘ならず、分れとなれ

ば今更にいなせともない放れぎは、合ヱ、此の苦しみに引き替へて、あの二階の三味線は、いつぞや主の居續に、寢卷のまゝに引きよせて、互ひに語るたのしみの、今宵は引きかへ今頃は、どこにどうして居さんすやら、とにかく添はれぬ二人が身の上、ハッア味氣なき浮世ぢやなア、ウタ好いた男にわしや命でもハル何の惜しかろぞ露の身の合消えば恨みもなきものを。詞コレ綠（みどり）さぞそなたは悲しかろ、おれが憎かろ、こらへてたも云々。」

〔清元は、此のあたり、頗る散文的に、しかしそれだけ意を平明にしてゐる。下らぬ事であるが、試みに對照しておかう。敍情詩といふ點、はるかに新内を傑れたりとするは、此の點からもある。豈曲節の差のみではない。「昨日の花は今日の夢　合今は我が身につまされて、義理といふ字は是非もなや〔此ウタ以下ヲ略キタリ〕」「アノ二階で彈く三味線を、聞くにつけても思ひ出す、いつぞや主が居續に、寢まきのまゝに引きよせて、彈く三味線の面白さ、それに引きかへ今宵の苦しみアゝ味氣なき浮世ぢやなア、「好いた男にわしや命でも合なんの惜しかろぞ露の身の、消えば恨もなきものを、「わしが此の身はどうなるとも、「たとへ此の身は淡雪とゝもに消ゆるも厭はぬが、」〕

と。此の新内を聽いて來ると、「昨日の花は今日の夢」が一層我らの耳に戀愛至上の痲醉藥となつて、現れる。「互ひに語るたのしみの、今宵は引きかへ」と來るから、そこに昨日の花云々と相照應し

て、油に火を注ぐの概がある。で「とにかく添はれぬ二人が身の上」と來るのである。やはり「とにかく」といふ以上、一時迷ひはあつたのだ。昨日の花をどうかして今日も花にしたかつたのだ、否したいのだ。すれば、「味氣なき浮世ぢやなア」の嗟嘆は生れて來なかつた筈である。で「好いた男にわしや命でも何の惜しかろぞ露の身の云々」の唄を借りて、さらに彼女――浦里の喜んで死に行く心境が明細に描かれてゐる。浦里は、唯、この幻滅を悲しんだのである。昨日の花今日の花ならざるを悲しんだのである。さうして、今日の花ならざる浮世に、いつそ我が身に興味も、生きの身の樂しみも忘失し果てたのである。そこへ來ると、男の方が餘程浮薄である。寧ろ不純である。男は、

「此程だん／＼咄す通り、國の親仁の江戸表、地頭の方へ出す金、二百兩は扨置いて、其の外一門出入屋敷、かたり盡くして此の有樣、そなたも共にと云ひたいが、いとしそなたを手にかけて、どうなるものぞ云々」

といふのである。「そなたも共にといひたいが云々」で、稍、戀愛の至純の聲らしいが、然しこれは、連心中の誘惑の語にもとりやうによつてはとれる。とにかく主原因は、騙りつくし不義理を盡した果の自滅である。それの自滅も、相手の女の、連帶責任ときて、そこで相手の女も一しよに死なずば義理がすまぬと出た心持も（女に）多少あらうけれど、然し男としては、戀と義理（主に自身の處置、體面）との板挾みといふよりも、意志の弱い、所謂無分別な（これも蕩兒讃美からはよくはいへるが。）蕩兒

の窮死といふのみで、それに多少肉的な愛著が相手の女にあるといふのみである。此の多少を、新内作者は、多にしたり、少にしたりしてゐるに過ぎぬ。戀愛至上の純なる聲は屹度女から聞かれる。男は、不義理の身のフンづまり、女は、「昨日の花は今日の夢」となつた悲歎。その幻滅を未來にとり戻さんとの欲求。此の熾烈から來るのが多い。

心中代表作十篇の概説

序でである。左に、新内正本中の、心中代表作十篇について、それ〴〵男の心持と女の心持と、及び彼らの動機、結果とに概説してみよう。元祿の近松物を除いては、唯一の心中文學（そのかみの豐後掾の豐後節を除いては、）だと信ずる新内の此の種の詮索も强ち徒事ではなからう。

明烏

□明烏夢泡雪　鶴賀若狹掾直傳

場所　吉原。　時　早春。

男　春日屋時次郎。

女　山名屋浦里。

〔動機〕前にもいうたやうに、男は親の公金を費消した上に、「一門出入屋敷騙りつくし」て生きてゐられなくなつた。女は、「昨日の花は今日の夢……どうで死なんす覺悟なら三途の川もこれこのやうに二人手をとり諸ともに」といふのである。

〔結果〕若狹掾の「夢泡雪」では、終りを正夢にしてゐるが、明烏後眞夢（富士松魯中）では、道行があつて、その果て慈眼寺の墓場で未遂、めでたし〳〵に終らせてゐる。

若木仇名草

□若木仇名草　鶴賀若狹掾直傳

場所　吉原。時　夏。〔「二人が命みじか夜の」とあり。〕

男　　市川屋蘭蝶といへる幇間。女房あり。

女　　榊屋此糸。

〔動機〕　此糸が、藝者上りの蘭蝶の女房お宮に對して義理立をするのである。しかもその義理だてが、

「そんなら、そなたはいよ〳〵切れる氣か。アイ切らねばならぬ義理づく。イヤそなたは切れる氣じやあるまい。死ぬる氣であらうがの。これが死なずにゐられうかいな。おみや樣への義理だて。此世でそはぬ其のかはり、おまへはながらへおみや樣と仲ようして百萬年のお命すぎて未來は必ず私と女夫、蓮座をわけて待つてゐるぞへ。」

というたばつかりに、男もつれて心中と來たのである。此の男の俺も心中といふ言草は、これこそ女房を思はぬ、苦んで添ひとげた昔の思ひ出もさらりと忘れた、この海千に鼻毛を拔かれた始末。しかし意氣な藝者上りのおみやよりも、婀娜な女郎の此糸の方に、より多く愛著を持つた何物かゞあつたのかも知れない。此の俗曲は藝者を負かし、女郎に團扇を揚げてゐる觀がある。或は單に、浮氣な男の心理かも知れなからうが、しかし蘭蝶の伴死は、ちよつとした浮氣からでは出來なからう。死よりも強き牽引がおみやよりも此糸により多くあつたのであらう。そこには女郎對藝者との關係に於て、作者が男を思ふ純眞さの何れ劣り優りはなしといふより外に、男が相手の二人に持つ、肉體的の愛著に等差を付けてゐるやうな氣がしてならぬ。

卽ち、此糸の艷冶な、諸譯知りの體が、お宮の單なる純眞熱情の體よりも示唆强かつたせゐであらう。それを暗示してゐるかのやうに思へてならぬ。

餘分な事であるが、此の男の伴死の理由らしい言草の、

「イヤ／＼それではみやへの義理ばかりで、一しよに死なうと云ひかはした俺への義理は何で立てるぞ。ソリヤ聞えぬわいのう。そなたを殺しておれ一人世にながらへて人中へ何と顏が向けられう。逆もながらへはてぬ身を。一所にやいのとすがり付き抱きしめたる心と心、二人が命みじか夜の」

と來た。それを聞いてゐると、男の理由が分つたやうで分らなくなる。唯、何處までも女房を忘れた、相手に引きずられた、否相手は引きずらうとの意志は持たなかつたかも知れぬ。(丁度外の男女の關係とは正反對である)にも拘らず心中決行と來た、卽ち單に相手の姉に死も辭せぬ牽引を感じた。それだけに見てしまへば、さつぱりする。しかしかうして男を、男の女房に義理立てをせねばならぬそのためには、大切な男を、いかに男が迫ればとてよしさらばと來て、一しよにすぐに甘い未來を娯しむ氣になつた此糸の心理も疑はしい。結果からいふと、このおみやさんの義理立て故云々も甚だ怪しくならざるを得ぬ。丁度、これとよく似たのは、淨瑠璃の「時雨の炬燵」(近松の原作でもさうだ)の折角おさんへ義理立てようとしたのを思ひかへて、その大切な女の亭主を奪つて死ぬ小春の心

持とよく似てゐる。男の方も、唯、娼婦の蠱惑に眼が眩んで引きずられて行く所は、治兵衛と蘭蝶とよく似たものだ。唯、おさんとおみやと、前身が全く違ふばかりだ。女に女房から絲縁を頼み入れるのも似てゐる。唯おみやの方が、比較的、思ふ男を取られた女の眞率な氣持が現れてゐて、人間らしい、といふだけである。さて此の「仇名草」の結果は已遂のやうに受けとられる。

□藤蔓戀のしがらみ　鶴賀新内直傳

場所　吉原。　時　夏。

男　藤の屋喜之助。女房あり。

女　菱野屋早衣。

〔動機〕「親女房友だちの意見と義理に責められて」と切れようとしたのが、いつの間にやら心中と變更へた。それも「迚も添はれぬ仲ならば、一しよに殺して下さんせ」と女から心中を强請するのである。

〔結果〕已遂。

□歸咲名殘命毛　鶴賀若狹掾直傳

場所　吉原。　時　冬。〔「裸參りの濡坊主」とあり。〕

男　玉木屋伊太八。勘當の身也。

「生れついたる商人」とあれど、本來は祐筆役の武士なる事、實説にいへり。

女　堺屋尾上。

〔動機〕「此の頃は夜の目も合はず、食事さへ胸を通さぬ身受沙汰、家にかへ、親にかへ、身にも換へたるそなたをば、人手に渡すがくやしさに、さまぐ\才覺してみれど押つまつたる金の事云々」それも是迄は、勘當受けてまる二年共

の日暮しにも差支るのに、物日節句も相應に茶屋揚宿の付屆、遣手禿に仕着まで、みんな女の工面づく。忝ないぞや嬉しいぞや。といふのである。女は「いやな男に添寝して朝夕苦勞するよりも、やつぱり二人が手鍋さげ」苦しい暮しも樂しいといふ。まだ心中とは決心してゐない、出來えたら現世にどこまでも眞の快樂を續けて行きたいといふのである。それが「ハテいつまで云ふても盡きぬこと」の男の詞で、心中と定まるのである。此の曲では、不思議と、「明烏」の浦里に似て、しかも彼よりは一層素直に、しかもより多く現世的に、二人の愛に生きようとした人間的な、女性の誠らしさがよく現はれてゐる。從つて、どこまでも男に追從してゆくのである。男が押肌脫いで思ひつめたる白無垢の死でたちを見せると、自分も悲しさ嬉しさに手早く簞笥押あけて、倶に着かへる死用意と來るのである。

〔結果〕　未遂。めでたし／＼に終る。

（但し、實說、未遂後捕はれて非人に落ちたりといふ。）

あまり長くなつても自他ともに迷惑。こゝらであとの六篇は、一走りとしよう。

□戀衣對の白むく　　　鶴賀若狹掾直傳

場所　吉原。　時　不明。

男　淺草池の屋義助。

女　津田屋歌波。

〔動機〕　「友だちを賴み親一門へ色々というて

鶴賀若狭掾直傳

鶴賀新内直傳 浪之千石述

仇比戀浮橋
浮世の別霜
眞夢血染抱柏

みてもとかく女房にはさせぬ。たつて女房にせうといはゞ、子が一人ないとおもえばすむととつてもつかずいひきらるゝ。（中略）そなたを女房にもたいでは生きてゐても何樂しみ。かねてそなたといひかはせし、死ぬる覺悟に胸をすゑ、遺書までも認めて、今宵限りの此の世のなごり」。女は「アゝうれしう御座んす忝じけない、それでこそかねての本望」といふのである。

〔結果〕已遂。

□仇比戀浮橋　鶴賀若狭掾直傳

場所　吉原。　時　秋。〔「ながき長夜」の句あり。〕

男　浮世猪の介。（幇間）。

〔動機〕〔おれが身はどうで死なねばならぬゆゑ、ひとりで死なうと覺悟なし姿はこれ」と男がいふが、その慥かな譯は不明である。女は「おもひはおなじ妹と背が心くらべのかたみぐさ」で、ともに浮世を棄てたといふのみである。

〔結果〕已遂のやう書かれてある。

□浮世の別霜　鶴賀若狭掾直傳

場所　吉原。　時　冬。〔題名よりの類推也〕

男　かわせや清七。〔男、藥種商の手代の如し。〕

女　てんまや花の井。

〔動機〕男「くめんもならぬ遣ひこみ」。女「いやしいわしに繋がれて、大事のお身をすてさせる咎をわが身にひきうけて獨り死んで此の世に……」。それがたうとう心中。

〔結果〕未遂。

□眞夢血染抱柏

場所　吉原。　時　冬。〔「夜嵐さむく吹きおくるとあり。〕

男　星の屋平三。

女　京町のかしまや花園。

〔動機〕男「養父の咎めにあひ馴れし中を引わけ上方へのぼさうとある悲しさに、死なうと極めしおれが身」。女「お前ときれてわしとても生きて居られぬ身の上を一しよに死ぬるが何のその、お前にきせる恩かいな」と來た。

〔結果〕此の心中を眞夢とせり。

□浮名初紋日　鶴賀若狹掾直傳

場所　吉原。　時　正月過ぎた頃。

男　本町の桝酒屋の手代小七。

女　山科屋の菊の井。

〔動機〕男「内方の首尾が悪い。死んでくれ〳〵」。女「喜ぶ間もなくお前の首尾。かくなり果つる此の世ではよく〳〵添はれぬ縁かいな」。

〔結果〕已遂の如し。

□二世玉襷　鶴賀新内直傳

場所　吉原。　時　春。〔「三月の月かげもおぼろ」とあり。〕

男　松代屋惣五郎。

女　永樂や歌菊。

〔動機〕男「……ホホウその實情は俺とても何の仇には思はねど、今はかさなる此身の不首尾。無理なくぜつをしかけしもそなたときれて俺ひとり死ぬる心に極めたる覺悟はまつこと白無垢を肌へに着込し死出たち」。女「とても此世でそはれずば一しよに死んで、後の世は一つはちすに誕生し現世の念をはらさん」と共に覺悟の白むくといふ、未來欣求主義。

〔結果〕已遂の如し。

悲戀悲愛の結晶

昨日の花は今日の夢だ。「踏花同惜少年春」だ。まして、生命の花に、醉ひ痴れてその花のまざ／＼散るを見つけた時の心は、どんなであつたらう。あゝ死により强きは、何がある。生命の花は、徒らなる生命の實よりも尊く、求むるに値づけられたものであらうか。我らは、我國近世文學がその殆どは情痴の世界の描寫であり、その描寫の簡潔にして要を得たるは、俗曲であり、しかも物語體と叙情詩體と共に併せえたる、しかも就中奔放の情痴を走らせ、しかも近世文學の唯一取材たりし花街に同じく取材した、惑溺の溜息、情痴の喘ぎ著き此の新内淨瑠璃に於て、彼等の曲中の男女が死に至る道程、その心域の大半は、此の「昨日の花は今日の夢」とはかなんだのにあるを思へば、此の單なる一詞句は、我らにとつても最も懐しき、彼ら悲戀悲愛の結晶したる痛しき微粒の如き感なき能はぬ。

自然の花も散つて、今日は青葉の現となつた。陽の光も白く、耀かしいものとなつた。鳥は囀り朗らかに、花より青葉に、已がじゝその生を悅樂してゐる。鳥は現實主義者である。人は、花を戀ひること多きものは、その無限の惆悵、これをいづこに醫すべきであらうか。

ふと思ひ浮んだことがある。それは彼ら新内曲中の男女の幻滅を感じたと爾く稱した、その程度に就てゞある。卽ち彼ら男女、殊に女の幻滅とは、昨日の花は今日の夢とはいふものゝ、そは唯、花の形ばかりに卽した幻滅であつて、花自らの（心の花の、永劫不斷の花の）幻滅ではなかつたといふのである。彼女らは、憐れなる相愛協和者として、共に今日に於ける形の花（戀愛の外的事情）の破滅を嘆

外的物件の幻滅

いたに過ぎぬ。死んでも醫されぬ幻滅は、彼らの心と心とに感じなかつたのである。唯、生活、事情の激變を夢と稱したに過ぎぬ。企圖してゐた戀愛場面が一旦に破却されたそれ丈の幻滅、それも外的物件に由るのである。心と心が創り出す幻滅、破綻ではないのだ。更にいへば、彼等の夢と觀じたのは、兩人の心的內容には些の支障影響なく、唯晴れて夫婦に、又は逢曳を重ぬるにすべなしといふ程の、しか程の外部的、要求實現上の幻滅のみである。畢竟蟲のいゝ幻滅である。起因は、浮世の義理、生活の逼迫、さうした自己らの核心に觸れざる外的條件のみである。よりて彼等は、心中をする程の破綻に陷つても、彼等自身、男女は相互の心情に更に幻滅を感じなかつた。これが羨ましいのである。

近代的ぢやない

人の實情といふものを、相互に攫んで、それを信じて死んで行つたらしいのが、なる程近代的ぢやない、それだけ近代人たる我らよりは、夢のやうに、他界のやうに、よく云へば羨まるゝといふのである。

心內の幻滅苦悶悲愁は絶無

我らの知る限りでは、此の愛する心の破滅、それ自身の幻滅をまで描いたものは、我ら近世文學に殆ど尠ない。唯溺れざる所謂通人流義の或は欺瞞愚弄の愛の生活は、偶々見受けうるも、〔現に新內にも「不心底闇蛇」の如きがあるが、これは初めより僞瞞にかかつた男の滑稽さ、失敗である。この愛して愛し得ざる例ではない。〕此の愛して愛しえざる、その心內の幻滅、對象そのものに夢を感じた、その苦悶悲愁を描いたものは、絶無である。要するに、彼らはとにかく一婦一男主義、たとへ娼婦といへども、心情

男も心中を隨喜

に於ては、その愛に於ては、極めての淸敎徒である。嚴肅なる童男童女の純愛に生きてゐた、然し謂ふが如くしか程に果して單純であつたらうか。やゝ男の方に、自己主義、自己の立場、生活の推し詰りを嘆いてそれから來る心中ゆゑ、そこに不純らしき影あれど、なほ女に對する愛著には些の不純さも幻滅もないやうである。女性は、唯熾烈なる犧牲愛（或は把握愛）に燃えた。卽ちその積極的に女から心中を唆かした者も、同じく愛するが故に、その全部を攫みたいといふ可憐な欲求からに過ぎぬ。（此類、此種の女、愛に於て自我的であるともいへよう。但し蓋し此の類は、數に於て少ない。）女も生活の逼迫を嘆いてゐる心持はあれど、しかしやはりそれもその男が主題である。僞瞞と技巧、自分の生活の破綻の道件に男を爲さうとするやうな女は、先づ見當らない。男も心中を道具にするのではなかつた。却つてそれを隨喜してゐる。その單純さ、純情さが、非近代である。我らが、新內淨るりをきく度に、その凄絕なる旋律と、その大膽なる歌詞とに吸はれゆくのも、此の純情、單純さが力强く我らを打つのではなからうか。我らも時として、かゝる機會に、純情、單純さの昔に歸らんとする、生れざりし世の昔に歸らんとする、その自然の情よりの共鳴同感、涕涙かも知れない。

　卽いて離れ、離れて卽く、愛して愛し得ず。同時に二人をも三人をも愛しうる。（紙治でも蘭蝶でも、小春、此糸に對つては、夙うにおさん、おみやを忘れてゐた。彼等の愛は唯一對象に燃えた。これを三角關係と見るは非だ。）かゝるものは遂に彼等にない。幸はひなるかな彼等の純情、といひたい。新內の彼らは、女

昨日の花は今日も花

は肉より靈に向ひつゝある、男は恐らくは肉本位のみの傾向、しかる差はあらうけれど、とにかく彼等は、聖愛（肉本位にしろそれ以外にしろ、純情なれば、それを聖愛と名づくるに何の不可があらう。）だつた。今日の我等の如き、生活の爲の生活を考へたり、愛の爲の愛に理窟を催したりするものではなかつた。近代的情死の殆どが、愛の爲の生活の破綻ならずして、自己の爲の生活の破綻、或は思想の破れ、其他各種雜多の起因を含み、單に愛しあふ同士が、唯その當面せる生活に對して、愛を續行せんが爲に幻滅を感じた、その破綻を招いた、しかほどの愛本位、純愛の立場は殆どなからう。我らは、古今情死の心的動機の比較を爲すの煩を省く、唯、思半ばにして足りよう。

　ダヌンチオの「死の勝利」の如き、愛して憎む、豐醇なるその肉體に戀々たり乍らも、一面蛇蝎の如くこれを憎む、さうした複雜なる男の苦悶も新内の悲曲には現れなかつた。唯溺れた、唯奔つた。その果は死んで愛しようとした。なべて男も女も、幻滅といふものゝ、そは單なる外的の幻滅に過ぎなかつた。彼らは、心的に於て、やはり「昨日の花は今日も花」だつたのである。それを夢と做すのは、生活と相應じた場合、そこに不滿、失望が生れたといふのに過ぎぬ。彼等の愛は、昨日も今日も、確乎たる不拔なる確實性、久遠不壞のものであつた。而してその對象は、勿論各自唯一であつた。三角關係も四角もなかつたのだ。まして彼らは有神論者であり、有靈魂の信徒であつた。卽ち彼等の悲嘆は、唯だ現土に於ける外的生活の一端の破綻、唯それを無上に嘆けるに過ぎぬ。乃ち彼等は死して、

外的にも内的の心内要求のその如く、即ち内外融化した、愛の實現不斷の永劫可能土を目がけて去つたのである。この點、彼等は、現代の吾人身邊の心中者の苦汁に比して、甘味津々たるものあつたことは、無論である。

「昨日の花は今日の夢」とは、愛に於て、即ち理智なるが故に愛より見放されたる、繼兒扱ひを受けてゐる、眞に現代の吾等こそ口にすべき事である。苟くも純情に生き、唯一人の愛に燃えた昔の彼等には、唯假(かり)の夢、明日はまた花だつたのである。我らは、最後この結論に至ると、この「昨日の花は今日の夢」が、初めは傷んだそれが、今は却つて彼ら古への心中者の凱歌の如く聞えてならぬ。

〇

「昨日の花は今日の夢」と頗る似た唄を一つ發見した。この餘白に寫しておく。

「昨日までながめて花もいつしかに、今日はわが身と夏草の、日にぞしほるゝ憂き思ひ、せめてあはれと夕顔の、露の命とかねては知れど、知らではかなき夢の世や。」（地唄、本調子）

——大正十三年六月——

大名の心中已遂

「明和雜錄」に、

「武州金澤、米倉丹後守殿知行一萬二千石。丹後守殿、江戸吉原土手にて女郎と雙死是あり。早速御檢使相濟み、其の日御改易、並に家老二人切腹仰付けらる。」

といふ記事がある。米倉丹後守といふ大名が、武州金澤にあつたことは事實である。大日本地名辭書にも「元祿九年より米倉助右衞門殿陣屋、金澤にあり。相州野州散在の田、並に當所合一萬二千石の大名たりし由見ゆ。陣屋址は、六浦村引越に存す。」とあるが、さて此の米倉家は別に明和に改易にはならなかつたやうである。それにこの話は嘗て此の明和雜錄以外には見當らぬ。或は分家筋の情死ではなからうか。それにしても家老二人切腹とはトンダ災難だ。或はやはり事實、大名の米倉に關した事で、然し改易だけが誤聞で病氣屆が首尾よく濟んだのかも知れない。とかく明和は、同三年に心中鼓吹家の鶴賀新内が歿してゐる。若し多少この米倉家の傳說據る所ありとせば、新内たちの所謂淫聲宣傳のせゐではなかつたらうか。とにかく事、大名に關するは、舊幕時代、動もすれば表面から抹殺され易き故、この已遂事件の眞僞、今俄かにどちらとも斷言は出來まい。

評釋 藤蔓戀のしがらみ

解題

藤蔓戀のしがらみは、新內節の正本の一。從來の四種の新內正本集中、國書刊行會本、聲曲文藝叢書本には全く此の正本なく、最近刊行された新內全集と中川愛氷本とにある。但し全集本には、此の正本の前三枚を略き、中川本は珍しく全文を載せてゐるが、校訂粗、正本の生寫しではない。幸ひ私の先祖が偶然私に殘してくれた生地の此の正本がある。よりてその全斑を正本のまゝ此に揭げ、併せて字句の評釋を試みようと思ふ。新內は殆ど全部吉原の公娼に材料を得てゐる。從つてその一たる之が評釋は、當時の吉原の內面描寫である。卽ち以て吉原研究の一端ともならう。「藤蔓戀のしがらみ」正本の年月は、不明である。然し、鶴賀新內直傳とあれば、新內の歿年安永三年以前の物に屬し、新內の同門であり後に師弟の關係にも似た彼の先輩朝日敦賀太夫(元は宮古路)が、敦賀を鶴賀に改め姓とし若狹掾と名乘つたのは、寶曆八年(聲曲類纂說)であるから、新內が若狹掾の懇請により鶴賀を姓に名乘つたのは、これ以後卽ち寶曆八年以後としなければならぬ。卽ち鶴賀新內直傳ときつぱり署名せる此の藤蔓の正本は、彼が、寶曆八年より安永三年に至る十七年間の何れの年かの作であらねばならぬ。恐らく明和時分の作であらう。傍證として、喜之介早ぎぬの心中を調べれば分るが、これは無論變名であらうし、また强ち當時實在の人物があつたとも斷言出來ない。心中

の榮えたのは、元祿、寶永と普通いふが、新内節が、古今の天才宮古路豐後掾によつて、享保十五年以後江戸に榮え、元文四年九月の豐後節停止に逢ふまで、都鄙に心中を挑發せしめた觀があり、たとひ心中の形式が意氣と張りから墮落して、金に詰つての厭世心中と早變りしたもの丶、兎に角心中は、當時猶盛んであつた。元文四年の停止から、若狹掾の一旗幟を建てた寶曆八年迄は、約二十年を經てゐるが、心中の習遊里に全然絶えたといふのでもない。延享三年十二月十三日の尾上伊太八（遊女尾上と元津輕岩松家來原田伊太夫）の情死未遂やら、明和六年七月三日には、浦里、時次郎（美吉野と伊之助）の已遂やら、一は寶曆八年前十三年（尾上）一は、寶曆八年後十二年（浦里）である。寶曆八年後二十八年目の天明五年には、有名な綾衣外記の心中もある位ゐ。新内草創の前後に心中は頻發したものらしい。兎に角當時此種の心中はあつたらうが、さて實在の喜之助早衣はと來ると不明だ。然し新内節（正しくは鶴賀節）の盛行と心中の流行とは彼此相呼應して、假りにモデルありとせば此の心中も明烏と同樣、明和頃に起つたものと見てい丶。即ち私の此の正本を明和年代とする所以である。尙、此の正本の珍らしい譯は、新内の正本が殆んど若狹掾の直傳なるに、これは新内直傳であることである。

○

ふじのや喜之助
ひしのや早ぎぬ　**藤蔓戀しがらみ**　鶴賀新内直傳
濱之斗石述

イロ詞 栴檀は二葉よりかんばしき。楠は一ばより名仁をふく　むさかや。武士は腹中

をでゝふくちうをさだむるは。うごか(地カヽリ)ぬくに(國)のおしへ(教)かこおもへごゆめの世の中や。かたい(ハル)(堅)ことばはおもてむき(表向)。そのないしやう(内證)はやわらか(長地)や。なさけ(情)あきなふながれ(流)にも。ふかい(ハル)(深)こゝろのあればこそ。

【栴檀は二葉より云々】人の幼にして聰慧なるに借り、觀佛三昧海經に見ゆ。【楠は二ばより名石云々】東雅、一六に「石楠といひしは、即ち今も俗に、此の樹久しくして化して石となれるなどいふ事は、太古の時より云ひつゞきし所と見えたり云々」ともあれば、此句楠の化石を云へるならんか。古くより此の傳說一般にありたりと見え、吉野拾遺物語二にも「楠正行の墓所にいかなる者のしわざにやありけん書きつけける、楠のあとのしるしを來てみれば誠に石となりにけるかな」とあり。こゝまで或は栴檀といひ楠といふも、すべて人の人たる者は幼少より非凡の瑞相ありといふに歸す。【武士は腹中を出て云々】稍難解なる句なれども、初めの腹中は、母の胎內の義、後の腹中は、心中、所存、覺悟といふに同じきが如し。卽ち武士は武士らしく、幼少より既に覺悟を定む。節義の爲には死を輕んずる腹中ありといふ單なる義なれども、腹中卽ち心中、心中また心中立の義より情死に轉義せるより、暗に後段叙出の喜之介の心中（情死）と照應して、町人の喜之介の腹中の定め方は、トンデモない情死沙汰なりと、以て武士と町人との差をきかしたるものなるべし。而し

て町人の此の腹中の定め方の惡しきを直ちに、作者は辯護して「夢の世の中」といひ、「堅い言葉は表向き共內證は」といへるなり。最初堂々と、人の人たる者の幼少より聰慧なる事や武士の覺悟の程を說き、町人の喜之介に中々云ひ及ばずと見れば、おもへどゆめの世の中やにて急轉直下、而も如上の堅い言葉をその實、非人間的なりと冷殺し去れる也。喜之介もやつとこれで浮べるならん。【ゆめの世の中】浮生若ㇾ夢、爲ㇾ歡幾何(李白)。一切有爲法、如二夢幻泡影一(金剛經)など見ゆ。【ながれ】遊女の異名。昔、常に扁舟に身を任せて、波のまに〳〵流れ、逢ふ人々に情を賣ること流水の如かりしよりいふと。但しこゝは境涯の意にして暗に遊女の義を兼ねたる也。【深いこゝろ云々】流れと深いとは緣語。君傾城に却つて深い情ありとは、「明烏」の浦里も夙に道破せる所。

キン はなのひし(菱)のや(屋)はやぎぬ(早衣)にから(搦)むふじ(藤)のや喜の介が。地 ゆうくれ(夕暮)ごこの玉ぼこ(玉鉾)を人のうはさに花川戸(はなかはど)。戀のかけはし四ツ手かご。ウレイカヽリ かた(揃)をそろゆるゑもんざ(衣紋坂)かたがい(誰)ゝ(いひ)そめし吉原(よしはら)さ。げにはんじやう(繁昌)の大もん(大門)を入(入り)こむ人や仲(なか)の町(てう)。

【はなの云々】はなと菱。搦むと藤とは緣語。喜之介も亦トンダものに搦みついたもの也。【玉ぼこ】道の枕詞の玉鉾より轉じて、道そのものをいふ。玉鉾の刄(み)と道のみと續けたるなり。【うはさに花川戸】花咲きたる如く、ぱつと人の噂に立ち居れる也。【花川戸】淺草廣小路の東にして、今

其北を花川戸町。南を材木町といふ。昔、花川戸の渡といふは、材木町に在りしなり。「江戸砂子に、「淺草竹町の渡しを花方(はなかた)の渡といふ。花川戸は川端通の町也」とある竹町は、本(もと)竹店のありしに由り、又花方に訛るも端河津(ハナカワツ)の謂ならん。一書に業平渡と云ふは、本所業平町に對せば也。云々。(地名辭書)。花川戸、貞享年中板本江戸繪圖に、舟川戸とあり、筆者の誤りなるべし云々。【四つ手駕籠】山籠より小さき粗末のもの。四本の竹を柱とし、割竹にて略式に編みて作り、小さき垂れのあるもの。よつでともいふ。江戸繁昌記二に街輿と出づ。【戀のかけはし四つ手かご】かけはしは懸橋。棧道。花川戸の川戸をうけ、また四つ手駕籠にもかゝる。喜之介の爲に戀の棧となりて、早ぎぬが許へ渡すものは、四つ手駕籠なれば也。【かたをそろゆる衣紋坂】肩をそろゆるは、衣紋を正すの意より衣紋にかゝり、また駕籠舁の二人肩をしやんと揃ふるにもかゝる。遊客自身が衣紋を正したりしは菱川畫の繪本道引(延寶六印本)にも、「金龍山(待乳山)、こゝにて馬より下りて、(江戸花街沿革誌に曰く、貞享元祿より以前は、遊客は舟と馬とに依りたり。馬は輕尻馬と呼び、二人の馬奴に手綱を取り乍ら小室節を歌はすを華奢なりとし、又白き馬を好みたり。云々。)やうすを直し、えもんなどつくろひ心せらるゝ所なり」とあり。

○江戸の辻駕籠。 參考として、「皇都午睡」三編、中より左の記事を拔く。

「江戸通り筋の木戸木戸見附々々に、辻駕籠とて駕籠に尻かけ、往來を見かけ次第、駕籠へ〳〵、丹那

かごへと呼び居る。駕籠屋といふもの、一町に五軒と七軒はなきはなし。（中略）道中の雲助には非ず。いはゞ江戸裏店より出づる駕籠舁也。（中略）直段は大抵極りありて、道中の雲助の如き、餘りに餘計に貪る事なし。辻駕籠の得意とする所は、遊所通ひ也。四里四方ある江戸の地に遊所なく、深川、本所、根津、谷中、麻布、赤坂なんど遊所諸處にありけれども、當時（弘化四年頃）禁止となりて、いよ〳〵不自由なれば、南に品川宿、西に內藤新宿、板橋、北に吉原、千住と此の五ケ所也。何れも日本橋より二里半、三里に餘る道なれば、行く計にも隙どれば、はづかの隙に駕籠にて駈け行き、歸るにも又其地より駕籠にて駈戻る故、辻駕籠大に流行るなるべし。駕籠賃の相對も京攝の如く直切小切するにも及ばず、四文錢何本とか、南鐐とか埒早く乘ると直ちに駈け出す事誠に宙を走るが如し。人立多き四ツ辻にてもヱイハアと掛聲して腰をひねり、云々。駕籠舁、寒中にも肌を脫ぎ、入墨見事にして手を盡せる武者繪などあり。（中略）間には、駕籠の垂をおろしありとも、見附々々にては、手早く垂れを上げて走れり。吉原大門口、品川入口、新宿には、夜明前より、駕籠〳〵と聲をかけ、數十人控へたり云々。」

此の皇都午睡は、西澤一鳳が、弘化四年以後三年間、江戸にゐたりし時の隨筆なり。されば此の藤蔓戀しがらみの新內正本の現れたる安永三年以前（新內は安永三年六十一歲で歿）より、七八十年を經たり。然れども當時駕籠舁の風俗としては、前後大差なかりしならん。

因みに、江戸の辻駕籠の數は、元祿の頃より辻駕籠御免となり、江戸中にて百挺を限られたりしが、寶永八年卯三月二十日、向後六百挺と定む。內、町方三百挺、寺社方百挺、代官附二百挺なり。(當時辻駕籠流行りて、千八百挺ありしを、斯く激減せしめしと云。)正德三年には、町方の數を更に百五十挺に減じたりと云ふ。然れども法令再び弛み、後は夥しき數となりしと。新內節正本の凡てを通じ、遊里通ひの描寫、多く此の四つ手駕籠なり。卽ち新內、若狹掾等の後の所謂新內節盛行の初期をなしたる明和安永天明の頃に於ても、遊里通ひは多く駕籠を便とし、多く之を用ひしと見ゆ。したがつて此期は、再び駕籠の數夥しきものとなりゐたりしならん。

衣紋坂

【ゑ(え)もんざか】 江戸名所圖會云、日本堤とは、荒川(隅田川の上流に曲れる名なり)の大堤なり。聖天町より三之輪町に至る。此の大堤の半にして、西へ降るを衣紋坂といひ、新吉原に入る道なり。遊客の此處を往くもの、必ず衣紋を正して行くとの意より名づけしとぞ。京都島原に衣紋橋あり、恐らくは之より轉ぜしならんと云。

吉原

【吉原】初め日本橋の東にありて、葭多き中にありしかば葭原といひ、後、字を祝ひて吉原と改む。明曆二年、幕命により、日本堤の內、田間に一廓を開きて移轉し、新吉原といふ。世俗舊によりて吉原を以て呼べり。或は仲ともいふ。一廓の內仲之町を以て眼目とすれば也。日本堤より降る小坡、衣紋坂、五十間茶屋町を表口とし、大門を設け、江戸町一丁目、二丁目、(舊伏見町を合す)、揚屋町、角町、京町一丁目、二丁目の六坊に區分す。江戸砂子云、

明暦二年に所替被仰付、此處は龍泉寺村と云ひしなり。江戸繁華に隨ひ、傾城市中に在りては、如何とて、此田地を下され、引料壹萬五千兩。明暦三年店開き、新吉原と號す。五町とは、江戸町、同二町、角町、京町、新町なり。此外堺町、伏見町、揚屋町あり。中の通りを仲の町といふ。□新吉原の地は、舊千束村なりとも、金杉村（龍泉寺）なりとも、又山谷村なりともいふ。千束は、本來郷名にて、金杉山谷等も郷內なり。此に決すべきは、金杉か山谷かといふにあり。形勢を以て推すに、金杉龍泉寺村といふもの頗る協へるに似たり。山谷といふは、山谷堀を往時去來の小航路としければ、誤りて山谷の新吉原といへるにや。（大日本地名辭書）【仲の町】入り込むと仲とは緣語をなす。仲の町は、前に出づ。

○衣紋坂より仲の町まで。「衣紋坂　山谷より八丁目に左の方へ下りる。是を衣紋坂といふ。時に高札場ありて、武家たりとも槍ならず、馬駕籠ならず。など制札あり。是より大門口迄の茶屋を五十軒と唱へる。同じく案內する茶屋なり。爰を七曲りともいふ。道少し曲りありて、大門口を入る正面仲の町とて、往來廣く、兩側皆茶屋ばかりなり。店をおろし、繪莚敷物敷きつめ、二階表座舖には、高欄手摺付にて、往來を見下し、下より廣き段階子をかけ、大體茶屋は間口二間半三間也。」（皇都午睡三ノ下）之にも見ゆる大門外の五十軒とは、兩側に茶屋二十五軒宛ありたれば云ふといひ、よりて五十軒町ともいふと江戸花街沿革誌などにあれど、此は誤りならん。五十軒はその實

五十間の誤なり。地勢上、僅か五十間の路傍に、如何して二十五軒づゝの茶屋並ぶべきや。但し少許の茶屋はありたり。さて此の大門外の茶屋と廓内の茶屋と品等如何。次を看よ。

詞

きさくなちや（茶）屋の佐次兵衛がサア／＼だんな（丹那）が御出あそばしたおつれ（連）さんはごふ（何う）あそばしなされましたと。きげんゑがほ（機嫌笑顏）の女房がおく（奥）へともな（伴）ひ入りにけり。

【きさく】 打解けて氣輕なり。氣のさくきことなり。源氏物語にも見えたる景迹、この轉訛なりと云。【茶屋】昔は揚屋、揚屋附茶屋の次に此の茶屋位ゐせしが、揚屋衰へ、揚屋附茶屋もその餘波を受けたる寶暦十年頃よりは、此の茶屋全盛の世となれり。次に悉しく說かん。

○揚屋と揚屋附茶屋。茶屋。（廓内と廓外）

揚屋。元吉原時代より、太夫（當時第一位の遊女）格子女郎（第二位）を買はむとする客は、必ず揚屋に於てす。（第三位の局女郎以下然らず。）從つて揚屋は、廓内に全權を振ひ、延寶天和頃は最も昌え、從つてその數も多かりき。然るに此より先き寬文八年、散茶女郎（從來の局女郎の次、端女郎の上の如き品等の妓）現れて、安價にして實用的なる妓風を宣傳せしかば、一時に世に行はれ、次第に局女郎は勿論、太夫・格子まで之に壓倒さるゝに及び、終に太夫・格子衰へ跡を絕つに至りぬ。以後散

茶は妓の首位となりたり。然るに此の散茶は揚屋の繁榮を用ひず、茶屋より客を招きたるより、當然揚屋並に揚屋附茶屋は、太夫・格子の運命に殉ずるに至れり。乃ち元文五年頃、彼等は揚屋町より新町（京町二丁目）京町（一丁目）に移住し、寶暦十年頃には揚屋全く廢れ、茶屋の獨占となりたり。（恰も此頃、廓內に藝者現れたり。本著「**藝者の起源**」參照。）

揚屋附茶屋

揚屋附茶屋。元吉原時代より、揚屋は各々一個の茶屋を隷屬せしめ、茶屋の屋號は、揚屋と同一ならしめたり。新吉原開創後、揚屋が揚屋町に住むに及び、揚屋附茶屋も揚屋町に住めり。揚屋と同じく十八軒ありたり。然るに散茶女郎の出現、次で普通茶屋の勃興に逢ひ、揚屋附茶屋は、揚屋と共に勢力衰へ、揚屋亡ぶるに及んで、從來下位なりし茶屋の下に屈伏するに至れり。

茶屋

茶屋。（引手茶屋とも後にいふ。）元は、下等の妓を買はむ客を妓樓へ案內する役のものなりしが、散茶女郎の勃興により、揚屋、揚屋附茶屋を壓倒するに至りたり。（引手は案內の義。）二種あり、廓內廓外に分つ。

仲の町の茶屋

仲の町の茶屋。（廓內）新吉原最初の頃は、商家と茶屋と並び建てられしが、茶屋全盛となるに及び、商家退轉して、仲之町は殆ど茶屋ばかりとなり、揚屋町にもその數を增すに至りたり。茶屋の營業は、遊客の送迎なれども、茶屋より送る客は、一等樓（後、寛政以降に大籬と云ふ。）二等樓（同、半籬と云ふ。）に限り、他は送り迎へを爲さず。

廓内茶屋の收入。（一）揚代に準じて引手錢と稱し、客一人につき銀三匁、天保頃は五匁の口錢を妓樓より受けたり。（二）遊女より五節句毎に付け金として金一步づゝを受く。（三）女藝者が客より貰ひし纒頭（はな）（普通二朱）の內より小ぜりとて二百五十文を差引く。（四）客よりの祝儀若干。（江戸花街沿革誌に據る。）

茶屋が料理兼業となりしは天保の初めなり。此頃茶屋內に料理番を置けり。元は雇人男女四人づつを普通とし、送迎、杯盤の周旋は主に主婦の任たりき。

（守貞漫稿には、收入につき異說あり。曰く「仲の町七軒の茶屋を第一とす。酒肴の價を號けて送りと云。妓院の送迎の料とする也。七軒の茶屋送り料一客金一分、仲の町の茶屋送り二朱づゝ也。七軒は大門內右の七戶を云ふ。仲の町及揚屋町の茶屋凡て百一二十戶あり。云々。」此の送りは、引手錢とはまた別の收入ならん。）

茶屋の數。（廓外共）諸書により又年代によりて種々あり。就中、此藤蔓戀しがらみに時代の相當せる明和より文化迄の數を、江戸花街沿革誌上、幸堂翁の記述によりて抜かん。〔藤蔓の正本を大凡そ明和年代と見ば、興更に深からんか。〕

大門內外揚屋町並に裏茶屋まで

最高百五十軒內外。最低九十軒內外。

大門外の茶屋

廓外茶屋の收入

山谷堀　片側並に土手際迄船宿

最高六十軒内外。最低五十軒内外。

（安永の頃より、今戸橋向ふの船宿は絶えたり。）

（文化文政の頃より田町に二十軒、龍泉寺町に二十軒の引手茶屋を開店せり。）

大門外の茶屋。（一）五十間町に茶屋ありしが、（嬉遊笑覧に曰く、明和五年四月焼亡以前迄は兩側にて二十軒ありし）此等は、仲の町揚屋町の茶屋とは異りて、特に編笠茶屋と呼びたり。是より先き、明暦年中、山谷の假宅に業を營みし頃より、士民の妓樓に詣るもの、編笠を被り扇を鼻にあてゝ面を掩へる慣はしとなりたるを以て、此等編笠茶屋の店頭には編笠を吊し置きて、遊客の望むまにまに之を貸し與へ、幾何の料を取りたり。此の編笠には、茶屋々々の燒印を捺して目標とし、彼の夜間に客を送る時、定紋附けたる提燈を點すと同じき用に供へたりと云。但し此風享保より稀になり、元文に至り全く止み、後には編笠は名のみとなりて、一般客人の身仕度する所となり、同じく引手茶屋と稱するに至りたり。（二）此後田町（一に泥町）にも編笠茶屋を生じたり。「守貞漫稿」當時、百八十餘戸ありと同書に見ゆ。（三）山谷堀の船宿及び會所船宿も、大門通行の權を得るに及び、引手を兼ねたり。

廓外茶屋の收入。別に揚代の外、送りと稱する費を取らず。妓院より一客二百文の錢を與ふ。（守

貞漫稿）

提灯の柄に由る各屋の品等。序でに面白き記事なれば紹介せん。當時各屋に、引手の提灯の柄によつて截然たる品等がありき。妓樓は鐵の柄。揚屋は木の柄。茶屋は竹を用ゐ、船宿は縄を用ゐたり。船宿ときけば粋なれど、品等は縄の最劣等なりし也。

【丹那がお出で云々】心中する不良若年も、人氣商賣からは丹那也。【おつれさんは云々】今宵はお一人といふ所也。常套の世辭にもあらざるべきか。喜之助これ迄大抵は惡友と連れ立ちて來りしものか。以下に現るゝ早ぎぬ喜之助の對話中なる、喜之助の「親女房友だちの異見」とある友達は、この不良なるお連さんには非ざるべし。同一とせば、初め互ひの浮れ心地より誘ひしものが、喜之助の早衣といふ標的を得て、神經怪しくなりたるを見て、さてはと驚き、俄かに豹變、意見を始めたるや不知。今宵は喜之助、早衣に秘密の用談あればさてこそ一人で來りしものならん、此のお連さんは以下の詞は、茶屋の女房の詞也。さて此處で喜之助の遊び方が餘り下種（げす）でもなき、彼も相當の家の息子なりしならんといふ證據を擧ぐべし。そは、茶屋よりせずして直ちに妓樓に赴く客を振りといふ。一等樓（寛政以後に大籬といふ。）は振りを斷り、二等樓（寛政以後に半籬といふ。）は振りと茶屋客とを選ばず、同様に迎へたり。それ以下の妓樓は、振りと限りたり。然るに喜之助がいつも茶屋より行けるは、茶屋の亭主女房に馴染なる點より明かなれば、喜之助は一等樓か、安く下つて

も二等樓かなりし也。すれば早衣も當然一等樓若しくは二等樓の遊女、卽ち散茶女郎（後の「まがき」の項參照。）なりし也。息子といふ所、一等樓の大盡遊びも出來ず。さりとて下等店へ行く人品にも非ずとすれば、二等樓客とするを正しとせんか。【きげんゑがほの女房が】亭主はきさく。女房は機嫌笑顏。照應し得て妙、面目躍如。機嫌笑顏やきさくにひきかへ、此の夜、喜之助の胸中は如何。今宵は、親女房友達の異見により、ふつゝり逢はぬと覺悟して緣切に來れる也。（それがまた思はぬ相手の出樣で、心中とまでたうとう遣つ付ける也。）彼が胸中、萬斛の哀愁ありといふべきか。それとも意志の弱いのつぺり色男、何でもなかつたといふべきか。

元吉原遺聞

元吉原及び新吉原起源に就て、三四の遺聞を拾つておく。丁度、右の註の中、〇「吉原」の前に續けて讀んでいたゞきたい。（著者）

君がテ、

奉行はじめ歷々が、遊女屋の亭主を爾く稱したとのことである。彼等亡八に似合はぬうつかり聞くと、何だか勿體なさすぎるやうな名である。幕禁の書「環齋記聞」全、中にその記事が

ある。曰く、

一其頃諸御奉行樣甚右衛門名をきみがテ、と御よび被成候。古來大人歴々の御言葉に遊女屋の亭主をきみがテ、と呼び給ふは、君が親方又遊女長とも書き候由」甚右衛門とあれば無論、元吉原開設當時からの事である。

吉原開設の五ヶ條

元吉原開設當時、幕府が庄司に與へた營業心得の五ヶ條が、同書にある。他書にも見る所であらうが、今本書の記事を拔いておく。

「元和三年三月の頃と申傳へ候右甚右衛門御見出に而願之通吉原一ヶ所に被仰付候　同時甚右衛門へ被仰渡候御書付五ヶ條の寫

○傾城町之外傾城屋商賣致すべからず。傾城町圍の外何方より雇來候共先々へ傾城差出候事向後一切停止たるべき事。○傾城買遊び候者一日一夜より長留致間敷候事。○傾城の衣類惣縫金銀の摺箔等一切着申間敷、何地にても紺屋染を用ひ可申事。○傾城屋町屋作り普請方美麗に致すべからず町役等は江戸町之格式之通り急度相勤可申事。○武士商人躰の者に不限出所慥ならず不審成者徘徊致候はゞ奉行所へ可訴出事。

さうして此の元吉原の開基は、同書にこれも「元和三年より地形普請等に取かゝり、同四年霜月中より初而一所に商賣仕候」とある。

慶長頃の傾城町

元吉原開設以前、慶長頃の江府の傾城町の狀如何。尙同書にある「享保年中町奉行より上書の寫」といふのを拔くと、

「慶長年中迄は御城下に定り候傾城町無之貳軒參軒宛所々に分散致し罷在候。其中に軒を並べ居候場所三ケ所有之候。

一麴町之通　傾城屋十四五軒。一鎌倉河岸　右同斷。一大橋の內柳町　廿軒餘。

（前略）右柳町傾城屋は皆々御當地素生の者に御座候。鎌倉河岸の傾城屋は御江戸繁昌に付駿府の彌勒町より引越申候。麴町のけいせい屋は京都六條の傾城町より引越候者どもに御座候。此外伏見夷町奈良木辻などより參り所々に二三軒宛罷在候。」

晝夜の御免と引越料

晝夜營業の免許は、新吉原に移轉した當時からである。同書に、「是迄晝ばかり商賣仕候處、

自今以後晝夜商賣仕候樣御免被仰付候事」とある。さて彼等が今の吉原の地に移轉したのは、明暦のはじめ。即ち、明暦二年十月九日に、奉行の石害(谷)將監から、吉原年寄中に移轉の命令を發してゐる。その時、四十餘年住居したから誠に移轉は困難だと、年寄中から訴へると、其緩和策として從來にない晝夜の營業を許したり、尙引越料の多額を遣はしたり、殊に從來の二丁四方の場所を、代地では五割增の二丁に三丁、下し置かれるなどと色々恩惠を與へてゐる。移轉命令の理由は、「是迄の場所御用に付」である。引越料は元來諸書一致しないが、此の記聞には、「壹萬五百兩、小間一間に付金拾四兩ならし」とある。因みに新吉原は、「同(明暦三年)八月初旬新吉原普請出來に付引移商賣仕候」とある。

サア〳〵かご(駕籠)のしゆ(衆)だんな(丹那)がおつしやる(仰有)さけ(酒)一ツコレハありがたう御ざり(座)ますコレぼうぐみ(棒組)よさかずき(盃)ではめんごう(面倒)な。いつそちかづき(近)のこれがよいこぐつと茶わん(碗)でひつかけるさけ(酒)の。イた詞([illegible]嬢)きげんに山ぶき(吹)のはな(花)のひかり(光)に氣もいさみ(勇)御亭樣(ごていさま)おせは(世話)になりましただんなさま(丹那樣)へもよろしくこひよろ〳〵あ(足)

しでかへりける

【サア〳〵かごのしゆ云々】此の詞は、茶屋の主の佐次兵衛の詞と見るべし。【コレハありがたう云々】これ駕籠舁の言也。而してさかずきとちかづきと語呂を合はせたる點、作者の機轉也。【山ぶきのはなのひかり】駕籠賃なり。當時、吉原通ひの駕籠賃は如何なりしや。山ぶきのはなのひかり云々は、うつかり取れば、小判を貰つての喜びのやう見ゆれども、金に詰りたる喜の助が、如何に見えを張るが遊里の常なりとはいへ、殊に散茶以下の客として僅かの駕賃に小判一枚を投ずべしとは思はれず。當時、山吹色の金は、小判の他に小額の金もありたる譯也。しかれども駕籠賃に的確なる文獻なければ、(其後、捜索すること多時、未だ駕籠賃の記載見當らず。)何ともいひ難し。然るに偶然、「川柳吉原志」に當時駕籠賃に關したる句二三あり。これによりて、此の「山吹の花のひかり」が一分金を斥せりしこと的確とはなれり。今左にその見當りたる句の二三を抜かん。

その一八五頁に、

(明和) 駕賃をかじかんだ手で一分とり

(文化) 雪の駕雨に四挺と相場立ち

明和の句も雪にして、文化も雪なり。雪ゆゑ一分と相場が立ちたりしならん。雪ならざる普通は、その半額二朱(四朱が一分)なりしならんか。その傍證は稍時代を後にしをれども、以前にも引ける

（本著第四四九頁）「皇都午睡」三編、中に、「四文錢何本とか、南鐐とか埒早く……」とあるによりて也。卽ち南鐐は、人も知る銀錢。明和九年九月に鑄たるもの。而して南鐐あたりが普通の駕籠相場と見るを得べし。（南鐐は、二朱に通用す。）よりて南鐐の額二朱が普通相場にて、それが雪には倍額の一分に値上げされしものと見るを妥當なりとせんか。卽ちこの喜の助も、やはり一分をはづみたるものと見るを得べきか。（雪の日ならざれど、若いが損にて、多少の見えを張りしものと見るべし。）

〽（歌カヽリ）まがき（籬）〳〵でひく（彈）三味に〽（歌）たれ（誰）に見せうこてべに（紅）かねつけ（鐵漿付）うぞみんな（皆）おまへ（前）ゑしんぢうだて（心中立）おううれし（嬉）〳〵

○愈々早衣喜之助交會の場面の展開也。先づそれに及ぶ雰圍氣を描き出ださん作者の用意と見るべし。【まがき】遊女の控へをれる店と入口路次との間に落間あり、その落間（おちま）と路次との間の格子戸。下等なる妓樓にては、落間なく、見世と入口庭とを直ちに堺するもの、是れ籬也。因みに、後にはこの籬の構造と間口とに依つて、妓樓の階級は自ら區分されたり。卽ちこれ安永以後十七年、寛政期よりの事にして、（それより以前は、太夫・格子見世、散茶見世、梅茶見世、切見世の四等ありき。太夫亡び、従つて太夫格子見世も亡び、以後は、散茶より「大籬」「半籬」の二種を生み、梅茶は、町並となりたり。）その

區分、慶應の末まで繼續されたりといふ。曰く大籬（間口十三間、奥行二十二間、格子は幅七寸の赤塗。籬の高さは天井に達す。總籬ともいふ。）半籬（間口十間以下、籬は名の如く大籬の二分の一或は四分の三。交りともいふ。）町並（間口同上。籬は二尺程。大町小見世ともいふ。）小格子（籬を附けず、竹を横になし、格子の幅も三寸を限りとせり。河岸見世ともいふ。）長屋（小格子より尙下れるもの。切見世、局見世ともいふ。）の五種にして、凡て籬の有無及びその大小によりて店の格式を差別したる也。故にこの籬に大或は半を冠して、以てその名稱とせり。（但し是事、此の藤蔓當時より後の事たるは、無論也。此の正本の年代は、明和遲くとも安永三年（新內の歿年）以前たる事確實なれば、從つて此の正本本文の「まがき」も亦、寛政期以前の、單に籬の義と解すべきこと勿論也。爲念。）【彈く三味】この三味は、所謂清搔の類ならんか。守貞漫稿二十、娼家下に、

「吉原町見世女郎ども黃昏に至り夜見世を張る時、內藝者ある家にては、內藝者の役とし、無之家には新造の役として、三絃を見世の敷居際にて繁絃するを今世の「すがゝき」と云。故に夜見世をしらす菅垣など云ひて彈之を合圖に見世女郎ども上妓より次第に出來り、見世に列坐する也。正面を上妓とし、左右を下妓新造の座とす。此時內證と云ひて主人の棲む席の隔に簾を下し鈴を鳴す也。簾を下して障子を開く也。其次すがゝき。」

尙云。「（前略）新吉原へ移りし比も專ら唄ひて合の手にすがゝきを彈きしが、後には小歌唄ふこ

「たれに見せうとて」云々

とは止みて、すがゝきのみ殘りし由也。云々。今も吉原の菅垣は每家大同小異ありと雖も、皆繁絃にて唄はなく、同じ事をくりかへし彈(く)也。此行他(に)無之也。」

右に據れば、此の新內の本文「籬々でひく三味」は、三味に合せて「たれに見せうとて」の唄を歌へるやう見ゆれば、即ち唄あり、故に純然たる淸搔にあらざるやうなれども、しかも予は是を淸搔なりと見る也。何となれば、守貞生存當時は、文政天保期。此の新內の本文を遲くとも安永初年と見るも尙五十年の歲月あり。殊に元吉原時代は、小唄に淸搔を合の手としたる文献もあれば、此の新內本文は、此の風習が當時なほあり、即ち是を小唄まじりの淸搔と予は見る也。しかいふは、予の誤りにや、如何。而して、籬々でとあるは、此の「たれに見せうとて」の唄が、當時遊里にて大いに流行せしものなるが故にと見て可ならんか。【たれに見せうとて云々】此の唄の句は、本(もと)、長唄「京鹿子娘道成寺」にあり。娘道成寺には、

「(前略)かはゆらしさの花娘、戀の手習つひ見習らひて、誰に見せよとて紅鐵漿つきよぞ。みんなぬしへのしんぢう立て。おゝうれし〳〵。(下略)。」

即ち「娘道成寺」にては、「ぬしへの」とあり。藤葛の本文は、「おまへへ」とあり。(因みに、この「娘道成寺」は、寶曆三年三月、中村座興行、白拍子中村富十郎役也。長唄は、初代吉住小三郎其他にして、しかも吉住小三郎は、此の「娘道成寺」にて一層の名聲を博したりといひ、殊に彼が同年七月十六日に享年五十五に

て殘したるに見れば、則ち此の「娘道成寺」は、彼が一世一代なりしならん。したがつて、寶暦を經て明和安永の此の新內正本時代にも、尙、娘道成寺の中の「誰に見せうとて」が喧傳せられ、獨立して小唄として遊里にも傳唱せられしならん乎。因みに娘道成寺は、吉住の秀技にもよりしならんが、格別の好評にて、三月より六月中旬まで興行せりといふ。而してその翌月飄然として彼は逝きし也。）

【しんぢうだて】 心中立也。わが心中を現はす也。證據として見するもの也。この心中も亦現に心中（情死）などに轉化せる本(もと)の、互ひの心中——眞心(まごころ)の意也。

メリヤス
〽花さそう（誘ふ）てう（蝶）はかすみ（霞）の野べをまつ（待）合日かげの木〳〵ははな（花）をまつ（待）合人はなさけ（情）の夜すがらの二ツまくら（枕）のはな（花）をまつ（待）ほんにつとめ（勤）はまゝ（儘）ならぬ。

めりやす考

【メリヤス】 こゝにこの唄、「めりやす」とあれば、序でながら、メリヤスに就て一言すべし。山崎美成の「海錄」に、曰く。

めりやす　歌舞妓事始卷之二廿、云、上略「一部の內、毎年樂屋にして三味線をならす、是をめりやすといふ。甲陽軍鑑にも出たるめりやすきといふ事を下略して是を名付る。」（此下略の說信じがたし）美成按ずるに、今端歌をめりやすといふ。その名目何の義たるを詳かにせず。右の事始の

文によれば、役者の藝をなす毎に、樂屋にて引ける三絃をいへるによりて、その三絃を合せ謳へる小歌故に、めりやすといへるならんかし。又一種、絲もて手掩ふべき物造れるをもメリヤスといへり。（一名莫大小と云。そは手の大小によらず、何れへもよき程なればなり。）亦何の義といふ事をしらず。或人の說とてきけるは、メリヤスといふ唄ひものは、俳優の所作によりて長くも短くも心の儘に唄ふものなれば、然名づけたる也。手お（ほ）ひより負せし名なりといへり。さもあるべき事にぞ思はる。メリヤスは蘭語なりといへり。〔久彌曰く。同じく美成著の「三養雜記」にも之と殆ど同文載りをれり。〕

「めりやす」の語原は、矢張り外來語のめりやすより來りしものならん。海錄には、蘭語なりといへりとあれど、故前田太郎氏「外來語の研究」に據れば、スペイン語 Medias なりといふを（辭林說）正しとして、他の蘭語說、葡語說等を否定せるが如し。（外來語の研究一二九――一三一）而してそのメリヤスは、手袋の名に非ず一種の布帛の名なりとして、柳亭種彥の足薪翁記、卷之二「めりやすを手袋の名とおもふはわるし、めりやすは手袋を作る布の名也。むかしはめりやすの足袋、めりやすの股引等あり」を引いてこれを證かにせり。（莫大小は、天文年間既に輸入し、享保の頃は、蘭人より手編法を傳授し、幕末は、手袋、靴下、大小刀の柄袋、鍔袋、刀の下緒、印形入、印籠下げ、巾着等にまで需要せられたりと云。日本百科大辭典、齋藤氏說。）

但し前田氏の研究は、端唄のめりやすには、一切言及する所なし。唄の「めりやす」は、本來小唄よりは長く、長唄よりは短かき一種の端唄也。而して此の「めりやす」の考證については、故佐々醒雪氏の「俗曲評釋」中の一篇『小唄と端唄』の中に、最も悉し。今左に、佐々氏の説を要約すれば、

　手覆のメリヤスから來た説（第一説）、極めてしんめりとした唄故、「めいりやす」といふ傾城詞から來たといひ（第二説）、又音聲の低くなることを「める」といふから、この唄はとかく「めり易きもの」であるといふ意味で、「めりやす」といふ（第三説）とも説かれてゐる。近世事物考は第二説により、嬉遊笑覽は第三説を採り、聲曲類纂も第三説に傾いてゐるが、……元來この詞の起つた元文寶暦は、かの滑稽洒落の流行時代であるから、莫大小説が最も面白いと思ふ。「めいりやす」や「めり易き」は餘りに迂遠な考と思はれる。ともあれめりやすの本質は、以上の諸説に既に説明せられてゐる。第一、本來劇場に用ゐる三味の彈き方であつたこと。第二、音調の低くなり易い、動もすると滅入る樣な心持のするものであつたこと。第三には、長唄より短いものであるといふ事である。

　右の中、第一の劇場に用ゐる三味線の手であつたといふことは、歌舞伎事始に「……」（久彌曰く、海錄所引の文と同じ）とあり　聲曲類纂には、義太夫節の三味線には、詞の間に彈くものを

めりやすの祖

メリヤスといひ、長唄（江戸長唄のこと）にては相方といへり。」とある。して見れば唯役者の詞の間に静かに彈くあしらひの三味であつたので、本(もと)は江戸長唄に附屬したものであつたが、後に義太夫の三味線彈がこれを引受けることさへあつて、めりやすといふ名が、義太夫の方にばかり殘つたのである。すれば當初は、唯三味のみであつたが、後にはこれに合せて簡單な唄をも謠ふことが始まつて、これをめりやすといつたのであらう。第二の低い調子云々は、劇場の長唄の樣に調子が高くて他の鳴物を用ゐるものは、普通の宴席には適せない。殊に安永天明の瀟洒な四疊半趣味には、この滅入るやうなものが適して、一時に流行したのだらう。第三の短かいものに就ては、長短不論の説もあるが、元來短かいものを專らとし、間々長いものも謠はぬでもないといふに過ぎぬ。而して元來劇場の三味から起つたのであるから、長いめりやすといふと、大抵江戸長唄の文句を借り用ひる。短かいものは、投節の唄そのまゝの物もあるが、或は長唄の一節を取つたものもある。從つて三味の手も長唄に似たものが少くないのである。

めりやすの祖についても、佐々氏に明快なる斷論あり。鳥羽屋三右衛門説（江戸節根元記）松島庄五郎説（長唄系圖及日本演劇史）富士田吉治楓江説（守貞漫稿）を巧みに折衷して、曰く、

　その傳系からといふと、皆師弟の關係のある人々で、三右衛門は杵屋第四世六左衛門の門人で、庄五郎は三右衛門の門人。楓江は又庄五郎の門人である。すれば問題は頗る明白で、鳥羽

鳥羽屋三右衛門

屋がめりやす風なる長唄の一流を創めて、庄五郎に至つてそのめりやすの名漸く世間に聞え、楓江に至つて盛んになつたのであらう。

年代は、享保頃には、まだ現れず、（久彌曰く、此說、邦樂年表の享保十六年正月、中村座の「無間鐘」をめりやすの嚆矢と稱すといふに衝突せり。聲曲類纂にも松島庄五郎享保中とあり。）元文中に、流行の兆を來し、（久彌曰く、此說、予が後段に述ぶる鳥羽屋三右衛門の唄めりやす創始を元文四年の豐後節停止後なりとの臆斷に照應するが如し。）寶曆年間には、「女里彌壽寶年藏」なるめりやす本まで上梓され、以後明和安永にかけて黃表紙洒落本の類に、屢々此の名が現れてゐる。天明頃に終つてゐて、其後は、長唄の寄木の末に、僅かに附載せられてゐるのみである。文化三年の「あづまなまり」には、尙めりやすの名ありて、三馬の序にも見え、本文中にも、五大力の如きは殊にめりやすと肩に記してゐる。云々。（以上、佐々氏說）

却說、茲に面白き發見は、鳥羽屋三右衛門も楓江も、共に、新內の祖たる豐後節に關係の淺からぬが如く見ゆること也。

東都にて長唄日利安、初めは鳥羽屋三右衛門也。其後豐後節も彈き始る也。三右衛門事、後に東武專太夫となり。唄（一本、歌）は文五郎といへるもの專太夫の三絃の弟子也。（イ東都に三絃弟子に）東武の弟子にあらざるはなし。唄の弟子松島庄五郎、是は能く諷ひしもの也。（江戸節根元記）

……京（？）（享保カ元文カ）文年中東都へ下り、宮古路豊後太夫と名乗る三絃相方鳥羽屋三右衛門、佐々木市藏、三絃手附は、三右衛門也（久彌曰く、佐々木市藏の名は、邦樂年表所引の諸書に豊後掾の三絃としては見當らず。前名幸八といひ、元文三年、宮古路文字太夫（後の常盤津文字太夫）の三絃として名を載せたり。市藏は、延享四年（此年、文字太夫、宮古路を關東に、更に常盤津と改む）關東文字太夫の三絃として改名市藏、以後、明和五年頃まで、常盤津派の立三味線を勤めたり）鳥羽屋三右衛門は、勿論、豊後掾の三絃として無之。豊後掾の三絃としては、岸澤三五郎と片岡四郎三郎との兩名の名を見るのみ。或はこの岸澤三五郎、改名して鳥羽屋三右衛門といひしか。未考。）國太夫節（久彌曰く、豊後節の別名なりき）の三絃は、甚だせはしく東都に向きかねし故、子供にもよく彈かるゝやうに手を付替へし也。（同書）

此の江戸節根元記の中、宮古路豊後掾個人の出自に關する記事は、誤れること、誰しもの知る所なるが、鳥羽屋に關しては、多少の事實を認むべきか、如何。恰もよし、聲曲類纂「宮古路豊後掾」の條中にも、左の記事あり。

豊後掾三味せんの相方は鳥羽屋三右衛門が弟子の佐々木市藏（久彌曰く、こゝにも、江戸節根元記同樣佐々木の名あり。）三味の手付三右衛門也。國太夫（豊後掾と同人也。）始めは、竹本豊竹の世話上るりを取直して語りし。（聲曲類纂卷一）

鳥羽屋を尙、大日本人名辭書によりて見るに、

四代目杵屋六左衞門の門人なり。或は謂ふ天下一平左衞門（久彌曰く、天下一平左衞門は、長唄系圖によれば、二代杵屋六左衞門の弟子なりと）の門なりと。…………長唄メリヤスは三右衞門始めて之を彈ず。初め文五郎と名付く。傳へ曰ふ豐後節（文五節か。久彌）は其の手に出づと。後東武專太夫と改め、……當時三絃を手にする者一として其門に出でざるはなし。明和四年二月二十七日歿す。年五十六。門下に松島庄五郎あり。云々。（聲曲類纂、名人忌辰錄）

初め文五郎といひしことが果して事實ならば、ぶんご節は、文五節にして、宮古路豐後掾とは全く別物なりやも知れず。（すれば、三右と豐後掾との因緣說は全く後人の混同にして、二者交涉なく聊か失望なき能はず。）然るに、上揭の江戶節根元記は、文五郎を別人なりとして、三右の三絃の弟子なりといふ。何れが是ぞ。若し宮古路豐後掾と交涉あらば、そは豐後掾東下の享保十五年以後の事也。それ以前は、彼は、杵屋の系統として、長唄を彈きをりしならんか。（彼の師四代目杵屋六左衞門は、正德三年四月の歿なり。正德三年は享保十五年を遡ること十八年也。其間彼は如何になしをりしや。恐らく普通の長唄に遊びをりしならん。）即ち彼は元來、江府の產、長唄の三絃を習ひゐしが、恐らく豐後掾東下の享保十五年頃に於ては、三絃家として彼の名聲、全都に偏きものありしならん。從つて恐らく豐後掾より辭を卑うして招聘されしものならん。よりて彼は、舞臺には、己が弟子を立たせ、自己は、手付に專ら腐心したりしならん。而して彼が後年の唄めりやす創始には、この間、（享保十

五年より元文四年までの）豐後との提携が大に與つて因を爲したるならん。卽ち、豐後節も、初めは、「竹本豐竹の世話上るりを取出して語りし云々」（聲曲類纂）とあれば、その間、義太夫節に殘れる「めりやす」が自然、彼の藥籠中の物となりしなるべく、以後豐後節の停止が却つて彼に幸ひし、以て終に長唄めりやすの一派を彼が創始せしには非るか。

創始時代

卽ちめりやすは、その創始時代は、劇場の相方として用ゐ、傍ら義太夫節の家にもこれを傳へ、（此頃、既にめりやすと稱す）唯、三味の手に過ぎざりしが、更に鳥羽屋三右衞門に至りて、卽ち彼の發明によりて、めりやすは、長唄めりやす時代（端唄も含む）となり、始めて、めりやす流の三味の手に長唄を合せて唄ふ事起れりと見るべき也。（用途は、劇場の床にても、また遊里酒宴の興にも、共に行はれたるもの丶如し。）

唄めりやす創始の年代

但し鳥羽屋三右衞門が唄めりやす創始の年代は不詳なれども、若し三右衞門が豐後節三絃の手を付けたりといふを事實とせば、恐らく元文四年後の、豐後節停止以後の事ならんか。（それ以前に於て、否、豐後掾東下以前の享保十五年以前に於て、既に、江戸の劇場の相方よりめりやすを長唄に工夫したりしとするも、一論也。然れども、唄めりやすは、享保以後元文頃に端を發し、以後漸く榮えたりと予は見るなり。何となれば寶曆七年の「めりやす豐年藏」に對して、享保十五年以前にては、約三十年を有し、餘りに年月の距離甚しければ也。）但しその以前にも、彼は時折りにこれを彈き試みしことありしやも知るべからず。

然れども鳥羽屋三右衞門の長唄めりやすは、門人松島庄五郎（人名辭書所載の長唄系圖は、四代目杵屋六左衞門の門人として、三右衞門と相弟子とせり。此説矛盾せざること後に曰はん。）の努力によりて始めて世に榮えたること、論なき也。

松島庄五郎

松島庄五郎。鳥羽屋三右衞門の門人。享保中其名最も高し。（聲曲類纂）

とあれど、如何にや。即ち享保中は、未だ鳥羽屋が、豐後掾の節付をなしゐたる頃也。即ち唄めりやすは、未だ母體に潛みゐたる時也。即ちこゝに於て惟ふ、この享保中、其名最も高しとは、松島がめりやす師としてにはあらず、正系の劇場長唄師として名聲高かりしの謂に非ずや。即ちこの聲曲類纂の文は、「享保中（長唄語りとして）其名最も高し。（後）鳥羽屋三右衞門の門人となる、（以てめりやすを唄ふ）」と前後を轉倒すべき也。玆に問題となるべきは、坂田兵四郎の出現なり。坂田と鳥羽屋と及び松島との三者の關係、而してめりやすの祖たる榮譽は、此の三者の中、誰人に歸すべきか。是れ吾人の疑問として措く能はざりし所也。今臆斷に失するやも知れざれど、この三者の關係、而して何人がめりやすの祖たるかを明らかにせん。

坂田兵四郎

其頃、坂田兵四郎なるあり。坂田藤十郎が妹の子にして、坂田を名のり、夙に小唄の名人として名あり。東下、享保十六年正月、中村座に無間の鐘を演ず。是れめりやすの嚆矢といふ説あり。（近世邦樂年表説。）然れば三右衞門とめりやすの本家爭ひとなるが、この坂田のめりやすの

嚆矢と、鳥羽屋との交渉、諸文獻に明らかならず。強いて謂はば、坂田は唄本位よりめりやすに及び、三右は三味本位よりめりやすに及び、二者共にめりやすの創成に力ありたりといふべきか。殊に、坂田兵四郎の享保十六年中村座出演當時は、既に、めりやすの祖たる一說すらある松島庄五郎が、劇場に長唄師として一家を爲したる頃なり。然れども、松島は、未だ鳥羽屋のめりやすに轉化せざる以前の事にして、恐らく正統の長唄師として、擡頭しつつありし頃也。而して此の坂田のめりやすは、恐らく天賦の美聲に委せたる獨吟風のものなりしなるべく、よりて後世の「めりやす」に似たりとて、めりやすの嚆矢と後人が稱するには非ざるなきか。即ち當時は、めりやすが、未だ鳥羽屋の手に僅かに三絃の手として存したるのみ。未だ何人も（坂田も況して松島も）唄めりやすの出現を夢にだに知らざりし頃といふを得べきか。殊に、こゝに面白きは、（予が此の說を裏書するは）松島が長唄系圖にて、鳥羽屋と同じく四代目六左衛門の弟子にして、鳥羽屋と師弟の關係なき事也。これ即ちこれを證して餘りあらざるなきか。即ち松島は、初め杵屋の門人にして、鳥羽屋と相弟子、劇場長唄の新進として、坂田の享保十六年以前享保十一年市村座顏見世番附には、既に江戸長唄の筆頭に在り。而して享保十六年以後も、即ち寛保元年頃より屢々坂田兵四郎と一座して劇場長唄を演奏せり。是れ即ち、坂田も、彼も、未だ長唄の正系にして、間々獨吟ありて、後世のめりやすの體をなしたりきといふべき也。

而して其頃、既に鳥羽屋の唄めりやすの創始あり。（予は、これを元文の末と推せり。）即ちそ

富士田吉治

の漸く新物として歡迎せらるゝ風あるを看取するや、坂田兵四郎のめりやす式獨吟に刺戟されゐたる松島は、自らも亦と、遂に正系の長唄を棄てゝ此の長唄めりやすに走りしには非ざるか。即ち相弟子たる鳥羽屋を新しく師とせしには非るか。かるが故に、また松島が鳥羽屋の門人なりとの傳說あるには非ざるか。即ち松島の前半生は、杵屋の正弟子にして、鳥羽屋と同門。後半生は、鳥羽屋の門人、唄めりやすの宣傳家、以て單に美聲の獨吟を以て鳴れる坂田を壓倒して、終にめりやすの祖たるが如く後人に傳へらるゝに至りしならざるか。恰も勁敵坂田は、寛延二年に歿せり。（聲曲類纂）爾來、漸く彼は斯界の第一人者たるの位置を形實併せ得、寶暦七年（坂田の歿後九年）には、「めりやす豐年藏」、翌々九年に「歌撰集」の板行とまで機運を作り上げしにはらざるか。即ち鳥羽屋がめりやすの創始、松島の宣傳、更に松島の門人の富士田吉治（藤田楓江）の大成によりて、めりやす成るといふべき也。

次に名人、富士田吉治（松島庄五郎の門人）荻江露友等の努力に待つこと多し。

殊に、富士田吉治（藤田吉次）は、

始め女形にて佐野川千藏と稱す。享保八年中村座へ下る。都和中（久彌曰く、「聲曲類纂」によれば、「富士田楓江、始めは歌舞妓女形にして、都和中の抱へなり。和中は、乘物町伏見屋といふ茶屋なり」とあり。）而して此の和中は、初代都一中江府にありし頃の弟子ならんか。すれば宮古路豐後とは相弟子也。）に一中節

を學び、又豐後節をも稽古し、舞臺にて出語り彈語り等をなして名聲を博せしが、寶暦七年十一月二代目和中と改め、更に長唄に轉じて、寶暦九年十一月藤田吉次と改む。寶暦十三年より又富士田吉治と書せり。天性美音にして當代の名人と稱せらる。云々。（近世邦樂年表）

千藏と云ふ女形、聲よくて、田許川初めは豐後ぶし淨るりなどを出語りにしたりしが、頓て富士楓江と名をかへ、歌うたひと佐成と吉りて大に行はれぬ。これより歌舞伎唄を世に翫ぶこと盛んなり。後安永頃、荻江露友よくめりやすをうたひたれども、楓江には及ばず。（嬉遊笑覽卷六上）

右、嬉遊笑覽には、露友、楓江に及ばずとあれど、この露友亦中々の名手にして、名聲殆ど楓江伯仲し、現に荻江節の一派を生みたる程なりしといふ。

荻江露友。　長唄系圖には、松島庄五郎の弟子として、卽ち富士田吉治と同門なりとせり。聲曲類纂には、明和安永の頃大に行はる云々。後ち剃髮して、泰林といふとあり。

さはれ、鳥羽屋三右衞門は、宮古路豐後掾に親炙して、その三味線を勤めたる男也。楓江はその豐後節をまで學びたる男也。（以上、ぶんごを宮古路豐後にとりての予の獨斷也。）隨つてめりやすに、多少豐後節の三味線、或は節廻しが移入されをり、或はこれに似、從つて或は此のめりやす、豐後節の孫ともいふべき新內節とも因緣淺からざるべく、殊に訴ふが如く咽ぶが如き聲調は、その音に高低の差こそあれ、（めりやすは、低）四聲半式と路傍式の差こそあれ、彼此相似たりと謂ふべ

く、且つめりやすがその歌詞、（現に藤蔓の本文所引のもの丶如き）遊里の唄として、最も寫實的なる、實感の露骨なるものとして、新内と優劣を競ふべく、卽ち何れも道學者の顰蹙に値するものなる點より見て、豐後――めりやす――新内の三者の交渉淺からざるもの必ずやあらん。卽ち豐後の丸裸式は、元文四年の停止後、めりやすによりて暫く息を屏め、再び新内によりて復活したりと謂ふを得べきか。

尙云。楓江は獨吟の名手なりしと。當時のめりやす、「本と劇に於ける長唄の獨吟より矛れるものにして、撥數少く間の延びて閑なる樣、何とはなしに沈痛なるもの也」」（近世世相史）とあるに顧みば、宛ら新内の三味も爾りと曰ふべく、以て彼此一縷の脈絡ありと云ふは僻目か。

めりやす本の刊行

左にめりやす本の刊行。並にめりやすに關する主なる事項を年代順に列擧せん。（主に近世邦樂年表に據る。）

めりやすの最初演出は、劇場にては、享保十六年正月の中村座、「無間の鐘」坂田兵四郎なりといふ。但しそのめりやすと名を冠らしての最初は、寶暦三年正月、「花のえん」、中村座（坂田仙四郎）なるが如し。

● めりやす豐年藏（寶暦七年）――（此頃、松島庄五郎は長唄語りとして主に中村座に出演、有名なり。此の七年、佐野川千藏（富士田楓江）都和中と改名すといふ。）

● 歌撰集（寶暦九年七月）――（前本の續篇として見るべきものといふ。奥書に「松島杵屋の流行を汲んで」云々とあり。所載の長唄及めりやす、三十種。――近世邦樂年表に據る。此頃、藤田吉次（楓江がこと）及荻江露友、共に擡頭。）

●荻江節正本（明和二年刊）（此頃、松島庄五郎既に劇場に名を載せず、富士田の全盛時なるが如し。荻江亦、次年あたりより盛んなり。）

●常盤友（明和三年刊）長唄及めりやす、計百十六種。

□鳥羽屋三右衛門、明和四年二月歿、五十六歳□

●新版増補常盤友（明和七年六月刊）所載の長唄及めりやす、七十六種。

□富士田楓江、明和八年三月歿、五十八歳□

□「江戸生艶氣樺焼」（天明五年刊、京傳作）めりやすの種目を舉げて、六十三種。

□めりやすの戯場演出は、文化十一年の十一月、森田座「すがた見」（富士田吉右衛門）が最後なるが如し。

——以上、めりやす考、終——

【花さそふ云々】蝶は、遊女自身の心情ならずとせんや。かすみの野べは、春色駘蕩たる交會のシーン也。【日かげの云々】日かげの木々、固より彼女の境遇也。待たるゝ花は、勿論我郎也。【人は云々】「なさけの夜すがらの」とは、随分飢ゑたる者の言也。殊に、二つ枕の花に至つては、これをあぶな繪より一轉化、艶畫の露骨を繰りひろぐるが如し。【ほんに勤めは云々】けだし、彼女等の眞情也。此のめりやす、何と名づくる物ぞ。恨むらくは、めりやすの正本を一々検索して、その命題を求むるの便なきを。（國書刊行會本、「徳川文藝類聚」俗曲下のめりやすに關する正本は、全部検索せり。しかれども、このめりやす不明なりしを遺憾とす。）

餘白あり。さて此の餘白に、めりやす正本「歌撰集」より二と「荻江節正本」より一と、めりやすの最も男女情痴の機微に觸れたるもの、計三を拔かん。

○明がらす

三下り「たま〳〵に逢ふ夜と逢へば、短か夜に愚痴をいふまい、あきらめられまいと、心で心たしなめど、好いた因果の味氣なや。合ねむい〳〵をこそぐり起し、聞いて下んせ初時鳥。東雲近き鐘の聲、戀しゆかしい夏山しげみ黒い羽織を跡から見れば、塒出てゆく明烏。（歌撰集）

○名とり川

二上り「われが戀路は、糸なき三味よ、何の音もせで泣きあかす。それじや〳〵見れば思ひの雲を帶び〳〵。さすぞ盃なら（か？）ずとひとつまゐれ、いやよ仰有るに、こちやもう。それじや〳〵。いやさうさんせそれじや〳〵。しかもよいこの情ざかりに、ちよつきりこつきり小女房の、こしもしなへて、やつくるり、くるりや〳〵やつくるりと、ぬめりしやんすは、ふたりとふたりが名とり川、おゝそれふたりとふたりが名取川。（歌撰集）

○敷きぞめ

「積んであるまでは罪なき夜着ふとん。合ゆうべはたれが數妙の合枕ふたつを並べておいて。ひとつはおまへ、ま一つとは云はずと合點で ギンカハリあるぞいの。夜なに朝なに睦みてふかきふかき思を呉竹の、葉末に雫合つもらば松の葉の糸でつないで仕立てゝくけて、かはす言葉のもろ〳〵ばさ合よしや錦に織るとても、一羽の鳥はいやじゃわいな。合上ルリギン鴛鴦と燕はどこやら可愛い。鴛鴦にやおもひ羽、つばくらは子までなしたる中じゃもの。すさみかさぬる、閨の敷きぞめ。（荻江節正本）

鳥羽屋の師系

鳥羽屋三右衛門の師系

右の稿發表後、一讀者より疑問を云越され、自分もハタと當惑したものである。從來既定の諸文獻では、如何にするも此の疑問を解き得ない。こゝに問題を附記して、博雅の示教に俟つ。鳥羽屋三右衛門を四代目杵屋六左衛門の弟子なりとすると、四代杵屋は正德三年四月歿である。然るに三右衛門は明和四年二月十七日歿、年五十六であるならば、三右衛門の生年は正德二年である。卽ち四代杵屋の死年の前年であり、師系を四代杵屋におくと、鳥羽屋は、僅か二歲の弟子である。餘り可笑しい。何れかの生歿年月に誤りがあるか、又は、孫弟子の類であらうか。或は、「邦樂年表」所說の如く、全く天下一平左衛門の弟子かといふのである。

天下一平左衛門の弟子か

〽江戸ブシ なつの夜の蚊やり（遣）のあとのうたゝねに。ざしき（座敷）ぐもしづまりて。ねまき（寝巻）地のまゝに喜の介が。身（ハル）はうつせみ（空蟬）のこゝち（心地）して。きゆる（スエ・消）おもへ（思）のかや（蚊帳の中）のうち。

【江戸ブシ】 江戸半太夫の半太夫節一名江戸節なり。聲曲類纂巻之三に「江戸半太夫幼名半之丞といふ。後江戸半太夫と改む。始は說經祭文の上手なりしを、肥前太夫がすゝむるにまかせ、淨瑠璃にかへて、則肥前太夫に學び一家をなせり。元祿江戸名所咄に江戸半太夫が說經とあり。譚海に半太夫は外記節より出たり又永閑が弟子なりともさつま左内が弟子也とも云由記せるは取るべからず。甚左衞門町に住して、境町に操芝居興行の後、（正德の頃）薙髮して坂本梁雲といふ。貞享元祿の頃より世上にもてはやされ、今に江戸節又半太夫節とて廢る事なし。淨雲以後江戸にての名人なりしとかや。云々。門人多き内にも天滿屋藤十郎一派をなして河東ぶしと云ふ。（下略）」久彌曰く。他に、半太夫の師江戸肥前掾を以て江戸節となし、［普通に、肥前節といふ］而して半太夫を半太夫節といひ、特に江戸節といはずとする一說あれど、今予は、此の江戸ブシを、流行の永かりしより見て半太夫節のそれなりと見做す也。尙他に、肥前、半太夫、河東、土佐、外記、大ざつま、とらや永閑等の節を江戸節と總稱するものあり。）【なつの夜の云々】以下しづまりてまでが、江戸節との意ならんも、こは單に江戸節の節付にて唄ふとの意か、或は、半太夫節正本中に此のやうな文句あるにや、念のため半太夫正本のあらかた（德川文藝類聚俗曲下）を

調べたれど、之を見ず。尙他日の考に委ねん。とにかく、聲曲類纂の編者も今に至りて廢れず（聲曲類纂は、天保己亥稿成、弘化丁未發行。編者齋藤月岑。）といへるが如く、此の藤蔓正本當時の、明和安永期に於ても、此の江戸節は、珍重がられたるものなるべし。【身はうつせみの】身はうつせみの如きなり。「うつせみ」空蟬、蟬のもぬけ、轉じて單に蟬をもいふと。世に現し身の轉訛たる現せ身と混同しをれど、こは空蟬の文字通りの義なりと解して可なり。而して「消ゆる」への緣語たることも無論なり。あたかも、「なきわびて身をうつせみと成ぬればうらむる聲も今はきこえじ」（續千載五）とある空蟬の如き、此の藤蔓の本文と殆ど同じ行き方也。

コレ早ぎぬ今よい（宵）まではいろ／＼としゆび（首尾）してきた（來）が。もはや（最早）くる（來）事もかなはぬ（叶）ソリヤなぜにへ　ハテしれた事さ。つね／＼（常々）そなたにも　はなし（話）おく通り。おや（親）。女房。ともだち（友達）の。いけん（意見）とぎり（義理）にせめ（責）られて。このごろは酒もとうらぬ（通らぬ）ものおもひ（物思）。どうしたいんぐわ（因果）なことじややら。こよい（今宵）がそなたの見おさめ（納め）と。かほ（顏）つく／″＼とうちまもる。

【コレ早ぎぬ云々】此の段、喜之介が緣切の申出なり。その理由の口上なり。親、女房、友達の意

見と義理とにこれを歸したり。そのため酒も此頃は通らぬ物思ひ、しかもこをどうした因果なことじややらと嗟嘆せり。意志の弱き、さりとて良心に於て全く痲痺し得ざる當時の不良息子を描出して、よくその性格を如實にせるものといふべし。「かほつく〴〵とうちまもる」は、黠晴の句。これありて、しかも喜之助の未練たつぷりなる狀、よく描き出だされたり。簡潔にして巧なる手法といふべし。

はやぎぬなみだにくれ(昏)ながら。タヽキ さしこむしやく(癪)をおしさげ(下)て。詞カヽリ きこゑぬ(聞えぬ)事をいわ(は)しやんす。ウ あい(逢ひ)そめてからかたとき(片時)もわする(忘)ゝ日とてはないわいな。カン おかほのやつれ(窶)を見るにつけ おやど(お宿)のしゆび(首尾)は いかゞ(如何)やと あんじ(案)くらせ(暮)しかいもなや。ウ中 むり(無理)はおとこ(男)のつね(常)なれどいゝわけ(言譯)するはおなご(女子)だけ。いふ(言)てかゑ(返)ら(ぬ脫)ことながら おまへにわかれ(別)て早(さ)からす(烏)のなく間も いき(ゐ)ていらりやうかおしてとめ(止)たきあさ(朝)ごとの。わかれ(別)のむり(無理)なおことば(言葉)に。わたしがつよく。カン さからわば(逆らはば)。ウ すひ(粋)なおまへのおこゝろ(心)もかわ(變)らしやんすであらうかと。あのゝ

もの〻に。まぎらしてかへすおもひはいろいとのむすんでとけぬかなしさは
人にしられぬむねのうち。

【はやぎぬ云々】以下は早衣の日頃の包むにあまる愚痴、怨言の雜列也。彼女の此の悲嘆、未練たっぷりなる男の胸に、いかなる神藥の效をなすや、いはずとも知れしこと也。是れ心中決行の序として、隱約の裡に作者が用意せる所のもの也。且つ始めて、新內の新內らしき獨特哀絕なる詞調に一轉化したる序として、此の曲のクライマックスを促す所以ともなり、聞いても讀んでも漸く脂が乘りかゝる所也。【あひそめてから片時も忘るゝ日とてはないわいな】この種の文句、新內には、常套の句也。切なる女性の胸裡を描出して、かくの如く簡にして要を得たる句はあらず。此の熱情に絆されて、大抵は、心中と來る也。卽ち新內の詞曲中、曲漸く高調に入らんとする砌、必ずこの種の、相手女性の悲叫あり。尾上伊太八の「歸咲名殘命毛」の中にも「逢ひそめてから一日も烏の鳴かぬ日は有れど、お顏見ぬ日は無いわいな。」とあり。【お顏のやつれを云々】お宿の首尾は如何やと案じくらしたとあれば、此の女、また相手の環境を思ふだけの餘裕はありし也。しかもそれ程の明るき意識も、これを曇らすに餘りあるは、合歡情痴の夢なりといふ也。しかも心中して、相手方を永劫の不首尾ならしむるに於てをや。【むりは男の常なれど云々】面白し。云ひ譯するは女、

早衣の圖

紫枝戀情柵三編の內

無理は男。男性本位の意氣見えて面白し。情界に多年巣くへる職業的女性も、惚れては、今の新しい女式にはなり得ざりし也。云ひ譯するは女。罪を引つ被るは凡て女といふ也。ホンにしほらしきものといふべし。この一點のみに、喜之助の親女房友達を忘れしむるに十分なる、熱情奔馳の原動力ありといふべし。可憐々々。而して、この「無理」は何を斥せるにや。男の一般、我意を徹す横暴なる態を謂ふか。或は、「自分は惡止めをしなかつたのに、無理ばかりいうて居續なさんした」その無理の意か。現に、「お宿の首尾は惡いのも、氣のつかぬではなけれども、無理を云うての居續が……」（里空夢

夜櫻）にもある、この反家庭、常理背反の意か。【お前に別れて早烏の云々】この「別れて」は、「絶緣されて」の意なり。單なる後朝の意にはあらず。この種の文句、また新內常套の筆法なり。「明烏夢泡雪」にも「いつそ添はれぬものならば、一所に死にたい時次郎さん。殺して下んせ、死にたいわいのふ」とあり。里空夢夜櫻、園春部屋の段（二代目鶴吉直傳）にも「お前と切れて何樂しみ、私や覺悟してをりまする。お馴染がひに思ひ出し、可愛いと思うて下んせ」とあり。其他にも尙多かるべし。【早烏】朝きはめて早きに鳴く烏、一ばん雞ではなくて、一番烏の意か。【おしてとめたき朝ごとの】おして止めたきは、早衣の心なり。【別れのむりなお言葉】こゝのむりとは、前の「むりは男の常なれど」とは、稍意を異にし、未だ別るべからざるに、いざ歸るといひ出せし、悋氣か、何か、とにかく男の急に歸るといひ出せし無理の意ならんか。或はこれほど思ふじぶんを振り切つて歸るといふ喜之助を、無理といひしならんか。いざ歸るといふ無理な（寧ろ殘酷な、非道な）言葉に、の意か。【すひ】粹の字を宛つ。狹斜より生れて、通語として廣く用ひらる。以下行を改めて、その考證をなさん。

すゐ考

すゐと普通に書けり。粹の字を宛つ。通言便蒙抄中の末、一、粹、藝能にても數年其道になれて

能く心得たる者をすゐといへり。〔吹か、（よく呑みこんだ意の吹なるべし。――久彌註）帥か、粋ならんか〕くはしくもぬけたるといふ義なるべき歟。とあり。俚言集覽には「增補、すい、遊所に云詞は粋にて、拔粋の意なりといふ」とあり。嬉遊笑覽には「すいと云ふ詞は粋にて拔粋の上略なり」とあり。恐らく俚言はこれに基きしものならん。和訓栞には「すい、俗に言はずして其の理を知るをすいといふ。睟の字なり。云々」とあり。其他、推(すゐ)なり。或は愚痴(ぐわち)を月といひ、愚痴ならぬを水、すゐといへりなどの、諸說紛々たり。往年、雜誌「新小說」誌上に、諸家のすゐ、いき、いなせなどの語原考を載せたることあり。その中、故、饗庭篁村氏の「粋と通」（同氏著「雀躍」に收む。）の一節を拔かん。

『粋といふ辭は、元來上方言葉で、隨分古くからあつた句で、元祿以前、延寶前後の上方の板本を見ても、粋(すゐ)といふ言葉がもう出てゐます。

それから後年も盛に粋といふ辭は、狹斜の巷で行はれてゐる所から、段々廣い意味になつて、かの「忠臣藏」で若狹助に、師直が、「粋め、粋め、粋樣め」などゝ言つてゐる。然しこれは少し意味が違つてゐます。それから當時から說をなすものがあつて、「粋は水なり。水(みづ)なり」と言つてゐる。水の清く流れ、淀みなく、爽快を意味するところから來たものらしいので。續いては「水月論」などいふ事が出て來ました。水は粋の一件で分つてゐませうが、この月といふも

のゝ飛び出して來たのは、因緣があるので。昔の本を見ると、（勿論上方の板本だが）「こなさんはぐわちな」といふやうな文句がある。「ぐわち」の當て字は卽ち月なので、その意味は「愚痴な」と殆ど同じ意味に使つてゐるのです。尤も月といふ字の訓を「ぐわち」といふのは、謠曲はおろか、古く源氏枕草紙なんどを見ても「何月（なんぐわち）」なんどゝ言つてゐますからね。なる程此の場合、月の字を當てゝ、「月な（ぐわち）」とやつてもいゝ。而してその之と對して例の水——卽ち粋を持つて來て、粋と愚痴とを對照し、この論が起つて來るといふ事なので。粋の「水」なりといふ事は、眞面目には考へられないが、一寸さういふ說もあるからお話するのですが、この「粋」といふ字は、前言つた通り上方語で、その當時から江戸のものには、この文字は一向見當りません。卽ち「粋」といふ辭は上方の特有なのです。その代り江戸には之と對し、またこの「粋」の辭としつくり出つくはした辭で、「通」といふのがあります。この「通」といふ辭は、江戸時代には事の外流行つたやうで、云々。

でこの「粋」といふ奴だが、近代では「いき」といふ辭を、この粋の字に充てゝある事をしば〳〵小說や何かで見ますが、しつくりは充（あ）たつてゐませんね。云々。詮ずるところ、私はこゝに延寶頃の本で、色道大鏡といふものを持ち出します。云々。先づ今お話の「いき」「粋」なんといふ所を讀み上げてみませう。

「丗事百談」說

「諸分店卸」の說

意氣。（略）。

粹。當道の巧者を言ふ。拔粹を上略したる詞なり。云々。』（以上、篁村氏說）

とあり。上方の粹と江戸の通とには、なほ山崎美成の「世事百談」にも、

「按ずるにすいといふ詞は、近きことなるべし。粹の字音なるべし。萬事にくわしき人といふ義にぞあるべき。江戸にて通といふを大阪にて粹と云へり。通といふも萬事に通達する義なり。」

とあり。ともあれ、すゐは、拔粹の上略の粹といふもの、最も妥當なりと覺ゆ。卽ち畠山箕山の「色道大鏡」（續燕石十種第二所收。）、喜多村信節の「嬉遊笑覧」、「俚言集覧」の增補（增補は、井上賴圀、近藤瓶城の二氏に成る。）等凡てこの拔粹の上略說なり。（尙、すいの語原は、すき〔好き〕の音便なりといふあり。「粹の袂」の說。）

尙、水（すゐ）と月（ぐわち）とは、饗庭氏說は、ぐわちは、ぐち、ぐちならぬを、ぐちを月といひしよりその反對の水なりといへりとあれど、これには、古く、太田蜀山人の、假名世說に、諸分店卸、一名、浪花鉦（西鶴の作と傳ふ、無論眞ならず）〔此本、江戸時代文藝資料第四所收〕を引ける、小太夫の二字論あり。曰く

「大臣、小太夫（傾城の名なり）に曰く、世に傾城買ふにすいじやぐわちじやと云ふこと昔から人每に云へども譯呑込がたし聞きたいの。小太夫、妾もしかと知らぬ事ながら、此處許で云ふ事がござんす。あらまし申しませう。先づすいといふ字は水といふ字を書きます。ぐわちは月

といふ字でござるさうな。何故といふに傾城を水にたとへ、客を月にたとへます。殿たちのすいにならしやるといふは、傾文字にもまれてのちに、なることでござる。まだしよしん(初心)なをぐわちといふさうにござる。世間に初心なる人を、山だしといひます。そのごとく、男のはじめて女郎ぐるひにかゝるは、山出しの月でござんす。その月が傾城の洒落(しやれ)た水にうつりまして、傾城の心底を知りて、西へ落つるといふ心でぐわちの巧者になつたをすいと云ふので御座んす。(中略)すいぐわちは、傾城の方より云うた事でござんすわいの。隨分金つかうてすいにならしやんせ。おかし。」

即ち此の説は、傾城を水と見て、傾城の水なるが如く水になりたるものを、すいといふなりとの、傾城本位の説なり。牽強の嫌あれど、とにかく面白き説明なりといふべし。

粋道の戲著

とにかく此の粋は、昔より談理の盡きざるものと見え、粋道の説明に關する戲著頗る多し、風流粋談義、粋の源(みなもと)、傾城仕送大臣、粋の袂、三粋一致浮れ草紙、風俗八色談、野暮の枝折、破れ紙子、粋宇瑠璃(くろうるり)等、其他枚擧に遑なしといふ。而して、この粋の上方語が、江戸に入り來りしはいつ頃なりや。今遽かに斷じ難しとするも、現にこの新内正本の「藤葛」にあり。恐らくは、上方淨瑠璃の東方移植にその端を發せしにはあらざるか。而して、此の明和安永頃には、江戸女郎をして、平氣に、すいのぶすいのと云はしめしものならん。同じく新内の「明烏」の中にも、この粋をいへる有名な

「明烏」浦里の言

る文句あり。曰く、「傾城に誠なしとは譯知らぬ、野暮の口からいきすぎの粋の粋ほどはまりも強く、たゞなつかしういとしさの、愚痴となるほど戀しいもの」とあり。但し此の浦里の言は、前者小太夫の二字論とは全く位置を顚倒し、時さんは水、浦里は月也。野暮はどこ迄もそれ自身が愚痴なれど、粋の粋ほど、今度は此方が愚痴になるといふ也。愚痴になる程戀しがられるは、餘程の洗錬さならざるべからず。洞房語園異本考異の「すいは廓の案内しれる人をいふ。粋は米のしらげたるなり」の上半の廓の諸譯(しよわけ)知りが粋なりとは、此の浦里の言を裏書せるものの如し。卽ち色道に於ける洗錬さ加減を粋の不粋のといへる也。但し、明晰なる理智を以て溺れず、たゞ高處に鑑賞し、情海に遊ぶを以て後世人情本作者の描きし大通、粋の粋なりとせば、此の浦里當時の時さん流の粋は、(此の「藤蔓」の喜のさん尙且然り。)未だ左程に理智本位に墮落若しくは進歩せざる、情熱本位の時代の反映なりと目するに足るべきか。卽ち、女郎に惚れられる、女郎をして愚痴に歸せしむるだけの男性の容貌、言語、風姿、應對、技巧それらを凡て粋と總稱せるが如し。平賀源内の靑大通「味噌も味噌くさきはわるく、粋も粋くさきは粋ならぬものぞとは誠に古今の通言なり」とあるに從へば、浦里の「粋の粋ほど」早衣の「すひなおまへ」の程度は、如何なる粋なりしならんかし。されど、あたら、粋論に、多大の行數を費せり、しかる予も、粋の粋ならずといはれもやせじ。ともあれ、粋は粋なりとするが最もよかるべきか。(倘するといきとは、似たれど相異せり。そのいかなるけぢめ

あるかは、「趣味研究大江戸」の幸堂得知氏說にくはし。ついて見よ。）【あののもののに】あの事この事に也。俗曲に此の用言、頗る多し。【いろ糸の】結んでをいひたき序詞、且つ、結ぶとの緣語なり。然れどもいろ糸といひたる處、殊更、なまめいてよし。

クドキ
ない（泣）てあかせし。戀のやみ（暗）こが（焦）るるむね（胸）はあさまやま（淺間山）あいたい（逢ひたい）見たいは。い（妹）もせやま（背山）いつかめうと（女夫）とまつちやま（待乳山）せうでん（聖天）さんのおまもり（守り）やくろう（苦勞）をかけた九郎すけ（助）のいなり（稻荷）さんやそのほかのひろいせかい（世界）のかみ（神）さんのぐはん（願）がかな（叶）ふてうれしいと。おも（思）ふてい（ゐ）たに。いまさら（今更）に。そわ（添）れぬやうになつたとはどうしたうす（薄）いゑん（緣）じややら。

【こがるるむねは云々】以下、まつち山まで、宛然、これ山盡し也。いつもながらの文句なれど、外文には迚も眞似の出來ざる點、とにかく我が國文學殊に俗文學獨特の叙出なり。懷しとも餘りあり。【聖天さんのおまもり】聖天は、待乳山の聖天なり。聖天は、大聖歡喜双身天王の略、而して一種の生殖神崇拜たるは近人の遍く知る所。今更絮說の要なけれど、此待乳山に、聖天宮の創建されしは、いつ頃なりや。地名辭書所引の、文化元年、金龍山、大聖歡喜廟碑文といへるには、土人傳

云、昔聞此山自地軸湧出焉。金色神龍自虚空降住焉、山與龍長留于此地、鎭護大士（久彌曰、此の大士は觀音菩薩の意）殉像、蓋山名取於斯。名曰眞土山、（中略）然此山之所以可貴者、豈在于斯哉。抑其所以可貴而傳者、以有大聖歡喜大自在天在焉也。緣起曰、大士出現後九年、始垂跡於此山、出拔苦與樂大神力、後天安元年、慈覺大師留錫於此山、用毘那夜迦一字呪文、淨油灌天像、亦修本地秘密供養法。抑歡喜天爲德也、陰陽和合之根元、諸物之父母、使呪經說之詳矣。」とあり。江戸往古圖說（燕石十種第三所收）下卷の中に、「待乳山或は眞土山。歡喜天鎭座。社傳に推古帝御宇當山に降臨ありといふ。當山地主の神とて今末社に道灌稲荷と云小祠あり。定て太田氏の勸請にありぬべし。是を地主の神としては歡喜天鎭座年歷に合ざる也。いかが猶考ふべし云々。」江戸雀（近世文藝叢書第一名所記第一所收。）十卷目には、「金龍山附待乳山之事」一、此山を金龍山といふ事、淺草寺の山號也。爰の名たるは、此寺の鎭守として、上に聖天宮を安置すると見えたり。云々。增補江戸咄（同所收）卷第五には、第八金龍山附眞土山 觀音のうら門より出て、金龍山へ行。此山よりむかし、金龍をほり出しける故に、即ち金龍山と名付るとかや。淺草寺の山號も同名也。爰に聖天宮立給ふ。此御社には、緣組の事、又夫婦あいさつよきやうにと祈り奉る。さゝげ物にはふたまたの大こんを上る、尤も作り物にしてさゝぐる也。山は、松山にて、東の方に、淺草川、牛島新田迄見ゆる、西は大道也。扨又此山を昔は眞土山と云ひて武藏の國の名所也。紀州にも同名有と也。云々。ともあり。ともあれ、此の聖天の祠は、餘程古くよりあり、しかも中世廢れ、現に慶長見聞集に、「是を人に尋ぬれば、淺草の里はなれに、ちいさき塚あり是ぞ待乳山と敎ふる。是はせうでん塚とて、むかしより塚の上に小社有、塚もとに小寺ありしが、近年は絕てなし云々」

とあるによりても知らるるが如く、江戸初期は、荒廢に歸しゐたりしならん。そが、隆盛を來しゝは、無論明暦二年の新吉原の開基に伴なひての事と見るを得べきか。（其他、まつち山の語原或は金龍山の所傳につき種々あれど、冗々しければ、凡てを略く。）尙、待乳山は、一名聖天山とも云。「紫の一本」にも、「待乳山、金龍山とも聖天山ともいふ。古木生茂り砂石山なり。仁王門の下、蓮池のなかに辨天の社あり。云々。かの土手通ひする二挺だちの船は云々。」とあり。【くろうをかけた九郎すけの云々】苦勞と九郎とは、その頭韻なる事、いはでも著し。くろうをかけたとは、わが分外の願ひによりて、神にくろうをかけたとの意なるべし。【九郎助稻荷】花街風俗志（大久保葩雪氏著。明治三十九年隆文館刊。）の中に、九郎助稻荷は元吉原に在つて、和銅四年の鎭座である。其昔白黑二疋の狐が顯れ出て、白狐は今の銀町一丁目の白旗稻荷に祀られたが、黑狐の方は千葉九郎助といふ者の地内の田畔へ勸請されて、田畔稻荷（たのくろいなり）と崇められ、云々。然るに慶長の末年、元吉原に遊廓設置と決ると同時に、田畔の九郎助稻荷は、此土地の鎭守と仰がれ、赤縄の神と呼ばれて、益々衆庶の信仰を受けたので、明暦年間新吉原へ遊廓移轉の折に、共に新吉原京町二丁目に祠を遷して、勸請され、其後享保十九寅年に、正一位大明神の官位宣下があつたので、同年八月朔日、大祭を執行した。其祭禮の餘興に催したのが吉原三景容の一として今日まで繼續されて來た所の仁和賀狂言なのである。云々。（尙、「吉原大全」三にも、之と類似の記事見ゆ。）而してこの由緒深き九郎助稻荷も、明治二十九年、江戸町一丁目の榎本稻荷、京町一丁目の開運稻荷、同二丁目の九郎助稻荷、と伏見町

やりて

の明石稲荷と、衣紋坂下右手の吉徳稲荷との五社を合祀して、吉原神社なるものを創建し、毎月午の日を縁日と定め、且つは廓内の鎮守となしたといふ。一説には此の九郎助稲荷、淺草三軒町の宮川稲荷の祠内に同居鎮座するに至つたといふ。【そはれぬやうになつたとは云々】喜之助に、女房のあるを百も知り乍ら、そひたいとの願望を燃やししなり。早衣の眞情、けだし尤もなり。

ナヲル　わしほどいんぐわ(因果)なものはなし。五ツや六ツでふたおや(二親)にしにわかれ(死に別れ)あにさ(兄)んひとりをたより(便り)にして。あさなゆうな(朝な夕な)のかんなん(艱難)を。なきあかし(泣き明)たる月や日の。めぐみ(恵)もつき(盡)てこのさと(里)へうられ(賣)てきたは身のゐんぐわ(因果)。アワフシ　にしもひがしも(西も東も)しらば(知)こそ　やりて(鑓手)にしから(叱)れ　めうだい(名代)の　きやくしゆ(客衆)に夜すがらいびら(虐)れて。なみだ(涙)をしぼる(搾)そで(袖)とめ(留)ておまへひとりをたより(便)ぞや　合

【わしほど云々】以下早衣の身上咄なり。二親に幼少時死に別れ、兄と二人の暮し、これが盡きて、この里へ賣られて來たの也。（中川愛氷氏本に、滑稽なる誤校訂あり。「この里へ浮かれて」とあり。うられてのらを、かと誤讀せる也。）【やりて】守貞漫稿に、「鑓手、又の名を香車と云傳ふ。俗等に象戯の駒の香車をやりてと云へば、香車が別名を又やりてと云ふ。香車といふは本字は花車と書く也　花(纏頭)

名代

に廻ると云ふ心也。然れども、くわしやと云ふは、ひどきあしきとて、かしやと云ひかへたり。かしやと云ひしより又やりての名あり。守貞曰。やりてを昔は、香車と云ひし也。今はやりてとのみ云ひて、香車の名廢せり。京阪には、揚や茶屋の妻を花車と云ふこと今も然り。」と。一説に曰、靑樓、妓をまはす婆なり。主に、女郎上りのあばずれ者がこれに成りしと云。語原には、倘地獄の火車にして、惡婆の意とするものあり。【めうだいの客衆】姉女郎の名代となりて、出でたる客衆の意。名代は、女郎に、客立てこめて、暇なき時、己れに屬する新造を、自己の名代として客に侍らしむることありき。現に、天明期の川柳にも、「名代に出したり、下で使つたり」とあるが如く、新造は、姉女郎の名代として、客にも仕へ、また、帳場の用、又は、拭掃除にも使はれたりしものなり。又、名代の外に特に、新造買目的の、客にも公然侍りしもの丶如し。而してその客は、主に老人客也。現に、「新造を冷水が來て揚るなり」（文化期）或は「親仁のは息子が買うた妹なり」（同）「新造の惡留入齒ひつたくり」（文政期）の如し。而して、その新造は、「三界に家なし新造廻し部屋」（天保期柳樽）とあるが如く、廻し部屋にてなり。しかも、その一人前となりたる、即ち振袖變じて留袖となりたる曉、「留袖がすむと明部屋授けられ」（天明期）とあるが如く、始めて、一部屋の主となる也。而して、か丶る新造が、新造中に、老人客に身請けせらる丶事のありしは、「新造は後家になる氣で請出され」（安永期）とあるが如し。純然たる妓たりし新造につきては、別に一説あり。「江戸花街沿革誌」に、「才色兩つながら劣等

にして後來に望みなき者に至つては、樓主は……直ちに獨立の遊女として客に接せしめたり。云々。而して此輩の揚代は、大籬にて、金一分、半籬にて二朱なりき」といふ。(序でに、新造につきてなほいはんに、「新造とは禿上りの年若き、突出し前の見習女郎で、まだ勿論一本立の部屋持とはまゐらぬ。先づ太夫附の妹女郎といつた格である。云々。通例、赤味勝の振袖を着てゐたので、振袖新造、略して振新などゝ呼ばれ、其太夫附古參の筆頭が、所謂番新、即ち番頭新造なるものである。又、一種、引込新造といふのは、内所にて育て上げられた、謂はゞ家附の新造であつて、これらは、源氏名を呼ばせぬ慣例。」(川柳吉原志の新造の解說)なりしといふ。尙、外骨氏の「賣笑婦異名集」の新造の項及び「江戸花街沿革誌」にもくはしく出づ。就て看るべし。【夜すがらいびられて】とあればこの客は、老人客にはあらざらん。壯年血氣の、變り物喰ひの客ならん。【袖とめて】このとめては、留めてか止めてか。留めてならば、振袖を留めて、一人前の女郎となるの謂也。若し止めてならば、單に涙を止めての意なるべきか。若し留袖の意ならずば、此の早衣は、年若き妓、即ち新造なりしやも不知。如何。愚考は、これを留めてとして、今や彼女、一人前の女郎となりをれりと見る也。即ち彼女の口吻所業、凡て新造の幼稚さとは比較にならぬ程なれば也。但し、同時に、涙の袖止めて、(涙をはらして)お前一人が便りぞやの意も利かしたるものなるべし。現に、同じく新内の若木仇名草(此糸蘭蝶)(鶴賀若狹掾正本)の中にも、是と同樣の文句あり。且つ同じく妓此糸の述懷談にして、用言頗る此の「藤蔓」と相似たれば、彼此對照の爲、ここに、その一節を掲げおかん。

「(前略) 云ふが中にも、私程、世に味氣ない者はなし。親に添寢の夢にさへ、見も知りもせぬ人中へ、賣られ廓の憂勤め、禿の内の氣苦勞は、ねむる火影を追ひ起されて、文の使や返事さへ、長い廓下の行通ひ、まぶの手引や合圖の手練、氣を紅絹裏の色に出て、やり手に抓められ叩かるゝ。(以上、禿時代の憂さ辛さ也。)其の苦を拔けて、やう〳〵と見世へ出雲の神さんも片ひいきなる縁むすび、好かぬ客衆にいびられて泣いて明さぬ夜半とてもなし。それが中にも樂しみは、たま〳〵逢へば明る日は、姉女郎や朋輩にあて事云はれ、身じまひも、遲い〳〵とせがまれて、涙を包む振袖の留むれば(以上、新造時代の憂さ辛さ也。)最早年増役、だても意氣地も負けまいと氣を張る胸の癪つかへ、思へば〳〵男ほど我儘らしい物はなし。云々。」

上 たとへ野のすへ(の末)やまのおく(山の奥)どんなひんく(貧苦)も いと(厭)やせぬ手づからわたしがまゝたいて(飯焚)。たのしむ(樂)も戀。くるしむ(苦)もこへ(戀)。こいといふ字がさすわいな。まことはしんぼう(辛抱)一ツぞや。

【たとへ野のすへ云々】 端唄で有名な「おまへと一生くらすなら、深山の奥の佗住居、縫針仕事糸車、細谷川の布晒し。柴刈る手わざも厭やせぬ」も聯想されて面白し。然れども此の「どんな貧苦も厭やせぬ」の方、簡明にして要を得たるを思ふ。此の句また何處かにその根を有せりと思はれ

ど、今さしあたり思ひ當らず。他日の考に俟つ。【まことは辛抱云々】これ早衣變じて、色道指南の大通の口吻の如し。早衣が、かゝる格言めきたるものをいへるだけ色道の先輩の如くにも取扱はれ、且つ比較的冷靜なる理性ありしやうにも窺はるゝは、余のみの僻みか。「戀は辛抱一つ」、されど眞理は應々事實と扞格す。この喜之助の場合も然り。辛抱の出來ぬ程の、紛糾したる周圍に對する自讃的自暴自棄の情、並に幾そばく早衣との惡緣に邁進せしめ得ざる、良心の苛責あるを如何にせん。遂に彼は、辛抱叶はずして、自ら身を破滅に委し去んぬ。乃ち辛抱の光明より、飜つて、役にも立たぬ心中の暗黒に趁りたる也。

かわゆうて(可愛うて)〱すい(粋)になるほどぐち(愚痴)になる。きしやう(起請)をまもる(守る)やくそく(約束)のかみ(神)さんがたもきこ(聞)へませぬ。とてもそ(添)われぬならばいつしよ(一緒)にころ(殺)してくだ(下)さんせと。そで(袖)はなみだ(涙)のにわたずみ(行潦)

【かわゆうて云々】すいになるほど愚痴になるとは、蓋し名句。以前數頁を費したるすゐ考もこゝに至つて粉韲微塵。傾城の水(すゐ)變じて月(ぐわち)になる也。結局、極端と極端とは一致すの眞理乎。粋になるほど愚痴になると也。こゝまで來れば、「粋」は本來の冷靜なる情界鑑賞の意を放れて、沒頭沈湎陶醉の度の深きを具現せる語となり了せるが如し。乃ちこゝに至つて、冷靜なる早衣の口吻、一轉し

起請が事

俚言集覧曰く

世事百談曰く

て奔放無比、情炎爛たる一塊となり了せり。始めて我徒の意に叶へりといふべき乎。【起請】起誓とも書く。起請すること、或はその文面、起請文の意も兼ぬ。こゝは後の意。左に若干起請につきていはん。

起請が事

俚言集覧の起請の條下に曰く、

〔伊勢貞丈随筆〕起請、オコシ請フ也。何にても願を起し請を云ふ也。國史などに起請と云文あるは是也。後代誓言に今かくの如くいふ詞に違はゞ神明の罰を蒙るべしといふ文を起請文といふ。罰を蒙らんといふ願を起して、罰を佛神に請ひ求むる意にて起請といふ也。愚案、〔齊東俗談〕野槌を引云、日本紀に誓約字をウケヒと讀めり。起請の字是訓に因てウケを立ると云るにやとありこ此説是なるに似たり。今奉公人の請狀と云ふも乞請の義にはあらず。牙保の義にて、意け誓をウケと訓るに同じ。請求るにはあるべからず。請は借字也。然るに〔古今著聞集十六〕賀縣阿闍梨の無實ウケて起請文を書きて三塔に披露の條末に、起請のおこり是なりとあり。〔宇治拾遺十一〕かく起請をやぶりつるは云々。〇起請〔三代實錄〕貞觀十八年三月參議太宰權帥在原行平起請、分ニ肥前國松浦郡庇羅値嘉兩郡一更建ニ二郡一號ニ上近下近一置ニ値嘉島一

世事百談〔山崎美成〕にも、

起請。「徒然草」に、起請文といふこと法曹には、その沙汰なし。古(いにしへ)の聖代すべて起請文につきて行はるゝ政は

なきを、近代此事流布したるなり。「野槌」に、起請文といふこと唐土に盟誓をたてゝ牛馬の血をすゝり、其の詞を記して士にうづみ、約するところ若し背かば、此の牛の如くきり居らるゝ罪にあたらんと諸神に誓ふなり。始め周禮左傳等にくはしく記せり。日本にては天照大神素盞嗚尊と誓ひましませば、神代にもありけるなり。貞永式目起請の裏書は盟誓といひしを、人の代の末に至りて、白川鳥羽の御時も起請文といふことあるよし、中むかしよりのならはしと見えたり。あるひは慈惠僧正よりはじまれりともにありといへり。これによれば、中むかしよりのならはしと見えたり。義經記に、土佐坊が七枚起いへり。さて起請文に一枚起請二枚起請、また七枚起請百枚起請などいふことあり。義經記に、土佐坊が七枚起請かけること見え、後のものながら、室町殿日記、豐太閤朝鮮文書にも七枚起請といふこと見えたり。七枚起請の文をばかつて友人より得てもてり。文明年間のころ書きたるを寫しつたへたるなり。七枚各、文章別なり。そは誓言いく通にもしるしたるものなり。おもふにそのかみは、尋常のことは一枚にかき、その誓ごとの重かるは幾枚にも、かへすがへす書けることゝ見えたり。源平盛衰記に百枚の起請といふことあり。鱸鞍橋に一枚起請二枚起請三枚起請といふことも見ゆ。これにて法然上人の一枚起請といふも明かなり。起請といふ文字は、後漢書劉盆子傳に、其餘不レ知レ書者起請レ之といふより出でたり。因に云、起請文の前書に、伊豆箱根の兩社をしるすことは、北條家盛なりし頃のならはしにて、關東にては今にそのまゝ沿襲して改めざるなりといへり。

(久彌曰く。起請文の誓の慈惠僧正より始まるとは、「鹽尻」の筆者もいへり。曰く、「起請文の誓は慈惠僧正よりはじまる。古今著聞集に賀縁阿闍梨が慈惠を濫行肉食の人なりといひし時、誓文を書きて不律ならざるよしを明(に)せり。但し起請の名は是より前にありしや、されども誓の爲にあらず。」と。)

蜀山人の「增訂一話一言」の中に、江戸時代武士の起請文の書方あり。ついで拔かん。

一、起證文の字配書樣左のごとし。古法也といふ。

梵天帝釋四大天王惣日本國中
六十餘州大小神祇殊伊豆箱根
兩所權現三島大明神八幡大菩薩
天滿大自在天神部類眷屬神罰
冥罰各可罷蒙者也仍起證如件

年號何年何月何日　　苗字名判 名乘不書

宛所 何年ノ下ニ支干ハナシ

宛名ハ其日出席之老中大目附兩人計也

評定所御用番御老中御宅兩所之内にて誓詞被仰付與御奉公被仰付候へば、其日御城にて誓詞被仰付候也。誓詞の節追付其席へ出んとする前に左の藥指を爪際の處を少(し)皮をはねて置(き)、血判する時、其所を小刀にて少し突かば其儘血出てよし、幾度も突くは見苦し。鼻紙を二枚ほどもみて右の袂に入置、其紙にて指の血を拭事のよし。扨又小刀をさす時に脇ざしを差(し)たまゝにて小刀も差(す)べし、差よきとて小刀橫を上にすれば脇差に反りを打樣にみえてあしき也。心を付べし。血を右の手の藥指に附て居判の穴の白き所におす也。疊の所に附れば見えかね候故也。血判して跡にて誓詞をいたゞく人あり。夫はあしき也云々。

遊女嫖客の起請

さて、以上は、起請本來の起原と、並びに武家側の實行狀態なるが、遊里にありては如何。遊里に於ける、遊女嫖客がとりかはしたる起請の用紙、文面、並びにその方法如何。

近松の心中天網島に、

「聲もあらそふ村烏ねぐらはなれて鳴く聲は、今の哀れを問ふやとて、いとど涙を添へにける。なふあれを聞きや二人を冥途へ迎ひの烏。牛王の裏に誓紙一枚書度に、熊野の烏がお山にて三羽づゝ死ぬると、昔より言傳へしが、我と其方が新玉の歲の始に起請の書ぞめ、月の始月頭書きし誓紙の數々、其度毎に三羽宛殺せし烏はいくばくぞや。常には可愛〳〵と聞今宵の耳へは、其殺生の恨の罪、報〳〵と聞ゆるぞや。」

牛王

即ち「牛王」の裏に起請を書きしものの如し。さて然れば、牛王とは、何ぞ。

同じく俚言集覽に、

牛王。〔太平記雲景未來記〕熊野の牛王の裏に告文を書いて出したる未來記あり。

増 牛王の烏はしをならして〔高尾〕〔東雅十〕諸神の攝社に璽といふものゝあるは、今の神社の寶璽を藏めし所也、といふなり。世に熊野の牛王といふものゝ烏の形の文字あるは、古の鳥篆の體の如く見ゆ。また牛王といふも璽の字をわかちて、牛王といふ。米の字をわかちて八木といふが如し。古の俗にかゝること多きなり。

其他、俚言集覧増補には、尙牛王につき數條あり。今迂路に過ぐるの嫌あれば、略きつ。但し大槻氏の「言海」說、此等俚言集覧等の諸說を約して要を得たり。曰く、

牛王。祇園、八幡、熊野等の諸神社より出す牛王寶命と記したる符の名。民家に頒ち、門の上に貼り、疫災を避けしむ。或云、是れ生土(ウブスナ)の神の印にて、生土寶印なるべきが、生の下の一畫、土につきて王となり、寶の下の二點印につき命となり、又轉じたるなりと。或云、佛書に、五大牛王あり、其守護の義に出づと。紀州熊野の神の牛王といふは、熊野牛王寶印の六字と、烏七十五隻とを印す。(烏を此の神の使とす)世に誓紙に用ゐる。熊野の三神は、妄語破禁の罪を糺すといふに起れりと云ふ。

心中天網島には、一枚毎に三羽の烏を殺すといふが、この七十五隻云々といふによれば、(現に、今日見らるゝ牛王の烏は、數へては見ねど、多數隻也。「國語辭典」其他に見ゆ。)一枚毎に少くとも七十五羽の烏を殺さゞるべからず。これを三羽と限りたるは如何。或は七十五隻のものの他に三隻のものもありしや。而してこの烏が死ぬるとは、この烏を犧牲にして神に誓へりとの意なるべきか。

さて、その牛王の裏に書きし文句は如何。「………盡未來切れ不申仍而起請如件」とでも書きしや。余、嘗て、何れかにてこの傾城の起請文句の記載を見たる記憶あれども、確かならず。今遽かに擧げ得ざるを遺憾とす。(尙、心中天網島の、月頭起請等にも觸れたけれど、すでに幾そばくの道草を食ひたり。)

よりて凡て略きつ。）而して、此の起請は、遊女嫖客互ひに書き、交換して所持したるが如し。此事、天の網島にも明らかなり。尚、この起請文を書くこと、遊女嫖客以外、武士町人等にも勿論行はれたれど、うぶなる娘と息子との間に、商賣人ならぬ男女の間にも行はれたるが如し。（尚、武家起請については、「江戸時代制度の研究」（松平太郎氏著）の誓詞血判の項に悉しく出でたり。參照すべし。）

―以上「起請の事」完―

【きしやうをまもるやくそくの云々】神さん方とこゝにあれば、この起請は、熊野一神ならず、即ち「一話一言」所載の武家起請の如く、八百萬の神々に誓ひを立てしものか。【にわたずみ】正しくは、にはたづみ也。雨の降りて俄に地上に溜りて流るゝもの也。無論涙の量多き意也。

地 おとこ（男）もなみだ（涙）のかほ（顔）をあげコレはやぎぬ（早衣）人げん（間）はのかぜ（野風）のまへ（前）のともしび（燈火）のごとくこの世はゆめ（夢）のかり（假）のやど（宿）みらい（未來）はおなじ（同）れんげざ（蓮華座）と。イロ詞 おとこ（男）のことば（言葉）にはやぎぬ（早衣）は。うれしなみだ（嬉し涙）ともろとも（諸共）に。

【にんげんは云々】のかぜの前の燈火とは如何。或は、この「の」は、人間はのといへる、感動ののかも不知。普通風前の燈火とはいへど、野風とは聞かず。然れども、前後の調子より察すれば、無論野風のまへ云々の所也　風前の燈火の故事、「壽命猶如風前燈燭」（倶舍論疏）とあり。是れ也。

【この世はゆめのかりの宿】これ、佛家常套の句。【みらいは云々】喜之助君亦靈魂不壞說者也。而して未來の戀愛成就を夢みたる可憐なる唯心論者也。非現實主義者也。【うれしなみだ】この涙をみては、遲疑せる喜之助の肚裏も決然たらざるを得ざりしや否や。但し女は、既に「一所に殺して下さんせ、」心中の押賣に出でをれる也。

詞くさば(草葉)のしたてごゝ(ご)(父)さまやかゝ(母)さまもさぞおうれしう(嬉)御ざんせう。おつつけ(追つつけ)お目にかかるからやいば(刄)にかけしわがつま(夫)を。かならずうらみ(怨)てくださんすな。カンひごふ(非業)のしに(死)のつみとが(罪咎)を。ウゑんまさん(閻魔)がしかる(叱)ならわびこと(詫言)をして下ダさんせ。ゆうてん(祐天)さんやしやか(釋迦)さんのよもや見すてはさんすまいおそば(傍)へいんであさゆう(朝夕)のおちやこうはな(茶)(香花)をき(氣)をつけて。この世のつみ(罪)をほどこさん。詞なむしやかによらひ(釋迦如來)。ゆうてんさま(祐天様)。たすけ(助)てたまへなむあみだぶつ(南無阿彌陀佛)。

【やいばにかけし云々】わがつまと來た。肝腎の喜之助の正妻は何處へ失せたやら。【ゆうてんさん】祐天上人也。殊さら祐天さんといひたる所、遊女の、生一本(きいつぽん)なる信仰見えて面白し。祐天上人は、當時、江戸人の信仰頗る篤き所なりき。傳に曰く、奥州岩城郡新妻村西村善内の男、幼名三

之助、增上寺檀通上人の弟子となる。幼時、誦經の習熟魯鈍なるが故に爲に成田不動尊に祈り、夢に惡血を除かるの傳説あり。後、增上寺、三十六世源如祐天大僧正に陞り、七十歲目黒に隱居、享保三年七月十三日寂す。その跡に寺を建てゝ祐天寺といふ。卽ち淨土中興の祖也。【この世のつみをほどこさん】「ほどこさん」は、遍く償はんの意か。【なむしやかによらひ云々】釋迦、祐天、阿彌陀。祐天も淨土中興どころか、大に格が上りて釋迦、阿彌陀の間に在り。ここらが、作者が不用意らしく見せかけて、その實、用意、無智なる然し眞劍なる彼女ら信仰の度を表白せる名文句と謂ひつべき乎。然し我等には、餘りに八百屋的に、寧ろ滑稽の感起らざるを得ず。以上早衣の詞也。

フシカヽり 此世のゑん（縁）はうすころも（薄衣）。えんじ（遠寺）のかね（鐘）のこゑ（聲）すぎて。たがい（互ひ）にかほ（顏）を見あはせて。コレはやぎぬ（早衣）いま（今）こそさいご（最期）のときうつる（時移）さまたげない（妨げない）ひうちにかくご（覺悟）をせよ。アイそんならおまへもヲ、かくご（覺悟）はよいとようゐ（用意）のひとこし（一腰）ぬき（拔）はなせばかげろう（陽炎ふ）いなづま（稲妻）ともしび（燈火）にけはしく（險）うつる。三重 なつ（夏）の夜の。なみだ（涙）のあめ（雨）のはれやらぬ。クリ上 はやし（早）のゝめ（東雲）のみだれどり（亂れ鳥）ちしほ（血潮）にそむるみつぶとん（三つ蒲團）のち（後）のうはさ（噂）となりにけり。

【うすごろも】緣のうすきと、早衣のきぬにかけたる詞か。【コレ早ぎぬ云々】いつの間にか男も心中決行と相成りし也。こゝらが、內面描寫に緩なる此種俗曲の弊といふべきか。然しこれを新內太夫の口より聞かば、かゝる缺陷の浮ばざるは、不思議也。【ヲ、かくごはよい云々】男もかうなれば、覺悟はよいといはざるを得ず。而していつのまにか、「用意の一腰」とまで成りし也。喜之助が初めの、親女房友達の異見と義理にせめられて、切れてくれろのあの相談は、何處へやら。【かげろういなづま】拔きはなつたる刄の形容也。かねて、「夏の夜の云々雨」にかゝり、稻妻の光れる屋外の描寫にも響かせたり。【はれやらぬ】淚の雨の如きが霽れやらぬと、稻妻して雨の霽れやらぬと、及びすつかりまだ明けきらぬ東雲の實景と。【みだれどり】二人、亂れて死に伏せる景にも利かせたる也。【三つ蒲團】いつの頃よりか、娼家娼婦の室の蒲團の數は三となりをれり。一般事實の習慣上よりか、或は、三なる數字の流用範圍汎きが爲よりか。いづれぞ。（この疑問可笑しきやうなれども、事實靑樓妓室の蒲團は、春夏下二上一枚の他に、上下二枚づゝ、或は下數枚使用したる場合もなきにしも非ざらんと惟ふが如何。この疑問より生じたる也。）

以上にて、永々の「藤葛戀の柵」の評釋、一先づ筆を擱きをはんぬ。尙、遺考は、併せて他日の他評釋の中に說かん。（大正十一年十月――大正十三年一月）

粹考の補遺

粹考の補遺ともいふべき、適當な粹の說明を見付けた。新内の「仇比戀浮橋」の一節である。

そのはじめの方に、

「すいとは色のいさぎよく、諸わけしかたの行とゞく心をこへによませたり。やぼとは月のかへ名にて、水にうつれるかげの月、もと本たいにあらざれば、取所なき空人も金が光らすびんつけやいとによる物ならなくに、柳にうけてあひしらふ。」

とある。かくして以下野幕客の精寫に移つてゐるのである。

尙麓の色卷四（國書刊行會本「近世文藝叢書」第十、風俗所收。）にも、

「推。推とは通者の一名なり。俗に粹の字を用ゆるは當らず。字書に粹は雜ならざるなり、純粹にして精なりとあれば、今俗に所謂推は純粹の粹にあらず。專ら雜智を舞して人の胸中を推察し、阿徇逢迎して俗に喜ばれ、推量のよきといふを略語して云々。尤も明察の智識あらずんば、邪推惡推に流るべし。其人品稜なく、よく忍び怒を蘊み怨を匿し、言行環の端なきがごときを以て、推と稱せらるゝといふ云々。」

とあり。推量のよきとは、いひさうな理窟也。尙此類他にも多かるべし。

傾城にまことなし云々

傾城に誠なしとは譯知らぬ野暮の口からいきすぎの、粋の粋ほどはまりもつよく、とは浦里の文句だが、古い唄にも色々ある。嵐小六調の「里の松」に、

傾城に誠なしと世の人の譯知らずなさけ知らずの言葉ぞや…………。

近松門左衛門作、同東南改調。傾城にまことある文といふにも、

「傾城に誠なしと世の人の申せどもそれは皆僻言（ひがごと）。譯（わけ）知らずの言葉ぞや。誠も僞も本（もと）一つ……
……」とある。

女用起請の文面

上方版の年代不詳の「今世戀事袖中かな文」といふ艶文の往返手本集一册を最近手に入れた。と端なく其の末尾に、「起請文の事」と題して、自分の探しあぐんでゐた女より男に遣した起請の文面記載あるのに逢會した。これは或は、普通女が男に與へた起請の文ともとれるが、遊里の女も無論此の形式に於て僞したと見て誤りなからうと思ふ。仍りて左に、その全文を載せておく。（大正十四年一月補）

○起誓文の事

一そもじさまと夫婦の契約いたし候所實正也然る上は親兄弟たとへいかやうに申候共外に夫持申間敷候かやうに申事はすこしも僞(いつはり)御座候はゞ日本六十餘州の神々の御罰をかふむり未來永々ならく地獄へ落入(おちいり)うかむせ有間敷候依而起請文如件

年號月日

女の名　血判

男の名

同名桃隣五世まで

疑問を提示

補遺

桃隣小傳

「好色むらく坊」と作者桃隣（本著二二頁—四一頁）で、「むらく坊」の作者を俳人桃隣ではなからうかと推斷しておいた。種彥の言も多少の裏書のやうに思へるというた。（本著四〇頁—四一頁參照）その俳人桃隣なるものは、何の事だ、俳人としては傳はきつぱり俳書の大抵なものに載つてゐて、俳人としては常識的な固有名詞だつた。種彥の「伊勢の產に非ずや」は、これに據ると伊賀の產である。然し暗合といへば、年代と經歷（自分の想像も加はつてゐるが）とこれ程暗合してゐるのも尠からう。此の俳人としての桃隣は、文學史的には大したものを殘してゐないらしいが、江戶俳家の傳統としては、同名桃隣が五世まであり、その系統は正系だけでも九世は續いてゐる。この祖の桃隣と、「むらく坊」などの著作者の桃隣紫石とは、果して同一人か否か。正直にいふと自分は、自分の言の全部を事實化して考へてゐる者であるが、とにかく一個の面白い疑問を、諸家——特に俳諧研究諸賢に呈した積りではゐる。今、左に、その常識的な、桃隣の初代の小傳を、大日本人名辭書によつて、登載しておく。（尙、桃隣の傳統系圖は、同書卷頭の一一

墮胎の判決例

古事類苑法律部ノ二

懷胎女を殺す醫者

四頁に悉しい。尚、沼波瓊音氏編の「俳風」にも、桃隣の四季別句集其他を載せてゐる。

太白堂桃隣　江戸の俳人なり。太白堂と號す。又桃池堂、呉竹庵、桃翁の諸號あり。通稱天野藤太夫、伊賀上野の産。初め藤堂侯に仕ふ。後芭蕉翁の門に入りて、江戸に來り、神田及び本石町に住す。享保四年十二月九日歿す。年八十一、淺草光明寺に葬る。著書、むつちどり、粟津が原等あり。（俳林小傳、江戸名家墓所一覧）

墮胎の判決例（本著一一六頁參照）

明確な法文といふべきではないが、墮胎に關した、江戸時代の判決例（處分例）ともいふべきものを、「古事類苑」法律部第二に探し當てた。法文ではないものゝ、無きには勝ると、今その主要部分を轉載することにした。此類「德川禁令考」を檢索すれば、尚多からう。今は、その一斑として、此の分類せられた、概念捕捉に便なる「古事類苑」に藉りておく。

〔御仕置裁許帳十二〕　子下シ候療治にて懷體女を殺ス醫者

一淺草森田町勘兵衛店玄意、同所天王町十兵衛召仕九兵衛と申者ニ被ㇾ賴、同所森田町六右衛門店久三郎所にて、九兵衛傍輩下女玉と申懷姙女之子をおろし候とて、彼之女相果申候ニ付、

傍輩女を殺す

養娘相果つ

立意不屆ニ付、閉門、家主五人組江御預ケ被レ遊、慥奉レ預候、爲ニ後日一如レ件、

延寶八年酉八月六日

右之者、同月廿四日赦免、

〔御仕置裁許帳 六〕 傍輩女を懐胎爲レ致、賣藥を用殺者之類、

貞享三年寅六月八日

壹人吉兵衛　是ハ馬喰町貳丁目伊兵衛下人、此者兄本石町壹丁目長兵衛店次兵衛請ニ立、奉公ニ出シ置候處、傍輩はつと申者と致ニ密通一、爲レ致ニ懐胎一、〇中略 此者申候ハ、懐胎仕候段主人江相知レ候儀迷惑ニ存、此者知ル人同所三丁目市左衛門店次兵衛と申者を頼、金子壹歩相渡シ、子下シ藥を相調給させ候得バ、今月四日傷産仕、〇中略 氣分重リ相果候由申候、右藥を相調給させ候次兵衛儀ハ、手鎖を懸ケ家主に預ケ遣、此者儀ハ、奉公人之身として傍輩女と密通いたし、殊に賣藥を用致ニ傷産一候段、重々不屆成ル故籠舍、

右之者、同寅八月九日死罪、

〔的例黄紙之寫〕 中追放

安永六酉六月、主殿頭殿御下知、　太田播磨守掛

一武州芝村友右衛門養娘相果候儀ニ付吟味

〔蔭山外記御代官所武州足立郡芝村百姓佐次郎悴　宇右衞門

此宇右衞門儀、離縁之女房たつと密通之上、爲レ致ニ懷胎一可レ爲レ致ニ流産一とほゝづき之根を黑燒にいたし相用、右藥に中り、たつ相果候始末、不屆ニ付、中追放、

御仕置附

右人を殺候もの下手人之御定ニ御座候、此ものハ相對之上、たつ流産之藥を呑、右藥に中り相果候上は、怪我あやまちニ而人を殺候も同樣之儀ニ可レ有レ之哉、御定ニ怪我ニ而風ト疵付、其疵ニ而相手死候はゞ、吟味之上あやまちニ無レ紛、並怪我人之親類存念相尋候上、中追放と有之、殊ニたつ親ども申分無レ之、助命も相願候ニ付、右御定ニ引當、中追放と御仕置附仕候、

明和四の發令

〔天明集成絲綸錄五十一〕明和四亥年十月

百姓共大勢子共有レ之候得バ、出生之子を産所ニ而直ニ殺候、國柄も有レ之段相聞、不仁之至ニ候、以來右體之儀無レ之樣、村役人ヘ勿論、百姓共も相互ニ心を附可レ申候、常陸下總邊ニ而ハ、別而右之取沙汰有レ之由、若外より相顯ニおいては、可レ爲ニ曲事一者也、

十月

右之通可レ被ニ相觸一候

松平定信、

〔羽林源公傳〕天明四年〇中略村々動もすれば疾疫流行して、男女死失し生口も減ず、是は

自藩匡救策

畢竟出生の子を親として害する等の、悪風俗不仁の事より邪氣を感じ致す譯を教誡し、又市女を請ひ、彼の死たる小兒をよせ、村婦等に聞せ、恐懼して後來を謹ん事を欲し、〔中略〕町在の貧民子を害する事止ざるは、畢竟貧苦より出たる所業なればとて、寛政二年より、初産を除き、二人目より赤子養育の爲とて、七夜過ぎに金二分、十二ケ月目に又二分、都合一兩づゝ下され、此事を試みに五ケ年の間爲し給はんとなりしが、同九年に至ては、又增て七夜過に一兩、十二ケ月目に一兩、都合二兩づゝ賜はりたり。

〔視聽草 六集三〕敷教條約　白川立教館教授廣瀨典奉命撰　儆殺子　〔下略〕〔「古事類苑」法律部二〇 八四三頁―八四六頁〕

――以上、大正十四年一月補――

江戸軟派雜考

大尾

內容總索引

索引に就て

一、此の索引は、本書本文の各項目を、隨時索きうる爲、稍不用と思はるゝ程度までに、細微に亙つておいた。

二、各項目の中の、「　」を附したるは、書名、曲名（淨瑠璃などの）、又は畫題（浮世繪等の）の如きもののみを意味し、他は然らず。

三、各事項五十音に大別したる外、各音所收各項目をも更に五十音によりて配列した。

四、各事項に就て、重出、類似に近きものと雖も、便を思ひて多く採錄した。

五、本索引は、作製について友人平賀憲一氏の協力を主に煩し、また校合について荊妻千代野の、補助に依る所も多い。併せて感謝しておく。〔著者〕

ア

イ（ヰ）

ウ

エ（エ）

オ（ヲ）

カ

キ

ク

ケ

コ

サ

シ

ス

セ

タ

ツ

テ

ト

ナ

二

ヒ

ミ

ム

ヤ

ユ

ヨ

ラ

内容總索引 畢

○修補八件

一、本書六五頁、「天網島」の追隨作の中に、「置土産今織上布（菅専助）安永六年五月十九日」を入れる。共の翌年「心中紙屋治兵衛」となるのである。

二、本書一六二頁の小俣比丘尼は、コマタではなく、方音はヲバタであつた。索引もこの發音を誤つて、コの部に入れた。ヲの部に更へて頂きたい。

三、本書二一七頁五行目、二代一九とあるを、三代一九と改める。二代と稱したものの、嚴肅には、絲井鳳助が二代、春馬改めは三代であるからである。卽ち「奥羽」は春馬の作である。

四、本書三二七頁の雷州（安田）は、雷洲の誤。且つ彼は司馬江漢の弟子でもあつたと入れたい。

五、本書三五二頁の二代國政の更に異說を發見した。「二代國政といふ人、しんば魚屋にて松五郎といふ」と、三升屋二三治の戯場書留上の三十七（燕石十種一）にある。簡にして要を得ぬものではあるが。

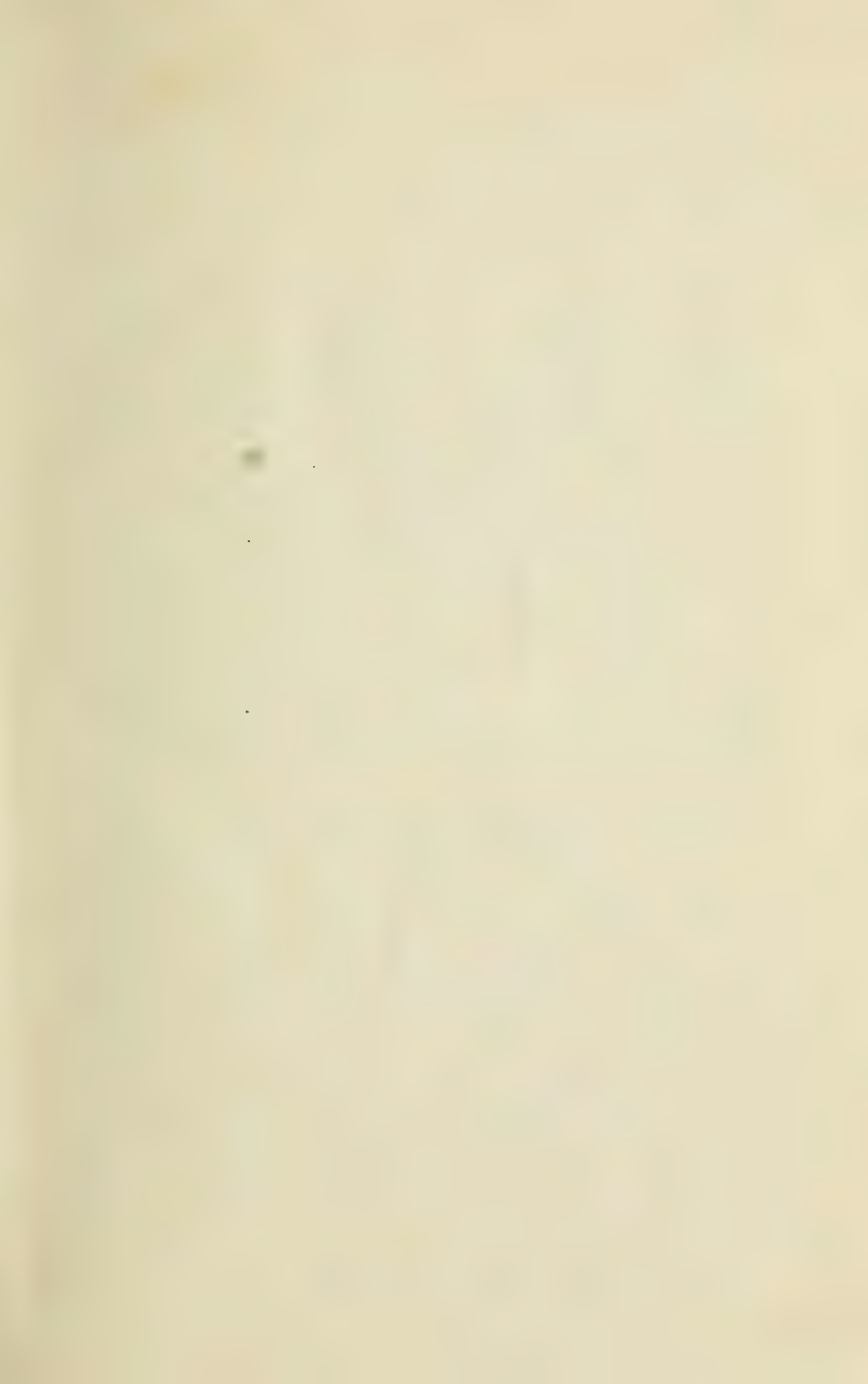
六、本書三六〇頁の隱語をめは、全然予の誤解であつた。實はおべだつたのである。此名義明瞭、言を要せぬであらう。從つてをめ以下の解一切を削る。

七、本書三七七頁の猿猴坊月成を初代焉馬としたのは誤。初代では物故年が合はぬ　蓬萊山人の二代焉馬であつた。尙二二五頁の立川焉馬、これも無論二代焉馬で、寧ろ山崎焉馬とすべきであつた。

八、今迄に氣の付いた本文誤植と索引の脫漏。
一九三頁の終りより三行目、喜多川氏は喜多村氏の誤。二二　頁一一行目菊地五山は、菊池五山。九五頁六行目の小野篤譃字讌は、同譃字讌の誤。索引のイの部に、「當世下手談義 四九〇」、シの部に、「生寫(しやううつし)相生源氏 三七三」スの部に「粹がり（京の）二一三」を脫した、尙、キの部に、浮寫者の粗漏のため、キリ以下を全部脫した。これは、不體裁ながら、ワの次に全部登載した。自分の點檢しなかつた罪を詫びる。

——大正十四年五月、著者

大正十四年六月五日印刷
大正十四年六月八日發行

著作者印

「江戸軟派雑考」定價五圓五十錢

著作者　尾崎久彌

京京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦

東京市京橋區南鍛冶町十一番地
印刷者　川村清次郎

東京市東橋區南鍛冶町十一番地
印刷所　川安印刷所

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所　春陽堂
（電話大手五一一・四二二〇
振替東京一六一七番）